

# 東アジアにおける水田形成および水稲文化の研究 (日本を中心として)

課題番号 14310164

2002 (平成14) 年度～2003 (平成15) 年度 科学研究費補助金 基盤研究(B)(2)

## 研究成果報告書

2004 (平成16) 年 3 月

研究代表者 海老澤 衷  
(早稲田大学文学部教授)



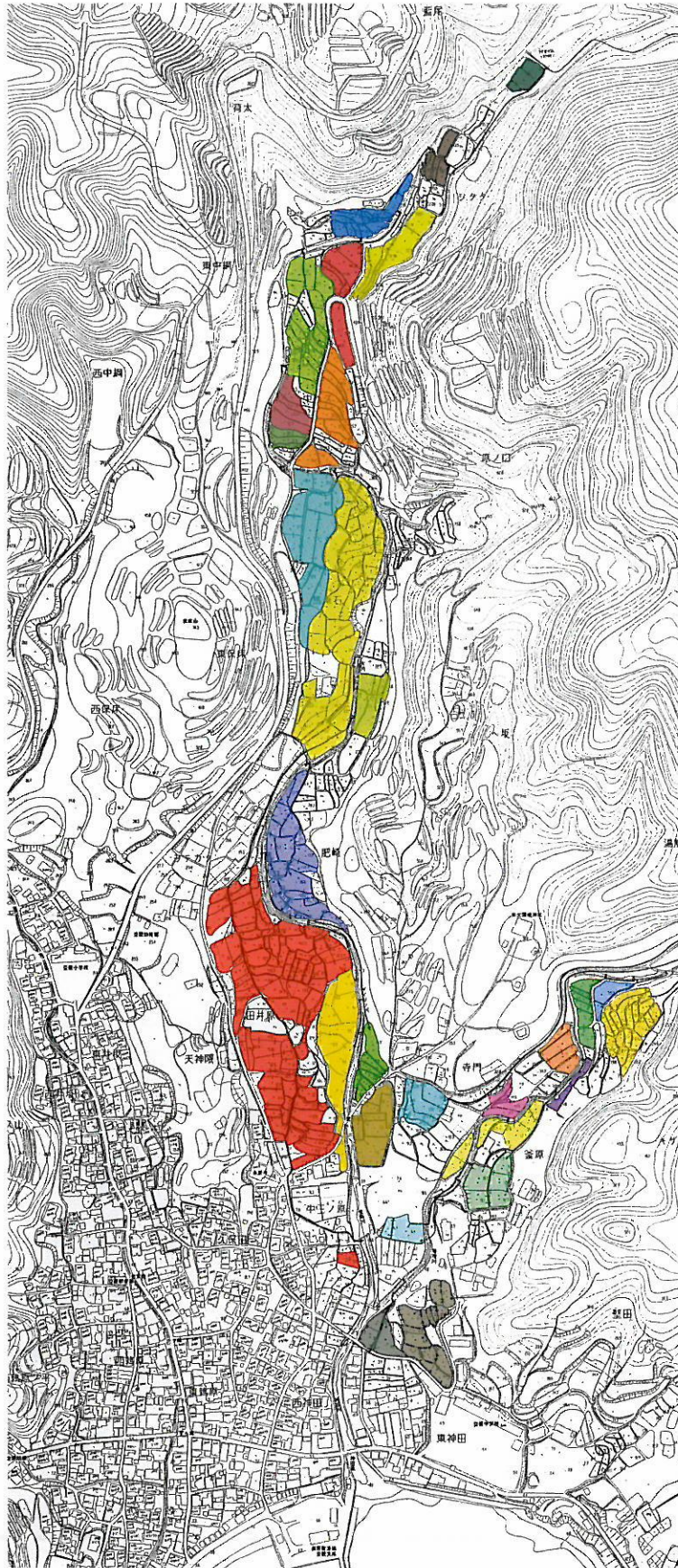


対馬豆酸赤米神田 (2003年9月12日)



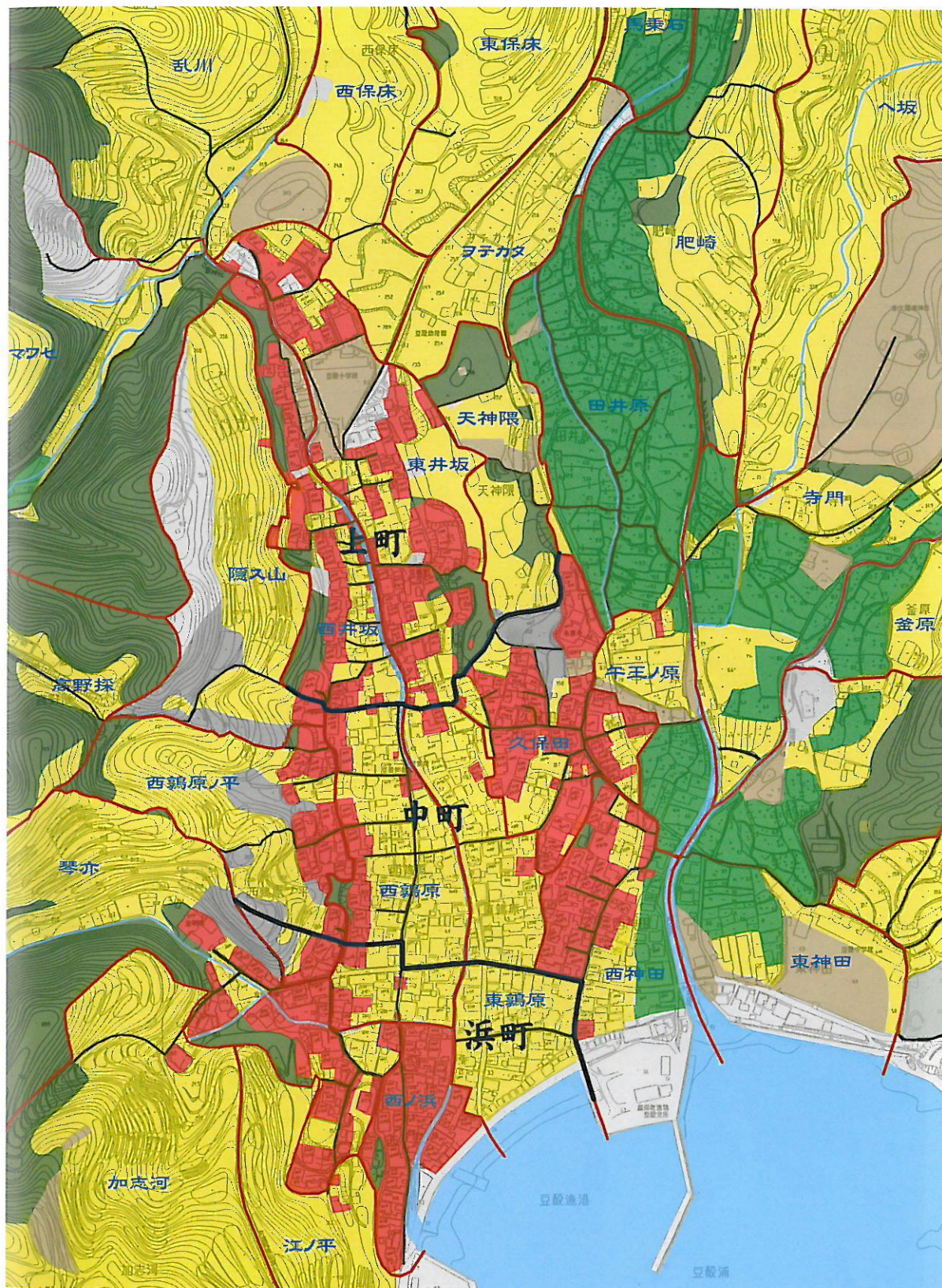
バリ島テガラランの棚田 (2003年3月9日)





豆 酸 の 水 田 開 発 (黒田 智・堀 祥岳作成〔黒田「対馬豆酸の村落景観と祝祭空間」159頁参照〕)





近代豆敷の土地利用（堀 祥岳作成）

（赤：宅地、黄：畑、緑：田、濃緑：山、薄茶：官有地、グレー：墓地・その他）

〔堀「対馬豆敷の景観復原」および黒田智「対馬豆敷の村落景観と祝祭空間」164頁参照〕



口絵4 〈本頁の写真は本石正久氏の提供〉



赤米神田



赤米



赤米と白米



頭受け神事





対馬豆酛頭受け神事（渡御）（2003年2月11日）



結界をめぐる寺院新築の祭り

バリ島 Paan Tengah にて（2003年12月23日）





対馬阿連の盆踊り（2002年8月16日）



パロン劇中の舞踊

パトブランにて（2002年4月21日）



## 例 言

1 本書は、平成14年度～平成15年度科学研究費補助金基盤研究(B)(2)「東アジアにおける水田形成および水稲文化の研究（日本を中心として）」(課題番号14310164)の研究成果報告である。

2 本研究の代表者・分担者は通りである。

### 【研究代表者】

- ・海老澤 衷（早稲田大学文学部教授）  
総括責任者・水田形成史

### 【研究分担者】

- ・中島峰広（早稲田大学教育学部教授）  
棚田・地理学分野
- ・堀口健治（早稲田大学政治経済学部教授）  
対馬地域農業経済学研究
- ・岡内三眞（早稲田大学文学部教授）  
対馬信仰遺跡・赤米栽培
- ・西村正雄（早稲田大学文学部教授）  
文化人類学的分野
- ・和田 修（早稲田大学文学部助教授）  
民俗芸能調査
- ・久保健一郎（早稲田大学文学部講師）  
戦国期対馬の研究
- ・米谷 均（早稲田大学文学部講師）  
対馬藩の米流通政策
- ・保立道久（東京大学史料編纂所教授）  
海域史料調査
- ・大橋 力（千葉工業大学教授、平成15年3月退職）  
西太平洋島嶼における水稲文化の比較研究
- ・河合徳枝（早稲田大学水稲文化研究所助教授）  
バリ島の水稲文化
- ・徳永健太郎（早稲田大学文学部助手）  
対馬における祭祀組織の研究
- ・堀 祥岳（早稲田大学文学研究科助手）  
対馬における仏教僧侶の研究

3 本研究に当たって次の方々にご協力をいただいた。

- ・深谷克己（早稲田大学文学部教授）

- ・紙屋敦之（早稲田大学文学部教授）
- ・新川登亀男（早稲田大学文学部教授）
- ・服部英雄（九州大学教授）
- ・関 周一（早稲田大学文学部講師）
- ・本石正久（長崎県厳原町多久頭魂神社宮司）
- ・黒田 智（日本学術振興会特別研究生）
- ・清水克行（日本学術振興会特別研究生）
- ・清水 亮（日本学術振興会特別研究生）
- ・吉田正高（21世紀 COE 特別研究生）
- ・本田佳奈（九州大学大学院博士後期課程生）
- ・松澤 徹（早稲田大学大学院博士後期課程生）
- ・宮崎 肇（早稲田大学大学院博士後期課程生）
- ・西尾知己（早稲田大学大学院博士後期課程生）
- ・永田史子（早稲田大学大学院博士後期課程生）
- ・福重旨乃（法政大学大学院博士後期課程生）
- ・涌井有希子（早稲田大学大学院博士後期課程生）

## 4 研究経費

2003（平成14）年度	6,200千円
2004（平成15）年度	2,900千円
合計	9,100千円

## 5 21世紀 COE プログラムとの関係

2003（平成14）年度から2006（平成18）年度にかけて早稲田大学文学研究科は、21世紀 COE プログラム「アジア地域文化エンハンシング研究センター」を設立してアジア地域文化研究に取り組んでいる。プロジェクト研究所である水稲文化研究所はこの研究センターの構成単位であり、海老澤・岡内・西村・深谷・紙屋・新川は事業推進者となっている。科研による当研究もこのセンターから多大な支援を受けた。

## 6 早稲田大学特定課題研究との関係

2003（平成14）年度から2004（平成15）年度にかけて特定課題研究（研究奨励：課題番号200-008）の研究費提供を受けた（研究課題は本研究と同名）。

7 本研究の編集は、海老澤と堀が行った。



## 科研報告書

# 東アジアにおける水田形成および水稲文化の研究（日本を中心として）

## 目 次

巻頭口絵

例 言

目 次

本研究の経緯とねらい—対馬・バリ島からの展望—

…………… 海老澤 衷 (1)

### 第1部 東アジア村落における水稲文化の歴史と儀礼

#### I 対馬の歴史と史料

終末期古墳から見た対馬…………… 新川登亀男 (8)

1479年に来日した朝鮮通信使による対馬紀行詩文集

…………… 米谷 均 (16)

中世対馬の課役と所領…………… 関 周一 (26)

対馬中世文書の現在…………… 徳永健太郎 (40)

#### II 水稲文化の儀礼

バリ島村落の劇場的な性格…………… 河合 徳枝 (52)

豆穀の赤米神事…………… 本石 正久 (62)

対馬における芸能と村落…………… 和田 修 (73)

### 第2部 東アジア村落における水稲文化と景観

#### —対馬豆穀地区の調査—

#### I 調査の目的と概要 付 豆穀の一年

…………… 海老澤 衷 (82)

#### II 調査報告

対馬豆穀の景観復原—水利および地名を中心として—

…………… 堀 祥岳 (92)

豆穀関連史料について…………… 徳永健太郎 (113)

対馬豆穀郡主の系譜…………… 黒田 智 (132)

金剛院所蔵資料の整理・保存…………… 吉田 正高 (137)

#### III 考察

内山村における中世山林相論と寛文検地帳の分析

…………… 本田 佳奈 (142)

対馬豆穀の村落景観と祝祭空間…………… 黒田 智 (152)

### 第3部 総 論

#### I 東アジア村落の伝統と今後

東アジア村落の水稲文化を育んだ社会

…………… 海老澤 衷 (178)

クリフォード・ギアツの人類学と、

その後の人類学的研究…………… 西村 正雄 (187)

バリ島にみる水利組織と日本の土地改良・水利組織の

同異・今後の調査課題…………… 堀口 健治 (194)

#### II 対馬・バリ調査の現場から

##### i 対馬

対馬豆穀の赤米神田…………… 深谷 克己 (196)

対馬宗氏と朝鮮外交…………… 紙屋 敦之 (198)

大学院ゼミによる対馬調査…………… 松澤 徹 (200)

対馬豆穀の考古資料…………… 永田 史子 (202)

漁と天道信仰…………… 山本隆太郎 (204)

##### ii バリ

バリ島の棚田…………… 中島 峰広 (206)

バリ島と海のシルクロード…………… 岡内 三眞 (208)

バリの闘鶏…………… 清水 克行 (211)

### 資料編

I 内山文書（未翻刻中世文書）早大大学院日本中世史ゼミ (282)

付 内山文書（中世文書）編年目録

II 天道信仰関係史料…………… 早大大学院日本中世史ゼミ (271)

「天道菩薩縁起」諸本の紹介

「天道祭りの役者の事」（主藤寿文書）

III 寛文検地帳…………… 福重旨乃・涌井有希子 (264)

豆穀村検地帳

IV 金剛院所蔵近世・近代文書…………… 吉田 正高 (222)

付 金剛院所蔵近世・近代文書目録

### 付図

地図 豆穀の灌漑・屋号・地名…………… 堀 祥岳



海老澤 衷

### 1 水稲文化研究所の設立と科学研究費の申請

科学研究費補助に基づく本研究の概要は、「例言」で述べた通りだが、この研究は早稲田大学のプロジェクト研究所である水稲文化研究所の研究活動の一環をなすものである。2000年4月から開始された早稲田大学の呼びかけに応じて、海老澤は12月に水稲文化研究所を設立した。東アジアにおける水田形成と水稲文化を明らかにすることを目指したもので、大学内において、単に机上の学問としてではなく、様々な実践を行っている教員に呼びかけを行った。その結果、棚田ネットワークに取り組んでいる教育学部の中島峰広教授、ゼミで東北の農村との交流を図っている政治経済学部の堀口健治教授、赤米の実験栽培を続けている考古学の岡内三眞教授、ユネスコでラオスの農村振興に取り組んでいる文化人類学の西村正雄教授、対馬などで農村の伝統芸能の掘り起こしを図る演劇学の和田修助教授が趣旨に賛同され、参加された。一分野に限定されない学際的な研究を目指し、参加いただいた先生方の協力を得て、当初二ヶ月に一度程度の研究会を継続的に開催することができた。開催日時・報告者・題目を示せば次の通りである。内容は、大学のホームページにあるプロジェクト研究所紹介の活動報告欄をご覧くださいと思う。

- ①2000年12月19日海老澤衷「広域水田遺跡調査の軌跡」
- ②2001年2月15日堀口健治「農業政策に関する共生メカニズム」
- ③2001年4月9日中島峰広「棚田での教育体験と地域活性化」
- ④2001年7月2日和田修「田の芸能」
- ⑤2001年10月4日岡内三眞「実験考古学における赤米栽培」
- ⑥2002年1月4日西村正雄「フィリピン・イフガオ族の農耕儀礼と集落システム」

この研究会を通じて、徐々に水稲文化研究所の共同研

究の中身が固められていった。2001年、科学研究費の申請時点において、二つの大きな選択肢が存在した。一つは、海老澤が早稲田大学の特定課題研究で行っていた「伊賀国黒田荘の基礎的研究」をさらに進め、水稲文化研究所が取り組む地域総合調査とすること。いまひとつは、かつて九学会連合調査による学際的研究の伝統があり、水稲栽培そのもので研究の深化を期待できる対馬をフィールドとする調査。前者は海老澤の今までの研究に近接し、延長線上にあるが、水稲文化研究所が取り組む課題としては十分なスケールを有していない。後者は、考古学、文化人類学、芸能史、農業経済学（堀口氏は対馬で数度の調査を行っている）などの課題を含み、学際的な研究は可能だが、海老澤の従来の研究からは飛躍の必要がある。共同研究を進めるに当たって大きな岐路であった。10月、棚田学会でお世話になっていた渡仏直前の石井進氏に相談したところ、ただちに「対馬にしなさい。私も一枚加わしましょう。」といわれ、業績表などを郵送していただいた。この時に石井氏のお考えを細かく伺うことができなかったのは返す返すも悔やまれるが、「対馬であれば、国際性と学際性を兼ね備えることが可能」というのが大まかな判断であったと思う。石井進氏は、フランスから帰国した翌日10月24日に物故された。



「モンスーンアジアの棚田」シンポジウム（2002年4月22日）



申請書のテーマは「東アジアにおける水田形成および水稲文化の研究（日本を中心として）」と日本を軸として東アジアへの展開を目指すものとした。

2002年4月、海老澤が理事を務める棚田学会がインドネシア・バリ島のウダヤナ大学と共催し、現地でシンポジウム「モンスーン・アジアにおける棚田」を開催した。この時、海老澤は報告「日本の棚田について」を行ったが、ウダヤナ大学のスタワン氏とピタナ氏によるバリ島の灌漑組織スバックの現況説明が行われた。現地視察においてテガラランとジャテルイで見たバリ島棚田の有する社会性に大きな感銘を受けた。また、バトゥブランにおけるバロン劇、ニョマンギャラリーの絵画、ヤマサリ劇場のガムラン音楽に触れて、科研申請書では必ずしも国際研究の地域を限っていたわけではなかったが、この段階で、水稲文化研究所の国際的かつ学際的な研究はバリ島でこそ可能であるとの結論に達した。このバリ・シンポジウムの直前に科研交付の内示があり、7月から調査事業を行うこととなった。

## 2 申請時における研究目的

申請書作成時における研究目的は、水稲文化研究所の活動に即したものであり、対馬を基軸にして東アジア全体に展開するものであって、次のように構想されていた。

東アジアの歴史において水田および水稲文化の形成は、きわめて大きな意味を持つ。しかし、その状況は広域に及ぶため、複雑である。大別して、(A)大河川流域の沖積平野に展開するもの、(B)山間地域に棚田状に展開するもの、(C)島嶼における天水灌漑による比較的小規模なもの、に分けられる。最終的には、これらのすべての歴史と、現在における問題点を明らかにすることが課題であるが、当面(B)および(C)の解明をはかりたい。

2年間の調査であるため、(B)および(C)の範囲に限定しても、さらに対象を絞らねばならない。厳選の結果、その対象として決定したのは、朝鮮半島と九州の間に位置する対馬である。フィールドとして取り上げた理由は次の三点である。

- (1)対馬は弥生時代から江戸時代に至るまで、大陸と日本との交流の接点となり、水稲文化の伝播のうえでも看過しえない地であること。
- (2)対馬南部では、赤米栽培が神事として伝承され、現在

も続けられており、水田形成および水稲文化を解明する重要な鍵が存在し、また、対馬全域が民俗芸能の宝庫であること。

- (3)対馬全島において、圃場整備事業がほとんど実施されておらず（九州全域では、ほぼ完了に近い状況にある）、古い水田の復原・解明が可能であること。

以上のことから、2年間で、対馬における水田形成と水稲文化の解明をはかりたいと考えた。その結果、予想される研究の成果と意義は次の通りである。

### ①学術的な特色・独創的な点および予想される結果と意義

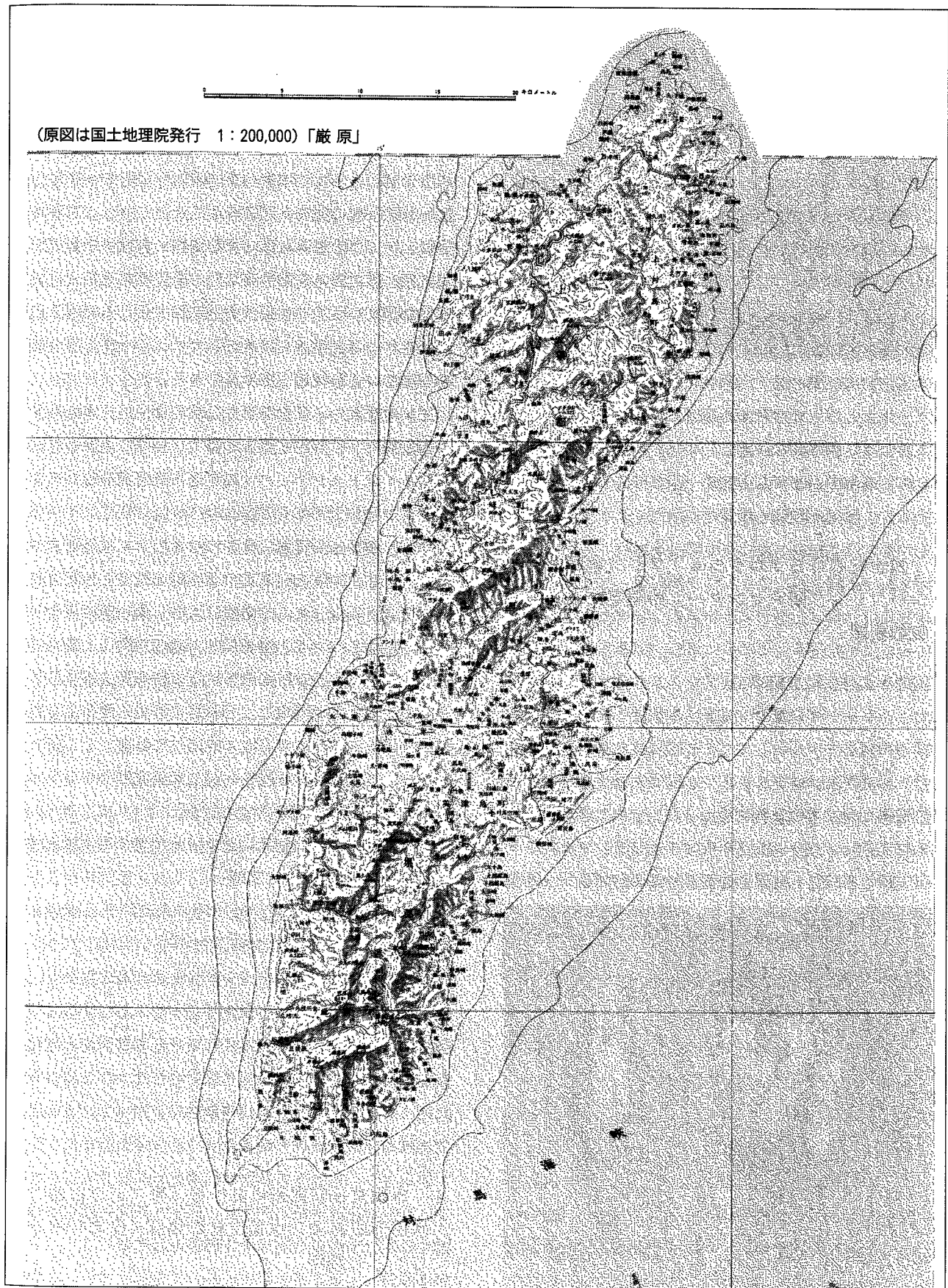
対馬は、日本に残された水稲文化解明の最後の宝庫である。この地を解明するにあたって、学際的な調査を実施するため、既に1年近く準備作業を行い、6回の研究報告会を開き、また現地の予備調査を実施した。このような周到な準備のもと、棚田学会副会長で早稲田大学教育学部の中島峰広、早稲田大学政治経済学部掘口健治、早稲田大学文学部の海老澤衷・岡内三眞・西村正雄・和田修により、日本史学・地理学・農業経済学・考古学・文化人類学・民俗芸能の各分野からの解明をはかる。従来、水田形成と水稲文化の解明にあたってこのような学際的な調査が、きわめて限定されたフィールドで行われることはなかった。この点において空前の調査となることは間違いない。

調査の結果、アジア大陸から日本への水稲栽培伝播ルート的一端が解明され、また、なぞの多い赤米栽培の実態が明らかにされ、同時に農業経済学を踏まえて、21世紀の農村のあるべき姿についての提言が行われるであろう。水稲栽培と水稲文化において対馬は東アジアにおけるキーストーンの位置にあり、日本のみならず東アジアの水稲文化の解明に大きく貢献し、同時に東アジア全体に対して米作りを中心とする農村の現代的課題を浮き彫りにすることとなろう。

### ②国内外の関連する研究の中での位置付け

バリ島の棚田状水田は、日本の研究者によっても研究がはじめられたが、それらはほぼ地理学的なものや農学的なものに限られており、農業経済学から民俗芸能までを有機的に追究した学際的な調査はまだ行われていない。また、フィリピンのイフガオ地方では棚田が世界遺産に指定され、その保護に向けて大きく歩みだしている。こ





対馬 2004 (平成16) 年3月1日、全島の町村が合併して対馬市が誕生した。本報告書の内容はすべて合併前のものである。

のプロジェクトに関わった研究分担者西村正雄によって一部の調査はなされているが、その全体的な調査には及んでいない。このような状況からすれば、今回行おうとしている本研究は、東アジアの広い地域で必要とされながら、いまだ実施されていないものであり、その影響は多方面に及ぶことになる。また、日本国内においては、農業基盤整備事業の進展の中で、その事前調査が行われ、埋蔵文化財にかかわる調査については、全国の市町村で徹底化が図られたが、水田景観の変貌を視野に入れた全体的な記録作成が行われたところはきわめて少数にとどまっている。したがって、本研究が達成されれば、日本国内および東アジアの国々において類似調査のモデルケースとして大きな意味を持つことになる。

このように国際的な研究としては、バリ島に重点が置かれているものの必ずしも目的を一点に絞ったというのではなく、2002年以降も模索が続いた。

### 3 21世紀COEプログラム「アジア地域文化エンハンシング研究センター」の発足による当研究の展開

2002年10月に21世紀COEプログラム「アジア地域文化エンハンシング研究センター」が発足した。これは、中国四川省をモデルにしてアジア地域文化の掘り起こしを行う共同研究プロジェクトで、同時に博士後期課程の学位取得に向けての教育に重点をおくものである。アジア地域文化エンハンシング研究センターは、プロジェクト研究所を単位として活動を展開するのが特徴で、奈良



豆豉の調査（2003年5月12日）

美術研究所、長江流域文化研究所、中国古籍文化研究所の三つを拠点とし、シルクロード調査研究所、モンゴル研究所、朝鮮文化研究所、水稻文化研究所、ラオス地域人類学研究所が周辺の文化を研究する単位として設定された。このプログラムの発足にともなって、水稻文化研究所には、さらに日本史分野、考古学分野のスタッフが加わり、一層の充実が図られることとなった。日本史からは、アジアと日本に広い視野を持つ古代史の新川登亀男教授、近世対外交渉史が専門の紙屋敦之教授、近世幕藩体制国家からアジア民衆史へと翼を広げる深谷克己教授、それに考古学からは最近パプアニューギニアの調査を進めている高橋龍三郎教授である。

従来の経過から赤米神事や伝統的な民俗行事を残す日本の対馬と、世界的な棚田地帯で、独特の宗教と芸術を有するインドネシア・バリ島を選んで研究を進めてきたが、これを南北軸の研究と位置づけ、COEプログラムで中国・四川省を地域文化のモデルとして共同研究を行うことから、中国と日本との東西軸を設定し、研究を推進することとなった。その際、大陸と深い関係を有し、古代から中世にかけて水田開発に大きく寄与した東大寺・東寺・高野山の三寺院を取り上げ、研究を推進することとした。既に2002年度には「対馬の歴史と民俗」というテーマのもとにシンポジウムを開催したが、この新たな状況により2006年度までを見通した研究期間のなかで、シンポジウムの計画を立てている。

2003年度：東アジア村落における水稻文化の儀礼と景観  
(10月25日に開催)

2004年度：古代・中世仏教寺院の水田開発と水稻文化  
(11月27日に開催予定)

2005年度：ジャポニカ・ジャワニカの起源と伝播

2004年度においては、東大寺を中心として中国文明の強い影響を受けた日本の寺院における水田開発と水稻文化を取り上げる。これは21世紀COEプログラムの趣旨に沿ったものであり、科研申請時には取り上げることができなかったテーマといえる。

### 4 水稻文化研究所における「東アジアにおける水田形成および水稻文化の研究（日本を中心として）」の視野

以上のように水稻文化研究所の活動領域は状況の変化



によって拡大してきたが、これも研究の深化・発展であると考えておきたい。ここでは、科研テーマ「東アジアにおける水田形成および水稲文化の研究（日本を中心として）」に立ち返り、再度そのねらいを明確化しておく。先行する対馬の調査として忘れてならないものに九学会連合調査がある。対馬全島を対象として、1950年から1952年にかけて行われた大規模なもので、参加団体は、日本人類学会、日本言語学会、日本考古学会、日本宗教学会、日本民族学協会、日本民俗学会、日本社会学会、日本心理学会、日本地理学会であり、これに建築史や日本史の研究者が加わった。このあと能登の調査に継承されたが、時代を経るとともにそれぞれの学会の活動が細分化される状況となって、このような学会を横断する調査は姿を消していった。その意味で人文系の学際調査として記念碑的な価値を有する。

統一的な成果は、『対馬の自然と文化』（古今書院、1954年）にまとめられているが、水野清一編著『玄海における絶島、対馬の考古学的調査』（東亜考古学会、1953年）や宮本常一著『中世社会の残存』（未来社、1972年）などにもこの時の調査成果が盛り込まれている。ただし、この時点では統一的な文献資料調査は行われず、田中健夫氏による調査が唯一の成果としてあげられる。その後、国士舘大学、長崎県、東京大学史料編纂所によって文書の採訪が行われ、宗家文書の目録が作成されるとともに全島的な文書の所在状況が把握されるに至った。したがって、九学会連合調査の段階では、文献資料上の限界があったことは事実である。

申請時には、まだ十分に絞り切れていなかったが、今回、対馬の南端に位置する豆敷を重点調査地区として選定した。この地は九学会連合調査の際、日本民族学協会を中心とし、他の学会も調査を行った主要な調査地の一つであった。宮本常一氏がこの地に伝わる民俗行事を詳細に分析されており、半世紀を経た今日ではすでに調査不能となっているものも多い。ただし、文献資料については、宮本氏が照合されたものはきわめて限られたものであり、また高縮尺の図面は当時存在せず、これらのことから豆敷の集落・水田の全面的な復原調査には至っていない。この地が赤米栽培とその神事を残す日本の水稲文化の一断面を語るほぼ唯一の地である以上、伝統が継承されているうちに徹底的な究明を行っておく必要があ



バリ島大橋氏のヴィラにて（2003年3月9日）

ろうと考えた。今回の調査においては、コマ数にして約6000点の史料収集を行い、また1977年10月撮影の空中写真と森林基本図により、集落と耕地の全面的な復原を目指した。宮本氏を中心とする九学会連合調査の成果を生かしつつ、いわば最先端のデジタル資料を組み合わせることによって、現段階におけるこの種の調査のモデルを示すことができることになる。今後21世紀COEプログラム「アジア地域文化エンハンシング研究センター」の展開に役立つのみならず、水田農耕を基盤とし、東シナ海に連なる港を有する村落研究のスタンダードとしての価値を有するものとなろう。

だが、このプロジェクトはそれだけを目指すものではない。豆敷に密接に関わる中世内山文書を取り上げても、その関係する領域は現在の下県郡のほぼ全域に及び、必然的に一郡規模の寺院・神社・遺跡に関わり、対馬の島主・守護・藩主として君臨した宗氏および府中である厳原にその考察は及ばざるを得ない。さらに宗氏は、中世から近世にかけて長い間朝鮮との外交に携わってきた。そもそも対馬を選定した大きな理由は、この島が絶海の孤島ではなく、文化交流の架け橋となる地であることにあった。このような視点からの研究は、九学会連合調査の段階では未だ十分とはいえず、その後半世紀の間に豊富な文献資料により長足に進歩を遂げた分野である。今回の調査においても豆敷の地自体が、海上交通により九州博多－対馬府中－朝鮮半島への開かれた地であることが確認されている。

このように巨視的に見れば水稲文化圏に属する対馬の歴史的役割を明らかにすることも本研究の課題の一つで

ある。また、その前提として対馬一円の中世史料の存在を明らかにすることも基礎的な課題として重要である。竹内理三氏による『長崎県史 史料編1』の対馬史料に関する網羅的な収集および国士舘大学による悉皆的な調査と目録作成によって示されたように、この地の文書史料の豊富さには刮目すべきものがあるが、それらを総合した目録作成には至っていない。今回この点でもささやかな貢献を行う必要がある。また、豆靨についての網羅的な収集作業ができたことも本研究の成果として特筆されよう。

このようにプロジェクトの中心となる日本の島嶼の研究については方法が固まったが、国際的なフィールドの選定については、申請書提出段階で明確にされていたわけではない。

2002年のウダヤナ大学でのシンポジウムで、海老澤はバリ島の持つフィールドとしての可能性に魅了されたが、そこへ切り込む方法については明確にしえなかった。2003年3月、水稻文化研究所のスタッフ、中島・堀口・深谷・岡内・紙屋・新川・海老澤に米谷均・清水克行が加わってゼネラルサーベイを行った。最終日の3月11日、午前中に河合（4月から水稻文化研究所客員助教授）も参加してベジェン村の巡見調査の後、ウブドのレストランにて食事をとりながら、今後の方針について話し合いがもたれた。雨季末期の強雨のため、降り込められた形となり、ゆっくりと議論ができたが、そこでは異口同音に地域文化研究の適地であることが述べられた。期せずして今後の水稻文化研究所の行方を定める重要な会議となり、研究拠点としてのバリ島の位置が固まった。しかし、この時点において、対馬豆靨のようなピンポイント調査地点については、まったく目途が立っていなかった。

8月、海老澤・西村で第二次調査を行った。この時には、ウダヤナ大学で総括的な協力体制を確認することも目的であったが、有望なフィールドを探し、今後の継続的な調査につなげることを目指していた。タバナン県のクロボカンとカラングス県のバサンアラスの二地点を詳しく踏査することができたが、このうち、バサンアラスにて調査の折、灌漑組織スバックの責任者が「MONOGRAFI SUBAK BASANGALAS」を提示した。これは、1984年にインドネシア政府が顕著な活動を行っているスバックを選定して報告書を提出させたものであ

た。1000分の1の実測による図面がつけられていて、十分とはいえないが対馬豆靨との比較研究を可能とするものであった。調査の方途に一筋の光明を見出し得たのは大きな収穫であった。

しかし、ウダヤナ大学においてもこのMONOGRAFIの所在状況をあきらかにできず、今後の課題となっている。現段階では、水稻文化研究所独自の調査をようやく行いうところに達したということである。12月ウダヤナ大学農学部と覚書を交換し、今後4年間共同でMONOGRAFI SUBAKに基づく調査を行うことになった。

なお、この12月のバリ島調査では、スバック・バサンアラスについてまとまった調査が出来、日本の村落における水田灌漑体系との比較研究が可能となった。

## 5 本研究が明らかにすべきこと

以上述べてきたように、本研究は幅広い分野の研究者の理解を得て、展開の途上にあるが、現段階における一応の輪郭を示しておく必要がある。

### ①対馬の歴史と史料

既述のように、九学会連合調査の段階においては、「文献資料の宝庫対馬」の扉はまだ開けられていない状態であった。この時点における竹内理三氏・田中健夫氏の努力は、その後大きな実を結び、特に古代・中世・近世の対馬を軸とした対外交渉史は飛躍的な進歩を遂げた。本研究ではまず、この点の確認とその研究水準をさらに引き上げる努力がなされねばならない。新川による「終末期古墳から見た対馬」は考古学の新たな成果を大胆に取り入れた新見解が示されている。対馬の中に存在した最前線の認識は、今後の研究に波紋を呼ぶことになろう。米谷の「1479年来日した朝鮮通信使による対馬紀行詩文集」は15世紀末の対馬の状況を示した史料がまだまだ発掘途上にあることを示している。また、関による「中世対馬の課役と所領」は、海に開かれた対馬の所領と領主の特質が、従来の研究水準を踏まえて史料に即して提示され、この分野のスタンダードとなりうるものであるといえよう。徳永の「対馬中世文書の現在」は個々の研究者と研究機関によって積み重ねられてきた文書調査の交通整理をし、その全体像に迫るものであり、今後対馬の史料群に踏み込む際のガイダンス的役割を果たすものとなるであろう。



## ②水稲文化の儀礼

水稲文化の儀礼を探究する際、そのスタンダードとなるのはバリ島である。河合の「バリ島村落の劇場的な性格」を一読していただければ、水田を基盤とする村落の儀礼がいかにシステムとして確立されているかをご理解いただけるものと思う。これは本研究全体のコンセプトでもある。これに対して、対馬の場合は水稲文化だけで村落の儀礼を解明することは出来ない。それをよく示しているのが和田の「対馬における芸能と村落」である。海域のなかでの文化の交流と儀礼の在り方が示され、島嶼研究のもう一つの側面を明らかにする狙いが込められている。本石の「豆穀の赤米神事」は、アカゴメの持つ神性が最高度に高められた対馬豆穀の赤米神事の年間サイクルを明らかにする。ここでは水稲文化の儀礼の輪郭が明らかにされなければならない。

## ③水稲文化と村落景観

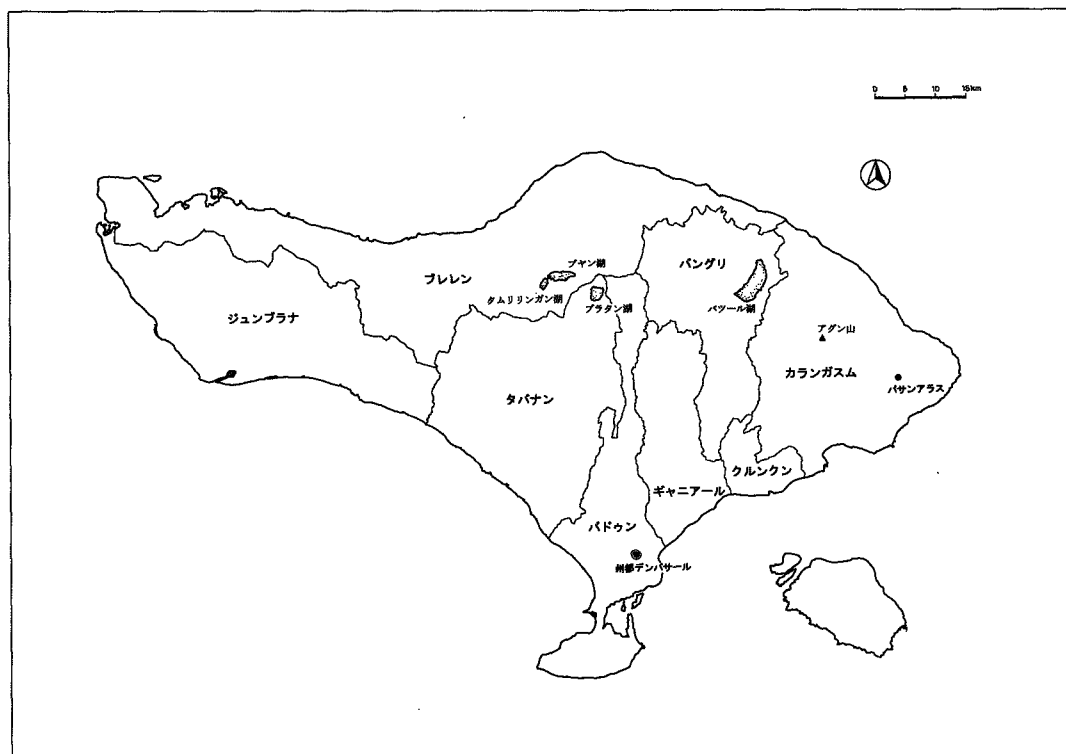
### 〈豆穀からの発信〉

「調査の目的と概要」で詳述するが、本研究では1980年代以降の農村の共同研究で蓄積されてきた方法を駆使して儀礼と村落景観を追究した。巻頭の頁には、堀の「対馬豆穀の景観復原」の成果である「明治前期の土地利用図」を掲載した。九学会連合調査の時点では考えら

れなかった調査方法の進歩を実感していただければ幸いである。黒田の「対馬豆穀の村落景観と祝祭空間」および徳永の「豆穀関連史料について」では、日本の村落が蓄積してきた共同体の儀礼と史料の豊富さには改めて驚かされるものがあり、この豆穀の地が今後の東アジア村落研究の一基点となるものであることをご理解いただけるであろう。吉田の「金剛院所蔵資料の整理・保存」は寺院での資料整理の委託を受けて、現代における文献整理の方法を試みた。本田の「内山村における中世山林相論と寛文検地帳の分析」では照葉樹林帯文化の海のなかに島のごとく存在する水田とその儀礼の持つ意味を改めて考えさせるものがある。

## ④対馬とバリ島の比較研究

①～③により対馬とバリ島の比較研究が可能となる。ただし、本研究の段階ではバリ島村落の研究は緒に就いたばかりであり、灌漑概況による検討が出来るのみである。それでも5千km以上離れた両地を比較しうる文化と社会の共通性には十分考えるべきものがある。第4部の総論では、これを「村落共同体の管理が優越する水利社会」として捉えてみた。対置すべき「国家管理が優越する水利社会」については、提示してみたものの踏み込んだ研究はこれからというのが現状である。



バリ島

## 第1部 東アジア村落における水稻文化の歴史と儀礼

### I 対馬の歴史と史料

#### 終末期古墳から見た対馬

新 川 登亀男

##### 1 終末期古墳の概要と現況

2003年9月11日（木）から13日（土）にかけて行なわれた対馬踏査では、とくに終末期古墳の現状確認に力点を置いて、7世紀以降の古代史における対馬の基本的なあり方について考えてみた。つまり、古代の対馬とは何か、という発問である。

対馬の終末期古墳には、下県郡美津島町のサイノヤマ古墳、同郡厳原町豆酸保床山の保床山古墳、同郡厳原町大字下原字矢立の矢立山古墳群などがある。

サイノヤマ古墳は、1948年の東亜考古学会による対馬調査（代表：梅原末治）で確認され、そして「鶏知サイノヤマ横穴式古墳」（下県郡鶏知町高浜サイノヤマ）として公表された（『対馬－玄海における絶島、対馬の考古学的調査－』1953年）。しかし、その後、所在不明となり、2000年における美津島町教育委員会踏査によって再確認された。東亜考古学会の調査によれば、地形を利用した円墳（径約10m、高さ約2m。封土はほとんどない。石室は長さ3.8m、幅70～80cm。玄室と羨道の区別はない）であり、出土品の所伝はまったくない。したがって、今回は踏査確認に及んでいない。

保床山古墳は、さきの東亜考古学会によって調査がおこなわれ、「豆酸保床山横穴式古墳」（下県郡豆酸村豆酸保床山）として公表された。それによると、「豆酸平野の北方」にある77mの丘の中腹（標高約60mか）に位置し、石室（長さ4.3m、幅1.6m。羨道はない）が露出し

て、封土は消滅しており、天井と西壁の大部分が破壊された状態であったという。ただ、石室の破壊にもかかわらず、盗掘を免れており、銅腕・土師器・須恵器の類・金銅装太刀などが発見された。今回は雨天の最中の踏査（11日午後）となったが、現在では所在地に至る登山道も十分に確保されておらず、古墳自体も草木に覆われた状況のまま放置されていて、このままいくと所在不明になるのではないかと危惧される。ただ、古墳所在地付近からは、豆酸浦とその集落を南方に見下ろすことができる。古くは、浦がさらに深く入り込んでいて、保床山に迫っていたと推測されるので、この古墳は、まさに対馬南端部に位置する豆酸浦の有力な経営者を埋葬したものであることが容易に察知できる。

矢立山古墳群は、これまた先の東亜考古学会によって調査がおこなわれ、「小茂田矢立山横穴式古墳」（下県郡佐須村小茂田矢立山地蔵壇）として公表された。それによると、「小茂田部落の東方に北からのびた一台地」（高さ30～40m）があり、佐須川がその裾を曲折して流れているが、この台地上に約20m間隔で2基の高塚古墳がある。南を第1号墳、北を第2号墳と命名した。このうち、第1号墳は、径約20m、高さ3mの円形とみられる封土が認められ、積石塚であったと推定された。石室は横穴式であり、玄室と羨道の区別がなく、すでに盗掘されていた。しかし、金銅装太刀などが発見されている。第2号墳は、封土が消滅していたが、石室は丁字形をした横穴式とされた。やはり盗掘されていたが、金銅装刀装具・銅腕などが発見された。ただし、1928年刊行の『対馬島



誌』によると、これらの古墳2基は「矢立山の岩屋」と呼ばれており、第2号墳には墳丘がまだ存在していたもようである。

この矢立山古墳群は、その後、1976年に国指定史跡に指定された。そして、2000年度に、第2号墳の北で第3号墳が確認され、2000年度から2002年度にかけて厳原町教育委員会と福岡大学人文学部考古学研究室（代表：小田富士雄）とによって合同調査がおこなわれた。その成果は、『国史跡 矢立山古墳群 厳原町文化財調査報告書第7集』（厳原町教育委員会、2002年）において公表された。後述するように、この段階で多くの発見と考察がみられた。今回の踏査（12日）は、この再調査後のものであり、3基の古墳は再整備されていて、保床山古墳（未指定）の現況とは大きく異なるものであった。しかし、古墳内部の視察はかなわなかった。ただ、佐須川との緊密な関係は確認することができ、この佐須川は、現在、小茂田浜（文永の役の合戦場とされる）に注ぎ出ているが、かつては入り江がさらに深く入り込んでいて、矢立山古墳群は、この入り江（浦）に沿っていた可能性がある。また、近在の檜根と久根には、下県郡の式内社である銀山神社と銀山上神社の名称を継ぐ神社がそれぞれ存在する（原位置は不明）。そして、「カナヤマ」に関する伝承がみられるが（『厳原町誌』1997年）、今回の踏査では、とくに檜根の佐須院観音堂近くの鉛鉱跡（東邦亜鉛株式会社経営）を実見し、斜坑を確認した。ここでは、鉛の類に付随して銀なども採れたという。現在では、環境汚染が問題となり、閉山に至っている。これらのことを踏まえると、矢立山古墳群は、後述するような銀などの採掘と搬出の経営にかかわった有力集団の墳墓群であった可能性が高い。

## 2 境界としての対馬

かつて1948年の東亜考古学会による調査で確認され、このたび2000年～2002年の矢立山古墳群合同調査で再確認された以下の基本的な指摘は、きわめて重要なものである。すなわち、対馬を南北に分けて、板石石室が北に、横穴式石室が南に偏在する（前者は南部にも及ぶ）。その境界は、小茂田と鶏知をつなぐ線である。高塚はシタルまで及ぶが、そこでとまり、前方後円墳はネソ（もし

くはチロモ）でとまり、横穴式石室は鶏知・小茂田の線ととまる。要するに、南ないし内地の影響が主として鶏知・小茂田ラインでとまるのは、大和朝廷の権力をバックにした政治的フロントを形成すべき基礎が600年前後にはできたことを物語っているというのである。

このような指摘の例証として、まさに横穴式石室の終末期古墳（現在、矢立山古墳群は1・2号墳が三段の積石封土方墳、3号墳が積石塚長方形墳とされている）が鶏知・小茂田ラインを北限として存在することになる。ここで、さきの2002年の矢立山古墳群の調査報告の総括に従うなら、およそ次のような経緯が想定されている。

まず、サイノヤマ古墳の詳細は不明であるが、一応、7世紀前半のものとみられる。ついで、保床山古墳と矢立山古墳群とでは、はじめに保床山古墳が築かれ、ついで矢立山古墳群の1号、2号、3号墳が順次西から東へと築かれたとされる（方位については1948年調査と合致しない）。しかし、それぞれの経緯はやや複雑であり、まず、保床山古墳は、7世紀前半に初葬が認められるが、7世紀末頃を最終とする2回の追葬が考えられる。また、新羅統一時代のものかとも言われる特殊な祝部壺の出土（1948年調査）が注目されるが、現在は行方不明である。さらに、矢立山古墳群の場合、1号墳は7世紀中頃以前に初葬があり、7世紀末頃（保床山古墳の2回目追葬の前後）に追葬がある。2号墳は7世紀中頃に初葬があり、7世紀末頃に追葬がある。未盗掘の3号墳は、7世紀後半の1回限りの埋葬であることが確認された。

そこで、主として保床山古墳と矢立山古墳群に注目すると、前者が先行する形で7世紀を通じて築造されるか、追葬されていったことになる。つまり、たしかに600年前後から豆酲浦を拠点として、ついで小茂田浜（浦）に依拠する銀などの採掘・搬出を介して、対馬のとりわけ南部（下県郡の地の鶏知・小茂田ライン以南）が倭王権の強い影響下に組み込まれたことを物語っている。

たとえば、『隋書』倭国伝によると、608年（隋大業4／推古16）、倭に向かう隋使裴世清は百濟→竹島→都斯麻国（対馬）→一支国（壱岐）→竹斯国（筑紫）へと至ったというが、「自竹斯国以東、皆附庸於倭」と伝えられる。これによると、対馬は当時、倭王権の範囲に含まれていないという認識が中国側にあったことになる。ところが一方、『日本書紀』によると、推古9年（601）、新

羅の間諜（スパイ）が対馬で捕らえられ、上野に流されたという。ついで、推古17年（609）には、肥後の地に漂着した百済人らを本国送還する途中、対馬において一部の百済人が倭に留まりたいと申し出たという。さらに、舒明4年（632）、倭に向かう唐使高表仁らは、いったん対馬に停泊しているが、翌年の帰国では、倭側の送使が対馬まで同行して、そこから引き返している。今、これらの記録を参照すると、600年代に入って、朝鮮諸国に加えてあらたに隋・唐との交通が展開しはじめるなかで、対馬を倭王権の境界とする認識が、ある種の緊張を伴いながら急速に形成されていったもようである。

保床山古墳は、まさにこの時期に築造されたものである。おそらく、この古墳は、対馬が倭王権の国境に組み込まれる600年初頭以降に、その介在者として指導的役割を果たした人物とその一族・後裔を埋葬したものであろう。そして、隋・唐を加えた新たな国際交通の拠点が豆酏浦であったことを、あるいは豆酏浦になったことを如実に物語るものである。ただし、8世紀以降の遣唐使は壱岐・対馬を経由しないので（新川登亀男「東アジアのなかの古代統一国家」瀬野精一郎他編『長崎県の歴史』山川出版社 1998年）、これ以降、豆酏浦のあり方に変化が生じてきた可能性はある。

一方、『日本書紀』天智10年（671）11月癸卯条に「対馬国司」が初見する。これによると、唐・百済・倭人らの大規模な混成船団（総勢2000人、船47艘）が「比知島」に停泊して、そこから「対馬国司」に到来の趣旨を伝えてきた。あわせて、「防人」が射戦に至らないようにとの申し出でもあった。そして、このことを「対馬国司」は「筑紫大宰府」に取り次いだという。すでに金田城を築き、防人を配置していた対馬に倭側から官人が派遣されていたことを示している。少し遡って、『日本書紀』天智4年（665）9月壬辰条注によると、唐・百済人らの混成船団（254人）が対馬に1ヶ月以上は停泊して、筑紫に向かったもようである。これらの船団がどこに停泊し、倭から派遣された官人がどこに駐在していたのかは不明である。

しかし、今かりに、さきの鶏知・小茂田ラインを考慮するなら、このライン以北に置かれた、倭王権国境外縁ぎりぎりの金田城付近に倭派遣の主要官人が常駐したとは考えにくいのではなからうか。また、さきのような船

団の場合、その渡航目的が明らかでないなら、金田城周辺の港湾（広くは浅茅湾）に停泊した可能性もあるが、その性格によっては、やはり豆酏浦の可能性を考えたい。金田城や防人の設置によって、むしろ、倭王権と通じる保全的な後方地域の必要性が高まり、そこに豆酏浦が該当したとすれば、保床山古墳の存在（倭派遣の主要官人の墓というわけではなく、その官人らが行財政上で依存した在地首長の墓）は理解しやすい。そして、7世紀における倭王権の国境が対馬に設定されたとしても、鶏知・小茂田ライン以南こそが倭王権の直接的な範囲内であり、その以北は外縁（金田城や防人配置のところ）ということになって、このように二分された対馬のあり方自体が倭とそれ以外との境界形態を表していたものと思われる。

### 3 銀などの採掘

『日本書紀』天武3年（674）3月丙辰条は、「対馬国司守忍海造大国」が始めて銀を貢上したと伝えている。倭国では、これが初の銀とされ、大国に小錦下が授けられ、諸神にその銀が奉ぜられ、さらに、小錦以上の大夫らにその銀が分配されたという。

その後、『続日本紀』文武2年（698）12月辛卯条に「令対馬島冶金鉞」とあり、大宝元年（701）3月甲午条では「対馬島貢金」とあって、これを契機に大宝元号が採用された。これらは一連の営為であるが、同年8月丁未条によると、この貢金の関係者に褒賞がおこなわれている。つまり、その該当者は、黄金を冶成するために対馬に派遣された大倭国忍海郡の雑戸・三田首五瀬、対馬島司と郡司の主典以上、金を出した郡司とその郡の百姓、金を獲た家部宮道とその戸、そして五瀬を派遣した贈右大臣大伴宿禰御行（死亡）の子らであった。ただし、当該条注によると、この貢金は、五瀬の詐欺であったとする（銀などを金と偽ったか）。

これら銀ひいては金の貢上が、矢立山古墳群の形成と深くかかわるものであることは容易に察せられる。しかし、その1・2号墳は、銀が初めて貢上されたとする674年（天武3）よりもかなり前に築造されており、その時期（初葬）は7世紀中頃からさらに遡るとみられている。おそらく、674年（天武3）以前から、すでに銀などの採掘がおこなわれており、その技術・経営者集団の誕生



が認められよう。

今、その主な理由を概述すると、まず、さきの天武朝以来、対馬の銀ないし金には大和国忍海郡の地の首長層や技術者（雑戸）が一貫して関与していた痕跡がある。この点は、1号墳の木棺に使用された饗座金具と類似したものが大和国忍海郡の地にある寺口忍海H-22号墳、同E-12号墳（7世紀前半に遡る）でも出土していることと呼応しよう（2002年前掲報告書）。また、『肥前国風土記』三根郡条では、推古10年（602）の来目皇子新羅出兵軍のなかに忍海漢人が動員されていて、兵器製造にあたったとする。これらのことからすると、大和国忍海郡の地の技術者集団（渡来人系）が、すでに7世紀中頃ないし以前から対馬において銀などの採掘・冶成に当たっていた可能性がある。

ついで、さきの1号墳出土の饗座金具は、奈良県桜井市の中山1・3号墳のそれ（7世紀前半に遡る）とも類似しており、阿倍氏との関係が推定されている（2002年前掲報告書）。阿倍氏は、外交を含む活動を7世紀に展開した新興氏族であるが、とりわけ、7世紀中頃の難波遷都期に左大臣阿倍内麻呂（倉橋麻呂）が出ている。そして、この時期、伊予の地に派遣されて、当地の秦氏と協業しながら朱砂の採掘（アマルガム鍍金）を指導し、そのままそこに定住した阿倍氏も知られている（『続日本紀』天平神護2年3月戊午条）。おそらく、阿倍内麻呂が左大臣であった難波遷都期の7世紀中頃に、阿倍氏による鉱物採掘が在地の渡来系技術者層と協業しながら展開されたことがあったのであろう。『日本書紀』顕宗3年4月庚申条にみえる日神（高皇産靈）と阿倍氏と対馬下県直の祭祀との連携記事は、以上のことを前提にすると理解しやすい。

さらに、対馬の家部らが金銀の発見に直接関与したらしいことは先述のとおりであるが、この家部集団は、美作国や備前赤坂郡の地に多い（『日本古代人名辞典』）。これらの地は採鉄の盛んなところであり（たとえば、『日本霊異記』下の13など）、この鉄穴での採掘技術と対馬での採掘技術に連携性が認められる可能性がある。

以上のような諸点を踏まえると、7世紀前半以降、いくつかの段階差をもって、あるいは複数の技術集団や歴史的条件によって、対馬の銀などの採掘が展開していったものとみられる。矢立山古墳群が1・2・3号墳とし

て存在するのも、その証左であろう。また、のち、『延喜式』雑式において、対馬銀の百姓私採が特別認められているのは、このような初期の多様な採掘形態に負うところもあろう。しかし、この採掘が、そして矢立山古墳群の築造が7世紀に入ってからであるということの意味は考えなければならない。

その意味するところは、まず、倭における金銀の必要性にあらう。たとえば、『隋書』倭国伝によると、かつて金銀を愛好しなかった倭人は、隋との通交により、はじめて金銀の意匠を知り、冠位十二階の制に採用したという。たしかに、推古11年（603）制定の冠位十二階の制では、大・小徳の冠の髻花（ウズ）には金をもってするとある（『日本書紀』推古19年5月5日条など）。しかし、大化3年（647）の七色十三階制になると、小錦冠以上の鈿（ウズ）には金銀を交え、大小青冠の鈿は銀をもってし、大小黒冠の鈿は銅をもってすると決められている（『日本書紀』）。ここにおいて、冠位十二階の制とは比較にならないほどの金銀銅が広範に求められたはずである。

さらに、寺院伽藍の造営にともなう金銀の必要性も急速に増したはずであるが、銀銭や地金としての銀の流通にも注目しなければならない。たとえば、『日本書紀』天武12年（683）条は、銅銭の採用と銀銭の禁止、銀の採用続行というめまぐるしい施策を打ち出している。これは、銀銭と地金としての銀が、いかに流布していたかということを物語っており、低質で私鑄的な銀銭の横行と混乱を停止して、地金としての銀の流通は温存しようとしたものとみる説がある（弥永貞三『日本古代社会経済史研究』岩波書店 1980年、栄原永遠男『日本古代銭貨流通史の研究』塙書房 1993年）。この段階の銀銭と地金としての銀の横行・流通は、天武3年の対馬銀貢上と直接的な因果関係が想定されるが、地金としての銀の流通は、7世紀中頃ないし以前に遡ることも予想してよい。なぜなら、冠位制にともなう装飾具に銀の適用が既にみられたからである。その一つの結末が、実は天武3年に貢上された対馬銀の小錦冠以上への統一的な分配であり、かれらの衣服装身具への活用が法制的に期待されたのである。

しかし、問題は地金としての銀のあり方であって、それぞれの氏族集団や王家が個別に対馬銀の採掘と結びつ

いて、その銀を取得して、活用することがなされたであろう。もちろん、その活用の範囲のなかに冠位制に基づく装身具が含まれているが、その活用量や質が特に問われることはあるまい。そして、その質量の確保次第では、装身具以外での活用も可能なはずである。そこに、銀銭ないし地金価値をもつ銀の横行の余地があり、また、交易や褒賞価値に活用・転用されることもあってよい。天武朝以降のめまぐるしい施策は、このような銀採取と流通の任意性と個別性を統一的に規制していくことを模索するものであり、天武3年の対馬銀貢上とは、その先駆けをなすものであった。

このうち、交易や褒賞価値としての銀の活用は、『日本書紀』持統5年(691)9月壬申条、同年12月己亥条、同6年(692)2月丁未条などにみられるが、これらがすべて、唐や百済などからの近年の渡来系僧俗技能者・知識人らに与えられた銀であることに注意しなければならない。この銀は、彼らへの褒賞として与えられ、広くその交易価値が約束されていたものであるが、同時に、音楽・書・医术・呪禁・陰陽などの国際的技能や知識に活用する稀少な物品の購入(交易)に充てられることが具体的に予想されていたはずである。つまり、このような銀の活用は、隋・唐を新たに加えた東アジア世界のなかでこそ、はじめて意味を持つものであろう。事実、新羅はこのような銀の活用を知悉しており(田中史生『日本古代国家の民族支配と渡来人』校倉書房 1997年)、中国でも南北朝以来、隋・唐に至ると、銀の活用は社会的な広がりを見せている(加藤繁『唐宋時代に於ける金銀の研究』1・2 東洋文庫 1925・26年)。このような東アジア世界は、倭にとっては、まさに7世紀に構成されるのである。

対馬の銀は、以上のようないくつかの観点からして、やはり7世紀の倭にこそ求められたものである。これを、言い換えれば、対馬における鶏知・小茂田ラインは、600年前後以降、7世紀を通じて倭が銀を囲い込もうとした指標ともみることができる。その意味では、7世紀の対馬の中に倭の境界が設定され、やがてその対馬が倭の国家を成り立たせていく必須の条件になるのは、まさに銀の採取とその東アジア的な価値(衣服制、交易流通価値、国際的技能・知識獲得・寺院伽藍荘厳など)にあったと言えるべきであろう。

ただ、その際、東アジア的な価値を列島内において任意に個別的に開かれた形で負う傾向の強い銀(銭)と、倭から日本への再編成の過程で独自の価値を画一的に閉ざされた形で負わされようとしている銅銭との相克ないし二重構造が推測できることである(今井啓爾「無文銀銭の流通とわが国初期貨幣の独自性」『史学雑誌』109の1、2000年。同「木簡に見る和銅年間以前の銀と銀銭の計量・計測単位」『史学雑誌』111の8、2002年)。その意味では、銀(銭)はまさに、7世紀に立ち現れたあらたな東アジア世界への参入者としての倭を表象することになるが、逆に、この前提を経由することなくして、固有の国家(日本)を自認することも確立することもできなかったという意味において、対馬銀の確保は、やはり国境の定立へと結実していくことになる。また、場合によっては、後次的な銅銭の孤立的な価値を認証する基盤として、先行的な銀(銭)の汎用性に富む存在価値が求められるという回路もみられるのである。

一方、豆酸浦の経営と展開は、このような銀(銭)の出現と役割を促すあらたな交通環境を確保し、二重構造的な国境の拠点を形成することになったものと考えられる。ここに、保床山古墳と矢立山古墳群との同時代的な関係性が見て取れるのである。

#### 4 古代の対馬を問う

984年(宋雍熙元/永観2)、入宋した「日本国僧裔然」は「東奥州産黄金、西別島出白銀、以為貢賦」と述べている(『宋史』日本伝)。これは、単なる文飾ではなく、また自明の「日本国」の東西国境を説明したわけでもなく、金と銀の産出地を囲い込む必要性から歴史的に編み出された「日本国」の国境のあり方を如実に吐露したものである。そして、ここで言う「別島」とは、通説通りに対馬を指すとみて問題はあるまい。これを言い換えるなら、倭ついで日本においては、対馬に豊かな農業生産力が期待されたわけではなく、多大な犠牲と代償を払ってまでも、銀などの産出とそれにもとづく諸価値を確保し、維持し、奪われないようにし続けることが最大の関心事であり、自国の存立条件であると認識されていたことになる。

事実、『万葉集』16の3869左注が伝えるように、すで



に神亀年中（724～729）には、大宰府管内から対馬に年糧が船で送り込まれていた（この時期は、五島列島から直接、対馬に送られ、壱岐を経由しなかったように記されている）。この年糧は、対馬島司や防人らの生活を支えるためのものであり、大宰府管内の筑前・筑後・肥前・肥後・豊前・豊後の6国に依存しなければならず、基本的には穀2000石であった。これらは、壱岐から転送されたり、壱岐に直接負担を課す時期もあった（『続日本紀』天平4年5月乙丑条、『日本三代実録』貞観18年3月7日条、『弘仁式』『延喜式』主税寮上など。前掲新川論文参照）。

また、対馬島司にとって、その島は大隅・薩摩・壱岐・種子島などとともに「挙乏官稻、曾不得利、欲運私物、路險難通」とされた（『続日本紀』天平宝字4年8月甲子条）。つまり、正税・公廩稻出挙が十分に機能せず、その利益も上がらず、島の交通・運輸も困難であるというのである。そこで、これらの国や島の司に大宰府管内の公田地子を割いて特別支給することにしたが、その後、幾多の変遷を経て、対馬に対してのみ大宰府管内の地子を公廩稻に振り当てること続けられたもようである（『類聚三代格』6の天平宝字4年8月7日勅、『弘仁式』『延喜式』主税寮上など）。事実、『弘仁式』主税寮によると、対馬は正税3920束のみが設置されており、種子島の正税2080束に次いで少ない（壱岐は正税15000束、公廩50000束）。これにつぐ『延喜式』主税寮上でも、対馬の正税額は変わらず、公廩稻ほかの財源も一切設けられていない（壱岐では、あらたに修理池溝料5000束、救急料20000束が増設されている）。この間、種子島は大隅国に編入されたので、「日本国」のうちで対馬の正税額はもっとも少ないことになる。また、対馬には駅伝馬も存在しない（『弘仁式』主税寮、『延喜式』主税寮上・兵部省）。

このような対馬の農耕生産とその回路の一端を物語るのは、右大臣吉備真備が、神護景雲元年（767）に、対馬の墾田3町1段・陸田5町2段・雑穀20000束を島の儲として献上したことである（『続日本紀』神護景雲元年9月戊申朔条）。これらは、吉備真備がかつて筑前や肥前の国守であった時に取得したものであろうが、自家にとって充分な利益をもたらさないことや、対馬の窮乏などを考慮して、対馬島司のもとに返上したものである。

そして、ここにみられるものが、ほとんど水田や稲作物ではないことに注意しなければならない。

一方、これほどの困難を伴いながらも島司官人や防人らを対馬に送り続け、彼らの任務遂行を強要し続けた古代の「日本国」は、その見返りとして対馬貢銀を期待し、その産銀をめぐる諸価値の機能を十全に発揮させようとしたのである。

『延喜式』民部省下によると、大宰府は管内調物として銀897両を貢上していた。また、大宰府は正税交易雑物として銀300両を貢上している。これらは、対馬銀であるはずであり、正税をもって交易する回路も存在していた。また、同じ『延喜式』主計寮上では、対馬の調として銀のみが挙げられている。ただし、その額は特定されていない。それは、採掘量が不確定であるためなのか、あるいは大宰府に納められてそこで質量の調整がおこなわれたのか、後述のように、その銀はさらに直接京進されるなどの幅をもった採掘と活用がみられたのであろうか。既述のように、対馬銀は百姓の私採が認められていたが、その私採としての幅や展開も同時に考慮しなければならぬ。

このような対馬銀の現地における実態については、まず、『日本三代実録』貞観7年（865）8月15日条の大宰府報告記事から垣間見ることができる。それによると、対馬の下県郡にある「銀穴」は、「高山底」より「巖」を「穿鑿」して、掘入ること40（ないし30）丈ほどであり、白昼でも「炬」をもって入らなければならなかった。ところが近年、処々が「崩塞」して、その回復に「人功」を費やすことが多く、さきほどの夏の雨では穴に水がたまってしまう、その「功力」を計算すると、対馬島司が「私」にただちに「穿開」できるような事態ではない。そこで、延暦15年（796）例にならって、対馬の「例挙大豆遺百斛、并租地子穀百斛」を「掘開」費用に充てたいというのである。これは、最終的に許可されている。

これによると、高山の麓から巖を掘った処々の銀穴は9世紀中頃には100m前後に達し、その結果、しばしば崩壊現象が起り、そのつど対馬島司の私裁裁量のもとで人夫動員をおこないながら修復にあたってきたが、いよいよ、その限界を超える事態が発生したので、特別の財源で人夫調達を行うことになったのである。ここで、注目したいのは、いかに銀穴が深く掘り続けられ、島司

がその開鑿と維持に努めなければならなかったのかということであり、また、そのために島の人夫が動員されるとともに、島に特別な財政回路や財源がみられることである。とりわけ、「租地子穀」に相對するほどの額が期待された大豆の生産・消費と大豆の出挙回路の存在が留意される。

一方、天安元年（857）には、対馬の上県郡と下県郡の郡司らが300人ばかり（中核は首従17人か）を率いて、島守とその従者10人と防人6人を襲撃殺害する事件が起きている（『日本文徳天皇実録』天安元年6月庚寅条、『日本三代実録』天安2年12月8日条）。これは、さきのような銀採掘をめぐる島司の度重なる過酷な人夫動員などへの反抗ではないかと思われるが、貞観7年3月22日付けをもって、対馬の上県・下県両郡司統領の職田に筑前国の水田30（ないし40）町が充てられることになった（『日本三代実録』）。この一連の事態は、銀の採掘が上県・下県両郡の全島百姓に賦課されており、その人員は300人ほどには及んでいた可能性を示唆している。また、その採掘現場での直接的な指導者は両郡司層であり、その郡司層の維持のために職田があらたに設けられたものとみられる。ただし、その職田を島内に求める余裕はなく、島外の筑前国に求めている。さきの「租地子穀」とは、このような島外（大宰府管内6国）での経営に依存したものや、既述の公廩相当の地子運営や、正税と銀の交易などの諸回路によって捻出されたものであり、島内で自己完結するようなものではあるまい。

ついで、寛仁3年（1019）の女真族（刀伊）襲撃の大宰府報告から、対馬の銀採取の一端が知れる。対馬における被害項目は銀穴焼損・上県郡・下県郡の3種に大別されており、銀穴焼損では134人が襲われて、殺害された者18人、追取された者116人（男33人、女56人、童27人）、上県郡では141人が襲われて、殺害された者9人、追取された者132人（男39人、女・童93人）、下県郡では107人が襲われて、殺害された者男女合わせて9人、追取された者98人（男30人、女・童68人）であった。そして、全島総計では襲撃された者382人（男102人、女・童280人）とされている（『小右記』寛仁3年6月29日条）。伝写のことも含めて、数値には若干の疑問が残るが、ほぼ正確であろう。

この報告をどのように読み取るかは問題であるが、ま

ず、銀採取が対馬にとっていかに大きな意味をもっていたかということを如実に示している。ついで、上県郡での被害が最大であるなかで、銀採掘現場周辺での死亡者がもっとも多い。これは、逃げ遅れによるものか、死守しようとした結果なのか、男が多かったのか、いずれにしても尋常でない数値である。さらに、銀採掘では、男のみでなく、女や童（ほぼ女2人につき童1人の割合）の動員が数多くみられた。また、少なくとも、ふつう134人以上の男・女・童らが銀採掘にあたっていた様子がうかがえる。

ところで、『小右記』長元5年（1032）8月25日条から推測するに、対馬の銀は島の丁数相当の調として貢納されていたかのようなのである（小葉田淳『日本鉱山史の研究』岩波書店 1968年）。かりに今、10世紀前半に編纂された『和名類聚抄』にしたがって、上県郡が5郷、下県郡が4郷として、50戸編成を前提にしながら、1戸1丁と想定した場合、上県郡の丁数は250、下県郡の丁数は200となる。すると、全島の丁数450が一応、銀採掘ないし貢銀を負担することになる。さきにみた島守襲撃事件に動員された人員総数が300人ばかりとされていること（うち中心は17人くらいか）、刀伊襲撃の時、銀採掘現場周辺で殺害された者が18人、これを含めた被害者が134人であったこと、また、その被害者が全島で382人に及んだことなどの数値をいかに解説するかは今後の課題である。

最後に、銀採取の貴重な史料である『対馬貢銀記』（『朝野群載』『群書類従』所収）を取り上げたい。これは、大宰権帥大江匡房が在府中（1100年頃）に記したものではないかと推測されている（川口久雄『大江匡房』吉川弘文館 1968年）。それによると、銀穴は2～3里に及び、3人が1番をなして掘る（1人は燭を執り、1人は器を採り、1人は鎚をもって取る）。また、300～400人が連なって坑道から雨水を汲み出す。その人夫の費用は、大宰府管内から送られてくる年粮米2200斛を充てる。さらに、採掘した銀は額を量って、高山四面の風を受けるところに置き、松樹の薪で10日あまり焼き、ついで水をもって洗い、灰は鉛錫となり、すべて1200両を年輸とする。そして、大宰府に長く留まることなく、京の藏人所へと進上するとある。一方、対馬には、「田畝」がなく、ただ「白田」（畠）を耕作し、あるいは「諸租税」

を置いている。また、大豆を正税となし、島には「珍貨充溢」しており、「白銀鉛錫、真珠金漆之類」を永く貢上してきたという。

ここに、古代後期の対馬の実態が集約して伝えられている。まず、「日本国」における対馬の意味は、やはり銀をめぐるところに収斂される。その銀穴は、1里を約640m前後とすれば、1～2kmにも及ぶ深さ（長さ）になり、さきの9世紀以降、いかに深く長く掘り続けてきたかがよく分かる。ついで、300～400人が総動員されることがあり、この人員数は、実は、さきに試算してみた全島の丁数に近い。また、島守襲撃人員数にも近い。さらに、刀伊襲撃での被害者総数にも近い。これらの近似性については判断を保留したいが、とにかく、300～400人と銀採掘とは関係があるとみてよからう。すると、彼らが、3人で1番をなして、100～133番余が構成されていたことになるであろう。また、銀採取には、さらに焼く、洗う、計測するなどの工程があり、これらに女・童らが参与した可能性があろう（ほかに、炊事・洗濯などもあろう）。

なお、年粮米2200斛の充当に対する理解に誤認がないとすれば、その用途は島司・防人らの生活維持費から銀採掘関係の費用に切り替えられたことになる。『対馬貢銀記』はこれを「最重」としているが、それほどに銀の採取と維持に全力を傾けたことになるだろう。

そして、採れた銀には鉛や錫も含まれていて、その活用も考慮されるが、とにかく1200両の年輪銀とは、あたかも既掲の『延喜式』にみえる大宰府からの管内調物銀897両と正税交易雑物銀300両との総計に酷似している。おそらく、この2種の大宰府貢銀額を継承しているであろう。そして、この年輪銀は蔵人所へと向かっており、京貴族社会での各種消費や、中国（宋）との交易などに活用されたことが推測される（渡辺直彦『日本古代官位

制度の基礎的研究』吉川弘文館 1972年）。

また、対馬の農耕は主として畠作であり、大豆が正税とされる特殊な形態をみる。これは、すでに9世紀には確認できるところであり、稲に替わって大豆の出挙が行われていた。大豆は、一段あたり耕す回数1度、労働延べ人員13人であり、畠作物栽培のなかでは、もっとも簡易な耕作ですむ（『延喜式』内膳司。鑄方貞亮『日本古代穀物史の研究』吉川弘文館 1977年）。『和名類聚抄』で確認できる下県郡の「豆穀」郷（高山寺本と名古屋市博本は「豆配」）は、この大豆に関わる命名であろう。豆穀浦が大豆の集積や加工ないし搬出入や分配などにかかわったのかもしれないが、老岐の調が大豆・小豆・小麦などとされており（『延喜式』主計寮上）、老岐の調の筆頭を占める大豆との関係も検討に値しよう。いずれにせよ、7世紀以降、倭ついで日本が銀産出をもって困い込んだ対馬南部の港湾である豆穀浦は、同時に、対馬独自の正税（大豆）出挙をもってしてまでも銀などを確保しようとした古代「日本国」の港湾・交通拠点でもあった可能性があろう。

対馬銀は、以上のように古代「日本国」の境界を決定する重要な要件であったが、その「日本国」による困い込みは、銀にとどまることなく、鉛錫、真珠、その他の「珍貨」が「充溢」する「別島」としての価値によるものでもあった。日本の王臣家が競って対馬の真珠を買いあさるために島に使いを送る傾向がみえたのも（『延喜式』雑式）、その一端であるが、対馬に国際的な交易物が集まる傾向もあったのであろう。しかし、それが可能なもの、銀あつてのことである。

対馬銀の採掘は、『対馬貢銀記』以降、次第に衰微していったものと思われる。それは、同時に古代の終焉でもあり、銀を「最重」としない対馬と日本のあらたな関係の歴史が展開することになるのであろう。



# 1479年に来日した朝鮮通信使による対馬紀行詩文集

米 谷 均

## はじめに

14世紀末以降、高麗王朝や朝鮮王朝は、多数の使節を日本へ派遣し、帰国した使節から見聞報告（復命書）を聴取した<sup>(1)</sup>。使節の多くは日本滞在中に漢詩文を作成し、後世編纂された彼らの詩文集のなかに上記の紀行詩文が掲載されることもあった<sup>(2)</sup>。鄭夢周（1377年来日）の『圃隱集』や、申叔舟（1443年来日）の『保閑齋集』等がその代表例である。しかし紀行詩文集がまとまった形で現存している事例は極めて少なく、宋希璟（1420年来日）『老松堂日本行録』<sup>(3)</sup>を唯一の例外とすれば、金誠一（1590年来日）『海槎録』まで、かかる紀行詩文集は遺っていないものとされてきた。

しかし筆者は最近、1479年に通信使団員として来日した金訢の文集『顔楽堂集』<sup>(4)</sup>のなかに、「扶桑紀行録」と銘打たれた紀行詩文集が掲載されていることに気付いた。この使節は、様々な事情によって結局対馬から引き返したため、当詩文集も事実上「対馬紀行録」に留まってしまうのであるが、それでもなお、多数の紀行詩文を収録し、なかにはこの当時の対馬の社会風俗を巧みに詠み込んだ作品も見られる点において、十分注目に値する。本稿は、この未完に終わった通信使による対馬紀行詩文集を初めて紹介し、併せて『顔楽堂集』に収められた関連史料の吟味も行い、簡潔な検討を試みたい。なお史料原文は本稿末尾に掲載し、これを典拠として行論する場合は、史料番号（【 】）にて適宜明示したい。

## 1 1479年次通信使について

紀行録の記主である金訢（1448～92）は、字は君節、号を顔楽堂といい、家系は延安金氏に属した。嶺南学派の巨頭である金宗直（1431～92）の門人となった後、1471年に及第し、以後、成均館・承文院・芸文館・春秋館等の職を歴任・兼任した。弘文館校理に在任中、1479年に通信使書状官に任命されて日本へ派遣され、翌1480

年には赴京使質正官として明に赴いた。1486年に工曹参議に任命された頃、体調を崩して退官を乞うようになり、各地で療養生活を送った後、1492年に逝去した<sup>(5)</sup>。

1479年次通信使は、金訢にとっては初の異国体験を得た使行であると同時に、成宗時代（1469～94）の対日外交において、大きな期待を担って派遣された使節でもあった<sup>(6)</sup>。というのも、前回派遣された1460年次通信使が、釜山沖の海難事故によって使行を中断したため、1443年次通信使以降、朝鮮使節が日本本土を実地踏査したことがなかったからである。この使節の日本派遣は、1475年前後から朝廷で提議されていたが、日本から来朝する諸使節が伝える応仁の乱（1467～77）情報により、航路の危険性が憂慮され、何度も計画が中断・延期された。1477年に、朝鮮前期を通じて最も精緻な通信使派遣計画が立案されるが、対馬島主宗貞国の警告によって再三延期となり、1479年に貞国から使行安全の通報が出されたのを受けて、ようやく派遣が実現した。派遣に先立ち、成宗は1443年次通信使団員の李仁睦を引見して往事の日本国情を下問し、今次使節に対しても日本情報の探索と報告を下命するなど、現地調査による国情把握に大きな期待を寄せた。なお使節団員として、正使には李亨元、副使に李季全、書状官に金訢、軍官に趙之瑞・曹伸・朴季幹、押物官に羅嗣宗が任命され、これほか役職不明であるが朴宗元・具詮・李瓊全らも同行したようである【18・21】。

成宗10年（1479）4月1日、通信使一行は成宗の引見を受けた後、4月4日に漢城を出発した<sup>(7)</sup>。以後、「扶桑紀行録」の記述によれば、咸陽（慶尚南道）・機張（同）・熊川（同）各地を経由したことが分かるが、咸陽や機張は、通常の南下ルートとはかなり離れた地にあり、どうしてこのような行路を取ったのか不明である。また金訢の年譜【28】によれば、6月7日に巨済島の知世浦から出帆して同日中に対馬の佐須奈に入港し、6月18日、宗貞国の在所である国府（府中）に到着したという。と

ころが通信使を迎えた宗貞国は、彼らに対して不恭の態度をしばしば示し、「南路兵乱」を理由に「北路」をもって京へ行くよう勧告したことから、事態紛糾して使節一行は対馬に足止めされることとなった。また正使の李亨元が発病したため、副使の李季全は羅嗣宗を急遽本国へ帰還させ、上記の事情を報告させた<sup>(8)</sup>。7月14日、この馳啓を受けた朝廷では、使行中止論や対馬島主問責論など、様々な意見が出されたが、結局翌15日、通信使の使行中止と漢城帰還を、李亨元に対して下命することに決した<sup>(9)</sup>。7月25日になると、宗貞国の使者源茂崎が来朝し、畠山氏による畿内兵乱と、安芸における兵乱発生との通報がなされ<sup>(10)</sup>、9月14日には、帰還中の李亨元が巨済島で死亡した旨が漢城に届いた<sup>(11)</sup>。なお対馬に残留していた使節団員は、9月17日に釜山へ帰還したようで【28】、10月15日には成宗の引見を受け、李季全と金訢が帰朝報告を行った<sup>(12)</sup>。このように、成宗の強い意向と期待を受けて派遣された当通信使は、結局のところ、道半ばにして対馬から引き返し、謎の多い日本国内の情報収集という念願を果たせぬまま、不完全な形で終了することとなったのである。以後、歴代の朝廷では通信使の日本派遣の提案が何度かなされたが、具体的な立案に至る前に全て却下され、朝鮮通信使の日本派遣は、1590年まで実現することはなかった。

## 2 「扶桑紀行録」について

次に「扶桑紀行録」の概要を簡単に紹介してみよう。

『顔楽堂集』巻1に収録された本詩集は、漢城から南下する途上の咸陽【1】から記載が始まり、機張【3】・熊川【4】等における詩作が続いている。対馬渡航以降は、西泊【6】・船越（小船越）【8】・久田と南室【14】・小船越の梅林寺【16】・泉【19】・鰐浦【23】・豊崎【25】などの地を踏んだことが記され、最後に対馬北端の山に登って朝鮮南部の峯々を眺望して詠んだ詩【26】をもって、紀行録を閉じている。詩の収録数は49首を数える。またその末尾には、金訢の師である金宗直、ならびに金克儉（1439～1499）の跋文【27】が添付され、読後の感想と短評が各々記されている。

道中にて金訢と詩文を贈呈ないしは和韻酬和した人物は、「克己」「家兄」「安監司」「伯符」「叔度」「子俊」「玉如」「朴経歴宗元」「具君詮」等である。このうち

「克己」は金訢の同門である兪好仁（1445～1494）を、「家兄」は金訢の兄（金謹？）を、「安監司」は慶尚道觀察使の安某を指し、いずれも金訢が朝鮮国内南下中に詩を贈った者たちである。これに対して「伯符」以下は通信使団員として金訢と同行した者たちで、「伯符」は軍官の趙之瑞（？～1504）、「玉如」は李瓊全、「叔度」は恐らく軍官の曹伸<sup>(13)</sup>、「子俊」は副使の李季全（1450～1506）、「朴経歴宗元」は朴宗元、「具君詮」は具詮を指す。なお詩文応酬者の中には、対馬側の人間らしき人物はおらず、金克儉の跋文（【27】②）にも「惜しむ也。対馬島中、未だ嘗て一具眼者の従って唱酬し、以て君節〔\*金訢〕の癢を<sup>はがゆき</sup>尽くすこと有らざる也」と評されている。当時、対馬には詩文に長けた外交僧である仰之梵<sup>きやうしぼん</sup>高<sup>こう</sup>（1413～1494）<sup>(14)</sup>がいたはずであるので、日朝詩文唱和がこの時なされなかったことは、まことに残念であると言わざるをえない。もっとも「其れ劔を<sup>な</sup>按でて相視ること為さざれば也。また幸いならん」（【27】②）と金克儉が憶測しているように、当時、通信使側と対馬側との間にギスギスした感情的対立が生じていたのであれば、詩文を応酬すべき雰囲気<sup>きふき</sup>がそもそも無かったとも考えられよう。

さてここで、金訢が道中にて詠んだ詩をいくつか取り上げてみたい。次にあげる詩は、金訢が対馬豊崎郡の西泊にて詠んだものである。

尼神都麻里浦にて風に<sup>はば</sup>阻まる 浦は対馬島に在り（【6】）  
 颶<sup>くわい</sup>颶<sup>ひと</sup>は偏<sup>ひと</sup>えに客を留め 舟<sup>ふね</sup>を維<sup>つな</sup>ぎて意<sup>こころ</sup>迷<sup>まよ</sup>わんと欲す  
 孤臣は滄海の外 故国は夕陽の西<sup>にしのかた</sup>にあり  
 地は<sup>か</sup>坼<sup>は</sup>けて東<sup>とう</sup>維<sup>い</sup>に闊<sup>ひろ</sup>く 天は垂<sup>た</sup>れて四面に低し  
 此の間奇絶の処なれば 醯<sup>けいけい</sup>鶏<sup>けい</sup>を与<sup>けい</sup>説<sup>けい</sup>し難し

先述したように、通信使一行が知世浦を発して対馬の佐須奈に着いたのは6月7日であり、丁度台風シーズンに遭遇したらしい。詞書にもある通り、金訢たちは大風のため西泊で足止めされた模様である。初めて目の当たりにした異国、しかも「滄海の外」にある孤島・対馬に到って、早くも故国を思う心細さが、この詩から滲み出ているようである。

金訢一行は、対馬の東海岸の浦々を経由して、島主の居す府中を目指して南下したのであろう。次の詩は、対

馬中部に位置する小船越にて詠み、同行者の趙之瑞に与えた作品である。

訓羅串<sup>ふなこし</sup>に在りて趙伯符<sup>せうはくふ</sup>に示す（【8】①）

独り酌<sup>しやく</sup>して憂物を忘れ 頽然と蓬底に迷う  
胸中に八九を呑み 眼底は東西を混ず  
水は関山を隔つこと杳く 雲は島嶼と和して低る  
君に約す故国に還り 邀<sup>よう</sup>遊<sup>ぎ</sup>して黄鷄を殺すを

小船越は、浅茅湾航路と東海岸航路を結ぶ交通の要衝であり、多数の船が行き交って殷賑を極めた港湾であった。「水は関山を隔つこと杳く」という句は、小船越の土地柄を上手く描写している。しかしそうした光景も、金訢の心を慰めるには足らぬのか、ひとり酒を飲んで旅愁を晴らしていたようである。

旅中のつれづれをかこつ一方、金訢は李季全の詩を次韻して、趙之瑞を揶揄するような戯れ歌を詠んでいる。

子俊の韻に次し、戯れに伯符に呈す（【11】②）

愁<sup>うれい</sup>来たれば一夕も当たるを禁じず  
新月<sup>たつき</sup>唯だ応に両郷を照らすべし  
歌舞千場 供するに侠少なり  
任<sup>さもあらばあれ</sup>他 羈客<sup>おの</sup>自ずから悲傷す

自註、岐城〔\*巨濟〕の妓、名は新月、伯符甚だ寵す。

第二句の「新月になれば月光が朝鮮と対馬の両方を照らすこととなろう」と詠まれた「新月」とは、月の新月（8月15日の十五夜の月か）と、新月という名の妓生を懸けたものである。注記にもある通り、この「新月」は巨濟島の妓生で、趙之瑞の熱愛を受けていたようである。恐らく彼女は、一行の知世浦出帆の時に、慰労のため、あでやかな舞を披露したのであろう。しかし異郷の旅客となった現在においては、彼女の歌舞を見ることもあたわず、ただ「自ずから悲傷」するのみであった。

旅中において金訢は、旅の愁いのみならず、彼より前に日本の地を踏んだ大先輩たちの業績に対しても、強く意識していたようである。

八月十二日夜、林亭に散歩すの口號、叔度に示す

（【12】①）

帆を扶桑の一問津に掛け  
多情唯だ月の人に随う有り  
行吟<sup>こうぎん</sup>すれば恰<sup>あたか</sup>も風の面<sup>おもて</sup>に吹くを受け  
散歩すれば従<sup>あとも</sup>り露をして巾を墊らしむ  
華国の文章は多く鄭に謝し  
濟時の勲業は已に申に輪す  
往来屑屑として何事か成さん  
羸<sup>か</sup>得たり 秋光<sup>あき</sup>鬢<sup>びん</sup>に入りて新たなり

鄭文忠夢周・申文忠叔舟、俱に日本に使用す。故に云えり。

第五句の「国威を高めた文章の多くは鄭氏の御陰であり」の「鄭」とは鄭夢周（1337～92）を、第六句の「時世を救った勲業はすでに申氏が勝ち得ている」の「申」とは申叔舟（1417～75）を指す。鄭夢周は1377年の報聘使正使として、申叔舟は1443年の通信使書狀官として、いずれも来日した経験があった。金訢は、彼らの功績の大きさを讃える一方、「道中の忙事にかまけて、一体自分は何を成し遂げることができよう」と、詠嘆していることが読みとれる。

本国から帰還命令を受けた金訢一行は、府中の外港である久田を出帆して北上するが、帰帆時も台風に遭遇したようで、乗船を破損しながら8月23日に南室へ避難した【14】。南室出港後の帰路の途上、小船越の梅林寺を遊覧した際に詠んだと思われる句が一首ある。

梅林寺に遊ぶの次韻（【16】）

間<sup>しず</sup>かに木上座<sup>ぼくじょうざ</sup>を携え 重ねて波羅門<sup>ばらもん</sup>を訪<sup>おも</sup>う  
竹<sup>はと</sup>は<sup>ばし</sup>新<sup>しん</sup>籜<sup>たく</sup>を添え 潮は生じて旧痕<sup>みなぎ</sup>を漲らす  
雲霞は仏殿<sup>ぶつだん</sup>を蔵し 煙火は漁村を隔つ  
暫く蒲団<sup>しょうぜん</sup>を借りて臥せば 蕭然として濁昏を洗えり

上記の詩は、金訢が杖（木上座）を衝きながら梅林寺を来訪し、住僧（波羅門）を訪問したという設定である。「重訪」とあるところから、往路においても彼の住僧のもとを訪れたのであろうか。寺域に竹林が生い茂っている有様や、「雲は仏殿を覆い、煙火が漁村に立つ」という対比描写は、いかにも美しい。

この後、金訢らは対馬の北端<sup>わにうら</sup>鰐浦に至るが、ここで思わぬ悲報に接し、哀悼の詩を作ることとなる。



正使を哭す 九月初五日、完子羅浦に在して訃を聞く。

正使は疾に因り先に還るも道に卒す。(【23】)

碧天 際無く暮雲の愁  
 衰草 蕭蕭として水国の秋  
 客子 長吟するも正に奈ともする無く  
 此の時 凶訃 孤舟に到る

正使の李亨元は、対馬で発病して金訢らに先だって本国へ帰還していた。彼が客死した地は巨濟島であるため、その訃報が9月5日に鰐浦へ届いたことを勘案すれば、恐らく9月初旬に病没したのであろう。

李亨元の訃報に接した後も、金訢らは対馬に滞在し、9月9日の重陽節を迎えた。菊の節句である。この日は高い丘に登って菊酒を呑むのが習わしであるが、金訢も船を下りて丘に登った。

九日 舟を捨て前峯に登り、西・東萊・熊川・巨濟の諸峯を望む。歴歴数うべし。(【26】①)

愁辺奈ともする無し 菊花の枝  
 三たび清香を嗅げば一后に当たらん  
 客と作りて堪えざるまま令節に逢い  
 高きに憑れば 逾 覚ゆ 遐陲に在るを  
 蕭蕭たる草木 窮秋の後  
 渺渺たる煙波 薄暮の時  
 迢遞なり 故山登眺の処  
 遥知せり 欠我醉吟の詩を

注記の「前峯」がどの山であるか不明であるが、【26】の直前にある詩(【25】②)に、「菊花の時節、豊崎に泊す」と詠まれているところから、鰐浦近辺の山であろうか<sup>(15)</sup>。晩秋の時期に、対馬から東萊・熊川・巨濟島などの山影が眺望できたというのが本当であれば、極めて僥倖に恵まれたと言えよう。しかしそうした光景も彼の心を晴らすものにはならず、却って「遐陲(地の果て)」に居る我が身を自覚し、過飲にまかせて酔いつぶれたようである。先述した通り、彼が念願の故郷帰還を果たしたのは、更に後の9月17日のことであった。

以上、対馬逗留の経路に従い、紀行詩文を鑑賞してみた。次は、対馬の風土習慣を題材として、金訢が総括的に吟じた長詩を、分割して紹介してみたいと思う。

対馬島を詠む(【17】)

跨海は有天を別ち 環島は自ずから成聚す  
 民物は漁人多く 村居は半ば塩戸なり  
 児童も亦た佩刀し 婦女は揺鱸を解る  
 茅を蔭いて陶瓦に代え 竹を刮りて弓弩を作る  
 竹籬に螃蟹を鬧がし 石田に粳稂少なし

上記は冒頭の10句分である。金訢はまず、島民の多くが漁業と製塩業に従事していることを描写し、児童すら刀を帯びて婦女が船の操縦に長けていることを述べる。また、家屋は瓦を乗せずに茅で葺かれており、竹で弓を作っていることに触れる。竹製の弓を奇異に感じたのは、朝鮮では水牛角を剥いで弓身を作るためであろう。第10句の「石がゴロゴロした痩せた田には収穫が少ない」という描写は、対馬を訪れた朝鮮官人が共通して得た印象であり、副使李季全の帰朝報告においても同様の指摘がなされている。すなわち「島内は豊作であるか」との成宗の下問に対し、李季全は「土地は痩せていて草木が密集しており、(島民は) 蕨根を採って食用にしております」と答えている<sup>(16)</sup>。

羹臠に葛根を煮 矢房に鷄羽を挿す  
 蚌蛤は糗糧を充たし 椒 芥は商賈を資く  
 艾を炷きて疾病を医し 骨を灼きて風雨を占う  
 檀施して浮屠を奉い 逋逃して祠宇に萃まる

「葛根を煮て吸い物を作る」「矢羽に鷄羽を用いた矢を矢房(えびら)に入れる」「ハマグリを食糧とし」「ハジカミを商売品とす」、以上の4句は、対馬の貧しさを印象づける句である。鷹の羽でなく、鷄の羽を代用した矢羽は、金訢の目から見ていかに貧弱に映ったことであろう。また「骨を焼いて風雨を占う」というのは、豆豉の亀卜神事を指すのであろうか。さらに「供物を献じて浮屠(仏教)を敬う」島民の姿は、朱子学を奉じる朝鮮官人から見れば異端の偶像崇拜に映ったであろうし、「刑罰を逃れるため祠に集まる」というアジール慣行は一恐らく豆豉の天道山信仰を指しているのであろうが<sup>(17)</sup>、金訢の理解の域を超えた奇風に受け取られたであろう。

はきもの 履を脱ぎて長を敬うを知るも  
 しきもの 席を同じうして父を避けず  
 ついけい 椎髻して齒に 染 多く 合掌して背は微かに偏む  
 がいさい 睡眈して忿狼を生じ 慄悍にして軽がるしく殺掠す  
 ものの 語を発して母嘸嘸といい 相力めて喜び躍躍す

上記は対馬島民の仕草を評した部分である。始めの2句は、「目上の人間を敬う慣行はあるようだが、父と同席して平然とする有様はどうしたことか」という意味合いであろう。「髪を一房垂らしてお齒黒をしている」という句は、成人女性の姿を描写したもので、ここでいう「椎髻」とは髻を指すのであろう。李季全の復命のなかに「(倭女は) 多く髻を用います。その大きさは(まるで) 脚のようです」<sup>(18)</sup>と述べている。また「目を怒らして憤激し」「すばしっこくて簡単に殺人し」「口を開けば『ものの、ものの』と言いまくり」「やたらと飛び跳ねながら歓喜する」、という仕草の描写は特に面白い。このうち『ものの』なる言葉については、後注に「倭訓「母嘸嘸」は発語の辞なり。躍躍して力声に用う」と説明がなされ、日本人が感激興奮した時に用いる発音を写したもののらしい。

酬酢すれば異礼を嗤い 杯盤すれば詭作に驚く  
 山肴に橘柚を堆み 海錯に蛟鰐を斫る  
 醉舌は鳥の南喃たり 歌吹は蛙の閣閣たり  
 身に縋いて白刃を舞い 面を仮りて彩幘に出づ  
 主人は殊に繡縵なれば 旅客は頗る歓譔す

上記の部分は、あるいは島主宗貞国の館における接待の状況を描写したものであろうか。金訢の目には、酒を酌み交わしても、料理を供されても、異様な作法、偽りごとに見えたようだ。というのも、酒に酔った対馬人の言葉は、鳥のさえずりのように意味不明で、謡曲をうなればカエルの合唱のように思えたからである。そしてやおら剣を持って舞うかと思えば、仮面を被って幕間から登場する、とあるが、これは恐らく猿楽を催したことを指すのであろう。「(宴席の) 主人は厚いもてなしを施し」「(我ら) 客の側もすこぶる喜び戯れる」と続くが、本音ではいささか辟易としていたことは、締めめの句に以下の如く吐露している。

遠遊 蔗を啖うが如く 風味 甜苦を雑う  
 行け 早く帰来せん 信美 我土に非ざればなり

「(このたびの) 遠遊はサトウキビを食んだようで、甘みと苦みが相こもごもであった。ああ早く故郷に帰ろう。(この島の人間が持つ) 信美の感覚は、我が国とは異なっているのだから…」この詩もやはり、帰去来の思いをもって終結しているのであった。

対馬における金訢の詩は、旅中の憂鬱を吟じたものがほとんどで、対馬の風光そのものを題材としたものは少ない。特に対馬の社会風俗を詠み込んだ作品は、【17】が唯一であると言ってよい。しかし【17】の詩は、やや固定観念化した対馬観を基盤としている傾向があるものの、彼の心中に映った対馬の社会像を巧みに詠み込んだ作品として、非常に興味深いものがある。

### 3 「遣行」について

さて「扶桑紀行録」を通読して不審に思うことは、金訢の府中滞在を明記した記述が全く欠けていることである。ところが『顔楽堂集』巻3所収の「年譜」【28】には、彼が府中に到着した年月等が記され、巻4の「遣行」【29】には、その府中滞在中の言動が詳しく記されている。そして「遣行」の本文中には、典拠として「扶桑録に出ず」との注記が施されているが(【29】⑧)、現在の「扶桑紀行録」には、それに該当する記述を見出すことができない。これらを総合して勘案すれば、『顔楽堂集』巻1所収の「扶桑紀行録」以外に、金訢が道中でしたた生の紀行録(「原扶桑紀行録」)が別途存在し、金安老が父の文集を編纂する過程にて、「原扶桑紀行録」を節略したものが、現在ある「扶桑紀行録」なのではなかろうか。いずれにせよ、金訢の対馬における動向を知るためには、「遣行」の記述を参照することが不可欠なのである。

『顔楽堂集』巻4所収の「遣行」は、金訢の言行を再現するため、恐らく金安老が様々な史料や遺老の証言を集めて、それをもとに記述したものである。よって筆者による加工や潤色が混じっている可能性が捨て切れないが、おおよその状況を知る参考史料として取り扱えば、なおも一定の価値を有している。「遣行」のうち、1479

年次通信使に関する部分（【29】①～⑧）の一部を取り上げ、論考してみよう。

【29】①は、府中において宗貞国から通信使の航路を変更するよう勧告がなされ、その可否をめぐる紛糾した経緯を述べている。すなわち対馬から日本本土へ至る経路は、杵岐・博多を経由する「南路」と、石見へ直行する「北路」があるが、通常ルートの「南路」は海賊が横行しているため、「北路」に変更して欲しい、との要望である。換言すれば、「南路」とは瀬戸内海を経て京へ至るルートであり、「北路」は日本海を経由して京に至るルートを指している。この記述は、対馬―石見直行航路がこの時期存在していたことを明記した、数少ない証言として注目に値する<sup>(19)</sup>。もっとも対馬がこの提案を突如出したのは、通信使を本土に赴かせないための詭弁であった可能性が高い<sup>(20)</sup>。というのも、前年の1478年に、宗貞国と大内政弘との間で和議が成立し、少なくとも対馬―博多ルートは安全が保たれていたからである。①の注記にも「北路難険にして昔より通じず。我が国使价みな南より達す。島人詭言、故にこれを詰す」と記されており、通信使側も貞国の真意を疑っていた。また、「南路」の経由地を支配する諸大名への贈呈品をあらかじめ携行した通信使にとっては、安易に経路を変えれば国命違反になる恐れがあり、了承し難い勧告であった。結局、正使発病の報を受けた朝廷から本国帰還命令が出されて、「北路」による日本本土渡航は実現せずにすんだ。なお帰還命令に接した通信使団員は、喜びの余り雷鳴の如き歓声を発したという。

【29】②には、通信使の従者が対馬の女性と密通した事件が記されている。金訢はこの従者を杖罪に処したところ、島民が集まって見物し、「（この男は）わざわざ遠方からやって来たのだから、ここまですることは無いでしょう」と口々に述べたという。それに対して金訢は、「（かかる）いたずら事は私が処罰しなければならぬ」と返答し、厳罰を施すことによって再犯を防いだとある。仮にこの女性が港町の遊女だとすれば、朝鮮側官人がどうしてそこまで目くじらを立てるのか、対馬の人間には理解できなかったであろう。

【29】⑦の注記によれば、金訢の同行者である曹伸も、道中の見聞をしたためていたようである。残念ながらこの見聞録を収録した史料は、現在伝わっていない。

【29】⑧には、対馬島人が抱いた金訢の印象が記されている。すなわち金訢の挙措嚴重なる有様を見た島民が、「朝鮮が我が島を攻略する議があれば、必ず重臣を遣わして情勢を探ると聞いている。書状官がどうして低い官職であろうか。貴殿は必ずや（密命を）帯びているに違いない。我々を欺くつもりか」と述べたという。ここから通信使の来訪が対馬では余り歓迎されていないこと、あまつさえ情勢探査の密命を帯びて来ているのではないかと大いに疑われていたことが、読みとれる。

なお通信使の対馬滞在中、通交者に対する朝鮮側の対応に抗議する者がいたようで、副使李季全は、帰国後、左馬大夫なる人物の発言を朝廷に報告している。それによれば、左馬大夫は「貴国の老臣は、我が島を厚遇すべきである（と考えているが）、若手の連中〔\*「新進之徒」〕は『日本の有象無象の連中は恐れるに足りぬ。どうして通好する必要があるか』などと申し立てているという。この発言は本当か。我が島の不逞の輩は、この発言を信じて惑わされている。……もしもこうした（発言が）止まず、貴国の若手の連中の意見を、（国王）殿下がお聞き入れになるのであれば、我が島の不逞（の輩による）所業は、島主でも禁じることができませぬぞ」<sup>(21)</sup>と、やや脅迫めいた抗議をしたという。恐らく対馬側では、この通信使の本土派遣を契機に、朝鮮側が通交権益の整理削減に着手するのではないかという危惧を感じて、必要以上に警戒していたのであろう。

## むすびにかえて

1479年次通信使は、日本の玄関口をわずかに覗くに留まったまま、本国へ帰還した。もしこの使行が、日本本土にまで遂行されれば、金訢の「扶桑紀行録」は単なる対馬紀行録に留まらず、応仁の乱後の日本国内状況を生々しく語った超一級の史料となったことであろう。それを思うと、使行の中断は返す返すも残念でならない。もっとも本土渡航が決行されれば、想像を絶する苦難の旅路となり、最悪の場合は団員の大半が異邦の土（ないしは魚肉）と化したことであろう。しかし万が一、彼らが無事に京にたどり着いて帰国する僥倖に恵まれた場合は、以後の日朝通交を大きく変える契機を与えた可能性が高い。というのも、当時、対馬を初めとする朝鮮通交者によって営々と築かれつつあった偽使派遣<sup>(22)</sup>のカラクリ



が、通信使の本土踏査を通じて暴露されたかもしれないためである。そうした偽りの日本像を保持するためにも、対馬は通信使の使行遂行を陰に陽に妨害し、結局それが成功を収めたのが、この1479年次通信使の中途帰国なのであった。偽使派遣勢力によって朝鮮向けに描き出された架空の通交者像が、全て虚妄であったことが判明するのは、金訢らが対馬から引き返してから実に百年後、1590年に通信使が京に達した時であった。

金訢が、もしもこのとき本土の実情を見聞していたならば、果たしてどのような紀行録をしたためのことであろうか。

## 注

- (1) 関周一「朝鮮王朝官人の日本観察」(『歴史評論』592。1999年)
- (2) 村井章介『東アジア往還』(朝日新聞社。1995年) 137～148頁、米谷均「史料紹介 東大史料編纂所架蔵『日本関係朝鮮史料』」(『古文書研究』48。1998年)
- (3) 村井章介校注『老松堂日本行録』(岩波文庫。1987年)。
- (4) 『顔樂堂集』は、金訢の死後、子の金安老によって家蔵の草稿をもとに編纂され、1516年に権五紀によって慶尚道栄川で木版刊行された。本稿では、上記の初刊本の影印を収めた『影印標点 韓国文集叢刊』15(韓国、民族文化推進会)のテキストを用いる。
- (5) 『顔樂堂集』巻3「年譜」。
- (6) 以下、1479年次通信使に関しては、三宅英利『近世日朝関係史の研究』(文献出版。1986年) 109～116頁を参照。
- (7) 『成宗実録』巻103、成宗10年4月丁亥条・庚寅条。
- (8) 『成宗実録』巻106、成宗10年7月戊辰条。
- (9) 『成宗実録』巻106、成宗10年7月己巳条。
- (10) 『成宗実録』巻106、成宗10年7月己卯条。
- (11) 『成宗実録』巻108、成宗10年9月乙丑条。
- (12) 『成宗実録』巻109、成宗10年10月丁酉条。金訢は「臣等我が土に還泊の日、三浦倭人皆な出迎す。釜山節制使は則ち曾て出見せず。臣等の来去を知らざるに似たり」と、苦情を込めた復命をしている。また10月28日の成宗夕講においても、「臣、日本に往く時、船隻牢実なるもの蓋し寡し。是れ国家昇平の致す所に扭れ、不虞有るが如し。将に何ぞ以てこれを用いん」と、苦言を呈している。同月庚戌条。
- (13) 当時「叔度」の字を持つ人物としては李則がいるが、この人物は1475年に計画された通信使副使に任命された後、病気を理由に辞退してしまい、かつ上記の使行自体が中止となったため、1479年次使節の団員となった可能性は低い。いっぽう金宗直が曹伸に与えた送別詩(『佔畢齋集』詩集巻14「送曹伸得本字」)には「叔度吾娣弟」とあり、実際

に金宗直の妻は曹伸の姉妹であったことを考慮すれば、この「叔度」は曹伸を指すこととなる。また【29】を見る限り、金訢と道中最も親しくしているのは曹伸であるため、「扶桑紀行録」に見える「叔度」も曹伸と考えるのが一番自然である。ただし曹伸の字は「叔度」ではなく「叔奮」であるため、この「叔度」を曹伸であると確定するには、なおも検討を要する。

- (14) この当時の対馬の外交僧に関しては、伊藤幸司「中世後期における対馬宗氏の外交僧」(『年報 朝鮮学』8。2002年)を参照されたい。
- (15) あるいは鰐浦後方にある高麗山であろうか。
- (16) 注(12)史料。このころ対馬を来訪した朝鮮官人の対馬観については、佐伯弘次「国境の中世交渉史」(宮田登代表『玄界灘の島々』小学館。1990年) 262～267頁、ならびに注(1) 関論文を参照されたい。
- (17) 申叔舟『海東諸国記』に「南北に高山有り。皆な天神と名づく。……罪人神堂に走入すれば則ち亦敢て追捕せず」とある。田中健夫訳注本(岩波文庫。1991年) 195頁
- (18) 注(12)史料。
- (19) なお1476年に対馬を訪れた宣慰使の金自貞は、同地で会った三浦郎太郎なる老岐の受職人から、〈老岐一若狭一今津一坂本一京〉の日本海・琵琶湖ルートを紹介されている(『成宗実録』巻69、成宗7年7月丁卯条)。対馬一石見ルートに関しては、関周一「十五世紀における山陰地方と朝鮮の交流一石見国周布氏一」(『史境』20。1990年)を参照されよ。
- (20) 橋本雄「中世日朝関係における王城大臣使の偽使問題」(『史学雑誌』106-2。1997年) 68頁。
- (21) 『成宗実録』巻109、成宗10年10月己酉条。
- (22) 長節子『中世国境海域の倭と朝鮮』(吉川弘文館。2002年) 278～300頁によれば、対馬による深処倭(島外通交者)名義の朝鮮通交権の入手は、宗成職・貞国の時期に進行したという。

\*\*\*\*\*

## 「扶桑紀行録」原文

〔典拠〕金訢『顔樂堂集』巻1所収。

〔凡例〕地名・人名等には傍線を施し、必要に応じて注釈〔\*〕を付した。また原文割注箇所は、小文字をもって表示した。

【1】己亥四月十八日、到咸陽、留別克己(\*俞好仁)文、兼東館中諸友 以下出扶桑紀行録

①浮査方丈三韓外、繫馬扶桑太古枝、畢竟茲遊最奇絶、人生到此是男兒、

②五更孤枕酒初醒、耿耿殘燈一點明、夢裏不知身已遠、

清遊多是在蓬瀛、

- ③要看咸池浴日輪、揮鞭上馬別佳人、丈夫行止非無意、  
兒女徒勞挽袖頻、

- ④管弦聲急日偏遲、玉手傳杯百不辭、寄語館中年少者、  
此行須及未衰時、

【2】奉寄家兄〔\*金鑑力〕

- ①此身許國即忘家、縹緲鵲原望眼除、等閒遊遍湖南路、  
辜負春風棣萼華、

- ②孤館夢初驚、殘燈滅又明、丈夫四方志、不獨為功名、

【3】機張路上口号

竹林深處獨家村、老臥衡門長子孫、應笑征夫懷靡及、  
謾勞持節向河源、

【4】熊川偶吟

千里行裝酒一卮、旅愁鄉思入支頤、等閒應被江山笑、  
踰嶺而南無一詩、

【5】次安監司韻

客中偏覺物華催、照眼榴花一半開、羈愁我自都忘了、  
苦被笛聲吹出來、

【6】尼神都麻里浦〔\*西泊〕阻風 浦在對馬島

颼颼偏留客、維舟意欲迷、孤臣滄海外、故國夕陽西、  
地坼東維闊、天垂四面低、此間奇絕處、難與說醯鷄、

【7】復用前韻口号

- ①舟楫濟川器、烈風行不迷、望高瞻斗北、勇絕冠山西、  
浪似新詩湧、潮迎強弩低、羣雄盡龍虎、誰敢効鳴鷄、

- ②興本憑詩遣、詩成興轉迷、寄身滄海上、回首白雲西、  
潮帶晚風急、山啣殘照低、舟人偏尚鬼、蕭鼓賽豚鷄、

【8】在訓羅串〔\*船越〕示趙伯符〔\*趙之瑞〕

- ①獨酌忘憂物、頽然蓬底迷、胸中吞八九、眼底混東西、  
水隔關山杳、雲和島嶼低、約君還故國、邀迓殺黃鷄、

- ②我本龍鍾甚、煩君為指迷、風生孤島外、雲逗故國西、  
勲業何嫌晚、才名不厭低、典衣聊復樂、酩酊到晨鷄、

- ③夢繞丹墀下、分明路不迷、翠華雙闕北、銀燭五門西、  
鍾鼓春風轉、旌旗曉月低、欠伸却非是、恨殺一聲鷄、

【9】舟中夜雨、次叔度〔\*曹仲力〕韻

- ①蕭蕭浙浙夜深聽、亂打蓬窗點滴聲、獨掩塵編愁不寐、  
孤燈影裏旅魂驚、

- ②獨倚孤蓬歷歷聽、和風蕭颯作秋聲、遙知今夜空閨裏、  
滴破佳人夢自驚、

【10】變體效梅聖俞、七月十八日夜、舟中作

節序易晚晚、七月月既望、夜久獨不寐、颼起較健壯、

怒浪四面湧、迫隘宇宙妨、造物似戲劇、少頃異候狀、  
萬頃復鏡靜、月影忽澗灤、俯仰共一色、徹下復徹上、  
我本倜儻者、夙志始一償、嘯傲擊桂楫、逸興頗跌宕、  
莽蒼碧海外、付我自主張、若木若固畔、一葦亦可抗、  
局促赤壁賦、未免在囊盎、

【11】次子俊〔\*李季全〕韻、戲呈伯符〔\*趙之瑞〕

- ①筆掃千人孰敢當、飄飄逸氣蓋蠻鄉、枉將大手裁長句、  
寄與佳人空白傷、

- ②愁來一夕不禁當、新月唯應照兩鄉、歌舞千場供俠少、  
任他羈客自悲傷、自註、岐城妓、名新月、伯符甚寵、

- ③脫憤狂吟肩聳山、文章曹植富波瀾、搖毫擲簡誰能供、  
百賦千篇不澁艱、

- ④世途險巇千仞山、宦海狂奔萬丈瀾、回首東溟平似拭、  
憑君莫賦行路難、

【12】八月十二日夜、散步林亭口号、示叔度〔\*曹仲力〕

- ①帆挂扶桑一問津、多情唯有月隨人、行吟恰受風吹面、  
散步從教露墊巾、華國文章多謝鄭、濟時勲業已輸申、  
往來屑屑成何事、贏得秋光入鬢新、鄭文忠夢周・申文忠叔  
舟、俱使日本、故云、

- ②渺渺煙波不見津、是間始可着騷人、千山月照初聞笛、  
萬里風來方岸巾、意適真成遊廣漠、居間聊復學天申、  
故人刮目應相待、須信先生眼界新、

【13】次子俊〔\*李季全〕韻

鯨海千層浪、龍驤萬斛船、共看天遠大、幾見月連娟、  
揮塵瀾翻口、垂珠山聳肩、知君棟梁具、構廈豈容捐、

【14】發久多浦〔\*久田浦〕、遇大風雨、檣傾楫摧、幾不測、間關泊那無賴浦〔\*南室浦〕、宿僧舍、八月二十三日、

舟中宿客夜獨興、星月掩映雲峻嶒、五更風色漸晦冥、  
八月瘴氣猶鬱蒸、船開棹進出浦口、波濤四面初生稜、  
天吳紫鳳來翻騰、魚龍噴薄更憑陵、颼轟轟挾雨師、  
張皇聲勢相因仍、三山貝鼎駕巨鯨、萬里扶搖搏大鵬、  
有如武安屋瓦振、又似昆陽虎豹騰、周郎列炬焚赤壁、  
凶奴萬騎圍白登、却憂飄動地軸折、直恐軒簸天維崩、  
風檣欹倒猶力爭、千指紛紛將何能、性命咫尺輕鴻毛、  
身世漂浮危九層、天公薄相豈起予、艱難險阻要折肱、  
恨我見道苦遲暮、安危憂樂翻相乘、十生九死傍前岸、  
繫纜絕磴纔可憑、夜投佛舍如鷄棲、博山一炷香煙凝、  
問津四海滔滔者、漸愧安閑物外僧、更深相對如夢寐、  
茅茨明滅搖青燈、題詩三嘆記茲遊、無忘在莒嘗服膺、

【15】次叔度〔\*曹仲力〕韻

曉天抹漆忽異色、舟中之人鼻下黑、頑雲蔽空雨紛霏、疾風怒號卷海吹、蒿師平昔若履地、此日倉卒翻憂疑、波浪四立蕩驚極、三十六策無一得、鴻毛性命真咫尺、造物猜人不吝惜、平生壯志久自許、忠義佩服前脩語、陽候一努不足驚、濟川之材試此舉、晚泊沙汀幸無事、買魚前村會邾莒、夜借僧床一燈明、茶鐺時作松風聲、辛苦得此足歡喜、時拈秃筆字欹傾、

【16】遊梅林寺次韻

間携木上座、重訪波羅門、竹迸添新籜、潮生漲舊痕、雲霞藏佛殿、煙火隔漁村、暫借蒲團臥、蕭然洗濁昏、

【17】詠對馬島

跨海別有天、環島自成聚、民物多漁人、村居半塩戶、兒童亦佩刀、婦女解搖鱸、蔭茅代陶瓦、剖竹作弓弩、竹籬開螃蟹、石田少稂稂、羹臠煮葛根、矢房挿鷄羽、蚌蛤充糗糧、椒苴資商賈、炷艾醫疾病、灼骨占風雨、檀施奉浮屠、逋逃萃祠宇、脫履知敬長、同席不避父、椎髻齒多染、合掌背微偃、睚眦生忿狼、慄慄輕殺掠、發語母嘍嘍、相力喜躍躍、酬酢嗤異禮、杯盤驚詭作、山肴堆橘柚、海錯斫蛟鰐、醉舌鳥南喃、歌吹蛙閣閣、縈身舞白刃、假面出彩幘、主人殊縫紉、旅客頗歡譁、遠遊如啖蔗、風味雜甜苦、行矣早歸來、信美非我土、倭訓母嘍嘍、發語辭、躍躍用力聲、

【18】次玉如〔\*李璣全〕韻、贈朴經歷宗元

孤舟駕長風、萬里客殊邦、胷中不平處、磊砢何由降、白鷗似相欺、時有飛來雙、典衣買村酒、共酌堆甕缸、我輩豈匏瓜、一笑倚蓬窗、

【19】舟中夜坐 泊時古里浦〔\*泉浦〕

- ①秋到天涯分外愁、西風無賴帶孤舟、魂驚易破還家夢、不管濤聲來枕頭、
- ②一天秋色海迢迢、萬里歸心遂去潮、半夜西風吹客老、韶顏明日定全消、
- ③獨揭孤蓬枕不安、西風一夕晚潮寒、海天秋色尋無處、却向潘郎鬢上看、

【20】次叔度〔\*曹仲力〕韻

- ①蝶夢遽遽輒自驚、海濤吹枕殷雷聲、倚蓬覓句支頤處、也是丹青畫不成、
- ②少年奇志寄天游、老去無成恐謬悠、可是此行不牢落、龍驤萬斛駕鰲頭、
- ③日射蓬窗潑眼明、芋魁初熟薦香羹、秋風攬我催新句、

隔岸漁歌時一聲、

【21】沙汀晚步二首、具君詮求詩、書以與之

- ①鏡面微風漾碧漪、自撐短艇出尋詩、釣魚人去孤村晚、時見白煙橫竹籬、
- ②徐步芳洲倚短筇、碧波潏潏蘸晴峰、傍山喬木藏村塢、閃閃寒鴉帶晚春、

【22】復用前韻

- ①小村脩竹浸清漪、寒碧交加自要詩、剩買濁醪拚一醉、菊花佳興迫東籬、
- ②盡收東海入吟筇、思在蓬萊第幾峰、一洗軟紅塵土迹、臥聞鯨浪日相春、

【23】哭正使〔\*李亨元〕 九月初五日、在完于羅浦〔\*鰐浦〕、聞訃、正使因疾先還、道卒

碧天無際暮雲愁、衰草蕭蕭水國秋、客子長吟正無奈、此時凶訃到孤舟、

【24】即時

獨立西風首重回、飄零又見菊花開、地饒炎瘴霜全薄、天入滄溟鴈不來、萬里光陰歸兩鬢、十年心事到三盃、不須苦道留連惡、多少新詩取次裁、

【25】又

- ①天寒萬里歷嶠崎、風打船頭却倒吹、海闊莫能窮世界、不知此外幾須彌、
- ②菊花時節泊豐崎、不奈西風破帽吹、思鄉莫作登高望、望極還應意益彌、

【26】九日 舍舟登前峯、西望東萊・熊川・巨濟諸峯、歷歷可數

- ①愁邊無奈菊花枝、三嗅清香當一卮、作客不堪逢令節、憑高逾覺在遐陲、蕭蕭草木窮秋後、渺渺煙波薄暮時、迢遞故山登眺處、遙知欠我醉吟詩、
- ②試登絕頂作重陽、旋買前村濁酒觴、佳節偏驚孤客意、寒花只作故園香、明年何處逢今夕、此日扁舟滯異鄉、不見長安渾欲老、孤雲落照共蒼茫、
- ③旅懷悽斷更西風、把酒休辭盞底空、留滯頻驚鄉國異、招邀猶喜歲時同、一年秋色寒花裏、千里容華曉鏡中、獨倚枯筇無限恨、滄波老木海天東、
- ④扶藜獨上最高峯、金藥多情不負儂、獨酒三杯浮潏潏、高歌一曲唱玲瓏、羈懷併作秋客淡、鄉思都隨醉眼濃、粗報國恩便歸去、故山何日著疎慵、
- ⑤萬里崎嶇已飽更、登高更覺膽崢嶸、清秋只為黃花地、遠客空添白髮莖、報答年華詩有債、破除愁思酒為兵、故山可望腸還斷、却付孤雲寄遠情、



## 【27】跋扶桑紀行録後

①余〔\*金宗直〕嘗讀園隱〔\*鄭夢周〕霸家臺〔\*博多〕之詩、以為斯作不過記風土、叙陰晴而已、其志節恢恢落落、有非恒人所易窺測、然而他日經綸之業、亦因是以求其彷彿、噫達可〔\*鄭夢周〕誠天下之士也、今觀吾友君節氏〔\*金訢〕對馬諸作、夫豈多讓於彼哉、其在舟中也、波濤崩蹙、舟航傾側、跼於危急者不一再、而泊然嘯咏、若據枯梧於明窓之下、其胸中烏可量已、達可〔\*鄭夢周〕之後、吾見是人矣、

季昱〔\*金宗直〕題

②君節〔\*金訢〕之作、精白似其心、典雅似其面、蘊藉似其言、豪俊似其氣、雖難置羣帙中、使僕記認、百不失一、或使不識其面者讀之、亦可以想像其風致矣、惜也、對馬島中、未嘗有一具眼者從而唱酬、以盡君節〔\*金訢〕之癢也、其不為按劍相視也、亦幸矣、

士廉〔\*金克儉〕

## 参考史料原文（その1）

## 【28】（『顔樂堂集』卷3所収「年譜」）

成化十五年己亥〔\*1479年〕四月、國家通信日本、以副提學李亨元為使、行大護軍李季全為副、差公〔\*金訢〕書狀官以遣、六月初七日黎明、發船于巨濟縣知世浦、日吳、泊對馬州沙愁羅浦〔\*佐須奈〕、十八日、抵古于〔\*国府〕古于、即島主所居也、上个〔\*李亨元〕疾作、不能行、書聞、命還、九月十七日、還泊東萊縣釜山浦、使還、命陞級、冬、加奉直、

## 参考史料原文（その2）

## 【29】（『顔樂堂集』卷4所収「遺行」）

①國家通信日本、為使者、皆憂危欲免、臨發、書狀官有故、薦公〔\*金訢〕以代、公欣然就道、略無難色、至對馬島、宣旨既、將啓棹、島主〔\*宗貞國〕難之曰「自島抵本國、有兩路、北路越海十餘日、直泊石見州在日本北、南路渡一岐〔\*壹岐〕・博多二海、又沿海三十餘日而至焉、今使臣之行、弊島為之嚮導、由北則往返便速、由南則必淹數月、非徒島貧行齎之難、海寇充斥、固不可達」、論詰未已、北路難險、自昔不通、我國使价、皆由南達、島人詭言、故詰之、於是一行聚議、趙之瑞以從事官赴焉等曰「南路賊熾、豈可達耶」、公曰「由北乎」、曰「連天大洋、浹旬浮海、自前不由之路、今豈可輕冒其

險」、公笑曰「然則南北皆難、欲止此行乎、況南路所歷、皆有書幣、烏得擅達」、公獨確執、議遂定已、而使〔\*李亨元〕疾革、不能行、將書稟、皆欲以道梗為辭、公曰「諉以浪語、奉命不達、豈使節乎、即草奏、但言使病、待朝命、當從南道」云云、一行皆曰「稟辭如此、必易他使、吾儕此行、難乎免乎」、及命還書至、一行驚躍、喜聲如雷、公獨怡然、謂曹伸曰「與爾誦蘇詩未了、可恨」、初留島中、約與伸誦東坡日三十紙、伸誦、則公背之、公所誦、亦令伸背、故云、

②在島、伸〔\*曹伸〕中喝幾殆、公〔\*金訢〕親為調藥、伸起戲曰「伸若不幸、公如何」、公曰「予亦無如之何、但為汝一哭奠耳」、船卒有溺死者、公親作文祭之、又有僮從、通倭女、公覺之、命杖、島夷環視如牆、皆曰「方臨遠程、何必乃爾」、公曰「奸由我不戢、何以今後」、公撫視同行、下至輿卒、一以誠惻、逮有犯、不貳類此、

③公〔\*金訢〕初在巨濟縣、家奴還京宅、作書付之、且勅奴曰「我來似聞祈禱、歸語爾主、以我行遠、乃違吾教耶、婢輩有是、宜禁絕之」、丁寧戒囑、

④舟還、西風峭緊、中道遇風、而返者屢矣、或船觸于碇、或櫓帆飄斷、每至危殆、舟人無不失氣顛仆、公〔\*金訢〕獨整襟端坐、了無色動、每夕維舟、輒呼伸坐柁樓、張燈讀書、夜至分酌、罷七八觥、乃寢以為常、

⑤自馬島回、佔畢齋〔\*金宗直〕為善州、傾意待公〔\*金訢〕令伸〔\*曹伸〕侑酒、苛勸至醉、佔畢齋笑曰「汝今至京、望君節〔\*金訢〕於玉堂、如在天上、纔同險苦、有此款狎」、公平居、靜默端嚴、如不可干、遇酒所、笑語歡然、和氣霽如、

⑥成化年間、山谷集不多見、秘府有一本、公〔\*金訢〕出一卷、傳抄書既、又出一卷、患註繁費力、令伸〔\*曹伸〕刪其易知、公又鑿括、倩一時名書、遂成一帙、令在家藏、

⑦成廟〔\*成宗〕病山谷詩多難辭、命公〔\*金訢〕譯以諺註、俾學者易曉、公在讀書堂、精究入解、功將就、因事不果訖、自國家通信、至此數事、得之於司譯院正曹伸、孤之編此、以曹嘗從先府君〔\*金訢〕甚熟、且隨日本之行、訪其所耳目者、曹略錄還如右、且復以書曰「伸陪侍先公〔\*金訢〕、仰聞警效最久、而歲遠多忘、追記所錄、不切於事、事雖不切、槩可見公之一端矣」云云、

⑧島夷見公〔\*金訢〕容止端凝嚴重、相謂曰「似聞朝鮮將有兵我之議、必遣重臣、以覘虛實、書狀官豈在下僚者、是必貴官今帶、烏居下、誑我也」、出扶桑錄

# 中世対馬の課役と所領

関 周 一

## はじめに

玄界灘に浮かぶ対馬は、朝鮮との国境に位置する。日本の畿内からみれば、辺境に位置づけられるが、対馬島民は、朝鮮半島や半島南部の多島海までを行動範囲にしていた。また対馬島の約9割は山林が占めていて平地が少なく、海岸線は急峻な山々がそそり立っているという特性も持っている。

本章は、中世の対馬の特質を、課役と所領の上から概観しようとするものである。対馬には荘園は成立していない。だが中世文書をみていくと、課役や所領表記などに、荘園公領制の影響を見出すことができる。本章では、まず朝鮮王朝からみた対馬のイメージを述べた上で、宗氏と家臣（給人）との関係を示す文書を中心に検討し、課役の内容や、設定された所領の表記などを提示し、それらを通じて対馬における多様な生業の一端についても述べたい。また最後に、耕地の特色についても言及したい。

対馬の中世文書に関しては、〔豊玉町教育委員会 1995〕「解説」（小松勝助氏執筆）が、豊玉町内に現存する中世文書の様式を整理している。それによれば、(1)書下、(2)安堵状、(3)遵行状、(4)書状、(5)寄進状、(6)禁制、(7)官途状、(8)加冠状、(9)坪付、(10)売券である。ただし、例えば(3)の中に「坪付」の記載がある例があるように、複数の様式を含む文書もある。

尚、本章は、2002年11月2日に開催されたシンポジウム「対馬の歴史と民俗」における筆者の報告「中世対馬の所領表記について」の趣旨を補訂したものである。ただし、筆者は本研究の調査に参加していないので、調査の成果は本章では反映されていない。主として刊本史料を見ていく中で、気づいた点を指摘するのに留まる。そのような限界はあるものの、他の章を理解する上での一助となれば、幸いである。

## 1 対馬のイメージ

### (1)朝鮮使節の観察

中世の対馬は、どのような場として認識されていたのだろうか。朝鮮王朝の対馬に対する認識は、申叔舟の著書『海東諸国紀』（1471年成立）の日本国紀に端的に表現されている。彼自身も、1443年に通信使の書状官として来日している。

〔史料1〕『海東諸国紀』日本国紀

対馬島

郡八、人戸皆沿海浦而、居凡八十二浦、南北三日程、東西或一日、或半日程、四面皆石山、土瘠民貧、以煮塩・捕魚・販売為生、（下略）

八郡は、豊崎・豆酸・伊奈・仁位・与良・三根・佐護・佐須の各郡を指す。〔史料1〕は、対馬島の四面は皆石山ばかりで、土は痩せて民は貧しく、島民は、製塩・漁業・交易を生業としていたことを述べている。

このようなイメージは、朝鮮王朝が対馬に派遣した使節の帰朝報告（復命書や、国王との問答で報告）〔関 1999〕に、しばしばみることができる。高橋公明氏は、〔史料1〕の記述は「陸から見た島」の見方であり、対馬の人々は「豊富な海産物があり、北にも南にも交易する人々がおり、たとえ土地が痩せていてもここで楽しく暮らしていける」というように考えていたのではないかとされる。そして海域世界という見方を提案する〔大石・高良・高橋 2001、279～280頁〕。筆者も、このような視点から中世の対馬を考えているが、本報告書で明らかにされるように、田・畠・木庭（焼畑）を開発して耕作を行っていたことも事実である。

応永の外寇（1419年）の翌年に来日した回礼使宋希環の漢詩文集『老松堂日本行録』には、対馬の農業に触れた箇所がある。日本への往路で詠んだもので、同年2月、対馬の東海岸側を航行している際に詠んだ「舟中雜詠五首」〔36節〕の中の詩である。

## 〔史料2〕『老松堂日本行録』

人居

縁涯得見両三家、片々山田麦発華、那識朝鮮千万里、  
春風処々富桑麻、

前半が船から見た対馬の光景であり、海に面した縁涯に人家が2・3軒あり、崖の斜面を利用した片々とした「山田」に麦が華（はな）を発（ひら）いている様子を詠んでいる。この情景と、朝鮮の春に桑・麻が豊かに実っている様子を対比させている。

また長享元年（1487）に対馬を訪れた鄭誠謹は、〔史料1〕と同じような対馬のイメージを持ちながら、次のように農業に関しても記述している〔佐伯 1990、263頁〕。

## 〔史料3〕朝鮮『成宗実録』巻204、18年（1487）6月戊寅（10日）条

且其土性甚薄、又無水田、皆資山田以食、而彼人禁伐山林、使不得耕食、或採葛根・蕨根、或取海魚煮食、人多飢色、前此專以剽窃我边境、以延其生、而島主之禁防太嚴、故彼人等反以為怨曰、使吾輩以就飢死、

土性が甚だ薄く、水田はなく、皆山田（山間にある畠・畑）を耕作して食料を得ていることを述べている。また山林を伐ることを禁じ、耕作して食料を得させないようにしているという。この記述通りだとすれば、当時、木庭（焼畑）の開発は禁止されていたことになる。

## (2)朝鮮米の輸入

14世紀末～16世紀初頭、朝鮮王朝は、倭寇を禁圧できる領主たちの使節、例えば、室町幕府の使節（日本国王使）や九州探題今川了俊・大内氏・宗氏などの使節を迎え入れた。さらに朝鮮王朝は、倭人懐柔策の一環として、倭寇であった人々も平和的な通交者であれば受け入れた。その結果、多様な階層の使節が朝鮮王朝に派遣された。このような使節を、朝鮮王朝は使送倭人とよぶ。

特に対馬からは、数多くの使船が派遣された。最大の通交者は、対馬守護・対馬島主（朝鮮王朝側の呼称。研究史上では、対馬の実質的支配者の意味でも使われる）である宗氏である。宗氏は、〔史料4〕のように、朝鮮王朝から回賜品として米・豆を与えられている。尚、15世紀の朝鮮の1斗は、日本の京枬では4升8合5勺余に相当し、日本の5割弱であった。

## 〔史料4〕朝鮮『太宗実録』巻2、元年（1401）10月丙辰（1日）条

対馬島太守宗貞茂・一岐島守護志宗使人還、賜貞茂虎豹皮各二領・席子二十張・米豆各二十石、志宗虎豹皮各一領・席子十張・白苧黒麻布各十匹、皆授其使而送之、

嘉吉3年（1443）、宗貞盛は、朝鮮王朝との間に癸亥約条を結び、歳遣船50隻を派遣することを許され、さらに歳賜米200石を与えられることになった（16世紀に結んだ壬申約条などで、歳遣船は減少する）。

また上記の使船とは別に、興利倭船とよばれる船が朝鮮半島南岸の港に来航した。興利倭船は、魚・塩を朝鮮に持ち込み、米穀と交換する船で、1410年代（太宗朝）には倭寇が掠奪した中国商品も持ち込んでいた。興利倭船に乗船していた興利倭人の大半は、対馬島の漁民であった〔長 2002〕。対馬で生産された塩や周辺海域での漁獲物は、朝鮮にも交易品として移出されていたのである。さらに三浦に居住する恒居倭も出現し、その居住者数や繁栄ぶりは、宗氏の守護館がある府中（現、厳原町）をものぐものであった〔中村 1965・村井 1993・長 2002・関 2002〕。

朝鮮に渡航した使船の乗員に対して、朝鮮王朝は、過海料や滞在期間中与えられる留浦料（給料）として米を支給した。過海料の支給にあたり、使節の出発地に応じた基準の渡航日数を定めている。その規定は成宗2年（1471）に改定され、『海東諸国紀』の「朝聘応接紀」によれば、対馬島は5日、壹岐島は15日、九州は20日、日本本国（畿内・山陰道・山陽道）と琉球国使は20日とある。支給人数は、成宗2年の時点では、大船40人・中船30人・小船20人で算出し（『成宗実録』巻10、2年4月己酉〔7日〕条）、過海料・留浦料は1日米2升であり、留浦料は、1人について1日に2度、米を各1升支給した（『海東諸国紀』『朝聘応接紀』）。長節子氏は、成宗13年（1482）、朝鮮王朝に大蔵経を求めた「夷千島王」の使者が、朝鮮に長期にわたって滞在した理由として、留浦料の獲得を挙げている〔長 2002〕。

以上述べたような経緯によって、朝鮮米が輸入された。だがその米が、島内でどのように分配され、消費されていたのかという点は、明らかではない。その手がかりとなる2つの史料を挙げておく。

享徳4年(1455)2月日の満茂書下写(『馬廻御判物帳』〔長崎県史編纂委員会 1963、714頁〕)には、宗彦三郎にあてて、冒頭に「一、朝鮮米十五石之事」を記しており、次いで「一、天満宮まつり不可憎之事」「一、当家の守護可為専一事」などを心得るように伝えている。朝鮮米十五石の意味は明かではないが、冒頭の記載などで朝鮮米の支給を約束したものなのかもしれない。また天満宮の祭りとの関連もあるのだろうか。

また仁位家文書(豊玉町仁位 仁位信輝氏所蔵)には、次のような文書がある。

〔史料5〕唐坊盛房証状〔豊玉町教育委員会 1995、38～39頁〕 1506年

(増裏書)「しょもん」  
(高麗) (題目) (愁訴) かうらいのたいもく之事、しゅうそなり申候ハハ、  
米の事ハその方の御一しやうらいの間、はんぶんわ  
(半分) (し脱力) (無沙汰) たし申へく候、すこも此まふさたあるましく候、  
仍為後日状如件、

唐坊治部小輔

永正三年<sup>ひの</sup>の二月卅日 盛房(花押)(黒印)

宗右馬允殿参人々中

意味の取りにくい文書だが、次のように解釈しておきたい。当時、対馬守護・島主の宗盛順(惣領家)は、歳遣船など多数の朝鮮への使船(偽使を含む)を管理・経営していた。その中のある使船(歳遣船のうちの一般船)に関する権利を有していた宗右馬允(仁位宗氏)が、朝鮮渡航の際の「題目」に関して愁訴した。それに対し、(惣領家の家臣である)唐坊盛房が(朝鮮)米を将来にわたり半分渡し申すことを約したものが、〔史料5〕である。このように考えた場合、対馬島主の派遣した使船に一定の権利を有していた諸氏に対して、朝鮮米半分を支給するシステムがあったことがわかる。尚、宗家文庫蔵の「小番帳写」の冒頭に収められた永正5年(1508)の「定老昼夜番之事」の六番に「唐坊肥前守」がみえる。一昼夜番とは、島主(守護)館の一昼夜警固と考えられる〔佐伯 2001、4～5頁〕。

## 2 大山小田文書にみる課役と生業

### ー鎌倉時代末期～南北朝時代前期ー

次に「大山(おやま)小田文書」を素材として、対馬における領主支配について概観してみよう。

大山小田文書は、対馬の与良郷大山村(現、美津島町大山)の給人小田家に伝来した文書であり、現在は長崎県立対馬歴史民俗資料館の所蔵となっている。同文書は、最近佐伯弘次・有川宜博両氏によって、編年のかたちで紹介された〔佐伯・有川 2002〕(以下、文書番号は同紹介に拠る)。大山村は浅茅湾の東側に面する集落である。大山氏または大山伴田氏と称し、室町時代初期に小田氏を称するようになる。大山氏(小田氏)は、海の領主として知られている。佐伯弘次氏が本文書を使用して丹念に検討され〔佐伯 1990・1998〕、前述した史料紹介においてもその要点が解説されている(佐伯氏執筆)〔佐伯・有川 2002〕。

大山小田文書は、鎌倉時代末期から戦国時代までの文書を含んでおり、海事史料として豊かな内容をもっている。対馬独自の課役を知ることができるほか、対馬守護宗氏らによって、荘園公領制の論理が持ち込まれている様子も窺える。

以下では佐伯氏の研究に導かれながら、伝来した大山小田文書を年代順にみていくことで気づいた点を述べておきたい。

鎌倉時代後期～南北朝時代前期は、少弐氏が対馬守護であり、対馬島の地頭をつとめていた。同文書のうち6通は、少弐氏による支配が直接及んでいた時期のものである。

まず鎌倉末期の3通の文書から、大山氏が負担していた課役を確認しておこう。

第1に年貢であり、大山氏は年貢として塩の徴収を命じられている。

〔史料6〕少弐貞経書状(1号) 1319年

(補筆) (塩屋) 対馬「島」のしほやの事、注文をあいそへて、かし  
(借上) あげのかたにわたさるゝほか、今年(は)しめてたつる  
(塩蔵) (現在) (宮内) ところのしほかまをは、けんさいにまかせて、く  
(沙汰) (年貢) (沙汰) (進) い入道のさたとして、ねんくをさたしんすへきよ  
(仰) (畢) (存分) し、「先」日「おほせ」られをハぬ、「そんふ」んを  
(詳) (仰) (含) くない入道にくハしくおほせふくめらるへく候、謹  
言、

元応元

十一月廿九日

西郷入道殿

八田六郎殿

(少弐) 貞経(花押)



少式貞経は、「対馬島の塩屋は借上に渡し、今年初めて立てる塩釜は宮内入道の沙汰として年貢を進上せよ」と指示している。塩屋は、鹹水を煮て塩を作る建物、すなわち製塩施設を指す。〔史料1〕において塩屋は借上に渡され、それ以外の新立の塩竈（釜）を基準に、少式氏は宮内入道に塩年貢を負担させている。塩年貢の賦課の単位が、塩屋ないし塩竈（釜）であることと、大山宮内入道がこれらを経営していたことがわかる。そして少式貞経は、借上が塩屋から、宮内入道は新立に塩竈（釜）から徴収するという分担を指示していた。宮内入道は、塩年貢徴収の役人と考えられ〔佐伯 1998、117頁〕、借上の存在から、かなりの規模で塩が流通していたことを窺わせる。

網野善彦氏によれば、浦々の平民百姓的海民の共同体による比較的小規模な製塩に対して、荘園・公領の支配者による賦課の仕方は、国によってさまざまであったという。伊予国弓削島荘などの瀬戸内海の島嶼では、塩浜が百姓名に結われ、米麦との交易で塩年貢を納めた。若狭国の浦々では山手塩を負担し、能登国の浦々では塩釜が正式の検注の対象になっていた。佐渡では塩釜、越後・肥後では塩屋、豊後では塩浜が領主の譲与の対象になっているのも、賦課方式の違いと関係があるものだという。肥前国五島の浦部島（中通島）に根拠を置く青方氏とその支流白魚氏の所領は、田畠・山野・牧・網・塩屋から成り立っており、元徳3年（1331）8月15日付の深堀時清（か）和与状案（肥前深堀家文書、『鎌倉遺文』40巻31492号）でも塩屋が和与の対象になっている〔網野、2001〕。対馬においても、このような荘園公領制の下での塩の徴収と、本質的には変わりはない。だが〔史料1〕には、塩屋・塩竈（釜）双方がみえることや、塩屋からの徴収を借上に委ねる点に、他地域との相違点がみえる。

第2の課役は「網の用途」であり、漁業への賦課である。

〔史料7〕□房・祐円連署書状（2号） 1327年

（年々）	（綱）	（用途）	（沙汰）
としゝゝのあミのようとう	ハ	貳貫文	そのさた候へ
とも、いまハ	あミ	てうのほかハ	さたなきあひた、
拾貫のほかハ	なんち	たるへきよし、	なけき申るゝう
へハ、いま	てうふん	のようとうの事、	あミをひか
さるうへハ、	御めん	あるへきよし候也、	てうふん
ハけたいなく	さたし	しんせらるへきよし候、	そんち

せらるべく候、恐々謹言、

嘉曆二

正月十日

祐円（花押）

□房 (花押)

大山伴田次郎殿

大山伴田次郎は、年々の網の用途として毎年20貫文（網2帖分）を少弐氏に納入していたが、現在は網1帖分は曳いていない（操業していない）ので、1帖分の10貫文は納入しがたいと訴えた。その主張が認められ、網1帖分の用途が免除された。この網は、大山氏が所有していたものと思われ、その網を使用して後述する網人（すなわち海民）が魚を捕獲していた。漁獲物は交易されて銭に換えられ、少弐氏は、その網1帖につき10貫文の税を賦課していた。佐伯氏は、当時の対馬の網漁は、1帖につき年間10貫文以上に相当する漁獲があったものと推定されている〔佐伯 1998、121～122頁〕。

「網の用途」の語を記した鎌倉時代の文書は少なく、鎌倉時代の伊予国弓削島荘において2通確認できる程度である。元亨元年（1321）6月15日付の弓削島荘網用途支配状（「東寺百号文書」マ・白河本東寺百号文書、『鎌倉遺文』36巻27805号）に「弓削島網〈元亨元年〉用途支配」、元亨3年6月4日付の弓削島荘網用途支配状（「東寺百合文書」マ、『鎌倉遺文』37巻28423号）に「あミ（網）の用途」がみえる。

第三に公事である。〔史料7〕と同年の次の文書をみよう。

〔史料8〕 少弐貞經書下（3号） 1327年

大山宮内左衛門入道跡事、子息伴田次郎無相違令相  
続、有限御公事者、任先例可令勤仕候由、所被仰也、  
可令存知其旨給之状如件、

嘉曆二

十二月廿八日

(少式貞經)

妙惠(花押)

(宗盛国)  
宗馬弥次郎入道殿

妙恵（少弐貞経）が、宗馬弥次郎入道（宗盛国）に対して、大山宮内左衛門入道の遺跡を子息伴田次郎が相続することを承認した旨を伝えるように命じたものである。その際、伴田次郎は限りある公事を先例に任せて務めるように命じられている。公事の具体的な内容は明らかではないが、後の時代の公事から類推すれば、交易に賦課されたものだろうか。年貢として納める塩とは、別個の

ものと思われる。

以上みてきたように、鎌倉時代末期、少弐氏は、大山氏に対して、年貢（塩）・網の用途（銭）・公事の3つを賦課していた。このことは、大山氏が掌握していた百姓が、製塩・漁業（・交易）を生業としている海民であったことを示している。またその課役は、荘園公領制のもとでの海民に対する課役とは、基本的に変わるところはない。

次に南北朝前期の文書をみると、大山氏の違乱行為や、「年貢用途」の未進が問題にされている。

〔史料9〕西郷顕景・輔恵連署書下（4号） 1345年

対馬島塩屋百姓源藤六・源八男等申船木事、大山小次郎左衛門尉或運取之、或致違乱云々、太無謂、早速糺返件木於本主、且可被止向後違乱之状如件、

康永四

二月一日

輔恵（花押）  
（西郷）  
顕景（花押）

大山宮内允殿

この文書から「塩屋百姓」、すなわち塩屋で働く百姓である源藤六・源八男の名がわかる。大山小次郎左衛門尉は、彼らの船木を運び取ってしまった。源藤六らは少弐氏に訴えたため、少弐氏の被官西郷顕景・輔恵は、船木を本主に返すように大山宮内允に命じている。塩屋百姓は、船木、すなわち造船用の木材を所持しており、したがって彼らは生産手段としての船を所有していたことがわかる〔佐伯 1998、120頁〕。この塩屋は大山氏の管理下にあったことが推測されるが、大山氏が百姓の船木を運び取ることは違乱行為であると、少弐氏が認定したのである。

5・6号文書では、「年貢用途」の未進が問題にされている。

〔史料10〕西郷顕景・輔恵連署書下（5号） 1345年

毎年沙汰御年貢用途未進由事、不日遂結解、可被并済慶寿寺雑掌之状如件、

康永四

八月廿四日

輔恵（花押）  
（西郷）  
顕景（花押）

大山宮内允殿

大山宮内允が、毎年、雑掌である慶寿寺に并済すべき「御年貢用途」を未進していることがわかる。〔史料6〕

〔史料7〕に即して読めば、年貢塩と網の用途の2つを未進していることになり、この2つが依然大山氏に賦課されていることがわかる。年末詳2月12日付の西郷顕景・氏賢連署書状（6号）によれば、大山伴田宮内丞は、（網の）用途の去年分10貫文・今年分10貫文を慶寿寺に未進している。

### 3 大山小田文書にみる課役・生業と所領

#### ー南北朝時代前期～戦国時代初期ー

南北朝後期以降、少弐氏に代わって、宗氏による対馬の知行が展開していく。長節子氏によれば、宗氏は、対馬在庁官人惟宗氏が、武士化したものである。惟宗氏は少弐氏の被官になり、対馬の地頭代を兼ねた。少弐氏とは異なり、島内に基盤を持っていたため、島政の実権を掌握し、武士的活動の領域では、宗氏を称するようになった。南北朝後期～室町時代は、宗氏の一族内でも、惣領家と庶流の仁位中村宗氏との間で、守護職や朝鮮通交権をめぐる抗争が展開した。永和4年（1378）以前の段階で、宗澄茂は、室町幕府から対馬国守護職に任じられている。宗澄茂は仁位中村宗氏で、惣領の座を奪い取ったのである。また少弐氏との主従関係は継続しており、少弐氏を助けて九州へしばしば出兵している。〔長節子 1987〕。

以上のような島内の政治情勢の変化に伴い、大山小田文書では南北朝後期以降は、宗氏の発給文書が大半を占めるようになる。以下では、(1)14世紀後期、(2)15世紀前半、(3)15世紀後半、(4)16世紀前半に分けて検討していく。

#### (1)14世紀後期 網人と公事

14世紀後期における少弐氏の知行時期との相違点を、次の2通の文書から指摘しておこう。

第1に、漁業に関わる網人（百姓、海民）の人数や名を掌握しようというものである。

〔史料11〕宗経茂書状（7号） 1366年

（今五島）（弁財使）（網）  
いま五たうのへんさいし并ニあミ人ら

一人 さう五郎

一人 又五郎

一人 四郎

一人 けん二郎

一人 みやハウ

一人 ふくらたゆふ

一人 へい三郎

一人 むまの太郎

一人 すけ二郎

一人 三郎大郎

<sup>(預)</sup>  
あつけまいらせ候、恐々謹言、

貞治五

十月十一日

<sup>(宮内左衛門)</sup>

大山くさいさへもん尉殿

<sup>(宗経茂)</sup>

宗慶（花押）

佐伯氏によれば、この文書は大山小田氏の漁業経営における人的基盤を明らかにしたもので、この時大山氏は、漁業組織の長である弁済使と、実際に網漁に従事する網人の計10名を、宗慶（宗経茂）から預けられたとされる。大山氏の漁業経営は、網を所有し、弁済使・網人という専門的海民をかかえてのものであった〔佐伯 1998、122～123頁〕。このような経営は、鎌倉時代末期から継続していたものであろう。

少武氏知行期と異なる点は、10人の名を具体的に書き上げている点である。おそらく実態としては、彼ら10人は既に大山氏が抱えており、宗経茂がそれを承認した上で、形式的に大山氏に預ける形をとったのであろう。宗氏は、大山氏を通じて、課役の賦課対象である海民＝百姓の名・人数まで掌握しようとしたのである。

第2に、公事の内容が明示されることである。

〔史料12〕宗澄茂書下（8号） 1369年

<sup>(高麗渡)</sup> かうらいわたりの<sup>(船)</sup>大山ふね二<sup>(艘)</sup>そうの<sup>(公事)</sup>かうしの事、さしをき申所如件、

正平廿四

七月五日

<sup>(宗経茂)</sup>

宗慶（花押）

<sup>(左衛門)</sup>  
大山宮内さへもん殿

この文書では、大山宮内左衛門は、高麗渡りの大山船二艘の公事が免除されている。

仁位中村宗氏の澄茂の代では、逆に高麗公事の沙汰を命じられている。年末詳11月7日付の宗澄茂書状（10号）において、「つしま（対馬）の島の八かい（海）のかうらい（高麗）かうし（公事）」を事書の旨を守り、来る午年まで沙汰する命じられ、康応元年（1389）9月17日付の宗澄茂書下（12号）においては、「つしま（対馬）のかうらい（高麗）御公事」の沙汰を命じられている。

高麗公事の初見は、貞治4年（1365）11月13日付の宗慶（宗経茂）書下写（『宗家御判物写 與良郷下』鶏知村、『南北朝遺文』九州編4巻4603号）〔長崎県史編纂委員会 1963、632頁〕で、峰の沙汰人中に対して「下人のこうらいかうし」を免除したものである〔李 1999〕。ところで高麗公事〔黒田 1971〕の解釈については、(ア)宗氏が倭寇からとりたてた公事とする見解〔中村1965・李 1999〕と、(イ)宗氏が島民の高麗貿易に対して賦課した課税という見解〔田中 1975・長 2002〕がある。前期倭寇が隆盛した時期であることから、佐伯氏は解釈を留保されている〔佐伯・有川 2002〕。だがこの時期においても宗氏の遣使はあり、恭愍王17年（1368）11月、宗宗慶は使節を高麗に派遣して米1千石を支給されている（『高麗史』巻41、恭愍王17年11月丙午〔9日〕条・『高麗史節要』巻28、恭愍王17年11月条）。また巨済県・南海県において倭人（対馬島民か）の居住が認められ、向化倭として扱われている（『高麗史』巻41、恭愍王18年〔1369〕7月辛丑〔9日〕条）。高麗公事は、倭寇が沈静化した15世紀も賦課されている（後述）。したがって高麗公事は(イ)説で理解すべきで、対馬から朝鮮に渡海して交易をする船に課されたものと考えられる。

上記2点に加えて目につくのは、所領＝土地が宗氏によって安堵され、その所領に基づいて公事が賦課されることである。

宗澄茂は、次のように和多浦の恒例の公事が給分として、大山左衛門五郎に宛行われている。

〔史料13〕宗澄茂書状（9号） 1376年

<sup>(対馬島)</sup> つしまの<sup>(和多)</sup>しまわたの<sup>(恒例)</sup>浦の<sup>(公事)</sup>こうれいの御<sup>(給分)</sup>かうしの事、<sup>(宛)</sup>きうふんと<sup>(知行)</sup>してあて<sup>(書)</sup>給るところ也、御かき下のむねにまかせて、ちきやうすへき状如件、

永和二

十月十六日

<sup>(宗)</sup>

澄茂（花押）

<sup>(左衛門)</sup>

大山さへもん五郎殿

また年末詳11月7日付の宗澄茂書下（11号）では、大山左衛門五郎は麻生（浅茅）内島山の代官職を預け置かれ、公事の進上を命じられている。大山氏は、宗氏への公事負担を命じられていたことがわかるが、その際に代官職に任じたり、浦という所領単位（土地）を基準に公事負担分を給分として与えるようになっている。この点に荘園公領制下の収取体系の影響をみることができる。

## (2)15世紀前半 所領の宛行・百姓の公事負担

14世紀末、宗貞茂が仁位中村宗氏から対馬島主の地位を奪還した。宗貞茂と次の宗貞盛の時期は、宗氏による島内支配の基盤を固めていく時期である。

まず宗貞茂の代になると、所領が給分として宛行われている。

〔史料14〕宗貞茂書下(14号) 1401年

対馬島内和多浦・志麻山・今五島事、「由」所地之間、為給分所宛行也、任先例可致沙汰状如件、

応永八

十二月十三日

(宗)  
貞茂(花押)

大山宮内左衛門尉殿

和多浦・島山・今五島は、浅茅湾内の地域と考えられる〔佐伯・有川 2002〕。宗氏が、浦や山などの所領＝土地を宛行うことで、島内の家臣(給人)を編成していく様子が窺える。このことは、年未詳6月24日付の宗貞茂書状(16号)において、一層はっきり示されている。宗貞茂は、小田宮内左衛門尉の由緒地について、先年の宗経茂・宗澄茂の成敗の旨に任させて安堵を成すことを、宗中務入道に命じている。

ついで宗貞茂のもとでの公事・年貢の負担や免除についてみていこう。

応永9年(1402)4月(卯月)21日付の宗貞茂書下(15号)では、大山小田宮内左衛門尉は大山宮内左衛門入道跡を相続するにあたって限りある公事の勤仕を命じられている。また年未詳4月10日付の宗貞茂(カ)書状(17号)によれば、仁位郡について「カミ(上)のねんく(年貢)」「宗氏に納めるものか」と「わたくし(私)のとくふん(得分)」「大山氏の得分)の沙汰を、大山宮内左衛門が命じられている。大山小田文書において、年貢の記載はこの文書が最後である。さらに、次の文書を見よう。

〔史料15〕宗貞茂書下(18号) 1404年

大山宮内入道知行分の事、先々のまゝ諸事お御めんある所也、此旨可被存知状如件、

応永十一

十二月十五日

(宗貞茂)  
正永(花押)

大山宮内入道殿

この文書では、大山宮内入道の知行分につき、諸事が免除されている。何らかの功績によって諸事(公事。年貢を含むか)の免除を獲得したものと思われる〔佐伯・有川 2002〕。

また同時に大山氏は、宗貞茂から八海の大物が立つ時には、その取り沙汰が命じられている。このことは、応永11年(1404)12月20日付の宗貞茂書下(19・20号)にみえる。このうち20号文書を、次に掲げる。

〔史料16〕宗貞茂書下(20号) 1404年

いるか<sup>(公方カ)</sup>のうらのものゝ事、十<sup>(浦)</sup>こ<sup>(喉)</sup>ん<sup>(公方カ)</sup>五<sup>(公方カ)</sup>こ<sup>(公方カ)</sup>ん<sup>(公方カ)</sup>ハ<sup>(公方カ)</sup>く<sup>(公方カ)</sup>  
はう物<sup>(海)</sup>たるへく候、かたくさいそくあるへく候、  
八<sup>(海)</sup>かい<sup>(物)</sup>の<sup>(濃部)</sup>大<sup>(濃部)</sup>ものゝ事、かたくさいそくあるへき条、  
一所<sup>(濃部)</sup>の<sup>(鴨居瀬)</sup>ふ<sup>(鴨居瀬)</sup>  
一所<sup>(鴨居瀬)</sup>かも<sup>(鴨居瀬)</sup>せ<sup>(鴨居瀬)</sup>  
一所<sup>(竹)</sup>た<sup>(竹)</sup>け<sup>(竹)</sup>の<sup>(竹)</sup>浦<sup>(竹)</sup>  
一所<sup>(和多)</sup>わた<sup>(和多)</sup>の<sup>(和多)</sup>浦<sup>(和多)</sup>  
の事、せんゝの法<sup>(先々)</sup>のまゝ<sup>(沙汰)</sup>さ<sup>(沙汰)</sup>た<sup>(沙汰)</sup>あるへく候、もしふ<sup>(先々)</sup>  
(無沙汰) (無沙汰) (罪科) さ<sup>(罪科)</sup>た<sup>(罪科)</sup>の<sup>(罪科)</sup>とも<sup>(罪科)</sup>から<sup>(罪科)</sup>にお<sup>(罪科)</sup>る<sup>(罪科)</sup>て<sup>(罪科)</sup>ハ、さい<sup>(罪科)</sup>く<sup>(罪科)</sup>わ<sup>(罪科)</sup>ある<sup>(罪科)</sup>へ<sup>(罪科)</sup>き<sup>(罪科)</sup>状<sup>(罪科)</sup>如<sup>(罪科)</sup>件<sup>(罪科)</sup>、

応永十一

十二月廿日

(宗貞茂)  
正永(花押)

大山宮内入道殿

八海とは対馬八郡、対馬全島の海域を意味し、「大物」とは海豚(いるか)や鮪などの大型の海中生物と考えられる。そして海豚については、10喉に5喉は公方物とある。公方物は島主宗氏への上納物と思われ、漁獲高の5割は島主宗氏に上納していた。すなわち大型漁獲物の半分は、宗氏に上納するという原則があり、大山氏は宗氏の代官としてその任にあたっていたものと考えられる〔佐伯 1998、佐伯・有川 2002〕。

さらに注目したいのは、所領(知行地)の沙汰も命じられている点である。19号文書では、「二のこほり」(仁位郡)、さか・かいふな・大いし(石)における沙汰が命じられている。〔史料16〕(20号)では上述のように、一所として、濃部・鴨居瀬・竹の浦・和多の浦という浅茅湾の東側の地域の地名が書き上られ、その沙汰を命じられている。〔史料16〕で示された地は、大山氏が宗氏から与えられた知行地と思われる。漁業に従事していた百姓(海民)からの徴収とは別個に、知行地の沙汰も命じられるようになったのである。尚、和田浦・志麻(島)



山・今五島は、応永27年(1420)12月6日付の宗貞盛書下(22号)により、大山宮内左衛門尉に宛行われている。宗貞盛の代始安堵といえるだろう。

それでは、知行地の沙汰とはどういうことだろうか。大山氏の知行地からは、八海の大物とは別に、宗氏に対して公事を納めることになっていた。その場合、公事が賦課される対象は、百姓である。年末詳4月16日付の宗貞澄書下(21号)には、「御ちきやう(知行)分百しやう(姓)所々に候」とあり、知行分の百姓が位置づけられている。さらに、次の文書を見よう。

〔史料17〕浄秀・祐覚連署書下(23号) 1443年  
 (星) (姓) (検注) (由)  
 ひるの浦の百しやうの事、けんちう申へきよし申候、  
 (臨時) (公事) (以下)  
 しかるへく候、よてりんしの御くうしいけの事ハあ  
 (公方)  
 りつき候するほとハ、くはうニ御申、さしをくへく  
 (元) (如) (還) (次第) (残)  
 候、もとのことくかへり、いかてしたいニのこり候  
 (姓) (召渡) (本々カ) (公事)  
 百しやうをもめしわたし、ほんゝゝの御くうしをい  
 たち候へき之状如件、

嘉吉三

十一月廿四日

祐覚(花押)

浄秀(花押)

(星)  
ひるの浦

けこしの所

昼の浦(現、美津島町昼ヶ浦)の百姓の検注を指示したが、臨時の御公事を公方(宗貞盛か)に申し上げ免除すること、それと引き替えに百姓が還住して、残りの百姓についても召し渡し、恒例の公事を納めることを命じている。

大山氏が掌握しているのは、漁業や交易などを生業としている百姓たちである。彼らは、移動生活を主とし、その行動範囲は朝鮮の三浦(乃而浦〔齊浦〕・富山浦〔釜山浦〕・塩浦)にまで及ぶ。

〔史料18〕宗成職書下(28号)

(富山浦) (百姓)  
 ふさんかいにて候二人のひやくしやう共、宮内さへ  
 (左衛門) (公事) (判)  
 もんニくうし物あけ候へ、むつかしく申ニよて、は  
 んのいたす、

「小田」宮内さへもん

「霜」月十五日

(宗)  
成職(花押)

この文書の途中からは追筆で、意図的に宗成職の判物に改変しようとした形跡があり、扱う上で注意が必要である。前半の記述は興味深く、富山浦における百姓(恒居

倭)2人から宮内左衛門が公事物を徴収していたことを示すものである。この文書について、長節子氏は、「小山(小田)宮内左衛門なる者が、富山浦恒居倭の二人の百姓の出す税を島主から宛行われていたが、百姓らが小山に税を納めないで、島主成職に訴えて裁許をうけたもので、これにより恒居倭は島主の裁判権に服していたことがわかる」とされている〔長 2002a、9頁、( )は筆者注〕。宗氏は、三浦の恒居倭に対する検断権・課税権(営業税の徴収権)を持っていた〔村井 1993・関 2002〕。

このように宗氏は、給人大山氏を通じて、百姓(海民としての性格が強い)一人一人を賦課の対象としていたのである。ここで想起されるのは、宗貞盛らが、応永の外寇時に朝鮮側の捕虜にされた対馬島民や、朝鮮に逃来した島民の送還を、朝鮮王朝に要請したことである〔関 2002〕。例えば、世宗19年(1437)、宗貞盛は、百姓馬三郎等26名の「本島逃来人」の送還を求めている(朝鮮『世宗実録』巻76、19年3月癸巳〔3日〕条)。このように名を特定して送還要請をしているのであり、上述してきた百姓の掌握とも深く関わる事例であろう。

### (3)15世紀後半 公事の多様化

15世紀後半の対馬守護・島主である宗成職の発給文書で目立つのは、多様な公事が設定されていることである。対馬独自の公事が、大山氏に対して賦課ないし免除されている。享徳3年(1454)2月5日付の宗成職書下(26・27号)では、大山宮内左衛門尉は高麗の諸公事の他、6つの諸公事が免許(免除)されている。

〔史料19〕宗成職書下(27号) 1454年

(当) (諸)  
 たう国高麗のしよ公事等の事、

(塩)  
 一、しほ判

一、おうせん判

(地) (儀)  
 一、六ちの一へう物

(買口)  
 一、人の売口かいくち

(買口)  
 一、船の売口かいくち

一、山手

此前の諸公事等、免許いたす所也、仍この旨存知あるへき状如件、

享徳三

二月五日

(宗)  
成職(花押)

(六)  
太山宮内左衛門尉殿

これらの公事については、竹内理三・黒田省三・長節子・佐伯弘次各氏らにより解釈され、論者によって解釈の異なるものがある〔竹内 1951、黒田 1971、長 1987・1990・2002、佐伯 1990・1998〕。次に、その解釈を列挙しておこう。

「塩判」 塩を朝鮮・本土に搬出することを許可する島主宗氏の証明書（長）。

朝鮮に渡航する商船の積む塩（商品）に対する課税（黒田・佐伯）。

「おふせん判」 対馬から孤草島（巨文島）に出漁（釣魚）の時、対馬宗氏から発給される文引（長）。

孤草島出漁の漁船に対する税（佐伯）。

「六地之一倭物」 九州（対馬では、「六地」・「陸地」と表記される）へ赴く商船の従量課税（黒田）。

「人之売口買口」 人身売買に関する課税（黒田）。  
人身売買にたずさわることを許可したものの（長）。

「船之売口買口」 対馬在籍船の渡航権の売買に対する課税（黒田）。  
船による対馬島内沿岸での交易活動を許可したもの（竹内・長）。

「山手」 島内各浦に寄港する船舶が使用する薪・材木などに課した運上（黒田）。

「塩判」・「おふ（う）せん判」は、その用語を文引などの文書と解するか、税＝公事として解するかの相違があるが、文書の発給には手数料（代価）が必要であるから、実態としては大きな相違はない。もっとも解釈の異なるものは、「船之売口買口」である。「六地之一倭物」が別にあることを踏まえて、長説のように対馬島内沿岸での交易活動を認めたものと解釈したい。交易のうち人身売買については、「人之売口買口」が別途に設定されたものであろう。そしてそれらの交易で得た利益に対して賦課したのであろう。

ここで確認しておきたいのは、守護宗氏は、公事を課役の中心に据え、家臣（給人）を通じて百姓から多様な名目の公事を徴収していたことである。この点に、宗氏の島内支配秩序が固まってきたことが窺える。

これらの公事の内、「おふせん判」について若干の説明を加えておこう。嘉吉元年（1441）、宗貞盛は、朝鮮王朝との間に孤草島釣魚禁約を結び、孤草島に出漁する対馬漁民に文引を与える権限を得た。長氏は、その文引を「おふせん判」と解している。宗氏は、文引の発給権を得ることにより、対馬島外での島民の出漁を、その管理下においたのである。長氏は、孤草島を現在の大韓民国全羅南道の巨文島に比定している〔長 2002〕。大山氏配下の百姓（海民）は、孤草島海域まで出漁していたことになる〔佐伯・有川 2002〕。

また前節でみたように、大山氏の下で百姓らによる製塩が行われていたが、上記の「塩判」の解釈双方ともに朝鮮との交易を想定している。これは、1節で触れた興利倭船を意味する。また「六地の一倭物」から、大山氏は九州との交易にも従事していたことが推定される。佐伯弘次氏の指摘されるように、中世の大山は、朝鮮－対馬－九州を結ぶ交易の拠点であり、ここを押さえる大山氏はこのルート上で交易に従事していたと考えられる〔佐伯・有川 2002〕。

尚、山手は、荘園史の用語としては、山手銭の略で、山に立ち入る人間に課された使用料と理解されている。特に室町時代には、山中・陸路に設けられた関所で通行人・貨物に課したもので、一種の関銭の性格をもっている。対馬という場に即して考えれば、黒田氏の解釈が妥当であろうが、若狭国では「山手塩」が徴収されていることも留意しておきたい〔網野 2001、96・98頁〕。

これに関連して述べておくと、康永3年（1344）7月20日付の少式頼尚書下写（『宗家御判物写 與良郡上』黒瀬村）〔長崎県史編纂委員会 1963、593頁〕によれば、頼尚は、「黒瀬権大夫入道々教申候塩木切開所々木場等事」につき、甲乙人の押領を停止するように、宗右馬入道に対して命じている。塩木とは、製塩に使用する燃料用の木材と考えられる。この相論から製塩のために山々の木の伐採が進み、伐採した場所が木場＝木庭（焼畑）として耕地になるという開発の過程を窺うことができる〔佐伯 1998、120頁〕。

次に、宗貞国の発給文書をみると、従来と同様に公事に関する記載が多い。小田豊前守は、文明6年（1474）2月5日付の宗貞国書下（29号）において26・27号文書とほぼ同文で諸公事が免許されている。また年末詳8月

22日付の宗貞国書下(31号)では、限りある公事について先規を守って勤仕すること、年末詳8月22日付の宗貞国書下(32号)では「八海の大物」は代々御成敗の旨に任せるよう催促されている。公事や八海の大物を小田氏が負担することは、従来と変更はない。

新たに目につくのは、屋敷地などの土地が安堵されていることである。文明6年(1474)閏5月9日付の宗貞国書下(30号)では、「めうゆう(妙祐)かいやしき(居屋敷)一ヶ所」と「ひさけのかわちの内ひへたかつくり(作)の分」の両所が小田将監に扶持されている。後者については、長享2年(1488)4月27日付の国次寄進状(34号)によれば、「おうやま(大山)れいせん□(いん)」に寄進されている。

#### (4)16世紀前半 公事と坪付

16世紀になると、従来の漁業・交易に関する公事の免許と、田地・居屋敷への賦課の両方がみられるようになる。このことは、守護代宗国親発給の4通の文書から知ることができる。

守護宗材盛の意を受けた2通の遵行状は、前者を免許したものである。文亀4年(1504)6月16日付の宗国親遵行状(37号)では大山地下における「舟のうりくち(売口)かい(買)口」が小田宮内大輔(盛永)・同親類に免許されている。永正6年(1509)8月22日付の宗国親遵行状(38号)では、小田左馬助の「御しうそ(愁訴)」によって「塩 御はん(判)の公事物」と「六地の一俵物」とが扶持に加えられている。

永正12年(1515)には、次の2通の宗国親書下が、小田宮内大輔盛永あてに発給されている。

〔史料20〕宗国親書下(39号) 1515年

大「この」瀬内浜より上の「田」ふちニいたつてもろひら共ニ、ならひニつきの木のさへワミをとして、大山之御寄合中ニ被渡遣候者也、一、大山之内妙祐<sup>(居屋敷)</sup>かいやしき之事、毎「年」加地子式百文、可有奔走之由申定候、聊不可有御無沙汰候、仍為後日之状如件、

永正十二<sup>乙亥</sup>

宗摂津守

八月廿六日

国親(花押)

小田宮内大輔殿<sup>(盛永)</sup>

〔史料21〕宗国親書下(40号)

御親父譲分<sup>(坪)</sup>のつほ付

一所 ふきはたけ

一所 たけのよりあいはたけ

一所 梅の木はたけ

一所 くさ島

一所 しからき

一所 大このせのうちつきの木さゑ

一所 犬つか田

一所 又二郎きようたいのいやしき<sup>(兄弟)</sup><sup>(居屋敷)</sup>

右、かの所々之事、親父の譲のまゝ、無相違御知行あるへき者也、仍状如件、

永正十二<sup>乙亥</sup>

九月一日

国親(花押)<sup>(宗)</sup>

小田宮内大輔殿<sup>(盛永)</sup>

〔史料20〕の前半では大山寄合中の知行地を承認し、後半では妙祐の居屋敷に対して毎年加地子200文の「奔走」が命じられている。〔史料21〕は、大山小田文書の中で唯一、坪付を示したものであるが、小田盛永が畠・島・田・居屋敷を親父から相続することを承認されている。

このように16世紀になると、坪付のような詳細な土地に関する文書が含まれている。宗氏の島内支配が安定するにつれて、海の領主大山氏も、土地を介して宗氏の給人としての地位を確認していくようになるのである。

## 4 島内各地の所領表記事例と公事

2・3節では、大山小田文書の記載内容の変化を通じて、課役や所領などについて考察してきた。ここでは、他の文書群から、所領・耕地に関して気づいた諸点を述べておきたい。

### (1)耕地に関する諸職の設定

耕地に関して、諸職が設定された事例がいくつかある。

長岡家文書(豊玉町仁位 長岡豊明氏所蔵)には、次のような文書がある。

〔史料22〕宗宗慶書下(豊玉町教育委員会 1995、25～26頁) 1339年

「そうけい」<sup>(追筆)</sup>

(花押)(宗宗慶)

つしまにいのこをりの内宗まさ入道へあとの畠地等事、<sup>(対馬)</sup><sup>(仁位郡)</sup>  
右の畠地の下作しきいけ、五郎太郎かてつきの状に<sup>(職)</sup><sup>(以下)</sup><sup>(手紙)</sup>

まかせて、宮師房かくけい<sup>(宛)</sup>にあて給ところなり、は  
やくかうさく<sup>(耕作)</sup>をいたして、地子<sup>(以下)</sup>いけの御公事<sup>(全)</sup>をまた  
くつとめるべき状如件、

暦応二年八月廿三日

宗宗慶が、宗まさ入道の跡の畠地を、宮師房かくけいに宛行<sup>(宛)</sup>ったものである。宛行<sup>(宛)</sup>ったものは、畠地の下作職以下であり、地子以下を公事として勤めることを命じている。ここでは、畠地に対する下作職が設定され、また地子が公事として賦課されている。

次の文書では、下知職（下地職）が見える。

〔史料23〕宗成職安堵書下写（『給人百姓御判物写帖』古里村）〔長崎県史編纂委員会 1963、84頁〕

1459年

買地相伝<sup>(在)</sup>之さい所之事、

一所、田くろの麻畠、

一所、家のさや并くわう野、

一所、田、

その外相<sup>(抱)</sup>かゝへ候田畠等之事、給人の公事をハ、堅つとめられ候て、下知職之事ハ、たとへ違乱仕候給人候共、かのおり紙<sup>(折)</sup>をたいし候上ハ、ちきやう相違<sup>(知行)</sup>あるへからさる状如件、

長禄三 六月一日

<sup>(宗)</sup>成職（花押影）

藺田帯刀殿

宗成職が、給人藺田帯刀の買地（田の畔の麻畠や田など）を安堵したものだが、給人としての公事を堅く勤めるよう命じている。藺田帯刀が、安堵された所領の下知職（下地職）を持っていることを記した折紙を持っていることから、その知行を保障している。尚、その後、宗貞国（年未詳 8月23日付 宗貞国安堵書下写）・宗晴康（天文21年（1552）11月10日付 宗晴康安堵書下写）によって、〔史料23〕の所領の下地職が安堵されている（『給人百姓御判物写帖』古里村）〔長崎県史編纂委員会 1963、84～85頁〕。

次の文書では、宗貞国が、如意庵香梅老禪師に対して下地職を安堵している。田畠等の公事を給人に納めることを命じているが、「くわんのなかひらの茶ゑん<sup>(蘭)</sup>」には公事は課されていない。

〔史料24〕宗貞国安堵書下写（『三根郷御代々御判物写』

吉田村 善光寺）〔長崎県史編纂委員会 1963、373頁〕 1475年

対馬国峯郡朽木村之内如意庵香梅老僧御持之田畠等之事、

一所、いたひらのほかの居屋敷、茶蘭、善光寺之庫裏の跡ともに、

一所、とひのすの畠合三人分、

一所、淵畠女子三人分、

一所、ひらくすの田并浜田、小もち田、

一所、田口之奥のこは、うきつ<sup>(木庭)</sup>のこは、

一所、くろ隈のこは、

一所、とはたのゆの木<sup>(蘭)</sup>のわみのうへのこは、

一所、くわんのなかひらの茶ゑん、これハ公事なしに、そのほか所々の田畠等之事、給人の所へ公事の事、以前より相定候まゝ、まい年御成候て、下地職之事、堅固ニ可有知行候、仍此旨不可有相違之状如件、

文明七年

十二月八日

<sup>(宗)</sup>貞国（花押影）

如意庵香梅老禪師

## (2)所領の表記

本章「はじめに」において、対馬の中世文書の様式を挙げておいた。そのうち所領を具体的に書き上げているものは、安堵状・遵行状・寄進状などだが、特に坪付の内容は詳細である。〔長崎県史編纂委員会 1963〕所収の『宗家判物写』を通覧すると、15世紀以降、所領の記載が詳細になり、坪付が頻出するようになるのは16世紀である。このことは、宗氏の島内支配の中で、土地への知行が深化してきたことの現れといえるだろう。

所領となる耕地の記載は、畠が圧倒的に多く、木庭も目につく。豊玉町の場合、〔豊玉町教育委員会 1995〕所収の文書をみる限りでは、この傾向が顕著である（一部、峰町域の畠地なども記載がある）。

その所領表記の記載様式には、いくつかの型式がある。比較的多いのは、〔史料16・21・23・24〕のように、一所を書き上げたものである。〔史料23・24〕は、「坪付」の記載こそないが、文書様式でいえば坪付と読んでも差し支えないであろう。この型式では、個々には、面積の記載はない。

また、次のように田地・畠地を貫文で表記している場合もある。



〔史料25〕宗貞茂知行宛行状（対馬番家〔小宮家〕文書）

〔岩城・小島 1992、194頁〕 1399年

（伊奈）  
対馬島井な郡さいちやう地内二反井な崎五百文、同  
郡仁田田地分一貫五百文、同村畠地五百文、此所之  
間之事、為給分所宛行也、任先例可被沙汰状如件、  
応永六

十二月八日貞茂（花押）

小宮六郎殿

さらに「斗」「升」が表記されている場合がある。

豆畝の金剛院は、かつて事俣大師堂とよばれていた。宗氏歴代から、同寺に対して寄進状や安堵状が発給されている。金剛院文書（『豆畝郡御判物写 永泉寺・金剛院・耕月庵分』〔長崎県史編纂委員会 1963、703～708頁〕）をみていくと、応永17年（1410）8月6日付の宗貞茂寄進状によって、「対馬島畝豆郡事俣之大師堂作分畠地等、耆斗五升作分事、同水たり（垂）」の畠地が、大師堂方丈あてに寄進された。宝徳2年（1450）2月23日付の宗貞盛書下（金剛院に現存）において、初めて宛所に金剛院がみえる（以下の文書も宛所は金剛院）が、末代に至るまで「万難御公事等」が免許されている。宝徳3年（1451）10月17日付の宗貞盛寄進状（現存）には、寄進された「畠一斗五升作、同うりな之畠一斗五升作、又水たれ（垂）之畠一斗之作」を安堵している。以下の文書においても、大師堂畠地やうりなの畠は一斗五升（作）、また水垂の畠は一斗（作）と表記されている。

寛正3年（1462）2月6日付 宗茂世書下（大師堂  
畠地の記載のみ、現存）

寛正3年（1462）6月29日付 宗成職寄進状（現存）

永正16年（1519）10月3日付 宗義盛寄進状（現存）

永正16年（1519）10月3日付の宗義盛書下（現存）は、豆畝郡内の「かめのくひの畠」と「舟越畠三斗作」に対する金剛院の知行を安堵している。

年次は下るが、天正10年（1582）8月27日付の上津八幡宮神領坪付注文（長岡家文書、仁位長岡豊明氏所蔵）〔豊玉町教育委員会 1995、33頁〕には、次のような記載がある。

〔史料26〕上津八幡宮神領坪付注文 1582年

木坂之村之神所之次第

天正拾年<sub>手</sub>八月廿六日注文

上津八幡宮御神領之坪付之注文

一、山参拾参蔵狩之事、

一、浦浜玖浦之所之事、

一、伊津捌丁之事、

一、木坂陸丁之事、

右、此内相抱之人数次第不同

一所、みたらいの畠二丁半、嶋居勢兵衛尉持留、

一所、やりのさへの畠耆丁、同前、

一所、ひとつかのさへのこは<sub>斗</sub><sup>五升</sup>、同前、

一所、しひるの木庭、四斗蒔、同前、（下略）

山の蔵狩（狩蔵）や浦浜などが書き上げられた後、畠・木庭の記載が続く。ほとんどが畠や木庭・木庭畠であり、畠は「丁」でその面積が示され、木庭については「斗蒔」「升・斗蒔」が付されている。

この点に関して注目されるのは、鈴木哲雄氏による常総地域の「ほまち」史料の考察である〔鈴木 2001〕。鈴木氏は、山口常助・古島敏雄・永原慶二・根本（斎藤）茂各氏らの諸研究を出発点として、下総国の香取文書や常陸国の史料から「ほまち」史料を収集された。鈴木氏は、ほまちは常総地域において中世を通じて存在した耕地であり、例外的な存在とみることができないとされる。次に鈴木氏の結論の一部をあげてみよう。

①ほまちとは、低湿地や谷田などの湿田に作付けされた稲作耕地である。また、ほつくは田畠の両方があり、田地の場合にはその多くが湿田に作付けされ、畠地の場合は屋敷の際などに作られたものであり、ほつくこそは、実際の耕作民の生活に密着した開発地であった。

②ほまちやほつくには、「小規模」なものが多かったが、中には二斗蒔や一斗五升蒔など、換算すればほぼ1段120歩や1段にあたるほまちも存在していた。

③ほまちの丈量方法として重要なことは、「一枚・一所・一」と表記されたことよりも、斗蒔や升蒔などという播種量によって表示されたことに意味があり、ほまちは湿田における直播耕地の一形態であった可能性がたかい。また、ほまちは畠地における播種法と密接にかかわるため、ほまちと畠地と一括される場合もあった。

本章との関わりからいえば、③が重要であり、常総地域のほまち・ほつくと対馬の畠・木庭（焼畑）との間の共通性を見出すことができる。対馬では、直播耕地である畠・木庭（焼畑）は、「一所」や播種量で表示されるケースが多く、しかもそれらが主要な耕地であったので

ある。

## おわりに

最後に本章で述べたことを簡単に要約しておこう。

1 節では、朝鮮人の見た対馬のイメージや朝鮮米の輸入について述べた。

2・3 節は、大山小田文書の検討を通じて、課役の内容とそこから窺える百姓の生業や、所領について論じた。海の領主大山（小田）氏は、製塩や漁業・交易に従事する百姓を掌握して、鎌倉時代末期、少弐氏に対して年貢（塩）・網の用途（銭）・公事を納入した。これらの課役は、荘園公領制のもとでの海民に対する課役と、基本的には変わるところはない。14世紀後半、宗氏による対馬支配が本格化すると、宗氏は、大山氏を通じて網人ら百姓の掌握をはかり、また高麗との交易船に賦課する高麗公事を、大山氏に対して免除している。また荘園公領制下の所領設定の影響を受けて、大山氏の所領が安堵され、そのことは15世紀前半に本格化する。15世紀前半は、宗氏は大山（小田）氏に対して、百姓からの公事の徴収を徹底させ、また大山氏に大型の漁獲物を上納させた。15世紀後半、公事は多様化するが、大山氏は多くの公事を免許（免除）される特権を得ている。16世紀前半、小田氏は、従来の漁業・交易に対する公事が免除される一方、坪付が作成されて、細かく知行地が安堵されるようになった。

4 節では、下作職・下地職が設定されている例を紹介した。また所領表記の類型として、「一所」表記・貫文表記や「斗」「升」表記があることを指摘した。「斗」「升」表記については、常総地域の「ほまち」との共通性を見通した。

本章全体としては中世文書の紹介という側面が強く、特に第4節の内容には十分に踏み込めなかった。今後は、他の文書群を広く渉猟し、本報告書の成果とつきあわせていくことを課題としたい。

## 【引用・参考文献】

- 網野善彦 2001 『中世民衆の生業と技術』東京大学出版会  
荒木和憲 2002 「対馬島主宗貞茂の政治的動向と朝鮮通交」『日本歴史』第653号  
李 領 1999 『倭寇と日麗関係史』東京大学出版会

- 伊藤幸司 2002 「中世後期における対馬宗氏の外交僧」『年報朝鮮学』第8号  
大石直正・高良倉吉・高橋公明 2001 『日本の歴史14 周縁から見た中世日本』講談社  
長 節子 1987 『中世日朝関係と対馬』吉川弘文館  
1990 「孤草島釣魚禁約」 網野善彦他編『海と列島文化3 玄海灘の島々』小学館  
2002 『中世 国境海域の倭と朝鮮』吉川弘文館  
黒田省三 1969 「対馬古文書保存についての私見」『国士館大学人文学会紀要』第1号  
1971 「中世対馬の知行形態と朝鮮貿易権—『宗家判物写』の研究—」『国士館大学人文学会紀要』第3号  
佐伯弘次 1985 「中世後期における大浦宗氏の朝鮮通交」『歴史評論』第417号  
1990 「国境の中世交渉史」 網野善彦他編『海と列島文化3 玄海灘の島々』小学館  
1997 「一六世紀における後期倭寇の活動と対馬宗氏」 中村質編『鎖国と国際関係』吉川弘文館  
1998 「中世対馬海民の動向」 秋道智彌編著『海人の世界』同文館出版  
2000 「宗家文庫の中世史料」『九州文化史研究所紀要』第44号  
後、増補して佐伯弘次編 2001 『宗家文庫の総合的研究』文部省科学研究費補助金報告書に再録（本稿の引用は、同書による）。  
2003 「海峡論Ⅱ 対馬・朝鮮海峡」 赤坂憲雄他編『いくつもの日本Ⅲ 人とモノと道と』岩波書店  
鈴木哲雄 2001 「常総地域の『ほまち』史料について」 同『中世日本の開発と百姓』岩田書院  
関 周一 1995 「朝鮮半島との交流 対馬」 網野善彦・石井進編『中世の風景を読む？ 東シナ海を囲む中世世界』新人物往来社  
1999 「朝鮮王朝官人の日本観察」『歴史評論』第592号  
2002 『中世日朝海域史の研究』吉川弘文館  
中世海事史料研究会編（網野善彦監修） 2003 『鎌倉時代水界史料目録』東京堂出版  
竹内理三 1951 「対馬の古文書—慶長以前の御判物—」『九州文化史研究所紀要』第1号  
田中健夫 1959 『中世海外交渉史の研究』東京大学出版会  
1975 『中世対外関係史』東京大学出版会  
1982 『対外関係と文化交流』思文閣出版  
中村栄孝 1965 『日鮮関係史の研究』上巻、吉川弘文館  
村井章介 1993 『中世倭人伝』岩波書店  
山口隼正 1989 『南北朝期九州守護の研究』文献出版

〔史料〕

日本側史料

- 岩城卓二・小島道裕 1992 「資料紹介 対馬番家（小宮家）  
文書」『国立歴史民俗博物館研究報告』第39集  
佐伯弘次・有川宜博 2002 「大山小田文書」『九州史学』第  
132号  
豊玉町教育委員会 1995 『豊玉町の古文書（中世文書）』  
長崎県史編纂委員会編 1963 『長崎県史』史料編第一、吉川  
弘文館

朝鮮側史料

- 『高麗史』（活字 一～三、索引） 1977 国書刊行会  
（影印本 上・中・下） 1972 亜細亜文化社〔ソウル〕  
『高麗史節要』（影印本） 1987 学習院大学東洋文化研究所  
『朝鮮王朝実録』（影印本） 1953～67 学習院大学東洋文化  
研究所（全56冊）  
1955～63 韓国国史編纂委員会（全49冊〔索引1冊を含む〕）  
（日本史料編纂会編 1976～95 『中国・朝鮮の史籍におけ  
る日本史料集成』李朝実録之部（一）～（一一）、国書刊行会）  
宋希環（村井章介校注） 1987 『老松堂日本行録』岩波書店  
申叔舟（田中健夫校注） 1991 『海東諸国紀』岩波書店



烏帽子岳から見た浅茅湾（2002年9月7日）

# 対馬中世文書の現在

徳永 健太郎

## はじめに

「対馬は中世文書の宝庫である」という言葉は、戦後まもなく対馬に渡った田中健夫が記した言葉<sup>(1)</sup>であるが、あえてその言葉を繰り返さざるをえないほど、南北約百キロのこの島には大量の中世文書が今日に至るまで伝えられてきた。そして、それらの文書を調査し伝えようとする努力もこれまで多くの先人たちによって営まれてきた。しかしながら、その営みに比例するほどには対馬の中世文書の調査状況は広く知られていないように思われる。本稿ではその営みを追っていくとともに、対馬の古文書の現在の調査状況を示すことによって、“対馬中世文書の現在”の一端を示していきたい。

## 1 対馬における文書調査の経緯

### (1) 戦前までの史料調査

#### ① 御判物写

対馬における文書調査の最初にして最大級のものが、江戸期に断続的に行われてきた対馬藩によるいわゆる「宗家御判物写」の編纂事業である。対馬藩は、数次にわたって島内に残る「御判物」を提出・書写させており、その書き上げが「御判物写」という形で現在に残っている。「御判物写」については、すでに竹内理三・黒田省三・佐伯弘次らによって紹介され、また『長崎県史』にその一部が翻刻されている。

本稿では紙幅や時間的制約などから、判物写については調査対象から外さざるをえなかったが、宗家文庫中に存在した「御判物写」を整理した佐伯によると、「御判物写」は現在、(一)長崎県立対馬歴史民俗史料館所蔵の宗家文庫本、(二)内野対琴「反故廼裏見」所収御判物写、(三)九州大学九州文化史資料室(旧九州文化史研究所)本、(四)韓国国史編纂委員会本が確認されている<sup>(2)</sup>。

#### ② 内野対琴「反故廼裏見」

内野対琴(1858～1916)は、対馬で生まれ育った地方史家である。彼は古文書から聞き取りに至るまで、対馬のさまざまな資料蒐集に全力を尽くし、その成果が全27冊(現在第24・第25の3冊を欠く)の『反故廼裏見』として纏められている。このうち古文書に関しては、原文書のほか、判物写も筆写している。現在は対馬歴史民俗資料館に所蔵され、長崎県立図書館が撮影した写真帳が同図書館と史料編纂所に架蔵されている(第2・第24・第25が欠)。詳しくは佐伯論文を参照されたい。

#### ③ 東京帝国大学・史料編纂所による採訪

1919年5月、後の東京帝国大学教授となる平泉澄(1895～1984)が、対馬におけるアジュールを調査するために来島した際、いくつかの文書を謄写している。この時謄写された文書は「対馬採訪文書」として現在東京大学史料編纂所に架蔵されている。

また、1936年には史料編纂所による採訪が行われ、やはり同所に架蔵されている。

#### ④ 九州帝国大学による採訪

1936年に、九州帝国大学文学部教授であった長沼賢海(1883～1980)は宗家文書の調査を行ない、多くの謄写本を作成した。現在それらは九州大学九州文化史研究所に架蔵されており、『九州文化史研究所文書目録』によってその内容を知ることができる。先述の九州文化史研究所本「御判物写」もこの時謄写されたものである。また、現在では原本の所在が不明となっている「内山家文書」もおそらくこの時影写されたようであり、影写本が同資料室に、その影写本を撮影した写真帳が史料編纂所に架蔵されている。

### (2) 戦後まもなくの対馬調査とその成果

戦前は要塞地帯であり交通も不便だった対馬に、戦後まもなく、いくつもの学術調査が行なわれた。この時期は、対馬の学術的研究の一大画期であったと評価できよう。その嚆矢をなすのは、1947年より始まった学術研究

会議による「近世庶民史料調査」である。この調査は、文部省人文科学研究課が学界などの協力をもとに、戦後の混乱のなかで史料の散逸を防ぐ目的で開始した調査であり、その事業はのちに設立された史料館（現国文学研究資料館史料館）に継承された。この調査において、九州を担当する第九科会では「対馬史料調査」が、1949年度の重点調査として取り上げられることになった。

「近世庶民史料調査」が開始された年、東京大学史料編纂所編纂官から九州大学教授に転任した竹内理三（1907～1997）は、翌年の対馬史料調査に参加し、半月にわたる滞在の間、「目にふれる中世文書は片はしから謄写した」という<sup>(3)</sup>。その成果と、九州大学の九州文化史研究所に所蔵されていた「御判物写」の写本とを比較・照合・整理した結果、慶長年間までの文書について、所蔵者1023家、文書数6326通という驚くべき量の古文書を確認したのである。その成果報告である「対馬の古文書―慶長以前の御判物―」は、『九州文化史研究所紀要』創刊号に「対馬の史的研究」と題する共同研究論文6本の一つとして掲載された。戦後まもなくの成果ではあるが、対馬の古文書の全体像を把握し紹介した業績として、現在に至るまでなお参照すべき先行研究であると言える。また史料編纂所には、1950年に竹内が手写した「対馬古文書纂」と「対馬古文書目録」が架蔵されており、竹内の史料蒐集の一端を知ることができる。

また戦後まもなく行なわれ、宮本常一（1907～1981）の『忘れられた日本人』の第1章「対馬にて」で一般的にも知られる、九学会連合による対馬調査では、正規の調査対象として史料調査が含まれていたわけではないが、東京大学史料編纂所員の田中健夫が調査に同行し、その概要を報告している<sup>(4)</sup>。

### (3) 『長崎県史』史料編による宗家判物写の翻刻

対馬に大量の中世文書が残されていることを竹内理三は明らかにしたが、それらの文書はこれまで一度も翻刻されたこともなく、ごく一部が影写本ないし写本の形で史料編纂所に架蔵されていただけであった。もちろん現在のように写真撮影もされないままであった。したがって対馬の中世文書は、ただ大量の古文書の存在だけが知られた状態におかれていたといえる。しかしながら、先述のように九大九州文化史研究所には「御判物写」の謄

写本が所蔵されており、それらを比較・照合・整理する作業によって、すでに竹内は対馬中世文書のおおよその輪郭を把握していた。

そこで『長崎県史』編纂事業に際し竹内は、田中健夫、瀬野精一郎とともに、九州文化史研究所所蔵「御判物写」の翻刻を企図し、その成果が『長崎県史』史料編一（以下『県史』と略）に収録された2519通として結実した。『県史』の刊行によって、対馬に残された大量の古文書を活字の形で見るができるようになり、中世の対馬に関する研究状況は飛躍的に進化したと言えるだろう。

ところで『県史』の底本は、すでに述べたように九州文化史研究所所蔵の謄写本であるが、当時確認しえた原本・写真・影写本・謄写本などと対校を行なっている。もちろん、その後の調査で原本の存在が明らかになり、写真撮影が行なわれた文書が少なからぬ数に上るため、『県史』の利用に当っては細心の注意が必要なことはいうまでもない。

また竹内自身が記しているように、紙幅の関係から加冠状・名字書出・官途状といった様式の文書をほぼ割愛しており、したがって対馬中世文書の全貌はもとより、御判物写に収録された文書の全貌をも伝えるものではないということも、利用する者としては常に踏まえねばならない点ではある。

しかし、『長崎県史』によって対馬中世文書の相当の部分が翻刻されたということは対馬の史料調査史上画期的な成果であり、対馬中世文書を知る上でもっとも基本となる史料集であるといえよう。

### (4) 黒田省三と国士舘大学による悉皆調査

#### 一附：田代和生による文書目録の作成―

戦後まもなく対馬に渡り対馬中世文書を総合的に調査する礎を築いた竹内理三から約20年後、国士舘大学の黒田省三（1908～1972）は、全島に及ぶ対馬史料の悉皆調査・写真撮影を企図した。その調査規模は、田代和生が「直接調査に当たった人員はもとより、調査対象となった家数・蒐集史料点数等、これまでにない大がかりなものであった」と述べるとおり、対馬史料の悉皆調査としては、はじめてのものである。

国士舘による調査では、島外所在文書も含め、計87家の文書が調査・撮影されている。



黒田は残念ながら、国士舘大学の『人文学会紀要』に調査報告と論文を執筆した直後に没してしまったため、彼によって本格的な対馬中世文書の全貌を紹介する機会は失われてしまった。しかしながら田代和生が、黒田の撮影した焼付をもとに文書目録を作成した。田代編『対馬古文書目録』がそれである。田代の努力によって、黒田の撮影した古文書の全貌が知られるようになったことは、対馬の中世文書の全体像を把握する上で大きな前進であったと言える。

現在黒田の撮影した写真は、焼付を架蔵する国士舘大学および焼付を購入した史料編纂所架蔵写真帳「対馬古文書」として閲覧することができる。

#### (5) 長崎県立長崎図書館による悉皆調査

黒田らの調査とほぼ時期を同じくする形で、長崎県立長崎図書館においても、対馬における古文書の悉皆調査計画が始動した。その第1巻の刊記によると、対馬全土の文書探訪計画は昭和42年度から開始され、地元町村会の協力によって上対馬・上県町に36家に所蔵されている文書をマイクロフィルム6巻に収めたとある。

長崎図書館では当初、撮影した文書のダイジェストを紙焼きしていたようであるが、その後すべてのフィルムを紙焼きする方針に変更したようで、当初紙焼きされた上対馬町の撮影分は改めて全コマが紙焼きされ、配架されている。

長崎図書館の探訪は1967年から数年間におよび、島内の文書の主なものは撮影が行われた。国士舘による撮影との相違は、国士舘が中世文書を中心としていたのに対し、長崎図書館は当初から悉皆調査を目指していた点である。そのため国士舘の調査では近世文書のみ所蔵していたために調査・撮影が行われなかった文書が、長崎図書館では調査・撮影されていることもある。もちろん、国士舘の調査分に含まれていて長崎図書館には含まれていない文書群もある。同一所蔵者の写真帳でも、両者の調査においてコマ数が大きく異なっている場合、いずれかの撮影分では近世文書が撮影対象から外れている場合があるので注意が必要である。また史料編纂所の『対馬古文書』は、両者の調査分のうち、中世文書を中心に焼付けの選択が行われていることが多いので、近世文書については長崎図書館によって撮影されていても史料編纂

所には架蔵されていないケースも見受けられる。この点も注意されたい。

#### (6) 文化庁・長崎県教育委員会による調査

経典・文書に関しては、山本信吉「対馬の経典と文書」(『佛教藝術』95号、1974年)にその概要が、また長崎県教育委員会編『長崎県文化財調査報告書』第16集「対馬の文化財」に、調査した文書・経典のリストと主な史料の解説が掲載されている。またこの調査が行われたのち、早田家文書の「朝鮮国告身」が国の重要文化財に指定されている。

#### (7) 史料編纂所による「対馬史料調査」

東京大学史料編纂所では、先述の通りすでに戦前、平泉澄による対馬史料探訪の成果が謄写本として架蔵されており、また戦後まもなく田中健夫が九学会調査に同行する形で史料調査を行なっている。しかし対馬全島の悉皆的な史料調査は行なわれていなかった。

史料編纂所が対馬史料の本格的収集に乗り出すきっかけとなったのは、1974年、所員の瀬野精一郎が長崎県立図書館に赴き、同図書館によって撮影された史料のフィルム焼付を購入することになったところからであるといえる。『東京大学史料編纂所報』(以下『所報』と略)の田中健夫と瀬野の報告によると、「国士舘大学で未撮影の史料を長崎図書館のフィルムによって補充することを意図し、長崎図書館のフィルムのなかから国士舘大学ですでに撮影した分を除外する作業を行い、中世文書を中心に約二万コマの焼付を依頼した」という<sup>(5)</sup>。現在史料編纂所に「対馬古文書」として架蔵されている101冊の写真帳は、このような経緯により、1975年に焼付の購入が行なわれたものである。また、明治になってから対馬の資料調査を行なった内野対琴による「反故廼裏見」の同図書館による焼付もこの時架蔵されている。なお、第2巻の写真が撮影されていないのはすでに述べたとおりである。

同所ではこの翌年には宗家文庫の調査に着手し、大量の対馬藩関係史料の整理が開始された。

1977年夏、史料編纂所は「対馬史料調査」として西山寺・万勝院などの史料調査を行なった。この調査こそが、1980年代から90年代という長期にわたって継続された

「対馬史料調査」の嚆矢であった。1979年の『所報』には、『対馬古文書』の欠を補い信頼度を高めるための作業として、長期的な展望のもとに、出発した」とある。史料編纂所の調査は、当初から長期計画をもって臨んでいた点、また個々の文書群の悉皆調査を目指していた点で、これまでの調査とは異なる画期的なものであったと言える。1980年度には「前近代対外関係史の総合的研究」という課題で文部省科学研究費（一般研究C 代表者田中健夫 課題番号451064）の報告書が刊行され、史料調査により作成された文書目録と、村井氏作成になる対馬における古文書所在一覧とが掲載されている。本稿付表は、この所在一覧をベースとしている。

科研費報告書以降も「対馬史料調査」は継続して行なわれ、その成果は史料編纂所架蔵写真帳と『所報』掲載の文書目録として示されている。

#### (8) 個別史料群の紹介

元来対馬に所在し、様々な事情で現在島外に所在する史料の紹介も行なわれている。

まず宗氏関係の史料として、田中健夫が翻刻・解説を行なった『大永享禄之頃 御状并書状之跡付』・『朝鮮送使国次之書契覚』がある<sup>(6)</sup>。前者は、「大永・享禄・天文・弘治・永禄年間に対馬の守護（島主）と守護代から北九州地方の大名や豪族に充てて差出した書状の控えを集成したもの」であり、田中によって324通に至る通し番号が新たに付されている。戦国期における宗氏と九州諸大名の動向を知るのに重要な史料である。現在原本は大韓民国国史編纂委員会が所蔵しており、この翻刻は史料編纂所架蔵の謄写本を底本としている。また後者は、「宗左衛門大夫覚書」という無題の記録の部分と「印冠之跡付」「国次之記録」等と称される部分とに大別され、後半部が『書契覚』の内容である。対馬宗氏が厳原にて発給した、賊船でないことを示す文引の控と、対馬北端の鰐浦における通過船舶の記録からなっている。現在は同じく大韓民国国史編纂委員会の所蔵である。

西村圭子が翻刻した『諸家引付』<sup>(7)</sup>もまた、写本が韓国の国史編纂委員会に所蔵されている史料の一つであるが、原本は現在所在不明である。この史料は、時期的には『大永享禄之頃 御状并書状之跡付』の後に続く、永禄三年から八年のあいだに対馬守護（島主）宗氏によ

て、他の諸大名に発給された文書の集成である。収められた文書数は全170通、やはり西村によって通し番号が振られている。

この両者は、時期的にも内容的にも、一連の史料群と見るべきものであると指摘されている。

宗氏以外の文書としては、まず国立歴史民俗博物館が所蔵する番家（小宮家）文書の紹介があげられる<sup>(8)</sup>。本文書は、内容的に小宮氏に関する中世文書と番家に関する近世・近代文書とに二分され、中世文書については、『国立歴史民俗博物館研究紀要』に全点の写真と翻刻が示されている。小宮氏は、伊奈郡付近に拠点を持っていた給人であるが、番家との直接の関係はない。近世にいたって、小宮家より番家に養子に入った人物がおり、その関係で番家に伝えられたものであろうと考えられている。中世文書は全部で16通で、知行充行・官途状などの判物類が多い。なお、16通のうち9通は、すでに『県史』所収の『享禄年迄馬廻御判物帳』に収録されている。また史料編纂所による探訪では、この小宮家に近い一族と思われる小宮家文書が調査されており、その中には歴博所蔵小宮家文書の写も存在するという。

それから、近年対馬歴史民俗史料館の所蔵となった大山小田文書があげられよう。『九州史学』132号では、「前近代の日朝関係史料と地域交流」という特集を組み、佐伯弘次氏の巻頭言とともに、日朝関係史料についての論文3本と史料紹介3本を掲載している。その史料紹介の一つとして、大山小田文書が紹介されている。この文書は、美津島町大山の給人小田家に伝わる文書であり、佐伯氏・有川宜博氏が詳細な解説と花押集を付した紹介を行っている。具体的な内容についてはそちらを参照頂きたい。また本号では、伊藤幸司氏・米谷均氏によって、本稿ではほとんど取り上げるのでできなかった日朝関係史料の考察・紹介が行われている。

それから、厳密には対馬所在ではないが、豊前長野氏に関する文書を紹介した有川宜博「神代長野文書」（『北九州市立歴史博物館研究紀要』第2号、1994年）において、長野氏のうち宗氏の被官化した一族の文書として、長野実氏所蔵の判物写（長崎図書館写真帳）などがあわせて翻刻されている。対馬関係の史料紹介の一つとして取り上げておく。なお、国土館撮影の長野文書ならびに史料編纂所撮影の写真帳には、6点の中世文書が撮影さ

れている（うち5点は判物写に収録され、翻刻されている）。

## (9) 『豊玉町の古文書』

豊玉町は、島内の自治体としては初めて、町内所蔵の中世史料の悉皆調査の結果を、『豊玉町誌』の史料編という位置づけで、『豊玉町の古文書』として刊行した。写真撮影・執筆・編集は小松勝助氏、全体的な監修は佐伯弘次氏である。

『豊玉町の古文書』は、町内に所蔵されている22家の古文書所蔵者の慶長以前の古文書類228通を収録、巻末には編年文書目録と花押集を付録として付けている。また『長崎県史』などの活字化された文書との対応関係も示されている。

また町内所在文書を収録した史料集としての性格の他に、本書は対馬古文書の概説としての性格も併せ持っている。解説では、対馬古文書の調査史や、対馬の古文書に特徴的な形態・様式が説明されており、また中世対馬に関する主要な人物について事蹟・没年等を付すなど、中世対馬を学ぼうとする者にとっての手引きのような役割も果たしている。

なお上対馬町・上県町・峰町においても町内所在文書の調査・撮影が行われたとのことであるが、現段階では目録や写真の公開は行われていないようである。それら調査の成果が公開されたならば、対馬所在古文書群の把握は格段の精度向上が期待され、対馬をめぐる前近代史の研究状況は新たな段階を迎えることであろう。

## 2 現在の史料公開状況

### 一 附表「対馬古文書所蔵者目録」について一

すでに繰り返し述べているように、対馬には膨大な古文書が伝えられてきている。それらを俯瞰するツールとしては、判物写においては、『長崎県史』史料編一の編年文書目録、残存する古文書に関しては、国士館の調査を目録化した田代和己『対馬古文書目録』、文書所蔵者については『前近代対外関係史の総合的研究』に収録されている村井章介編「対馬古文書所在一覧」、またその後の調査に関しては、東京大学史料編纂所の写真帳目録、

同所所報掲載の採訪文書目録が参考となる。

しかしながら、対馬における古文書の全貌はもとより、文書所蔵者の一覧と各所蔵文書の調査状況の概観も、文書所蔵者の代替わりによって所蔵者名が変更になるなど各目録類の比較対照が複雑なため、容易ではない。

中世文書に関しては、国士館大学・長崎図書館・史料編纂所による調査分は、史料編纂所架蔵の「対馬古文書」101冊と同所調査分の写真帳によって、史料編纂所においてほぼ把握できる状況にある。しかし、同所架蔵の「対馬古文書」焼付に際しては、すでに第1章で述べたように、中世文書の撮影条件が良好なものを中心に焼付の選定が行われているため、国士館・長崎図書館双方が同一文書を撮影していても近世文書をより多く撮影している方が落とされていたり、近世文書のみ所蔵者が落とされ、その後の補充調査が行われていないままになっている文書も多い。

したがって対馬古文書の全貌を把握するためには、近世文書や典籍のみの所蔵者も含め、まずは所蔵者一覧を作成することが必要であると考え、中世文書に限定することなく、これまでの文書調査によって把握しえた対馬所在の古文書所蔵者を網羅した所蔵者目録の作成を企図することとした。

本稿では、1980年に村井氏によって作成された「所在一覧」をベースに、国士館・長崎図書館の調査状況、さらに史料編纂所謄写本・影写本・写真帳の架蔵状況、文書目録の有無などを記した「対馬古文書所蔵者目録」を作成した。各目録に掲載された文書群相互の関係については、各目録の所蔵者に付せられた番号を記載することによって対応した。また所蔵者名については、科研目録の氏名を基本とし、所蔵者名が異なる同一文書については記載された氏名を備考に略記して、具体的に判別できるようにした。

なお、『長崎県史』史料編一の所収文書との対応については、今回の史料調査では判物写を範囲として含めていなかったため、本目録では割愛した。また、朝鮮との通交に関する文書所蔵者に関しても、対馬所在分以外に関しては本目録では把握しえなかった。

## 注

- (1) 田中『対外関係と文化交流』(思文閣出版、1982年) 434頁。
- (2) 佐伯「対馬宗家文書の中世史料」(『宗家文庫資料の総合的研究』平成10～12年度科学研究費補助金基盤研究(B)(二)研究成果報告書(課題番号10410081)。
- (3) 竹内「九州地方の地方史研究(一)－九州の古文書」(『歴史評論』117、1960年)。
- (4) 「対馬の史料調査」(『日本歴史』30、1950年)。
- (5) 『所報』10号、1975年。
- (6) 田中「『大永享禄之比 御状并書状之跡付』付 解説」(『朝鮮学報』80、1976年)『朝鮮送使国次之書契覚』(『九州史料叢書』3、1955年)。のちに二編とも『対外関係と文化交流』(思文閣出版、1982年)所収。
- (7) 西村「対馬宗氏の『諸家引着』覚書」(『日本女子大学文学部紀要』34、1985年)。
- (8) 岩城卓二・小島道裕「史料紹介 対馬番家(小宮家)文書」(『国立歴史民俗博物館研究報告』39、1992年)。

## 【凡例】

## 〔本目録の概要〕

- ・本目録は、対馬に所在が確認される、ないしかつて対馬に所在していたと認めうる古文書所蔵者の一覧である。
- ・本目録は「対馬中世文書の現在」附表であるが、古文書所蔵者に関しては、今後の調査の便宜を鑑み、これまでの調査によって現在確認することのできる古文書所蔵者をすべて掲げた。
- ・本目録の作成に当たっては、以下の表・目録を利用した。
  - 1 東京大学史料編纂所による昭和55年度科学研究費補助金(一般研究C)研究成果報告書『前近代対外関係史の総合的研究』(課題番号451064)所収の「対馬古文書所在一覧」(村井章介、1981年2月作製)
  - 2 田代和生編『対馬古文書目録』(『対馬風土記』第12号別冊、1975年)
  - 3 東京大学史料編纂所編『東京大学史料編纂所写真帳目録』(東京大学出版会、1996年)
  - 4 長崎県教育委員会編『長崎県文化財調査報告書』第16集「対馬の文化財：昭和48年度地区別文化財総合調査概報」(同委員会編、1974年)
  - 5 長崎県立長崎図書館所蔵『対馬の古文書』(同図書館所蔵、現物にて調査)

- ・本目録の作成に当たっては、以下の論文・報告を参照した(上掲報告書・目録所収のものを除く)。

- A 竹内理三「対馬の古文書－慶長以前の御判物－」(『九州文化史研究所紀要』1、1951年)
- B 黒田省三「対馬古文書保存についての私見」(『国士館大学人文学会紀要』1、1969年)
- C 山本信吉「対馬の経典と文書」(『仏教芸術』95、1974年)
- D 岩城卓二・小島道裕「資料紹介 対馬番家(小宮家)文書」(『国立歴史民俗博物館研究紀要』39、1992年)
- E 佐伯弘次・有川宜博「大山小田文書」(『九州史学』132、2002年)

## 〔本目録の内容〕

- ・本目録は、上記1目録をベースとし、その他の表・目録によってデータを加筆・訂正している。
- ・排列は、北部の自治体から順に排列した。同一町内での大字の排列、大字内での所蔵者の排列は、原則として1目録に拠り、その順で「番号」を付した。
- ・「文書名」については、1目録を踏襲した。
- ・所在・所蔵者名については、確認しうる最新のデータを用いるようつとめた。各目録ごとの所蔵者名の相違は、備考に記した。
- ・「内容」については、『対馬古文書目録』や『所報』によって概要が示されているものについては、中世文書の初出年のみ示した。長崎図書館のみの架蔵分ないし同館撮影分の点数が多いものについては、適宜内容を記した。
- ・「国士館番号」は2目録の所蔵者番号である。
- ・「長崎図番号」は5の請求記号の子番号を所蔵者番号とみなしたものである。なお、写真帳1冊につき数家の文書が収録されている場合、「-1」のようにさらに子番号を付した。
- ・「科研番号」は、1表の所蔵者番号である。
- ・「史料「対馬古文書」写真」は、史料編纂所が1975年に購入した国士館大学・長崎図書館のいずれの写真帳を架蔵しているかを示した。なお、どちらかが撮影したにもかかわらず史料編纂所に架蔵されていない場合には“無”を記した。
- ・「史料写真帳」は、史料編纂所が原則として採訪し所蔵している写真帳の請求記号を示した。
- ・「所報」は、史料編纂所による対馬史料調査の報告として文書目録が掲載された『東京大学史料編纂所報』の号数を記し、文書目録を確認できるよう配慮した。
- ・「自治体史その他」は、『豊玉町の古文書』や上記D・Eなどによって紹介されている文書を適宜記した。
- ・「備考」には、上記所蔵者名の変遷その他、必要と思われる情報を記した。

表 1-1 対馬古文書所蔵者目録

番号	文書名	所在・所蔵者名	内容	国士館 分目録 番号	長崎図書館 架蔵番号	科研報告 書所在者 番号	史料編纂所 「対馬古文 書」写真架 蔵状況	史料編纂所 写真帳	『所報』 号数	自治体史 その他史料紹介	備考
1	比田勝簡家文書	上対馬町比田勝 比田勝簡氏所蔵	応永6年～	080	002	166	『国』・『長』				
2	比田勝千之家文書	上対馬町比田勝 比田勝千之氏所蔵	天文3年～	081	004-1 047	167	『国』				天文3年の判物は『国』 には無し。
3	平山家文書	上対馬町比田勝 平山益也氏所蔵	永享4年(判物写)～、文安5年(原本)～	082	001-1 035	168	『国』		13		所蔵者名「益也」 ('長)、'茂吉」 ('国)。史料編纂所 撮影写真帳は未架蔵。
4	古里家文書	上対馬町古里 古里一行氏所蔵	永享8年～		003-11 041-3	169	『長』				
5	古里家文書	上対馬町古里 古里智氏所蔵	記(先祖書)、判物<貞享5>、御判物写		003-10 046	170	無				
6	西福寺	上対馬町西泊 本堀智亮氏所蔵	大般若経<巻291(泰定3離校)>、<巻388(至 元16)>、奥書3		003-2	171					
7	修行家文書	上対馬町西泊 修行栄氏所蔵	修行先祖實、判物<永享11・宝徳4>		003-1 036-1	172	無				
8	梅野家文書	上対馬町泉 梅野文子氏所蔵		085		173	『国』				
9	和田家文書	上対馬町泉 和田左近氏所蔵	泉村和田氏系譜、敷島神社志多崎神社等祠官職 之書<正徳元>、鳥帽子持交親許状<正徳元>、 判物<宝永6>、志多崎神社先祖書	084	003-6 041-2	174	『国』				
10	慶龍院	上対馬町豊 慶龍院氏所蔵				175					
11	洲河家文書	上対馬町豊 洲河生虎眞氏所蔵	元弘3年～	083	006 058～060	176	『国』		13		
12	宮原家文書	上対馬町鶴浦 宮原主氏所蔵	元龜2年～		004-2 048～ 053	177	『長』				
13	宮原家文書	上対馬町鶴浦 宮原秀之助氏所蔵	天文3年～		001-2 036-2	178	『長』				
14	大浦隆典家文書	上対馬町大浦 大浦隆典氏所蔵	嘉吉4年～	078	055～057	179	『国』				所蔵者名「一義」 ('長)。
15	大浦政臣家文書	上対馬町大浦 大浦政臣氏所蔵	天文5年～		003-8 042	180	『長』				
16	大浦一泰家文書	上対馬町河内 大浦一泰氏所蔵	文保元年～	079	005	181	『国』				
17	網代家文書	上対馬町網代 網代懿氏所蔵	明応4年(判物写)～、明応8年(判物)～		003-5 039 040	182	『長』				
18	糸瀬家文書	上対馬町唐舟志 糸瀬茂太氏所蔵	天文23年～		003-4 038	183	『長』				
19	玖須家文書	上対馬町玖須 玖須スエ子氏所蔵			003-7 041-1	184	『長』				
20	古藤家文書	上対馬町舟志 古藤道之氏所蔵	嘉吉3年～		004-3 054	185	『長』				
21	武本家文書	上対馬町舟志 武本勝丸氏所蔵	判物<貞享5>		003-9 043～ 045	186	無				
22	糸瀬家文書	上対馬町五根緒 糸瀬孝氏所蔵		076	003-3 037	187	『国』				
23	古藤俊生家文書	上対馬町五根緒 古藤俊生氏所蔵		077		188	『国』				
24	米田家文書	上対馬町琴 米田匡氏所蔵	天文10年～	075		189	『国』				
25	扇家文書	上対馬町小瀬 扇浅太郎氏所蔵	永禄12年～	074		190	『国』				
26	武田家文書	上県町佐須奈 武田吉郎氏所蔵	慶長5年～	071	007-4	115	『国』				
27	八嶋家文書	上県町佐須奈 八嶋三教氏所蔵	慶長15年～	072	010-3	116	『国』・『長』				
28	佐々木家文書	上県町湊 佐々木良恭氏所蔵				117					
29	大浦家文書	上県町友谷 大浦泉氏所蔵	判物<貞享5>		010-6	118					
30	豊田家文書	上県町友谷 豊田清益氏所蔵	応永18年～		010-5	119	『長』		30		
31	福島家文書	上県町友谷 福島清光氏所蔵	倭約の条目<文政2>		008-2	120					
32	佐藤康光家文書	上県町井口 佐藤康光氏所蔵				121					
33	大石善家文書	上県町恵古 大石善氏所蔵				122					
34	佐藤家文書	上県町恵古 佐藤ウメ氏所蔵	慶長13年～		008-1	123	『長』				
35	大石家文書	上県町深山 大石政利氏所蔵	永正5年～	070	007-1	124	『国』・『長』		30		
36	佐藤公則家文書	上県町深山 佐藤公則氏所蔵				125					



37	佐藤家文書	上県町深山 佐藤正毅氏所蔵	天文6年～	069	008-3	126	「国」			
38	佐藤家文書	上県町深山 佐藤光義氏所蔵	天文6年～		010-4	127	「長」			
39	大石家文書	上県町中山 大石堅矢氏所蔵	承図、八郷給人中坪付		007-2	128				
40	阿部家文書	上県町志多留 阿部泉氏所蔵	大永3年～	066	010-1	129	「国」			
41	古藤家文書	上県町志多留 古藤章氏所蔵	永禄7年～		010-2	130	「長」			
42	武田家文書	上県町志多留 武田家幸氏所蔵	永禄10年～、倭人馬堂古羅告身<万曆41、43>	065	009-3	131	「国」・「長」	6171.93-72	28	
43	平山家文書	上県町志多留 平山将監氏所蔵	天文9年～		007-3	132	「長」			
44	米田多家文書	上県町志多留 米田多氏所蔵				133				
45	阿比留家文書	上県町伊奈 阿比留弥七郎氏所蔵	建永2年～、(永享7年遺言字解・在庁之説<抜書 享保7>、「国」は未収録)	064	009-1	134	「国」			
46	小野家文書	上県町伊奈 小野光光氏所蔵	元弘元年(判物写)～、信時老職帖<万曆25>、平信時職帖<天啓3>		009-2	135	「長」			
47	桂輪寺	上県町伊奈 阿比留正順氏所蔵	大般若経<巻1・巻600(至元雕板)><巻18(高麗版)><巻首・奥書8>		010-7	136				
48	豊田家文書	上県町越高 豊田昌由氏所蔵		073		137	「国」			
49	坂口家文書	上県町大ヶ浦 坂口正利氏所蔵				138			27	
50	阿比留俣人家文書	上県町檜滝 阿比留俣人氏所蔵				139				
51	川本一政家文書	上県町檜滝 川本一政氏所蔵				140				
52	川本清家文書	上県町檜滝 川本清氏所蔵				141				
53	川本源盛家文書	上県町檜滝 川本源盛氏所蔵				142	「国」		30	
54	川本定家文書	上県町檜滝 川本定氏所蔵	貞和5年～	067		143				
55	川本惣宏家文書	上県町檜滝 川本惣宏氏所蔵				144				
56	中村家文書	上県町檜滝 中村宗豊氏所蔵				145				
57	平山藤生家文書	上県町檜滝 平山藤生氏所蔵				146				
58	阿比留信則家文書	上県町瀬田 阿比留信則氏所蔵				147				
59	米瀬定家文書	上県町瀬田 米瀬定氏所蔵				148				
60	小宮政良家文書	上県町瀬田 小宮政良氏所蔵				149				
61	小宮安行家文書	上県町瀬田 小宮安行氏所蔵				150				
62	山田家文書	上県町瀬田 山田尚氏所蔵				151				
63	小宮盛定家文書	上県町阿所 小宮盛定氏所蔵				152				
64	吉賀家文書	上県町阿所 吉賀朝光氏所蔵				153				
65	阿比留正之家文書	上県町鹿見 阿比留正之氏所蔵				154				
66	草葉家文書	上県町鹿見 草葉久志氏所蔵				155				
67	豊田タメ家文書	上県町鹿見 豊田タメ氏所蔵				156				
68	豊田親實家文書	上県町鹿見 豊田親實氏所蔵				157				
69	豊田勝家文書	上県町鹿見 豊田勝氏所蔵				158				
70	豊田義光家文書	上県町鹿見 豊田義光氏所蔵				159				
71	梅野家文書	上県町久原 梅野利幸氏所蔵				160				
72	原田喜久男家文書	上県町久原 原田喜久男氏所蔵				161				
73	原田源家文書	上県町久原 原田源氏所蔵				162				
74	原田登家文書	上県町久原 原田登氏所蔵				163				
75	市山家文書	上県町女連 市山貞雄氏所蔵	応永4～	068		164	「国」		30	所蔵者「定男」(「国」)
76	慶雲寺文書	上県町女連 慶雲寺文書				165				
77	阿比留家文書	峰村三根 阿比留孝氏所蔵	判物<建武3～天正11(巻順不同)>24、判物<文化9・慶応4>4	049	011-2	087	「国」	6171.93-47	23	
78	小宮家文書	滋賀県野洲郡中主町吉地 小宮益宏氏所蔵 峰町三根中里 松村因福氏保管								
79	松村家文書	峰村三根 松村因重氏所蔵	応永5年～	048	011-1	088	「国」・「長」	6171.93-57	24	所蔵者「因重」(「国」・「長」)
80	扇家文書	峰村特尾 扇茂光氏所蔵	判物<万延元>		011-7	089				
81	岩佐家文書	峰村木坂 岩佐若己氏所蔵	判物<享保7>、岩佐氏系図		012-3	090				

82	海神社文書	峰村木坂所蔵	海神社社(瀬尾玉置)氏古文書写、御裁許書帳		012-1	091				
83	島井家文書	峰村木坂所蔵	島井康男氏所蔵	061	013-3	092	『国』	6171.93-71	25	
84	島居家文書	峰村木坂	島居勝義氏所蔵	060	013-1	093・094	『国』・『長』	6171.93-69	25	所蔵者「岩男」『長』。科研目録93と94は重複。
85	島居家文書	峰村木坂	島居仁氏所蔵		013-2	095	『長』			
86	島居家文書	峰村木坂	島居徳氏所蔵		012-2	096	『長』			
87	瀬尾家文書	峰町木坂	瀬尾玉置氏所蔵	062		097	『国』			
88	永留家文書	蔵原町日吉 県立対馬歴史民俗資料館寄託	永留久忠氏所蔵、長崎	059	014	098	『国』	6171.93-70	25	所蔵者「久忠」『長』 所在「善町本坂」、 『国』・『長』・『科』
89	平山家文書	陸町青海	平山まき久氏所蔵			099				
90	阿比留家文書	峰町志多賀	阿比留武美氏所蔵	050	017-1	100	『国』	6171.93-63	24	所蔵者「創」『国』・ 『長』・『史』
91	小田家文書	峰村志多賀	小田寛和氏所蔵	053	017-3	101	『国』			
92	津江家文書	峰村志多賀	津江素直氏所蔵	052	017-2	102	『国』	6171.93-68	24	
93	長野家文書	峰村志多賀	長野源助氏所蔵	051	017-5	103	『国』	6171.93-68		有川宜博「神代 長野文書について」(『北九州市 立歴史博物館』 研究紀要2号、 1994年)
94	八坂家文書	峰村志多賀	八坂秀己氏所蔵	054	017-4	104	『国』			
95	円通寺文書	峰村佐賀	円通寺(長留寛仲)氏所蔵	063	011-3	105	『国』	6171.93-64	24	
96	阿比留家文書	峰村嶺	阿比留峰子氏所蔵		011-6	106				
97	八坂家文書	峰村嶺	八坂武雄氏所蔵		011-5	107				
98	安藤家文書	峰村吉田	安藤茂喜氏所蔵	055	016-1	108	『国』	6171.93-52	23	
99	国分家文書	峰村吉田	国分哲士氏所蔵	058	015-2	109	『国』・『長』			
100	薦田家文書	峰村吉田	薦田正人氏所蔵	056	016-2	110	『国』	6171.93-53	23	
101	中村家文書	峰村吉田	中村政氏所蔵		015-1	111	『長』			普光寺関係文書を含む。
102	龍造寺連家文書	峰村吉田	龍造寺連氏所蔵	057	016-3	112	『国』		30	
103	龍造寺誠家文書	峰村吉田	龍造寺誠氏所蔵		016-4	113	『長』			
104	多田家文書	峰村賢佐	多田寿男氏所蔵		011-4	114				
105	久保山家文書	豊玉町仁位	久保山禰平氏所蔵		019-4	051	無	6171.93-49	23	
106	国分家文書	豊玉村仁位	国分文一氏所蔵	036	031-1	052	『国』		『豊』1	所蔵者「保之」『国』・ 『長』・『科』
107	佐伯家文書	豊玉村仁位	佐伯周二氏所蔵	035	019-3	192	『国』	6171.93-12	22	所蔵者「永之」『国』・ 『長』・『科』・『史』
108	佐々木家文書	豊玉町仁位	佐々木謙一氏所蔵		019-5	053	無	6171.93-48	23	
109	三里部流(戦箱)	豊玉村佐志賀・嵯峨・貝附	三ヶ村磯道算書<寛保3>、書状控<嘉永6>		023-3	054	無			
110	四ヶ浦(戦箱)	豊玉村千尋楽・錦川・和板・横浦	四ヶ村規約書<明治33ほか>		023-5	054	無			
111	長岡家文書	豊玉村仁位	長岡豊明氏所蔵	037	021 022	055	『国』	6171.93-2・50	23	所蔵者「明」『長』・ 『科』「公」(『国』、 『史』)
112	仁位要家文書	豊玉町仁位	仁位栗氏所蔵			056		6171.93-68	24	
113	仁位信義家文書	豊玉村仁位	仁位信輝氏所蔵	033	018 029	057	『国』・『長』	6171.93-67	25	所蔵者「信義」『長』・ 『国』・『科』
114	仁位正雄家文書	豊玉村仁位	仁位正雄氏所蔵		030-2	058	『長』		『豊』5	
115	仁位操家文書	豊玉村仁位	仁位操氏所蔵		019-1					
116	日高家文書	豊玉村仁位	仁位信輝氏所蔵		030-1		『長』		『豊』8	所蔵者「信義」(『長』)

117	平山知美家文書	豊玉町仁位 平山知美氏所蔵			020-1	059	無	6171.93-62	24		所蔵者「柳屋」〔長〕・〔科〕
118	松尾家文書	豊玉町仁位 松尾永光氏所蔵	享徳3年～	038	030-3	060	〔国〕	6171.93-34	22	〔豊〕6	所蔵者「家」〔長〕・〔科〕「龍介」〔国〕
119	豊泉寺（妙幢寺）文書	豊玉町仁位 東泉寺所蔵	元禄五部大乗經		020-2	061	〔長〕	6171.93-59	22	〔豊〕 村井章介「対馬仁位東泉寺所蔵の元禄新訳華嚴經について」〔アジアのなかの中国日本〕校倉書房 1988年	所蔵者「妙幢寺」〔長〕・〔科〕
120	山上家文書	豊玉町仁位 山上睦氏所蔵	正慶2年～	034	019-2	062	〔国〕	6171.93-3・14	22	〔豊〕7	
121	酒井家文書	豊玉町永瀬 酒井長蔵氏所蔵			023-1	063		6171.93-37	22		
122	阿比留正雄家文書	豊玉町目附 阿比留正雄氏所蔵		046		064	〔国〕				
123	佐伯智家文書	豊玉町嵯峨 佐伯智氏所蔵	判物<寛保7>、判物<明治2>、坪付帳<享保6>、坪付<明治2>、嵯峨村勘使貯蓄組合規則<明治37>、嵯峨村約定書<明治38>	047	023-2	065	〔国〕				〔長〕では〔国〕撮影分以外の史料を多く撮影。
124	平井家文書	豊玉町嵯峨 平井光幸氏所蔵	判物<天保10>		024-4		無				
125	国分家文書	豊玉町卯美 国分祐二氏所蔵	明徳4年～	040	031-2	066	〔国〕	6171.93-11	22	〔豊〕13	所蔵者「八郎太」〔長〕・〔国〕・〔科〕「弘道」〔史〕
126	波田家文書	豊玉町目口 波田典久氏所蔵			026-02	067		6171.93-38	22		
127	村瀬正明家文書	豊玉町目口 村瀬正明氏所蔵	天正14年～	043		068	〔国〕	6171.93-51	23	〔豊〕14	
128	阿比留昌利家文書	豊玉町深里 阿比留昌利氏所蔵			026-1	069	無	6171.93-34	22		所蔵者「義光」〔長〕・〔科〕
129	青木家文書	豊玉町唐州 青木智久氏所蔵	永禄5年（旧判物）～		025-3	070	〔長〕			〔豊〕15	所蔵者「智通」〔長〕・〔科〕
130	阿比留邦雄家文書	豊玉町唐州 阿比留邦雄氏所蔵	元永6年～		025-02	071	〔長〕	6171.93-35	22	〔豊〕16	所蔵者「忠義」〔科〕・〔史〕
131	阿比留政信家文書	豊玉町唐州 阿比留政信氏所蔵	元永2年～	041	025-1	072	〔国〕	6171.93-13	22	〔豊〕17	
132	波多野家文書	豊玉町志多浦 波多野克己氏所蔵	延徳2年～		026-3	073	〔長〕	6171.93-42	20	〔豊〕18	
133	安野家文書	豊玉町小綱 安野聖一郎氏所蔵	永正14年～		028-02	074	〔長〕			〔豊〕21	所蔵者「和吉」〔長〕・〔科〕
134	村瀬敬三家文書	豊玉町小綱 村瀬敬三氏所蔵		045	027-02	075	〔国〕	6171.93-45	21		〔観音寺文書〕参照。
135	村瀬武一家文書	豊玉町小綱 村瀬武一氏所蔵	永正6年（判物写）～		028-1	076		6171.93-41	21		所蔵者「唯一郎」〔長〕・〔科〕
136	村瀬義雄家文書	豊玉町小綱 村瀬義雄氏所蔵	永正6年～		027-3	077	〔長〕	6171.93-43		〔豊〕20	所蔵者「村瀬登」〔長〕・〔科〕
137	観音寺文書	豊玉町小綱 村瀬武一氏所蔵	観音菩薩像（後欠）、仁位親善社寺観音跡成縁文			078		6171.93-40	21	〔豊〕	〔長〕の「登」所蔵文書と「村瀬武一文書」とは同一か？
138	波多野直行家文書	豊玉町大綱 波多野幹治氏所蔵	元永6年～		027-1	079	〔長〕	6171.93-44	20	〔豊〕19	所蔵者「直行」〔長〕・〔科〕・〔史〕
139	斉藤家文書	豊玉町田 斉藤義正氏所蔵	公儀御役人鏡方八郎御巡検二付御答書<文久元>、公儀御役人鏡方八郎御巡検二付御答書<文久元>、宸<文久3>、田村組長辞令<明治5>		028-3	080	無				
140	佐伯光政家文書	豊玉町田 佐伯光政氏所蔵	佐伯氏系図、家譜、尾崎病院二寄付二付書詞<明治12>、漁業者証明<明治20>、卒業証書<明治24>		028-5		無				
141	瑞応寺文書	豊玉町田 瑞応寺所蔵	判物<元永6>、御坪付帳（後欠）、仁位親善社頼目録之留<寛文3>、仁位親善社境内内間敷致留帳<元禄10>、就上使役当帳<天保9>、口達致		028-4	081	無	6171.93-39	20		〔長〕では〔史〕目録以外の史料も撮影。
142	平山国調家文書	豊玉町田 平山国調氏所蔵	正平19年～	044	033・34-1	082	〔国〕			〔豊〕22	所蔵者「タミ」〔長〕・〔国〕・〔科〕

143	一宮家文書	豊玉村書 一宮多聞氏所蔵	永徳3年(判物写)〜、系図、判物<貞享5>、 判物<享保7>、判物<天保10>、御判写<一宮 勘左衛門>、御判写<梅野治左衛門>、坪付<天 保11>、駄賃人足帳<宝永7>、寛(信使来聘一 件)<文化>、出格之御縁約御出之控<天保5>、 公儀御役人様方御巡検ニ付御差書<文久元>、 殿前防禦御備御達書<文久2>、仁位村天神宮 御名代勤性<慶応3>、長崎神社起之事<寛政4 >、島御子神社氏子札<明治5>	042	024-1	083	『国』				『長』では『国』以 外の史料を撮影。
144	梅野清次家文書	豊玉村書 梅野清次氏所蔵	天文5年〜		024-3	084	『長』		『豊』5	所蔵者「一雄」(『長』・ 『科』)	
145	梅野太郎家文書	豊玉村書 梅野太郎氏所蔵	貞和5年〜		024-02	085	『長』	6171.93-54	『豊』10	所蔵者「一雄」(『史』・ 『史』では貞和5年間 6月20日宗澄茂書下 は未撮影。	
146	梅野初平家文書	豊玉町書 梅野初平氏所蔵	応仁3年〜		034-2		無		『豊』11		
147	森谷家文書	豊玉町書 森谷文郁氏所蔵	永正5年〜、なお宗盛家書下あり。	039	032-1	193	無	6171.93-36	『豊』12		
148	長郷立身家文書	豊玉村佐保 長郷嶋氏所蔵	貞和5年〜		032-2						
149	長郷蔵人家文書	豊玉村佐保 長郷蔵人氏所蔵			032-4	086		6171.93-46	23		
150	築城家文書	豊玉村千尋藏 築城守昌氏所蔵			032-3						
151	梅野家文書	豊玉村銘 梅野勝氏所蔵				039					
152	大浦家文書	美津島町磯知 大浦望人司氏所蔵				040		6171.93-60	16		
153	龜谷家文書	美津島町磯知 龜谷治三氏所蔵		030		041	『国』	6171.93-29	16		
154	神宮家文書	美津島町磯知 神宮英己氏所蔵	文安4年(判物性)〜、永祿10年(判物)〜			042					
155	観音寺文書	美津島町黒瀬 観音寺所蔵		025		043	『国』				
156	大石家文書	美津島町今里 大石從郎氏所蔵	永享12年〜	027			『国』				
157	井家文書	美津島町尾崎 井賀近氏所蔵		028		044	『国』	6171.93-30	16		
158	日下部家文書	美津島町尾崎 日下部愈氏所蔵	応永21年〜	026		045	『国』	6171.93-58	24		
159	早田英夫家文書	美津島町尾崎 早田英夫氏所蔵	文安4年〜、朝鮮告身	029		046	『国』	6171.93-17	18		
160	中尾家文書	美津島町尾崎 中尾治雄氏所蔵	応永31年〜			047					
161	小田家文書	美津島町小船越 小田豊氏所蔵		032		048	『国』				
162	早田左弥太家文書	美津島町小船越 早田左弥太氏所蔵				049					
163	梅林寺文書	美津島町小船越 梅林寺氏所蔵		031		050	『国』	6171.93-17	18		
164	津原家文書	美津島町賀谷 津原和義氏所蔵	貞和4年〜			001	『長』	6171.93-15	18		
165	島尾家文書	厳原町阿須 島尾虎男氏所蔵	応永7年〜	121 122			無				
166	樋口家文書	厳原町阿須 樋口貴氏所蔵		120			無				
167	大石家文書	厳原町阿連 大石マサ氏所蔵		102			無				
168	永瀬家文書	厳原町阿連 永瀬利寿氏所蔵		137			無				
169	橘家文書	厳原町阿連 橘殿母氏所蔵		135			無				
170	加城家文書	厳原町宮谷 藤井勝男氏所蔵		007							
171	寺田家文書	厳原町宮谷 阿比留龍雄氏所蔵	天正19年〜	008		002	『国』				
172	一宮家文書	厳原町宮谷 一宮雄太氏所蔵	弘安3年〜	085		003	『長』	6171.93-1or19	14		
173	田中家文書	厳原町宮谷 田中静子氏所蔵		087			無	6171.93-16	18	所蔵者「森己」(『長』・ 『史』)	
174	津江家文書	厳原町宮谷 津江篤郎氏所蔵				020		6171.93-32	16		
175	柴田家文書	厳原町宮谷 柴田茂雄氏所蔵	応永13年〜		088〜090	005	『長』				
176	保田家文書	厳原町宮谷 保田彦四郎氏所蔵		086		006	無				
177	下田家文書	厳原町日吉 下田徳氏所蔵	文龜2年〜	005		007	『国』		14		
178	佐藤家旧蔵文書	厳原町天道茂 體泉院氏所蔵							22		
179	杉村家文書	厳原町天道茂 松村泰岳氏所蔵		004		008		6171.93-26	16・22		
180	鈴木清一家文書	長崎県諫早市 鈴木清一氏所蔵 原町天道茂 體泉院寄託						6171.93-56			
181	體泉院文書	厳原町天道茂 安藤良俊氏所蔵		003	071〜083	009	『国』	6171.93-56			

182	大山小田家文書	蔵原町今屋敷 対馬歴史民俗資料館所蔵 (蔵原町田角 庄司シナ氏旧蔵)	元成元年～		012	107	010	『国』	6171.93-18	16	所蔵者「庄司シナ」 〔長〕・〔国〕・〔科〕・ 〔史〕
183	対馬郷土館文書	蔵原町今屋敷 対馬郷土館所蔵				092					
184	蔵原町公民館文書	蔵原町今屋敷 蔵原町公民館所蔵	津島島紀事		009	097～101	011	『国』			
185	古藤家文書	蔵原町今屋敷 古藤満氏所蔵			091		012	無			
186	齊藤家文書	蔵原町今屋敷 齊藤定樹氏所蔵	徳治3年～		011	093～096	013	『国』・〔長〕	6171.93-65	16・18・20	
187	八幡宮文書	蔵原町今屋敷 八幡神社所蔵			010		014				
188	修善寺文書	蔵原町大手橋 修善寺所蔵				108～111	015	無			
189	中村家文書	蔵原町大手橋 中村直成氏所蔵	永享8年～		006		016	『国』	6171.93-33	16	
190	永田家文書	蔵原町国分 沢田医院所蔵				103 104	017	無			
191	西山寺文書	蔵原町国分 西山寺所蔵	大永3年～						6171.93-55	13・14	
192	宗家御文庫 御郡 諸役覚書	蔵原町国分 宗家文庫			001	061～070		『国』		16・25	
193	万松院文書	蔵原町国分 万松院所蔵			002					13	
194	田嶋家文書	蔵原町里里 田嶋三雄氏所蔵					018		6171.93-28		
195	陶山家文書	蔵原町浅原 陶山鶴大氏所蔵					019				
196	長家文書	蔵原町久田 長秀吉氏所蔵				105	021	無			
197	小島家文書	蔵原町久田 小島孝之氏所蔵				106		無			
198	川上家文書	蔵原町内院 川上直与氏所蔵	大永4年～		021		022	『国』			
199	阿比留修家文書	蔵原町豆般 阿比留修氏所蔵	康安2年～		013		023	『国』	6171.93-60	16	
200	岩佐家文書	蔵原町豆般 岩佐治氏所蔵			017		024	『国』	6171.93-31	16	
201	小森家文書	蔵原町豆般 小森謙枝氏所蔵	元徳2年～		014	113	025	『国』			所蔵者「左京」〔国〕
202	金剛院文書	蔵原町豆般 金剛院所蔵	永享9年～、高麗版大般若経		016		026	『国』	6171.93-3	16	
203	主藤寿家文書	蔵原町豆般 主藤寿氏所蔵	応永24年～		015	115～117	027	『国』			
204	主藤仁家文書	蔵原町豆般 主藤仁氏所蔵	永正15年～			114	028	『長』	6171.93-61	16	
205	多久頭源神社文書	蔵原町豆般 多久頭源神社所蔵	高麗版大蔵経			112	029	無			
206	本石市家文書	蔵原町豆般 本石市氏所蔵			018		030	『国』	6171.93-60	16	
207	久和家文書	蔵原町豆般 久和兵治氏所蔵	永和(?)3年～		019	118	031	『国』・〔長』			
208	高松茂夫家文書	蔵原町豆般 高松茂夫氏所蔵					032				
209	高松家文書	蔵原町佐須瀬 高松茂久氏所蔵			024	119	033	『国』	6171.93-25	17	
210	初村家文書	蔵原町久根田舎 初村泰男氏所蔵	嘉元4年～		020	123	034	『国』	6171.93-3・23	17	
211	綱崎家文書	蔵原町久根田舎 綱崎幹夫氏所蔵	永正12年～			124	035	『長』	6171.93-24	17	
212	勝村家文書	蔵原町上堀 勝村キヨ(キヨノ?)氏所蔵	永和3年～			125	036	『長』	6171.93-22	17	
213	長瀬家文書	蔵原町椎根 長瀬正和氏所蔵			023		037	『国』	6171.93-21		
214	井田家文書	蔵原町燈根 井田繁道氏所蔵	宝徳3年～		022	133	038	『国』・〔長』	6171.93-20	17	
215	小茂田兵衛神社文書	蔵原町小茂田浜 小茂田兵衛神社所蔵				126～129		無			
216	齊藤家文書	蔵原町小茂田 齊藤卯吉氏所蔵				130 131		無			
217	鈴木家文書	蔵原町小茂田 鈴木勝弥氏所蔵				132		無			
218	齊藤家文書	蔵原町下原 齊藤清祥氏所蔵				134		無			
219	山崎家文書	蔵原町力、記載なし				136		無			
220	財部家文書	広島県大竹市 財部年子氏所蔵	文明3年～		086			『国』			
221	島尾家文書	福岡県八女郡 島尾芳子氏所蔵			087			『国』			
222	蔵瀬家文書	神奈川県相模原市 蔵瀬和子氏所蔵 蔵瀬院寄託							6171.93-27	20	
223	内山家文書	福岡県福岡市東区 九州大学文学部 氏所蔵(影写本)							6171.93-6		
224	御手洗家文書	大分県大分郡湯布院町 御手洗博之氏所蔵	応永16年～					(『長』)			長崎図書館に所蔵を 確認できず



## Ⅱ 水稻文化の儀礼

### バリ島村落の劇場的性格

河合徳枝

#### 1 バリ島の地形と風土

バリ島はインドシナ半島から、オーストラリアへつらなるスンダ列島の島々のひとつで、ジャワ島の東隣、南緯8度、東経115度に位置する。面積は5621平方km、愛媛県とほぼ同じ広さで、扇を広げたような形をしており、東西140km、南北80kmの南海の小さな島である（図1-1）。

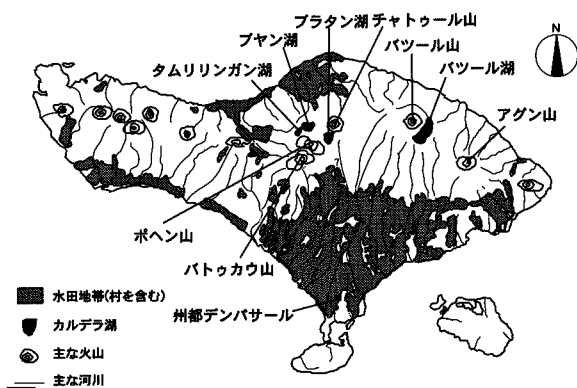


図1-1 バリ島の地形と水田農耕地帯

気候は熱帯湿潤気候で雨季（4月から9月ぐらいまで）と乾季（10月から3月ぐらいまで）に別れている。1年を通じて最高気温が約30度、最低気温が約23度、年間降水量は約2000ミリ程度である。

島のほぼ中央に2000-3000m級の火山脈が東西にはしり、島全体は複雑な起伏に富み、傾斜地が多い。その傾斜地の至る所に、きわめて美しいテラス状の水田（写真1-1）を丹念にすみずみまで形成し、稲作を営んでいる。

#### 2 バリ島の社会と信仰

バリ島は、現在インドネシア共和国の31州のひとつで、行政的にはかつての王朝時代の8つの王国にもとづいた8つの県（Kabupaten）からなり、さらにそれが51の郡（Kecamatan）に別れる。



写真1-1 バリ島のテラス状の水田

人口は約300万人である。

州都デンパサール以外はほとんどすべて農村で、郡のなかに強固で安定した伝統的地域共同体システムがある。デサ（Desa）とそのサブシステム、バンジャル（Banjar）である。デサは、バリヒンズー教の3つの種類の寺院（プラ・プセ＝先祖を祀る寺、プラ・デサ＝村の守護神の寺、プラ・ダレム＝死者を祀る寺）を基本的に備え、冠婚葬祭の自己完結的な単位である。バンジャルはデサのなかで地縁的に組織化された隣組の集落でムラ社会の最小単位である。生活のさまざまな共同作業はすべてバンジャルを単位に行われる。なおこのデサとバンジャルは現在の近代統治国家以前からバリ島社会に伝統的に存在していた。インドネシアではこの伝統的集落単位を生かして行政の単位を形成することに努めたが、その境界が一致しないところもある。バリ島の場合、行政の単位がふるくからの集落単位と異なる場合、それは近代行政システムと二重構造になっており、伝統的単位が解体していない。デサ・ディナス（行政村）に対して、デサ・アダット（慣習村）というシステムが生きている。しかも現実の生活はほとんどデサ・アダットの単位で運営されている。

バリ島の人々の生業はほとんどが農業といえる。一部海岸部に住む人々が漁業や塩田などを営む。近年急激に増加している観光業や商業、公務員や教師なども多いが、かならずといえるほど田畑をもっており、小作人に耕作させるなど何らかの形で農業は営んでいる。

バリ島には祖霊信仰とヒンズー教そして仏教が混淆したバリヒンズーという独特の信仰体系がある。日常から、自然と神々を敬い、供物を絶やさない敬虔な人々である。そしてデサの3種類の寺院の祭礼は、大きなものは210日に一度それぞれで盛大に行われる。その他デサには水の神のお寺、学問の神のお寺、またバンジャルの守神のお寺など10ではたりないほどのさまざまな寺院があるのが一般的である。それらが210日に一度ならず、最低でも新月と満月にはまつりを行う。またさまざまな通過儀礼や結婚式、お葬式など、バリ島の人々はほとんど毎日まつりにあけくれているといっても過言ではない。神々とまつりの島といわれる所以である。

### 3 水田農耕社会バリ島の水系

バリ島はほぼ中央に横たわる火山群により、肥沃な火山灰土と良質な湧き水に恵まれ、水田農耕がふるくから営まれてきた。島全体は中央から海にむかってゆるやかに傾斜しているが、人々は、海岸近くの平野部よりも、森と湧き水が豊かな山麓中腹部にもっとも多く密集して住んでいる。

バリ島の農業用水および生活用水の水源はいくつかの火山の頂上附近にあるカルデラに、天水がたまってできた湖の水である。湖水は一旦地下水となり、山の中腹から渾々と湧き出している。いくつかの湧き水が集まって、沢になりやがて川になり、海に注いでいる。火山脈の南斜面は幾筋もの川が南北にはしっているが、火山灰土の土壌では、水は流れれば流れる程大地を削り、深く切れ込んだ谷川が多い。ただ放っておいたのでは、水ははるか谷底にあり、そのまま海へ落ちていってしまう。バリ島は水の条件は非常にきびしく、深刻な葛藤要因を潜在的にもっているといえる。

このような自然条件を有する灌漑水田農耕社会においては、優れた機能をもつ水利施設にあわせて、給排水をめぐる葛藤を効果的に解決する制御機構を持たなければ、

深刻な水争いを免れることができない。その点において、バリ島では古くからスバック(Subak)と呼ばれる水利組織が営まれており、合理的で適切な水の管理・分配を実現していた。

### 4 水利組織スバックの概要

スバックを構成する人々(会員)の活動は、“Tri Hita Karana (=Three Happiness Causes)”といわれる理念を基盤としている。それは3つの次元が連立した調和の思想で、第一は人間と神々との調和、第二は人間と環境との調和(この環境は自然環境だけでなく人工環境も含む)、第三は人間と人間との調和から構成される。この調和の思想はバリ島社会全体に通底するものであるが、特にスバックにおいては、その活動の物質面ならびに精神面をあわせて制御する強い基本理念となっている。

スバックの規則は、アウィッグ・アウィッグ(Awig-Awig)と呼ばれている。アウィッグ・アウィッグの内容は、会員自身が数世紀をかけて合意をあつめ練り上げたもので、個々のスバックごとに詳細は異なる。その実態を見ると、長年の運用の歴史を反映させた経験の蓄積により、生活のあらゆる面をかなり細かく規定した膨大な内容を持つものとなっている。なお、アウィッグ・アウィッグに対してその規則の力と効果が十分発揮されるよう神々に祈るパスパティ(Pasupati)という儀式が折にふれて会員全員によって行われる。

スバックの組織は、図1-2のとおりである。

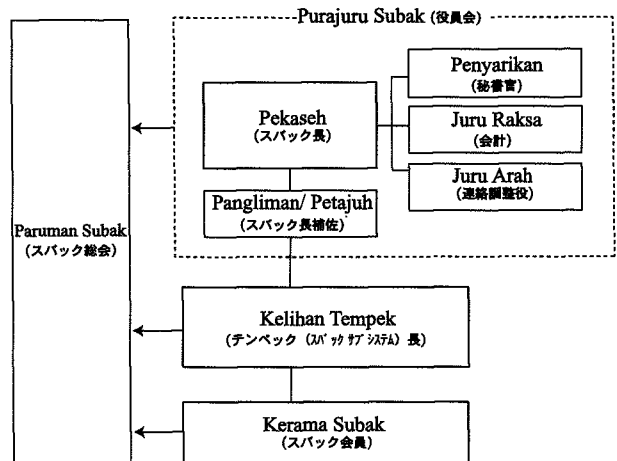


図1-2 スバック組織の基本構成

## 5 スバックを構成するハードウェア

バリ島の灌漑用水の基本的な水源は、火山の頂上附近にあるカルデラ湖である（写真1-2）。それらの湖からは一筋も川は流れ出ておらず、湖水は一旦地下にしみこみ、再び山の中腹から湧き出している。この過程で地中から大量の無機成分を溶かし込んだ上質の用水を利用して、山々の中腹から海岸に向かう斜面に水田が拓かれてきた。

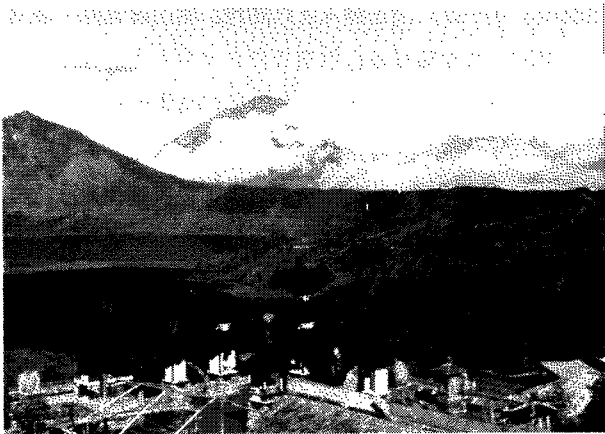


写真1-2 カルデラ湖

備蓄分水施設として最も大規模なものがダム（Dam）である（写真1-3）。これは河川の水を堰き止め、幹線水路に分水する装置で、その水を利用する下流のすべてのスバックによって維持管理される。



写真1-3 大規模な備蓄分水施設ダム

一方、幹線水路の水を個々のスバックに取り入れるトゥムブク（Tumbuku）といわれる中小規模の分水施設がある（写真1-4）。



写真1-4 中規模の分水施設トゥムブク

バリ島では、山の尾根の上から下までくまなく水田が見られ、直観的にはどこから水を引いてくるのか不思議にさえ思われる（写真1-5）。

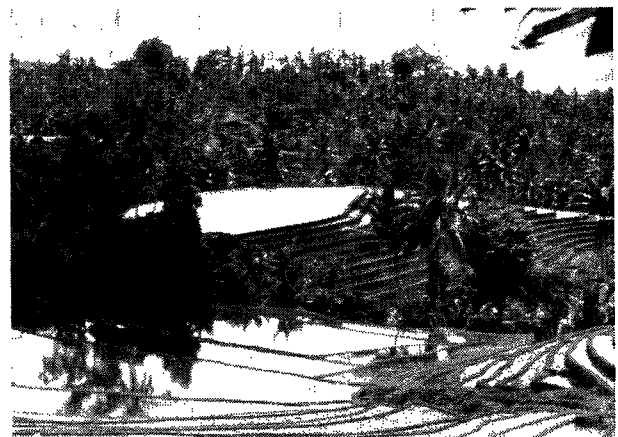


写真1-5 山の尾根にくまなく整備された水田

そこでは川は深く切れ込み、はるか谷底にしか水はない。しかもため池があるわけでもなく、動力で谷底の水を汲み上げているわけでもない。この給水の背後には、岩盤をうがった地下トンネル水路を造って複雑な地形の



## 7 スバックを制御するソフトウェア

スバックは水利組織として先述のアウィッグ・アウィッグによって運営される。ひとつの例によれば、第2条に「会員は各スバック間ならびに各会員間に公平に灌漑が行われるよう灌漑の管理をする」とある。その目的のために、会員は、治水工事、施設の清掃・修繕、毎日の水量計測・記録等の各種作業を共同で行う。

それと同時にスバックでは、信徒集団として、第4条に「会員は、寺を造り、水の神、稲の神を祀らねばならぬ。植え付け前、灌漑の当初において、まつりを行う。…」とある。

スバックは先述したようないくつかの寺を祀り、会員はスバックが関わるそれらすべての寺の信徒になっている。そして、稲の成育過程と結びつき、苗代の準備から米の備蓄まで何段階にもわたるさまざまな儀式やまつりを、個人および共同で行っている。水田で各個人が行うものからひとつのスバックが行うもの、時には数ヶ月の準備期間と財力をかけ、複数のスバックが数千人規模で行うものまで大小さまざまなものがある。

さらに第19条には、「スバックの会員は月に一回総会を開く。その日時はクリアンがこれを決定し、連絡調整役が会員に伝達する。連絡調整役は会場の中央におく神々への供物をつくる。会員は衣服を整えて参集しなければならない。衣服不適當なる者は罰金に処する。連絡調整役が供物をつくらざるとき、供物の内容整わざるときも、罰金とする。…」とある。スバックの会議は寺院内の集会所で行われ、中央に供物がそなえられ、衣服も冠婚葬祭用の正装が使われ、厳肅な雰囲気の中で神前会議として行われる。こうしたさまざまな側面に、スバックの信徒集団としての性格はかなり色濃く頻繁に現れる。

## 8 水系制御とまつり

以上のように、バリ島のスバックは、水を管理・分配する実利的目的とともに、儀式やまつりを行うことがもうひとつの重要な目的として規定され、水仲間であると同時にまつり仲間でもあるという性格が強調されている。

まず、神々を祀る信徒集団内では、個人のわがままや身勝手な言動がきわめて強く制御される。先述のように、

スバックの会議は神前で行われ、そうした場では利己的行動や不義、不正が強く自己規制され、我田引水に陥ることが避けられて公正な議論や裁決が導かれやすくなる。また、スバックによって執行される祝祭が、その魅力によって構成員を結集させる大きな効果を発揮する。参加する人々に歓喜と平安とをもたらす絢爛たる祝祭世界は、快感を誘起しストレスを解消する手段としてきわめて効果の高い水準に達しており、共同体の構成員を積極的に結集させる力を十分に備えている（写真1-8）。



写真1-8 バリ島の祝祭

## 9 地域共同体と水利共同体との二次元組織

先述したようにバリ島には、自己完結性の強い伝統的地域共同体がある。デサ（Desa）とそのサブシステムとなるバンジャル（Banjar）であり、そこに帰属しなければ、バリ島の人々は生存できないといつてよい。

また、バリ島の人々は、ほとんどが水田を所有しており、水を配分してもらうために人々は全員どこかのスバックに帰属する。そのため、1人の人間はバンジャルとスバックとの2つの組織に同時に属することとなる（図1-5）。

バンジャルは家の位置、スバックは水田の位置によって決まるため、バンジャルとスバックとはまったく異なる次元で独立して組織化されることになる。したがってそのメンバーは共通せずくい違う構成となる。また、1戸で所有するいくつかの水田が異なる水脈の水を利用し



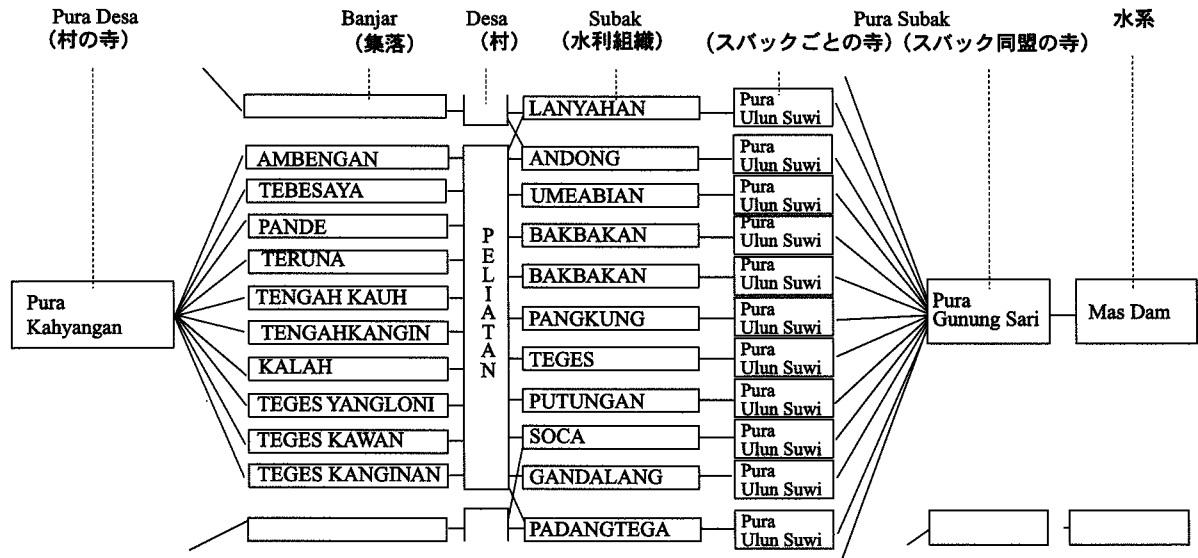


図1-5 プリアタン村のバンジャルとスバックとの関係

ている場合、1人の人間が複数のスバックに所属することも珍しくない。このようにひとつの共同体の人々が多元的に組織化され、しかもそれぞれの組織が神々を祀る信徒集団であることによって、次に述べるような葛藤制御の効果が導き出される。

10 地域共同体と水利共同体との相互作用による  
ネガティブフィードバック制御

バンジャルとスバックとの関係をモデル化すると（図1-6）、異なるバンジャル同士の争いは、ひとつのスバック内の分裂を意味するため、心理的・社会的に抑制される作用が働くと考えられる。反対に、異なるスバックに属する家々が、ひとつのバンジャルに統合されて寺を祀っている構造も、異なるスバック同士の対立は、ひとつのバンジャル内に分裂を導くことを意味し、それに対する抑制作用が働くものと期待される。こうした同じ神々を祀っている同一の信徒集団であることからその分裂を避けようとする抑止力は、無視できないものと考えられる。

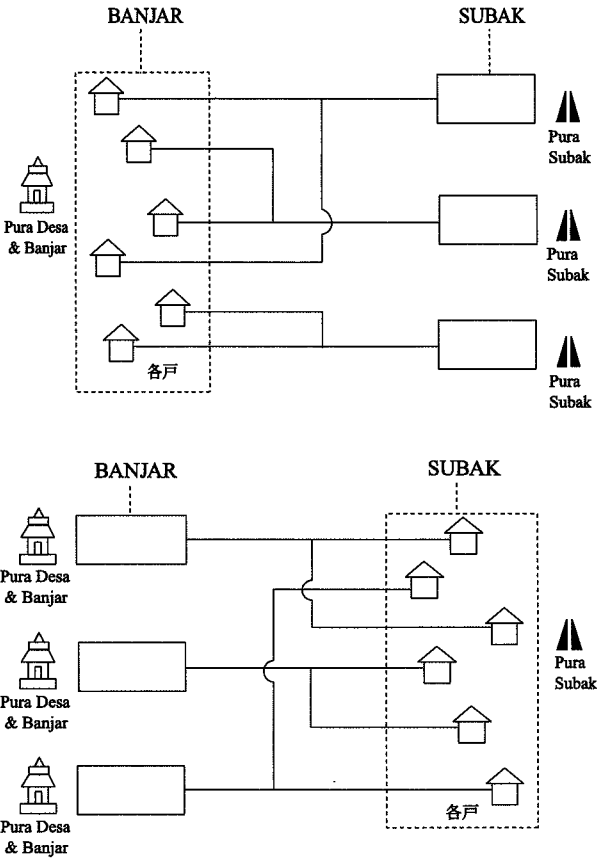


図1-6 バンジャルとスバックとの関係

11 人間の自然な情動メカニズムにもとづいた葛藤制御

バリ島においては、1人の人間が複数の寺院の信徒に

なっていることは稀ではない。最低でもデサの3種類の寺院には同時に信徒になっており、さらにスバックに関係するさまざまな階層の寺院にも属し、1人の人間がま

つりに費やす時間は、どんなに少なく見積もっても1年365日の内100日を下らない。主なまつりの種類を表1-2、1-3に示した。

まず第一に、こうしたまつりの著しい頻度の高さによって、さまざまな葛藤制御のメカニズムの効果が徹底すると考えられる。第二に、まつりの内容の豊かさもきわめて重要である。バリ島のまつりではハードウェア・ソフトウェアともに世界に類例がないほど、緻密で高度な演出がなされる。まつりの内容が、心理的にも生理的にも参加する人々をひきつけてやまない魅力をもっている。陶醉と快感を堪能できるまつりへと、人々は積極的に参加する。

まつりは人々を自律的に仲良くさせ、結束力を高める作用をもっている。そこでは、神々に対する畏れによる利己的行動の制御作用が働くうえに、まつりへの参加によって発生する情動的報酬に誘導される自己組織化の作用が、きわめて有効に機能する。さらに現世的な差別、日常の優位劣位の関係の解消や逆転、まつりの準備および執行における役割の平均化、奉納芸能における役割の転換などがおこる。このようなしくみを神々とまつりによるプッシュ&プル型の行動制御モデルとして図1-7に示した。そこにみられるのは、法律や制度で強制的に制御するやり方とは本質的に異なる。神々やまつりに対する人間の心理や行動の原理を的確に掌握するとともにそれらを巧みに利用する人間の自然性に即した合理的なやり方といえる。この制御機構の有効性は、バリ島社会では水をめぐる葛藤圧が潜在的にきわめて高いにもかかわらず、実際には水争いが皆無に等しいという歴史の事実によって裏づけられている。

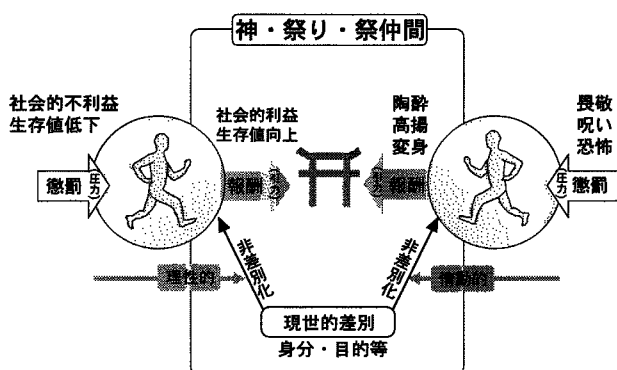


図1-7 神々とまつりによるプッシュ&プル型の行動制御モデル

表1-2 デサで行われる主な儀式とまつり

儀式	主な場所
Odalan	各寺の創立記念日のまつり
Purnama	満月のまつり
Tilem	新月のまつり
Otonan	生後3ヶ月のまつり 生後6ヶ月のまつり等
Potong Gigi	成人式
Upacara Kawin	結婚式
Ngaben	火葬式
Galungan	先祖の霊を迎えるまつり
Keningan	先祖の霊を送るまつり
その他多数	

表1-3 スバックで行われる主な儀式とまつり

個人で行う儀式	主な場所
Ngendagin	水田の準備の前
Ngurit	種まきの前
Nwasen	田植えの前
Pengelasan	田植えから42日
Mabiyukukung	開花
Ngusaba	収穫の2週間前
Mantenin	収穫後
各スバックで行う儀式	主な場所
Magpagtoya	水田の準備の前に水の多いことを祈る
Pengelasan	田植えの42日後、米のよい成長を祈る
Ngusaba	神へ収穫を感謝
Nangluk	稲の病気の回避を祈る
複数スバックで行う儀式	主な場所
Magpagtoya	水田の準備の前に複数のスバックが水の多いことを祈る
Ngaturang Pekelem & Pemelabuh	水源の保全を祈り海から聖水をとる
Ngaturang Pekelem & Pemelabuh	水源の保全を祈り湖から聖水をとる
各スバックないし複数スバックで行う儀式	主な場所
Odalan	創立記念日のまつり、神々への感謝

## 12 バリ島の祝祭・儀礼におけるトランス現象

バリ島のまつりは、人間の行動において心理的制御だけでなく生理的制御において、すぐれた効果を発揮していることに注目すべきである。

その典型的な現象がまつりの中で発生するトランス現象であろう。バリ島では、いくつかの奉納劇の中で演技者や観客など不特定多数の参加者の中から、通常の意識、感覚、言動とは著しくかけ離れた憑依トランス状態を呈する人々が現れる。過覚醒、緊張、興奮状態で、踊りながら火の中に飛び込んでいったり（写真1-9）、ふだん生肉を絶対に食べない人々が生け贅のひよこを生きたまま食するというような行動（写真1-10）も見られる。薬物はまったく使用していないにもかかわらず、熱さや痛さの感覚は減弱し、陶酔と恍惚状態になる。こうした現象の生理学的背景をフィールドの実際の儀礼の中で実験的に調べてきた結果について、簡単に紹介する。

## 13 トランス現象の生理的背景

人間の脳の中には、快感や陶酔の境地を発生させる神経回路が備わっている。それらは、外部投与のアルコールや麻薬などの薬物の作用によっても活性化するが、実はそれは偽の合鍵である。本来は脳が情報刺激によって自分でつくり出す神経伝達物質が作用する回路である。たとえば、ドーパミン、ノルアドレナリンなどのモノアミン類やエンドルフィン、エンケファリンなどのオピオイド・ペプチド類などの神経伝達物質が作用する神経回路がそれである。



写真1-9 トランスして火の中に飛び込む演者



写真1-10 トランスして生きたひよこを食う観客

バリ島のまつりの中でトランス状態になった人々の脳波や、血液中の神経伝達物質の濃度を調べた結果、次のようなことが見出された。

トランス状態になった人々の脳波は、同じまつりに参加して同時に同じ行動をしていたトランス状態にならなかった人々にくらべて、快感の指標である脳波 $\alpha$ 波や $\theta$ 波がトランス中に統計的に有意に増強した（図1-8, 9）。

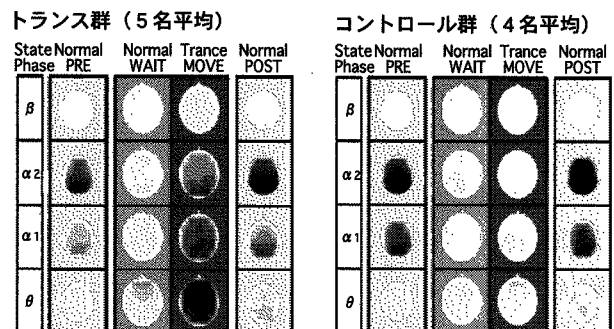
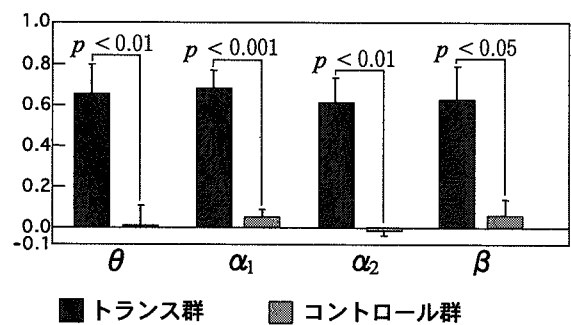


図1-8 トランス群とコントロール群の平均脳波ポテンシャルマップの比較



DELTA=MOVE(開眼憑依中)のEEGポテンシャル-WAIT(開眼待機中)のEEGポテンシャル

図1-9 トランスにともなう脳波ポテンシャルの増強

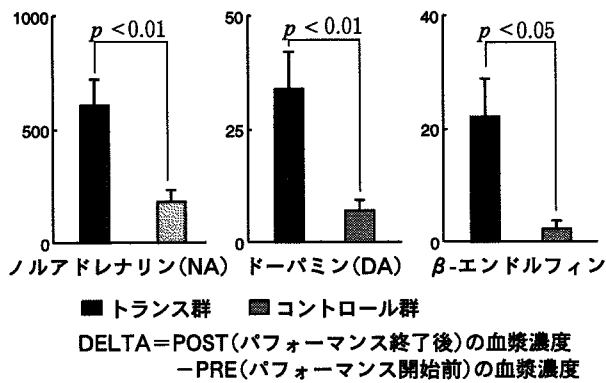


図 1-10 トランスした演者の血漿濃度の増大

また、ドーパミン、ノルアドレナリン、エンドルフィンの血漿濃度について儀礼の前後における変化量を測定した結果、トランスした人々はトランスしなかった人々にくらべて統計的に有意に大きく増加した(図 1-10)。これらの物質の増加は、脳の中で快感、陶酔、恍惚感にかかわる神経回路が活性化していることを示唆している。

#### 14 トランスを誘起する情報とその強化

快感、陶酔へ導く視聴覚情報は、バリ島のトランス現象と生理的に同じようなトランス現象が見られるいくつかの文化圏において、文化伝播の形跡が見られないにもかかわらず、共通性のある情報パターンをもっている(表 1-4)。

バリ島のまつりでは、快感誘起の神経伝達物質の産生力を増強させる視聴覚情報が時間・空間的に高密度に準備されている。そして、人間の脳の生理的しくみを利用した効果の高い、トランス状態への誘導の手続きが極められている。

たとえば、高い周波数を発生させる音源を、トランスに導くために意図的に装備しているわかりやすい事実がある。バリ島の獅子パロンの仮面の後側に取り付けられた、高周波音を発生する無垢の真鍮をくりぬいた鈴である(写真 1-11)。

バリ島のトランスを導く奉納劇ではかならず二人立ちの獅子舞パロンがかかせない。そのパロンの前足の振り手は、劇中もっとも早く、しかもほとんど確実にトランス状態にはいり、それがトリガーになって続いて多くの人がトランスにはいっていく。このパロンの鈴は、実は観客の目にも見えないし、耳にも聴こえない。これは

表 1-4 快感誘起性情報ボタン

視覚情報要素	聴覚情報要素
強い色彩コントラスト	16ビート
原色の使用	高周波音
金銀の使用	非定常持続音
反射性素材の使用	低周波衝撃音
人工的な照明	
誇張された造形	
仮装	
仮面	

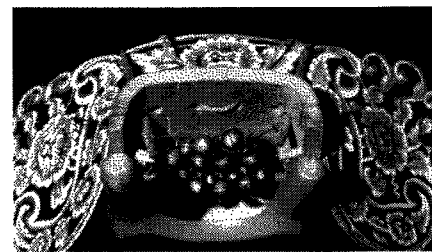


写真 1-11 パロン面に取り付けられた鈴

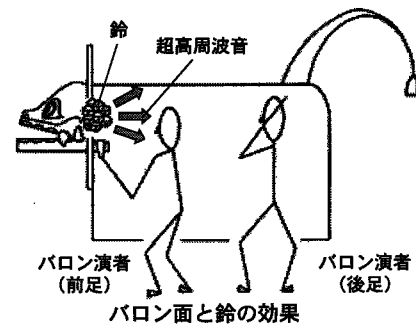
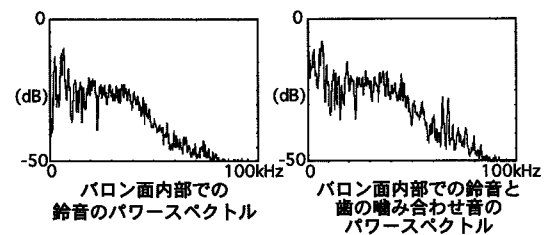


図 1-11 パロン面内部の鈴音が振り手をトランスへと導く  
仮面の振り手に高い周波数の音を直撃させて、生理的にトランスへと導いていくためにバリ島の人々が意図的に取り付けていたものだった(図 1-11)。このように、バ

リ島では、きわめて生理学的に合理的な方法によるトランスへの誘導の手續きが開発されていた。

### 15 バリ島社会の劇場的 성격

こうしてみると、バリ島社会の劇場的 성격は、生理的側面がきわめて大きいことに特徴があるといえる。

人間が劇場において体験する感覚というものは、いわばこのトランス状態に通じる生理的感覚である。人々は非日常的な感覚を体験するために劇場へ出向く。バリ島社会における劇場的 성격のなかで、もっとも本質的なも

のが、この生理的・非日常体験の存在であると考えられる。心理的な側面だけでなく生理的に別な世界を体験することは、社会の葛藤の制御や安定のために大きな効果があるからこそ、葛藤のつよいバリ島社会で極め尽くされてきたのではないだろうか。このような人間の生理的情動のメカニズムをより重視した社会システムの運営のしかたは、戒律や法律をより重視した社会システムの運営とはかなり違った原理である。そして、この原理が長期にわたって有効性を示してきたバリ島社会から学ぶものは少なくないと思う。



儀礼は一日にして成らず（2004年12月22日 バリ島アグン・ライ美術館にて）

# 豆<sup>う</sup>酸<sup>さん</sup>の赤米神事

本 石 正 久

## 【名 称】

赤米神事は、地元では古くよりトウケ（頭受け）と云うのが一般的な俗称であり、トウケには「頭受」や「黨受」の字が当ててある。近年、関心を持つ調査研究者や郷土の研究者たちによって赤米神事<sup>あかごめしんじ</sup>と呼ばれるようになった。

## 【地域の概況及び伝承・由来】

対馬が大陸文化の移入の窓口であったことは多くの文物によって証明されているが、近年の発掘調査による出土品でも大陸や韓半島との交渉の歴史が明かになっている。

対馬は朝鮮半島と九州本土との中間にあり、島の中央部で東経129度15分、緯度では北端が北緯34度42分、南端が34度05分に位置する。この南北83km東西18kmの縦長い島が小さな堀切によって上島下島に分断されている。全島が山地形であり、標高500～600mの山岳が南北へ分水嶺を呈し、山が直ちに海へ没するという典型的な沈降海岸をつくり、東側は急傾し西側はやや緩やかで僅かながらの農耕地が見られていて、近隣している平坦な壱岐島とは対象的な地勢を形成している。

魏志倭人伝に「土地は山険しく、深林多く、道路は禽鹿のみちの如し、（中略）良田なく、海物を食して自活し、船に乗りて南北に市糴す」とあり、当時の対馬の地勢や生活環境が的確に表現されている。

その最南端の豆酸は古代、大陸航路の要津であったとも考えられていて、多くの資料にその考証や考察がされている。又、豆酸は津々でなかったかともいわれるが、東南に壱岐や九州北西部が遠望でき、好天のとき北西に韓国南岸の巨済島などを見ることが出来る。

豆酸の「酸」と云う字は本居宣長も玉勝間で偽字ではないかと疑っているが、辞書の詳細な索引によって存することを述べていて、康永3年（1344）の豆酸寺観音堂の梵鐘の銘文には「醴豆」とあり、『海東諸国記』（1471年・申叔舟著）には「豆豆浦」とある。又、永享3年

（1431）の「宗家書下」や貞享3年（1686）の『醴豆郡寺社記』にも「醴豆」とある。どうして、この豆や酉偏の酸という字を当てるようになったかに諸説はあるが解明されない。対馬南端の神崎と豆酸崎に挟まれて南に口を開けた三角形の港は水深もかなり深い良港であり、近年も強い北風には多くの商船や漁船が停泊する港である。

日本書紀の顕宗天皇三年四月条に下<sup>しも</sup>県<sup>あがたのあた</sup>直<sup>はべ</sup>の侍る高<sup>たか</sup>皇座<sup>みむすびのかみ</sup>靈神<sup>とおあまりよところ</sup>に十<sup>み</sup>四<sup>む</sup>町<sup>ちやう</sup>の水田献上の記述があり、高御魂神社鎮座地の周辺に神田<sup>かんだ</sup>という小字名の水田地帯がひろがっていて豆酸では良田地帯であり、赤米との関連を思わせるものがある。

対馬では本山送り、ヤクマ祭り、塞ノ神、嶽の神、天道祭り、など多くの祭り行事や、盆踊り、命婦舞などの芸能を今によく伝承している。

豆酸でも弥生期の遺構や7世紀の横穴式古墳も発掘調査されており、天道にまつわる史跡や地名も多く残されていて、特に国内にも珍しい亀ト神事や赤米神事が行われている。その他にも神功皇后の古式祭など継承されている。



写真 1-12 近年の船舶が停泊する豆酸港



<sup>あかごめ</sup>赤米神事とは豆酛に伝承される赤米行事で、頭仲間という集団によって赤米の植栽を行い、中世の祭祀習俗を保持するとされる供僧（宮僧）が、行事の都度、司祭し神事を行うことから赤米神事と呼ばれている。

赤米は、近年、国内の多くの人が知るようになったが、これが弥生期にあったことは定説といえよう、昭和25年頃国内に残存したのは僅か2、3ヶ所であって、種子島の茎永を南方系、対馬の豆酛を北方系と云われるようになったが、これらのルーツは未だに解明されないところが多い。国内に栽培されていたインド型稲や日本型稲の赤米種も耕作の条件が良く収量の多い美味しい白米種に魅了されて、その陰を消そうとしていたのであらうが、祭り行事があったから国内の赤米は残存したのである。柳田国男はこれを儀式的米であり、祭りの米だとしている。この赤米神事が何時頃から始められたかについては、天道法師（天武天皇白鳳年）が足の指に挟んで大陸よりもたらしたとも伝説するが、『対州神社誌』（貞享3年（1686））には「観音ふく田之事」として、4頭あったことが記してあり、寛文検地帳（寛文2年（1662））に「寺田のうえ」とあって寺田という耕作田があったことは伺えるが、それ以前の確かな文献資料を今のところ探し当て得ない。

『海東諸国紀』に「豆酛浦三処合 三百余戸」とあるが、明治初頭以前は、4組の頭の構成があったことも楽郊紀聞（安政6年）に見え、寺田周辺の良田地帯も4区分されていたことが古老話者たちによって理解されている。この三百余戸の内の浜区を除いて、多数の本戸が何れかの仲間の構成に加入していたのであらうか。近年、住宅の新築に伴う本家の解体で床の間の天井に設置されていた吊り環が殆んど家に存在することでも推測できるものがある。又、亀卜神事の直会もこの4組の構成で行われていたことが楽郊紀聞に記してあることから、この4組の構成が豆酛2地区内の氏子戸数（住民戸数）であったことが考察される。

#### 【実施場所】

赤米神事は年間に行われる神事で巾広く至るところで行うが、主な場所は神社や寺田、受頭の家、払頭の家、海岸がある。

#### 【実施日】

赤米の稲作儀礼に係わる一年一巡の行事で、行事は年

間にまたがるが、その中心的行事は頭受けであり、旧正月10日の午後7時より翌朝7時頃までである。年間の行事日を次に記すことにしよう。

#### 年間行事

○頭受け	旧暦正月10日
○三日祝い	旧暦正月12日
○お田植え	新暦 6月10日
○お吊り坐し	旧暦10月17日
○初穂米	旧暦10月18日
○斗瓶酒	旧暦12月3日
○日の酒	旧暦12月19日
○餅つき	旧暦12月28日又は29日
○初詣り	旧暦正月2日
○潮あび、家祓	旧暦正月5日

#### 【実施内容・行事次第】

この赤米神事と関係する供僧や天道祭り、亀卜神事、町内制度などは紙面の都合で入稿できないと思うので、ここでは赤米神事の行事を記述することを趣意とし、中心行事である頭受け（正月10日）の行程を主として、そのほか年間の行事を記すことにしよう。

#### 【頭受け】 旧暦正月10日

次の頭番へ遷される行事で深夜の行事である。

頭受けとは、広義では年間の行事全体を指し、狭義では10日の遷御や受け渡しを意味するが、昨年の頭番の家（払頭家）から新しい頭番の家（受頭家）へ遷される神事であり、厳粛に執り行われる行事である。

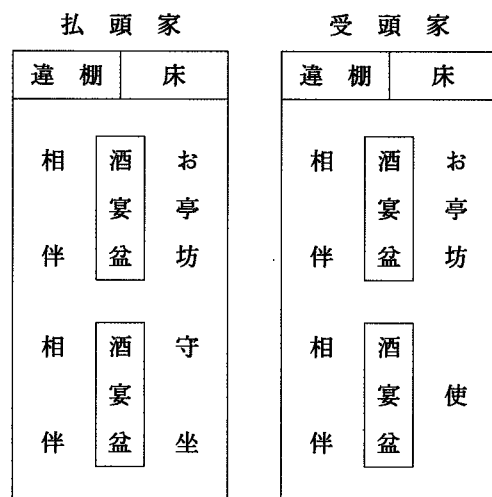


図1-12 頭受け神事における座列（渡御前）

受頭の家では早い時期から屋根替え畳や襖の新装（近年住宅事情がよくなったが畳襖は新調される）などの準備がされ、松明やトコブシの採取、長男が受けると袴や袴の新調、馳走の準備、門松、注連縄や注連竹、吊り坐し縄、臼などの準備で忙しい。当日も朝から親戚や知人の加勢を受けながら準備に追われている。

夕方6時頃（古くは3時ころ）払頭のお亭坊は数珠を繰って御戸開きの神事を行い、お吊坐しされた天道様（赤米神俵）の下に酒宴盆2個と酒肴の準備を整えておく。7時になると案内を受けた緒役（5日の朝までに受頭主に頼まれた人）の守坐（神俵を背負う役）1人、相伴<sup>しやうばん</sup>2人、は袷に羽織で集まり敷居の外より天道様（吊り坐された赤米の神俵）に二拍一拝して天道様の下の座に着きお亭坊の指図で御酒を交わして酒宴が始められる。本行事に出る役の確認がされる。受頭家でも同じ時間に同じ行事であるが、受頭家では御戸開きはなく、役は使<sup>つかい</sup>（10日の夕方と朝方に払頭家に使いする役）と相伴2人である。

家の向きによって座位が異なる。住宅は北が上位の構造になっていて東向きの家と西向きの家では座席が逆になる。夜10時頃になると受頭家より払頭家へ使いが行く。袴を着けた使い役は先ず払頭家の勝手口より入り「めでたい今晚でございます。めでたいお道役を申しつけられまして、目出度いお頭を受けにまいりました。」と挨拶して一旦戸口へ出る。座敷口の戸を開き本座の敷居の外より二拍二拍手一拝深く頭をさげ「宜しい今日でござい



写真1-13 神とまつられた赤米



写真1-14 渡御の列

ます。めでたいお頭（頭役番）を申しつけられまして、めでたいお頭（早く頭受けしたいので催促）を申し受けにまいりました。」と挨拶する。払頭家のお亭坊より働かれる時間（御動座される時間の凡そ1時半頃）が言い渡され、使は敷居の内に入れられて御神酒を頂戴したあと退下する。その旨を受頭家へ伝える。両家の諸役は両お亭坊の指示によって適当な時間に一応退下する。

11日午前1時、お亭坊は紋付き袴、他は袴を付けて両家に集まる。まず両家ともに酒宴盆の席の手数をして、お働き（動座）の準備にかかる。守坐は双方の脚立（高さ1.5mほどの踏み台）2個の中央に表むきに背を屈める。双方の踏み台の男が天道様（神俵）をすり降ろして守坐の背に負わせ吊りまし縄で肩から結わえて、注連縄を神俵から肩に掛け、その上に袴の上衣を掛けて露払いとする。

払頭主が、左手に蓑笠を右に家の中より持ち出した松明（必ず家の中から持出す）を持って先導し歌口の唄い出す出歌と共に一行が静々と縁側より出で立つとき、すべての人は万遍なく二拍して頭を畳にすりつけるように拝礼する。一瞬、後ろ髪が逆立ちするような異様な感慨に陥る。

〔払頭の歌口のうたう出歌〕

「さてはお発ちか、お名残惜しや またもこの座での如く  
是非に上様、お発ちとあれば 残しおかれよ 福の神」

松明を手にした払頭主、神俵を背負った守坐、手添2人、ユリを持った伴の列は静々と深夜の渡御の列を進める。路端に土下座して拝む拍手の音と松明の燃える音が甲高く聞こえる。受頭家に着くと注連縄をくぐり門松の間を通り抜け、受頭主が家の中より持ってきた迎火と払頭主の松明を合わせ家内へ収める。守坐は縁側に準備された臼に神俵を乗せ一時休息する。程頃を得て手添えに支えられた守坐は縁側を上り本座へ進む。親族や関係全員が何遍となく手を打ち頭を畳に擦り付けて拝礼する。守坐は本座の中央に表向きになり、脚立に立った2人は縄を解いて支えながら吊り環へ吊るし注連縄が掛けられる。その間、招客は縁の間の上位の座布団に着き、茶が勧められる。手添え2人は別室で賄いされる。

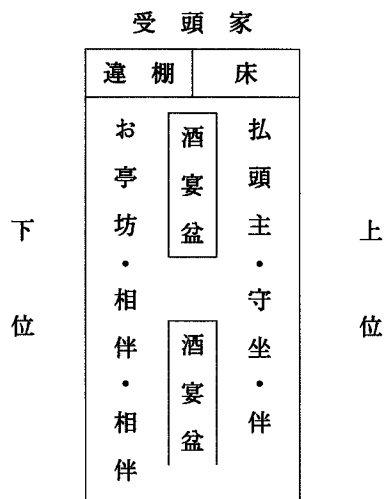


図1-13 頭受け神事における座列（受け取り渡し）

新お亭坊は部屋を掃き清め、護身法ののち潮筒のネズミモを神俵の前面に差し、潮筒の潮を左右左と三度の清払いをおこない新しく入魂される。受頭主は敷居の内に入り扇子を八分開きにして頂くように拝む。他の者たちは敷居の外で近親者より順に拝礼される。招客は本座の上位に案内され下位にはお亭坊、相伴2人が座につく。1人の男がお膳に椀1個をのせ、別の男が硯蓋にブッシュウ（小さく切って硯蓋に入れたスルメと昆布）を持って同時に入ってくる。1人の男は伴が払頭家より持ってきたユリの中の濁酒をクチツケで招客上座より注ぎ、次いで他の男が、手元に開いた白紙にブッシュウを授ける。招客より相伴までが戴いて懷中しオノーレー（お直会）を終える。床の間である本座は女性の入室は全くなく役

以外の男も入らない。この2人の男によって酒宴に出される持ち運びをするのである。

これより12通りの料理膳が出されるが、ニシザカナ2つ（片方の椀にウラジロ、ユズリハを敷き大根の輪切り2個、一方にウラジロ、ユズリハのうえに大豆一握り、中央に大根の千切りの酢の物など）で三つ組みのお膳に12通りの料理が度毎に取り替えられる。初めにゾウニ（1cm程の角切り雑煮）、次にコナカケメシ（米粥の上に根つき小菜）、ニモチ、野菜の吸い物、カマボコ、肴の背切り、ヤマイモ、サザエのツボヤキで2段を終える。次は勝手より酒宴盆2個が運ばれ、お亭坊の指図でしばらく酒宴が始まる。

やがて和服の男1人が片手に酒1升、別手に大椀1個のせた膳を持って敷居の外から「盞がわりにまいりました。よろしく願います。」と入って来る。招客上座から大椀でなみなみと注ぐ。男は招客に虚礼があってはならないので畏まる。男も盃をさすたびに返杯を頂戴する。注ぎ終わるころ1升で足りないことが多い。男はありがとう御座いましたと引き下がる。酒宴が足りないので盞を大きくしておもてなしをして招客のご機嫌良いところでお譲り頂こうとする意である。

午前3時頃にもなろうか、受頭主は袴を着けて、お膳に乗せた尾頭付き（炙った黒鯛）と酒1升を持って「受け取り渡しにまいりました。よろしく願いたします。」と入って来る。本座の床前の下位に受頭主、上位に払頭主が対座して受頭主は「受け取り渡しにまいりました。願いたします。」、払頭主は「昨年は16俵出来ましたので今年は18俵と出来増すようお引き渡しします。」と口上されるが、八十八が米に似ていることからよく使われた数だが盃を受ける数が多くなることから縁起の良い少ない数を選ぶようになってきている。払頭主は両腕を交差して前に出し右左に盃を持つが左右で1杯に数えられる。男1人が注ぎ手、1人が数をとる。払頭主は18杯を頂くことになる。終わって受頭主が盃を受けることになる。受頭主はその倍の数を受けることになるが受頭主も負いきれないときは「上流の田圃は満水だ、下流の水田へ回す。」と云って下座の者に盃を譲る。ここで招客側と相伴側で自分側の頭主に余り飲ませまいと数のごまかし合いになる。

受け取り渡しは終わって、受頭主は尾頭付きを丁重に

払頭主に渡し「ありがとう御座いました。」と引き下がる。ぼつぼつと夜も白むころ、招客も相伴も大分ご機嫌になっている。ここで和服を着けた男が大椀1個をお膳に寄せ酒1升を持って「引き盃に参りました。宜しくお願いたします。」と入って来る。招客より次々に注ぎまわり盞がわり同様に勧める。ここで五つ組の食膳が出されるが酒の威力余って受けるのみで食わず、御腰もなかなか上がらない。ようやく縁側より招客のお帰りである。招客3人が力を合わせて一對の門松を引き倒し、持って帰っている。大事な大事な神さまを年の初に渡した事で悔しく、その代わりに大事なものを持ち帰ると云うのである。帰る途中の道路端に放置してあり受頭家では明るくなってから集めて元どおり奇麗に建てられる。

少し明るくなるころ、袴姿の受頭主はユリにいでて来られた臼形の餅二重を苗代田の水口に埋めて今年の豊作を祈る。これをパイレという。一応頭受けはおわるが、これより3日祝いまでは物音立てず静にしている。

〔三日祝い〕 旧暦正月12日

新しい頭役がお受けして3日目になり、集落の人たちを招いての大祝いがされる。受頭家では神（穀霊）を迎祭することで10日より物音一つさせる事なく静にしているが三日祝いの歌口より祝い始めて、古くより結婚式以上の大きな祝いであった。

受頭家では5時頃お亭坊は数珠を繰って御戸開きを行い酒宴盆の準備をしておく。7時頃になると10日の夜に諸役についた人たちは案内を受けて、拾羽織で襖の外から二拍して本座に入り酒宴盆の席に着く。集落一般の人たちも拝礼して本座の外席に着く。お亭坊のすすめる神酒を少し戴いた頃、歌口の古老が呼吸を整えて歌い出す（アーウオエーヤーウオ）。三番唄い終わると頭の座からも一般の座からも次々と歌や踊りが出て大祝いとなる。払頭も同じように祝いがされる。

歌口の歌（三日祝いの夜は歌口の歌い手の古老3人は  
払頭家で歌って受頭家に行くことが通例であつた。）

払頭家にて

「千秋万来納まるところ、ここのお家に祝いを残す、又もこの座でこの如く」

受頭家にて

「年の始めに氏神さまを、お受け申してめでたさ

よ、庭に門松、御門を飾る、ここのお家に金飾る」

案内を受けた村人達は個々別々に本座敷居の外より拝礼してから宴席についた。近年、式は残しているが経費の節減につとめ祝いは縮小されてきている。

〔寺田様植〕 新暦6月10日

赤米のお田植えである。古くは雨季が来ると寺田の赤米が集落の最初に植え付けされて一般農家の田植えが始められると云う習いがあった。一般農家の稲作が早稲系に移行するようになって赤米の植え付けが特別遅れたことで、昭和55年頃に旧暦5月2日に行われていた赤米の田植えを村一番にと晩稲の赤米を繰り上げて新暦6月10日に改め定められたが、いまでは又、白米種の植え付けが早くなり、赤米の田植えが集落農家の最後に植え付けされている。

田植えは赤米田の水路上流側と下流側に注連竹が立てられ注連縄が張られる。左右の注連竹に竹筒をさげて海水が入れられてネズミ藻（学名ウミトラノオ）が掛けられる。朝8時の時報と共に頭仲間の各戸より男1人女1人がでてくる。塩筒の海水に指をいれ潮を嘗め体を清める所作をして、注連縄の下をくぐり抜け作業に取りかかる。仏の座といわれる一面は男手によって植え付け、管理、刈り取りがされ、この水田で採れた赤米がお吊りましの神俵に入れられる。仲間が植付している間に、お亭坊は氏神さまで読経し豊作を祈願して、赤米田へもどる。水田の水口に萱と蓬を束ねて立て、お神酒、赤米熟饅、梅干、昆布など供えて田神を祭り干害病虫害の無いことを祈願する。丁度、植付けも終了し仲間の人も、それぞれ田神に手を合わせてから、お神酒や赤米の熟饅と副食のホヤノリと大根の千切りの酢の物（ホヤノリは天草に良く似た海藻で、この酢の物が古くより赤米熟饅の副食としてつけられた）をいただいて田植えは終了し、場所を改めて直会が行われる。

〔御吊坐〕 旧暦10月17日

今年の初穂を精選して新しい俵にいれ、床の間の天上に吊るして神格化する神事である。

今年収穫した赤米を2人の老女（こしき婆）が芒を縦杵で叩いておとし箕で精選する。編み手、紬い手の2人の男は早朝より藁で俵や吊りまし縄シメ縄などをつくる。お昼過ぎ頃、精選された赤米は真新しい俵に5斗5升ほ

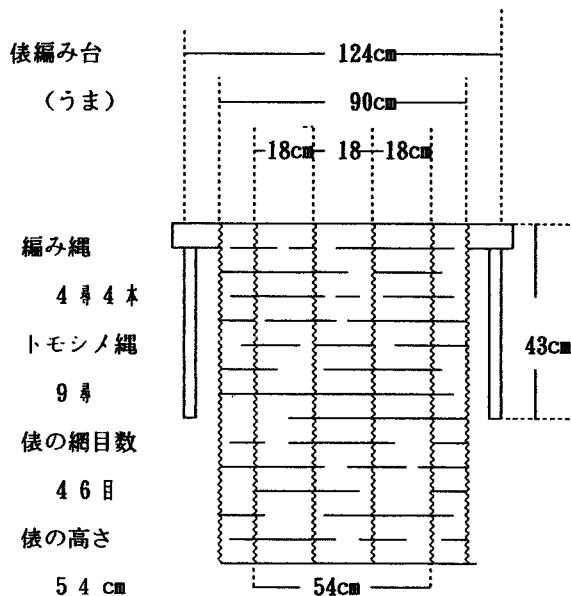


図1-14 赤米俵（展開図）

ど入れられる。赤米俵は奥座敷中央に吊るされ注連縄がかけられる。お亭坊は改まって正装し俵の正面中央にネズミ藻をかけ塩筒の潮を三三九度かけて清め、盃入れ（神格化される）の行事を執り行う。頭主を始め家族や関係者が拍手を打って拝礼する。お吊りましをされた神様の下で酒宴盆の支度が出来て、本日参加した人たちが座につく。

【初穂米】

旧暦10月18日

今年とれた赤米の熟饌を天道であり、氏神である多久頭魂神社へ先ずお供えする行事で、夕方5時ころ仲間の各戸より1人以上が氏神様多久頭魂神社へお詣りする。

釜で蓋を開けずに炊き上げた赤米飯を、お亭坊が数珠を繰って蓋をあけ、飯器と10合柅に移し、酒（濁酒）と共にお供えして、お亭坊は真言密教の秘法ののち小中臣祓、心経、錫杖経を誦経し秘法の九字を切る。祭り終わって下陣へ頭仲間全員が相向かって座をつくり、お下げした酒、お仏食、ホヤノリと大根の千切りの副食をその場で戴いて（食べて）帰る。古くは大碗に山盛にして戴いて帰り家族がそれを拝戴して食べたが今はない。

この日より、親戚や知人に少量ずつ分譲して食することになる

【斗瓶酒】

旧暦12月3日

今年の初穂で造られる酒を醸造する過程で斗瓶で発酵中の若酒をお供えする行事であり、夕方5時頃、頭仲間が氏神さまへお詣りする。前記の初穂米とまつり行事は

同じであるが、初穂米は今年収穫された赤米の熟饌を初めて、お供えするのが祭りの主旨であり、斗瓶酒は酒をお供えするのが主旨である。古くは3時ころより神事されていたが仲間の仕事の都合で5時以後に行われるようになっている。

【日の酒】

旧暦12月19日

醸造の過程での成酒をお供えする神事であり、夕方5時ころ全員が詣る。祭り行事は斗瓶酒と同じである。お仏食と酒（濁酒）を神前へ供え供僧が誦経した後お下げし、参詣した全員が座をつくり拝戴する。

【餅つき】

旧暦12月28日

今年の赤米初穂で臼型の餅を搗く。旧暦の12月が30日まであるときは29日に行い、29日までのときは28日に行われる。頭受の家で午後5時ころ（古くは3時ころ）より全員集まり、お亭坊の御戸開きに始まり、お吊坐しされている下に敷物を敷いて餅取り台をおき米糠を振り撒いて待つ。縁側に臼をおき、勝手に米の蒸揚げを待って蒸し揚げた赤米は縁側の臼に運び入れられる。双方より縦杵を使って搗かれる。完全な餅でなく粒が粘りつく程度に搗かれた餅は本座の台に運ばれお亭坊を始め4、5人で臼型の餅を大小とつくられる。このようにして3釜程で大40個、小40個が出来上がる。明治末期頃は大小300個宛とあり、大正8年には650個と記録されている。つくられた餅は正月2日と5日の祭の用に分けられ「もろ蓋」に収められる。

次に「米計り」がおこなわれる。元々12月18日に行われていた米計りが、この日に行われるようになった。行事用の米を引きのこして精米された赤米を仲間に配分されるのである。近年は2日の朝のお仏食用3升と5日の朝のお仏食用3升をのこして、豊作のときで1戸あたり1～2升程度を仲間に配分されている。終わって酒宴盆が準備され、お神酒を頂き適宜退下する。

【二日の朝詣り】

旧暦正月2日

2日の朝8時、氏神さまへ頭仲間全員が年始のお詣りする。お亭坊はお仏食、酒（濁酒）に餅つきで造られた餅を折敷（椎木の生木を長さ18センチ程度に切り、なるべく薄く割ったもの）に紙を敷き二重（大を下にその上に小を1個重ねたもの2組）を4カ所に供え、供僧全員が護身法ののち中臣小祓、21社の神寄、吉祥経、千手経、志加法意などのオコネ経を長時間の誦経してお供えした

ものを下げる、頭仲間は相対して座席をつくり、お神酒とお仏食を頂き、お下げされた餅を紙に包んで戴き持ち帰り、各家の床にかざられている歳徳神へ供えられる。

#### 〔五日の潮浴び、家払い〕 旧暦正月5日

初詣りに同じく朝8時、頭仲間は氏神さまへお詣りする。供僧は初詣りと同じくお供えし吉祥経、千手経、志加法意を誦経し終わってそのまま待つ。

#### 〔潮あび〕

今年の新しい受頭主は朝7時頃、海岸の岬で海中に身体を浸かり潔斎をする。袴を着けて氏神様へ参進する。頭仲間は相対して正座するところの正面上位へ正座する。お亭方は神前へ供えていた印肉のついた神印を、内陣にて供僧へ授ける。供僧は半紙を2つ折りにして胸高で受け包み込むように懐中する。次に外陣にて受頭主の頭上より左右左と授ける。受頭主は扇子を八分に開いて頭を深く下げ扇子に畳み込むように閉じて懐中する。他の仲間は両手を開き高く翳して御朱印を拝戴し、それぞれ懐中する。お下げされた熟饅頭の御仏食とお神酒などのお供えものを頂いて皆が下社する。

#### 〔家祓い〕

この日、お亭方によって、今年の受頭となる家の家祓が行われる。台所にマメの小枝と潮筒を備え誦経して、まづ水口を清め、火を清め、奥座敷、玄関、各部屋と定められた順序で清祓される。頭受けの行事前に家祓を終えて清浄にして10日の頭受日を待つのである。

頭受中には毎月の月頭にお亭方によって家払いされる。

#### 【実施組織】

赤米神事は頭仲間と云う構成でおこなわれるが、楽郊紀聞や対州神社誌にも伝える4組で構成する赤米耕作田は5斗3升蒔と記述されている。伝えるところ、上流側より、一の坪、宮座、仲座、ちょん座と云われ、生存古老たちが口にしていたことは確かな記憶であり、この4頭の耕作していた水田面積は田井原の一般農家が所持する田地の面積とは大差がある。1頭になった由縁は時代の趨勢もさることながら明治初期の社格制度の資金徴達とも深く係わるように考察される。

現在、継承している1組の構成は宮座のようで主に祭祀を重んじる供僧9戸が皆この構成に加入していて祭祀の厳修を継承するに相応しい構成であったと思われる。他の仲間には、司祭、管理をするためのお亭方が1年1

人の派遣をしていたように考えられている。頭受けの順番は本廻りと云う年令順の廻りであるが、受頭主が若少になるとき、竈廻りという片廻りを一巡する決まりがあり、頭仲間に参加すると、その年に受頭をする仕来りである。受頭が回ってきても行事をするに必要な経済力のない人は折角の加入権を返上し仲間を辞退しなければならなかった。

明治30年代の天道講連名帳に24名の記名が見える。

昭和18年には18戸になっているが昭和30年頃には食料事情も正常し、離農したり転居する人も増えて構成戸数も減少し、平成8年には9戸となった。数年前より40才代と50才代の人達3戸が意欲的に継承していて意志は強い。

明治38年12月の「天道講連名帳」に記されている頭仲間の構成を転記してみよう。

#### 旧十二月起

主藤辰五郎	本石甚吉
主藤助吉	本石治助
本石應	本石三次郎
主藤惣次郎	阿比留郡藏
本石伝次郎	梶木孝左衛門
本石八五郎	主藤勝藏
犬束松五郎	本石格藏
本石亀平	飯野与吉
本石好平	本石庄五郎
本石次三郎	本石善作
権藤いよ	本石市六
小森五郎	本石仲五郎

昭和18年の構成を次にあげよう。

本石八五郎	内山七郎
主藤吉之助	竹岡五郎八
本石伝次郎	主藤信
本石又蔵	権藤吉之助
本石惣作	本石健
主藤清太郎	栈原文雄
本石正次郎	小森勲
太田正志	主藤定
本石甚之助	主藤徳次郎

#### 平成8年の構成名簿

本石直己	主藤公敏
------	------



権藤嘉洋	本石健一郎
本石仲五郎	主藤力
主藤和也	本石久知
本石正久	

## 【その他の特徴】

## 〔深夜の渡御〕

10日の夜の神渡りは深夜の行事である。古代より神霊が動座するのは丑三ツ時ときくが、日照時や月照時を避けて自然や万物の動向が寸時静止すると云われるこの時間帯に霊魂は移動すると考えられていたようで、遷御、渡御がこの時間に執り行われる由縁であろう。赤米神事の旧暦正月10日の夜は午前1時ころ、入り月が山の端に掛かるころで月影になってから遷御されるが、2時ころになると一番鶏が鳴き夜明を告げるので、その間を旨く渡御するようしなければならない。その年々で入月の時刻に多少の差異がありお亭坊はこの時間帯をよく掌握して神渡りの時間を決定し、受頭家からの使いに伝えるのである。丁度この渡御の時間は風も止まり静になると云われている。

## 〔招客〕

招客とは10日の夜、払頭家よりの渡御に加わる諸役3人（払頭主、守坐、伴の3人で手添え2人を除く）を受頭側からの呼称であるが、年の初に神をお譲りすることもあり権威がもたれていて欠礼があると罰杯と云って大腕から強要される。また自座を離れるときは袴の上衣を脱ぎ自席にたたみ置いて離れる仕来りがある。

## 〔お吊りましの本座〕

住宅の構造は藩制により士族と農家は別々の定めがあり、お吊りましをされる本座は何処の家でも一番奥の部屋であり、最も大事な床つきの部屋である。士族は8畳であるのに農家は6畳である、普段でもこの部屋はみだりに使用せず家族はもとより来客なども、この部屋には泊めない、受頭中は行事以外絶対開けない。行事のときはお亭坊が御戸の大事を行い数珠を繰って開扉されるが10日当日も諸役のみだけの入室となり、他の者は入室しないので、用件のときは手を打って呼び、敷居の外より手渡すことになる。

## 〔祝辞礼と近年の行事〕

緒役は仲間内に限ると明治期に記録されているが、頭仲間の構成人員が多かったとき、役に付かない人は翌朝

7時頃、祝辞礼といって遷座された新たな神霊を礼拝に集まる。10日夕方、子供2人が、仲間全員を戸別に「うちかなー（戸内より返事するまで）何某（受け頭主名）申します。明朝、祝辞礼致します。時分にして進ぜましよう。おいでなさいませ。」とウチカナの使いをする。

11日朝6時半頃、この2人が時分の使いをする。「うちかなー。何某申します。時分でございます。おいでなさいませ。」

回りおわって7時ころになると個々別々に拝礼される。行事が終わって仕替えられた宴台について酒肴の馳走になり適当に引き下がるが、昭和40年頃までは7時になっても行事が終わらず祝辞礼の間に合わないことが多かった。近年経費の節減もあり午前4時頃は行事を終えるようにしているが、お亭坊の指示によっては時間差が出てくる。近頃、頭仲間が少なくなって祝辞礼の必要もなくなって行われていない。

## 〔守坐〕

守坐とは渡御の時、神俵を背負う役で、後部双方より手添えが2人付く。守坐は背負うと会話してはならない仕来りがあり、手添えが力を入れすぎると前に倒れそうになる。力を抜くと後に、添えている手添の指を摘まんで合図する。守坐は力がいり足がすべることが多いので足袋底を濡らして下駄を履くことが多い。供僧は守坐役は受けず供僧外の仲間が守坐し役を受け持つ仕来りがある。

## 「ネズミモ」

学名で「ウミトラノヲ」とあるが、海草の中で最も浅い所に生え、褐色の単茎海藻であり、長いものは40～50センチもあろう。ネズミの尻尾によく似ていることからネズミモと別名されるが、祭り行事によく使用されている。赤米神事の御霊入れでは神俵の表に差し、お亭坊の潮筒に差し毎月の家祓に使用する。お田植では注連竹の竹筒にもかけられる。漁業者は昭和初期の泥鰌<sup>ドジョウ</sup>のかわりに10センチほどに切り疑似鰌に使用したとも聞く。正月舟祝いには船霊さまにも供えていた。亀卜神事も桃の小枝に掛けて持ち帰る。ネズミモの使用には諸説を持つが、修祓行事には海水をもって祓具とされることは多いが、潮を表現するため最も浅瀬で取れる海草を使用して清浄を祈念したのではないかと考察される。

### 【赤米田の形成と赤米植栽】

1950年頃、国内に残存していた茎永の赤米も豆穀の赤米も共にジャポニカ系種とされるが、しばらくして残存が確認された岡山県総社市の赤米も共にジャポニカ系種といわれている。純真女子短期大学助教授であった城田吉六氏は下記表のように対比している。

	豆穀の赤米	茎永の赤米
種 別	ジャポニカ粳	ジャポニカ粳
茎の長さ	約1メートル	約1.3メートル
芒の長さ	6～8センチ	4～6センチ
初 の 色	茶褐色	黄色
玄米の色	赤褐色	赤褐色（赤みが強い）
初 の 計 測	長さ 6.5 ミリ 幅 3.25ミリ 厚さ 2.12ミリ	長さ 6.9 ミリ 幅 3.27ミリ 厚さ 2.14ミリ
精米の色	赤い縦筋がのこる	赤みが多くのこる
飯 の 色	赤飯色が少し薄い	赤飯
飯の粘り	バサバサして粘りが無い	バサバサして粘りが無い
飯の匂い	カバシカの匂いがする	香はない
用 途	神事用の餅飯 受頭家の食用	神事用の飯のみ

表 1-5 豆穀・茎永の赤米比較（城田吉六氏による）

総社の赤米は茎が約1.2メートル、芒は4～5センチ、初は茶黄色である。国内に在来していたインディカやジャポニカの赤米種についても、嵐嘉一氏他の調査研究や庄崎豊一氏の系種別の分布図などもあり、1940年頃以前の稲作の状況も理解される。神田や民俗行事に関連した赤米栽培は全く日本型赤米種が用いられて早くから日本型赤米種が栽培されたことが指摘されている。

対馬の西岸の僅かな耕地に二毛作田の乾田が見られる。また水利の良い溪谷に沿って帯状の棚田や自然出水を利用した小規模水田が中腹にも点々としていて、一部の集落を除くすべての農家が一戸あたり、3反歩から5畝歩程度の自給型農業である。裏作に畜糞を敷きその上に種を撒き麦作をしていた。土壌は頁岩の砂壤土からなり一部をのぞく外は保水力に乏しく、増して十分な水を供給できる河川も少なく、水田としての適地は狭小である。

このような稲作を補うため山間の頂上近くまで焼き畑の木庭作が営まれ、藩政期以後まで続いていた。昭和25年に奥地原始林の包蔵する水量目当てに奥地開墾が進められ、政府の認証する組合員が30町歩の水田を開拓し、

当時の食糧危機に貢献している。近年漁業技術が盛んに導入され漁業主体の半農半漁が多くなり、奥地田地は荒廃している。平野部の稲作も他産業の関わりや台風の影響などにより一括型農業として早稲系に移行してきている。

豆穀の赤米田は神仏習合時代の遺名として寺田と呼ばれるが、この一帯は小字名を田井原とも呼ばれ、頁岩よりなる砂壤土で形成されているとされるが表土は深く粘質が強い上に地力も高く日射条件も優れ、水は中温で、水量もこの周辺では豊富な所であって、豆穀集落では上田地帯である。

この田井原に40余戸の農家が戸当たり1反歩～5畝歩程度の田地を所有し、1本の水路を共有している。水不足となると数戸割りの時間配水となるが、時間配水の時でも寺田は、夕日が落ちて陰るころより翌朝の日の出まで給水する水利の特権を与えられた。配水要領を決定したり、指示するのは寺田の頭主であった。

寺田は不定形の水田6枚と、飛び地に3枚で併せて総面積は1反7畝6歩と土地台帳に記載されている。下図に示すように、寺田の最も上流側の一面を「仏の座」と云われて、この水田で採れる赤米が神儀に詰められ翌春

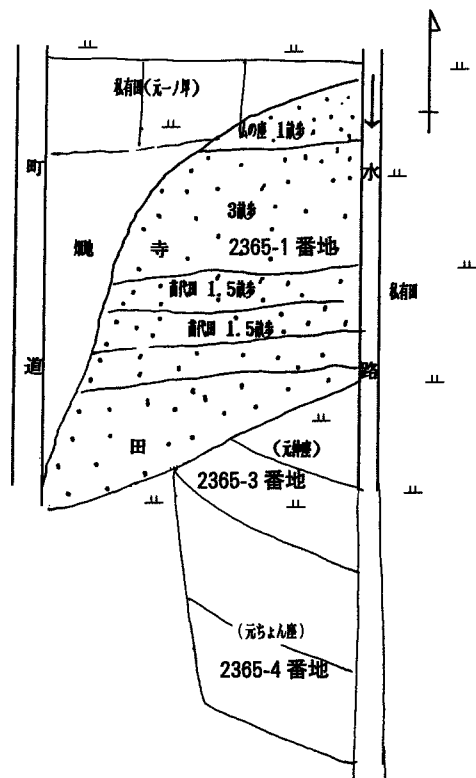


図 1-15 寺田の見取り図

の種粃となる、農業改良普及所などの指導もあって、他の品種と交配する可能性があるのではと2株ぐらい残して粃種として刈り取るよう云われたこともあるが、1m～2mのところに白米種の水田があっても交配の兆しは見受けられない。中央の二枚の水田が苗代田であって一年交替に苗代が作られていたが、今は白米の苗代も作るため2枚共に苗代田として使用されている。

寺田では信仰上の仕来りがあり糞尿は使用しない。そのため緑肥を春田に鋤き込まれたが、いまでも基肥、追肥などの施肥をすると背丈はのびるが、何時迄も青く稔りが遅くなり、また、玄米の表皮が青みを帯びるので施肥は控えめにしている。受頭家の床の間に吊り坐しされている神依は田植え日の6月10日から逆算して40日程前の大安吉日に降ろされる。種粃は海水や淡水に浸されて水面に浮く軽い粃はすくい取られる。真水に浸して7日程で発芽する。苗代直播きのころ45日苗を植え付けされていたが、10年程前より箱苗となって32日または33日苗が植え付けされるようになった。

苗代は耕耘機で攪拌し2日程のちに排水して1.2m程の掻き上げ畝をつくり、木灰を撒いてコテで均し、少し堅くなった所に浸水して粃種を蒔いた。今は箱苗になったので掻き上げ畝に箱を横に並べている。この箱苗を抜き取って手植えにしている。また、田ならしも耕運機やトラクターなどの機械化が進んでいる。

稲の背丈は白米種に比べると高いが、茎は細く堅くて病虫害の影響を受け難い。9月12日前後に出穂するが、芒が覗いて2日間程は、とても鮮やかなピンク色をしていて赤米種のなかでも見事な特徴をもっている。

背丈も近年、幾分伸びて110cm～120cmであり、1株18本～23本ぐらいで白米種に比べると分蘖は少なく、1穂の粒数も50粒～60粒で白米種の半数ほどである。

稔りは白米種にくらべて1週間以上も遅れるが農作業の関係で白米種と同時期刈り取りしないよう努めている。収穫時の粃は茶褐色で玄米は飴色しているが時がたつにしたがって色濃くなってゆく。精米すると色が薄くなり炊飯するとポロポロとして美味しくない。香ばしくて好きな人もいる。カロリーは確かに低く満腹するよう食べても直ちに空腹になる。

この寺田の近くに2002年と2003年の両年に長崎県文化課の発掘調査で弥生期の柱根跡が確認されている。

### 【供僧と供僧の司祭】

供僧（宮僧、社僧）は律令制当時の所産するものでないかとも云われるが、真言の密教として中世風の特殊な経文や秘法、祭文を保持していることから中世の祭祀習俗を継承していることが伺える。元禄5年（1692）には対馬藩で神道復古を進めたとき「豆穀の供僧はこの限りにあらず」として旧慣を温存している。

豆穀の供僧は豆穀集落の上町に居住し、世襲する9戸の社僧であり、長男をもって子々孫々と継承して来ている。一見するに主藤姓が3戸、本石姓が6戸である。豆穀では「お坊さま」とも呼ばれるが豆穀郷の公祭私祭を司祭して、豆穀寺観音堂で執り行う全ての祭り事、赤米神事は申すに及ばず、天道祭り、講上祭り、亀卜神事、カンカン祭り、各節句祭り、権現祭り、お経の紐解き、厄の餅、月待ち、日待ち、正月塩幣子家祓、上棟祭など限りなく、年間多くの祭祀を供僧共同で、又、個別に執り行われてきている。

これらの祭りに読経される経文は祭りと場所で変わるが経名を挙げてみよう。

小中臣祓 心経 錫杖経 観音経 観音経秘鍵 六根清浄 十句観音経 祓の真言 不浄の祓 三礼

その他天道法師が元正天皇のご病気を7日7夜祈祷して治癒したと伝える 吉祥教化 千手教化 志賀法意等があり、別名オコネ経とも云う。

供僧の資格を取得するには、「坊主なり」と云う修行を得なければならない。師匠は回りで決められるが現任のお坊に師事し正月2日より海浜で毎朝禊斎し社参して自宅本座にて師匠を前に秘伝の所作、諸法を習い、写経して1週間が成就するとき初めて奉製する御幣を母が生存してあれば母へ、ない時は妻へ渡して俗世を断ちて神に仕える坊主成の儀式を行う。この日から一切、不浄に触れてはならず、甲問は愚か肉親が他界しても近付いてはならない。供僧家の長男に生まれると幼少から不浄に触れぬよう死道町の駕籠担きもせず、下肥にも触れてはならない。厳しい禁忌を守らねばならない。

豆穀には、集落の全戸に門名があり、家を探ねるとき氏名を探ねるより門名が早く捜し当てる事ができる。門名に坊を付けて円知坊、円州坊などと呼ばれる。これらの9戸は皆、各社の社僧として奉職され、各社の知行として、これに付せられた坪付帳が存していたもので、寛

文年にこの社領も給地と改められたことが解る。

観音堂	(多久頭魂神社)	住持	主藤壽
大明神	(高御魂神社)	仁位	本石久知
権現	(神住居神社)	正膳	本石正久
伽藍牛王	(五王神社)	幸作	本石直己
天神	(天神神社)	格膳	本石覚
宇貝	(国本神社)	円州	主藤徳義

嶽明神	(雷神社)	岡山	本石健一郎
-----	-------	----	-------

師神	(師殿神社)	三位	本石一幸
----	--------	----	------

下宮	(下宮神社)	円知	主藤和也
----	--------	----	------

現に世襲も崩壊し、職業も多様化して供僧を継承する人も減じて3人が供僧として地区内の古式祭の祭典に努めている。



渡御を終えて受頭家の天井に吊される神体の米俵（頭受け神事）

## 対馬における芸能と村落

和田 修

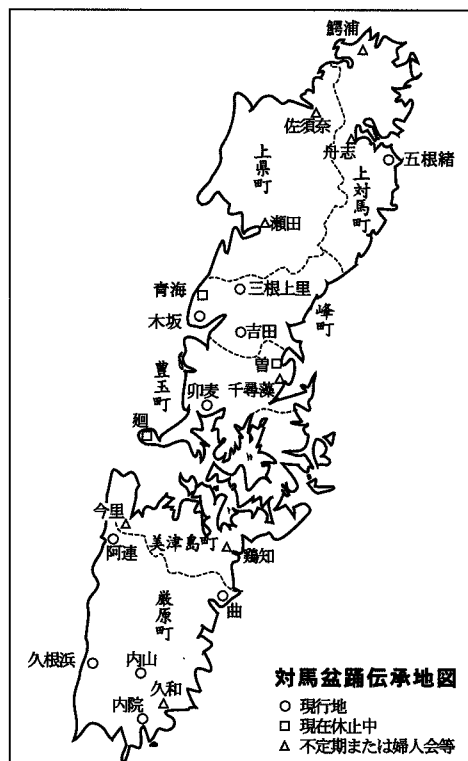
長崎県の対馬（上県郡・下県郡）には、歴史的に多様な芸能が行われてきた。本稿は、その中で、現在まで伝承されている、いわゆる盆踊を中心に取り上げる。対馬の現行の盆踊は、芸能史的には各種の風流系芸能が混然として伝えられており、これを盆踊と呼ぶのは適切ではないが、近世中期から盆踊という記述がみられるので<sup>(1)</sup>、便宜的に現在まで伝えられた芸能の総体をさす場合には盆踊とし、細部に言及するときは芸能史的にふさわしい名称を用いることとする。

また、筆者は芸能史的研究に関心を寄せており、水稲文化儀礼としての対馬の芸能の把握、盆の習俗の水稲文化的な研究については、いまだ報告をまとめる状況にない。本稿は、在地の盆習俗のうえに都市伝来の風流系芸能が招来され、定着、変容を遂げてゆく過程を、いくつかの事例によって検証するものとなる。

なお、各集落の盆踊の詳細については、『対馬 厳原の盆踊』<sup>(2)</sup> および「対馬北部の盆踊」<sup>(3)</sup> にまとめている。本稿はその繰返しになるところもあるが、新たな調査結果をふまえ、総合的な観点から対馬の盆踊をとらえ直すことを試みたい。

### 1 対馬の盆踊の現状

対馬では、例年8月15日前後の旧盆の期間に集落ごとに盆踊が行われている。以前は旧暦で行っていたが、昭和40年代ごろに新暦に移行したという。盆踊をおこなう集落は年々減少しており、1993～96年には14箇所で行われているのを確認した（年によって不開催の集落もあった）が、2003年には10箇所に留まったようである。対馬6町（2004年3月より合併して対馬市）の内訳は、上対馬町が1箇所、上県町0箇所、峰町3箇所、豊玉町1箇所、美津島町0箇所、厳原町5箇所であり、最南端で近世に藩主宗氏の居城がおかれた厳原町が最も多い。この他に、「対馬島郷土芸能発表大会」などのイベントに踊りを披露する保存会が5つほど活動している。



盆踊の期間は、厳原町阿連<sup>あへ</sup>で8月15～17日の3日間、厳原町久根浜<sup>くねはま</sup>で8月14と16日の2日間行われているように、かつては多くの集落で複数日にわたっていたが、現在（1993～2003年）ではこの2集落の他は1日で終了している。

盆踊というと、一般に老若男女を問わず多くの人々が円陣を組み、いくつかの動作の組み合わせによって長時間踊り続けるものを思い浮かべやすい。対馬島内でも1箇所、豊玉町水崎ではこのような踊りを踊っている（聞き取り調査のみ）が、この集落は広島・山口周辺から移住してきた人々によって形成されたので、内地の踊りを持ち込み、そのまま伝承していると判断される。その他の集落には、不特定多数の人々が円陣で踊り続けるものではなく、10名前後の青年たちが約1箇月にわたる稽古を積んで踊るもので、隊型も多くが二列縦隊を基本としている。

各集落の踊りは1箇所で行われるのではなく、初盆(新盆)の家々や、寺社、町の辻などを回って踊られる。内容的にも踊りの場を清めるための儀式的な曲と、さまざまな要素を含んだ娯楽的な曲に分かれている。移動とそれにともなう儀式的な曲が存在することは、御霊信仰に淵源をもつ風流系芸能では一般的であるが、対馬の場合、芸能史的に異なった分類に属する踊りが、1つの集落の踊りの構成の中に混在しており、多年にわたって各種風流系芸能を摂取し、構成を整えていったことが窺われる。

## 2 踊りの構成と分類

対馬の盆踊を構成する曲を分類すると、以下のようになる<sup>(4)</sup>。

### ①移動・入退場

前述のように、踊りの場所が数箇所あり、その間を移動して踊って行くのは、風流系芸能の特徴であるが、対馬でも、移動中の道行にあたる部分や入場・退場(入端・出端)に関わる曲を持つところが多い。厳原町阿連では道行部分に名称はないが、鉦・太鼓・法螺貝で囃して移動し、踊り始めと終わりに「出歌」「引歌」がある。同町久根浜では道行を「ミチヅレ」といい、鉦・太鼓・法螺貝・笛で囃す。踊りの場所の前で行列を止めることを「渡り込み」という。同町内院<sup>ないん</sup>では移動中は楽器をならさないが、踊りの場への入退場を「吹き込み」「吹き出し」と呼び、太鼓と法螺貝で囃す。

### ②清め

踊りを始める前にその場を清めるための曲。対馬ではツエの打ち合わせがこれに相当するところが多い。北部の上対馬町五根緒<sup>ごねお</sup>、峰町青海<sup>ほうみ</sup>、同木坂、同吉田、豊玉町曾<sup>むす</sup>、同卯麦<sup>うむぎ</sup>などで行われており、厳原町では久根浜のみにみられる。

また道行や入場から引き続いて太鼓打ちのある場合が多い。太鼓の打ち手と持ち手が1組になり、打ち手が所作をしながら太鼓を打つもので、「渡り」「渡り打ち」と称するところが多く、かつてはほぼ全島的に行われていたが、現在では北部の地域に多く残る。毛槍・傘・挟箱など大名行列の奴振りに類した所作を行うところも多い。

道行からツエ・太鼓打ち・奴振りなどの一連の次第は、宗氏のもとで行われた盆行事である御卯卵塔風流<sup>おらんとうりょう</sup>(後述)

の影響を受けたものと考えられる。

### ③魂迎え・魂送り

風流系芸能では傘鉾などが魂を憑りつかせる機能を担うことが多いが、対馬では笹竹に色紙や括り猿の飾りなどをつけたものをエツリ(エンヅリ・エツリ)と呼び、盆行事のシンボルとしている。

エツリを囲んで踊る曲のあるところが多く、峰町吉田では踊りの終わりに、エツリを取り囲んだ踊り手たちがいっせいに葉を引き抜き、裸になった竹竿を宙に投げ上げ、これをねらって鉄砲で打つという変わった次第がある。同町青海では「納めの歌」にあわせて鉦と太鼓がエンヅリの周囲を回り、歌が終わるとエンヅリを海に投げ込む。美津島町雞知<sup>けち</sup>と厳原町久和<sup>くわ</sup>ではエツリを勢よく振る「エツリ指し」がある。雞知では別名を「わたり打ち」といい、太鼓・鉦に合わせてエツリを振り、枝先から落ちた色紙を見物客が拾い集めて家に持ち帰り、「玄関先や敷居の上につり下げ、厄払いの神としてまつり、一年間の無病息災を祈願した」(第4回対馬島郷土芸能発表大会プログラム)という。久和では「エツリに先祖の霊が乗るので重くなる」と言い伝えており、盆の祖霊を招き寄せ、送り返す役割を果たしていると考えられる。残念なことに両集落とも現在は行っていない。

### ④祝言

各集落に「祝言」と呼ばれる曲があるが、対馬独特の三雲模様<sup>みつぐも</sup>の扇または日の丸扇を持って荘重に踊る扇子踊をさす場合が多い。これらは風流踊一般の庭誉め・館誉めに類すると思われる。「祝言」という名称は、宗氏の城下である府中(厳原町中心部)で御用商人の子弟らが踊ったとされる六十人躍(後述)で行われていたのに由来するのだろう。藩主に踊りを捧げ、太平を寿ぐ意図であろ<sup>う</sup>か。扇子踊と手踊を組み合わせて「祝言三番」と称するところもあり、必ず初めに踊るべきものとしている集落が多い。神楽の式舞などにあたるものと考えてよい。

### ⑤手踊

いわゆる盆踊は、何も持たない手踊が一般的だが、対馬の場合、基本は扇子を持った「祝言」で、手踊はその扇子を置いた短い踊りであることが多く、あまり重要視されていない。

### ⑥採り物踊



ふさのついた綾竹を持って踊る綾踊は、ほぼすべての地区に見られる。その他、傘、長刀、杖、四つ竹など種々の採り物を持って踊る曲も少なくない。峰町青海の「笠踊」、同木坂の「馬踊」、豊玉町曾の「杖踊」、厳原町内院の「傘踊」など、特色のあるものが多い。ただし、同じ長刀や傘を持った踊りでも、次項の仕組踊のように扮装をするものとは区別が必要である。

#### ⑦仕組踊<sup>しぐみどり</sup>

長い物語の口説にあわせた手踊（いわゆる踊り口説）は西日本各地に分布するが、老若男女が浴衣掛けなどで円陣を組んで踊るところが多く、歌われる物語の内容を劇的に表現することはない。対馬では、物語の内容にあわせ、一人ないし二人の踊り手が登場し、女役は振袖を着て、髪をかぶったり化粧をしたりし、男役もそれらしい扮装をして、太刀打ちの場面では長刀と刀を打ち合わせるなど、芝居がかった振りがつけられている。ただし

踊り手がせりふを言うことはなく、振りも類型の域を出ていないので、踊り口説の発達したものととらえることができる。

上記のような分類に各集落における事例をあてはめると表1-6のようになる。順序は他と合わせるために前後させた場合もあるが、ほぼ現行の次第に従っている。

ここに掲げた以外の集落（厳原町で聞き取り調査をした廃絶地を含む）の伝承曲も含めて考えると、豊玉町・峰町以北に扇子踊と採り物踊を中心とした曲が多く、美津島町・厳原町では仕組踊に重点を置いた娯楽性の強い踊りが多く残されたといえよう。

いずれも対馬独特の振りであるが、芸能史的な位置づけを考えたときに重要となるのは、①の行列・ツエ・太鼓打ち・奴振りなどの移動・入退場に関わる曲、⑥の採

	上対馬町 五根緒	峰町木坂	峰町三根上里	豊玉町曾	厳原町阿連	厳原町久根浜
①移動		行列	(道行あり)	(道行あり)	(道行あり)	ミチツレ
②清め	棒突き	ヤッコ ドウギ入レ(杖) 飛び太鼓	坪回り(杖・鉄砲・ ハタ・ハグマ・ 短冊・鉦・太鼓) 打ち太鼓	先踊(杖) リンリンコ ワラ カジメ	出歌 坪入り 渡り 引歌	シオゴー ツエ(口上あり) 太鼓踊
③魂迎え・ 魂送り		終了後エツリの 竹を海に投げ込 む。	終了後鉄砲を撃っ てハタ(青竹) を橋から川へ投 げ込む。			バンバ踊(エツ リの周囲を回る)
④祝言	扇子踊 「花は折りたし」 「君の御用」 「春の初めの」	扇子踊「松が根」 手踊「門は一五 三」 扇子踊「松が根」	扇子踊 「しろたえ」 「世の中」	扇子踊「春は花」 手踊「出雲より」 扇子踊「春は花」	扇子踊「いざな ぎ山」	前踊 扇子踊「御代永 き」
⑤手踊		「御代は目出度 や」 「伊勢の若衆」 「君を思わで」	「かど」「君の恩 賞」「四季」「あ べ」「網すきい」 「いつも」「あさ のむつ」	「奈良ば濡れ里」 「牛島どんの」 「薩摩のや」		(踊り口説) 「いろは口説」 「牡丹長者」
⑥採り物踊	綾踊「こちの隣」	杖踊「大江山」 杖踊「武蔵鑑」 馬踊「五十三次」 馬踊「川にゃザ ンザラ」		杖踊「木曾が山 から」 太刀踊「江戸の 両国橋」 杖踊「木曾が山 から」	綾踊「鈴木主水」	綾踊「一つとさ」 「ひよどりひば り」
⑦仕組踊			「国は備前」		シコミ踊 「石重丸」 「家中」 「吉夷」	

表1-6 各集落の盆踊の構成

り物踊、⑦の仕組踊であると思う。

以下、この3種に注目しながら、現行の盆踊の伝来と意義を検討してみたい。

### 3 宗氏周辺の盆芸能

明治になって廃絶したが、対馬藩主宗氏のもとでは、盆に2種の芸能が行われていた。1つは藩士による御卯卯塔風流であり、いま1つは城下で六十人衆と呼ばれた御用商人の子弟らによる町躍（六十人躍）である<sup>(5)</sup>。

御卯卯塔風流（孟蘭塔風流などとも）は、藩士などが行列をして、宗氏菩提寺の万松院をはじめ、厳原八幡宮、長寿院、體泉院、国分寺などを回り、各所で「猩々」「百万」の謡の一節をうたうものだったという。『宗氏家譜略』記載の伝承では、文明18年（1486）に第11代宗貞国の夫人が7つの卵を出産して死に、その祟りを鎮めるために土用祭・御卯卯塔風流が始まったとし、『対秘見聞録』では、16代宗晴康の時に「猩々」「百万」の小謡に改めたという<sup>(6)</sup>。行列風流の一種であろうが、謡の一節をうたったことと、移動時に鉦・大太鼓・締め太鼓・笛などで「渡り拍子」を囃したということ以外、どのような芸態であったのか明確ではない。

明治期に成立した内野対琴著『反故廻裏見』（巻一）には、上県町鹿見で盆踊に付随して行われた殿様行列の次第が詳しく記されている。長くなるので引用は省くが、士族の少年の扮する「若々様」が行列を上覧する形を取り、毛槍・台傘・立傘などの行列を鉦・太鼓で囃し、座に着くと杖や弓の者の礼、挟箱持の「歩み振り」、毛槍振りなどがあり、胸につけた太鼓を打つ所作もあったことがわかる。鹿見ほど大規模ではないにせよ、各集落に類似の種目が残ることから、逆に宗氏の御卯卯塔風流にも同種の芸能があったと推定できるのではないだろうか。各集落の盆踊の行列およびツエ・太鼓打ち・奴振りなどは、藩主上覧のもとで行われた御卯卯風流を縮小して再現したものであり、長年の間に民俗化されて変容をみたと考えてよいだろう。

いっぽう、六十人躍は、『反故廻裏見』（追加一）に載せられた嘉永4年（1851）の記録によれば、7月12日と16日に宗氏の屋敷の庭に畳を敷いて舞台とし、祝言を3番、「中老躍」を5～7番踊っており、15日には万松院でも踊ったようである。時と所によって踊った曲が異なっ

ているが、すべての曲目をあげると次の通りである。

祝言 君が代 心もすめる 憂い————  
神の代 流れもたへぬ 花ざかり  
中老躍 四季に咲花 八景 御代は常盤 長刀  
手拭 伊勢の津 傘 関の小まん 猩々  
酒 川口説

『反故廻裏見』にはこの時の詞章も掲載されているが、嘉永4年のものであるにも関わらず、宝永元年（1704）刊行の歌謡集『落葉集』所収歌と一致する曲がみられる。さらに、嘉永4年の六十人躍歌謡に、集落の盆踊として伝えられた歌と一致する曲ものもある（第6節参照）。

また、渡辺伸夫による表書札方『毎日記』の調査によると<sup>(7)</sup>、元禄2・4・6・7・9・10・11年の7年間に踊られた曲は、次に掲げる延べ33番に及ぶ。

祝言 月の松 禿 手代石突 ざい躍 母衣躍 唐人躍 籬 花笠 花車 阿屋 団扇 楽遊 伽羅留 馬柄杓 軒のあやめ 械おとり 五尺手拭 芦分船 丸躍 長阿屋 笠躍 一行躍 かま躍 竹馬躍 道具躍 見くに 江戸船 鍵躍 長刀躍 太平躍 万世 伊勢躍

詞章は記されていないので明確ではないが、「笠躍」「竹馬躍」などの曲名は現行の採り物踊との関連を思わせる。

このような歌謡の類似から、集落の盆踊の中心部分となす、④祝言以下の踊りは、城下の六十人躍を手本に仰いで成立したとみることができる。

先にも述べたように、御卯卯塔風流と六十人躍は、宗氏の周辺で行われた盆の芸能であるが、本来は性格も担い手も異なるものである。しかし、各集落はこれを一体のものとして受容し、集落内の郷士（士族）を藩主に見立てつつ、一般の百姓たちの盆行事として定着させたといえよう。

もう少し詳細に比較すると、祝言・手踊については全島的に類歌を見出すことができるが、『反故廻裏見』に「中老躍」<sup>(8)</sup>と注記された歌は、豊玉町以北にみられる採り物の詞章と合致するものが多い。対馬北部の盆踊は元禄頃の六十人躍の様子を、ある程度今日まで伝えていると考えてよさそうである。

### 4 踊り口説と団七踊

これに対して、⑦の仕組踊は、近世後期から近代にか

けて生み出されたものである。

仕組踊という名称は私に与えた仮称だが、特別に趣向を凝らした踊りの意の芸能用語であり、郡司正勝に詳論がある<sup>(9)</sup>。また、『反故廼裏見』に「仕組踊」と記されており、厳原町阿連でも「シコミ踊」の呼称があったことから、対馬の場合も「仕組踊」と呼んでさしつかえないと考えている。

風流踊には中世から物語歌の系譜があったが、近世に入って新たに踊り口説が生まれた。資料で確認できるのは万治3年(1660)刊『万歳躍』(友甫流躍くどき)が早い。この時期のものは物尽し的な歌謡であったのに対し、貞享元禄初年(1684~90)頃になるとストーリー性のある語り物の要素を濃くし、内容的にも心中、殺人、人気役者の死など、衝撃的事件を取り扱うようになる。歌舞伎の舞台や祇園など遊里の盆踊でも歌い踊られて多くの曲が作られ、主に西日本の盆踊として展開していった。

瀬戸内海に浮かぶ白石島(岡山県笠岡市)の盆踊は、寛文~元禄頃(1660~1703)の歌舞伎・遊里の踊りを描いた画証そのままといってよいような芸態を残している。その他の伝承地を含め、踊り口説の振りの特色は、歌謡の内容とは無関係に、近世盆踊や歌舞伎舞踊にしばしばみられる「ナンバ」と呼ばれる踊り方の基本を繰り返すという点にある。つまり、ストーリーのある歌謡であるにも関わらず、登場人物の役に扮して内容を演劇的に再現することがないのである。

ところが、近世後期に団七踊が生み出されて新たな展開が生じた。奥州白石村で代官志賀団七に父を殺された姉妹が艱難辛苦して敵を討つという内容で、浄瑠璃「碁太平記白石断」にも取り上げられてよく知られた物語である。踊り口説としては常套的な内容だが、この曲に限って、父親・代官・姉妹などの役にふさわしい扮装をし、太刀打ちを基本とした振りが付けられて、ある程度物語の内容を視覚化することに成功し、とくに団七踊と呼ばれるようになった。この新機軸が人気を呼んで急速に広まり、西日本はもちろん、従来ほとんど踊り口説が行われていなかった東日本にも伝えられた。しかし、他の口説の曲まで同じような形で演劇的に振り付けることはあまりなされなかった。

対馬でもすでに踊り口説が行われていた基盤の上に<sup>(10)</sup>、

後から「団七踊」が伝えられたと考えられる。一般の団七踊は何組かの踊り手が出て円陣を組んで踊るのだが、対馬では1人立ちから4人立ち程度の少人数の踊りとして、観客を意識した舞台向けの振付を施し、次々と同趣の曲を作って、仕組踊と呼ぶにふさわしいジャンルを形成するに至った。その成立には、近世中期から各集落で行われていた地芝居の影響があったとみられる<sup>(11)</sup>。

仕組踊は峰町三根上里でも踊られており(表1参照)、歌本や『反故廼裏見』の記録によって、かつてはその他の北部集落でも行われていたことがわかるが、圧倒的に南部で人気があった。ところが前述の嘉永4年の六十人躍の記録には、元禄~享保頃の踊り口説に類歌を持つ、物尽し風の口説が載せられてはいるものの、仕組踊にふさわしい物語的な口説は見出されない。近世後期には古格を重んじるようになっていた六十人躍は、新たな流行の仕組踊を受け入れなかったと考えてよいだろう。

各集落の盆踊は、宗家の御卯卯塔風流と六十人躍をモデルとして成立したのだが、その後内地からもたらされた団七踊や新工夫の仕組踊を独自に摂取していった。港があり経済的にも発展していた城下町の府中が流行の中心地であり、その周辺では次第に従来の採り物踊が廃れてしまった。北部でも新流行を受け入れていったが、なお採り物踊も保持して古格を残したのである。

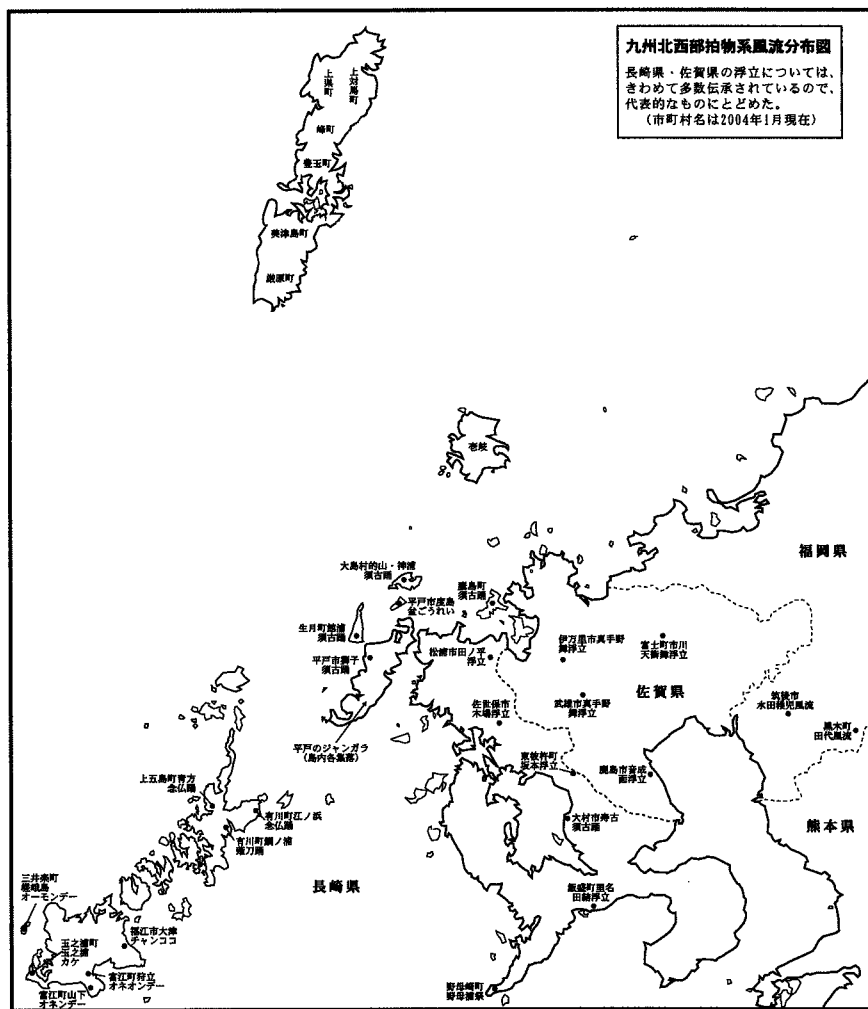
対馬の盆踊が、各種の風流系芸能を重層的に蓄積したものであることは確認できたと思う。その起源は奈辺にあるのか、次節以下では少し視野を広げて考えてみたい。

## 5 行列風流の伝播

各集落の盆踊にみられる杖の打ち合いや太鼓打ち、毛槍・傘・挟箱などを用いた奴振りが、おそらく宗氏の御卯卯塔風流にも備わっていたであろうことは先にも述べたが、さらに同種の芸能を対馬の周辺、九州北西部の島々にみることができる。長崎県大島村、同鷹島町(未見)、同平戸市度島、同生月町館浦などの須古踊と称される芸能である。須古踊は有明海に近い肥前国須古邑(現・佐賀県杵島郡白石町)が発祥の地とされているが<sup>(12)</sup>、現在佐賀県内で行っているところはなく、長崎県の大村市や上記の島々で伝承されている。踊りそのものは円陣を組んで扇を持って踊るものであり、歌は中世後期から近世初期風の短詩型歌謡が多い。この踊りが対馬盆踊の祝言

詳しくは『対馬 厳原の盆踊』第4章で述べたので繰り返さないが、たとえば大島村の山あづちの須古踊では、区長・須古頭（モッシュォガシラ）・先払い（棒曳）・槍持・幟持・太鼓打ち・太鼓持ち・鉦打ち・笛・踊り手が行列に加わって集落内を回り、踊りの場では、花杖と称する子供の杖の打ち合いに始まり、刀・鎌などを用いた組み手が行われる。これは芸能ではなく、「流儀」と呼ばれる本格的な武術で、天下新無双流、大山引大流、真刀流に分かれており<sup>(13)</sup>、須古踊に随行して武術の一端を披露するのである。現在は行われていない平戸市獅子の須古踊には、町総代・ゴヘ差・棒つき（六尺竹）・幟さし・オカチ組・鳥毛の槍・杵ふり・杖つかい・棒つき・高い山（子供の踊り手）・モッシュォ方・はやし方・太鼓（打ち方・掛け方に分かれた二組）・鉦打・笛など総勢百三十六人に及

また、須古踊の分布圏と一部重なりながら、平戸市や五島列島にはジャンガラ・チャンココ・オーモンデーな



拍物風流は、村落の中に潜伏している疫神や害虫などを、賑やかに楽器で囃し立てて趣向を凝らした造り物に憑りつかせ、村落の外へと送り出すという機能を有して

いる。短い囃子詞を伴うことが多く、太鼓・鼓・ササラ（ビンザサラ・擦りササラ）・鉦などの楽器を身につけ、これを打ち囃しながら隊型を変えて踊るのが特徴である<sup>(16)</sup>。京都のヤスライ花や祇園会の隠し太鼓、琵琶湖周辺のサンヤレ・ケンケトなどが典型とされるが、早くから地方にも伝播して、東北では剣舞・鶏舞<sup>けんぱい けいぱい</sup>となり、九州北西部ではジャンガラや風流・浮立を生み、さらに九州南部ではさまざまなバリエーションの太鼓踊に展開したのである。

何分にも文献資料の残らない芸能のことで、伝播の時期や経路を明らかにするのは難しいが、対馬の盆踊の儀礼的な基層部分をなしているエツリ・ツエ・太鼓打ち・奴振りなどが、九州北西部における中世後期から近世初期にかけての拍物文化圏の中で形成されてきたことは、ほぼ確実と思われる。

## 6 元禄期の踊歌

最後に、対馬盆踊の採り物踊について、その芸能史的な位置づけを確認してみたい。

風流踊は、単調な囃子詞と楽器による拍物風流に始まり、次第に歌謡を豊かにして、短詩型の小歌を組歌にした小歌系風流踊を成立させた。近世の町躍では、再び小歌組歌が解体されて短詩型小歌の羅列になる場合と、新たに生まれた踊り口説を用いる場合とがあり、近世後期までいわゆる盆踊の二大潮流となった。

小歌組歌の風流踊からは、舞台向けに特化したややこ踊が生まれ、さらに出雲お国らによるかぶき踊の誕生をみたことはよく知られている。かぶき踊誕生期の歌謡は、基本的に小歌組歌であり、女歌舞伎でも若衆歌舞伎でも、若く美しい男女が踊っていた。しかし、いわゆる野郎歌舞伎の時代、寛文・延宝頃（1660～80）になると、立役系の踊りもみられるようになる。当時、巷間では奴風俗が流行っており、歌舞伎でも六方言葉、丹前（六方）の振り出しなど、奴風俗の影響を受けた立役の芸が人気を集めた。この頃から元禄宝永頃（1688～1710）にかけて、どのような踊りが歌舞伎の舞台で行われていたのであろうか。踊り口説が流行したことは先にも述べたとおりで、口説に合わせて一座の役者総出演の総踊がフィナーレを飾っていた。そのいっぽうで、『落葉集』（宝永元年刊）などの歌謡書には、奴踊風の踊歌が多数掲載されている

が、その曲調や踊り姿は従来明らかでなかった。

享保期（1716～1735）には上方歌が江戸で独自の展開を遂げて江戸長唄が成立し、今日に至る歌舞伎舞踊の基礎が築かれた。長唄舞踊の初期は女方や若衆方が中心であり、詞章も小歌踊の羅列といった趣きであった。奴踊系の立役の踊りは、志賀山流に伝えられた「馬場先踊」のような稀曲を除くと、「大原女・国入奴」「供奴」など後期の変化舞踊の中などに面影を残すのみとなる。

しかし、先にもふれたように、対馬の六十人躍や現行の採り物踊の詞章には、『落葉集』などに収められた踊歌と一致するものがみられるのである。『対馬 厳原の盆踊』214頁以下に対照表を掲げたが、その中から『落葉集』・六十人躍・現行の踊りの三者が揃った一例をあげる。

### ○『落葉集』竹馬踊

五十三次に隠れない男、よゝをこめたる竹馬を、さて  
 ー見事に飾りたて、手綱かいくりしっしどうー、  
 とんどどつこいせと、どつこいせ、朝の出がけにや  
 小室節、出がけにや朝の、朝の出がけにや小室節、一  
 こゑ二ふし三蔵や、いうたりつんーつれだち、さあ  
 ー行くべいー、轡と鈴がりんーがらーりんが  
 らがーはいどうーはいーはいーはいどうし  
 ーあつばれ御馬は上手が上手と、乗ったか乗ったぞ、  
 それそれ揃うたえ（巻四、四十四）

### ○六十人躍（内野対琴『反故廻裏見』嘉永4年記録）

五十三次にかくれないおの子（コノヨ、ヲコメタル竹馬ノ）  
 扱ー見事にかさり立 手綱かいくりおむろ  
 そんなはぶし（コノ一声二節三ゾヲ四）二人つんー  
 連立ちさあー行くべい さあ行くべい（コノクツワトスバガ）  
 りんーカラーーーとゝんととつこいーせ（ム、トツコイセへ）  
 さりとは無類なお江戸入（ヤツレヲシヤア）  
 上手とーが乗たる名馬かーそれーそろふたへ

### ○「馬踊り」峰町木坂

ごじうさんつげに隠れない者は、このおよこめたる竹馬を、  
 アサさてさて見事に飾り立て、手綱かいふし  
 アーインインイン、アーソーシードウドウドントドッ  
 コイセ、アア、ウウドッコイセ、今朝の出がきにこの  
 ろうが、こんてにウーウーウーウーン、アアーこえ二  
 ふしに三揃え、アサ、ツツンツン爪立ちハアサア行く

えサア行くえ、アサくつわとすずわはリンリンガラガラ、リンリンリンイヤハイハイハイドウン、アサ乗った名馬じゃ名馬じゃ、ソレソレ揃ろたえ

次の例は、『反故廼裏見』所収の六十人躍歌には類歌がないが、前記報告書以降に判明した三根上里の詞章を加えることができるものである。

#### ○『落葉集』福助買初踊

かどは一五三、飾り薬下げて、物申、どれ——どっこい、どれ——どっこいどれ、当年の恵方より、福介が買初はは目出度いな、蔵開き棚卸し、皮の財布を肩にひっかけて、古金買を、唐金買を、文の上書き起請の下書き、買いましょよい——、伽羅のたきがら買をやれ買を、おふ買を、心中のよいよね達を、千年も万年も、万々年も正月買いと祝ふた（巻四、二十九）

#### ○「門は七五三」（手踊）峰町木坂

門は一五三に 飾りなわさげて 物申（ものせ）の  
どれどれどすこい どれどれどすこい どうれ 当年（とね）の恵方（いほ）よに 福助（ふうくぞげえ）が  
かあいぞけ めでたな 蔵開き たな下し 皮の財布を 肩に引っかけて あつさ古金（ふるがね）  
さつさ唐金（からかね）かあお しんじよの良うい 嫁たちは 千年も万年も あつさ 万々年も 正月かいよ 祝うた

#### ○「かど」峰町三根上里

かーどは、一五三に飾り縄さげてもの あっさどれどれどっこい どれどれどっこい ひとおしへ よい  
おとめの えー ふうちょうに ふうふとや えなさいとや めでたいな 船開き 棚卸し 花のさあえ  
分銅 肩に引っ掛けて えっさ ふるがねか あらから金か あお あおせんじよの祝うにめでたしが  
千年も 万年も あっさ 万々年も 正月だいとう 祝うさえ

ところが、意外なことに、鹿児島県十島村悪石島（トカラ列島）の盆踊でこの類歌に出会うことができた。

#### ○「財布踊」悪石島<sup>(17)</sup>

浪花お家のゆわいな踊り この正月初に倉おろし このかなおろし かなの財布をかたにでかけて おおふるかねか おうからかね おうきしょう おわがき  
ふみの下書き かえましょう かなのたしから かお  
おやおかお そら千年も そら万年も 正月こえとい

おた

かどは七五三 かざいのわさいたる このおしきせ男の子わさ そらまるまるまる こうていおたい

悪石島の盆踊は、多数の男性が円陣を組んで踊るものであり、その点では対馬と異なっている。しかし、現行の踊りはかなり衰退していて本来の振りを知ることが難しくなっているとはいうものの、ナンバを基礎にした内地の盆踊とは異なった印象を受ける。心なしか曲調も対馬と似たところがあるように感じられる。

歌謡は、踊りをともなわずに詞章のみが伝播することもあるので、対馬と悪石島の類似をもって、寛文～元禄期の歌舞伎における立役系の踊りの具体像に結びつけることはできないが、京・大坂からはるかに隔たった九州の北と南の離島に、内地風の盆踊とは異なった振りで元禄歌謡が伝承されていることは注目に値する。

初期歌舞伎の研究に際しては、小歌系風流踊や猿若の芸脈など、民俗芸能から歌舞伎の芸態を明らかにする研究方法が、本田安次・郡司正勝以後、一般に認められている。しかし、歌舞伎が舞台芸能として固定した野郎歌舞伎以降になると、荒事を除けば、民俗芸能に目を向けることは少なかったように思う。対馬の採り物踊は、見過ごされてきた歌舞伎舞踊の一系譜に光をあてる、重要な芸能史の資料といってよい。

## 7 対馬の村落と盆踊

盆の風流系芸能が民俗的習俗と不即不離の関係で発達したことは、あらためて言うまでもなく、対馬も例外ではない。しかし、対馬の村落における盆踊の芸能面に関しては、在地の民俗的な習俗儀礼にもとづく要素は少なく、宗家で行われた御卯卵塔風流と六十人躍を模したものであった。その御卯卵塔風流は、さらに九州北西部の拍物風流文化圏内に位置づけられるべきものであり、六十人躍は須古踊と若干の関連を有しながら、都市の歌舞伎舞踊や遊里の踊りと深いつながりを持つものであることを確認してきた。

対馬周辺の須古踊やジャンガラ・浮立などは、近世後期の芸能の影響を若干受けている場合もあるが（舞浮立における地芝居の影響など）、基本的に中世から近世初期の様式を留めているのに対し、もっとも内地から遠い対馬の盆踊は、近世後期の団七踊や新工夫の仕組踊まで、



次々と新しい芸能を受け入れている。経済的な流通経路、参勤交代、朝鮮通信使など、いくつかの要因が考えられるであろうが、娯楽の少ない離島の人々の、内地の芸能への強い憧れが、旺盛な芸能摂取の最大の原動力だったのかもしれない。

民俗的信仰は芸能の受皿にすぎず、人々の関心は、上は藩主から下は百姓まで、より都会的でより新しい芸能にあったといえよう。芸能を希求する村落の熱意が、芸能史研究に重要な資料を残してくれたということもできるだろう。

## 注

- (1) 御郡奉行『毎日記』享保9年(1724)7月28日条(長崎県立対馬歴史民俗博物館蔵)に以下のような記録がある(渡辺伸夫調査)。

○与良郷之内七ヶ村以前より氏神祭りとて躍仕来り候ニ付盆踊之外一日宛躍申度由願出候ニ付去ル七日御郡御支配江申上候処ニ被仰付候ハ去年被仰渡候通十四日十五日両日内躍候而も可相済候併重キ差支も有之候ハ、吟味仕申登候様ニ役方へ申下候様去七日於 御屋敷古川図書殿より被仰付候付其段申下候処ニ神祭り之義ニ候間以御了簡被差免被下候様ニ右七ヶ村よりも又々願出右之外大船越濃部村之義も同様ニ願出候由奉役大山本之充申出候付去ル廿四日御郡御支配江以手紙伺候処ニ願之通被仰付候付御郡御支配より御渡し被成候御書付左ニ記之

与良郷

小船越村  
蘆 浦  
大山村  
雞知村  
洲藻村  
黒瀬村  
竹敷村

右之村々之儀以前より氏神祭として躍仕来り候処去年申渡候通十四日十五日之内一両日躍候而も可相済義ニ候併重キ差支之義も候哉吟味仕候様ニ申渡候付則被申渡候処其後如何様共田舎より不申登候然処右七ヶ村躍候義相止候様ニ佐々木半兵衛申付候得共以前より神祭り之躍仕来りたる事ニ候間前々之通ニ御免被成候様ニと村人共願出候由ニ而委曲以書付被申出候趣承届候神祭り之儀と申以前より仕来り之儀故願之通一日躍候義被差免候旦又大船

越村濃部村躍之儀も右同前ニ被仰付候間可被申渡候以上

七月廿八日

吉川図書

平田隼人

御郡役衆中

右之通被仰付候ニ付御書付与良郷奉役方へ差下ス

- (2) 『対馬 厳原の盆踊』、厳原町教育委員会発行、1999年。  
(3) 「対馬北部の盆踊」『演劇研究』23号、2000年3月。  
(4) 『対馬 厳原の盆踊』47頁にもとづき、その後の知見と本稿のテーマにより加除を加えた。  
(5) 六十人衆は、永享5年(1433)に宗氏が九州の領土を失って対馬に本拠を移した際、旧領地から移住した家臣団の特権商人として処遇したのに始まるとされるが、町躍は一般に近世に入ってから各地の城下町で行われるようになったとみられるので、対馬の場合も16世紀に遡ることはないと思われる。  
(6) 渡辺伸夫「対馬の芸能環境」『対馬 厳原の盆踊』40頁。  
(7) 『対馬 厳原の盆踊』217頁。  
(8) 過疎化により原則どおりではなくなっているが、現在でも盆踊に携わるのは集落の青年とされている。人口の多かった昭和前期までは、さらに年齢層により2つのグループに分けることがあり、年長者を中老組、年少者を子供組などと呼んでいた。嘉永4年の記録には中老組に関する記述のみがみられる。  
(9) 郡司正勝「琉球の『組踊』とかぶきの『仕組踊』」『郡司正勝判定集』第4巻、白水社、1991年。  
(10) 厳原町久根浜の手踊「いろは口説」「牡丹長者」などが、本来の踊り口説を伝えるものであろう。  
(11) 地芝居の記録上の初出は寛政11年(1799)。渡辺伸夫「対馬の芸能環境」43頁による。  
(12) 米倉利昭「流転の芸能一須古踊考」『佐賀民俗学』4号による。  
(13) 『大島の須古踊』、大島村教育委員会発行、1975年。  
(14) 『獅子の須古踊り』、平戸市教育委員会発行、1983年。  
(15) 山路興造「浮立・風流・楽踊り一九州地方の風流系芸能について」『芸能』56号、1975年。  
(16) 『近江のケンケト祭り・長刀振り2』第4章(青盛透・植木行宣)、滋賀県教育委員会、1988年。  
(17) 『十島村誌』、十島村発行、1995年。

付記 本稿に関連の映像等を下記で配信しております。

<http://www.wdosm.cache.waseda.ac.jp/~tsushima/>

ユーザー名: tsushima パスワード: suito

で御覧いただけます。

## 第2部 東アジア村落における水稲文化と景観 —対馬豆酛地区の調査—

### I 調査の目的と概要

#### 調査の目的と概要 付 豆酛の一年

海老澤 衷

##### 1 豆酛に関する九学会連合調査の概要

既に「本研究の経緯とねらい」で述べたように、1950年から52年にかけて豆酛を対象として九学会連合調査が行われた。対馬調査の中でも、最も詳細かつ学際的である。調査技術の点で、発展途上のところはあるものの、その総合的な記述は現代の調査では及ばないものである。まず、その目次により概要を示そう。

- 1 はしがき（鈴木誠）
- 2 概要（鈴木誠）
- 3 沿革（宮本常一・鈴木誠）
- 4 住民の生体計測（小浜基次・古江忠雄・武内純四郎）
- 5 社会（鈴木誠・宮本常一）
- 6 漁業（宮本常一）
- 7 信仰習俗（石田英一郎）
- 8 言語（金田一春彦・奥村三雄）

このほか、自費参加のノーベック、ピアツリーが「誕生から死まで」および地図作製、漁業を担当し、渡邊兵力が農業について執筆する予定であったという。自費参加の研究者に図面作成を任せた点は、この調査が詳細を究めただけに惜しまれる。「廻・唐舟志・津和原調査報告」・「鰐浦ムラ」では集落と民家の優れた図面が作成されているのとは対照的である。

内容においては、まず4の生体計測が目玉され、豆酛内の3町においてそれぞれ骨格の相違が指摘されている。5の社会では本戸と寄留の分析に重点が置かれている。

われわれにとっても学ぶところの多い記述となっているが、何といてもこの地の特性を示している7の信仰習俗であろう。先ずその内容をみよう。

- 1 天道信仰と大師信仰
- 2 天道信仰の構成 （1）社殿と聖地 （2）供僧  
（3）『當』の組織と寺田 （4）當の行事
- 3 サンゾウロウマツリー雷神社と亀トー
- 4 村の年中行事
- 5 個人の推移儀礼

となっている。本報告書における儀礼の復原では、城田吉六氏の『赤米伝承』（葦書房、1987年）とともに、これらの報告から学ぶものが多かった。われわれ歴史研究者からすると、1950年前後の状況が詳しくわかり、貴重な調査であることは確かなのだが、文献資料の分析があまりないことおよび豆酛全体の地図が示されていない点に新たな調査の必要性を強く感じさせるものがある。しかし、何といても50年のギャップは大きい。4で示された「村の年中行事」は、九学会連合調査のなかでも他の類例を見ない内容と詳細さを有している。この後、多くの市町村誌で扱われる「年中行事」のプロトタイプとなったと考えられる。本稿では「付」として、全面的に掲載させていただいた。ここから伝統的な豆酛の1年を認識し、その特性を学び取って豆酛の村落調査にご理解をいただけたらと思う。

##### 2 村落共同体としての豆酛の特質

「豆酛」、この地名を「つつ」とただちに読める人は

少ない。しかし、もともと「豆」にも「酛」に呉音にはツまたはヅがあるので、特殊な読みと言えず、『和名抄』には対馬下県郡四郷の一つとして、見えている。写本によって相違はあるが、『和名抄』およびその後の史料も含めて、郷名としての呼称のぶれはむしろ小さい方で、平安時代から定着していた表記であったと考えられる。

この豆酛には村落として、三つの性格があった。先ず第一にあげられるのは、長崎県立図書館蔵『郡村誌』に「土壤広闊本州第一ノ沃地ト称ス、」とあるように、地勢險阻な対馬の中では、最も耕地の開けたところであったことである。地租改正後に、水田22町余、畑134町余とあり、畑地優位の、日本列島に比較的広く見られる農村景観を呈しているが、水田もまた程々に存在する地であった。第二には信仰の対象となる広大な山林原野が広がり、そこにアジュールと用益の地とが複雑に存在することである。日本の伝統的な村落の信仰には、必ず山岳と自然に対するものが含まれているが、それが村落内で大きな比重を占めているという点で日本の村落の一典型と言える特質をもっている。第三には、東に神崎、西に豆酛崎を有する天然の良港であると同時にそれらの岬から伸びる岩礁により海上交通の難所ともなっていることである。対馬はユーラシア大陸と日本列島との架け橋であり、その中で豆酛は以上のように多面的な特質を有しており、東アジアとりわけ島嶼エリアでの村落との比較研究を行う地として拠点的な位置にあると言えよう。

以上の特質を踏まえて、豆酛の地で調査を行う理由は次の7点を上げることができる。

①赤米栽培の神事があり、圃場整備事業による改変を受けていない水田が20ヘクタール以上存在すること

地区内の寺田において赤米栽培が行われている。この地は圃場整備事業の改変を受けておらず伝統的な水田景観と灌漑方法を今に伝えている。圃場整備事業の進展が比較的遅かった対馬においても、豆酛に隣接する内山地区においては2002年度に圃場整備事業が行われ、水田景観は一変している。このような状況は早晩豆酛地区にも伝えられるものと考えられ、この赤米神事と水田の調査はとりわけ急がれる。

②村落共同体の予祝行事サンゾーロー祭りが行われていること

旧暦正月3日に豆酛集落内の雷神社で、クゾウの読み

上げる吉書を村落の有力者が唱和する神事が行われ、律令期の対馬における亀卜の伝統を残すといわれるト占が行われる。この時のクゾウと呼ばれる役者の行動などに村落空間の復原を可能とするものが含まれている。

③豆酛の集落の多くの家では、屋号の残存を確認でき、前近代集落の復原が可能

50年前に行われた九学会連合調査において、屋号の調査が行われ、本戸―寄留の区分けが行われているが、今回は精確な図面の作製により詳細な空間復原ができる。

④対馬固有の天道信仰が伝えられ、集落周辺の山林にアジュールも存在する

豆酛周辺には古来よりの天道信仰が儀礼とともに残っており、山林内にはその聖地があり、アジュールであったことが知られる。すでに大正年間に研究と現地調査が行われ、日本におけるアジュール研究の原点となった。赤米栽培の神事もその中核である赤米の初俵が「天道様」と呼ばれており、天道信仰に基づくものである。

⑤豆酛港の歴史的重要性を示すカンカン祭りがおこなわれていること

九学会連合調査の際、石田英一郎氏が詳しく調査をした神功皇后伝承と民俗的なたわけを含むこの行事は、現在ではきわめて形骸化した形で伝承されているに過ぎない。しかし、社叢の竹林から切り出した竹を材料として紅白の模型船を作り、行列を組んで浜に向かう行事は今も続けられており、往年の状況も何とか復原できる状況にある。

⑥多久頭魂神社など延喜式以来の伝統的神社が幾多の変遷を経つつも現存すること

対馬の式内社に由来する神社がこの地に存在し、中でも多久頭魂神社は寛弘五年からの由緒と豆酛御寺に奉納したことを記す梵鐘や高麗海印寺版の大蔵経などを現在に伝えるなどこの地の歴史を語る文化財が存在する。

⑦金剛院など対馬守護から対馬藩主へと変貌を遂げた宗氏ゆかりの寺院が存在すること

鎌倉時代から南北朝時代にかけて、対馬守護は大宰府・博多を支配していた少弐氏で、そのもとで宗氏が守護代的な役割を果たしていた。豆酛はこの頃から博多と対馬府中を結ぶ要地として存在し、金剛院は室町時代には守護となった宗氏の保護を受け、近世に至っている。

以上のように、この豆酛は、東アジア村落共同体のな

かで、水稻文化・自然と宗教・国際性を包含する点でスタンダードの位置を占めているといえよう。われわれは、ここで模索し、確立した方法をもって最終的には東アジアの村落共同体の特質と水稻文化を明らかにしたいと考えている。

### 3 調査の方法と方向性

東アジアの村落共同体調査のスタンダードを確立するにあたってまず二つの基礎的な課題がある。一つは文献資料の調査と保存であり、いま一つはベースマップの作製である。

#### A 文献資料の調査および保存

村落共同体の調査にあたって、先ず必要なのは文献資料のサーチである。豆殷に関係する史料は、長崎県立図書館、長崎県立対馬歴史民俗資料館それに豆殷の地の寺社および個人宅に所蔵されている。われわれが収集した史料については、徳永健太郎氏により「豆殷関連史料について」のなかで分析されている。公共機関所蔵の資料については、標準的な保存の配慮がなされているが、寺社等の所蔵については未だ十分な整理と保存が行われていない。今回、宗氏とゆかりの深い真言宗寺院金剛院において中世文書・近世文書・大般若経などの典籍について総ざらえ的な調査を実施し、保管に関して現在考えられる最善の方法を住職と相談し、実行した。金剛院においても史料は何カ所かに分散されて所蔵されており、それらを本堂にて整理し、先ずノート型パソコンにより目録を作成し、古文書・古典籍については中性紙の薄様で養生したのちに中性紙の保存箱に整理して納入した。これらの経過を住職に説明し、理解を得た。これらについては吉田正高氏の「金剛院所蔵資料の整理・保存」を参照していただきたい。

#### B ベースマップの作製

現在では村落共同体の調査には1000分の1乃至2000分の1程度の高縮尺の地図が必要となるが、既存のものを活用する場合には大きく分けて二つの方法がある。一つは圃場整備事業の実施計画図からの転用である。これは圃場整備事業が行われる際、その設計図の作製のため旧地形を1000分の1の縮尺で図化するものである。ただし、工事にかかる場所のみがその対象となるため通常水田から離れた宅地・山林、さらに用水池をも捨象される。1

センチメートルを単位とした田面標高の詳細な記載があるなどの利点があり、何らかの形で集落部分の補正を行い、図化することになる。二つ目の方法は市街地図である。この場合には2000分の1程度の縮尺が多く、都市部であれば印刷されていることもあるが、通常はマイラーベースで保存されている場合が多い。ところで、豆殷の場合には、二つのケースのどちらの図面も存在せず、第三の方法を考えざるを得なかった。ここで採用したのは、5000分の1の森林基本図に、国土地理院が1977年10月10日に撮影した空中写真を重ね合わせるという方法である。こうして2000分の1「豆殷調査ベースマップ」を作製した。さらに調査情報を加えて報告書図面が完成した。

以上のAとBが調査にあたっての基礎的な課題である。この上で、集落の復原・水田の復原・儀礼の復原という三種類の調査の方向性を考えた。

### 4 儀礼と景観の復原

豆殷の町並みを見ると、非常に集落が密集しており、南に漁港が、東には天道信仰の聖地龍良山から延びる山稜がなだらかに続き、周辺の陰阻な地から比べれば比較的穏やかな地勢と言える。ここでは屋号の聞き取り調査が一つのポイントとなった。それとともに豆殷集落を支えているのは広大な木庭地である。これらについては、本田佳奈氏による「内山村における山林利用と木庭作について」に詳しい。

水田の復原については、堀祥岳氏の「対馬豆殷の景観復原」を参照して欲しいが、ベースマップ作製とあわせて大きく四つの方法をとった。

- ①現地水田灌漑状況の一筆調査を行い、ベースマップに記録
- ②明治20年頃に作製された地籍図による土地利用図の作成
- ③寛文2年(1662)の豆殷村検地帳(以下、寛文検地帳とする)による水田地名と現地との照合
- ④中世文書の地名と現地との照合

これらにより、確度の高い復原ができたといえよう。他地域と比較し、当地域の研究を際立たせるものとして、赤米栽培の問題がある。巻頭カラー頁の空中写真は1977年10月10日に撮影したものである。稲刈りの直前であり、他の黄色く実っている田とは異なった色をしている赤米

の神田を明確に読みとることができる。現在でもほぼ同じ規模で栽培されている。赤米の栽培が続けられている所は、日本に数カ所存在するが、この地の赤米の禾（のぎ）が最も美しく、非常に鮮やかな紅色となる。1週間程度この鮮紅色が持続し、あとは褐色に変化していく。この赤米の栽培は近世において史料的な裏付けがあり、詳しくは黒田智氏「対馬豆酛の村落景観と祝祭空間」を参照していただきたい。黒田智氏によれば、中世までは天道祭は白米によって祭られていたことが分かる。それが近世の後半になってから赤米に変えられたようである。『楽郊紀聞』と現在の赤米栽培の状況からすれば、近世以降一般に赤米排除が行われる中で、特別に他と交わらない強くて禾の美しい品種がこの地に残り、それが天道様と観念されたことがわかる。現在の日本における栽培品種とは異なり、熱帯ジャポニカ（ジャワニカ）とされ、奇跡的に生き残った希少品種であるらしい。「古代米」と呼ぶことにもさほどの違和感は感じられない。

現代では、大きく形を変えてしまった赤米神事、サンゾロー祭り、そして二十一社詣りではあるが、ともかくもわれわれの眼前で行われており、21世紀に入ってもなお、ねばり強い「共同体の叡智」を見ることができる。

## 5 史料調査の成果

### ①豆酛関連史料

対馬の歴史資料の概観については既に述べたが、今回の研究プロジェクトにおいて、特に集中的な調査を行ったのは豆酛地区である。これまでの東京大学史料編纂所・国史館大学・長崎県立長崎図書館などによる史料調査は、主として宗家文庫・豆酛所在諸家文書群の中世史料を中心としたものであった。また、膨大な豆酛関連の近世史料が長崎県立対馬歴史民俗資料館に残されているものの、その全容はこれまで把握されることはなかった。本報告書では、徳永健太郎氏「豆酛関連史料について」において、これまで個別に調査収集されてきた史料群を目録化し、豆酛関連史料として統一的に把握できることになった。

報告書では寛文検地帳の全面的な翻刻も行った。水田・畠地・木庭・屋敷・寺社地に関わって村落景観の復原を行うのに必須の史料である。対馬藩独特の記載により、その面積を割り出すのは非常に困難な作業であるが、堀、

黒田の論文では、先行研究から導かれた見解により復原を行っている。今回翻刻を照合していただき、本報告書の見解をご検討いただければ幸いである。

また、現地調査と並行して進めていた長崎県立図書館写真帳の調査により主藤寿氏文書の目録を作成した。これらの文書の検討により、クゾウの中でも最も格式のある住持家の豆酛における歴史的 position を明らかにしえたことは特筆に値することであろう。現在の所蔵者である主藤寿氏のご厚意により豆酛の歴史の誇るべき一断面を解明できたことは、われわれにとっても喜ばしい限りである。

今回豆酛地区内の調査から新たに発見された文書群として、クゾウの系譜を引く本石一幸氏宅に伝えられた一連の史料をあげることができる。本報告書では紙面の関係で十分取り上げることができなかったが、今後の研究に生かされるものと思われる。

### ②金剛院所蔵資料

吉田正高氏の「金剛院所蔵資料の整理・保存」および黒田智氏の「対馬豆酛郡主の系譜」に明かなように、対馬の歴史を語る上で、この寺院は特別な重みを持つ。本報告書では、従来十分な紹介がなされていなかった「金剛院由緒書上」（文久3年写）・「金剛院本尊並什物覚」（元禄10年）・「金剛山記録」（文政7年）・「寺院明細」（明治28年）などを全面翻刻した。これらも今後の研究に資するものと思われる。

### ③内山文書

対馬の文書群の中で、『鎌倉遺文』『南北朝遺文』に最も多く収載され、在地の状況を知ることができる史料として大きな位置を占めてきた。しかし、室町期の多くの文書は未翻刻であり、従来その全貌を知ることは容易ではなかった。今回、鎌倉～室町期の文書を見直し、未翻刻文書について全面的に翻刻した。

これにより、宗氏の流れをくむ有力な一族であった内山氏の、豆酛・内山・久和・久根にまで広がる所領支配の一端を知ることができる。また、享禄元年におこった宗氏の内紛（池の館の乱）との関連が考えられる資料を含んでおり、中世後期の対馬政治史を考える上でも重要な文書群であろう。

このように、日本中世の島嶼研究を行うに際して必見の文書群であり、今後の活用が期待される。

### ④天道信仰関係史料

対馬に残る天道信仰については、『対州神社誌』所収本のほか、元禄3年2月の「天道法師縁起」が紹介されるのみであった。今回これらに、貞享2年『豆酰郡社記』所収の天道菩薩延記（宗家文庫）、天道大菩薩咄伝覚（本石一幸文書）、天道菩薩由来記（主藤寿文書）の3点を加えて、計5点の天道縁起を紹介することができた。

また、慶長10年（1605）「天道祭りの役者の事」の全文を翻刻紹介している。この史料は中世以来の天道信仰の姿を伝えるものであり、これまで研究史では言及されることのなかった事実上の新出史料として黒田智氏が取り上げている。

以上のうち、③・④は大学院授業で講読を行ったものが多く、演習における修士課程生の努力の成果である。

## 6 調査と研究会の足跡

ここでは、科研申請に当たったの予備調査からの足跡を示しておく。なお、バリ島調査にかかわるものは第3部に示した。

### ①2001年7月29日

7月28日、海老澤が九州大学での九州史学研究会中世史部会に出席。研究報告：本田佳奈「中世対馬の耕地と山の開発」（本人の事情により服部英雄氏の要旨代読）、服部英雄氏の「日根野村絵図と荒野の開発」。29日、厳原町内院水田調査、寺田・多久頭魂神社の調査。

### ②2002年7月23日

研究報告会：米谷均「対馬藩と朝鮮輸入米」。

### ③2002年8月8日～8月10日

海老澤・徳永健太郎・堀祥岳。厳原町役場生涯学習課・長崎県立対馬歴史民俗資料館・対馬支庁圃場整備係・多久頭魂神社などで調査協力要請。全島的なゼネラルサーベイ。

### ④2002年8月14日～18日

海老澤・黒田智。厳原町内院・厳原町内山・峰町吉田・厳原町久根浜・厳原町阿連にて盆踊り調査。豆酰カンカン祭り調査。

### ⑤2002年8月

徳永、長崎県立図書館文書調査。

### ⑥2002年9月6日～9月8日

海老澤、和田修。豊玉町和多都美神社祭礼調査。峰町三根上里調査。

### ⑦2002年10月20日～22日

海老澤・岡内三眞・米谷・清水亮。豆酰赤米水田調査。長崎県立対馬歴史民俗資料館にて西山寺文書・景徹玄蘇袈裟・大山小田文書調査。水崎仮宿遺跡調査。

### ⑧2002年11月2日

シンポジウム「対馬の歴史と民俗」開催。海老澤「九学会連合調査から半世紀を経て」、関周一「中世対馬の所領表記について」、本田「中世対馬の耕地と山の開発」、本石正久「豆酰の赤米神事について」

### ⑨2002年12月4日

研究報告会、岡内「対馬2002年秋の旅」、米谷「高麗・朝鮮軍の対馬攻撃の関連史料について」

### ⑩2003年2月3日～7日

海老澤・岡内・黒田・徳永・本田・宮崎肇・三好伸明。サンゾーロー祭り・第1次豆酰関係資料採訪。

### ⑪2003年2月9日～11日

西尾知己・本田・堀。頭受け神事調査。

### ⑫2003年3月2日～6日

黒田・徳永・本田・宮崎。第2次豆酰関係史料採訪。

### ⑬2003年5月10日～12日

海老澤・徳永・松澤・永田史子・堀・加藤裕美子・山本隆太郎・大澤泉・加藤麻彩子・山本真紗美・田村仁・藤木正史。大学院海老澤ゼミ合宿。長崎県立対馬歴史民俗資料館文書調査。

### ⑭2003年6月8日～12日

海老澤・服部・黒田・吉田正高・徳永・本田・堀・永田・山本隆太郎。豆酰灌漑調査・金剛院文書調査。

### ⑮2003年9月6日～14日

深谷・紙屋・新川・海老澤・黒田・吉田・徳永・高橋傑・堀・永田。豆酰地域地名調査・灌漑補充調査・金剛院文書典籍整理。

### ⑯2003年10月25日

シンポジウム「東アジア村落における水稻文化の儀礼と景観」開催。海老澤「「劇場国家」の普遍性と限界」、河合「バリ島村落の劇場的な性格」、黒田「対馬豆酰における空間構成と天道信仰」、和田「対馬における芸能と村落」、西村「劇場国家論とその後の文化人類学的研究」。

### ⑰2003年12月13日～14日

21世紀 COE プログラムアジア地域文化エンハンシング研究センター主催シンポジウム「アジア地域文化学の



構築」開催。海老澤「集落・儀礼・水田の復原研究－対馬とバリ島－」。

⑬2004年1月21日～24日

徳永・山本。二十一社詣・サンゾーロー祭調査。

## 7 大学院授業との関連

2003年度早稲田大学文学研究科の授業「日本史学演習(2)」(海老澤担当)は「対馬の総合的研究」を演習題目とし、主に対馬に関わる史料の講読を行い、さらに関連するテーマでの個人報告を行った。前節の⑬は、大学院授業としての現地調査である。以下主な関連研究報告を上げておく。

①2003年5月19日

堀：中世対馬関連文献目録

徳永：対馬の中世文書について

②2003年5月26日

加藤裕美子：対馬合宿の成果報告

山本隆太郎：海老澤ゼミ対馬紀行

黒田：対馬豆酩郡主の系譜

③2003年6月2日

関：中世対馬に関する諸研究

④2003年6月16日

黒田：『海道諸国記』のなかの対馬島

⑤2003年6月23日

田中奈保：大山小田文書

加藤麻彩子：内山文書をめぐる南北朝時代の対馬

⑥2003年6月30日

黒田：「卒土濱」の誕生

⑦2003年7月7日

大澤泉：豆酩における金剛院と金剛院文書

山本真紗美：対馬の天道菩薩縁起諸本の検討

⑧2003年9月29日

黒田：寛文検地帳を読む

⑨2003年10月6日

黒田：観音住持の世界

徳永：天道菩薩縁起における中世的宗教世界の残存

⑩2003年10月20日

堀：地形・環境にさぐる豆酩の歴史

永田：考古学からみた豆酩・対馬

⑪2003年11月27日

本田：内山に関する調査報告

⑫2003年11月17日

堀：対馬の古文書を読む

徳永：内山文書翻刻について

⑬2003年12月1日 大澤：内山文書翻刻1

⑭2003年12月8日 山本真紗美：内山文書翻刻2

⑮2003年12月15日 加藤麻彩子：内山文書翻刻3

⑯2004年1月7日 田村仁：内山文書翻刻4

以上このほかにも調査準備報告会や報告書原稿読み合わせ会なども行っているが詳細は省略。

## 附 豆酩の一年(石田英一郎「豆酩の年中行事」による)

「1 豆酩に関する九学会連合調査の概要」で述べたように、石田英一郎氏が執筆された『対馬の自然と文化』の415頁～419頁に至る「村の年中行事」の記録は、簡潔にしてこの地の特質を見事に突いており、ここに再掲させていただき、必要なところには注を施した。また、最も詳しい記述のあるカンカンマツリについては、別に立項し、現在の状況を付した。本報告書を読む際には、『対馬の歴史と民俗』を一読されることが望ましいが、刊行されてから既に40数年を経ており、現在では入手困難な状況にある。この「村の年中行事」については、通読するとともに必要に応じて該当項を参照して欲しい。なお、本石正久氏に伺って旧暦のものについては日付の後に(旧暦)とした。

1月1日

この日村民一般に業を休む。門松をたて、膳を持って行って、枝に雑煮とお椀を箸で供える形をし、お神酒を少し枝にこぼす。朝食はご飯と雑煮である。元日の朝は炊事場に水をこぼさない。こぼすと自分の家庭に祝いや葬いのあったとき雨が降るといふ。

オゼンスワリ

若夫婦は焼酎1瓶と雑煮と餅とを重箱に入れて嫁(もしくは婿)の実家を訪問し、揃って昼食をとり、元旦を祝う。その重箱に実家側の御馳走を入れて持ち帰る。昔はお膳に前記の馳走をのせ、風呂敷をかけて持参したもので、これをお膳すわりという。

1月2日も休みである。一般に7日までは物音をたてぬといわれる。

## フネイワイ

漁民はこの日、水夫と船頭計4人で船を引き出し、藻を引き船にかけて、お神酒と肴とを舟に供え、舟にのってフナダナサマを拝し、酒を飲んで祝う。

### 1月6日

ダラの木を2本ずつ門松に立てかけ、飯を供える。これをダラスエメシという。

### 1月7日

ナナクサメシという雑ぜ飯をたき、元旦と同様の作法でこれを門松に供える。ゼンスワリも元旦と同様に行われる。

### 1月10日 エヒスマツリ

船頭が朝起きて直ぐ、海岸の松崎神社と並ぶ金比羅様とタカミムスビ神社境内のエベス堂とに参詣、神前にお神酒1〜2升を供えて飲む。午後1時頃まわりもちで順番を決めた船頭の家に供僧が赴いて、酒宴の後、ブリとお神酒の供物をもらう。(10月10日も同様)

### 1月11日 イセコウ

各家の神棚のお伊勢様に供物をし、各伊勢講中ごとに、まわりもちのヤドに各人の米を持って集まり、ヤドの主婦がこれを炊いて夕食の馳走とする。

### 1月14日 オヒマチ

晩方から各伊勢講ごとに赤飯、雑煮などをもって、11日とは違ったマワリヤドに集まる。ヤドでは餅をつき、三重ね9つ、および12の小さい餅を作って床の間に供え、供僧が御幣を切って祈祷、その夜は供僧とともに夜を明かす。夜通し火を消してはならない。主婦も徹夜する。未明、供僧がふたたび祈祷し、早朝日の出を拝む。次いで供僧が御幣を若いものに持たせ、多久頭魂神社拝殿の東側にあるカナクラバに御幣を立てて跪いて祈祷する。昔は伊勢講全部が参拝したものであるが、今はヤドで日の出を拜ってから解散するようになった。

### 1月15日 ナレナレ

14日の夕方先に(6日)門松に供えたダラの木を皮をむき、6寸位に切って紙もしくはカツラで巻き、松明でくすべて後、巻いたものを取り除く。そのあとの木をコツパラといって、これを床の間に飾った正月の神様トシトキに供える。このコツパラのウラ(上端)を4つに割り、他の端をにぎって、翌15日の朝、果物のなる木を「ナレナレヤ、ナラネバナナッショウドンのナタでキロウ

トモウ、ナロウトモ」と唱えながら叩く。これをナレナレという。

この日をタチショウガツという。正月サマのお立ちの意である。全村休業、元旦と同じ作法で門松にお膳を供えてから、門松を倒し、午後、5〜6軒ずつ持った門松を焼く。元日および7日と同様のオゼンスワリも行われる。

### 1月16日 ヤマノカミマツリ

鑛木商その他山の仕事をする人が自宅に部下の入夫を招いて行うもので、山の神にお神酒を供え、合掌礼拝してから宴会に移る。5月、9月も同じく16日に同じ行事が催され、製炭業者や営林署などもこれを行うが、山の神を祭っている場所は一定しない。龍良山北の天道の祠では1月、5月、9月の18日に神官・供僧が出て山の神を祭り、営林署の行うときは神官、製炭組合の行うときは供僧が参加する。

### 1月19日 ヤキノモチ(旧暦)

供僧の檀家にあたるシメコの家ごとにソバを挽臼で引いて、扁平な団子を1人6枚の割で作って、夕方これを供僧の家に持参すると、供僧は一々家族の人数と氏名とを問うてこれを控え、ヤキノモチ6枚のうち3枚を袋に入れ、合わせて籠に背負って多久頭魂神社に持参、これを供えて後、供僧全部が揃ってオコネ経を読む。終わって再び餅を持ち帰ってもとの重箱に入れ、翌朝シメコはこれをいただいて帰る。残り半分の餅は供僧家で処分する。

### 1月23日 オツキマチ(旧暦)

シメコが餅と重箱2つのお洗米と4合瓶1杯のお神酒とをもって供僧の家に集まり、座敷に供える。供僧が御幣を切って祈祷、終わってお神酒を下げ、供僧の家からお煮めを出し、一同お神酒を飲んで月の出を待つ。翌午前1〜2時頃月の出とともに月を拝み、供僧のお勤めがある。

## 2月 彼岸の中日

コウの花を墓前の竹筒にさし、夕刻家中で墓参。

### 3月3日 節句

戸毎に御馳走を出し、潮干汐、山遊びなどに行くが、ヒナマツリはない。昔はオゼンスワリを行ったが、今は行わぬ。

### 3月21日 オダイシサマ

全村林業、金剛院で奉納踊や奉納相撲を催す。昔は競馬も行われて、競馬用だけに馬を飼った家もあった(全

村で5〜6頭)。明治の初めごろにはこの日厳原から菓子屋が出張して村人がこれを買ったものである。

#### 4月8日

釈尊の誕生祭を永泉寺で挙行する。奉納踊、奉納相撲、芝居の稽古などをやる。全村業を休む。

#### 5月5日 節句、ハツノボリの祝

男の子のある家では鯉ノボりを立て親戚など集まって馳走する。昔は節句ごとにオゼンスワリを行った。

#### 6月1日 ヤクイワイ (旧暦)

厄年の人(女は32〜33歳・男は25歳、41〜42歳、61歳)が自宅に親戚友人などを招いて馳走する。最近神社に行き神官にお祓いをして貰う。

#### 6月 ドヨウギトウ (旧暦)

土用中に行く。昔は区長が名子に各戸にアラムギ1升ずつ、村中で5俵ほど集めてこさせ、売却して祭りの費用に当てた。多久頭魂神社から大般若経を観音像持の家に持参、ボウズナリをした供僧が祈祷して後、守札を作って各戸に2枚ずつおく。供僧と区役にでたものとは小豆飯を炊き、精進で昼食、夜は区長が魚を買ってなおらいをする。このドヨウギトウは夏冬2回の土用に行われ、冬は各戸ソバコ1升ずつを集めた。戦争中から廃れて、最近10年ほど行われていない。

#### 7月7日 七節句

朝馳走、昔はオゼンスワリも行った。タナバタ祭りはない。

#### 7月13日 オボン (旧暦)

家々の座敷に仏壇をもうけて位牌を持ち出し、オチツキダンゴ(ここまで落ち着いたの意を表す)を供え、その晩からお膳を供える。

#### 7月14日 (旧暦)

全村休業、礼服を着て親戚その他に焼香に廻ると酒肴を出してもてなす。オボンには大人も子供も新しい着物や下駄などを着用するので、1年のうちでも莫大な費用を使う。この日のためわざわざ博多まで買い物に行く人もある。

#### 7月15日 (旧暦)

全村休業、僧が戸ごとにまわって読経する。夕方一家揃って墓参、盆の式を終わる。

#### 7月17日 ムシマツリ (旧暦)

役人が永泉寺に集まって、虫の供養と五穀豊穡祈願の

読経が行われる。以前は区役で各戸からアラムギ1升ずつもしくはそれに相当する額の金を集めて経費に当てた。

#### 7月18日 カンカンマツリ (ウケフネマツリ、フナウケの式) (旧暦)

##### 〈別項参照〉

#### 7月21日 ボンオドリ (旧暦)

以前は21、22、23の3日間、中、上、浜の順序に分かれて行ったが、現在は21日に三者各個に催すようになった。奉納の踊と芝居とは、コドモ(9〜15歳)中老(16〜23歳)、大夫(24歳以上)の年齢による三段のの階級によって構成される。踊りの監督を検校という。上町の例をあげよう。

朝、日の出とともに中老の1人が太鼓を叩いて中町との境の石橋までゆく。盆踊りの始まるしるしである。町内の戸主は全部観音住持の家に集まり、エツリ(竹に色のついた短冊をつけ、町内安全、武運長久などの文字を記したもの)をつくって門に立て点呼をとる。エツリの出来ぬまでに来ぬ遅刻者や欠席者は、罰として焼酎などを出さねばならぬ。そこで踊り子、警護など踊りの役割を定め、来年の役割をも決めて台帳に記入、焼酎を飲んで解散する。午後2時頃、同じ場所に、先に選ばれた踊り子と警護2人が集まり、住持の家から出た盃をほし、住持の庭先で一回踊りと歌とをすます。次いで警護がエツリを持って一同永泉寺に向かい、寺の庭の六地藏の前にエツリを立てて同じ踊りを行う。終れば、旧家で町頭の中町の竹岡家、浜町の児島家および金剛院に赴いて同じ踊りを奉納する。以前は舞台を作って大夫が初段・中狂言・切り狂言の三段の芝居を、中老とコドモとが手踊りをやり、酒7樽も見物の衆に出たものであった。また、豊年の年には、厳原から師匠を雇って9月にミセオドリを行ったという。

なお中町は竹岡家、浜町は小島家に先ず集まるが踊りの次第は上町と同様であり、その年の定めた順序に従い、時間をたがえて永泉寺で踊るのである。この日のエツリは上町は天神神社の前に、中と浜とは永泉寺六地藏の塔の前に納める。

\*注 現在でも豆敷周辺の内院・内山では盆踊りが行われているが、豆敷においては消滅した。厳原町教育委員会編『厳原町の盆踊り』において、和田修氏が豆敷の盆踊りについても言及されている。

## 8月

彼岸の中日は春と同様。

## 9月9日 節句

農繁期に入るためか、特別のことなく、朝馳走、栗飯を炊く。前はオゼンスワリが行われた。

## 9月15日、18日 フナクロ

15日には浜町、18日には中町が18～25歳までの若者を選び、それぞれ七丁櫓の舟2艘の競走を行い、村人はサゲジュウ（煮シメ・餅などを入れた重箱）をたずさえて見物に出かける。先ず浅藻の卒土の浜が見える位の沖まで舟をこぎ出して、並んでスタートを切り、まっすぐに海岸めがけて乗り上げるのであるが、勝った舟には国旗をとってミサキに立て、終わって浜町はカミズマイ神社に、中町はタカミムスビ神社に代表が参拝する。

## 9月16日 ヤマノカミマツリ

1月16日・5月16日と同様。

## 10月10日 エヒスマツリ

1月10日と同様。

## 10月15日 オジュウヤ

戸ごとに餅をつき、1升杓に入れてその上に果物をのせ仏壇に供える。また5合杓をも同様にホタケサマに供える。

## 10月28日 オイリアセ

出雲に30日間行かれた神様の帰りを迎える祭である。家ごとに餅とお煮染めをつくり、お神酒を用意し、上、中、浜ともに夕刻提灯と蠟燭とをもって、上町は（従って供僧は）多久頭魂神社に、中町はタカミムスビ神社に、浜町は金剛院に、それぞれ参拝、供え物をして後提灯に灯をともし、神を迎えるのである。

## 11月15日 カネツケとオヒトキ、ゴンゲンマツリ

供僧はこの日権現様（カミズマイ神社）に集まって供物を供えて読経、旧式の祭を行う。

## 12月13日 ハジマリショウガツ

家ごとに四角大根、豆腐、里芋などを切り、煮付けにした雑煮を村中で食べる。

## 12月31日 オオミソカ

各戸に歳暮の杯をさす程度で特別のことは行わない。

\* \* \*

## 《別項》

※カンカン祭りについては、『対馬の自然と文化』の記

述と現在の状況とを対照できるようにした。

## 7月18日 カンカンマツリ（ウケフネマツリ、フナウケの式）

- ①午後3時頃から9人の供僧と7人の人夫とが観音堂の中で2尺位の舟2艘を作って紅白の布で巻き、赤旗・白旗1本ずつと銅鑼2個とを用意、白舟を供僧の1人がたずさえ赤舟を人夫の1人がたずさえ残りの人夫6人は2個の銅鑼を2人ずつで2本の旗を1ずつで持つ。
- ②こうして先頭から白舟（供僧1）—銅鑼（人夫2人）—白旗（人夫1人）—赤旗（人夫1人）—銅鑼（人夫2人）—赤旗（人夫1人）の順序の列で、多久頭魂神社の石の鳥居まで出てまたあと戻りし、これを繰り返すこと3回の後、鳥居を出るが、通常の道路を通らず、そばの涸れた花川の中を通して神田川に出、川中を伝って製材所の前に上り、タカミムスビ神社の前の浜に出る。
- ③行列が浜に着くと人夫が担いできた銅鑼を打てば、遠く多久頭魂神社では、これに呼应して供僧の1人が釣鐘堂の鐘を打ち、神社の西の3本松\*に待機した今1人の供僧は法螺貝を吹き、これら銅鑼・鐘・法螺貝の音は村中に響き渡るのである。
- ④観音堂では、残りの供僧がお神酒とオブキ（櫃に入れた米飯）を供え、オコネ経を誦んでいるが、鐘と法螺の音が響いてくると、一段と声を張り上げて祈禱を続け、終わってそのお下りをいただく。
- ⑤他方村人はカンカンサマを拜むと称して多勢海岸に出てくるが、浜に到着した先の行列では、供僧1人と人夫1人がその担ってきた2艘の白舟・赤舟を岬から浮かべて出す真似をすると、残りの6人はカラケの式として海岸に仰臥、足で唐を蹴る所作を行う。（中略）
- ⑥舟を浮かべた2人は松崎神社に来て供僧の方が読経し、他の1人は傍らに休息、終われば舟を解いて木は神社に納め、帆と舟を巻いた紅白の布だけを持ってタカミムスビ神社まで来て解散する。

※「3本松」ではなく、「貝吹き松」が正しい

## 《現在の記録・2002年8月18日》

- ①午後1時30分頃から3人のクゾウと約20人の祭り関係者が長さ50センチ程度の舟2艘を製作する。観音堂付近の神聖な竹林で、竹を切り、それを船底以外の主な材料として舷側を作り、紅白の布を巻いてそれぞれの舟を完成させる。観音像前に供えて読経する。

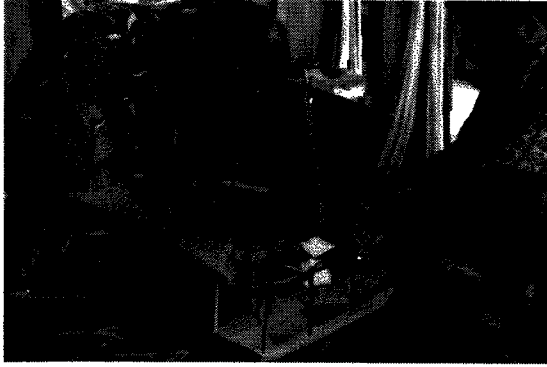


写真 2-1 舟二艘作る

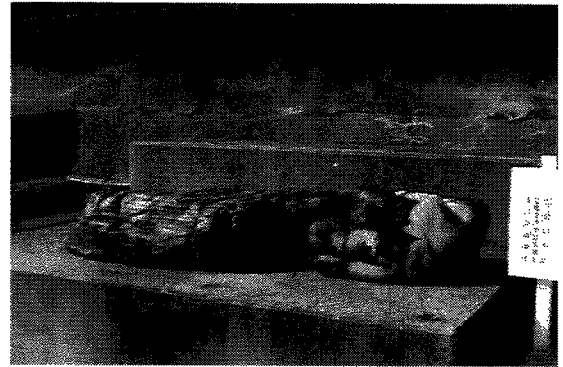


写真 2-4 神宮皇后由縁の石



写真 2-2 供僧による読経

②白船（クゾウ 1 人）—白旗（氏子 1 人）—赤舟（氏子 1 人）—赤旗（氏子 1 人）—鉦（氏子 1 人）—法螺貝（氏子 1 名）—太鼓（氏子 2 人）—笛（氏子 1 人）—陪従（氏子 1 人）の順序の列で、多久頭魂神社の鳥居まででて戻り、これを 3 回繰り返す。この後鳥居を出て、永泉寺前の四つ辻に出て、南に向かう。



写真 2-3 多久頭魂神社内での行進

③豆酩港に着き、神宮皇后由縁の石の脇を通過して小松崎神社前の磯に向かう。この時には舟と旗を持つ、合計 4 名の行列になる。あとの 6 名は、帰りの行列の要員となる子供を探しに行く。

④この間、観音堂ではクゾウによる読経が続けられる。  
⑤岬に向かった 4 人は、磯の波間に紅白の舟を浮かべる。そののち、これらの舟を小松崎神社に奉納し、紅白の旗は、その鳥居に付ける。クゾウが、祈禱を行った後、あと 3 名が一人一人拝礼する。



写真 2-5 磯の波間に紅白の舟を浮かべる

⑥帰路では、子供が、法螺貝を先頭に、笛、太鼓の行列を作り、往路と同様の道を通して多久頭魂神社に戻る。



写真 2-6 子供の行進

⑦多久頭魂神社の鳥居前にて、3 名のクゾウと神社総代および祭り参加者が集まり、直会を行う。

## Ⅱ 調査報告

### 対馬豆殷の景観復原

—水利および地名を中心として—

堀 祥 岳

#### 1 豆殷の耕地景観と地名

##### (1) 調査の経過

ここでは水利灌漑調査および地名聞き取り調査に限って、その経緯を記しておきたい。

まず、平成15年6月初頭に1/2000ベースマップ（初版）が完成し、それをもとに第1次水利灌漑調査を6月上旬におこなった。ここでは水田の水掛かりや水利慣行の聞き取り、および地名聞き取りが中心になった。

この調査成果をもとにベースマップを改訂し、さらに地図の作成範囲も若干拡張して、9月に第2次水利灌漑調査をおこなった。ここでは水掛かりについて6月調査の補充をおこなうとともに、寛文検地帳に登場する小地名を中心に地名聞き取り調査をおこなった。

6月および9月の調査日数は、のべ1週間ほどである。この短期間の調査で、報告書の付図や巻頭写真にある復原図「近代豆殷の土地利用」などの図面作成に力を注いだ次第である。

##### (2) 明治地籍図による耕地景観の復原方法

豆殷の景観復原を試みるにあたって、まず明治期に作成された地籍図（公図）によって近代の土地利用の復原に取り組んだ。

地籍図は、土地一筆毎の地割が示され、各筆に地番・地目・地味・面積・所有者などが表記された大縮尺の地図である。一般的な地籍図の作成経緯や歴史的意義については、佐藤甚次郎氏や桑原公德氏らの先行研究に詳しいので、ここではあえて触れない〔佐藤甚次郎『明治期作成の地籍図』（古今書院、1986）、同『公図 読図の基礎』（古今書院、1996）、桑原公德『地籍図』（学生社、1976）、同『歴史景観の復原 一地籍図利用の歴史地理—

（古今書院、1992）ほか〕。

今回の調査にあたって、明治地籍図は長崎地方法務局厳原支局において閲覧・複写させて頂いた。豆殷の場合、昭和26年の国土調査法に基づく地籍調査が未着手であり、この明治地籍図が現行の公図としてなお効力を有している。表紙には「豆殷村 字地図 厳原税務署／長崎地方法務局豆殷出張所」とあり、以前は、現在の架蔵箇所とは異なる場所に保管されていたことがわかる。この地籍図は、地租改正における地引絵図と思われる（壬申地券交付調査での地引絵図の可能性もある）。およそ明治8年から10年にかけて作成され、以後「土地台帳附属地図」として保管されたものである。一筆毎の記載内容は基本的に地番・地目・地味の三点である。

「豆殷村字地図索引」とある中表紙には65の字の字名と丁数が記され、末尾に「年別符号」として「廿一年」から「卅五年」までの符号が注記されている。これはおそらく明治21年～明治35年にかけて修正があった場合の符号の凡例なのだろう。実際に符号が記されるのは一頁目の南龍良山の図のみである。ただし、筆界や地目の修正に関しては付箋や貼紙によって随所に施されているため、今回の閲覧のみでは作成当時の記載内容を完全に把握することは困難であった。

法務局での閲覧と同時に、厳原町役場豆殷出張所においても公図の閲覧を許された。こちらは、上記の明治地籍図をトレースしたものに地番・地目・面積・所有者の情報が記載されている。平成7年に便宜上作成されたものであり、所有者は現在の所有関係を反映しているとみられる。また、法務局の明治地籍図にあった地味の記載がない反面、一筆毎に面積の記載があるため、明治地籍図の一筆毎の面積を把握することも可能になった。

さて、地籍図は字限図として字が一枚に描かれるが、



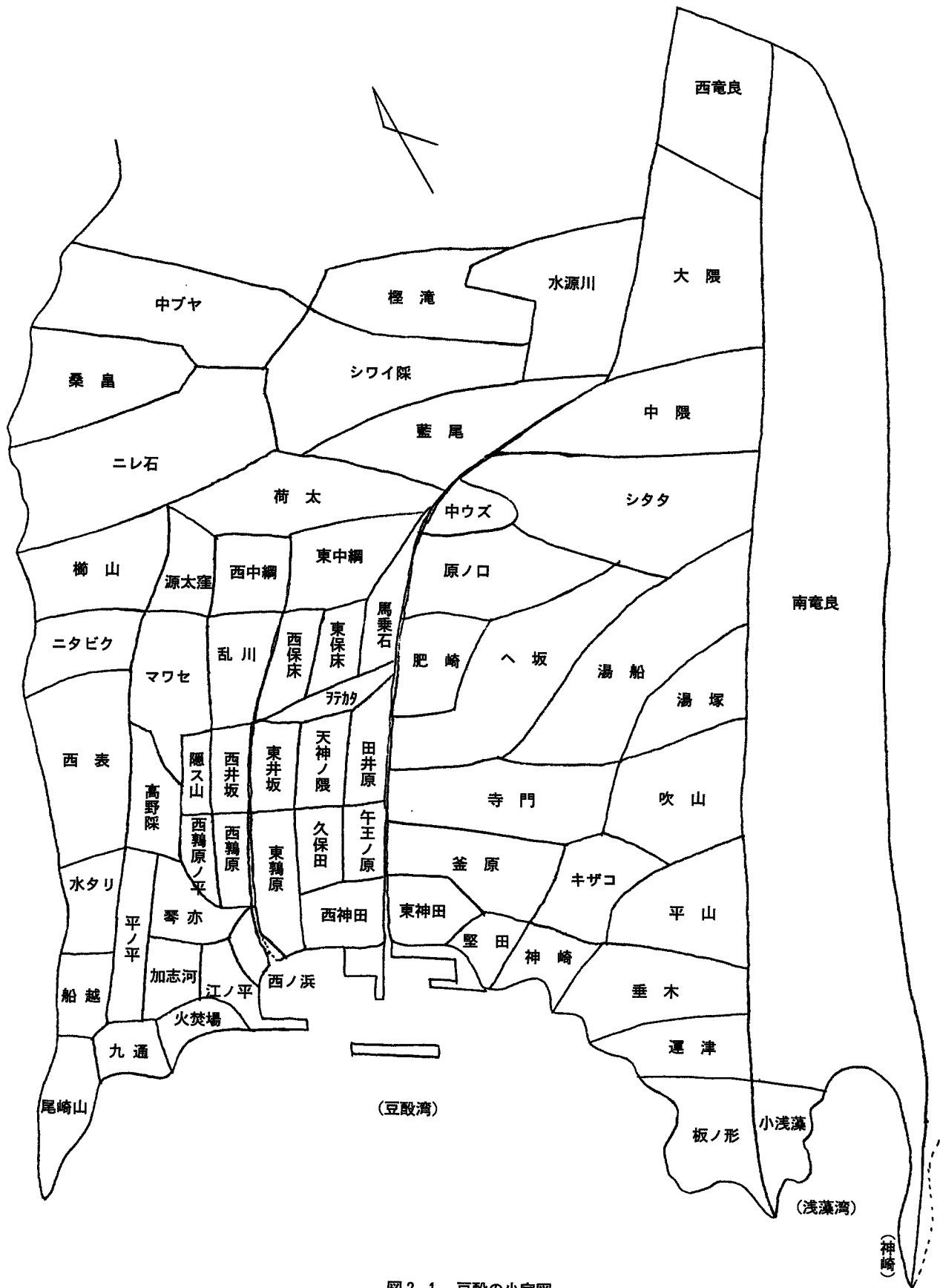


図 2-1 豆酸の小字図

(厳原町役場豆酸出張所にて作成されたものをトレースした。地図としては不正確な部分もあるが、便宜上掲載した。)

その地図としての精度はやはり確かなものではない。今回の場合も、地形図との照合は困難を極めた。しかし、明治地籍図にみえる土地利用のあり方を、我々が独自に作成した1/2000豆酥地区ベースマップに書き込むことで、明治20年前後の豆酥の景観を復原することができる。今回の作業のひとつの到達点はここに定められた。

作業の手がかりとなったのは、明治地籍図に描かれた道や川・水路などである。幸いにも豆酥においては圃場整備事業が行われておらず、水田の形状が古態をとどめている。一筆一筆の形状や地形図から読み取れる地形なども参照しながら、まず字界を地図に落としていった。類推にならざるをえない境界線もあったが、本報告書の付図の範囲においてはおよその字界は確定しえた。その上で、字毎に一筆毎の位置の推定を試み、画像処理ソフトを用いて明治期の土地利用を色分けで示したのが報告書巻頭の「図 近代豆酥の土地利用」である。

豆酥全域にわたってこの作業をすることは叶わなかったが、集落をとりまく中心部の様相が現在とかなり異なっていることがわかった。その内容については次項で述べたい。

豆酥全域にわたる耕地景観については、明治地籍図にみえる田・畑・山の割合（表2-2参照）を字毎に円グラフにして地図上に配置したものを作成した（図2-1）。明治地籍図に改変が施されたり判読が困難であったりして数値は完全なものとはいえないが、田・畑・山の分布の概況は把握できよう。また、次頁に1977年撮影の空中写真を掲げたが、両者の景観の変化についても次項で若干言及したい。

### (3) 近代豆酥の耕地景観の特徴

現在の豆酥の景観は、豆酥湾に臨む集落区域の周囲を山林が取り囲み、神田川流域および権現川流域に水田が広がる、といったものである。大きく区分するなら、①集落区域、②山林・海岸を含む周辺区域、③水田区域、となる。この景観は次頁にみえる空中写真（写真2-7 1977年撮影）からも見て取ることができる。

ところが、明治20年前後の豆酥の景観復原を試みた結果、特に①と②の区域において現在とは大きく異なる景観を呈していたことが明らかになった。③については「2 豆酥の水利」で詳述することにして、①と②の様

相について簡単に触れておきたい。

#### ①集落区域（西井坂／東井坂／西鶴原ノ平／西鶴原／東鶴原／久保田／西神田／琴亦／西ノ濱）

現在（平成15年5月の統計による）、豆酥の世帯数は上町に81戸、中町に228戸、浜町に117戸の計426戸（1084人）である。中町の戸数が圧倒的に多いことからわかるように、字でいえば東鶴原・西鶴原といった乱川流域の低地帯に宅地が密集している。

ところが、明治20年前後の東鶴原・西鶴原の土地利用を見ると、巻頭の「図 近代豆酥の土地利用」に明らかに一面に畑地が広がっているのがわかる。一方で宅地は、西ノ濱や西神田で密集して立地しているのを除いて、ほぼ微高地に列をなすように立地している。鶴原は土地も良く、宅地に近い畑地として機能していたのである。聞き取りによれば、鶴原を取り巻く豆酥の集落内にはケヤキが林立して、およそ現在の宅地密集からは想像もつない現地景観を擁していたのであった。

#### ②周辺区域

ここでも豆酥の人口統計を見てみたい。

表2-1 豆酥の戸数・人口の推移（判明分）

年	戸数(世帯数)	人口	典拠
明治7年	199戸	1023人	『郡村誌』
明治27年	258戸	1034人	九学会調査
大正15年	324戸		九学会調査
昭和25年	404戸		九学会調査
昭和38年	443世帯	2038人	長崎県民俗調査
昭和53年	493世帯	1713人	長崎県文化財調査
平成15年	426戸	1084人	厳原町統計

限られた統計だが、明治～平成の豆酥の人口は昭和30年代をピークに増加→減少を辿っているのがわかる。もともと平地の少ない対馬であるが、豆酥の人口密度は対馬でも一、二を争うと思われ、すでに明治以前から、集落周辺の耕地だけでは食料供給が間に合わない状況があったとみられる。それを如実に示すのが、集落の周辺区域である現在の山林地帯への耕地の広がりである。

まず、豆酥東部のへ坂・湯船・吹山・堅田・垂木などには、広範囲にわたって水田が広がっていた。湯船・吹山は権現川の支流によって灌漑され、堅田は湿田であった。湯船山を訪れると、山中に今でも石垣で組まれた棚田の形跡があり驚かされる。

周辺区域に広範に広がっていたのは畑地である。東部では海岸に近い堅田・神崎・キザコ・平山・垂木・運津・板ノ形などに、集落北部ではオテカタ・東保床・西保床・



写真2-7 豆豉地区空中写真（1977年国土地理院撮影のものを合成）

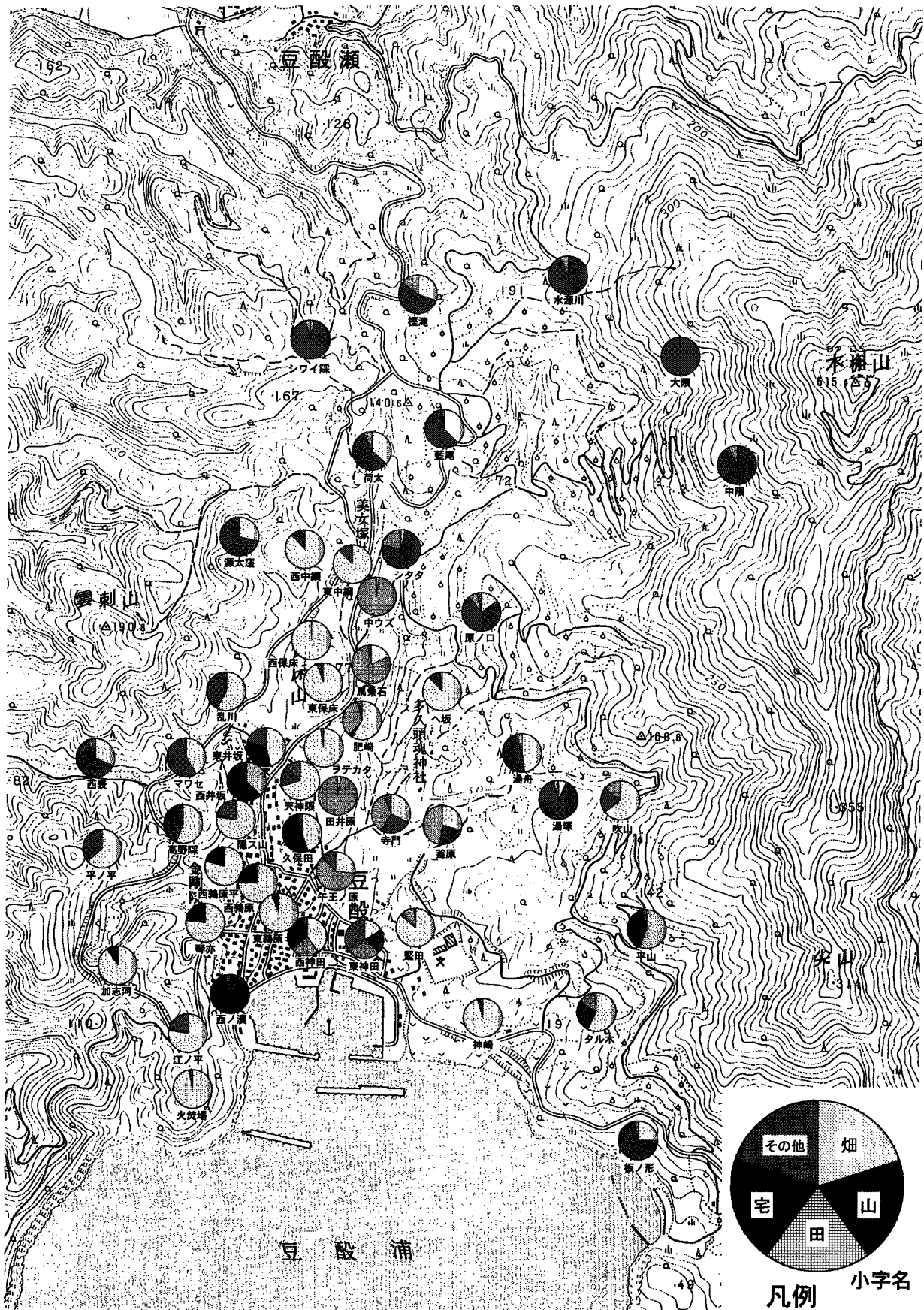


図 2-2 明治期豆敷の土地利用（基図には 2 万 5 千分の 1 地形図「豆敷」を用いた。）

表2-2 明治期豆穀の土地利用

No.	小字	総面積	畑		山		田		宅		その他	
			面積	%	面積	%	面積	%	面積	%	面積	%
1	南龍良山											
2	小浅藻											
3	板ノ形	489712	119922	24.5	353254	72.1	16536	3.4	0	0.0	0	0.0
4	運津											
5	タル木	233254	134427	57.6	63169	27.1	31237	13.4	0	0.0	4422	1.9
6	平山	261041	146235	56.0	105390	40.4	9415	3.6	0	0.0	0	0.0
7	神崎	183592	175662	95.7	448	0.2	2717	1.5	0	0.0	4765	2.6
8	堅田	225513	193688	85.9	6149	2.7	23347	10.4	0	0.0	2329	1.0
9	東神田	67789	11386	16.8	13496	19.9	18161	26.8	0	0.0	24745	36.5
10	釜原	55781	16254	29.1	12823	23.0	26635	47.7	0	0.0	69	0.1
11	キザコ											
12	吹山	272203	175168	64.4	57610	21.2	38593	14.2	0	0.0	832	0.3
13	湯塚	210869	13684	6.5	187413	88.9	8622	4.1	0	0.0	1151	0.5
14	湯船	175721	84310	48.0	81723	46.5	9688	5.5	0	0.0	0	0.0
15	へ坂	141295	124427	88.1	14308	10.1	2561	1.8	0	0.0	0	0.0
16	原ノ口	97419	14248	14.6	72979	74.9	6092	6.3	0	0.0	4100	4.2
17	中ウズ	26114	495	1.9	0	0.0	25619	98.1	0	0.0	0	0.0
18	シタタ	139948	4044	2.9	106369	76.0	27521	19.7	0	0.0	2014	1.4
19	中隈	139837	627	0.4	129116	92.3	10049	7.2	0	0.0	46	0.0
20	大隈	234722	0	0.0	233290	99.4	441	0.2	0	0.0	991	0.4
21	西龍良山											
22	水源川	147479	0	0.0	137430	93.2	10049	6.8	0	0.0	0	0.0
23	檜滝	92085	27518	29.9	51129	55.5	13438	14.6	0	0.0	0	0.0
24	シワイ際	142251	3628	2.6	132116	92.9	6507	4.6	0	0.0	0	0.0
25	中グヤ											
26	桑畑											
27	ニレ石											
28	荷太	65061	23937	36.8	36669	56.4	4455	6.8	0	0.0	0	0.0
29	藍尾	313067	117604	37.6	189617	60.6	5185	1.7	0	0.0	660	0.2
30	東中綱	38229	33597	87.9	4239	11.1	327	0.9	0	0.0	66	0.2
31	西中綱	82925	72935	88.0	9459	11.4	71	0.1	0	0.0	461	0.6
32	源太窪	119093	34287	28.8	82099	68.9	0	0.0	0	0.0	2707	2.3
33	櫛山											
34	ニタビク											
35	西表	265677	83554	31.4	163251	61.4	8259	3.1	0	0.0	10613	4.0
36	マワセ	82337	34408	41.8	44453	54.0	2053	2.5	0	0.0	1422	1.7
37	乱川	165571	95550	57.7	67638	40.9	0	0.0	23	0.0	2360	1.4
38	西保床	114193	113463	99.4	0	0.0	0	0.0	0	0.0	729	0.6
39	東保床	44872	42435	94.6	2363	5.3	0	0.0	0	0.0	75	0.2
40	馬乗石	43141	7795	18.1	66	0.2	33936	78.7	0	0.0	1344	3.1
41	肥崎	99890	58491	58.6	3601	3.6	33445	33.5	0	0.0	4353	4.4
42	ヲテカタ	26781	26015	97.1	0	0.0	0	0.0	0	0.0	766	2.9
43	田井原	77255	1841	2.4	0	0.0	74657	96.6	0	0.0	756	1.0
44	寺門	98593	31138	31.6	27012	27.4	34978	35.5	0	0.0	5465	5.5
45	午王ノ原	17697	4639	26.2	0	0.0	10816	61.1	57	0.3	2185	12.3
46	西神田	25229	10162	40.3	145	0.6	5813	23.0	7894	31.3	1215	4.8
47	久保田	24367	10900	44.7	17	0.1	0	0.0	12581	51.6	870	3.6
48	天神隈	37019	26050	70.4	5154	13.9	0	0.0	0	0.0	5815	15.7
49	東井坂	46411	21544	46.4	772	1.7	0	0.0	14826	31.9	9269	20.0
50	西井坂	22861	8575	37.5	3076	13.5	0	0.0	9581	41.9	1629	7.1
51	隠ス山	41727	32058	76.8	0	0.0	0	0.0	707	1.7	8961	21.5
52	高野際	52552	29311	55.8	23156	44.1	0	0.0	0	0.0	85	0.2
53	西鶴原平	33662	26783	79.6	221	0.7	0	0.0	6295	18.7	363	1.1
54	西鶴原	33117	24886	75.1	1393	4.2	0	0.0	6308	19.0	530	1.6
55	東鶴原	26769	25138	93.9	0	0.0	0	0.0	1631	6.1	0	0.0
56	西ノ濱	8770	0	0.0	95	1.1	0	0.0	862	9.8	43	0.5
57	江ノ平	30743	23770	77.3	0	0.0	0	0.0	293	1.0	6679	21.7
58	火焚場	75438	73132	96.9	1823	2.4	0	0.0	0	0.0	483	0.6
59	加志河	58134	52630	90.5	4984	8.6	0	0.0	152	0.3	368	0.6
60	琴亦	92566	70991	76.7	10962	11.8	0	0.0	10379	11.2	234	0.3
61	平ノ平	79408	50290	63.3	29118	36.7	0	0.0	0	0.0	0	0.0
62	水タリ											
63	船越											
64	九通											
65	尾崎山											

(本表は明治地籍図をもとに作成した。面積の単位は㎡、%は小字における割合を示す。空欄の小字はデータ未入手により集計不能。)

荷太・東中綱・西中綱・乱川・隠ス山、集落南西部では高野際・平ノ平・琴亦・加志河・江ノ平・火焚場などに畑地が圧倒的に存在していた。畑ではサツマイモ・ソバ・ムギなどが栽培されていたという。

上記の字を取り巻く山林地帯は、木庭地として焼畑が営まれていたほか、家畜の飼料や田畑の肥料となる牧草や様々な山林資源が採取され、豆酩の人々の生活を支えていた。山林地帯には今や獣道となってしまったが縦横無尽に山道が存在しており、特に集落西部の山林は、豆酩の人々の重要な漁場であった西海岸への通路として大いに活用されていた。

周辺地帯の継続的な開発は、人口がピークを過ぎた昭和50年代以降、急速に退歩していった。現在では琴亦の金剛院裏手（コンゴウインサエ）など、限られた箇所では畑地が営まれているに過ぎない。

#### (4) 史料にみえる地名と聞き取り地名

現地景観の適切的な復原を試みるにあたって、前近代の古文書など文献資料にみえる地名の現地比定が大きな手がかりをもたらす場合が多い。今回の調査では資料編でも全文を翻刻紹介した寛文2年（1662）の「豆酩村検地帳」（この史料の性格に関しては徳永健太郎「豆酩関連史料について」および資料編の解題を参照されたい。）などの近世史料や豆酩関連の中世史料から地名をピックアップし、聞き取り調査によって得られた通称地名との照合によって地名地図の作成を行なった。

通称地名の聞き取りについては未だ不十分なところが多く、更なる調査の余地を残すが、現時点での成果として次頁の地図を示しておきたい。

## 2 豆酩の水利

『対馬島誌』に「豆酩は本島稀に見るの耕地大に開け、南海に面するの農村自から別天地の観あり」とあるように、水田耕地面の極めて少ない対馬において、まとまった規模で水田耕作が展開されている豆酩は、対馬の現地景観を考える上で特異な位置にある。

現在における豆酩の水田は、(1) 神田川流域、(2) 権現川流域、(3) その他（天水・谷水による）、の3つに大きく地域区分できる。その他に類する水田として、昭和50年頃までは豆酩東部の小字湯船・湯塚・吹山・堅田



写真 2-8 湯船山の水田

などの傾斜地に水田が棚田状に広がっていたが、現在では耕作が放棄され山林化している（ただし、湯船山の1筆、オショウドコの約2反、は依然耕作が続いている）。また、西部の小字西表にも谷水による水田が存在していたが、現在でも耕作されている水田は極めてわずかである。つまり、現在の豆酩における水田は、その95%以上が(1)(2)の河川流域の水田といってよく、ほとんどの水田が、それぞれの川に設置された堰からの取水を水源として灌漑が施されている。なお、現在の登記簿上の豆酩全体の水田面積は36町余であるが、実質的に耕作されている水田は20町余である。

現在耕作されている豆酩の水田はほぼ乾田である。かつて堅田や荷太にも水田が展開していた段階では、これらの区域の水田には湿田が多かったが、現在湿田は西表やへ坂などに数筆あるにすぎない。

#### (1) 神田川流域

神田川は、木櫛山に源流があり、南流して豆酩湾に注ぐ全長約3km余りの川である（『対馬島誌』に「長約三十町」とあるのに拠る）。その流路は150mほどの幅で蛇



写真 2-9 神田川流域最上流の水田





図2-3 豆敷の地名（西海岸）  
（基図には2万5千分の1地形図「豆敷」を利用。）



図 2-4 豆酩の地名（豆酩港～浅藻・内院）  
 （基図には 2 万 5 千分の 1 地形図「豆酩」を利用。）

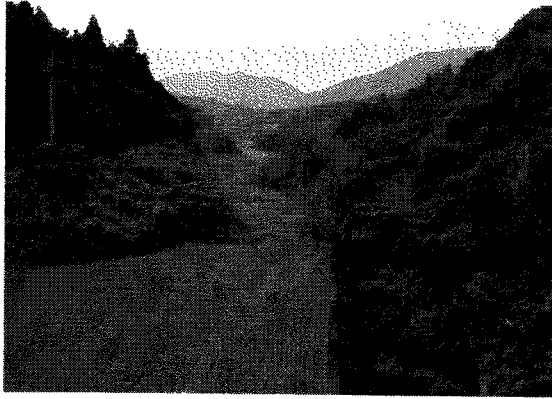


写真 2-10 神田ダムの堰堤から南方を望む

行しており、河川改修・護岸工事などによる流路の直線化はみられない。中ウズ・馬乗石・肥崎・田井原といった小字の比較的肥沃な耕地面は、神田川の流れによって土砂が堆積されたものといえる。神田川上流には昭和58年に竣工した砂防ダムがある。この砂防ダム建設の経緯は明らかでないが、豆敷北部の山地の谷水が合流する神田川の土砂量は相当な量があったと思われる。神田川の水深は50cmにも及ばないが、水量は豊かであり、この豊富な水量があるゆえに、水争いや水利に関する規約が見当たらないのであろう。堰の数は多く、確認できているだけでも上下2kmほどの区間に19ヶ所、100mに1ヶ所の間隔で堰が設置されている。

神田川は南流するにつれてその呼び名が異なっている。馬乗石付近では「大川」、肥崎付近では「吉田川」、田井原付近では「ダイジン川」、午王ノ原付近では「堂前川」のごとくである。ただし、以下の記述においては便宜上「神田川」で統一したい。

### ① シタタ

神田川流域の水田で最上流に位置するのがシタタの水

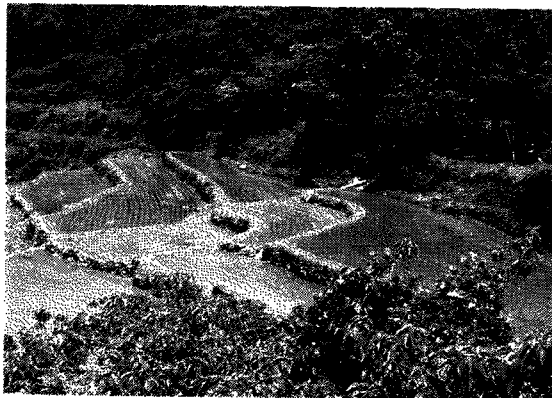


写真 2-11 シタタの棚田（右岸）



写真 2-12 シタタの棚田（左岸）

田である。最上流の水田は地番1195にあり、神田川の堰から取水している。この堰からの用水はシタタのうち神田川左岸の8478㎡を灌漑するが、現在ではその約三分の一は荒地となっている。

シタタのうち神田川右岸の水田は、畦が石で組まれた棚田になっており旧来の景観をよくとどめている。2878㎡の水田のうち1841㎡が現在も耕作されており、これらは地番1175付近の堰からの用水で灌漑されている。

なお、地番1192付近には神田川砂防堰堤（神田ダム）がある（昭和58年度竣工）。豆敷地区で最大の堰堤である。天正20年（1592）の「ます女譲状」（主藤寿文書）に「したゝの田」とみえるのがシタタ地名の史料上の初見である。

寛文検地帳には、「したた」に下畠がみえるほか、「しただのひら」に下木庭、「した田」に中木庭がある。また、「したゝ」「したゝの原」に水田がみえる。この両者の水田の面積比から類推するならば、地名聞き取りでは検出しえなかったが、「したゝの原」がシタタのうち神田川右岸の棚田をさす可能性が考えられる。「したゝ」には上々田が多く、「したゝの原」には中・下田が多い。一方、明治地籍図の地味を見ると、神田川左岸がすべて下田、神田川右岸がほぼ中田である。「したゝ」の水田が神田川左岸の水田である可能性は高く、17世紀の地味（上々）と19世紀の地味（下）に変化がみられる。

### ② 中ウズ

シタタの下流に位置するのが中ウズである。字の全域が水田であり、その面積は16359㎡になる。字の西端を南流する神田川の5箇所（5箇所）の堰からの水路で灌漑されているが、水路の末端にあたる水田は耕作放棄されているも



写真 2-13 中ウズへの取水堰

のも見られる。

かつては大地主が小作させており、字の中央を縦断する農道より西が「やました（大山下）領」、東が「ぼうだ（こもり）領」といった。

天正20年（1592）の「ます女譲状」（主藤寿文書）に「中うつの田」とみえるのが中ウズ地名の史料上の初見である。

寛文検地帳における「中うす」の耕地は田のみであり、17世紀から既に畑地としての利用はされていない。地味は大半が上々田であり、近世の段階での土地評価が高い。明治地籍図においても上田と中田が多く、比較的良好な耕地であったことがわかる。

なお、寛文検地帳には「馬乗石」→「ふちの上」→「中うす」の順で記載されているが、神田川を南北（上下）に挟んだ馬乗石と中ウズとの立地関係から、「ふちの上」は中ウズ内の地名である可能性が高い。

### ③ 馬乗石

中ウズの南が馬乗石である。字名の由来は、神田川を渡るべく馬に乗る際の台となる石があったことにあるという（現在その石は残っていない）。集落から北上して中ウズ・シタタ方面に向かう道は、農道が開通するまでは馬乗石の北端中央で神田川を越えており、そこが泥濘の「ふか道」であったため馬の利用が必要だったとのことである。

現在の馬乗石の耕地は、県道沿いの畑地をのぞいてほぼ水田である。これらの水田は、主に上井手と下井手という2つの用水によって灌漑されている。前者の堰は中ウズ・地番1140付近にあり、後者の堰は馬乗石・地番2613付近にある。上井手・下井手ともに全長300mほど



写真 2-14 馬乗石の水田

である。上井手の灌漑面積は6405㎡、下井手は11945㎡（ただし、下井手掛かりの下半は上井手の余水も掛かる。）である。

馬乗石内には畑地も点在していたが、昭和13年に国の事業として上井手の頭首口が整備されて畑地の水田化がはかられた。地番2158のみは天道地として畑地のまま残ったが、昭和31年に水田とされたという。

寛文検地帳には畠と田に「馬乗（り）石」がみえるが、田地はほとんど上々田あるいは上田である。明治地籍図における地味もほぼ上～中田であり、上井手と下井手による灌漑が上質な水田を維持させていることが窺える。

### ④ 肥崎

肥崎は神田川左岸に位置し、字域の西半分が水田となっている。水田は北半分がヒザキ堰（馬乗石・地番2719付近）掛かり、南半分がオオカワ堰（肥崎・地番2267付近）掛かり、南端の一部が地番2264付近の堰掛かりである。南部の水田一帯の通称地名を「ヨシダ（吉田）」という。「吉田」地名は中世史料にも見え、大永2年（1522）に「吉田河のは□」、天文11年（1542）に「吉田の田畠」な



写真 2-15 写真中央が「ヨシダ」付近

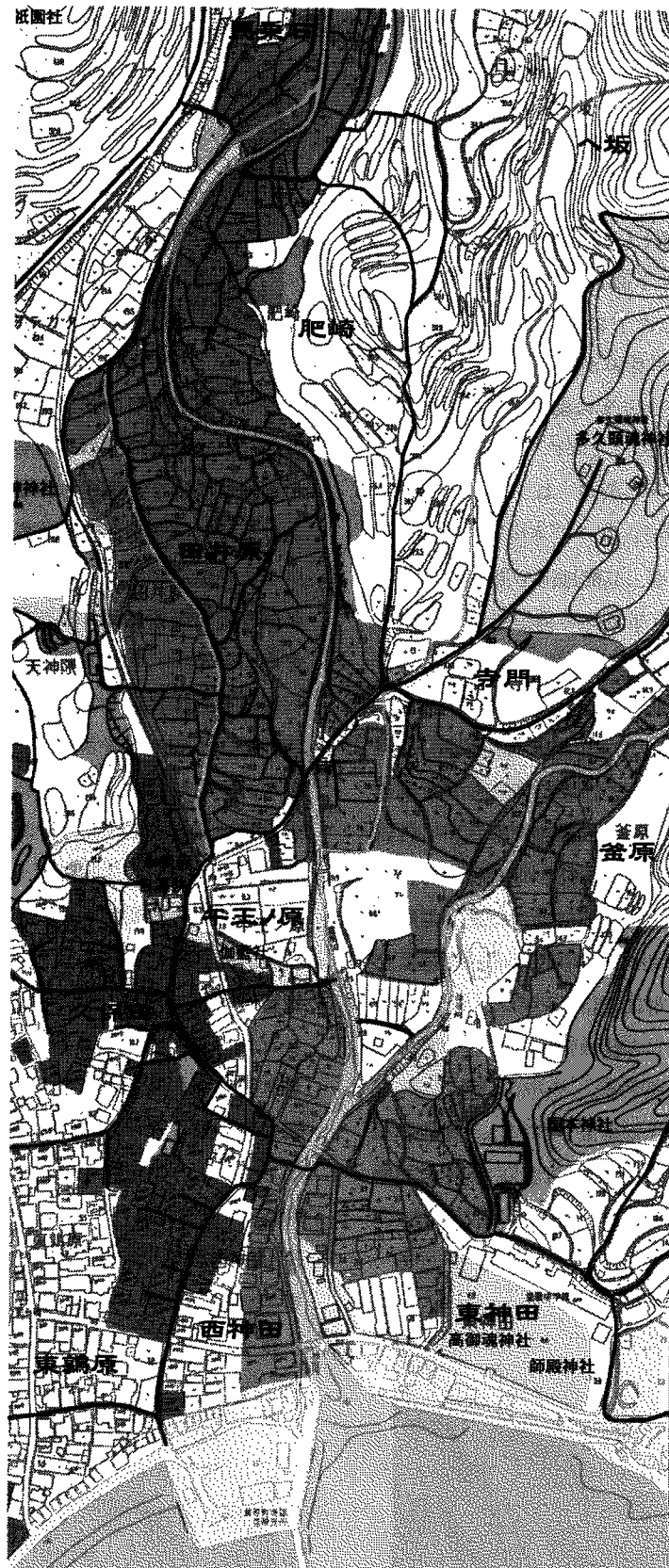


図2-5 明治期神田川中流域の土地利用

(田井原付近の網かけが水田、久保田付近の濃い網かけが宅地、東鶴原・へ坂などの白地部分が畑を示す。その他は巻頭カラーの図版参照。)

ど16世紀以降地名が見いだせる。

ヒザキ堰は、現在耕作されている北端の水田である地番2203の水田まで、150mほどの導水路を擁する。ヒザキ堰掛かりで現在も耕作が続けられている灌漑面積は1500㎡ほどであり、そのほかの水田域は若干の畑地を除いて耕作放棄されている。

寛文検地帳には、「ひさき」「ひさきひなた」「よし田ひなた」「よし田平」に中・下畠が、「吉田」「ひざき」に上々～中田が、「吉田ひなた」に下木庭がみえる。明治地籍図では、ヒザキ堰掛かり・オオカワ堰掛かりともに上～中田となっている。また、字の東半分は畑地となっていたこともわかる。

#### ⑤ 田井原

田井原は神田川右岸にあり、豆酩地区で最も水田がまとまって存在する字である。字東部の神田川沿いの水田（一段低くなったこの土地を「ホリイ」という。）を除いた水田はテンハイ堰（馬乗石・地番2195付近）からの用水によって灌漑されている。この用水は全長800mにおよび、灌漑面積は25802㎡ほどである。ひとつの用水掛かりとしては豆酩地区最大の灌漑面積である。

一方、「ホリイ」はホリイ堰（田井原・地番2316付近）とその下流の堰（田井原・地番2357付近）によって灌漑される。灌漑面積は4107㎡である。「ホリイ」地名は文安5年（1448）の阿比留文書に「ほりいのた」とみえ、田井原地名が寛文検地帳ですら見いだせないのとは対照的に早くから史料上に登場する。

さて、田井原の水田に関して特筆すべきは、赤米神田（寺田）の存在である（巻頭カラー写真参照）。赤米神田については本石正久氏の記述に詳しいが（70頁参照）、



写真 2-16 ホリイ



写真 2-17 収穫期の田井原

かつては赤米神事に参加する頭仲間（座）で神田を共同耕作し、頭役が神田のみならず田井原全体の水利に関しても強い権限を持っていたようである。また、赤米神田より上流では堆肥（糞尿）を肥料として使ってはならなかった。現在では、頭仲間に参加する家は2戸となり、赤米神田も地番2365-1のうちの2筆のみとなっている。また、特に赤米神田への優先的な取水は行われていない。

筆数も耕作者数も多い田井原であるが、水利組合は存在せず、かつて常置されていた世話人も現在では特に決められていない。ただし、渇水時については取水に関する取り決めがある。テンハイ堰掛かりの水田について6班に分け、1班4時間ずつの時間割配水を行うのである。班内での時間割は水田面積によって計算され配分される。時間割配水時の取水について特定の取排水管理者は置かれず、各自の責任で取水を行うという。

なお、水利組合が存在しないのは豆酩地区の他の区域でも同様である。灌漑面積に対する水量が豊富なゆえか、隣接する堰一井手筋の間で規約などは存在していない。よって近世～近代に作成された水利関係の共有文書の類も存在していない。

豆酩地区最大の水田地帯である田井原であるが、寛文検地帳には「田井原」地名は登場しない。ただし検地ルートなどから類推すると、「さはしの原」「黒し大こはたけ」「寺田ノ上」「さらつはたけ」「長田」「三くぢん」「四せまちた」「みあけた」「ゑのきた」「つもじの原」「いのしげ」などが田井原近辺の小地名と考えられる。このうち、「ゑのきた」については、現在の赤米神田の下流にあたる地番2369付近をさすと言われている。これらの土地の地味は畠（「さはしの原」「黒し大こはたけ」「寺田ノ上」「さらつはたけ」）には上々畠が多く、田に至ってはほと



んどが上々田である。

一方、明治地籍図をみると、「ホリイ」が上上～上中田であるものの、それ以外のテーンハイ堰掛かりの田井原の水田はことごとく中～下田の評価となっている。先述の小地名がすべて田井原内のものとは確定できないが、田井原の土地評価について17世紀と19世紀で変化があったことは指摘できよう。

## ⑥ 午王ノ原

午王ノ原は田井原の下流にあたる。田井原を縦断したテーンハイ堰の用水は田井原の水田の排水をうけて午王ノ原に至り、午王ノ原・地番2480付近にて神田川（堂前川）に放水されている。この用水が横断する午王ノ原の北半分は一筆の面積が非常に大きい地番2478（現在は7筆に分筆）が従来天道地として水田化が図られなかったようである。午王ノ原・地番2481もまた天道地とされ、現在でも木が茂っている（「豆殿政庁跡」の碑はこの一角にある）。一方、字の南半分は明治地籍図の段階では全て水田となっており、その水源は午王ノ原・地番2473付近のドーンマエ堰にあったようである。

明徳元年（1390）の「たねうち譲状写」（内山文書）に「こおはたけ」とあり、午王ノ原地名の史料上の初見であると考えられる。

寛文検地帳には、畠に「ごおうの原」がみえる。地味は上々畠である。田井原と同様に検地帳にはこの一筆以外の記載はないが、検地ルートから、田については「つもしの原」「いのしげ」などが午王ノ原近辺の土地である可能性が考えられる。また現在の堂前橋を「ハシノモトの橋」というが、検地帳に「同所（橋のもと）より川より西」とある三筆の畠、「同所（橋のもと）川より西」

とある上田1筆は午王ノ原内の土地と考えてよからう。

明治地籍図において、字の南半分の水田の地味は大部分が上上・上中田である。しかし現在では、字の北端に田井原からの余水で灌漑する水田が2筆、字の中ほどにドーンマエ堰掛かりの水田が3筆耕作されているのみであり、それ以外は畑地あるいは宅地となっている。

## (2) 権現川流域

### ① 寺門

寺門は多久頭魂神社があり、権現川水系にかかる「ゴンゲン」「ゴンゲンシタ」と神田川水系にかかる「ハシノモト」「ドウノマエ」に大きく区分できる。

神田川水系では、集落から多久頭魂神社に向かう参道より北の水田がホリイ堰（田井原・地番2316付近）によって灌漑されている。また、参道南側・神田川沿いの水田が地番2403付近の堰によって灌漑されている。両者あわせた灌漑面積は3809㎡ほどである。

権現川水系では、まず「ゴンゲン」にあたる地番2431・2432の水田は現在4筆（1251㎡）あり、次頁模式図C堰から200mの導水路を経て灌漑されている。この余水は地番2437の水田にも至っている。次に地番2439～2441（445㎡）と2443～2445（2001㎡）の「ゴンゲンシタ」の水田は全長600mに及ぶ用水によって灌漑されている。この用水は「寺門井手」と呼ばれ、水源を権現川の上流（模式図A堰）に有している。地番2449の水田2筆（705㎡）も「ゴンゲンシタ」と呼ばれるが、この水田は釜原・地番689の水田の余水を、権現川を跨ぐ樋によって受け水源としている。同様の事態は寺門・地番2452の水田（1021㎡）にも見られ、この2筆は、地番2449付近の2ヶ所の堰からの用水をパイプによって川を渡し取水している。



写真 2-18 午王ノ原の天道池

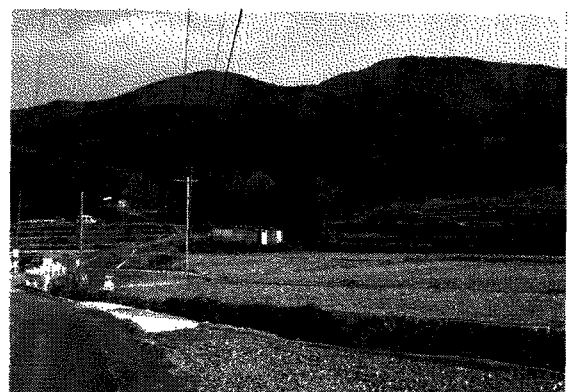


写真 2-19 寺門の水田（写真左端が堂前橋）



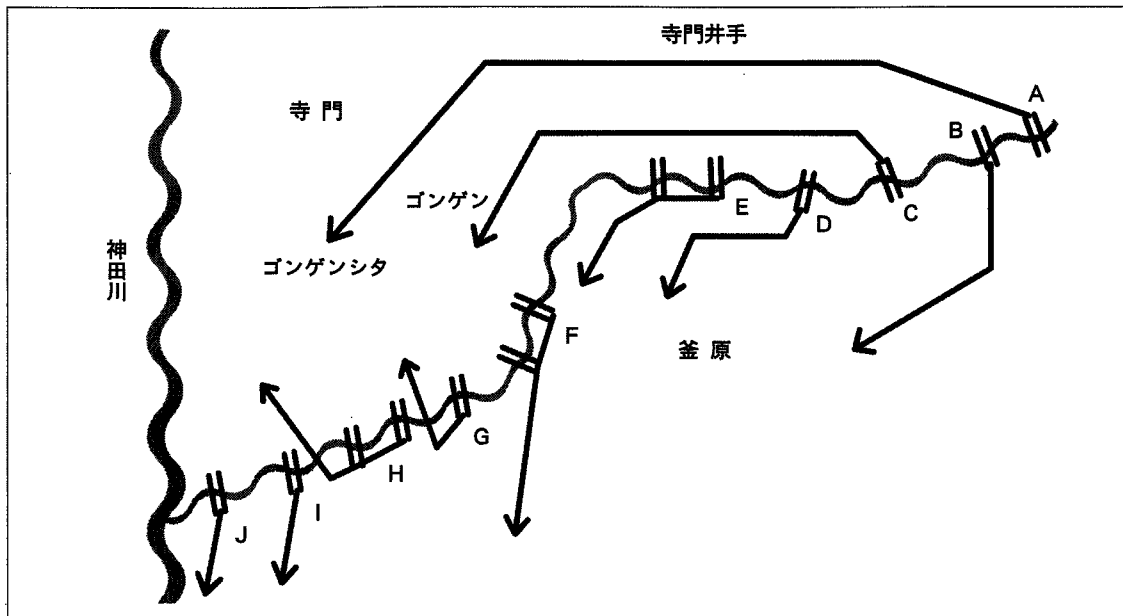


図 2-6 権現川流域の水利灌漑系統図

寺門で水田が存続しているのはほぼ川沿いなどの灌漑容易な水田に限られ、字中央の耕地は一部の畑地を除き耕作放棄されている。

寺門地名の史料上の初見は明徳元年（1390）の「たねうち譲状写」（内山文書）で、以後16世紀の史料にも「寺門の田」「寺門のふか田」などの記載が散見できる。「ゴンゲンシタ」も明徳元年の上記文書に「権現下」とみえ、文明元年（1469）の金剛院文書にも「こんげん下の田」などとみえる。

寛文検地帳をみると、畠は「こんげん下」に中畠が一筆あり、「寺かと」「同所いてノはた」「橋口ノ下」「橋のもと」などの畠は中～下畠が多い。また「川はた」「かわはたけ」（上々畠が中心）が寺門の耕地である可能性がある。田は、「寺かと」「権現ノ下」「橋のもと」など

に上～中田がみえる。その前後の「寺院ノ上」「たふりちん」「川はた」なども寺門内の土地である可能性が高い。

明治地籍図の地味をみると、神田川水系の「ハシノモト」「ドウノマエ」は上～中田であるのに対して、権現川水系の「ゴンゲン」「ゴンゲンシタ」は権現川沿いの水田をのぞき下上田が多くを占める。こちらは寛文検地帳の地味よりも評価が低下しているのがわかる。

## ② 釜原

釜原は権現川左岸に位置し、権現川沿いに広がる水田は、北半分の棚田地帯と南半分の区域とに大きく分けられる。棚田地帯には権現川の200mほど上流にある堰（模式図B堰）からの灌漑による上層部と40mほどの導

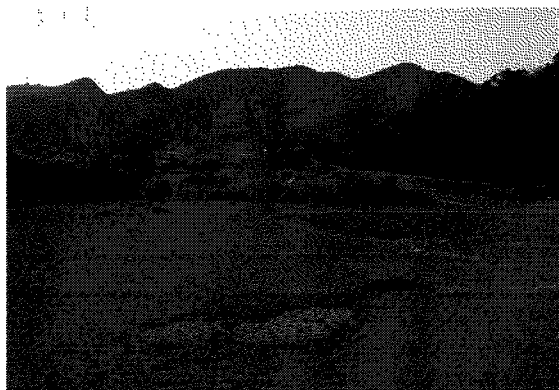


写真 2-20 釜原の水田（北側）

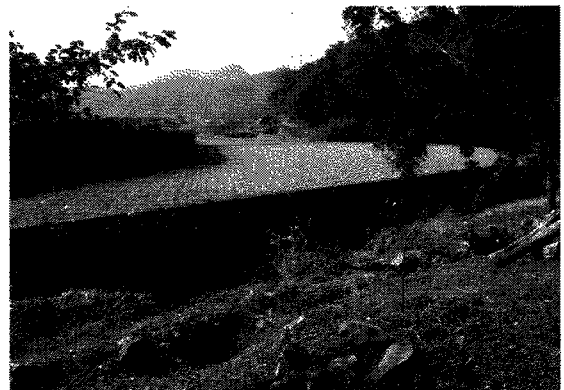


写真 2-21 釜原の水田（堰ばの遺跡付近）

水による（模式図D・E堰）下層部がある。上部の水田の排水が下の田の取水となる畦越し灌漑である。灌漑の末端にあたる棚田地帯の南側はそろって耕地放棄されている。

釜原の南半分の水田は、3ヶ所の堰（F・G・H堰）によって灌漑されている。H堰は釜原内では地番689の一筆を灌漑するのみであるが、先述したようにこの排水が樋渡しされて寺門・地番2449の水田に引水されている。

寛文検地帳をみると、田に「かまはる」がみえ、上々田が圧倒的に多い。これが明治地籍図に目を転じると、棚田地帯で中中～下上田、南半分の水田で上下～中中田と、寺門がそうであったように地味の評価が一様に低下していることがわかる。

### ③ 東神田

神田川河口の左岸にあたるのが東神田である。現在、東神田で水田耕作が続けられているのは豆殷小学校裏手の地番640～660の水田に限られる。この一帯は地番652付近を「イナタリ」、地番645付近を「ヒンガンデン」という。なお、明治地籍図の段階では釜原との境界付近の水田（1874㎡）や地番631（現・派出所および福祉センター）・地番636～638にも水田が展開していた。

豆殷小学校裏手の山には地番656にかつて国本神社があり、この山を「オゲンヤマ」と呼んでいる。「イナタリ」「ヒンガンデン」の水田は、このオゲンヤマ方面からの谷水によって灌漑されている。谷水によらない水田は地番643の3筆（1791㎡）のみで、これらは地番652-1付近の権現川の堰からの用水で灌漑されている。

「ヒンガンデン」は天正8年（1580）の「宗尚広書下」に「彼岸田」とみえるのが初出である。「カンダ」も永



写真2-22 ヒンガンデンとオゲンヤマ

正16年（1519）の主藤仁文書に「かんたのはたけ」などとあり16世紀以降の史料に散見される。

寛文検地帳には「かん田」「かんたかわら」「ひんかんちん」「いなたり」などの地名がみえるが、その前後に「たち花」「ないた」「はこ（ど）た」「むかいノまへ」といった地名もみえ、神田川河口付近の小地名である可能性はある。「かん田」「かんたかわら」などには上々田が多く、「ひんかんちん」「いなたり」には中・下田が多いのが特徴である。

明治地籍図をみると、「ヒンカンチン」「イナタリ」を含む東神田の水田は、地番643の上下田、地番631の中上田をのぞき全て下田（下上～下下）である。東神田についても、寺門・釜原同様に、17世紀と比べた19世紀の地味評価が下がっていることが窺える。

### 3 豆殷の屋号

豆殷における屋号は、必ずしも全ての家に存在するのではなく、191戸の「本戸」にのみ存在する家の呼称である。本戸とは、明治39年の漁業権申請時に独立して家を持ち農地耕作に携わっていた家に相当し、分家（新戸）および外来の寄留と区別されてきた。本戸は、明治36年の漁業法改正に伴って漁業権の共同保有が図られたことを機に確定し世襲されたが、その権利とともに株の形をとり売買されることもあった。

本戸で排他的に共有するのは採藻その他、地先漁業を含む漁業権（慣行特別専用漁業権）であるが、これ以外にも共有財産として浅藻の山林土地や厳原の郷宿を持っている。

また、本戸は伊勢講町である小町<sup>こちょう</sup>を形成した。小町はさらに大町<sup>おおちょう</sup>をなし、上町にあたる小町が天道寺町・石水町・乱川町・上茅屋町・下茅屋町・板屋町、中町にあたるのが八軒町・久保田町・神田町・原町、浜町にあたるのが採東町・採西町・浜東上町・浜東下町・浜西町である。

この本戸や寄留に関しては、九学会連合調査の成果である『対馬の自然と文化』（古今書院、1954）や宮本常一「対馬豆殷の村落構造」（『中世社会の残存 宮本常一著作集 第11巻』未来社、1972）に詳しいので、そちらを参照されたい（上記の概説もこれらの文献に依拠している）。

現在でも、本戸の呼称である屋号は日常的に用いられており、聞き取り調査において、家や住民の特定の際には氏名よりむしろ屋号のほうが通用しやすいほどであった。そこで我々は、市販の住宅地図の氏名と屋号との照合が可能となる一覧表の作成を調査の初期に試みた。このあと掲げる表はその成果である。

屋号調査の下敷きとなったのは、城田吉六氏の著書『赤米伝承』（葦書房、1987）の巻末にある「豆穀一九一戸一覧」である。この一覧は、小町毎に屋号と氏名列挙したものである。改訂を経たものではあるが、故人の名も多く、市販の住宅地図との照合がしにくい家も多かった。また、その住宅地図も地形図のように正確な位置関係を示すとは限らず、家の位置を地番で特定する必要があった（なお、豆穀の本戸の住宅の玄関には、いわゆる

表札はほぼ存在しない。今後正確な住宅地図の刊行が待たれる。）。

そこで、今回の調査成果としての屋号一覧においては、左の列に城田氏の本にある情報を示し（一部、屋号の呼称を改訂）、右の列に対応する家の字・地番および氏名を示した。氏名は聞き取りのほか住宅地図や電話帳の表記も参考にしたが、物故者の名前も含まれる可能性はある。なお、調査は完全なものではなく、ここでの表記が公証力を持つものでないことは言うまでもない。

調査は2003年5月11日に早稲田大学大学院の大澤 泉・加藤麻彩子・加藤裕美子・田村 仁・徳永健太郎・永田史子・藤木正史・堀 祥岳・松澤 徹・山本真紗美が行い、その後堀が補充調査にあたった。

表2-3 豆穀191戸の屋号

城田本			聞き取り調査による補訂			備考
屋号	氏名	小町	字	番地	氏名	
じゅうじ	主藤寿	天道寺町	東井坂	2670	主藤寿貴、主藤寿	供僧家
おかやま	本石健一郎	天道寺町	東井坂	2677	—（該当者なし、以下同）	供僧家
えんち	主藤政和	天道寺町	東井坂	2678	主藤政知、主藤円	供僧家
さかい	阿比留権次	天道寺町	東井坂	2680	阿比留剛史、阿比留初子	
やまだ	阿比留春枝	天道寺町	東井坂	2692	—	現在は、木下平三宅
ぶんさく	阿比留秀雄	天道寺町	東井坂	2703	阿比留幸之助、阿比留秀雄、阿比留繁喜	
きちのじゅう	主藤虎夫	天道寺町	西井坂	2841	主藤郡太、主藤武司	
えんしゅう	主藤力	天道寺町	西井坂	2843	主藤力、主藤徳義	供僧家
いわじろう	主藤ツマ子	天道寺町	西井坂	2847	主藤キク、主藤繁明、主藤ツマ	
よじゅう	阿比留修	天道寺町	西井坂	2851	阿比留修、阿比留祐、阿比留サツ	
やじゅう	主藤次郎	石水町	東井坂	2701	主藤勝美	
こうへー	阿比留保	石水町	東井坂	2708	阿比留仁吉、阿比留功三	
ぜんしろう	権藤善一	石水町	東井坂	2710	権藤善一、権藤龍成	
でんご	権藤克也	石水町	東井坂	2711	権藤傳吾、阿比留チヨノ、権藤善幸、桐谷義夫	
きちごろう	小森勲	石水町	東井坂	2712	小森勲、小森敦子	
そのう	主藤善人	石水町	東井坂	2716	主藤善人、主藤順一	
ぐんぞう	阿比留郡蔵	石水町	東井坂	2724	阿比留郡蔵、阿比留充一	
まつごろう	犬束肇	石水町	西井坂	2837	—	
せんぞう	太田茂	乱川町	東井坂	2694	太田長蔵、太田茂	
はやおい	主藤クウ	乱川町	東井坂	2696	主藤権太、主藤たみ江	
いどり	阿比留肇	乱川町	西井坂	2839	阿比留肇、阿比留一幸	
かみじん	主藤太郎	乱川町	西井坂	2845	主藤クウ、主藤智都美、主藤輔泰	
ほさ	阿比留長左エ門	乱川町	東井坂	2687	—	
こうぜー	立花幸枝	上茅屋町	東井坂	2739	立花幸左エ門、立花幸枝	
しょうはち	主藤長太郎	上茅屋町	東井坂	2752 2754	主藤長太郎、主藤ヤス	
どい	土居伊吉	上茅屋町	東井坂	2753	—	
かめへー	本石トミ	上茅屋町	東井坂	2755	本石絹枝、本石トミ	
こうさく	本石直己	上茅屋町	西井坂	2824	本石八五郎、本石直己	供僧家
きちびょう	阿比留ハツ	上茅屋町	西井坂	2825	—	

おおた (かむのおおた)	太田多喜夫	上茅屋町	西井坂	2833	太田多喜夫、太田和雄	
ちょうきち	阿比留吉三郎	下茅屋町	東井坂	2759	阿比留長吉、阿比留保壽	
まごじ	古森千代子	下茅屋町	東井坂	2761	古森仁、古森千代子	
はちい	太田君枝	下茅屋町	東井坂	2770	—	
かめじ	阿比留吾市	下茅屋町	東井坂	2774	阿比留五郎、阿比留吾市	
よっせい	本石健市	下茅屋町	東井坂	2776	本石好平、本石健一	
だんごろう	山城伝	下茅屋町	東井坂	2777	山城弾五郎、山城伝	
かんしゅう	権藤侃	下茅屋町	西井坂	2787	権藤侃	
しろびよう	小森一美	下茅屋町	西井坂	2788	小森一義、小森善次	
うめの	梅野又一	下茅屋町	西井坂	2799	梅野又一、梅野肇	
うちやま	内山兵衛	下茅屋町	西井坂	2804	—	
おか	阿比留佐利	板屋町	東井坂	2744	阿比留佐利、阿比留ミネ、阿比留泰行、阿比留佐一郎	
さくえむ	主藤仁介	板屋町	東井坂	2758	主藤仁一	
こもり	小森賢之	板屋町	東井坂	2764	—	
いんづか	犬束源次郎	板屋町	東井坂	2775	犬束亀次郎、犬束巖	
たちばな	立花総	板屋町	東井坂	2779	立花仁吉、立花聡	
にいどん	本石久知	板屋町	西井坂	2791	本石初枝、本石佐一、本石久知	供僧家
さんめ	本石一幸	板屋町	西井坂	2797	本石一幸、本石吉實	供僧家
しょうぜん	本石正久	板屋町	西井坂	2807	本石正久、本石雄三、本石千代	供僧家
かくぜん	本石覚	板屋町	西井坂	2815	本石覚	供僧家
げんだ	太田勘治	板屋町	西井坂	2819	太田ウメ、太田康裕	
いんた	本石太一郎	八軒町	久保田	2591	本石憲司郎、本石太一郎、本石カツ	
だんきち	倉成征雄	八軒町	久保田	2592	倉成善吉、倉成征雄	
こやま	山下清美	八軒町	久保田	2596	山下清美、山下成久、山下テルエ	
たいこう	中村富安	八軒町	久保田	2598	中村富安	
いいの	飯野行生	八軒町	久保田	2601	飯野行生	
やぜー	日高一男	八軒町	久保田	2602	日高弥一郎	
じすけどん	本石弥	八軒町	久保田	2612	本石泰裕、本石洋人、本石弥、本石治助	
ごひょう	主藤弥吉	八軒町	久保田	2614	主藤吉五郎、主藤好夫	
とりや	鳥屋八助	八軒町	久保田	2615	鳥屋伝吉、鳥屋洋美、鳥屋八助	
いぜー	日高涉	八軒町	久保田	2620	日高市右エ門、日高涉	
しろーまた	阿比留四郎	八軒町	久保田	2621	阿比留四郎、阿比留厚喜	
よへー	阿比留新	八軒町	久保田	2623	—	現在は、岩佐ヒサコ宅
ぜんだ	本石平次郎	八軒町	久保田	2624	本石元幸	現在、浜に移転し、屋号を「もとぞう」という。
へーま(はしの)	立花正記	八軒町	東鶉原	3070	立花林、立花正記	
まんどん	阿比留杉子	八軒町	東鶉原	3075	阿比留杉子、阿比留幸文、阿比留又左エ門	
しょうごろう	本石平洋	八軒町	東鶉原	3077	本石安洋、本石敬二、本石末子	
じんぜー	内山七安	八軒町	東鶉原	3082	—	
こうしち	梶木義雄	久保田町	午王ノ原	2478	梶木義雄	
きんねみ	主藤ハツ	久保田町	久保田	2565	主藤健二	現在は、勝井フナ宅
またおいー	権藤幸人	久保田町	久保田	2566	権藤イイ、権藤悦教	
だんのう	主藤道洋	久保田町	久保田	2570	主藤チヨ、主藤佐	
とうの	岩佐与助	久保田町	久保田	2576	岩佐与助	
なかごろう	本石仲五郎	久保田町	久保田	2573	本石仲五郎	
ごんどう	権藤善昭	久保田町	久保田	2572 2574	権藤善昭	
しろーぜー	権藤資郎	久保田町	久保田	2575	権藤丈次、権藤資朗	
たぜー	竹岡秀	久保田町	久保田	2582	竹岡太郎吉、竹岡幸洋	
だんぞう	日高厚	久保田町	久保田	2585	山下小次、日高厚	
いちのじゅう	権藤清太	久保田町	久保田	2586	権藤昭、権藤清敏、権藤清太	
たいこう	中村正	久保田町	久保田	2588	中村正	
ちょうじろう	主藤佐市	久保田町	久保田	2606	主藤仁喜平、主藤佐市	
ふじはら	藤原一明	久保田町	久保田	2607	藤原生朋、藤原タツノ、藤原良子	

ちゅうきち	主藤仙太郎	久保田町	久保田	2608	主藤吉助、主藤仙太郎、主藤忠	
ひだか	日高仁喜男	久保田町	久保田	2609	日高仁喜男、日高とみ子	
かじ	本石弥一郎	久保田町	久保田	2628	本石ツル、本石弥一郎	
しろえみ	山下マサエ	久保田町	久保田	2632	山下ユキエ、山下任由	
じんびょう	主藤稔	久保田町	東鶴原	3087	権藤良輝	
いわさ	岩佐兵部	久保田町	東鶴原	3090	岩佐兵部	
ぜんね	本石善二郎	久保田町	東鶴原	3101	—	
はちろうえ	主藤兵衛	神田町	西神田	2517	主藤兵衛、主藤甚作	
あさの	本石力	神田町	西神田	2530	本石力、本石和吉、本石亀、本石亀吉	
ぎすけ	主藤源作	神田町	西神田	2531	主藤儀助、主藤源作、主藤元	
すとう	主藤甚次郎	神田町	西神田	2533	主藤朋作、主藤朋喜	
きぜー	小島一雄	神田町	西神田	2536	小島一雄、小島喜介	
いちろく	本石善一	神田町	西神田	2537	本石純彦	
じんた	本石幸春	神田町	西神田	2538	本石格次郎、本石幸治	
いっちょう	勝井竹夫	神田町	西神田	2539	—	現在は、本石マサ宅
おおいし	大石義和	神田町	西神田	2540	大石善和	
ごんじろう	勝井次郎	神田町	西神田	2541	勝井二郎、勝井商店、勝井俊博、勝井権吉	
たっぴょう	阿比留吉朗	神田町	西神田	2543	阿比留辰兵衛、阿比留辰夫	
ほういし	阿比留次太郎	神田町	西神田	2544	阿比留計利、阿比留與吉、阿比留次太郎	
げんばち	勝井亀	神田町	西神田	2545	勝井亀、勝井俊公	
げんざ	勝井優	神田町	西神田	2546	勝井優、勝井睦巳、勝井フナ	
やすけ	棧原一吉	神田町	西神田	2548	棧原弥三郎、棧原一吉	
やぞう	棧原清一	神田町	西神田	2549	棧原靖	
うさ	権藤嘉洋	神田町	西神田	2550	権藤吉之助、権藤嘉洋	
でんごぜー	永尾伝	神田町	西神田	2552	永尾伝平	
たけおか	竹岡忠	神田町	西神田	2554	竹岡五郎左エ門、竹岡忠之、竹岡マサエ	今は政則（裕）
やました	山下小枝子	神田町	西神田	2555	—	現在は、安達誠宅
せんろく	小森弘己	原町	西鶴原平	2927	小森五郎、小森弘己	
じんしち	太田弥五郎	原町	西鶴原平	2928	太田弥五郎、太田吉雄、太田元	
かんと	太田忠	原町	西鶴原平	2929	太田忠	
みぞえ	溝江弥市	原町	西鶴原平	2946	溝江犬太、溝江多一郎	
ともえむ	主藤豊	原町	西鶴原平	2947	主藤豊	
さきち	主藤長吉	原町	西鶴原平	2948	小森伊喜之助	
さじきばら	棧原文雄	原町	西鶴原平	2949	棧原靖重	
かんだ	桐谷宗男	原町	西鶴原平	2950	桐谷宗幸	
だいぞう	平間岩夫	原町	西鶴原平	2958	平間サヨ、平間岩男	
しか	棧原佐一	原町	西鶴原	2999	棧原佐市、棧原馬佐敏	
こうしろう	立花幸男	原町	西鶴原	3004	—	現在は、小島一美宅
せんまつ	阿比留隆男	原町	西鶴原	3006	阿比留隆男、阿比留澄	
げんしち	主藤峰子	原町	西鶴原	3016	主藤仁、主藤ミネ	
さんねむ	小島守臣	原町	西鶴原	3025	小島守臣	
さんべい	権藤和行	原町	西鶴原	3039	竹本山四郎、権藤和行	
さいとう	斉藤忠徳	原町	西鶴原	3040	斉藤甚之助	
ぶは	小島八助	原町	西鶴原	3041	小島一馬	
ちょうじゅう	主藤善吉	原町	西鶴原	3043	—	
ともきち	棧原貞之	原町	西鶴原	3045	棧原貞之、棧原善照	
おおば	主藤信夫	原町	西鶴原	3047	主藤トメ、主藤公敏	
げんろく	永尾源	原町	西鶴原	3052	永尾源、永尾実	
なおぜー	太田尚行	原町	西鶴原	3055	—	
かわべよま	川辺源次郎	原町	西鶴原	3063	川辺源次郎、川辺繁	
かわべ	川辺甚吉	原町	西鶴原	3064	川辺義一	
ちょうさく	小島詮一	榑東町	西鶴原平	2959	小島善治	
ぎんね	小島智膳	榑東町	西鶴原平	2961	小島佐、小島宏	

へーしま	主藤弘	樺東町	西鶴原	2965	主藤弘、主藤浩毅	
よぜー	松本シオ	樺東町	西鶴原	2978	主藤一行	
やしい	立花伝衛	樺東町	西鶴原	2980	立花伝衛	
への	権藤平八	樺東町	西鶴原	2981	権藤文次郎、権藤伸利	
やまへー	竹本平	樺東町	西鶴原	3155	竹本平、竹本忠義	
こしい	阿比留章	樺東町	西鶴原	2990	阿比留章	
さえみ	阿比留正造	樺東町	西鶴原	2994	阿比留正一、阿比留正造、阿比留ヨシ、阿比留佐太郎	
かしごうやま	棧原一幸	樺東町	西鶴原	3294 (2995)	棧原一幸、大和屋建設	
こじま	小島行善	樺東町	琴亦	3296	小島左源治、小島行善	
こた	上原隆治	樺東町	琴亦	3326	上原隆治	
やい	阿比留与吉	樺東町	琴亦	3327	阿比留与吉、阿比留一礼	
すけびょう	主藤助満	樺東町	琴亦	3329	主藤助満、主藤ツル子	
さんのじゅう	桐谷元	樺東町	琴亦	3334	桐谷義寿、桐谷元	
げんぞう	桐谷源作	樺東町	琴亦	3335	桐谷源蔵、桐谷和美	
みの	木下ヨシ	樺西町	琴亦	3301	—	
ぼうだ	竹本松治	樺西町	琴亦	3304	竹本善一	
しまの	吉田太郎	樺西町	琴亦	3305	吉田太郎、吉田博行	
たきたろう	竹岡太助	樺西町	琴亦	3306	竹岡勲、竹岡太助	
かもぜ	斉藤久男	樺西町	琴亦	3307	斉藤久男	
うえやま	植山伝吉	樺西町	琴亦	3309	植山元春	
くろうすけ	主藤和慶	樺西町	琴亦	3310	主藤和慶、主藤公康	
かじき	梶木一郎	樺西町	琴亦	3318	梶木清一郎、梶木市郎	
ちよすけ	棧原実	樺西町	琴亦	3321	棧原オイ、棧原千幸	
こが	古賀一美	樺西町	琴亦	3325	—	
たんば	永尾民夫	樺西町	琴亦	3333	永尾民夫	
さのへー	太田勝	浜東下町	東鶴原	3136	太田勝	
かもへー	広幡佐一	浜東下町	東鶴原	3136	広幡安彦	
ばんない	小森治三郎	浜東下町	東鶴原	3143	小森勝博、小森治三郎	
ながの	永尾五助	浜東下町	西ノ濱	3145	永尾五助	
やますけ	竹本吉伸	浜東下町	西ノ濱	3146	竹本四郎、竹本吉伸	
いちごろう	山下貞男	浜東下町	西ノ濱	3147	山下又左エ門、山下貞男	
りもつ	大石利和	浜東下町	西ノ濱	3148	大石利和	
さいびょう	阿比留吉人	浜東下町	西ノ濱	3149	阿比留吉人、阿比留恭孝	
ちょうえむ	城田吉六	浜東下町	西ノ濱	3150	桐谷誠	
きんぜー	松本次郎	浜東下町	西ノ濱	3151	松本吉吾、松本次郎、松本猛宏	
ちいてら	永尾数馬	浜東下町	西ノ濱	3152	永尾数馬、永尾リイ	現在は、3160に居住
ぜんごろう	阿比留広一	浜東町	西ノ濱	3153	—	
ぜんだ	松本一善	浜東町	西ノ濱	3154	松本善雄、松本安子、松本チヨ	
さんば	広幡好雄	浜東町	西ノ濱	3156	広幡好五郎、広幡行律、広幡キヨ	
ようえみ	松本暦行	浜東町	西ノ濱	3157	松本暦幸	
へいごろう	桐谷好之助	浜東町	西ノ濱	3158	桐谷好五郎	
ぜっぼう	阿比留久雄	浜東町	西ノ濱	3160	—	現在は、永尾数馬宅
せきち	棧原清太郎	浜東町	西ノ濱	3161	棧原庄吉、棧原進	
げば	権藤マサ	浜東町	西ノ濱	3162	—	
こばん	桐谷松夫	浜西町	西ノ濱	3159	桐谷治三郎、桐谷松雄	
やご	永尾賢一	浜西町	西ノ濱	3164	永尾賢一	現在は、有地勝公宅。永尾賢一宅は字ヲテカタに移転
かつごろう	阿比留勝次郎	浜西町	西ノ濱	3165	阿比留甚之助	
うすけ	主藤六重	浜西町	西ノ濱	3166	主藤六重、主藤トメ子	
たけもと	竹本仁之助	浜西町	西ノ濱	3168	竹本仁之祐	
はせあい	長谷合好洋	浜西町	西ノ濱	3169	—	
かぜー	永尾忠良	浜西町	西ノ濱	3170	永尾忠良	
ぜんま	阿比留充	浜西町	西ノ濱	3173	阿比留善麿、阿比留民枝、阿比留正	
さいきち	小森才之助	浜西町	西ノ濱	3175	小森才之助、小森午朗	



やた	小森種治	浜西町	西ノ濱	3176	小森喜右衛門、小森富幸、小森正	
はちごろう	立花八右エ門	浜西町	西ノ濱	3177	立花寿、立花勝己、立花ハエ門、立花八五郎	
ともにい	広幡征俊	浜西町	西ノ濱	3178	広幡一宏、広幡仁俊	
またぜー	堀出一夫	浜西町	西ノ濱	3180	堀出一夫、堀出剛	

## 調査員の手記から

### 〔調査・研究の軌跡 その1〕

#### 2002年8月14～17日 調査員A

博多からの短いフライトを終えて、私の眼前にはじめて姿を現した対馬島は、着陸が危ぶまれるほど低い曇天に包まれていました。折しもお盆の帰省客でごったがえす空港を逃れて、厳原の町を見学し、晩には美味しいブリやタイと焼酎「やまねこ」に舌鼓を打ちました。

翌日は早朝から内院・内山・吉田、翌々日には本石正久さんの案内で久根浜・阿連の盆踊りを見学しました。村の若衆（本家の長男）が二列縦隊で踊る独特の盆踊りは、美しい所作と艶やかに歌舞いた衣装、華やかなエツリ、鈴・太鼓・鉦・法螺貝といった賑やかな楽器に彩られていました。

#### 2003年2月3～7日 調査員B

サンゾーロー祭は、豆酩神社で行なわれる亀ト神事です。僕は神社に待機して、岩佐教治さんが行なう亀トの一部始終を見届けました。この間に、「キゾー」の本石直己さんはねずみ藻を携えて、雷神社から3つの磐境を通して豆酩まで往復して戻ってくるはずでした。小雪の舞う肌寒い気温の中、クソウや区長の方々は境内に立ち上る焚き火の白煙を囲み、多くの報道陣・研究者がカメラを構えて、何とも不思議な奇祭のなりゆきを見守っていました。

翌日から、長崎県立対馬歴史民俗資料館で宗家文庫所収の豆酩関係史料を熟覧・撮影しました。豆酩には1960年代まで多くの研究者が訪れ、多くの民俗学的成果が蓄積されました。でも悉皆的な史料収集と村落景観の現地調査に基づいた歴史的な考察が試みられたことはなかったのではないかと思います。だから、とにかく関係史料を全部集めるという基礎作業からはじめようというのが皆の結論でした。今回は安永5年（1776）検注帳や宗氏の判物類が中心でした。早くもその膨大な量にいささか辟易しています。やれやれ、これからの調査の困難さが思いやられるなあ。（後掲（124～131頁）「豆酩関係史料一覧」参照）

#### 2003年2月9～11日 調査員C

少々御神酒を過ぎすぎたせいか、寝不足気味の目をこすりながら構えるビデオカメラも揺れがち。極寒の丑刻（深夜2時）を待って、いよいよ払頭の家の天井に吊された赤米の神俵を降ろされる。出座の宴を終えて、重い赤米の俵を背負った守座が静かに受頭の家へと出発する。闇夜を照らすはずの行列先頭の松明の明かりは、報道陣の照明やカメラのフラッシュにかき消されてしまう。それでも神事の厳粛さは保たれ、重く緊迫した時間が流れている。いまや2軒にまで減ってしまった受頭の家では賑やかな酒盛りが明け方まで続いた。

#### 2003年3月2～6日 調査員D

今回の調査は、史料調査三昧の毎日です。予定していた調査があまりに盛りだくさんだったので、調査員を2つのグループに分けました。私たちのグループは、豆酩の本石一幸さんを訪ねました。ご所蔵の史料は、これまでまったく調査されたことがなかったものばかり。近世後期から戦前までのクソウの姿を垣間見せる貴重な史料群でした。これまで調査したクソウのお宅と同様に、一幸さんの家にも系図とサンメ家が守ってきた軍大明神社の「宝永2年社領坪付帳」が見つかりました。

もう1つのグループは、対馬歴史民俗資料館で、前回に引き続き宗家文庫の近世豆酩村に関する帳簿や寺院・神社帳を熟覧・撮影していました（後掲（124～131頁）「豆酩関係史料一覧」参照）。

慌ただしく対馬の調査を終えて博多に戻り、九州大学九州文化史研究所所蔵の宗家文庫写本類を調査しました。現在では原本が行方不明になっている内山文書を撮影し、正徳年間の豆酩木庭相論関係史料が膨大に残っていることもわかりました（後掲史料紹介「内山文書」参照）。

### 〔調査・研究の経緯 その1〕

- ①2001年7月29日 対馬準備調査《海老澤衷》
- ②2002年7月23日 研究会 米谷均「対馬藩と朝鮮輸入米」
- ③2002年8月8日～10日 巡見 《海老澤衷・徳永健太郎・堀祥岳》
- ④2002年8月14日～18日 盆踊り・カンカン祭調査 《海老澤衷・黒田智》
- ⑤2002年8月 長崎県立図書館文書調査 《徳永健太郎》
- ⑥2002年10月20日～22日 赤米・大山小田文書・水崎仮宿遺跡の調査 《海老澤衷・岡内三眞・清水亮・米谷均》
- ⑦2002年11月2日 シンポジウム「対馬の歴史と民俗」（海老澤衷「九学会連合調査から半世紀を経て」 関周一「中世対馬の所領表記について」 本田佳奈「中世対馬の耕地と山の開発」 本石正久「豆酩の赤米神事について」）
- ⑧2002年12月4日 研究会 岡内三眞「対馬2002年秋の旅」 米谷均「高麗・朝鮮軍の対馬攻撃の関連史料について」
- ⑨2003年2月3日～7日 サンゾーロー祭調査・第1次豆酩関係史料探訪（長崎県立対馬歴史民俗資料館） 《海老澤衷・岡内三眞・徳永健太郎・本田佳奈・宮崎肇・三好伸明・黒田智》
- ⑩2003年2月9日～11日 頭受け神事調査 《西尾知巳・本田佳奈・堀祥岳》
- ⑪2003年3月2日～6日 第2次豆酩関係史料探訪（長崎県立対馬歴史民俗資料館・本石一幸・本石久知・本石直己・九州大学九州文化史研究所） 《徳永健太郎・本田佳奈・宮崎肇・黒田智》

## 豆 酸 関 連 史 料 に つ い て

徳 永 健 太 郎

本稿では、対馬豆酸地区の調査を行うにあたって、豆酸に関する史料調査の歴史とその成果、次いで早稲田大学水稲文化研究所による史料調査の概要を示し、その成果を対馬関係史料一覧として示した。

### A これまでの史料調査とその成果

#### 1 これまでの史料調査の経緯

##### (1) 戦前までの史料調査—御判物写・東京大学・九州大学

豆酸に関する史料調査でまず挙げられるのは、対馬藩が数度に渡って行った「御判物写」（以下「判物写」）編集事業である。だが今回の調査では「判物写」の諸本を検討する作業は行っていないため、『長崎県史』史料編所収の文書数を掲げるにとどめたい。なお、竹内理三による判物写の集計については後述する。

表 2-4 『長崎県史』所収文書群

「宗家御判物写 豆酸郡」（延宝2（1674）年）

所蔵者	判物写収録数	『県史』収録数
阿比留五郎兵衛	1	0
山下才兵衛	4	1
庄司近右衛門	4	0
小嶋勘左衛門	3	1
豆酸村住持持分之内	2	1
豆酸村軍神神主	1	1
豆酸村大明神主	1	1
豆酸村住持房	11	11
住持市へ有之	2	2
豆酸村権現神主 奉加帳六軸	6	0

「酸豆郡御判物写 永泉寺 金剛院分 耕月庵」（延宝2（1674）年）

所蔵者	判物写収録数	『県史』収録数
永泉寺	7	7
金剛院	17	17
耕月庵	1	1

近代に入ってから、対馬にも学問的な史料調査が及ぶことになった。それはおもに東京帝国大学と九州帝国大学の史料調査であった。

まず東大では、平泉澄がアジュール調査のため大正年間に対馬を訪れた際に写した「対馬探訪文書」と、史料編

纂所によって作成された影写本がある。「対馬探訪文書」中の豆酸関連史料は「主藤文書」と「山下文書」であり、1918年書写である。影写本では、「豆酸文書」（文書6点）と「山下政清氏所蔵文書」（文書17点）であり、ともに1921年影写である。

九大では、長沼賢海によって昭和10年代に史料調査が行われた。主な調査対象は「御判物写」であり、多数の類本を謄写しているが、その他にも豆酸関係史料を含む記録類を数多く謄写している。また、おそらく一連の調査であると思われるが、「内山家文書」の影写を行っている。内山家文書は対馬藩馬廻であった内山氏の文書であるが、戦後所在がわからなくなっており、九大の影写本は原本の体裁を伝えるものとして貴重である。また内山家文書は14世紀の豆酸に関する数多くの史料を含み、当該期の豆酸を考えるにあたって不可欠の史料である。今回の調査では、資料編および別冊史料集として内山家文書目録の作成と中世文書の翻刻を行っている。

##### (2) 戦後の史料調査

豆酸に関する戦後の史料調査は、まず「近世庶民史料調査」の重点調査「対馬史料調査」による竹内理三の調査が挙げられる。1950年に対馬に渡り、半月ほど史料調査をした結果が、「対馬の古文書」『近世庶民史料所在目録』、それから史料編纂所架蔵の「対馬古文書目録」「対馬古文書纂」に示されている。1952年に刊行された『近世庶民史料所在目録』では、「主藤定文書」と「山下小枝文書」の所在が確認されており、竹内が書写した『対馬古文書纂』（史料編纂所架蔵）にも両文書が収録されている。

一方、竹内が「判物写」を比較・対照した結果えられた、豆酸関連の慶長以前の文書所蔵者数は34家、総数は155通にのぼる。そのうち、後に触れる『長崎県史』史料編に収録された文書数は43通で、数字の上では100通以上の文書が収録されていないことになる。この未収録文書数の確定については、実際に判物写から文書をリス

トアップして計上していくことが必要であろう。

表 2-5 竹内理三の「判物写」整理による豆酩地区文書所蔵者目録

所蔵者名	文書数	年代
給人阿比留五郎兵衛	2	元龜 4 - 慶長 2
給人阿比留善吉	11	文明 10 - 慶長 20
給人阿比留弥五右衛門	1	慶長 14
給人岩佐甚吉	3	永正 18
永泉寺	12	応仁 3 - 永正 8
大行事太田利左衛門	2	慶長 2 - 慶長 14
給人久和吉左衛門	4	天文 20 - 天正 14
供僧中	2	文明 13 - 天正 4
軍神神主	1	大永 3
小嶋勘左衛門	3	文明 13 - 天正 15
小嶋金左衛門	1	天正 18
給人小嶋木工兵衛	5	永正 2 - 弘治 2
給人小森喜兵衛	10	文安 4 - 天正 19
小森八郎	3	応永 28 - 延徳 2
耕月庵	2	文明 14 - 天正 13
金剛院	16	応永 17 - 天正 8
権現神主	6	
斎藤太左衛門	3	享祿 4 - 天正 11
主藤格兵衛	1	天正 13
主藤久右衛門	1	天正 9
主藤五郎右衛門	1	天正 18
主藤十左衛門	1	天正 10
主藤善左衛門	3	天正 3 - 天正 18
給人主藤惣左衛門	7	永正 18 - 天正 18
給人主藤伝之助	1	慶長 14
百姓十郎右衛門	9	長祿 2 - 大永 7
住持房	13	永享 10 - 慶長 20
庄司近右衛門	4	天文 23 - 天正 18
下宮神主	5	大永 3 - 慶長 20
大明神神主	1	慶長 14
中村次郎作	1	天正 18
給人山下市郎右衛門	14	文明元 - 慶長 14
給人山下才兵衛	3	慶長 14 - 慶長 19
横山吉十郎	3	永祿 10 - 天正 14

### (3) 国士館大学黒田省三の探訪

国士館大学黒田省三による対馬史料探訪は、全島に渡る悉皆的な調査であり、それは豆酩においても例外ではない。ここに、豆酩関連の所蔵者を挙げると表 2-6 のようになる。

これらの撮影の成果は田代和生によって目録化され、一覧が可能となった。撮影したフィルムを焼き付けた写真帳は、国士館大学図書館と、その焼付を選択購入した東京大学史料編纂所とに架蔵されている。

豆酩の調査に関して特徴的な点は、探訪所蔵者数が多い点である。阿比留家・小森家・主藤寿家・金剛院・岩佐家・本石佐市家の 5 家の文書を撮影している。また撮影状態も比較的良好であり、史料編纂所架蔵『対馬古文書』も基本的には国士館撮影の写真を基本としている。しかし国士館の調査は中世文書を中心としており、探訪

した所蔵者の家に伝えられている近世文書の未だ少なからざる部分が目録化されないままである点は注意が必要である。

表 2-6 国士館大学黒田省三の撮影による所蔵者目録

所蔵者	点数	中世文書
阿比留修家文書	4	康安 2 - 大永 2
小森左京家文書	19	元徳 2 - 慶長 14
主藤寿家文書	65	応永 2 - 慶長 20(宝永 6)
金剛院文書	10	宝徳 2 - 天正 8
岩佐兵部家文書	2	
本石佐市家文書	1	
(久和兵治家文書)	8	永和 3 - 天正 20

### (4) 長崎県立図書館の探訪

国士館大学の探訪とほぼ同時期に行われた長崎図書館の探訪は、戦後の悉皆調査としてはもっとも規模の大きい調査である。国士館の調査が中世文書を中心としたものであったのに対し、長崎図書館の調査は近世文書をも含めた悉皆調査の方針で進められた。

豆酩関連では、多久頭魂神社文書・小森家文書・主藤仁家文書・主藤寿家文書の撮影が行われた。豆酩に限ると、調査対象の所蔵者数自体は他の調査に比べ決して多いとは言えないし、中世文書に関してはおおむね国士館大学撮影の方が撮影状態がよい。だが、例えば主藤寿家文書における文化年間の坪付帳など、現在のところ長崎図書館以外には撮影されていない史料もあり、悉皆調査という点では同館の調査・撮影は貴重な成果であると言える。

### (5) 東京大学史料編纂所の探訪

東京大学史料編纂所の調査は、国士館大学・長崎図書館の調査を受けて開始されたが、交通事情の改善を受け、長期間に渡って調査が行われたという長期構想の点、探訪した所蔵者の文書が悉皆調査・撮影されたという調査精度の点では、これまでにない調査であると評価できる。

豆酩関連では、阿比留家文書(阿比留修氏所蔵)・岩佐家文書(岩佐教治氏所蔵)・主藤文書(主藤仁氏所蔵)・本石文書(本石佐市氏所蔵)が、1978年以降の史料探訪による撮影であり、そのほかに森山恒雄の撮影(1964年)による金剛院文書がある。これらの文書は、国士館・長崎図書館で撮影されたものについても再度撮影が行われているため、国士館・長崎図書館の撮影が良好でない部分についても、史料編纂所撮影分によって補うことができる。また史料編纂所の撮影は近世文書を含めた悉皆的

な調査・撮影であるため、国士館・長崎図書館の未撮影史料も多く撮影されている。

ただし、豆酛地区でもっとも多く文書を所蔵する主藤寿家・多久頭魂神社所蔵大蔵経・金剛院所蔵大般若経については、残念ながら撮影されていない。

## 2 豆酛関係史料の様相

### (1) 豆酛寺関係史料

#### ・多久頭魂神社史料

多久頭魂神社には、いわゆる古文書は存在しないが、中世以来の貴重な資料を所蔵している。經典では、高麗再雕版、いわゆる海印寺版の版本大蔵経を所蔵している。また高麗高宗32年(1245)に鑄造されたと考えられ正平12年(1357)に大蔵経種の追刻銘のある金鼓がある。その他明応2年(1493)の年紀をもつ棟札を所蔵しているということであるが、未見である。

#### ・各供僧家所蔵文書

##### ・主藤寿家所蔵文書(観音住持)

主藤寿家は、「ジュウジ」の屋号をもつ供僧家の一つで、代々観音住持をつとめてきたとされている。もっとも時代の古い文書は応永2年(1395)11月12日の宗貞澄寄進状で、近世まで含めた文書の総数は34通(写を除く)、その他慶長10年(1605)の年紀が確認できる「天道まつりのやくしやの事」、「天道法師縁起」、「天道菩薩由來記」などの記録・典籍類を所蔵する。なお、戦前には史料編纂所が「豆酛文書」として影写本を作成し、戦後は国士館・長崎図書館が調査撮影を行っているが、史料編纂所の写真撮影は行われていない。長崎図書館のみの撮影分としては、宝永2年(1705)10月の豆酛観音堂領坪付帳、文化9年(1812)10月の豆酛郷豆酛村御検地帳などがある。

##### ・本石正久家文書

本石正久家は、「ショウゼン」の屋号を持つ供僧家の一つで、明治以降になってからは多久頭魂神社の宮司を数度務めてきた。現在の当主正久氏も多久頭魂神社の宮司である。文政12年(1829)の年記を持つ権現社の社領を記した坪付帳をはじめ、江戸期の書付類や典籍等を所蔵している。なお現在に至るまで史料の調査・撮影は行われていない。

##### ・本石佐市家文書

本石佐市家は、「ニイドン」の屋号を持つ供僧家の一

つである。大明神社を知行していた地休坊の後裔である。現在同家に残されている文書は、宝永2年(1705)の大明神社坪付帳と同家の系図である。国士館・史料編纂所が調査・撮影を行っている。

##### ・本石一幸家文書

→後述。

##### ・本石直己家文書

本石直己家は、「コウサク」の屋号を持つ供僧家の一つである。現在残っているのは系図と经文類(「観音経秘鍵」「仁王経法則」「千手経化」)である。今回水稻文化研究所によって史料を撮影した。

### (2) 寺院関係史料

#### ・金剛院文書

→後述。

#### ・永泉寺文書

永泉寺は釈迦如来を本尊とする曹洞宗の寺院である。創建年代は明らかではないが、宗盛世を再興の祖としている。応仁2年(1468)4月13日の宗茂與寄進状を上限とする7通の文書が「判物写」中に確認でき、『県史』史料編に翻刻があるが、近代以降の史料調査において同寺文書の所在は未確認である。

### (3) 給人関係史料

#### ・岩佐家文書

岩佐家は、雷神社で現在も執り行われている亀卜神事を司る家柄で、対馬藩では馬廻格であった豆酛在郷の給人のなかではもっとも知行高の大きい家であり、『対馬藩分限帳』(中村正夫監修、安藤良俊・梅野初平編、九州大学出版会、1990年)では知行高1間1尺7寸1分7厘4毛4とされている。所蔵文書に中世にさかのぼる文書はなく、近世宗氏発給の判物と亀卜に関する故実書類である。

#### ・阿比留家文書

阿比留家は寛元4年に宗重尚が滅ぼした阿比留国時の子孫という伝承をもつ家である。江戸期には豆酛在郷の給人で、対馬藩では御馬廻格であった。また豆酛では岩佐家に次いで知行高の大きい家であり、『分限帳』では知行高1間1尺5寸4分4厘1毛54であった。中世文書3通を有している。

#### ・山下家文書

山下家は、嘉吉年間に対馬に渡り豆酛に所領を拝領し

たという伝承をもつ家であり、山下左衛門尉を筑前三笠(御笠)郡の代官に任じた文明元年(1469)8月9日の宗茂興書下がもっとも古い文書である。中世文書としては、平泉澄探訪の「対馬探訪文書」、竹内理三探訪の「対馬古文書」、史料編纂所影写本によって、17通の文書の存在が確認できる。

しかし戦後まで文書の所在が確認できるものの、その後山下家は豆殷を離れたと思われる、現在では文書の所在は不明である。

#### ・小森家文書

小森家は、寛元年間に豆殷に上陸したとの伝説をもつ宗重尚の息盛就を祖とする在郷給人の名家で、対馬藩では御馬廻格であった。『分限帳』では知行高2尺3寸2分3厘3毛76であった。所蔵文書は元徳2年(1330)の妙意裁許状がもっとも古く、慶長以前の中世文書を17通所蔵している。なお1980年の史料編纂所による調査の時点ですでに小森家は豆殷を離れ、大阪府堺市に在住とのことである。

#### ・主藤仁家文書

主藤仁家も対馬藩の在郷給人であった家で、豆殷では主藤寿家に次いで多くの中世文書を所蔵する家である。もっとも古い文書は永正15年(1518)6月30日の主藤家親譲状写であり、慶長以前の文書は重複を除くと19通確認できる。長崎図書館と史料編纂所が調査・撮影を行っている。

## B 早稲田大学水稲文化研究所による史料調査とその成果

### 1 本石一宰家文書

本石一宰家文書の調査は、2003年3月4日・5日の両日にわたって行われた。調査員は、4日は黒田智、宮崎肇、本田佳奈、徳永健太郎、5日は本田、徳永である。櫃以外の文書撮影、目録作成はすべて5日に行った。

#### (1) 本石一宰家について

本石一宰家は、屋号を「サンメ」といい、元供僧家の一つである。「サンメ」の由来については、「ニイドン」(本石佐市家)の弟であった、あるいは京都から下ってきた供僧家の祖先が「三位」だったなどの伝承がある。現在の当主は本石一宰(かずひろ)氏である。

当家文書中、宝永2年(1705)の坪付帳に「神主 来

順房」とある。来順房は、貞享2年(1685)の『八郷神社記』には師大明神社の神主としてその名が見えることから、17世紀にはすでに師大明神社の神主を務めていたことがわかる。また寛文検地帳からは下木庭をかなりの規模で所有していたことがうかがえ、供僧中でも有力な社家であったと思われる。

#### (2) 文書群の伝来と現状

本石一宰家の文書は、木製の櫃に納められている。櫃は蓋裏面に「主藤繁之丞以来」とあり、側面には「明治六<sup>癸酉</sup>十二月日」、反対側面には「主藤氏」と、いずれも墨筆で書かれている。なお、「主藤繁之丞」なる人物は、本石一宰家系図には管見の限り見当たらなかった。

文書群の伝来については、宝永2年の「師神社領坪付帳」を上限とするところから、供僧(社家)の来順房伝来文書であると推定される。

#### (3) 文書群の概要と内容的特色

年代の上限は先述の通り宝永の坪付帳である。それ以降の文書は、書付類に18世紀の文書がみられるものの、ほぼ19世紀以降の文書である。内容としては、江戸期の文書は書付類、経文類である。近代以降の文書は、土地登記関係文書・金銭貸借関係文書、また寺田の所有や赤米神事に関する帳簿類の断簡もみられる。

なお、戦前の学校教科書類や大正期の神官講習関係書類が多数所蔵されているが、今回は調査日程の関係で目録作成および撮影ができなかったことを付言しておく。

#### (4) 調査成果

本石一宰家文書は、すべて近世文書ではあるものの、これまで存在を知られていなかった文書群であり、今回の調査によって文書群の所在とその概要を把握することができた。なかでも宝永2年「師神社領坪付帳」の発見は、他の供僧家所蔵文書と同様、近世豆殷における土地支配のあり方を示す史料として貴重である。

### 2 金剛院文書

#### (1) 金剛院について

金剛院は、豆殷集落の「浜町」に所在し、宗派は高野山真言宗、本尊は阿弥陀如来である。創建年次は未詳で、鎌倉時代、寛元年間のいわゆる「阿比留征伐」の際、宗重尚が当寺に駐留したという伝説もあるが、金剛院文書における初見は「判物写」所収の応永17年(1410)8月6日宗貞茂寄進状である。金剛院には大師堂があり、中

表2-7 本石一幸家文書目録

整理番号	資料名	寸法	丁数	刊写年時	備考
1	系図	24.0×16.0	3		
2	覚		2	正月 日	
3	口上書手控帳	24.8×17.0	57		
4	豆酸郡天道大菩薩咄伝	24.1×16.5	10		
5	改建二付諸書上帳	16.9×24.3	3	安政二乙卯年二月 日	
6	千字文	17.4×24.6	19	文化十三五月	
7	呪咀祭文	24.6×18.3	10	天保十四癸卯年七月	
8	十一面講式	24.2×18.6	19		
9	天神地祇八百万神勧請之祓	24.7×15.8	10		
10	般若心経祭文	24.6×18.1	8	天保十一庚子十一月吉辰	
11	神文并祈願	24.6×17.6	7	天保十一年庚子歳十一月吉日	
12	天道大菩薩咄伝覚	24.6×17.5	13	元禄六～天保十一	
13	(二嶋鎮守者)	22.8×37.1	1		
14	断簡(天道菩薩縁起関係)	24.6×16.5			
15	断簡(祭文関係)	18.4×33.6	1		
16	海隅田舎草紙(内題)	24.6×16.3	58		外題「農家童字訓」
17	仁王経法則	24.7×18.1	10	「正月中旬」	
18	仲中臣祓	24.0×15.6	8		
19	心経	24.5×17.3	13	文化十四丁丑年二月六日	本石宮之丞書写
20	口上手控	24.5×34.4	1	「十月」	本石三位から観音住持円立坊充書状と円立坊から対馬藩寺社奉行所充書状
21	心経秘鍵	29.1×22.6	16	文政三庚辰年九月中旬	
22	断簡(願文カ)	32.5×12.6	1	(文政カ)三庚辰年	
23	豆酸村師大明神社領坪付帳	31.8×22.9	8	宝永二年乙酉十月 日	
24	御郡奉行達	26.7×37.9	1	慶応四年戊辰二月十五日	本石三位充 観音住持次席
25	書状案断簡(前欠)	24.2×22.5	1	「五月三日」「五月四日」	観音住持充本石三位書状と寺社奉行充観音住持書状
26	書付封紙	32.7×23.6	1		「本石左宮」
27	星祭文	26.0×19.6	10	天保十四年癸卯十月吉辰	「本石三位」
28	御書付	23.4×16.5	15	「寛政十二庚申年」「文化八辛未年」	
29	軍大明神建立屋根瓦御備之所々	23.6×15.9	6	「天保三壬辰」「当宮神主三位」	
30	地券状写	23.9×16.5	13	明治初期	
31	年代略記	19.5×13.5	5		
32	借用書	33.2×24.3	1	明治九年八月	
33	手形控	24.5×16.5	11	明治八年乙亥年五月廿六日	
34	厳原藩民政権大属達	26.5×37.7	1	明治四年辛未六月十三日	
35	土地登記申請書	27.5×19.9	2	「大正二年三月八日」	
36	断簡(坊主成関係書類カ)	17.6×16.7	1	明治期カ	
37	経典(「神祇講式カ」断簡)		3		
38	手習学文		—		
39	弁慶状		—		
40	今川了俊		—		
41	高貴往来		—		
42	風月往来		—		
43	年代略記		—		
44	手控		—		
45	図面		5枚		
46	雷神社基本財産現金出納簿		—		
47	崇敬者戸数異動ニ付御届		—	大正九年一月廿八日「本石三次郎」	
48	原稿断簡(「頼朝ヲ論ズ」)		1		
49	神職養成教習卒業証写		1	大正四年三月一日「本石三次郎」	
50	神職養成教習卒業証写		1	大正四年三月一日「本石三次郎」	
51	皇典講究所學階証・社掌推薦書写		3	大正九年	
52	高御魂神社社掌補任状		1	大正十年一月十二日	
53	師殿神社・雷神社・天神神社社掌補任状		1	大正四年十一月二十九日	
54	覚		1	明治八年正月廿六日	
55	口上覚		1	五月三日	
56	口上覚(後欠)		1		
57	御幣ノ大事		1		
58	垢離ノ大事		1		
59	帳簿断簡		—		
60	帳簿断簡		—		

世には「事俣大師堂」と呼ばれていた。事俣大師堂に関する寄進が金剛院に発給されている点などから考えるに、おそらく当時から、金剛院と大師堂とは一体の寺院であるという認識がなされていたと考えられる。

3月21日の縁日は「オダイシサマ」と呼ばれる大師堂のご開帳が行われ、以前には豆酏のみならず近隣の村々からも人々が集まり、盛大に行われていたという。

## (2) 文書群の伝来と現状

「判物写」所収の応永17年8月6日の宗貞茂寄進状は、国史館・史料編纂所の調査時点ですでに金剛院文書中に確認できなくなっており、もっとも年次の古い文書は永享9年の付年号のある10月21日宗盛世書下（寄進状）である。以下、宗氏発給による書下が18通、同じく宗氏発給書状1通の19通が中世文書として伝来している。それらは近世の宗氏発給文書とともに御判物箱に収納されていた。近世以降の判物及び典籍類については、吉田正高氏執筆部分を参照のこと。

## (3) 文書群の概要と内容的特色

金剛院文書の中世文書は、すべて宗氏発給文書である。対馬における中世文書残存の仕方からみれば、一般的傾向である。内容はほぼ所領関係で占められているが、下人に関する記載もみられる。

## (4) 金剛院所蔵大般若経について

金剛院には、古版本の大般若経が所蔵されている。この大般若経は高麗版大蔵経の一部である。高麗の顕宗～文宗の代に製作された大蔵経の版本がモンゴルの侵入によって失われた後、高宗（1214～1259在位）の1236年から1252年のあいだに彫造された、いわゆる再彫版といわ

れるものである。この大般若経の刊記には、「戊戌歳高麗国大蔵都監奉 勅彫造」といった刊記が確認できる。版本はその後慶尚北道の海印寺に移され、海印寺版とも言われており、現在では世界遺産に登録されている。

この大般若経には、高麗王朝の高官であった「前正順大夫・千牛衛上護軍 崔文度」が高麗天和寺に寄進した際に記されたとされる元統2年（1334）・至元4年（1338）の識語、天和寺の「天和寺大蔵」朱印、年月日など詳細は未詳だが1311年以前と思われる「鄭氏」「金瑄」の名を記した印出の奥書、この大般若経を対馬に招請した際の「大檀那宗刑部少輔貞盛」の奥書、それから江戸期、天和2年（1682）の修理奥書、これら四種の奥書と一つの蔵書印の存在が確認できる。以下、それらの文言を記す。

### 〔識語〕

先考光陽崔文簡公諱誠之与先妣馬韓国大夫人金氏同発願許造一大蔵事、巨未就而相次下世文度泣血繼述奉、已置、先公所営天和禪寺恭願

三宝証明功德者元統二年甲戌六月日男前正順大夫・千牛衛上護軍崔文度謹識【219巻末】

### 〔識語〕

先考光陽君崔文簡公諱誠之與先妣馬韓国大夫人〔金氏〕同発願許造一大蔵経事、巨未就而相次下世文度泣血繼述奉、已栖置 先公所営天和禪寺恭願

三宝証明均資

恩有者至元四年戊寅七月 日男前正順大夫・千牛衛上護

表 2-8 金剛院中世文書目録

新文書番号	文書名	和暦	西暦	差出	宛所	寸法
1	宗盛世書下（寄進状）	永享9年10月21日	1437/01/21	盛世（花押）	金剛院	14.5×43.0
2	宗貞盛書下	宝徳2年2月23日	1450/02/23	貞盛（花押）	金剛院	25.7×40.6
3	宗貞盛書下（寄進状）	宝徳3年10月17日	1451/10/17	貞盛（花押）	金剛院	27.0×42.0
4	宗茂世書下（知行充行状）	寛正3年2月6日	1462/02/06	茂世（花押）	酸豆大師堂 金剛院	25.2×39.1
5	宗成職書下（寄進状）	寛正3年6月29日	1462/06/29	成職（花押）	金剛院	26.5×42.8
6	宗盛貞書下（坪付充行状）	文明元年10月18日	1469/10/18	盛貞（花押）	大師堂 金剛院	23.6×64.8
7	宗盛貞書下（知行充行状）	文明8年3月28日	1476/03/28	盛貞	金剛院	12.7×57.5
8	宗盛貞書下（知行充行状）	文明8年4月7日	1476/04/07	盛貞（花押）	金剛院	26.6×42.4
9	宗義盛書下（寄進状）	永正16年10月3日	1519/10/03	義盛（花押）	金剛院	31.9×45.9
10	宗義盛書下（知行充行状）	永正16年10月3日	1519/10/03	義盛（花押）	金剛院	32.7×46.2
11	宗盛頭書下（知行充行状）	永正18年7月17日	1521/07/17	盛頭（花押）	金剛院 御同宿御中	26.3×39.9
12	宗盛長書下（知行充行状）	大永2年4月15日	1522/04/15	盛長（花押）	金剛院	42.3×28.9
13	宗盛頭書下（知行充行状）	大永3年10月7日	1523/10/07	盛頭（花押）	事俣大師堂	27.6×39.6
14	宗義調書下（知行充行状）	永禄9年12月23日	1566/12/23	義調（花押）	金剛院	27.7×40.7
15	宗昭景書下（坪付充行状）	天正8年10月17日	1580/10/17	昭景（花押）	金剛院当主	28.6×43.7
16	（宗昭景カ）書下（断簡）（坪付充行状）	天正11年	1583/ /	（宗昭景カ）		22.0×32.8
17	宗盛賢書状	卯月28日	/04/28	盛賢	金剛院御同宿御中	27.0×38.6



表2-9 金剛院所蔵大般若経目録（黒田智氏作成）

箱	整理番号	巻数	丁数	出版年代	蔵書印	奥書・端裏の有無
大般若経 1	大般若1- 1	2	?	後欠		
大般若経 1	大般若1- 2	3		丁酉		
大般若経 1	大般若1- 3	7	26	丁酉		
大般若経 1	大般若1- 4	17	25	丁酉		
大般若経 1	大般若1- 5	22		丁酉		
大般若経 1	大般若1- 6	25	24	開ケズ		
大般若経 1	大般若1- 7	28	26	丁酉		丁酉歳…
大般若経 1	大般若1- 8	29	27	丁酉		
大般若経 1	大般若1- 9	34	25	丁酉		
大般若経 1	大般若1-10	99	断簡			
大般若経 1	大般若1-11	52	28	丁酉		
大般若経 1	大般若1-12	54	26	丁酉		
大般若経 1	大般若1-13	57	25	丁酉		
大般若経 1	大般若1-14	58		丁酉	天和寺大蔵（朱印）	
大般若経 1	大般若1-15	59	25	丁酉		
大般若経 1	大般若1-16	65	28	丁酉		
大般若経 1	大般若1-17	76	断簡			
大般若経 1	大般若1-18	77	24	丁酉		
大般若経 1	大般若1-19	84	24	丁酉		
大般若経 1	大般若1-20	88	24	丁酉		
大般若経 1	大般若1-21	98	開ケズ			
大般若経 1	大般若1-22	104	23	戊戌		
大般若経 1	大般若1-23	105	23	戊戌		
大般若経 1	大般若1-24	108	23	戊戌歳高麗國大蔵都監奉勅雕造		
大般若経 1	大般若1-25	114	22	?		
大般若経 1	大般若1-26	115		戊戌		
大般若経 1	大般若1-27	116	23	戊戌		
大般若経 1	大般若1-28	117	23	戊戌		
大般若経 1	大般若1-29	118	22帳	戊戌		
大般若経 1	大般若1-30	120	断簡	?		
大般若経 1	大般若1-31	123	17	?		※端裏あり
大般若経 1	大般若1-32	127	断簡	?		
大般若経 1	大般若1-33	130	24	戊戌		※貞盛
大般若経 1	大般若1-34	147	23	戊戌		
大般若経 1	大般若1-35	149	23	戊戌		
大般若経 1	大般若1-36	124	断簡			
大般若経 2	大般若2- 1	151	24	戊戌		
大般若経 2	大般若2- 2	152	25	戊戌		
大般若経 2	大般若2- 3	156	23			
大般若経 2	大般若2- 4	157	22	戊戌		
大般若経 2	大般若2- 5	159	25	戊戌		
大般若経 2	大般若2- 6	160	21帳	戊戌		※貞盛あり
大般若経 2	大般若2- 7	161	27	戊戌		
大般若経 2	大般若2- 8	166	25	戊戌		
大般若経 2	大般若2- 9	169	27	戊戌		
大般若経 2	大般若2-10	170	24	戊戌		
大般若経 2	大般若2-11	172	24	戊戌		
大般若経 2	大般若2-12	173		戊戌		
大般若経 2	大般若2-13	174	24	戊戌		
大般若経 2	大般若2-14	176	24	戊戌		
大般若経 2	大般若2-15	185	24	戊戌		
大般若経 2	大般若2-16	187	24	戊戌		
大般若経 2	大般若2-17	193	22	戊戌	天和寺大蔵（朱印）	
大般若経 2	大般若2-18	198	27	戊戌		
大般若経 2	大般若2-19	199	25	戊戌		
大般若経 2	大般若2-20	200	開ケズ			
大般若経 2	大般若2-21	201	24	戊戌		※
大般若経 2	大般若2-22	205	25	戊戌		
大般若経 2	大般若2-23	207	開ケズ			
大般若経 2	大般若2-24	211	27	戊戌		※
大般若経 2	大般若2-25	212	27	戊戌	天和寺大蔵（朱印）	
大般若経 2	大般若2-26	214	24	戊戌		
大般若経 2	大般若2-27	218	開ケズ	戊戌	天和寺大蔵（朱印）	
大般若経 2	大般若2-28	219		戊戌	天和寺大蔵（朱印）	※奥書あり

大般若経 2	大般若2-29	223	23	戊戌		
大般若経 2	大般若2-30	224	23	戊戌		
大般若経 2	大般若2-31	226	23	戊戌		
大般若経 2	大般若2-32	227	23	戊戌		
大般若経 2	大般若2-33	229	26	戊戌		
大般若経 2	大般若2-34	230		後欠		
大般若経 2	大般若2-35	240	23	戊戌		
大般若経 3	大般若3- 1	252	26	戊戌		
大般若経 3	大般若3- 2	280	断簡	戊戌	天和寺大蔵（朱印）	
大般若経 3	大般若3- 3	257	23	丁酉		
大般若経 3	大般若3- 4	258	24	戊戌		
大般若経 3	大般若3- 5	259		戊戌		※？
大般若経 3	大般若3- 6	265	23帳	戊戌	天和寺大蔵（朱印）	※？
大般若経 3	大般若3- 7	266	26帳	戊戌	（盧禪）	
大般若経 3	大般若3- 8	268	24	戊戌		
大般若経 3	大般若3- 9	270	23	戊戌		
大般若経 3	大般若3-10	271	24帳	戊戌		※奥書あり
大般若経 3	大般若3-11	273	23	戊戌		
大般若経 3	大般若3-12	277	26	戊戌	天和寺大蔵（朱印）	
大般若経 3	大般若3-13	284	27	戊戌		※端裏あり
大般若経 3	大般若3-14	285	24帳	戊戌		
大般若経 3	大般若3-15	288	22	戊戌		
大般若経 3	大般若3-16	290	21	戊戌		
大般若経 3	大般若3-17	295	表紙のみ			
大般若経 3	大般若3-18	299	21	戊戌		
大般若経 3	大般若3-19	306	断簡	？		
大般若経 3	大般若3-20	307	26	戊戌		
大般若経 3	大般若3-21	309	開ケズ			
大般若経 3	大般若3-22	311	24	戊戌		
大般若経 3	大般若3-23	317	25	戊戌		
大般若経 3	大般若3-24	320	27	戊戌		
大般若経 3	大般若3-25	323	断簡			
大般若経 3	大般若3-26	332	断簡			
大般若経 3	大般若3-27	335	26	戊戌		
大般若経 3	大般若3-28	336	24	戊戌		
大般若経 3	大般若3-29	344	25	戊戌		
大般若経 3	大般若3-30	345	表紙のみ			
大般若経 3	大般若3-31	346	26	戊戌	天和寺大蔵（朱印）	
大般若経 3	大般若3-32	349	25	戊戌		
大般若経 3	大般若3-33	342	断簡	？		
大般若経 3	大般若3-34	253	開ケズ			
大般若経 4	大般若4- 1	360	開ケズ			
大般若経 4	大般若4- 2	361	開ケズ			
大般若経 4	大般若4- 3	366	23	戊戌		
大般若経 4	大般若4- 4	367	開ケズ			367番の題箭が表紙に付着
大般若経 4	大般若4- 5	374	27	戊戌		
大般若経 4	大般若4- 6	376	25	戊戌		
大般若経 4	大般若4- 7	383	25	戊戌		
大般若経 4	大般若4- 8	393	26	戊戌		
大般若経 4	大般若4- 9	397	26	戊戌		※端裏あり
大般若経 4	大般若4-10	404	26	戊戌		
大般若経 4	大般若4-11	409	25	戊戌		
大般若経 4	大般若4-12	415	25	戊戌		
大般若経 4	大般若4-13	419	25	戊戌		
大般若経 4	大般若4-14	427	25	戊戌		
大般若経 4	大般若4-15	428	24	戊戌		
大般若経 4	大般若4-16	433	24	戊戌		
大般若経 4	大般若4-17	435	25	戊戌	天和寺大蔵（朱印）	
大般若経 4	大般若4-18	437	断簡	？		
大般若経 4	大般若4-19	440	断簡	？		
大般若経 4	大般若4-20	441	25	戊戌		※奥あり
大般若経 4	大般若4-21	442	開ケズ			
大般若経 4	大般若4-22	443	断簡	？		
大般若経 4	大般若4-23	444	断簡	？		
大般若経 4	大般若4-24	446	25	戊戌		

大般若経 4	大般若4-25	447	25	戊戌		
大般若経 4	大般若4-26	458	25	戊戌		
大般若経 4	大般若4-27	467	25	戊戌		
大般若経 4	大般若4-28	469	25	戊戌		
大般若経 4	大般若4-29	470	26	戊戌		
大般若経 4	大般若4-30	472	25	戊戌		
大般若経 4	大般若4-31	475	25	戊戌		
大般若経 4	大般若4-32	478	28	戊戌		
大般若経 4	大般若4-33	479	27	戊戌		
大般若経 4	大般若4-34	484	開ケズ			
大般若経 4	大般若4-35	497	開ケズ			
大般若経 4	大般若4-36	416	題箭のみ			封筒に収納
大般若経 5	大般若5-1	501	24	?		
大般若経 5	大般若5-2	504	28	戊戌		
大般若経 5	大般若5-3	505	27	戊戌		
大般若経 5	大般若5-4	513	27	戊戌		
大般若経 5	大般若5-5	515	27	己亥		
大般若経 5	大般若5-6	520	27	戊戌		
大般若経 5	大般若5-7	525	29	己亥		
大般若経 5	大般若5-8	530	開ケズ	己亥		
大般若経 5	大般若5-9	535	24	戊戌		
大般若経 5	大般若5-10	537	断簡	?	天和寺大蔵（朱印）	
大般若経 5	大般若5-11	546	28	己亥		
大般若経 5	大般若5-12	548	26	己亥		
大般若経 5	大般若5-13	549	26	己亥		
大般若経 5	大般若5-14	551	断簡			
大般若経 5	大般若5-15	554	31帳	庚子		
大般若経 5	大般若5-16	558	26帳	己亥		
大般若経 5	大般若5-17	561		己亥	天和寺大蔵（朱印）	※
大般若経 5	大般若5-18	562			天和寺大蔵（朱印）	
大般若経 5	大般若5-19	568	開ケズ			
大般若経 5	大般若5-20	575		己亥	天和寺大蔵（朱印）	
大般若経 5	大般若5-21	578	25	己亥	天和寺大蔵（朱印）	※奥書あり
大般若経 5	大般若5-22	580	24	庚子	天和寺大蔵（朱印）	
大般若経 5	大般若5-23	582	27	己亥		
大般若経 5	大般若5-24	583	23	己亥	天和寺大蔵（朱印）	
大般若経 5	大般若5-25	593	26	己亥		
大般若経 5	大般若5-26	剥落片	—	—	—	「三百□」の題箭あり
—	なし	44	28	丁酉		
—	なし	157	24	戊戌		

軍文度謹識【578巻末】

〔奥書〕

下韓国大夫人鄭 氏印出

同願鶏林君金 琿【441巻末】

〔招来奥書〕

大檀那宗刑部少輔貞盛

院主良覚 願主良蔵【160巻末】

〔修理奥書〕

国主宗義真様御代修復

〈于肯〉天和二壬戌二月日 院主快春房 栄山代【201巻末】

〔修理奥書〕

延宝〈丙辰〉大師堂再建立

同寺丑年御建立

天和二〈癸戌〉大般若六百巻巻部修復

御絵十二天廿七幅修復【211巻末】

なお、ここで識語を記している崔文度（1292～1345）は、字を義民といい、高麗の僉議評理にまで昇進し、諡を良敬とする、高麗王朝の高官である。なお父は、「光陽君崔文簡公」の崔誠之である（朝鮮史編修会『朝鮮史』高麗忠穆王二年六月一日条、『高麗史』巻一〇八列伝二一崔誠之の附文度）。また印出奥書の金琿（1239～1311）は、同じく高麗王朝の「鶏林君」であり、父は金慶孫（『朝鮮史』高麗忠宣王四年九月十日条、『高麗史』巻一

○三列伝一六金慶孫附傳)。

金剛院大般若經のなかには、現在多久頭魂神社に所蔵されている国指定重要文化財の海印寺版大蔵經の首部が存在しているという指摘もある(黒田省三「対馬古文書保存についての私見」)。だが金剛院所蔵の大般若經には、多久頭魂神社所蔵の大蔵經には確認されていない識語や「天和寺大蔵」の朱印が含まれており、多久頭魂神社所蔵の大蔵經とはおそらく伝来経路を異にするものと思われる。

#### (5) 水稻文化研究所による整理

水稻文化研究所では、地域への具体的な文化的還元活動として、金剛院文書の整理を行った。詳しくは吉田正高氏執筆部分を参照のこと。

### 3 寛文二年豆殿村検地帳

対馬藩の「寛文の改革」とも称される大浦權大夫による藩政改革の中核として、対馬藩においても地方知行制が廃止され、蔵米知行制が実施された。その前提として、万治から寛文年間に対馬全土にわたる検地が行われた。この時作成され、その後の年貢収取の基本台帳となったのが、標題の検地帳である。

この検地帳は明治に入り、他村の検地帳とともに対馬藩庁から長崎県の対馬島庁に移管、保管されていたと考えられ、宮本常一によれば島庁文書として認識されている。その後1979年にいたり、対馬町村会の対馬島庁文書として厳原歴史民俗資料館に寄贈され、現在に至っている。今回水稻文化研究所では、この検地帳を撮影、翻刻した。

### 4 内山家文書

#### (1) 内山家について

内山氏は宗助国の弟盛就を祖とし、14世紀以来内山村をはじめとする与良郡に所領を持っていた有力な一族であった。近世対馬藩においては府中に在住し、『対馬藩分限帳』によると石高二百石の馬廻の家格であった。明治以降も厳原町に在住したが、第二次大戦後、厳原を離れたようである。

#### (2) 内山家文書の伝来と現状

内山家文書は戦後原本の所在が不明となり、現在ではこれまでに作成された影写本などでしか見ることができない状態である。

まず判物写類では、『長崎県史』史料編一に、「御馬廻」

内山清右衛門所持分として12通が収録されている。また東京大学史料編纂所には、当時東京帝国大学講師であった平泉澄による謄写本『対馬採訪文書』(1918年)、同編纂所によって1922年に作成された影写本『内山文書』が架蔵されている。

一方、九州帝国大学教授であった長沼賢海は1936年に対馬の古文書を調査し、内山家文書については卷子仕立ての影写本を作成した。長沼賢海所蔵の資料は、戦後九州大学に設置された九州文化史研究所に一括して移管され、内山家文書影写本も現在では同研究所が所蔵している。本報告書で翻刻した内山家文書の底本は、同研究所所蔵の影写本を翻刻したものである。

#### (3) 文書群の概要と内容的特色

九州文化史研究所所蔵の影写本内山家文書は、文書総数が115通であり、その大半を14世紀の中世文書が占めている。なお、同研究所作成の文書目録には脱漏があるので、利用の際には注意されたい。

内容としては、坪付・譲状など所領関係文書が多い。宗氏当主発給による書下も多いが、近世以降の対馬藩主による知行安堵の判物は存在しない。豆殿に関しては、南北朝期の内山と豆殿の木庭相論に関係する文書が目目される。

最後になったが、翻刻を許可された九州文化史研究所のご理解・ご協力に感謝申し上げたい。

### 5 長崎県立厳原歴史民俗資料館所蔵宗家文庫

宗家文庫は対馬藩の記録類が大量に残され、そのうち記録類に関しては長年の調査によって目録が作成されているが、今回の調査では、その目録の中から寺社調査に関する史料の豆殿該当部分、諸家関係史料、および豆殿地域の支配に関する史料を調査・撮影した。

寺社関係史料については、対馬藩によって調査・作成された「八郷寺社記」などの記録類について、豆殿関連部分を調査・撮影した。なお、鈴木裳三の翻刻による「対州神社誌」(『神道大系』対馬国編に所収)には、対馬の神社の基本的な概要が説明されている。

諸家関係史料については、対馬藩が作成した判物写や、藩に提出された系図類のうち、豆殿に関係する箇所を選んで調査した。この中でも近代になってから作成された「御旧判控」(記録類Ⅱ-御判物-A 判物-98)は、現在見ることのできない数多くの文書類を収録しており、注目

すべき史料である。

豆酛地域の支配に関する史料は、すでに述べた検地帳や物成帳など、対馬藩の支配に関わる史料を調査・撮影した。

## 6 その他

長崎図書館では、対馬古文書の写真帳のほか、近代以降に行政的な要請で作成された地誌類・絵図類を所蔵している。今回の調査では、明治のごく初期と考えられる豆酛村絵図などの史料を調査・撮影した。

九州大学九州文化史研究所では、内山家文書のほか、豆酛地域の木庭相論をめぐる史料を調査・撮影した。

また厳原にある法務省長崎地方法務局厳原支局では、明治初期に作成された地籍図を調査した。これら絵図類の調査による成果は、本報告書所収の「対馬豆酛の景観復原」（堀祥岳）ならびに報告書掲載の各種地図（同氏作成）、「対馬豆酛の村落景観と祝祭空間」（黒田智）を参照いただきたい。

## 【主要参考文献】

- 黒田省三「対馬古文書保存についての私見」（『人文学会紀要』1号、1969年）
- 斎藤忠編『高麗寺院史料集成』（大正大学総合仏教研究所、1997年）
- 城田吉六『赤米伝承—対馬豆酛村の民俗』（葦書房、1987年）
- 竹内理三「対馬の古文書—慶長以前の御判物一」（『九州文化史研究所紀要』1、1951年）
- 田代和生編『対馬古文書目録』（『対馬風土記』12号別冊、1975年）
- 東京大学史料編纂所『東京大学史料編纂所所報』
- 東京大学史料編纂所編 昭和55年度科学研究費補助金（一般研究C）研究成果報告書『前近代対外関係史の総合的研究』（課題番号451064）
- 毎日新聞社編・文化庁監修『国宝・重要文化財大全』7書籍上巻（毎日新聞社、1998年）
- 山本信吉「対馬の経典と文書」（『仏教芸術』95、1974年）

## 〔対馬豆酛関係史料一覧〕凡例

- ・この目録は、早稲田大学水稲文化研究所による豆酛調査によって収集した史料の一覧である。
- ・史料の収集範囲は、中世に関しては「対馬中世文書の現在」添付の表にもとづく。近世に関しては、長崎県立対馬歴史民俗史料館および同館所蔵宗家文庫、九州大学九州文化史研究所、長崎県立長崎図書館および、豆酛地区において調査対象となった史料所蔵者である。
- ・項目に関して、「所蔵細目」は、「判物写」など1点の資料中に複数の文書が含まれている場合の出典を記した。なお、原則として中世文書および近世藩主発給の判物類のみ、1点の資料中から複数の文書を採録しており、近世文書の綴り・控の類は1点の史料として採録した。
- ・特に中世文書の所蔵者に関しては、「対馬中世文書の現在」所収の「対馬古文書所蔵者目録」を参照されたい。
- ・この表の作成は黒田智・徳永健太郎、校訂は徳永健太郎である。凡例は徳永が執筆した。

表 2-10 対馬豆殷関係史料一覧（徳永健太郎・黒田智氏作成）

番号	文書名	差出	宛所	和暦	西暦	所蔵者名	所蔵細目
1	妙意施行状	妙意花押	兵衛太郎	正応2年3月10日	128903010	嶋尾成一文書	
2	妙意殿許状	妙意花押	宗馬弥次郎入道	元徳2年8月28日	133000828	小森文書	
3	豆殷郎司馬房等連署請文	つゝのくしみつふさ		建武5年10月10日	133810010	内山文書	
4	妙意知行宛行状	妙意花押	兵衛太郎	康永4年9月6日	134509006	嶋尾成一文書	
5	しんへう申状案	たうかく		正平9年壬子月 日	135410599	内山文書	
6	なりみつ等連署起請文	なりみつ		正平9年11月5日	135411005	島居蔵文書	
7	宗宗香書下写	宗香花押	惣宮司	康安2年4月11日	136204011	下津八幡宮文書	
8	坪付宛行状	たうかく	い郎ひやうへ	康安2年5月20日	136205021	阿比留修文書	
9	きやうふ太郎等連署起請文	きやうふ太郎		康安2年8月11日	136208011	島居岩男文書	
10	つねふさ鑑状案	つゝのこほりのくしみつふさ	御房との	貞治6年7月5日	136807005	小森文書	
11	いあみたふ鑑状	いあみたふ花押	みつあい	正平25年9月12日	137009012	内山文書	
12	いあみたふ鑑状	いあみたふ花押	三らう	正平25年9月12日	137009012	内山文書	
13	たねうち鑑状写	たねうち		明德元年11月13日	139011013	内山文書	
14	宗貞澄寄進状	貞澄花押	円智	応永24年11月12日	139511012	主藤寿文書	
15	宗貞澄寄進状写	貞澄花押	円智	応永24年11月12日	139511012	主藤寿文書	
16	某書下		宗十郎	応永11年12月	140412099	小森文書	
17	宗貞茂書状写	貞茂御判	宗掃郎助	応永14年4月7日	140704007	宗家文書	
18	宗貞茂書下（寄進状）	貞茂花押	大師堂方丈	応永17年8月6日	141008006	金剛院文書	
19	宗貞盛書下	貞盛花押	宗左京亮	応永28年10月10日	142110010	小森文書	
20	宗貞盛書下写	貞盛御判	宗弥六	永享2年6月 日	143006099	宗家文書	
21	宗盛世書下写	盛世御判	宗合坊	永享8年12月13日	143612013	宗家文書	
22	宗盛世書下写	盛世御判	宗合坊	（永享8年）12月13日	143612013	宗家文書	
23	宗盛世書下（寄進状）	盛世花押	金剛院	永享9年10月21日	143710021	金剛院文書	
24	宗盛職書下	盛職花押	円知坊	永享10年5月7日	143805007	主藤寿文書	
25	宗盛職書下写	盛職花押	円知坊	永享10年5月7日	143805007	主藤寿文書	
26	宗貞盛書下	貞盛花押	円知坊	永享10年5月20日	143805020	主藤寿文書	
27	宗貞盛書下写	貞盛花押	円知坊	永享10年5月20日	143805020	主藤寿文書	
28	宗貞盛書下写	貞盛御判	殿豆住持円知御坊	永享10年5月20日	143805020	宗家文書	御旧判控（記録類Ⅱ-御判物-A判物-98）
29	寄進状	盛世花押		永享12年4月10日	144004010	主藤寿文書	
30	折願文	盛願花押	円貴	永享12年7月21日	144007021	主藤寿文書	
31	折願文写	盛願花押	円貴	永享12年7月21日	144007021	主藤寿文書	
32	宗貞盛名字宛行状	貞盛花押	宗左京亮	文安4年12月18日	144712018	小森文書	
33	鑑状			文安5年7月18日	144907018	阿比留修文書	
34	宗貞盛書下	貞盛花押	金剛院	宝徳2年2月23日	145002023	金剛院文書	
35	宗貞盛書下	貞盛花押	斎藤新三郎	宝徳2年4月11日	145004011	宗家文書	
36	宗貞盛書下（寄進状）	貞盛花押	金剛院	宝徳3年10月17日	145110017	金剛院文書	
37	宗貞盛書下	貞盛花押	宗肥前守	宝徳3年11月16日	145111016	小森文書	
38	宗成職書下	成職花押	円知坊	長祿2年11月7日	145811007	主藤寿文書	
39	宗成職書下写	成職花押	円知坊	長祿2年11月7日	145811007	主藤寿文書	
40	宗成職書下写	成職御判	殿豆住持円知御坊	長祿2年11月7日	145811007	宗家文書	対州八郎寺社判物帳（記録類Ⅱ-御判物-A判物-32）
41	宗成職書下写	成職御判	宗さへもんせう	長祿3年6月1日	145906001	宗家文書	
42	宗盛直書下	盛直花押	守芳坊	長祿4年4月23日	146004023	永泉寺文書	
43	宗茂世書下	茂世花押	豆殷大師堂金剛院	寛正3年2月6日	146202006	金剛院文書	
44	宗成職書下（寄進状）	成職花押	金剛院	寛正3年6月29日	146206029	金剛院文書	
45	宗成職書下（寄進状）	成職	金剛院	寛正4年3月17日	146303017	金剛院文書	
46	宗茂興書下	茂興花押	ふんきほう	文正2年9月16日	146709016	主藤寿文書	
47	宗茂興書下	茂興花押	永泉寺	応仁2年4月13日	146804013	永泉寺文書	
48	宗茂興書下（寄進状）	茂興花押	永泉寺	応仁2年4月13日	146804013	永泉寺文書	
49	宗茂興書下（寄進状）	茂興花押		応仁2年4月13日	146804013	永泉寺文書	
50	宗茂興書下	茂興花押	山下左衛門助	文明元年8月9日	146908009	山下文書	
51	宗盛貞書下（坪付宛行状）	盛貞花押	大師堂金剛院	文明元年10月18日	146910018	金剛院文書	
52	宗貞国書下写	貞国御判	宗中齋少輔	文明3年11月15日	147111015	宗家文書	
53	宗貞国書下	貞国花押	殿豆住持	文明6年2月9日	147402009	主藤寿文書	
54	宗貞国書下写	貞国花押	殿豆住持	文明6年2月9日	147402009	主藤寿文書	
55	宗盛貞書下（寄進状）	盛貞花押	永泉寺	文明6年3月6日	147403006	永泉寺文書	
56	国吉書下	国吉花押	住持房	文明7年2月18日	147502018	主藤寿文書	
57	宗国吉書下	国吉花押	住持房	文明7年2月18日	147502018	主藤寿文書	
58	宗盛貞書下	盛貞	金剛院	文明8年3月28日	147603028	金剛院文書	
59	宗盛貞書下	盛貞花押	金剛院	文明8年4月7日	147604007	金剛院文書	
60	宗茂興書下	茂興花押	殿豆住持房	文明8年12月25日	147612025	嶋尾成一文書	
61	宗貞国書下	貞国花押	住持房	文明8年12月25日	147612025	主藤寿文書	
62	宗貞国書下	貞国花押	円喜坊	文明9年10月26日	147710026	主藤寿文書	
63	宗貞国書下写	貞国花押	円喜坊	文明9年10月26日	147710026	主藤寿文書	
64	宗貞国書下	貞国花押	円喜坊	文明9年10月26日	147710026	主藤寿文書	
65	宗貞国書下写	貞国花押	円喜坊	文明9年10月26日	147710026	主藤寿文書	
66	宗貞国書下写	貞国御判	殿豆住持円喜坊	文明9年10月26日	147710026	宗家文書	御旧判控（記録類Ⅱ-御判物-A判物-98）
67	宗貞国書下写	貞国御判	殿豆住持円喜坊	文明9年10月26日	147710026	宗家文書	御旧判控（記録類Ⅱ-御判物-A判物-98）
68	宗貞国書下写	貞国御判	殿豆住持円喜御坊	文明9年10月26日	147710026	宗家文書	対州八郎寺社判物帳（記録類Ⅱ-御判物-A判物-32）
69	本実寄進状	さたすミ御け本実	永泉寺	文明11年6月27日	147906027	永泉寺文書	
70	宗貞秀書下写	貞秀判	小嶋太郎左衛門尉	文明13年2月23日	148102023	宗家文書	御旧判控（記録類Ⅱ-御判物-A判物-98）
71	宗貞秀書下	貞秀花押	住持房	文明13年8月10日	148108010	主藤寿文書	
72	宗貞秀書下写	宗出羽守貞秀判	殿豆住持御坊	文明13年8月10日	148108010	宗家文書	御旧判控（記録類Ⅱ-御判物-A判物-98）
73	宗貞秀書下	宗出羽守貞秀花押	永泉寺侍者	文明14年5月13日	148205013	永泉寺文書	
74	宗貞秀知行安堵状	貞秀花押	耕月庵侍者禪師	文明14年7月2日	148207002	梅野喜一郎文書	
75	宗茂勝知行安堵状	貞秀花押	耕月庵侍者禪師	文明16年12月24日	148412024	梅野喜一郎文書	
76	宗貞国名字宛行状	貞国花押	延徳2年11月15日	149011015	小森文書		
77	宗盛順加冠並一書出	盛順花押	宗宮房丸	文龜3年8月16日	150308016	小森文書	
78	宗盛順名字宛行状	盛順御判	小嶋小房丸	永正2年12月11日	150512011	宗家文書	御旧判控（記録類Ⅱ-御判物-A判物-98）
79	主藤武蔵守家親鑑状写	主藤家親	二人子宛	永正15年6月30日	151806030	主藤仁文書	
80	主藤家親鑑状	主藤家親	二人宛	永正15年6月30日	151806030	主藤仁文書	御旧判写
81	宗義盛書下	義盛花押	円喜坊	永正15年9月6日	151809006	主藤寿文書	

82	宗義盛書下写	義盛花押	円喜坊	永正15年9月6日	151809006	主藤寿文書	
83	宗義盛書下写	義盛御判	殷豆住持円喜坊	永正15年9月6日	151809006	宗家文書	御旧判控(記録類Ⅱ-御判物-A判物-98)
84	宗義盛書下写	義盛御判	殷豆住持円喜坊	永正15年9月6日	151809006	宗家文書	対州八郡寺社判物帳(記録類Ⅱ-御判物-A判物-32)
85	宗義盛書下写	宗義親	主藤監物・面房丸	永正16年8月30日	151908030	主藤仁文書	
86	宗義盛書下写	宗義親	主藤監物・面房丸	永正16年8月30日	151908030	主藤仁文書	御旧判写
87	宗義盛書下写	義盛花押	金剛院	永正16年10月3日	151910003	金剛院文書	
88	宗義盛書下(寄進状)	義盛花押	金剛院	永正16年10月3日	151910003	金剛院文書	
89	宗義盛書下	盛長花押	円喜坊	永正18年6月30日	152106030	主藤寿文書	
90	宗義盛書下写	盛長花押	円喜坊	永正18年6月30日	152106030	主藤寿文書	
91	宗義盛書下写	盛長御判	殷豆住持円喜御坊	永正18年6月30日	152106030	宗家文書	御旧判控(記録類Ⅱ-御判物-A判物-98)
92	宗義盛書下	盛親花押	金剛院御同宿	永正18年7月17日	152107017	金剛院文書	
93	宗義盛書下	盛親花押	永泉寺侍者	永正18年7月21日	152107021	永泉寺文書	
94	宗義盛・盛満連署書下	盛親・盛満御判	彦彦郎	永正18年7月21日	152107021	宗家文書	御旧判控(記録類Ⅱ-御判物-A判物-98)
95	宗義盛書下写	盛親判	湯浅勘三郎	永正18年8月7日	152108007	宗家文書	御旧判控(記録類Ⅱ-御判物-A判物-98)
96	宗義盛書下	盛親花押	永泉寺侍者	永正18年8月29日	152108029	永泉寺文書	
97	宗義盛書下写	盛親判	湯浅勘三郎	永正18年9月30日	152109030	宗家文書	御旧判控(記録類Ⅱ-御判物-A判物-98)
98	宗義盛書下	盛長花押	金剛院	大永2年4月15日	152204015	金剛院文書	
99	宗義盛書下(前欠)	宗義長	主藤武藏守	大永2年4月15日	152204015	主藤仁文書	
100	宗義盛書下	宗義長	主藤武藏守	大永2年4月15日	152204015	主藤仁文書	御旧判写
101	宗義盛書下写	盛長御判	宗右衛門大夫	大永2年5月5日	152205005	宗家文書	
102	宗義盛書下	宗義盛花押		大永2年10月5日	152210005	阿比留修文書	
103	宗義盛書下写	盛長御判	阿比留弥八郎	大永2年10月15日	152210015	宗家文書	御旧判控(記録類Ⅱ-御判物-A判物-98)
104	宗義盛書下写	阿比留弥七郎	阿比留弥七郎	大永2年10月15日	152210015	宗家文書	御旧判控(記録類Ⅱ-御判物-A判物-98)
105	宗義盛書下写	盛親御判	三位殿	大永3年8月6日	152308006	宗家文書	御旧判控(記録類Ⅱ-御判物-A判物-98)
106	宗義盛書下	盛親花押	事俣大御堂	大永3年10月7日	152310007	金剛院文書	
107	宗義盛書下写	盛長御判	小嶋源次郎	大永3年10月17日	152310017	宗家文書	御旧判控(記録類Ⅱ-御判物-A判物-98)
108	宗義盛書下写	盛長御判	下宮々司円知坊	大永3年11月26日	152311026	宗家文書	御旧判控(記録類Ⅱ-御判物-A判物-98)
109	宗義盛書下写	盛長御判	下宮々司円知坊	大永3年11月26日	152311026	宗家文書	対州八郡寺社判物帳(記録類Ⅱ-御判物-A判物-32)
110	宗義盛書下	盛満花押	円喜坊	大永7年8月10日	152708010	主藤寿文書	国士館探訪
111	宗義盛書下写	盛満花押	円喜坊	大永7年8月10日	152708010	主藤寿文書	国士館探訪
112	宗義盛書下	盛賢花押	山下乙次郎	大永8年11月21日	152811021	山下文書	
113	宗義盛名字宛行状	盛賢御判	宗弥十郎	大永8年11月26日	152811026	小森文書	
114	宗義盛書下	盛賢花押	山下勢左衛門尉	享禄2年11月6日	152911006	山下文書	
115	宗義盛名字宛行状	盛広判	斎藤連松丸	享禄4年8月13日	153108013	宗家文書	御旧判控(記録類Ⅱ-御判物-A判物-98)
116	宗義盛名字宛行状	持盛花押	宗十郎	天文5年11月7日	153111007	小森文書	
117	山下河内守さたつな寄進状写	山下河内守さたつな	主藤彦七郎	天文5年8月13日	153608013	主藤仁文書	
118	山下河内守さたつな寄進状	山下河内守さたつな	主藤彦七郎	天文6年8月13日	153608013	主藤仁文書	
119	山下河内守さたつな寄進状写	山下河内守さたつな	主藤彦七郎	天文5年8月13日	153608013	主藤仁文書	
120	宗持盛名字宛行状	持盛花押	山下彦四郎	天文6年10月16日	153710016	山下文書	
121	宗持盛書下写	持盛御判	下宮々司円知坊	天文7年11月23日	153811023	宗家文書	御旧判控(記録類Ⅱ-御判物-A判物-98)
122	宗貞泰書下写	貞泰御判	阿比留弥七郎	天文10年8月13日	154108013	宗家文書	御旧判控(記録類Ⅱ-御判物-A判物-98)
123	宗貞泰書下写	貞泰御判	阿比留弥七郎	天文10年8月13日	154108013	宗家文書	御旧判控(記録類Ⅱ-御判物-A判物-98)
124	宗晴茂加冠並一字書出	晴茂花押	宗孫八郎	天文11年1月14日	154201014	小森文書	
125	宗晴茂書下	晴茂花押	山下新三郎	天文11年1月14日	154201014	山下文書	
126	宗盛康書下	宗盛康	主藤彦七郎	天文11年7月26日	154207026	主藤仁文書	御旧判写
127	宗晴康書下写	晴康御判	小嶋源次郎	天文12年8月14日	154308014	宗家文書	御旧判控(記録類Ⅱ-御判物-A判物-98)
128	周藤監物盛親証状写	周藤監物盛親		天文12年2月18日	154302018	主藤仁文書	
129	周藤盛親証状	周藤盛親		天文12年2月18日	154302018	主藤仁文書	御旧判写
130	宗盛康書下	盛康花押	山下勢右衛門尉	天文12年12月3日	154312003	山下文書	
131	宗晴康加冠状	晴康花押	山下源五郎	天文20年4月20日	155104020	山下文書	
132	宗晴康書下	晴康花押	山下源五郎	天文20年4月20日	155104020	山下文書	
133	こもり孫□□茂□証状(断簡)	住地円鶴坊		天文21年3月8日	155203008	主藤仁文書	
134	宗義調名字宛行状	義調花押	小森孫八郎	天文22年2月21日	155302021	小森文書	
135	宗義調書下写	義調御判	山下源五郎	天文23年8月14日	155408014	宗家文書	御旧判控(記録類Ⅱ-御判物-A判物-98)
136	宗盛広書下写	盛廣判	庄司源次郎	天文23年8月16日	155408016	宗家文書	御旧判控(記録類Ⅱ-御判物-A判物-98)
137	宗義調名字宛行状	義調御判	小嶋源五郎	天文24年5月19日	155505019	宗家文書	御旧判控(記録類Ⅱ-御判物-A判物-98)
138	宗義調名字宛行状	義調御判	小嶋源四郎	弘治2年8月13日	155608013	宗家文書	御旧判控(記録類Ⅱ-御判物-A判物-98)
139	宗義調書下写	義調御判	下宮々司円知坊	弘治2年8月28日	155608028	宗家文書	御旧判控(記録類Ⅱ-御判物-A判物-98)
140	宗盛広書下写	盛広判	小嶋源左衛門	弘治4年4月16日	155804016	宗家文書	御旧判控(記録類Ⅱ-御判物-A判物-98)
141	連々懸役郡役依無沙汰被仰付条々	つづくん中		永禄3年9月16日	156009016	小森文書	
142	宗義調書下	義調花押	円喜坊	永禄4年閏3月22日	156103522	主藤寿文書	国士館探訪
143	宗義調書下写	義調花押	円喜坊	永禄4年閏3月22日	156103522	主藤寿文書	国士館探訪
144	宗盛円書下	盛円花押	円喜坊	永禄4年閏3月22日	156103522	主藤寿文書	国士館探訪
145	宗盛円書下写	盛円花押	円喜坊	永禄4年閏3月22日	156103522	主藤寿文書	国士館探訪
146	宗尚広書下	尚広花押	円喜坊	永禄4年閏3月22日	156103522	主藤寿文書	国士館探訪
147	宗義調書下写	義調御判	殷豆住持円喜坊	永禄4年閏3月22日	156103522	宗家文書	御旧判控(記録類Ⅱ-御判物-A判物-98)
148	宗盛円書下写	盛円判	殷豆住持円喜坊	永禄4年閏3月22日	156103522	宗家文書	御旧判控(記録類Ⅱ-御判物-A判物-98)
149	宗義調書下写	義調御判	主藤源三郎	永禄5年8月13日	156208013	宗家文書	御旧判控(記録類Ⅱ-御判物-A判物-98)
150	宗尚広書下(坪付宛行状)	尚広花押	永泉寺常住	永禄5年10月10日	156210010	永泉寺文書	
151	佐須盛円書下	佐須盛円	主藤左衛門尉	永禄5年10月27日	156210027	主藤仁文書	
152	宗義調書下写	義調御判	阿比留弥七郎	永禄6年8月14日	156308014	宗家文書	御旧判控(記録類Ⅱ-御判物-A判物-98)
153	宗義調名字宛行状	義調御判	阿比留弥七郎	永禄6年8月14日	156308014	宗家文書	御旧判控(記録類Ⅱ-御判物-A判物-98)
154	宗盛園書下写	宗盛園	主藤左衛門尉	永禄6年10月27日	156310027	主藤仁文書	
155	宗義調加冠並一字書出	義調花押	小森孫十郎	永禄6年8月12日	156308012	小森文書	
156	宗義調名字宛行状	義調御判	小嶋源八郎	永禄8年8月13日	156808013	宗家文書	御旧判控(記録類Ⅱ-御判物-A判物-98)
157	佐須盛円書下写	佐須盛円	主藤左衛門尉	永禄8年	156599999	主藤仁文書	
158	佐須盛円書下写	佐須盛円	主藤左衛門尉	永禄8年月日損之	156599999	主藤仁文書	御旧判写
159	佐須盛円書下写	佐須盛円	主藤左衛門尉	永禄9年10月27日	156610027	主藤仁文書	御旧判写
160	宗義調書下	義調花押	金剛院	永禄9年12月23日	156612023	金剛院文書	
161	小森茂幸土地贈状	小森茂幸		永禄10年3月20日	156703020	小森文書	
162	宗盛円書下写	盛円判	斎藤六郎次郎	永禄10年6月4日	156706004	宗家文書	御旧判控(記録類Ⅱ-御判物-A判物-98)
163	宗盛円書下写	盛円判	山下七郎左衛門	永禄10年7月5日	156707005	宗家文書	御旧判控(記録類Ⅱ-御判物-A判物-98)
164	宗盛園書下写	盛園判	庄司孫七	永禄10年8月15日	156708015	宗家文書	御旧判控(記録類Ⅱ-御判物-A判物-98)
165	宗義調加冠状	義調花押	山下善次郎	永禄12年8月14日	156908014	山下文書	



166	宗義弘加冠状	調弘花押	山下新二郎	永禄12年8月14日	156908014	山下文書	
167	宗義弘名字宛行状	調弘花押	小森右馬亮茂幸	永禄12年8月22日	156908016	小森文書	
168	宗貞信書下写	貞信御判	久和掃部助	元龜3年7月25日	157207025	宗家文書	御旧判控（記録類Ⅱ-御判物-A判物-98）
169	宗貞信書下	貞信花押	山下勢兵衛	元龜3年8月9日	157208009	山下文書	
170	宗貞信書下写	貞信御判	久和龜松丸	元龜3年8月19日	157208019	宗家文書	御旧判控（記録類Ⅱ-御判物-A判物-98）
171	宗義調名字宛行状	義調御判	阿比留孫次郎	元龜4年8月14日	157308014	宗家文書	御旧判控（記録類Ⅱ-御判物-A判物-98）
172	佐須盛内書下写（断簡）	佐須盛内	主藤彦七郎	天正3年8月14日	157508014	主藤仁文書	
173	佐須盛内書下写	佐須盛内	主藤彦七郎	天正3年8月14日	157508014	主藤仁文書	御旧判写
174	宗義純書下	義純花押	靉豆部供僧中	天正4年12月11日	157612011	主藤寿文書	国士館探訪
175	加瀬助八郎親道先券	加瀬助八郎	主藤彦七郎	天正5年12月22日	157712022	主藤仁文書	
176	主藤彦七郎親道証状	主藤彦七郎	加瀬助八郎	天正5年12月22日	157712022	主藤仁文書	
177	親只書下（謙状安堵）写	親只花押	内喜坊	天正6年3月15日	157803015	主藤寿文書	国士館探訪
178	宗信国書下	信国花押	内喜坊	天正6年8月23日	157803015	主藤寿文書	国士館探訪
179	宗義純書下（坪付宛行状）	義純花押	小森修理亮	天正6年10月25日	157810025	小森文書	
180	宗義純書下	義純花押	山下勢兵衛	天正7年11月28日	157911028	山下文書	
181	宗義智書下写	義智御判	中村神兵衛尉	天正8年3月13日	158003013	宗家文書	御旧判控（記録類Ⅱ-御判物-A判物-98）
182	寄進状	尚廣花押	内喜	天正8年3月28日	158003028	主藤寿文書	国士館探訪
183	寄進状写	尚廣花押	内喜	天正8年3月28日	158003028	主藤寿文書	国士館探訪
184	主藤調長証状	主藤調長	主藤彦七郎	天正8年5月28日	158005028	主藤仁文書	御旧判写
185	主藤調書下（寄進状）	義調花押	永泉寺	天正8年6月20日	158006020	永泉寺文書	
186	宗昭景書下（坪付宛行状）	昭景御判	金剛院當住	天正8年10月17日	158010017	金剛院文書	
187	宗義智名字宛行状	義智御判	主藤彦七郎	天正9年8月16日	158108016	宗家文書	御旧判控（記録類Ⅱ-御判物-A判物-98）
188	主藤調長証状	主藤調長	主藤左衛門尉	天正9年10月2日	158110002	主藤仁文書	御旧判写
189	八幡宮辰夜結番注文	昭景御判	大隈左近大夫	天正10年2月9日	158202009	宗家文書	
190	宗昭景書下写	昭景御判	主藤彦三郎	天正10年8月13日	158208013	宗家文書	御旧判控（記録類Ⅱ-御判物-A判物-98）
191	宗景満書下写	景満判	主藤彦二郎	天正11年8月14日	158308014	宗家文書	御旧判控（記録類Ⅱ-御判物-A判物-98）
192	宗景満書下写	景満判	宗昭景	天正11年8月14日	158308014	宗家文書	御旧判控（記録類Ⅱ-御判物-A判物-98）
193	宗昭景書下（断簡）	宗昭景		天正11年	158399999	金剛院文書	
194	宗昭景書下	昭景	圓分寺當住天叟和尚	天正13年3月2日	158503002	金剛院文書	
195	宗義智書下写	宗義智	靉豆之郷	天正13年6月4日	158506004	杉村文書	
196	被仰出衆之事		靉豆郡へ	天正13年6月4日	158506004	杉村文書	
197	宗昭景書下写	昭景御判	主藤彦十郎	天正13年8月14日	158508014	宗家文書	御旧判控（記録類Ⅱ-御判物-A判物-98）
198	佐須景満加冠状	佐須景満	主藤彦七郎	天正13年8月15日	158508015	主藤仁文書	御旧判写
199	宗昭景書下写	昭景御判	下宮宮司内知坊	天正13年11月20日	158511020	宗家文書	御旧判控（記録類Ⅱ-御判物-A判物-98）
200	宗景満書下写	景満判	主藤采女尉	天正14年2月26日	158602026	宗家文書	御旧判控（記録類Ⅱ-御判物-A判物-98）
201	宗昭景書下	宗昭景	主藤彦七郎	天正14年3月4日	158603004	主藤仁文書	御旧判写
202	宗景満名字宛行状	景満判	横山平次郎	天正14年3月7日	158603007	宗家文書	御旧判控（記録類Ⅱ-御判物-A判物-98）
203	宗景満書下写	景満判	横山助次郎	天正14年3月7日	158603007	宗家文書	御旧判控（記録類Ⅱ-御判物-A判物-98）
204	宗景満名字宛行状	景満判	主藤彦七郎	天正14年3月7日	158603007	宗家文書	御旧判控（記録類Ⅱ-御判物-A判物-98）
205	宗昭景書下	昭景花押	山下清兵衛尉	天正14年3月11日	158603011	山下文書	
206	宗昭景書下写	昭景御判	阿比留四郎左衛門尉	天正14年3月11日	158603011	宗家文書	御旧判控（記録類Ⅱ-御判物-A判物-98）
207	宗義智書下写	義智御判	高松藏人佐	天正14年8月14日	158608014	宗家文書	御旧判控（記録類Ⅱ-御判物-A判物-98）
208	宗昭景判書下	宗昭景	主藤彦七郎	天正14年11月	158611099	主藤仁文書	御旧判写
209	宗義長書下写	調長判	小嶋助三郎	天正15年8月15日	158708015	宗家文書	御旧判控（記録類Ⅱ-御判物-A判物-98）
210	昭景様より右衛門佐須頼次候御判二枚不相見御郡奉行所江写し在之由一候			天正16年・18年	158899999	主藤仁文書	御旧判写
211	宗景満書下写	景満判	庄司三郎	天正17年8月14日	158908014	宗家文書	御旧判控（記録類Ⅱ-御判物-A判物-98）
212	宗義智書下写	義智御判	主藤彦五郎	天正18年3月13日	159003013	宗家文書	御旧判控（記録類Ⅱ-御判物-A判物-98）
213	宗義智書下写	義智御判	小嶋与二	天正18年3月13日	159003013	宗家文書	御旧判控（記録類Ⅱ-御判物-A判物-98）
214	宗義智書下写	義智御判	主藤彦七郎	天正18年3月13日	159003013	宗家文書	御旧判控（記録類Ⅱ-御判物-A判物-98）
215	宗義智書下写	義智御判	主藤彦五郎	天正18年3月13日	159003013	宗家文書	御旧判控（記録類Ⅱ-御判物-A判物-98）
216	宗義智書下写	義智御判	庄司三郎	天正18年3月13日	159003013	宗家文書	御旧判控（記録類Ⅱ-御判物-A判物-98）
217	宗義智書下写	義智御判	中村与五郎	天正18年3月13日	159003013	宗家文書	御旧判控（記録類Ⅱ-御判物-A判物-98）
218	宗昭景書下写	昭景御判	阿比留弥七郎	天正18年8月13日	159008013	宗家文書	御旧判控（記録類Ⅱ-御判物-A判物-98）
219	ます女寄進状	ます女	内喜	天正18年11月18日	159011018	主藤寿文書	国士館探訪
220	宗義智書下	宗義智	左馬助	天正18年11月18日	159099913	主藤仁文書	御旧判写
221	宗義智名字宛行状	義智花押	小森孫十郎	天正19年8月16日	159108016	小森文書	
222	宗義智書下写	義智御判	久和彦三郎	天正20年6月2日	159206002	宗家文書	御旧判控（記録類Ⅱ-御判物-A判物-98）
223	ます女寄進状写	ます女	ちう地	天正20年3月	159303099	主藤寿文書	国士館探訪
224	宗義智判物写	義智御判	山下清兵衛尉	慶長1年9月5日	159609005	宗家文書	御旧判控（記録類Ⅱ-御判物-A判物-98）
225	宗義智判物写	義智御判	大田弥内助	慶長2年6月5日	159706005	宗家文書	御旧判控（記録類Ⅱ-御判物-A判物-98）
226	宗義智判物	義智花押	山下乙壽丸	慶長2年7月1日	159707001	山下文書	
227	宗義智判物	義智花押	山下龜光丸	慶長2年11月4日	159711004	山下文書	
228	（御禁制）			慶長6年3月11日	160003011	杉村文書	国士館探訪
229	（義智君御在判郡中仕置定）			慶長5年3月11日	160003011	杉村文書	国士館探訪
230	宗義智判物	宗義智	靉豆郡	慶長5年3月21日	160003021	杉村文書	史料編纂所探訪
231	宗義智判物	宗義智	靉豆郡中	慶長8年2月1日	160302001	杉村文書	史料編纂所探訪
232	（義智君御在判郡中仕置定）			慶長8年5月24日	160305024	杉村文書	国士館探訪
233	法度	義智花押	津々郡中	慶長8年6月6日	160306006	主藤寿文書	国士館探訪
234	法度写	義智花押	津々郡中	慶長8年6月6日	160306006	主藤寿文書	国士館探訪
235	宗義智抽判判物	宗義智	靉豆浦中	慶長9年2月24日	160402024	杉村文書	史料編纂所探訪
236	宗義智判物写	義智御判	くろせのミやうふ	慶長9年8月16日	160408016	宗家文書	対州八郎寺社判物帳（記録類Ⅱ-御判物-A判物-32）
237	（義智君御在判郡中仕置定）			慶長10年9月28日	160509028	杉村文書	
238	豆郡郡代之節触書并被官職高			慶長10年6月10日	160509028	杉村文書	
239	天道まっりのやくしやの事			慶長10年	160599999	主藤寿文書	
240	宗義智判物	宗義智	靉豆郡	慶長11年12月8日	160612008	杉村文書	
241	（義智君御在判郡中仕置定）			慶長12年7月26日	160707026	杉村文書	
242	宗義智判物	宗義智	靉豆	慶長14年5月8日	160905008	杉村文書	
243	（義智君御在判郡中仕置定）			慶長14年5月8日	160905008	杉村文書	
244	宗義智名字宛行状	義智花押		慶長14年8月15日	160908015	小森文書	
245	宗義智判物	義智花押	山下□□	慶長14年8月15日	160908015	山下文書	
246	宗義智判物	義智花押	山下与作	慶長14年8月15日	160908015	山下文書	
247	宗義智判物写	義智御判	阿比留才藏	慶長14年8月15日	160908015	宗家文書	御旧判控（記録類Ⅱ-御判物-A判物-98）
248	宗義智判物写	義智御判	山下孫次郎	慶長14年8月15日	160908015	宗家文書	御旧判控（記録類Ⅱ-御判物-A判物-98）

249	宗義智判物写	義智御判	阿比留弥吉郎	慶長14年8月15日	160908015	宗家文書	御旧判控（記録類Ⅱ-御判物-A判物-98）
250	宗義智判物写	義智御判	大田弥内助	慶長14年8月15日	160908015	宗家文書	御旧判控（記録類Ⅱ-御判物-A判物-98）
251	宗義智判物	義智花押	円吉	慶長14年8月28日	160908028	主藤寿文書	
252	宗義智判物写	義智花押	円吉	慶長14年8月28日	160908028	主藤寿文書	
253	宗義智判物	義智花押	円吉	慶長14年8月28日	160908028	主藤寿文書	
254	宗義智判物写	義智花押	円吉	慶長14年8月28日	160908028	主藤寿文書	
255	宗義智判物写	義智御判	酸豆住持円喜坊	慶長14年8月28日	160908028	宗家文書	御旧判控（記録類Ⅱ-御判物-A判物-98）
256	宗義智判物写	義智御判	酸豆住持円喜坊	慶長14年8月28日	160908028	宗家文書	御旧判控（記録類Ⅱ-御判物-A判物-98）
257	宗義智判物写	義智御判	酸豆住持円吉坊	慶長14年8月28日	160908028	宗家文書	対州八郎寺社判物帳（記録類Ⅱ-御判物-A判物-32）
258	宗義智判物写	義智御判	酸豆住持円吉坊	慶長14年8月28日	160908028	宗家文書	対州八郎寺社判物帳（記録類Ⅱ-御判物-A判物-32）
259	宗義智判物写	義智御判	菊若	慶長14年9月20日	160909020	宗家文書	御旧判控（記録類Ⅱ-御判物-A判物-98）
260	宗義智判物写	義智御判	酸豆円喜坊	慶長14年9月20日	160909020	宗家文書	御旧判控（記録類Ⅱ-御判物-A判物-98）
261	宗義智判物写	義智御判	酸豆円吉坊	慶長14年9月20日	160909020	宗家文書	対州八郎寺社判物帳（記録類Ⅱ-御判物-A判物-32）
262	宗義智判物	義智花押	円吉坊	慶長14年9月24日	160909024	主藤寿文書	
263	宗義智判物写	義智花押	円吉坊	慶長14年9月24日	160909024	主藤寿文書	
264	宗義智判物写	義智花押	菊若	慶長14年9月24日	160909024	主藤寿文書	
265	宗義智官途状	宗義智		慶長14年12月15日	16099915	主藤仁文書	御旧判写
266	宗義智判物	義智花押	山下清兵衛	慶長19年9月5日	161409005	山下文書	
267	宗貞光判物写	貞光御判	阿比留弥七郎	慶長20年6月27日	161506027	宗家文書	御旧判控（記録類Ⅱ-御判物-A判物-98）
268	宗貞光判物	貞光花押	ちうち	慶長20年7月23日	161507023	主藤寿文書	
269	宗貞光判物写（住持職履行状）	貞光花押	ちうち	慶長20年7月23日	161507023	主藤寿文書	
270	宗義成判物	義成花押	金剛院	元和4年12月13日	161812013	金剛院文書	
271	寄進状	権藤清右衛門	ちう地坊	元和7年5月6日	162105006	主藤寿文書	
272	寛	太田かもん	杉村采女	寛永3年5月21日	162605021	杉村文書	
273	宗義成判物写	義成御判	小森喜三郎	寛永10年5月22日	163305022	宗家文書	御旧判控（記録類Ⅱ-御判物-A判物-98）
274	古検地帳	津江圭亮ほか	寛永14年11月1日	163711001	杉村文書		
275	杉村伊織知行目録		津江圭亮ほか	寛永14年11月1日	163711001	杉村文書	
276	以前豆股村願先買一件	杉村伊織	古川右馬佐ほか	寛永20年3月5日	164303005	杉村文書	
277	豆股郷目書物			正保2年8月吉日	164508099	杉村文書	
278	廻ノ浜堀之書付	けこし左衛門ほか	宗望州様之内加藤吉兵衛	正保3年9月20日	164609020	杉村文書	
279	豆股郡給人部役百姓又者等調		酸豆部・杉村又左衛門	慶安元年4月21日	164804021	杉村文書	
280	宗義成判物	義成花押	岩佐基吉	慶安元年9月26日	164809026	岩佐文書	
281	酸豆郡支配ニ付起請文			承応3年8月吉日	165408099	杉村文書	
282	豆股村検地帳			寛文2年10月	166210099	島片文書	
283	宗義真判物写	義真花押	山下市郎左衛門	寛文3年1月30日	166301030	宗家文書	御旧判控（記録類Ⅱ-御判物-A判物-98）
284	豆股郷豆股村御物成帳			寛文4年6月	166406099	島片文書	
285	対州八郎寺願帳			貞享2年11月日	168511099	宗家文書	記録類Ⅰ御郡奉行-F寺社-1
286	豆股郡寺社記			貞享2年11月日	168511099	宗家文書	記録類Ⅰ御郡奉行-F寺社-9
287	宗義真判物	義真花押	岩佐基吉	貞享5年正月元日	168801001	岩佐文書	
288	宗義真判物	宗義真	主藤六郎兵衛	貞享5年正月元日	168801001	主藤仁文書	
289	宗義真判物	宗義真	阿比留善吉	貞享5年正月元日	168801001	阿比留修文書	
290	天道法師職起			元禄3年2月	169002099	主藤寿文書	
291	宗義方判物	義方花押	岩佐藤左衛門	元禄15年11月9日	169211009	岩佐文書	
292	金剛院本尊并什物寛			元禄10年3月日	169703099	金剛院文書	
293	宗義方判物	宗義方	阿比留与次右衛門	元禄15年11月9日	170211009	阿比留修文書	
294	金剛院願坪付帳			宝永2年10月日	170510099	金剛院文書	
295	豆股観音堂願坪付帳			宝永2年10月	170510099	主藤寿文書	
296	大明神社願坪付帳			宝永2年10月	170510099	本石佐市文書	
297	八郎寺社願帳			宝永2年10月日	170510099	宗家文書	記録類Ⅰ御郡奉行-F寺社-12
298	永泉寺願坪付帳			宝永4年3月15日	170703015	永泉寺文書	
299	宗義方判物	義方花押	永泉寺住持	宝永6年1月1日	170901001	永泉寺文書	
300	宗義方判物	義方花押	金剛院住持	宝永6年1月1日	170901001	金剛院文書	
301	宗義方判物	義方花押	観音住持	宝永8年1月1日	170901001	主藤寿文書	
302	豆股郷開帳			享保～明治	171699999	宗家文書	記録類Ⅰ御郡奉行-B土地関係-③開発-26
303	宗方誠判物	方誠花押	観音住持	享保4年5月1日	171905001	主藤寿文書	
304	宗方誠判物	方誠花押	岩佐藤五左衛門	享保4年5月1日	171905001	岩佐文書	
305	宗方誠判物	方誠花押	永泉寺住持	享保4年5月1日	171905001	永泉寺文書	
306	宗方誠判物	方誠花押	金剛院住持	享保4年5月1日	171905001	金剛院文書	
307	坪付帳	御郡奉行	小森喜八郎	享保6年8月日	172108099	小森文書	
308	宗方誠判物	宗方誠	主藤伝八	享保7年6月3日	172206003	主藤仁文書	
309	宗方誠判物	宗方誠	阿比留四郎左衛門	享保7年6月3日	172206003	阿比留修文書	
310	宗義如判物	義如花押	観音住持	享保18年9月15日	173309015	主藤寿文書	
311	宗義如判物	義如花押	岩佐藤五左衛門	享保18年9月15日	173309015	岩佐文書	
312	宗義如判物	義如花押	永泉寺住持	享保18年9月15日	173309015	永泉寺文書	
313	宗義如判物	義如花押	金剛院住持	享保18年9月15日	173309015	金剛院文書	
314	宗義如判物	宗義如	阿比留四郎左衛門	享保18年9月15日	173309015	阿比留修文書	
315	宗義如判物	宗義如	小森権左衛門	享保18年9月15日	173309015	小森文書	
316	産物寛帳			享保20年8月日	173508099	宗家文書	記録類Ⅰ御郡奉行-C産物・用木-①産物-1-8
317	豆股村御下向ニ付同書扣			延享4年10月11日	174710011	宗家文書	記録類Ⅰ御郡奉行-H諸請願-①願-3
318	宗義蕃判物	義蕃花押	観音住持	宝暦2年11月15日	175211015	主藤寿文書	
319	宗義蕃判物	義蕃花押	岩佐藤五左衛門	宝暦2年11月15日	175211015	岩佐文書	
320	宗義蕃判物	義蕃花押	永泉寺住持	宝暦2年11月15日	175211015	永泉寺文書	
321	宗義蕃判物	義蕃花押	金剛院住持	宝暦2年11月15日	175211015	金剛院文書	
322	宗義蕃判物	宗義蕃	主藤伝八	宝暦2年11月15日	175211015	主藤仁文書	
323	宗義蕃判物	宗義蕃	阿比留与次右衛門	宝暦2年11月15日	175211015	阿比留修文書	
324	対馬国大小神社帳			宝暦10年12月	176012099	宗家文書	記録類Ⅱ寺社方-C寺院記録・神社帳
325	宗義幡判物	義幡花押	観音住持	宝暦12年9月11日	176209011	主藤寿文書	
326	宗義幡判物	義幡花押	永泉寺住持	宝暦12年9月11日	176209011	永泉寺文書	
327	宗義幡判物	義幡花押	金剛院住持	宝暦12年9月11日	176209011	金剛院文書	
328	宗義幡判物	宗義幡	阿比留善左衛門	宝暦12年9月11日	176209011	阿比留修文書	
329	宗義幡判物	義幡花押	岩佐藤五左衛門	宝暦12年9月11日	176209015	岩佐文書	
330	宗義幡判物写	宗義幡	杉村善祐	安永5年4月1日	177604001	杉村文書	
331	豆股郷豆股半付坪付帳			安永5年4月日	177604099	宗家文書	記録類Ⅰ御郡奉行-B土地関係-①坪付-3-4
332	宗義功判物	義功花押	岩佐藤左衛門	安永7年7月9日	177807009	岩佐文書	

333	宗義弘判物	義弘花押	永泉寺住持	安永7年7月9日	177807009	永泉寺文書	
334	宗義弘判物	義弘花押	金剛院住持	安永7年7月9日	177807009	金剛院文書	
335	宗義功判物	宗義功	阿比留善左衛門	安永7年7月9日	177807009	阿比留修文書	
336	宗義功判物	義功花押	観音住持	天明3年9月18日	178309018	主藤壽文書	
337	対州社家名数帳			天明6年閏10月	178610599	宗家文書	記録類Ⅱ 寺社方-A 寺社書上-9-2
338	対州社顔聞高帳			天明6年閏10月	178610599	宗家文書	記録類Ⅱ 寺社方-D 寺社諸覧-7
339	豆殻郷村々開成就竿入絵図			寛政8年～文政11年	179699999	宗家文書	記録類Ⅰ 御郡奉行-B 土地関係-②測量-7-2
340	由緒書			寛政11年11月	179911099	宗家文書	記録類Ⅱ 寺社方-A 寺社書上12
341	御龜卜考據書付認縁之事			文化2年6月吉日	180506099	岩佐文書	
342	口上覚	小森万之進		文化7年7月21日	181007021	小森文書	
343	豆殻郷豆殻村御換地帳			文化9年10月 日	181210099	主藤壽文書	
344	御郡奉行所達	御郡奉行所	主藤源右衛門	文化13年6月22日	181060022	主藤仁文書	
345	主藤伝右衛門金子踏取状	主藤伝右衛門	百姓甚之丞	文化14年3月23日	181703023	主藤仁文書	
346	主藤伝右衛門金子借用状手控	主藤伝右衛門	百姓甚之丞・同姓平蔵	文化14年3月23日	181703023	主藤仁文書	
347	宗義質判物	義質花押	観音住持	文化14年7月18日	181707018	主藤壽文書	
348	宗義質判物	義質花押	岩佐藤右衛門	文化14年7月18日	181707018	岩佐文書	
349	宗義質判物	義質花押	永泉寺住持	文化14年7月18日	181707018	永泉寺文書	
350	宗義質判物	義質花押	金剛院住持	文化14年7月18日	181707018	金剛院文書	
351	宗義質判物	宗義質	阿比留与治右衛門	文化14年7月18日	181707018	阿比留修文書	
352	宗義質判物写	義質	阿比留利右衛門	文化14年7月18日	181707018	宗家文書	御判物写 (記録類Ⅱ-A 判物-89-1)
353	宗義質判物写	義質	山下市之允	文化14年7月18日	181707018	宗家文書	御判物写 (記録類Ⅱ-A 判物-89-1)
354	宗義質判物写	義質	久和森右衛門	文化14年7月18日	181707018	宗家文書	御判物写 (記録類Ⅱ-A 判物-89-1)
355	宗義質判物写	義質	主藤源右衛門	文化14年7月18日	181707018	宗家文書	御判物写 (記録類Ⅱ-A 判物-89-1)
356	宗義質判物写	義質	小森万之進	文化14年7月18日	181707018	宗家文書	御判物写 (記録類Ⅱ-A 判物-89-1)
357	宗義質判物写	義質	主藤清左衛門	文化14年7月18日	181707018	宗家文書	御判物写 (記録類Ⅱ-A 判物-89-1)
358	宗義質判物写	義質	阿比留弥五郎	文化14年7月18日	181707018	宗家文書	御判物写 (記録類Ⅱ-A 判物-89-1)
359	宗義質判物写	義質	斉藤甚左衛門	文化14年7月18日	181707018	宗家文書	御判物写 (記録類Ⅱ-A 判物-89-1)
360	宗義質判物写	義質	主藤伝右衛門	文化14年7月18日	181707018	宗家文書	御判物写 (記録類Ⅱ-A 判物-89-1)
361	宗義質判物写	義質	太田利左衛門	文化14年7月18日	181707018	宗家文書	御判物写 (記録類Ⅱ-A 判物-89-1)
362	宗義質判物写	義質	山下五右衛門	文化14年7月18日	181707018	宗家文書	御判物写 (記録類Ⅱ-A 判物-89-1)
363	宗義質判物写	義質	竹岡五郎左衛門	文化14年7月18日	181707018	宗家文書	御判物写 (記録類Ⅱ-A 判物-89-1)
364	宗義質判物写	義質	小嶋五右衛門	文化14年7月18日	181707018	宗家文書	御判物写 (記録類Ⅱ-A 判物-89-1)
365	宗義質判物写	義質	主藤平左衛門	文化14年7月18日	181707018	宗家文書	御判物写 (記録類Ⅱ-A 判物-89-1)
366	宗義質判物写	義質	主藤文右衛門	文化14年7月18日	181707018	宗家文書	御判物写 (記録類Ⅱ-A 判物-89-1)
367	宗義質判物写	義質	阿比留文治	文化14年7月18日	181707018	宗家文書	御判物写 (記録類Ⅱ-A 判物-89-1)
368	宗義質判物写	義質	阿比留茂左衛門	文化14年10月15日	181710015	宗家文書	御判物写 (記録類Ⅱ-A 判物-89-1)
369	宗義質判物写	義質	主藤伝右衛門	文化14年10月15日	181710018	宗家文書	御判物写 (記録類Ⅱ-A 判物-89-1)
370	阿比留利右衛門書上	阿比留利右衛門印	御郡奉行所	文化14年10月16日	181710016	宗家文書	御判物写 (記録類Ⅱ-A 判物-89-1)
371	覚	山田半左衛門	早川右膳ほか	文政5年閏正月24日	182201524	金剛院文書	
372	金剛山記録			文政7年5月 日	182405099	金剛院文書	
373	豆殻公私領境分々帳			文政9年3月 日	182603099	宗家文書	記録類Ⅰ 御郡奉行-B 土地関係-①坪付-3-5
374	御園地方之法			文政10年6月 日	182706099	金剛院文書	
375	豆殻村々粉麦出来高并御物成仕分帳			文政10年7月21日	182707021	宗家文書	記録類Ⅰ 御郡奉行-B 土地関係-①坪付-17-8
376	岩佐彦兵衛手形	岩佐彦兵衛	主藤源七郎	天保8年8月 日	183708099	主藤仁文書	
377	手控諸口	住持門口		天保10年4月14日	183904014	主藤壽文書	
378	御郡奉行所達	御郡奉行所	主藤伝右衛門	天保10年4月 日	183904099	主藤仁文書	
379	宗義章判物	義章花押	観音住持	天保10年7月23日	183907023	主藤壽文書	
380	宗義章判物	義章花押	永泉寺住持	天保10年7月23日	183907023	永泉寺文書	
381	宗義章判物	義章花押	金剛院住持	天保10年7月23日	183907023	金剛院文書	
382	宗義章判物	義章花押	阿比留与治右衛門	天保10年7月23日	183907023	阿比留修文書	
383	宗義章判物写	義章御判	太田利左衛門	天保10年7月23日	183907023	宗家文書	御判物写書上帳 (記録類Ⅱ-御判物-A 判物-117-7)
384	宗義章判物写	義章御判	山下市之允	天保10年7月23日	183907023	宗家文書	御判物写書上帳 (記録類Ⅱ-御判物-A 判物-117-7)
385	宗義章判物写	義章御判	斉藤源兵衛	天保10年7月23日	183907023	宗家文書	御判物写書上帳 (記録類Ⅱ-御判物-A 判物-117-7)
386	宗義章判物写	義章御判	山下万兵衛	天保10年7月23日	183907023	宗家文書	御判物写書上帳 (記録類Ⅱ-御判物-A 判物-117-7)
387	宗義章判物写	義章御判	竹岡卯右衛門	天保10年7月23日	183907023	宗家文書	御判物写書上帳 (記録類Ⅱ-御判物-A 判物-117-7)
388	宗義章判物写	義章御判	阿比留勝蔵	天保10年7月23日	183907023	宗家文書	御判物写書上帳 (記録類Ⅱ-御判物-A 判物-117-7)
389	宗義章判物写	義章御判	主藤吉之允	天保10年7月23日	183907023	宗家文書	御判物写書上帳 (記録類Ⅱ-御判物-A 判物-117-7)
390	宗義章判物写	義章御判	主藤源七郎	天保10年7月23日	183907023	宗家文書	御判物写書上帳 (記録類Ⅱ-御判物-A 判物-117-7)
391	宗義章判物写	義章御判	主藤治部介	天保10年7月23日	183907023	宗家文書	御判物写書上帳 (記録類Ⅱ-御判物-A 判物-117-7)
392	宗義章判物写	義章御判	阿比留九左衛門	天保10年7月23日	183907023	宗家文書	御判物写書上帳 (記録類Ⅱ-御判物-A 判物-117-7)
393	宗義章判物写	義章御判	小森権左衛門	天保10年7月23日	183907023	宗家文書	御判物写書上帳 (記録類Ⅱ-御判物-A 判物-117-7)
394	宗義章判物写	義章御判	阿比留文作	天保10年7月23日	183907023	宗家文書	御判物写書上帳 (記録類Ⅱ-御判物-A 判物-117-7)
395	宗義章判物写	義章御判	主藤清左衛門	天保10年7月23日	183907023	宗家文書	御判物写書上帳 (記録類Ⅱ-御判物-A 判物-117-7)
396	宗義章判物写	義章御判	主藤権六	天保10年7月23日	183907023	宗家文書	御判物写書上帳 (記録類Ⅱ-御判物-A 判物-117-7)
397	宗義章判物写	義章御判	主藤甚五左衛門	天保10年7月23日	183907023	宗家文書	御判物写書上帳 (記録類Ⅱ-御判物-A 判物-117-7)
398	宗義章判物写	義章御判	阿比留寛左衛門	天保10年7月23日	183907023	宗家文書	御判物写書上帳 (記録類Ⅱ-御判物-A 判物-117-7)
399	宗義章判物写	義章御判	小島五右衛門	天保10年7月23日	183907023	宗家文書	御判物写書上帳 (記録類Ⅱ-御判物-A 判物-117-7)
400	宗義章判物写	義章御判	内山惣右衛門	天保10年7月23日	183907023	宗家文書	御判物写書上帳 (記録類Ⅱ-御判物-A 判物-117-7)
401	宗義章判物写	義章御判	太田長吉	天保10年7月23日	183907023	宗家文書	御判物写書上帳 (記録類Ⅱ-御判物-A 判物-117-7)
402	宗義章判物写	義章御判	佐々木治左衛門	天保10年7月23日	183907023	宗家文書	御判物写書上帳 (記録類Ⅱ-御判物-A 判物-117-7)
403	宗義章判物写	義章御判	久和森左衛門	天保10年7月23日	183907023	宗家文書	御判物写書上帳 (記録類Ⅱ-御判物-A 判物-117-7)
404	宗義章判物	義章花押	岩佐藤左衛門	天保10年12月28日	183912028	岩佐文書	
405	宗義和判物	義和花押	観音住持	天保14年2月15日	184302015	主藤壽文書	
406	宗義和判物	義和花押	永泉寺住持	天保14年2月15日	184302015	永泉寺文書	
407	宗義和判物	宗義和	金剛院住持	天保14年2月15日	184302015	金剛院文書	
408	宗義和判物	宗義和	主藤源七郎	天保14年2月15日	184302015	主藤仁文書	
409	宗義和判物	宗義和	阿比留与治右衛門	天保14年2月15日	184302015	阿比留修文書	
410	宗義和判物	宗義和	小森権左衛門	天保14年2月15日	184302015	小森文書	
411	御郡奉行所達	御郡奉行所	主藤源七郎	嘉永4年10月 日	185110099	主藤仁文書	
412	杉村一郎兵衛覚書	杉村一郎兵衛	主藤源七郎	嘉永4年11月29日	185111029	主藤仁文書	
413	葵丑年前方々手形			嘉永7年正月 日	185401099	宗家文書	記録類Ⅰ 御郡奉行-J 郷通帳・手形-1-7
414	御年貢束上納帳			安政2年6月 日	185506099	宗家文書	記録類Ⅰ 御郡奉行-G 勘定関係-①上納-28-8
415	出發差額ニ而上納帳			安政2年12月	185512099	宗家文書	記録類Ⅰ 御郡奉行-G 勘定関係-①上納-24-7
416	御米蔵江粗米上納帳			安政2年12月	185512099	宗家文書	記録類Ⅰ 御郡奉行-G 勘定関係-①上納-25-7

417	御年貢麦銀=而上納帳		安政2年12月日	185512099	宗家文書	記録類Ⅰ御郡奉行-G勘定関係-①上納-27-8
418	豆股村天道地御物成引方帳		安政2年12月	185512099	宗家文書	記録類Ⅰ御郡奉行-G勘定関係-①上納-45
419	豆股村瀬村御年貢麦年賦上納帳		安政2年12月	185512099	宗家文書	記録類Ⅰ御郡奉行-G勘定関係-①上納-100
420	御米蔵江粗米上納帳		安政2年12月日	185512099	宗家文書	記録類Ⅰ御郡奉行-G勘定関係-①上納-128-2
421	乙卯年前方々手形		安政3年正月日	185601099	宗家文書	記録類Ⅰ御郡奉行-J 郷通帳・手形-3-4
422	御米蔵江御年貢麦上納帳		安政4年正月日	185601099	宗家文書	記録類Ⅰ御郡奉行-G勘定関係-①上納-135-8
423	御米蔵江出穀麦上納帳		安政4年正月日	185601099	宗家文書	記録類Ⅰ御郡奉行-G勘定関係-①上納-136-7
424	御米蔵江粗米上納帳		安政4年10月	185710099	宗家文書	記録類Ⅰ御郡奉行-G勘定関係-①上納-211-8
425	御銀掛所江御年貢麦代銀上納帳		安政4年12月	185712099	宗家文書	記録類Ⅰ御郡奉行-G勘定関係-①上納-134-8
426	御銀掛所江茶椿森代銀上納帳		安政4年12月	185712099	宗家文書	記録類Ⅰ御郡奉行-G勘定関係-①上納-134-16
427	御銀掛所江出穀麦代銀上納帳		安政4年12月	185712099	宗家文書	記録類Ⅰ御郡奉行-G勘定関係-①上納-137-7
428	豆股郷瀬村御年貢麦年賦上納帳		安政4年12月	185712099	宗家文書	記録類Ⅰ御郡奉行-G勘定関係-①上納-146
429	丁巳年方々手形		安政5年3月日	185803099	宗家文書	記録類Ⅰ御郡奉行-J 郷通帳・手形-9-6
430	御銀掛所出穀麦代銀上納帳		安政5年12月	185812099	宗家文書	記録類Ⅰ御郡奉行-G勘定関係-①上納-255-8
431	御年貢麦上納帳		文久元年7月日	186107099	宗家文書	記録類Ⅰ御郡奉行-G勘定関係-①上納-353-8
432	出穀麦上納帳		文久元年7月日	186107099	宗家文書	記録類Ⅰ御郡奉行-G勘定関係-①上納-360-6
433	豆股郷瀬村御年貢麦年賦上納帳		文久元年12月	186112099	宗家文書	記録類Ⅰ御郡奉行-G勘定関係-①上納-270
434	御年貢麦代銀上納帳		文久元年12月	186112099	宗家文書	記録類Ⅰ御郡奉行-G勘定関係-①上納-351-8
435	茶椿森代銀上納帳		文久元年12月	186112099	宗家文書	記録類Ⅰ御郡奉行-G勘定関係-①上納-351-16
436	御米蔵江粗米上納帳		文久元年12月	186112099	宗家文書	記録類Ⅰ御郡奉行-G勘定関係-①上納-352-8
437	出穀麦代銀上納帳		文久元年12月	186112099	宗家文書	記録類Ⅰ御郡奉行-G勘定関係-①上納-363-8
438	御年貢麦上納帳		文久3年6月日	186306099	宗家文書	記録類Ⅰ御郡奉行-G勘定関係-①上納-366-8
439	出穀麦上納帳		文久3年6月日	186306099	宗家文書	記録類Ⅰ御郡奉行-G勘定関係-①上納-484-6
440	書留之写 豆股金剛院		文久3年6月	186306099	宗家文書	記録類Ⅱ寺社方-A 寺社書上-17
441	世代記 永泉寺		文久3年6月	186306099	宗家文書	記録類Ⅱ寺社方-A 寺社書上-24
442	宗義達判物写	宗義達	文久3年9月14日	186309014	主藤仁文書	
443	宗義達判物写	義達花押	文久3年9月15日	186309015	主藤壽文書	
444	宗義達判物	義達	文久3年9月15日	186309015	永泉寺文書	
445	宗義達判物	宗義達	文久3年9月15日	186309015	金剛院文書	
446	豆股郷瀬村御物成上納帳		文久3年12月	186312099	宗家文書	記録類Ⅰ御郡奉行-G勘定関係-①上納-372
447	豆股・瀬西村御年貢之内御有免帳		文久3年12月	186312099	宗家文書	記録類Ⅰ御郡奉行-G勘定関係-①上納-376
448	豆股半村御物成上納帳		文久3年12月	186312099	宗家文書	記録類Ⅰ御郡奉行-G勘定関係-①上納-388
449	豆股郷瀬村御年貢麦年賦上納帳		文久3年12月	186312099	宗家文書	記録類Ⅰ御郡奉行-G勘定関係-①上納-406
450	御銀掛所江御年貢麦代銀上納帳		文久3年12月	186312099	宗家文書	記録類Ⅰ御郡奉行-G勘定関係-①上納-443-8
451	御銀掛所江茶椿森代銀上納帳		文久3年12月	186312099	宗家文書	記録類Ⅰ御郡奉行-G勘定関係-①上納-443-16
452	御米蔵江粗米上納帳		文久3年12月	186312099	宗家文書	記録類Ⅰ御郡奉行-G勘定関係-①上納-444-7
453	御銀掛所江出穀麦代銀上納帳		文久3年12月日	186312099	宗家文書	記録類Ⅰ御郡奉行-G勘定関係-①上納-487-8
454	御郡奉行所達	小森喜兵衛	文久4年2月27日	186402027	小森文書	
455	御米蔵江御年貢麦上納帳		元治元年4月	186404099	宗家文書	記録類Ⅰ御郡奉行-G勘定関係-①上納-595-8
456	金剛院寛明御判類列覧帳		元治元年9月13日	186409013	金剛院文書	
457	主藤源七郎金子請取状	主藤源七郎	元治元年9月日	186409099	主藤仁文書	
458	堵方知行亮高控	主藤源七郎	元治元年10月吉日	186410099	主藤仁文書	
459	豆股郷瀬村御物成上納帳		元治元年12月	186412099	宗家文書	記録類Ⅰ御郡奉行-G勘定関係-①上納-497
460	豆股郷瀬村御年貢麦年賦上納帳		元治元年12月	186412099	宗家文書	記録類Ⅰ御郡奉行-G勘定関係-①上納-517
461	豆股半村御物成上納帳		元治元年12月	186412099	宗家文書	記録類Ⅰ御郡奉行-G勘定関係-①上納-574
462	豆股・瀬西村御年貢之内年賦上納帳		元治元年12月	186412099	宗家文書	記録類Ⅰ御郡奉行-G勘定関係-①上納-587
463	御銀掛所江御年貢麦代銀上納帳		元治元年12月	186412099	宗家文書	記録類Ⅰ御郡奉行-G勘定関係-①上納-594-8
464	御銀掛所江茶椿森代銀上納帳		元治元年12月	186412099	宗家文書	記録類Ⅰ御郡奉行-G勘定関係-①上納-594-16
465	御銀掛所江出穀麦代銀上納帳		元治元年12月日	186412099	宗家文書	記録類Ⅰ御郡奉行-G勘定関係-①上納-596-8
466	御銀掛所江公役銀上納帳		元治元年	186499999	宗家文書	記録類Ⅰ御郡奉行-G勘定関係-①上納-601-8
467	御米蔵江粗米上納帳		元治元年	186499999	宗家文書	記録類Ⅰ御郡奉行-G勘定関係-①上納-600-6
468	御米蔵江出穀麦上納帳		慶応元年6月日	186506099	宗家文書	記録類Ⅰ御郡奉行-G勘定関係-①上納-658-6
469	豆股郷瀬村御年貢麦年賦上納帳		慶応元年12月	186512099	宗家文書	記録類Ⅰ御郡奉行-G勘定関係-①上納-631
470	豆股・瀬西村御年貢之内年賦上納帳		慶応元年12月	186512099	宗家文書	記録類Ⅰ御郡奉行-G勘定関係-①上納-649
471	御米蔵江出穀麦代銀上納帳		慶応元年12月日	186512099	宗家文書	記録類Ⅰ御郡奉行-G勘定関係-①上納-659-8
472	豆股郷瀬村御年貢麦年賦上納帳		慶応元年12月日	186512099	宗家文書	記録類Ⅰ御郡奉行-G勘定関係-①上納-662-23
473	豆股・瀬西村御年貢之内年賦上納帳		慶応元年12月日	186512099	宗家文書	記録類Ⅰ御郡奉行-G勘定関係-①上納-662-34
474	御屋形御膳方諸色通帳		慶応2年正月	186601099	宗家文書	記録類Ⅰ御郡奉行-J 郷通帳・手形-13
475	御膳方諸色通帳		慶応2年正月日	186601099	宗家文書	記録類Ⅰ御郡奉行-J 郷通帳・手形-14
476	御膳方諸色通帳		慶応2年正月日	186601099	宗家文書	記録類Ⅰ御郡奉行-J 郷通帳・手形-15
477	御作事方諸色通帳		慶応2年正月日	186601099	宗家文書	記録類Ⅰ御郡奉行-J 郷通帳・手形-16
478	御米蔵江御年貢麦上納帳		慶応2年3月日	186603099	宗家文書	記録類Ⅰ御郡奉行-G勘定関係-①上納-744-8
479	御達之控帳		慶応2年7月日	186607099	金剛院文書	
480	御米蔵江粗米上納帳		慶応2年11月	186611099	宗家文書	記録類Ⅰ御郡奉行-G勘定関係-①上納-776-7
481	豆股・瀬西村御年貢之内年賦上納帳		慶応2年12月日	186612099	宗家文書	記録類Ⅰ御郡奉行-G勘定関係-①上納-727
482	豆股・瀬西村御年貢之内年賦上納帳		慶応2年12月日	186612099	宗家文書	記録類Ⅰ御郡奉行-G勘定関係-①上納-775-32
483	御米蔵江御年貢麦代銀上納帳		慶応2年12月日	186612099	宗家文書	記録類Ⅰ御郡奉行-G勘定関係-①上納-777-4
484	御米蔵江茶椿森代銀上納帳		慶応2年12月日	186612099	宗家文書	記録類Ⅰ御郡奉行-G勘定関係-①上納-777-12
485	御米蔵江出穀麦代銀上納帳		慶応2年12月日	186612099	宗家文書	記録類Ⅰ御郡奉行-G勘定関係-①上納-787-8
486	御達之写	国分寺	慶応2年9月21日	186609021	金剛院文書	
487	御米蔵江粗米上納帳		慶応3年7月	186707099	宗家文書	記録類Ⅰ御郡奉行-G勘定関係-①上納-789
488	御米蔵江粗米上納帳		慶応3年11月	186711099	宗家文書	記録類Ⅰ御郡奉行-G勘定関係-①上納-790
489	主藤源七郎金子借用状	主藤源七郎	慶応3年12月	186712099	主藤仁文書	
490	御米蔵江茶椿森代銀上納帳		慶応3年12月日	186712099	宗家文書	記録類Ⅰ御郡奉行-G勘定関係-①上納-821
491	御米蔵江御年貢麦代銀上納帳		慶応3年12月日	186712099	宗家文書	記録類Ⅰ御郡奉行-G勘定関係-①上納-822
492	御米蔵江出穀麦代銀上納帳		慶応3年12月日	186712099	宗家文書	記録類Ⅰ御郡奉行-G勘定関係-①上納-823
493	豆股村天道地御物成引方帳		慶応3年12月日	186712099	宗家文書	記録類Ⅰ御郡奉行-G勘定関係-①上納-853-34
494	豆股村天道地御物成引方帳		慶応3年12月日	186712099	宗家文書	記録類Ⅰ御郡奉行-G勘定関係-①上納-964-34
495	御船鑑方諸色通帳		明治元年正月日	186801099	宗家文書	記録類Ⅰ御郡奉行-J 郷通帳・手形-19
496	邸改御役所虎通帳		明治元年正月日	186801099	宗家文書	記録類Ⅰ御郡奉行-J 郷通帳・手形-20
497	会計御役所虎通帳		明治元年正月日	186801099	宗家文書	記録類Ⅰ御郡奉行-J 郷通帳・手形-21
498	御年貢麦上納帳		慶応4年6月日	186806099	宗家文書	記録類Ⅰ御郡奉行-G勘定関係-①上納-872
499	真言宗金剛院精進寺本末帳		慶応4年7月	186807099	宗家文書	記録類Ⅱ寺社方-A 寺社書上-18
500	御米蔵江粗米上納帳		明治元年10月日	186810099	宗家文書	記録類Ⅰ御郡奉行-G勘定関係-①上納-873

501	本石系図			明治以降	186899999	本石佐市文書	
502	本石系図			明治以降	186899999	本石直己文書	
503	御南方諸色通帳			明治2年正月日	186901099	宗家文書	記録類Ⅰ御郡奉行-J 郷通帳・手形-70
504	御屋形御膳方諸色通帳			明治2年正月日	186901099	宗家文書	記録類Ⅰ御郡奉行-J 郷通帳・手形-71
505	会針御役所炭通帳			明治2年正月日	186901099	宗家文書	記録類Ⅰ御郡奉行-J 郷通帳・手形-72
506	郡政役所炭通帳			明治2年正月日	186901099	宗家文書	記録類Ⅰ御郡奉行-J 郷通帳・手形-73
507	御作事方諸色通帳			明治2年正月日	186901099	宗家文書	記録類Ⅰ御郡奉行-J 郷通帳・手形-74
508	御北方諸色通帳			明治2年正月日	186901099	宗家文書	記録類Ⅰ御郡奉行-J 郷通帳・手形-75
509	御出納方江公役銀上納帳			明治2年6月日	186906099	宗家文書	記録類Ⅰ御郡奉行-J 郷通帳・手形-80
510	己巳年前方々手形			明治2年	186999999	宗家文書	記録類Ⅰ御郡奉行-J 郷通帳・手形-81
511	龜卜占甲之写			明治3年3月初旬	187003099	岩佐文書	
512	民政権大属達	民政権大属	主藤源七郎	明治4年6月13日	187106013	主藤仁文書	
513	畠田物成割当手控帳		自派院惣旦中	明治5年10月日	187210099	岩佐文書	
514	下県郡豆殿村共有墓籍台帳			明治20年2月	188702099	金剛院文書	
515	吉祥教化			明治30年12月	189712099	主藤寿文書	
516	年寄中達		阿比留善左衛門	辛卯正月6日	999901006	阿比留修文書	
517	土屋相模守書状	土屋相模守		2月4日	999902004	金剛院文書	
518	酸豆郷住持・給人中訴状	酸豆郷住持・給人中	御目付衆中	己2月19日	999902019	杉村文書	
519	上(献金書上)			2月	999902099	宗家文書	記録類Ⅰ御郡奉行-H 諸請願・②御請書-28
520	御郡奉行所達	御郡奉行	主藤仁右衛門	子3月23日	999903023	小森文書	
521	宗盛貞判物(断簡)	宗盛貞	金剛院	3月28日	999903028	金剛院文書	
522	以前豆殿村・瀬村・内院村物成之書付		御奉行所中	3月吉日	999903099	杉村文書	
523	折願文	盛賢	金剛院御同宿	4月28日	999904028	金剛院文書	
524	乍恐口上覚	孫十郎	御郡方	4月	999904099	小森文書	
525	産物之品取登々候様ニ仰渡候帳面之控			5月	999905099	宗家文書	記録類Ⅰ御郡奉行-C 産物・用木-①産物-1-9
526	主藤源七郎書状	主藤源七郎	松浦□□	6月5日	999906005	主藤仁文書	
527	酸豆郡代役ニ付言上写			6月21日	999906020	杉村文書	
528	宗妙意書状写	妙意	そうみやさいの御房	6月28日	999906028	宗家文書	
529	金剛院寛明口上覚案	金剛院寛明	国分寺	6月日	999906099	金剛院文書	
530	権藤又次郎証状	権藤又次郎	大田八之助	7月3日	999907003	主藤仁文書	
531	御郡奉行所達	御郡奉行所	阿比留善左衛門	7月18日	999907018	阿比留修文書	
532	下知状	景満花押	八郎中	8月2日	999908002	主藤寿文書	
533	宗綱長書下写	調長判	岩佐助三郎	8月14日	999908014	宗家文書	御旧判控(記録類Ⅱ-御判物-A 判物-98)
534	宗貞信判物写	貞信御判	阿比留彦五郎	8月14日	999908014	宗家文書	御旧判控(記録類Ⅱ-御判物-A 判物-98)
535	宗貞盛書下写	貞盛御判	小嶋主斗丸	8月28日	999908028	宗家文書	御旧判控(記録類Ⅱ-御判物-A 判物-98)
536	酸豆之郷族之浮所務		杉村智興	9月5日	999909005	杉村文書	
537	国分寺役借書状		金剛院	9月14日	999909014	金剛院文書	
538	法度	吉智花押	つゝの郡	9月25日	999909025	主藤寿文書	
539	法度写	吉智花押	つゝの郡	9月25日	999909025	主藤寿文書	
540	宗義智書下写	吉智御判	つゝの郡	9月25日	999909025	宗家文書	御旧判控(記録類Ⅱ-御判物-A 判物-98)
541	豆殿郡代書物			9月26日	999909026	杉村文書	
542	金剛院寛明口上覚案	金剛院寛明	国分寺	10月日	999910099	金剛院文書	
543	船頭近左衛門口上覚	船頭近左衛門	主藤吉左衛門	未10月	999910099	主藤仁文書	
544	上申書	金剛院寛明	国分寺・寺社奉行所	11月5日・6日	999911005	金剛院文書	
545	八郷社領坪付渡帳			戌11月	999911099	宗家文書	記録類Ⅱ 寺社方-D 寺社諸覚-22
546	口上覚	小森権左衛門	山下清右衛門	卯11月22日	999911022	小森文書	
547	斎藤□蔵覚書	斎藤□蔵	主藤源七郎	亥12月7日	999912007	主藤仁文書	
548	宗宗香書下写	宗香花押	つゝのこほりのさた人の中	12月11日	999912011	宗家文書	
549	草役六覚		主藤源七郎	己12月22日	999912022	主藤仁文書	
550	証文(前欠)		浜屋治兵衛	12月	999912099	主藤仁文書	
551	口上之覚	小森八郎長清	竹岡伝五郎	丙12月	999912099	小森文書	
552	口上覚			4月	999904099	小森文書	
553	主藤源七郎外四名証状	主藤源七郎ほか	□瀬栄造・□□四郎	□月8日	999999908	主藤仁文書	
554	小森氏系図				999999999	小森文書	
555	乍恐口上覚	小森権左衛門		子10月	999910099	小森文書	
556	阿比留家系図				999999999	阿比留修文書	
557	岩佐家系図				999999999	岩佐文書	
558	御判物目録				999999999	金剛院文書	
559	御判物覚				999999999	金剛院文書	
560	口上覚案				999999999	金剛院文書	
561	金剛院由緒書				999999999	金剛院文書	
562	御条目				999999999	金剛院文書	
563	家系(主藤歴代姓名)				999999999	主藤仁文書	
564	判物控(年月日・差出・宛所)				999999999	主藤仁文書	
565	主藤氏家系				999999999	主藤仁文書	
566	主藤氏系図		藤七郎		999999999	主藤仁文書	
567	某口上覚(後欠)				999999999	主藤仁文書	
568	歴代戒名覚				999999999	主藤仁文書	
569	某口上覚(後欠)				999999999	主藤仁文書	
570	鉄砲挺数				999999999	主藤仁文書	
571	畑反数覚(断簡)				999999999	主藤仁文書	
572	覚書(断簡)				999999999	主藤仁文書	
573	郷村名称覚				999999999	主藤仁文書	
574	勘定書(後欠)				999999999	主藤仁文書	
575	宗氏系図				999999999	主藤仁文書	
576	主藤某覚書(断簡)				999999999	主藤仁文書	
577	判物性				999999999	主藤仁文書	
578	覚書(断簡)				999999999	主藤仁文書	
579	年貢皆済目録(断簡)				999999999	主藤仁文書	
580	某願書草案				999999999	主藤仁文書	
581	金子覚書				999999999	主藤仁文書	
582	某書状(断簡)				999999999	主藤仁文書	
583	某書状(後欠)				999999999	主藤仁文書	
584	主藤家系図(断簡)				999999999	主藤仁文書	

585	某口上覚（断簡）				99999999	主藤仁文書	
586	某覚書（断簡）				99999999	主藤仁文書	
587	宗氏判物断片				99999999	主藤仁文書	
588	宗貞茂書下	貞茂花押	殿々代官	5月25日	999905025	主藤寿文書	
589	断簡				99999999	主藤寿文書	
590	就豆殷豆住持職田畠等坪付				99999999	主藤寿文書	
591	天道菩薩由來記				99999999	主藤寿文書	
592	千手教化				99999999	主藤寿文書	
593	宗義智判物	宗義智	殷豆郡		99999999	杉村文書	
594	以前豆殷ニ付候書物				99999999	杉村文書	
595	包紙（「此書物如何成ニ有之候哉、豆殷観音住持門久方江有之候、彼方ヨリ明和乙酉年送達ス」）				99999999	杉村文書	
596	豆殷郡所寄取調ニ付大浦権太夫宛書	杉村采女助	大浦権太夫	壬寅	99999999	杉村文書	
597	郡代之節公役調物盛付ノ事				99999999	杉村文書	
598	（郡中御定覚書）				99999999	杉村文書	
599	（豆殷郡代仕置定）				99999999	杉村文書	
600	（郡中仕置定下書）				99999999	杉村文書	
601	（公役定）				99999999	杉村文書	
602	御鷹野御法度之御判物義智公				99999999	杉村文書	
603	（豆殷へ人被遣候一件ニ付年寄中覚書		杉村采女		99999999	杉村文書	
604	知行坪付之覚（後欠）				99999999	阿比留修文書	
605	対馬国神社帳・対馬国寺院帳				99999999	宗家文書	記録類Ⅰ-表書札方-G 寺社・年中行事-①寺社-14
606	産物吟味帳				99999999	宗家文書	記録類Ⅰ-御郡奉行-C 産物・用木-①産物-1-5
607	八郡寺社記				99999999	宗家文書	記録類Ⅰ-御郡奉行-F 寺社-10
608	八郡寺社記				99999999	宗家文書	記録類Ⅰ-御郡奉行-F 寺社-11
609	覚書				99999999	宗家文書	記録類Ⅰ-御郡奉行-K 諸覚-16-33
610	豆殷郷村境書				99999999	宗家文書	記録類Ⅰ-御郡奉行-O 雜-42-8
611	対州神社并社家名数帳				99999999	宗家文書	記録類Ⅱ-寺社方-C 寺院記録・神社帳-4
612	対州神社大帳				99999999	宗家文書	記録類Ⅱ-寺社方-C 寺院記録・神社帳-6
613	対州神社帳				99999999	宗家文書	記録類Ⅱ-寺社方-C 寺院記録・神社帳-31
614	家系 阿比留吉				99999999	宗家文書	記録類Ⅳ-家記史料-E その他参考資料-98
615	家系 太田馬次郎				99999999	宗家文書	記録類Ⅳ-家記史料-E その他参考資料-99
616	家系 主藤主				99999999	宗家文書	記録類Ⅳ-家記史料-E その他参考資料-101
617	家系 山下市郎				99999999	宗家文書	記録類Ⅳ-家記史料-E その他参考資料-102
618	家系 岩佐善吉				99999999	宗家文書	記録類Ⅳ-家記史料-E その他参考資料-103
619	家系 小森権太				99999999	宗家文書	記録類Ⅳ-家記史料-E その他参考資料-104
620	家系 阿比留佐兵衛				99999999	宗家文書	記録類Ⅳ-家記史料-E その他参考資料-105
621	覚書	観音住持円喜坊		享保17年ヨリ	17329999	主藤寿文書	
622	公私諸覚書	住持門久		明和元年9月より	17640909	主藤寿文書	
623	対馬国下県郡豆殷村神社由緒調査書	主藤辰五郎		明治以降	18689999	主藤寿文書	

## 調査員の手記から

## 〔調査・研究の軌跡 その2〕

2003年5月10～12日 調査員E

4月から、大学院海老澤爽ゼミナールで対馬関係史料の勉強がはじまりました。その土地のイメージをつかもうということもあって、今年のゼミ合宿の目的地は対馬に決まりました。

豆殷の各区長さんたちにアポイントメントをとって、191戸あるといわれる屋号の聞き取り調査を行ないました。私にとって現地調査は初めての体験で、屋号比定地にややこしい異動があって難渋しました。短い時間ながら先輩とともに実際に村を歩き、豆殷の人々の優しさにもふれることができました。

2003年6月8～12日 調査員B

いよいよ水利・灌漑調査。田植えを終えたばかりの田圃の水面に明るい陽光が照り映え、蛙をねらって陸下の穴から這い出てきた大きなマムシを、薫が上空を旋回しながら覗き見えています。

北から晩春の猛風がすさぶなか、僕たちの担当となった神田川上流域の水掛かり調査がはじまりました。神田川右岸の志多田・中ウズのあたりでは、用水も畦畔も土や石を踏み固めただけの素朴なもので、時折田圃のなかに大きな石が除かれることなく転がって、ぽっかりと上方の岩肌を露わにしています。対岸の傾斜地には狭いけれども美しい棚田が広がっていました。日本にはもうほとんど見られなくなった懐かしい風景がここには残っていました。

夜には調査成果を確認し合い、前回入手した明治地籍図の土地利用情報を落としたベースマップの評価をめぐって議論しました。

金剛院所蔵資料の調査にも参加しました。南北朝期に遡る大般若経や宗氏判物、雑多な冊子・絵画類を、蒸し暑い本堂で歴史の堆積した埃にむせびながら整理しました。（吉田正高「金剛院所蔵資料の整理・保存」参照）

## 〔調査・研究の経緯 その2〕

- ⑫2003年5月10～12日 ゼミ合宿・第3次史料探訪（長崎県立歴史民俗資料館・長崎県立図書館）《海老澤爽・加藤麻彩子・加藤裕美子・田村仁・徳永健太郎・永田史子・藤木正史・堀祥岳・松澤徹・山本真紗美・山本隆太郎》
- ⑬2003年6月8日～12日 豆殷灌漑調査・第4次史料探訪（金剛院・長崎県立対馬歴史民俗資料館）《海老澤爽・服部英雄・徳永健太郎・永田史子・堀祥岳・本田佳奈・吉田正高・山本隆太郎・黒田智》

# 対馬豆酩郡主の系譜

黒田 智

## 1 宗氏領国支配と豆酩郡主

古来、豆酩は九州と朝鮮を結ぶ航路の寄港地であり、早く『和名抄』にその名がみえる。集落北部の保床山には5～7世紀の横穴式石室墓の古墳があり、古代対馬の南部の中心地であったと推測されている。また『日本書紀』顕宗天皇3年(487)4月5日条に、日神の乞によって「高皇産靈神」に磐余の田14町が献ぜられ、対馬下県直が祠り仕えたとあって、延喜式の式内社である「高皇産靈神」＝高御魂神社を中心に発展していったと考えられている。さらに、現在は多久頭魂神社となっている観音堂の梵鐘は、寛弘5年(1005)の「豆酩御寺」の前壇越である権掾阿比留宿弥良家によって奉懸されて以来、仁平3年(1153)・康永3年(1344)の改鋳を経て今に伝えられている。

14世紀末になると、太宰府官人惟宗氏の流れをくむ宗氏が地頭代、やがては守護として対馬に定住し、島主を中心に宗氏一族が島内各地に拠点をめぐらせ領国支配を推し進めてゆく。宗氏領国下における豆酩もまた、対馬国衙在庁・豆酩郡司の手を離れて、豆酩郡主宗貞澄・盛世流の手に託されることになる。

中世の豆酩関係文書はのべ230通余り残されている(徳永健太郎「豆酩関係史料について」)。このうち宗氏の発給文書の初見は、応永初年頃と思われる5月25日

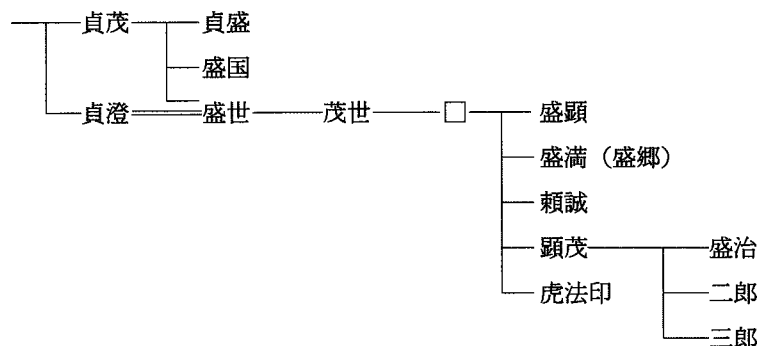
「宗貞茂書下写」である。この文書は「所々代官」に対して「豆酩天道御本堂」の勧進を命じ、村伝えに勧進物を運搬するよう下達したものである<sup>(1)</sup>。続く応永17年(1410)12月日の「宗貞茂書下写」は、金剛院への田畠寄進状である<sup>(2)</sup>。

このように15世紀初頭の宗氏島主の対馬定着後まもなく、島主が豆酩の寺社に対する保護政策を次々と打ち出していたことがうかがえる<sup>(3)</sup>。以下に幾つか挙げてみよう。

まず第1に、金剛院への宝物施入である。宗貞茂による大般若経、貞盛の「佛菩薩唐絵」、貞国の「十六善神唐絵」の施入がなされたといわれている<sup>(4)</sup>。第2には、金剛院宝殿の建立である。金剛院には、「建立し奉る大師堂金剛院御宝殿 宝徳二年戊辰十一月廿八日 願主平朝官形部少輔貞盛 金剛院現住 肥前生 覚仙」という棟札の写しが残っている<sup>(5)</sup>。第3に、観音堂高麗版一切経の寄進である。現在も多久頭魂神社に残る一切経は、貞享2年(1686)成立の『體豆郡寺社記』によれば、「一、大般若経 一部 右者 貞盛様自御寄進」と伝えられていた。

島主の定着によって領国支配が確立すると、対馬各郡に郡主を配置する、いわゆる郡主体制が確立した。最初に豆酩を支配した郡主宗貞澄は、島主貞茂の弟であり、次の郡主盛世は貞茂の息子で次代の島主貞盛の弟にあた

〔系図〕豆酩郡主宗貞澄・盛世流





りる。豆酄郡主家は、佐賀や府中にいた島主と強い結びつきをもった一族だったようだ。系図を示しておこう。

豆酄郡主は、豆酄郡内の内政に積極的に関わっていた様子がうかがわれる。現存する文書だけからでも、代替わりごとに豆酄郡内の諸階層に対して所領安堵の書下を発給していたことがわかる。これらは、「貞澄・盛世任御形之旨、茂世御判形在之」・「同前任三代坪付之儘」<sup>(6)</sup>や「義盛・盛長・盛顕任判形旨」<sup>(7)</sup>とあるように、宗氏領国体制草創期の宗貞澄・盛世の治世を先例とし、あるいは前代の島主の命を履行するものであった。

またいわゆる「少式・宗体制」のもとで、豆酄郡主は宗氏による北部九州支配の一翼を担っていた<sup>(8)</sup>。

すなわち、②筑前守護代代官として宗貞澄の名がみえる<sup>(9)</sup>。また①宗茂世は、九州侍所職に補任されている。さらに③宗茂世による三前（筑前・豊前・肥前）への進出の様相をみることもできる。たとえば、①筑前三笠郡の知行、②宗茂世の金剛院領押領（粥田荘史料）、③宗重与の宇佐宮領横領（到津文書）などが確認できる。文明元年（1469）8月9日「宗茂與書下写」豆酄山下左衛門助へ筑前三笠郡代官を補任したのも郡主のこのような活動によるものであろう<sup>(10)</sup>。また④博多代官には宗茂世・顕茂が任じられている<sup>(11)</sup>。加えて⑤朝鮮通交の受図書人ともなっていたことも既に指摘されている<sup>(12)</sup>。盛世は不明ながら、世宗16年（1434）から20年（1438）までに、茂世の場合は世宗31年（1444）10月に確認できる。

九州から対馬への玄関口であった豆酄とそこを支配する豆酄郡主は、北部九州地域と密接な関係を結んでいた。また軍事的には、九州本土侵攻あるいは対馬防衛の前線拠点としての役割を果たしていたと考えられる。

## 2 豆酄をめぐる争乱——歴史は3度繰り返された

確かに豆酄は、古くから北部九州と対馬にまたがって展開する宗氏領国支配にとって、きわめて重要な軍事拠点であった。

豆酄が戦乱に巻き込まれた1度目は、寛元4年（1246）の宗重尚による阿比留征伐にまでさかのぼる。対馬在庁の阿比留平太郎の謀叛により、太宰府の命を受けた宗重尚が兵を率いて阿比留氏を征伐した。現在も豆酄集落内の鶴原付近は、合戦場であったとする伝承が伝えられている。この事件は、長節子によって後世の宗氏支配が確

立した時期に、対馬宗氏の始祖伝説として仮作されたものであることが指摘されている。けれども、このとき重尚は太宰府を発って対馬豆酄に上陸して金剛院に駐屯したとされている。また戦後、重尚は対馬の地頭職に補任され、後には実弟助国に封を譲って隠遁先の豆酄で死去し、内山に葬られたという。豆酄は宗氏の対馬上陸後の最初の軍事拠点であり、その後の宗氏の始祖重尚と豆酄との浅からぬ因縁が説かれている。

15世紀初頭に島主が対馬に定着して後も、大内氏と少式氏はめまぐるしく筑前博多・太宰府の争奪戦を繰り返し、その対立は北部九州へ広がりをもせていた。また対馬国内では、宗氏の庶流仁位中村系諸氏との内紛もやむことがなかった。まさに内憂外患をかかえた宗氏島主家の支配は不安定であり、豆酄もまたこうした争乱に巻き込まれてゆく。

2度目は、応永8年（1401）の宗賀茂の乱である。この事件は仁位中村氏による謀叛で、長節子が同時代史料によって事件の経過を明らかにしている<sup>(13)</sup>。北部九州を転戦していた貞茂は謀叛の知らせを受けて博多から対馬へ帰島し、このときも応永9年7月8日に豆酄村に着津して、金剛院に駐留したと伝えている。

2つの対馬争乱は、いずれも筑前博多から豆酄に上陸して金剛院に駐屯した後、鎮圧するという対馬島主の共通の行動パターンをたどっている。

その後も北部九州における政治情勢は安定しない。文明元年（1469）7月、島主宗貞国は少式頼忠とともに太宰府から大内氏を駆逐し、一時筑前の奪還に成功した。けれども、次第に戦局は大内氏優位へ向かい、永正3年（1506）2月には豆酄郡主宗顕茂が敗死し、宗氏はついに筑前国三笠郡という北部九州における最後の足場を失ってしまう<sup>(14)</sup>。

そして迎えた3度目の争乱が、享禄元年（1528）に勃発した池の屋形の乱であった。

豆酄郡主顕茂の子息盛治は、顕茂の戦死後は肥前に預けられていたが、島主盛賢に恨みを抱く津田主馬や豆酄郡主であった叔父の盛郷と策謀をめぐらせ、クーデターを企てたという。享禄元年10月17日、豆酄へ上陸した宗盛治は、府中に進撃し、島主盛賢が拠る池の屋形を囲む。激しい攻防戦の末、盛治は池の屋形へ入城を遂げ、島主盛賢は城を出て佐須郡主で守護代であった佐須盛廉を頼っ

て落ちのびる。同月10日、佐須盛廉は兵を率いて再び池の屋形を攻城し、ついに盛治の敗死によってクーデターは鎮圧される。

ここでも宗盛治が九州から対馬豆殷に上陸している点は興味深い。またこの事件は、特に北部九州方面での宗氏領国支配を支えてきた豆殷郡主の断絶をもたらし、豆殷の政治的地位の低下を決定的にしたものとして重要である。

〔史料1〕3月28日「盛門書状」(『内山文書』)

(画) (彼) (堀の主) (生)  
りやう日申やうに、かのほりのぬしの事ハ、しやう  
(害) (由) (仰) (出)  
かいをさせられへきよし、しかとおほせいたされ候  
(方) (涯分) (株) (上)  
へ共、このはうかいふんわひ事申あけ候によて、し  
(生害) (然) (然)  
やうかいの事をハ、さしをかれ候、しかるへく候、  
(然) (兄弟) (鼻突)  
しかれハ、三郎方きやうたいともに御はなつかせら  
(由) (仰) (出) (得)  
れ候よし、おほせいたされ候、御心ゑのため候へく  
(去作) (涯分) (方) (上)  
候、さりながら、これもかいふんこのはうより申あ  
(目) (懸) (久)  
け候て、御めにかけ申へく候、さのミひさしき事に  
(安)  
てハ、あるましく候、こゝもとの事ハ、御心やすく  
(思) (召) (趣)  
おほしめしあるへく候、まつゝ御 上意のおもむ  
(得)  
き、御心ゑのために申候、恐々謹言、

三月廿八日 盛門(花押)

宗右衛門尉殿

〔史料1〕は、佐須盛廉が内山氏の一族である宗右衛門尉に対して、「堀の主」=豆殷郡主宗盛郷の生害と「三郎」=宗盛治の弟の出仕停止の減罪を知らせている文書である<sup>(15)</sup>。盛廉は盛郷の舅にあたり、事件後に与同による極刑を受けた盛郷の助命に奔走したようだ。とはいえ事件後、豆殷郡主家とその一党が事実上断絶していたことをうかがわせる。

〔史料2〕『宗氏世系私記』(島雄成一文書)

(一四八六)  
同十八年丙午、(中略)亦定歳首饗祝之日 自古宗氏有  
饗土之 塀盤之式自 古管下之諸士隊長宗族盛首献  
口節、 饗、号坑盤雜饗、以小番日為例、以正月  
二日饗佐須・豆殷一隊、以三日饗與良・仁位、以四  
日饗三根・伊奈、以五日饗佐護・豊崎、以六日饗外  
様衆 今所諸六<sup>(16)</sup>  
十人是也、

〔史料3〕『宗氏世系私記』(島雄成一文書)

盛賢収兵賞諸士戦功、欲使盛廉豆殷郡代、盛廉辞曰、某已任守護代又兼佐須郡代、宜使弟盛員為豆殷郡代、盛賢許之、其他恩賞皆有差、自古以正月二日饗佐須党、其遺例今猶存、

〔史料2〕・〔史料3〕は、いずれも『宗氏世系私記』の一節で、正月に行なわれた島主による歳首饗祝に関する記事である。〔史料2〕によれば、文明18年(1486)では、2日に佐須・豆殷、3日に与良・仁位、4日に峯・伊奈、5日の佐護・豊崎、6日以降のそのほかの外様の家臣が饗を受ける決まりになっていたことがわかる。守護代を勤める佐須郡主・佐須党と、博多代官や九州侍所職を勤めた豆殷郡主・豆殷党とが、宗氏家臣団秩序のなかで最上位にあったことを示している。

ところが〔史料3〕より、池の屋形の乱後の正月2日の饗祝は佐須党のみとなっている<sup>(17)</sup>。また近世地誌類をみても、豆殷郡は常に8郡中最末尾に記載されることが多くなる。

さらに、事件を伝える貞享3年(1686)の陶山訥庵『宗氏家譜』やその情報源の1つである『宗氏世系記』は、佐須盛廉勲功記や吉田弥五郎奮戦記といった性格をもっている。池の屋形の乱をめぐる合戦譚は、近世の宗家家臣団の由緒の成立に直結してゆくのである<sup>(18)</sup>。

〔史料4〕「采女智廣朴翁公正淳居士慈像讃書」

(杉村文書)

朴翁正淳居士慈像讃

居士者、平姓杉村氏采女助智廣、法名正淳其号朴翁、累世生于対州、歴任 州牧也、五世之先佐須氏宮内少輔盛員<sup>本和守弟也</sup>後改氏為杉村也、享禄元戊子年有九郎盛治者、為奪対州而、率肥前凶徒来襲、取府城矣、於是州兵攻府城、盛員攻東門先登、既而州中諸士等相從而入焉、盛治不能敵而、忽自殺矣、当斯時也、微盛員国其危矣、太守<sup>得盛公之伯父也</sup>之娘<sup>義調公之妹也</sup>妻、盛員之子康吉生調長、調長生智清也、居士乃其弟也、(中略)

正保三年龍集丙戌春二月初八日

洛東山下茂源竺衲紹柏<sup>(19)</sup>

〔史料3〕・〔史料4〕にみるように、豆殷郡主家の失脚後、事件の鎮圧に功績のあった佐須盛廉の実弟盛員が豆殷支配に当たり、その子孫が杉村氏を名乗って近世豆殷の半村の知行を認められることになる。〔史料4〕は、池の屋形の乱における盛員の活躍が、杉村氏の始祖神話として語り継がれていったことを示している。

### 3 豆殷師殿社——豆殷郡主のよすが

表2-11 『対州神社誌』にみる師殿社

	郡	村	神社	備考
1	豊崎郡	富ヶ浦	軍殿	師殿社
2		比田勝村	軍殿	長兵衛建立、比田勝氏の祖の討死の霊
3	伊奈郡	伊奈村	軍大明神	
4		下里村	軍大明神	市右衛門先祖が佐須小茂田より勧請
5	峯郡	木坂村	軍大明神	祭神日本武尊、浜殿社
6		吉田村	軍神	村の浦に住む毒蛇のせいで往来が難儀、宗小惣左衛門が松古木から射殺、死去後に惣左衛門を祀る
7		賀佐村	軍大明神	
8	仁位郡	仁位村	軍殿	祭神武位起命
9		仁位村	軍殿	浜殿社
10		小綱村	綱嶋軍殿	
11		荷松村	軍殿	
12		下浦村	綱嶋軍殿	
13		下浦村	軍大明神	柳の弓矢を奉納
14	与良郡	味方村	軍殿	倭忠右衛門建立、浜殿
15		久和村	軍神	若宮八幡社
16	佐須郡	小茂田村	軍大明神	蒙古合戦で宗助国が討死、斎藤兵衛三郎資定討死の勲功祠あり
17	醴豆郡	醴豆村	軍神	神主三位
18	府内		軍大明神	

豆酸郡主家の没落後、かつての郡主支配の面影は、郡主屋形跡地と伝えられる「ガランゴウ」とその前に建つ永泉寺に眠る郡主たちの墓に加えて、師殿社として残っていた。

『津島紀事』には「師殿社 郡主宗兵部少輔盛世霊」とあって、豆酸郡主宗盛世を祀る神社とされている。文安元年（1444）、豆酸郡主宗盛世は、実兄の豊崎郡主宗盛国とともに筑前春日山で戦死している。盛国は、次の島主貞国の父に当たるから、宗氏島主の祖・盛国の顕彰とともに盛世の慰霊がなされたものと考えられる。大永3年（1523）8月6日「宗盛顕寄進状」によれば、豆酸郡主宗盛顕が「三位」に対して、曾祖父代々の社僧として免田の安堵を定めている<sup>(20)</sup>。

但し、『対馬国大小神社帳』では高御魂神社の末社で、「宗氏霊」を祭神とするとされている<sup>(21)</sup>。また『対島州神社大帳』や『対島国神社帳・寺院帳』では宗助国を祀るとされている<sup>(22)</sup>。

こうした混乱は、「師殿社」・「軍殿社」・「軍大明神社」とよばれた神社が、対馬各地に存在するからかもしれない。貞享3年（1686）11月22日に澤田源八が編纂した『対州神社誌』からピックアップしてみよう。

対馬では、戦死者や村の英雄を「軍大明神」として祀ることがあったようだ。師殿社の初見史料は正平24年（1369）「某寄進状写」の「さすのいくさ神」で、佐須郡古茂田で蒙古軍を迎え撃って戦死したといわれる宗助国

を祀ったものである<sup>(23)</sup>。

ともあれ、豆酸郡主のよすがは、宗盛世を祀る豆酸師殿社として現在まで伝えられている。

この師殿社を代々管理してきたのが、「三位」とよばれた半俗の僧侶たち＝「クゾウ」であった。その後もクゾウたちは対馬藩によって公役を免除され、クゾウたちが守る社廟は藩主らの崇敬を集め、手篤い保護を受けていった。近世の豆酸は、政治的には8郡中最下位に没落したものの、引き続き天道信仰の聖地として宗教的には高い地位を保ち続けていったのである。

## 注

- (1) 主藤寿文書（東京大学史料編纂所写真帳、長崎県立長崎図書館写真帳）。
- (2) 『長崎県史』資料編1 長崎県 1963年。
- (3) 荒木和憲「対馬島主宗貞茂の政治動向と朝鮮外交」（『日本歴史』653 2002年）。
- (4) 『寺院分古社寺調査書』金剛院（東京大学史料編纂所架蔵）。
- (5) 金剛院所蔵『書留之写』、長節子『中世日朝関係と対馬』吉川弘文館 1987年参照。
- (6) 文明6年（1474）3月6日「宗盛顕寺領安堵状」（永泉寺文書、前掲注（2）『長崎県史』）。
- (7) 大永7年8月10日「宗盛満寺領安堵状」（主藤寿文書、東京大学史料編纂所写真帳、長崎県立長崎図書館写真帳）。
- (8) 佐伯弘次「大内氏の筑前国支配」（『九州中世史研究』1 1978年）。

- (9) 応永15年(1408)8月15日「宗貞茂書下」(御馬廻御判物控・宗家文書、前掲注(2))『長崎県史』。
- (10) 御旧判控(宗家文庫 記録類Ⅱ-御判物-A判物98)。
- (11) 鈴木棠三編『宗氏家譜』(対馬叢書3 村田書店 1972年)による。「文明元年(中略)宗出羽守貞秀為対馬守護代職、先是貞国従弟宗兵部茂世嗣父盛世之家、為豆酩郡主、亦領筑前三笠郡、為九州侍所職、(中略)同十年戊戌、貞国以其族宗兵部茂為博多代官」。
- (12) 『朝鮮王朝実録』世宗実録31年5月壬午条。前掲注(5)長節子著書参照。
- (13) 前掲注(5)長節子著書。
- (14) 『宗氏家譜』(前掲注(11))によれば、「同三年丙寅二月、豆酩郡主宗治部大輔頭茂在筑前三笠郡、与大内勢戦不克敗死、終失三笠之地、」とされている。
- (15) この文書については、2004年1月6日田村仁報告「内山文書翻刻」(早稲田大学海老澤ゼミ)などをもとに、黒田の判断で解釈した。資料編参照。
- (16) 『宗氏世系私記』(島雄成一文書 東京大学史料編纂所写

真帳)。資料編参照。

- (17) 『宗氏世系私記』は、『宗氏家譜』に先行する編纂物と思われる。『宗氏家譜』(前掲注(11))によれば、文明18年条には「自是後、毎歳正月二日於府城饗大膳修理等、号之佐須党、其禮至今」とされ、豆酩党がかつて正月2日に饗祝を受けていた記述は削除されている。
- (18) 『宗氏家譜』(前掲注(11))や『宗氏世系私記』(島雄成一文書、東京大学史料編纂所写真帳)といった近世編纂史料による。
- (19) 杉村文書(東京大学史料編纂所写真帳)。
- (20) 「宗家判物写」(前掲注(2))。内容から偽文書である可能性も指摘しておきたい。
- (21) 宝暦10年12月 日『対馬国大小神社帳』(宗家文庫-記録類Ⅱ-寺社方-C2)。
- (22) 年未詳『対馬州神社大帳』(宗家文庫-記録類Ⅱ-寺社方-C5)、『対馬国神社帳』(宗家文庫-記録類Ⅱ-表書札方-G①14)。
- (23) 宗家御判物写(『南北朝遺文』九州編 4789号文書)。

## 調査員の手記から

### 〔調査・研究の軌跡 その3〕

#### 2003年3月2～6日 調査員A

まだまだ風が冷たいけれども小春日和に恵まれた対馬空港を発ってレンタカーで豆酩にたどり着くと、時間を惜しむかのように早々に調査に取りかかりました。まず本石久知さんと本石直己さんのお宅でお話をうかがい、ご所蔵の文書類を熟覧・撮影しました。

とてもお茶目な好々爺で、最高のインフォーマントでもある直己さんは、忙しい漁の合間を縫って豆酩北部の山間部の地名を案内してくれました。私たちは豆酩集落から北へ車を走らせ、美女塚から県道をそれて古道を裏八丁角へ向かいました。「美女塚の先のセンカミ(塞神)様にガガッパが出とってばかされた!馬から落っこちて土産が糞になった。ポンのクソがヒィとなって恐ろしいことじゃった!」前日の雨でぬかるんだ林道をゆくレンタカーの足取りは頼りなく、深く暗い雑木の森を左右に揺れながらゆっくりと進んでゆきます。

林道沿いの石鳥居から石段を登った社殿の、そのまた奥の苔むした森に裏八丁角の累積段がひっそりと佇んでいました。このあたりは照葉樹の原生林が広がり、杉の巨木も多い。早春の木漏れ日がきらきらと輝き、遠くから御手洗川のせせらぎが聞こえます。この森の奥には、霊峰龍良の雄山・雌山の頂きがあり、反対側には結戻し公園のある瀬川を越えて対岸に内山の集落、さらには対馬最高峰矢立山が控えているはずです。

#### 2003年9月6～14日 調査員F

豆酩の灌漑補充調査に加えて、浅藻・内院・内山といった周辺集落で地名の聞き取り調査を行ないました。

今年の夏は厳しい残暑が続き、容赦なく照りつける日差しをつば広の帽子を目深にかぶって防ぎ、汗だくになりながら一軒一軒回り歩きました。夕闇迫る小浅藻湾。波戸の穏やかな波の底では、手を伸ばせばつかめるほど間近にたくさんの雑魚が静かに揺れています。待ち合わせの時間にAさんがやってきて、お互い少々バテ気味の真っ黒になった顔を見合わせて笑いました。

金剛院資料の整理作業に参加しました。今年一番といわれる超大型台風接近の情報にとまどいながら、雨戸をたたき風音が次第に激しくなるのに追い立てられ、それでも丹念に大般若経を薄様に包む単調な作業を繰り返しました。何とか全てを整理し終えることができたときは本当に嬉しかった。

民宿「やまむら」で迎えた台風の前夜。遠く豆酩崎から巨大な高波がざっふんと押し寄せ、激しい風雨が屋根や雨戸を打ち、木々を揺らしていました。度々の停電で食堂にはろうそくが持ち込まれ、薄闇のなかで調査のよもやま話に花が咲きます。明日になればこの風も止み、今度こそ最後の夏がやってきます。

### 〔調査・研究の経緯 その3〕

- ⑭2003年9月6日～14日 豆酩地域地名調査・灌漑補充調査・金剛院文書整理・第5次史料探訪(長崎県立対馬歴史民俗資料館)・巡見《海老澤衷・紙屋敦之・新川登亀男・深谷克己・高橋傑・徳永健太郎・永田史子・堀祥岳・吉田正高・黒田智》
- ⑮2003年10月25日 シンポジウム「東アジア村落における水稻文化の儀礼と景観」(海老澤衷「『劇場国家』の普遍性と限界」河合徳枝「バリ島村落の劇場的性格」和田修「対馬における芸能と村落」黒田智「対馬豆酩の空間構成と天道信仰」西村正雄「劇場国家論とその後の文化人類学的研究」)
- ⑯2004年1月21日～24日 補充調査、二十一社詣・サンソーロー調査《徳永健太郎・山本隆太郎》

## 金剛院所蔵資料の整理・保存

吉 田 正 高

### はじめに

金剛山金剛院（長安寺）は、対馬豆酩地区の南東（字琴亦）に位置する真言宗の寺院で、弘法大師開山の縁起を持ち、中世以来対馬宗氏の帰依を受けた古刹である。金剛院では中世文書をはじめ、近世・近代に至る資料群を所蔵していることが知られている。しかしながら、これまで中世の古文書類や、大般若経についての調査が断片的に実施されたことはあるものの、総合的な調査は行われていない。近代以前の地域社会において、寺院が重要な位置を占めていたことについては論を待たない。

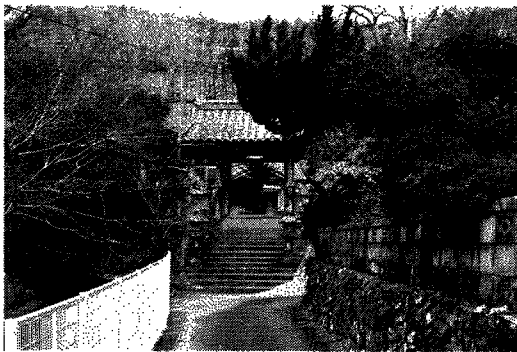


写真 2-23 金剛院山門



写真 2-24 金剛院境内

そこで、対馬豆酩地区調査の一環として、金剛院に所蔵される資料群の全体把握を目的とした悉皆調査と、整理・保存作業を実施した。ここではその諸作業の記録を紹介し、成果としての目録を掲載する。併せて整理作業によって確認された古文書のうち、これまで触れられる

機会が少なかった近世・近代における金剛院の実態を考察する前提として、特に重要な史料を翻刻し、紹介したい（巻末「金剛院文書翻刻・解題（近世・近代）」参照）。

### 1 事前調査

本調査に入る前に、金剛院に所蔵される資料の性格や全体量などを把握し、整理・保存作業の指針を決定するための事前調査を実施した。期間は6月10日～11日までの2日間、のべ14人が調査にあたった。

ご住職の御協力を得て、本堂内部を作業場所としてご提供いただき、金剛院が所蔵する歴史的な資料を全て確認させていただいた。資料が収納されていた容器は、近世に作成された木製の文箱1箱、ダンボール箱が6箱、茶箱が1箱、クリアーケースが1箱であった。収納容器の保管場所は、本堂（外陣）および附属の物置に分置されていた。歴史資料の収納箱は、全体として9箱であった。



写真 2-25 資料整理前の状況

本調査では、調査時点における現状をできるかぎり精緻に記録する方針を立てた。そこで、まずは各収納容器別に保管場所を冠した適切な呼称を付け、そのまとまりをデータとして記録することで、資料が保存されていた容器とその内容との関係を明確にした。方角は本堂奥を「南」、向かって左側を「東」とし、本堂内部にあったものは「外陣」の呼称を用いた。その結果、現状の収納容器は「東蔵1～5」「南蔵」「外陣脇1～2」と分別する

ことになった。収納容器は、それぞれ外寸の計測、収納状況の撮影を行った。

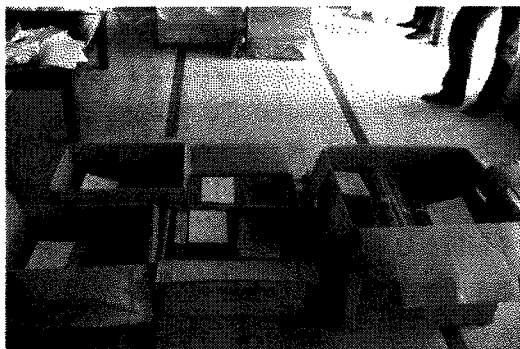


写真 2-26 「東蔵 1～5」の資料群

次に資料の総点数を把握するための作業を行った。なお資料の散逸や汚損を避けるために畳の上に白布を敷いた。箱別に収納されている資料を全て取り上げて、その点数を確認した。取り上げ作業は各箱ごとに行い、箱内の大きなまとまりや収納されていた空間配置などにも注意をはらいながら、資料が混在することがないように進めた。



写真 2-27 「外陣脇 1～2」の大般若経（整理前）

金剛院には、大きく分けて、古文書、近世～近代における版本、絵画、大般若経が存在することが判明した。そこで、箱ごとに、資料の性格に応じた必要なデータを採取することにした。

中世から近現代に至る全ての文書史料に関しては、目録を作成するためのデータを採取した。また、総点数が把握できた時点で、全点撮影が可能な量であることが判明したため、デジタルカメラを用いて記録した。

なお文書史料としては、金剛院を含め、現在は廃寺となっている寺院の過去帳 5 点の存在が確認されたが、現在も活用されていることや、プライバシー保護の点から、簡便な記録を採取するにとどめた。

近世の古典籍を中心とした版本類は「東蔵 1～4」箱

に収められていた。典籍類の書誌を考慮し、版本用の目録カードを用いてデータの採取に勤めた。

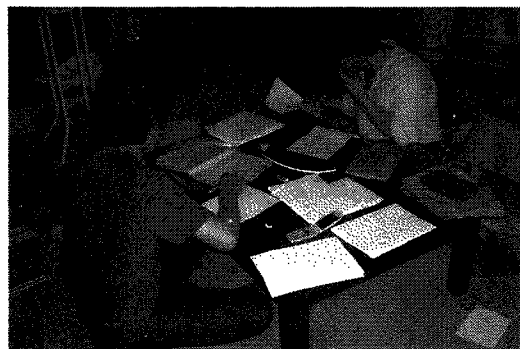


写真 2-28 目録カードによる典籍類の書誌データ採取

絵画資料に関して、大部分は「東蔵 5」箱に収納され、一部は「南蔵」箱にも混在していた。近世以前のものについては、データを取り、近代～現代のものに関しては、総点数をカウントするのみにとどめた。これは、近年の軸物が、現在も法会などで使用されていることが判明したためである。近世以前のものに関しては、画題・作者を特定し、デジタルカメラと通常のカメラを用いて記録した。

大般若経は、「外陣脇 1」（茶箱）および「外陣脇 2」（クリアケース）に収納されていた（写真 2-27 参照）。破損が進行しているものが多く、一時的な取り上げは必要最小限とし、個別の巻数と全点の冊数を確認するにとどめた。また、特に奥書や注書のあるものについては、必要箇所をデジタルカメラで撮影した。

以上のデータ採取の成果は、作業場所である本堂内において、用意したノートパソコンで記録し、誤謬がないかを確認しながら目録化していった。

作業終了後は、全ての資料をもとの状態に復して箱内へ収納し、各収納容器を旧来の保管場所へ戻した。



写真 2-29 持ち込みノートパソコンによる目録作成

## 2 整理・保存作業

### (1)資料の整理と保存に向けた協議

事前調査の成果をもとに、調査グループ内部で検討を重ね、金剛院資料の整理・保存に関する指針を決定した。

#### a. 現状の変更について

現在の文化財としての資料整理が、現状維持を大原則としていることは周知の事実である。ただし金剛院の場合には、資料が収納されているダンボール箱など容器の形状に問題があり、温湿度の変化が激しい場所に保管せざるを得ない状況にあった。また、収納されている資料に対して適切な大きさの収納箱が使われているかという点、必ずしもそうではなかった。そこで、資料にとって良好な環境を獲得するため、収納・保存状況を改善することにした。これは現状の破壊につながる危険性もあるが、旧収納状況を写真およびスケッチで記録したことや、旧収納箱の情報（資料がどの箱に入っていたか）については目録に明記されていることを考慮して、資料自体の今後の良好な保存を優先することにした。

#### b. 保存法について

旧収納容器であるダンボール箱、茶箱、クリアーケースは歴史資料の保存に適しているとは言い難い。特に豆敷地区は海沿いという地域的な特性もあって、酸性のダンボール箱などは相当程度劣化が進んでいた。そこで、事前調査の結果から全体の容積を計算し、それらを収納することが可能な中性紙の被せ式の蓋が付いたダンボール箱（2種類）を複数用意した。

金剛院には、古文書から絵画まで形態の異なる資料が存在し、その現況も多様であることから、それぞれの資料に対して最適であると考えられる整理保存方法を用い、場合によっては養生を施した（詳細は後述する）。また、防虫剤は「防虫香」（鳩居堂製）を使うことにした。

### (2)整理・保存作業

金剛院での整理・保存作業は、2003年9月12日、13日の2日間に渡って実施された。作業に参加したのべ人数は、12人である。以下、各資料の形態別に整理・保存作業の概要を述べてみたい。

#### ①古文書

中世、近世、近現代にわたる古文書に関しては、一点

毎に中性紙の封筒に納め、その表紙に鉛筆で文書名と整理番号を記すことにした。封筒は古文書の大きさを考慮して、2種類用意した（角2 [240×332mm]、角3 [216×277mm]）。特に中世から近世初期の史料に関しては、国土館大学、県立長崎図書館、東京大学史料編纂所などによってすでに調査が実施されていた。なお中世史料の性格については、第1部Ⅰの徳永健太郎「対馬中世文書の現在」（40～51頁）を参照の事。

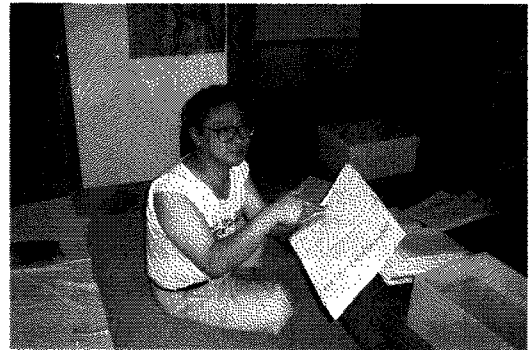


写真2-30 中性紙の封筒への古文書納入作業

古文書の多くは「御判物箱」の墨書のある木製の文箱（文政四年の年記あり）内に収められていた。その他、「南蔵」、「外陣脇1」、「同2」等の箱にも数点の古文書が混在していた。今後の保存を考慮して、古文書類は一括して「古文書1」「古文書2」の2箱に収納することにした。また木製文箱も「古文書1」箱内に収納した。古文書のなかでも大型で、通常の箱に収納できない分に関しては、書画・絵画類も含めた「大型資料」箱へ別置することにした。

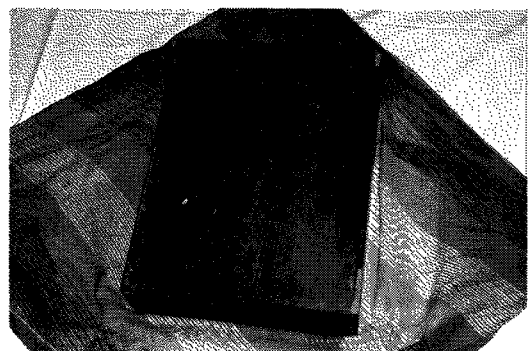


写真2-31 文政4年の「御判物箱」

#### ②古典籍

経典類を中心とした古典籍類は、主に「東蔵」箱に収納されていた。整理作業では、「版本1」から「版本6」までの6箱にこれらを収めることにした。なお、収納にあたっては、旧来からの収納形態を踏襲し、シリーズご



とにまとめることは避けた。

目録との対照に関しては、細く割いた和紙に整理番号を記し、これを史料の丁間に挿入し、あるいは帯状に巻くことで、目録との一対一の対応を可能とした。また、表紙・題箋などの欠損をはじめ、汚損・破損・虫損がみとめられるものについては、薄様で養生を施した。

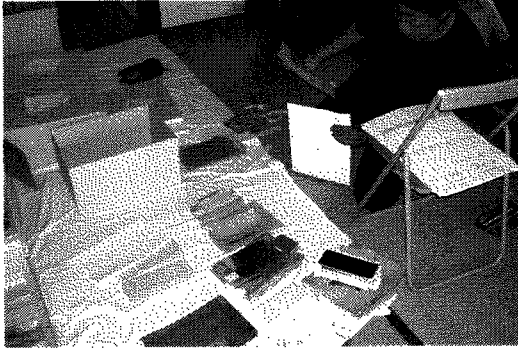


写真 2-32 古典籍の整理作業

### ③大般若経

近世の対馬藩主宗貞盛より金剛院に寄進された大般若経は、高麗版といわれる貴重な文化財であり、その保存は当初より本調査グループの重要な眼目の一つであった。全点にわたって表紙の剥離や破損が目立っており、一点ごとに薄様を用いた養生を施すことにした。

なお、今後の史料の保存や調査研究への便宜を考慮して、旧来のランダムな収納順を止め、大般若経の巻数順に整理をしておし、「大般若経 1」から「大般若経 5」までの 5 箱に収納した。

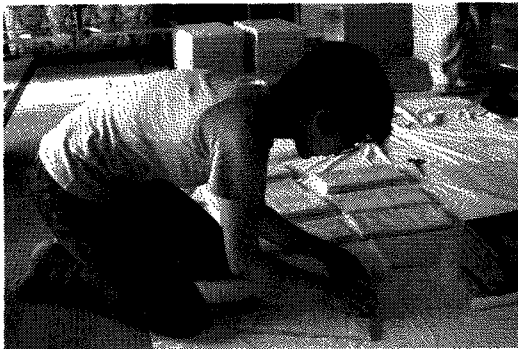


写真 2-33 大般若経の整理作業

### ④絵画類

絵画類のうち、もっとも点数が多かったのは「諸国霊場諸尊像」を描いた軸物で、112点が確認された。これらは大部分が「東蔵 5」箱に収納されていた。保存状態が良好であったため、今回の整理作業にあたっては、そのまま「軸物」箱に全てを収めることにした。

それ以外の、大型の絵画・書画類は、破損等の状況に応じて適切な養生を施した後、「大型資料」箱に収納した。

### ⑤地券

整理作業の途中で発見された明治期の地券（明治政府が土地の所有を確認するために発行した権利証）に関しては、目録採取をせず、デジタルカメラによる現状記録のみにとどめた。

### (3)収納完了後の保管場所の確保

全ての資料の整理・養生作業を終えた結果、14個の箱に収納することができた。各箱には、箱名称と収納した資料の内容を記載したラベルを貼付した。なお、ラベル貼付に使用した糊は、中性紙のダンボール箱に悪影響を及ぼさない材質のものをを用いた。



写真 2-34 中性紙の保存箱への納入作業

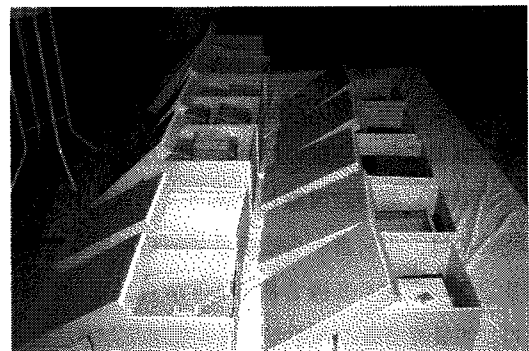


写真 2-35 保存箱への納入状況

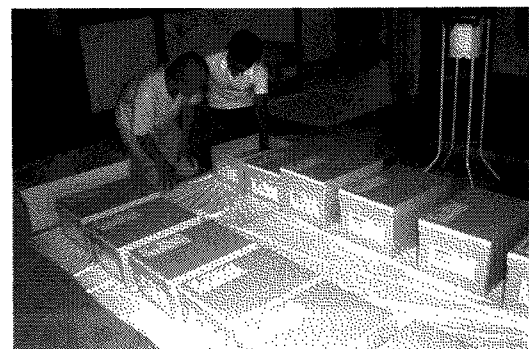


写真 2-36 保存箱への納入後、所蔵者へ説明

資料収納箱の保管については、旧来の場所では保存上好ましくないと判断されたため、ご住職ともご相談の上、本堂内部の収納スペースを使わせていただくことにした。



写真 2-37 納入後の状況

### おわりに

一連の作業を経て、金剛院所蔵資料の全体像が明らかになった。総点数こそ多くはないものの、近世および近代の豆蔵地区の実態を知る手がかりとなる貴重な資料群であることが判明した。費やした日数は事前調査を含め

でもわずか4日、通算のべ人数も26人と、この種の資料整理としては異例の短期決戦となった。また9月12日は折悪しく対馬に台風が上陸してしまい、その影響で午後の作業時間を短縮せざるをえないというアクシデントにも見舞われた。それにもかかわらず、作業を完了することができたのは、くじけずに作業にあたってくれた調査グループのメンバーの尽力と、金剛院ご住職夫妻の暖かいご支援の賜物である。あらためて作業に参加していただいた皆様に謝意を表したいと思います。

対馬豆蔵地区には、豊富な歴史的資料を有する多くの寺院・神社が存在している。今回我々が実施した歴史的資料の悉皆調査が、その嚆矢として位置づけられるなら、これにまさる光栄はない。今後の同地区における資料整理の進捗を期待して、筆を措きたい。

【付記】資料保存にあたってもっとも重要である収納容器（中性紙のダンボール箱）に関しては、金剛院から購入資金の半分をご提供いただきました。

### Ⅲ 考 察

## 内山村における中世山林相論と寛文検地帳の分析

本 田 佳 奈

### はじめに

対馬には100以上の集落がある。そのほとんどが海村であり、農・林・漁業の混合形態が生活の基盤であった。一方山村はおおよそ20ヶ所。農・林業が生活の支えであった。しかし対馬は耕地（田畠）が全島面積の3パーセントに満たず、山林は傾斜が急勾配な上に土壌がやせ、耕地形成に適さない。山村の人々はこういった厳しい自然環境を背景に日々の生活の糧を得なければならなかった。内山村（現厳原町大字内山）は豆酥村（現同町大字豆酥）の北東に位置する。島内最高峰の矢立山系（649m）、竜良山系（539m）に囲まれた山村で、現在の人口は142人（50世帯）の小規模村落である。内山村における耕地（田畑）、山林の利用方法はどのようなものだったのか。中世の相論文書と寛文検地帳から考察したい。

### 1 中世における内山村と豆酥在庁の神領堺の相論

内山村はもともと豆酥在庁に属したが弘長3（1263）年に地頭右馬に隣村久和とともに13貫文で売却された（鎌倉遺文8962号文書なたるの尼売券案）。それから75年後の建武5（1338）年10月、売却した豆酥在庁（旧観音堂）と買得者の内山村領主い阿弥陀仏は神領堺の相論を起こした。

#### 史料1 建武5年豆酥郡司満房等請文

（南北朝遺文1263号文書）

（端裏書）（内山の木庭の事）（豆酥）  
「うちやまのこはの事つ□在庁以下請文」  
（内山のい阿弥陀仏）（内山の木庭の事）  
「うちやまのいあみたふ申され候うちやまのこはの  
事によてお□せ下され候こん月八日御かきくたし同  
十日かしこまてうけ給候ぬ ①かのところハせんき  
（先規）  
（弥次郎左衛門入道）  
さいちやうにて候をいや二らうさへもん入たうの御

（買得）（相伝）（久和の左衛門入道）  
時はいとく御さうてん候てくわのさへもん入たう御  
（先祖）（今い阿弥陀仏）（内山に）  
せんそ御もち候あひたいまいあみたふうちやまにき  
（居住の事）（豆酥）  
よちうの事をつゝよりいたみ申ハ候はす候

②た□しこんほんのこはをうちこして御はけを、  
（神領）（木庭）  
おろし候しんりやうおあたらしくこはにきられ候事  
（神領・木庭）  
をこそしんりよはかりかたく候あいたなけき申事ニ  
（内山）  
て候へつきにこの事により候て③うちやまにむけ候  
てかなくらをかきほこさかきおたて候よしの事これ  
（向後）  
又なき事にて候あいたきやうこうもあるましく候こ  
（この旨をもって）（恐惶謹んで）  
のむねおもて御ひろうあるへく候けうこうつしんで  
申候

（豆酥の郡司満房）  
建武五年十月十日 つつのくんしみつふさ（花押）  
（上使）  
ちやうつかい  
（宮司）（し）  
みやしりんそう（花押）  
（豆酥の在庁の中 大行事）  
つゝのさいちやうの中大きやうし（花押）」

端裏書に豆酥在庁以下請文とあるが、完全に裁許結果を承諾する内容とはなっていない。豆酥在庁が承諾したのは史料中の傍線部①にあるように、内山村にい阿弥陀仏が居住する権利のみである。い阿弥陀仏の父は久和の左衛門入道である（鎌倉遺文22664号文書）。また久和の左衛門入道の先祖、弥二郎左衛門入道は、弘長3年なたるのあま売券の地頭右馬と同一人物と考えられる。おそらく内山側はこれらの書状をもって正当性を主張したため、在庁側としてもこれ以上の不服を申し立てることができなかったであろう。豆酥在庁が不承諾とした点は、史料中②傍線部である。内山い阿弥陀仏が、「御はけを下ろし」た神領に越境して木庭を開いたことであった。御はけとは祭日に当屋の家の前に立てる標識である。通常は御幣や神符を付けた青竹であるが、土壇を設ける場合もあり、そこが清浄地であることを象徴する<sup>(1)</sup>。豆酥

村と内山村（現在の大字豆酥と大字内山）の境界は豆酥天道山であり、神領とは天道山を指すことに間違いはない。当時、島内にあって最も神威ある豆酥天道山に対して、内山い阿弥陀仏は、大胆にも境界を犯し木庭を拡大化させた。これは豆酥在庁にとって、挑戦的な行為であった。次に、史料中傍線部③は解釈がやや難解である。豆酥郡司等は「この事により候て<sup>（豆酥）</sup>かなくらをかきほこさかきを<sup>（神官）</sup>たて候由の間、」と述べている。カナクラとは天道信仰の聖地である。対馬各地にはカナクラバ等の聖地があり、豆酥在庁・旧観音堂地とされる多久竜魂神社にもカナバルという岩の祠がある。天道信仰は自然崇拜が基本であり、これら聖地は①社殿がない②御神体がない、あるいは石③茂みの中にある④石で囲う、あるいは立石、積石の形状⑤厳しいタブーを課す⑥幡、御幣が供えるという特徴がある<sup>(2)</sup>。次に“ほこさかきをたて”であるが、矛は境界と関係深い。サエノカミの祭事では紙で作った矛を捧げる。また銅矛は谷奥や海岸の断崖、つまり人間界と自然界の境界地点より百数箇所から出土しており、魔よけの呪術的意味合いが込められているとされる。また神社の神体として銅矛が祭られる所もある。矛は境界を象徴する。“カナクラをかく”とは神域を籬く、すなわち四方を区切って神域を設ける行為を指し、“矛櫛を立てる”とは神域の境界を明示した行為であると考えられる。ではこのカナクラは天道山のうちのどこへ設けられたのか。カナクラとは点として設置したのか、あるいは境界線という山をまるごと囲う“線”として設置したのかは不明である。実際に豆酥天道山の東西の山麓には表八丁郭（浅藻側）、裏八丁郭（内山側）と呼ばれる石積みがあり、天道山の境界を示すという民俗学的見解がある。この書状の「金倉を籬き、矛櫛を立て」とはむしろこの裏八丁郭の石積みを示しているのかもしれない。金倉を籬き矛櫛を立てたのは豆酥在庁か、内山い阿弥陀仏か。傍線部②は解釈がむずかしいが、豆酥在庁が防衛手段のために従来の神領を明示した行動であったと解釈したい。この後、正平9（1354）年の豆酥神官しんはう申状は、内山い阿弥陀仏の神領侵犯をさらに具体的に伝える。

## 史料2 豆酥神官しんはう申状

（南北朝遺文3742号文書）  
<sup>（豆酥）</sup>「つつのしんくわんしんはうかしこまで申上候<sup>（神官）</sup>  
<sup>（畏まって）</sup>

右件<sup>（仔細）</sup>しさい<sup>（内山殿）</sup>はうち山□天<sup>（天道の御領）</sup>たうの御りやうをあふり<sup>（横領）</sup>  
 やうせられ候由のこと、はけしめおろしほこさかき<sup>（勤仕）</sup>  
 おたて御まつりきんし<sup>（十千本の木）</sup>のところのしゆせんほんのき<sup>（伐り焼き払い）</sup>  
 をきりやきはらい<sup>（荒野）</sup>くわうやとなされ候ハハ御祭のさ<sup>（相違）</sup>  
 おいとなしと□あるいハ大風ふき<sup>（洪水）</sup>こうすい<sup>（国）</sup>いてく<sup>（領い）</sup>に  
 のわつらいとなり候おこそかみに申さんとそんし候<sup>（荒紡・乱暴）</sup>  
 ところにかさねてらんほうをいたされ候したいの事、<sup>（内山の権を）</sup>  
 むかしよりうち山のしいかしをつつよりひろい□事<sup>（豆酥）</sup>  
 たうねんニかき<sup>（当年）</sup>ら□候へとも御きんせいのうちはい<sup>（禁制）</sup>  
 らす候 たとへうち山おひろい候ともさかいをこえ<sup>（内山）</sup>  
 すき候は□しんニはらかりしかるへく候ところニ上<sup>（拾い）</sup>  
 倉<sup>（神/金）</sup>の御前<sup>（御手洗川）</sup>へみたらいかわやたてのきのもとにせき<sup>（矢立の木の）</sup>  
 を据え<sup>（下）</sup>（櫛を止め）<sup>（女）</sup>をすへかしをととめひけをとられ候へハおん<sup>（女）</sup>なわら<sup>（女）</sup>  
 はんちりへはらへになりおらひさけふこえ<sup>（おらひ）</sup>なの<sup>（叫ぶ声）</sup>  
 めならず候御たうの御前をきはすうんきふしやう<sup>（堂）</sup>  
 ニならせ候事そのかくれなく候せんするところはけ<sup>（運気/靈気不祥）</sup>  
 しめお□□の<sup>（詮ずる処）</sup>ところを御きんせ<sup>（禁制）</sup>い候てかのらんほう<sup>（乱暴）</sup>  
 を止められ<sup>（御手洗川）</sup>を<sup>（天）</sup>ととめられ御みたらいかわをもきよめられ□□に<sup>（動仕）</sup>  
 てことゆえなくかのてんたうの御まつりをきんし申  
 へく候それかなはす候ハゞさらへ申すましく候 こ  
 のよしよきように御ひろうあるへく候、

恐惶謹言

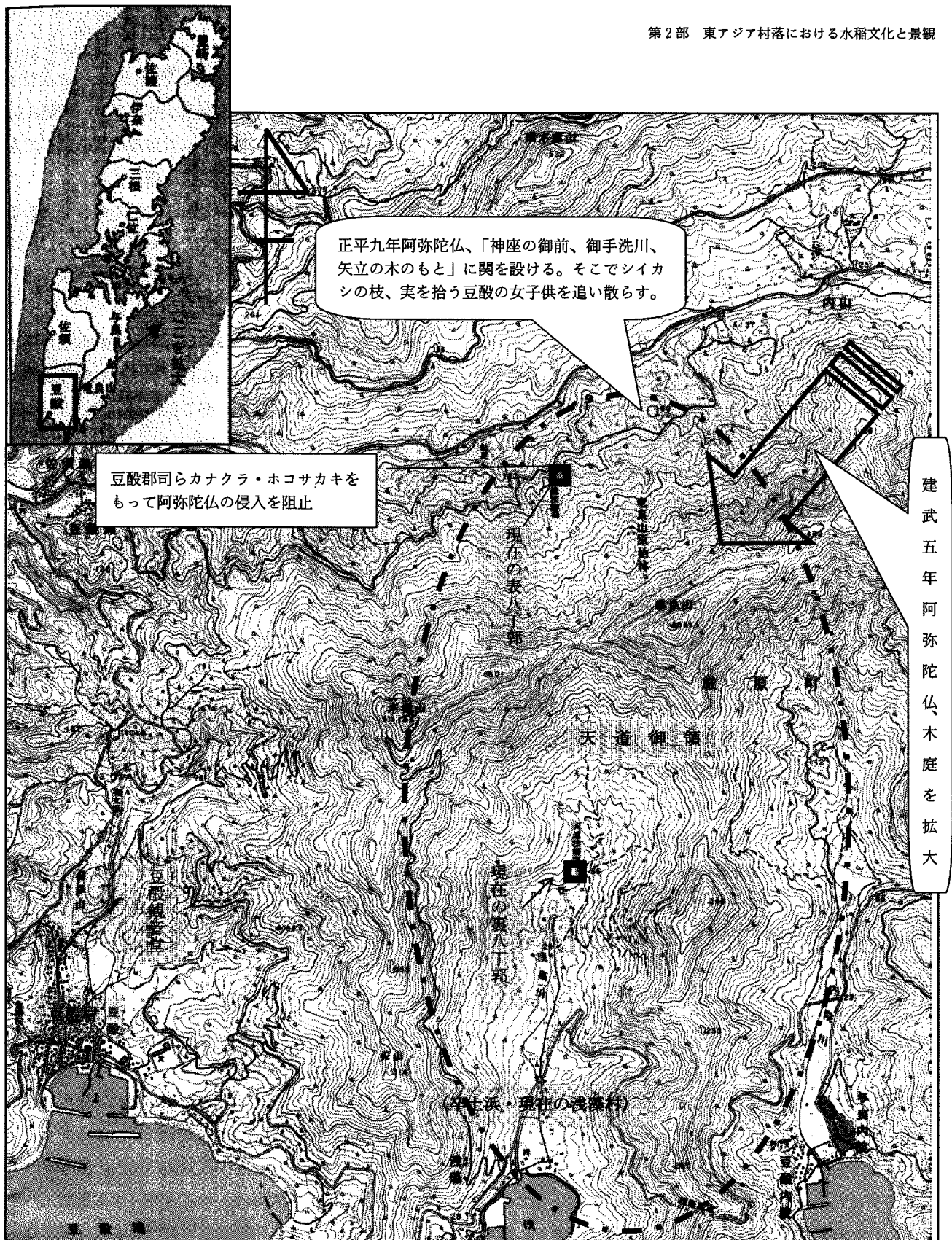
正平九年

閏十月 日

豆酥神官しんはうは内山い阿弥陀仏の荒々しい行為を事細かく記している。まずしんはうは内山が「はけしめおられ候矛櫛をたて御祭勤仕のところの十千本の木を伐り焼き払い」と述べている。この“はけ”は前の申状の“御はけ”や“金倉を籬く”と同義であろう。神の居まする神領の1万本もの樹木を伐採し、焼き払った、という。被害者側の訴えであるから、過剰な表現であるかもしれない。しかし被害者豆酥在庁からしてみれば、神領内での大量伐採と焼払は被害甚大である。内山い阿弥陀仏が相当数の手勢をもって行なったととらえたのであろう。そして神領を汚し荒野とした事によって大風が吹き、洪水も起こったという。これら自然災害が国の災いとなっていると訴えようとしたが、重ねて内山い阿弥陀仏はこの他にも乱暴行為を行った。神官しんはうの主張としては、内山側の山林で豆酥の人間が権、櫛を拾うこ

とは今年に限った事ではなく、毎年行われていたという。これは椎樫の実採集であろう。しかし、内山い阿弥陀仏はその慣習を禁じて神倉の前に流れる御手洗川、矢立の木の下に関を据えた。越境して内山山林で採集した人々が豆靨に帰ろうとするのを阻んで採集物を没収したのである。ここで「上くらの御前、みたらいかわ、やたてのきのもと」と3つの地名が列挙されている。上くらの御前とは築かれたカナクラの前、という意味であろう。内山の裏八丁郭に御手洗川という川がある。またやたての木の下、という地名はないが、ちょうど内山の表八丁郭の前には豆靨道と呼ばれる古道があり、昭和30年ごろまで主要道であった。この豆靨道上の境界点がどこになるかということ、山道をぬけて表八丁郭を抜け、内山部落にでるところに一本の木とその下に地藏堂が立っている。ここが人々の意識の上での境界線になる。つまり三つの地名「上くらの御前、みたらいかわ、やたてのきのもと」は、豆靨と内山の境界となる裏八丁郭と地藏堂の近辺であろう。椎の実、樫の実を連れ立って拾いに来ていた豆靨の女や童たちが集めた木の実を奪われ、追い散らされておらび叫んだという。逃げ惑う彼らの姿が目浮かぶ、なんとも生々しい描写である。その結果、天道の御堂の前をとわず、いたるところで運氣不祥となってしまった。御堂は豆靨観音堂（現多久頭魂神社）を指すのか、それとも天道山山中に築かれた金倉（カナクラ）を示しているのかは不明である。よって神官しんはうは台風、洪水、果ては弱者への乱暴行為によって国の煩いを引き起こすような事をやめ、焼き払って荒野となった山を元に戻し、御手洗川を清め、元通りの神領とするように訴え、書状を結んでいる。豆靨在庁と内山い阿弥陀仏の相論文書はこれ以後現存せず、この相論の行方はわからない。神領を焼き払うとは、い阿弥陀仏の暴挙である。しかし書状の文面には、彼を激しい行為へと駆り立てた背景、そしてぶつかり合う双方の山野領有への強い意欲と、互いの正当性の主張が浮かび上がってくる。まず内山側の山林獲得の第一の目的は、先述した通り、ムギ・ソバ等穀物生産の根幹であった木庭作である。対馬では古来より木庭作が盛んに展開されていた。近年において焼畑の定義が変わり、「おおざっぱに木を払って焼いて、作るだけ作って放棄して、新しい場所へ移動する」という誤解の生じやすい“粗放な農業”という表現は、休閑と生産を

繰り返すことが可能な“循環的な農業”へと改められている。これまで対馬の木庭作もまた、「粗放で原始的農業」ととらえがちであったが、自然環境の枠組みの中で循環型の農業を発展させたという認識を新たに付加させる余地がある。海岸の地先権をもたない山村内山にとって、生産はわずかな田畑よりも山林の木庭に頼らざるをえない。しかし内山の木庭の耕作期間は平均2年。3年連作可能な木庭は少ない。山林は多ければ多いほど休閑と耕作の循環率が上がる。目と鼻の先の神領天道山は、い阿弥陀仏にとって魅力的な場所であったに違いない。第二の目的は伐採した木材であった。伐採した木は牛馬によって山から降ろされ、製材過程をへて用材となる。用材は地頭への運上の品目でもあったし、また造船の用材や製塩業の燃料物資の需要があった。第三の目的はシイ、カシの実の採集権である。対馬ではごく最近までカシの実を貯蔵食糧として常食してきた。『対馬紀事』巻十一土産考はカシをこと細かく記している。近世対馬のカシは眞樫（シラカシ）、太津樫（アカガシ）、胴太樫（奈良）、鉤栗樫（イチイガシ）の四種。このうち眞樫は慶長年間に薩摩から種子を取り寄せた新品種であり、対馬古来のカシは三種だった。四種のうち三種のカシの実食用が可能であった。木の実を粉碎して川に曝して渋味を抜く。製粉後は団子にして煮たり焼いたり、或いは粥の混ぜ物、吸い物の実に用いる。殻のまま水に曝したまま貯蔵すれば、3年間の貯蔵ができた。ドングリを採集しアク抜きして食用するというと縄文時代を思わせる。耕地拡大に限界のある対馬では、ドングリの食用は淘汰されずに存続し、穀物に次ぐ食糧として、孝行芋（サツマイモ）とともに近代まで継続した。また『老農類語』には不作の年でもカシとクリは実りがあるとして植林を奨励し、宝永二（1705）年以後十八年かけて、府中ではカシを約六万五千本、カシの大木を三百九十二本植林、佐須郷でも植林が行われている。このように各地で植林が行われたものの、豆靨は「栗樫を植ふるに及ばず、有り来たる樫にて凶年の備えあるは豆靨郷（豆靨、豆靨瀬、豆靨内院村）のみ」とあり、すでに山林において十分なカシの木が整備されていた。幕末の『楽郊紀聞』によれば、豆靨村の人々は、このような豊富なカシの木を背景に、大量のカシの実採集にたずさわっていた。多久頭魂神社付近に残る多数のホナ（かしぼの遺跡）は、中川が



…内山い阿弥陀仏の動き

…豆酸在庁の動き

図 2-7 豆酸・内山村相関図 (1:25000地形図「豆酸」国土地理院平成12年発行)



記したホナの実態と似ている。『海東諸国紀』に「豆豆浦 三所合三百余戸」とある大規模な集落を維持せねばならない豆殿在庁にとって、シイカシの実採集は、部落住民の食糧問題にかかわる重大事であったにちがいない。天道山神領の侵犯し、穀物生産地である木庭と樹木確保に成功したい阿弥陀仏は、次に神領内に関所を設けた。そこは裏八丁郭という、いわゆる天道山の“山の口”であり、両部落をむすぶ主要道の入口であった。ここで豆殿の女や子供たちは、山中で採集した大切な貯蔵食糧のシイ、カシを内山に奪われてしまった。つまり、い阿弥陀仏は、シイカシの実を山手として没収・徴収したのである。中世対馬では、「しいかしのこと」あるいは「しいかしの山手」という文言の文書が数多くある。黒田省三氏は樫材への徴収としている。しかし今回の内山の行為やシイカシの実の食糧としての重要性を考慮すれば、当時「しいかしの山手」とは、採集した実も山手のカテゴリーの範疇にあったと考えられる。そして豆殿在庁と内山い阿弥陀の堺相論の背景には、椎樫の実の確保という、切実な山林領有の目的があったと考えられる。内山い阿弥陀仏は木庭作物、材木、椎樫の実採集、という食糧確保を目的として、神領に侵入して山林を伐採・焼きはらった。慣習であった内山山林の入合を解消し、天道山の山口に関所を設けて豆殿住民から山手を徴収した。豆殿在庁は神威を楯にこれを暴挙とみなした。豆殿の神官しんはうは訴える。矛櫛を立て、金倉を築いて祭った天道の怒りに触れ、大風が吹き、洪水が出た。さらに山手を徴収して女や童を上倉の前で追い払ってことによって、運氣不祥、国のわずらいともなった、と。つまり大風、洪水、運氣不祥は天道の神罰であった。民俗学見地からすると、天道は祟る神である。天道は土を盛る、崩す、といった土壌の変化を嫌う。なぜ天道が強いタタリ神として近現代にいたるまで存続し、現在なお島中のあちこちにシゲ、シゲチが守られているのか。豆殿在庁の主張する神罰には、自身の山林用益権を守ろうとする意図が表れている。こういった豆殿在庁の喧伝によって、今日にいたる天道信仰の形成があった。つまり厳しい自然環境にあって山の産物を得ることが重要課題であったからこそ強いタタリ神、天道が形成されていったのではないだろうか。天道信仰は豆殿天道山と卒土浜（浅藻）がセットになって語られる場合が多い。しかし、「海東

諸国紀」には浅藻浦の記述があり、近世浅藻は仕立村だった（宮本常一「対馬豆殿の村落構造」）。『楽郊紀聞』にも浅藻の古寺屋敷の伝承が記されている。浅藻にしても天道山にしても、神域は中世以降一貫して管理されたわけではなく、実際には繰り返し侵犯されており、そのなかで天道信仰は強まっていったと考えられる。

## 2 寛文検地帳の分析

次に寛文2年の検地帳から内山村の田畠、木庭の耕地状況を見てみることにする。この寛文検地は全島八郷に渡って行なわれ、間高法によって各村落の耕地状況の把握が初めて完全に行なわれた検地である。内山村でも田・畠・木庭が検地されているものの、田地の総面積は何故か記載されていない。畠は「合上々畠参石五斗四升五合三夕（上畠廻四石七斗式升七合六才六毛）、合上畠八斗四升四合一夕（上畠廻則内五斗四升八合四夕 居屋敷）、合中畠壹石六斗五升六合（上畠廻九斗四升六合式夕八才五）、合下畠式石参斗壹升五合（上畠廻四斗六升三合）」であり、間高は式尺三寸四分三厘七毛五。木庭は「合上々木庭式升蔀（上畠廻式升）、合上木庭式石参斗式升蔀（上畠廻壹斗九升三合三夕三才三）、合中木庭四拾式石壹斗四升蔀（上畠廻 式石四斗七升八合八夕二才三）、合下木庭壹百八拾石八斗六升蔀（上畠廻七石式斗三升四合四夕）、上<sup>(タ)</sup>上中下四口合木庭上畠廻九石九斗式升六合五夕六毛」であり、間高は四間参尺八寸五分三厘一毛一式。畠・木庭あわせて上畠廻式拾石壹斗九升一合六夕九才の石盛、間高は拾間参寸八分三厘三毛八となっている。

### （1）耕作者

耕作者は「○×（人名）知行」あるいは「請人○×（人名）知行」と二種類ある。個人所有者は内山郷左衛門、内山市左衛門、多田源右衛門、内山伝左衛門、内山勝介の5名の給人である。彼らはそれぞれに耕作者を所有していた。内山郷左衛門は作人が21名と最も多く、その中には知行地を有する内山市左衛門や内山勝介が含まれている。21名の作人の内、与左衛門・少左衛門・八左衛門・善松院・又右衛門・四郎右衛門の6名は郷左衛門知行の屋敷を与えられている。次に多田源衛門は耕作者4名でそのうち伝左衛門と源兵衛が源右衛門知行の屋敷を与えられている。内山市左衛門の作人は三人だが、みな屋敷を与えられていない。市左衛門知行の屋敷を持つ



のは九左衛門と勝介の2名である。伝左衛門の耕作者が松右衛門の1名のみである。

## (2) 田地名の現地比定

グラフ2-1「田の各耕作地面積」を見ればわかるように、検地帳の田地名は17である。このうち現在の地名に比定可能なのは次の10個所である。

2 喜太郎＝現在の小字喜太郎（集落から最も遠い山林）。

1石1斗8升蒔と最も多いが「荒地ニ付高入セズ」とあり、耕作放棄の状態となっている。

4 けんの作り＝小字在家の山にはゲンノツクリという木庭地名がある。山腹に開かれた棚田だったと考えられる。

5 しんかい＝小字前原にシンピラキ（新開）と呼ばれる田地がある。

7 すみく田＝小字上原にジミクタ・ズナクタと呼ばれる田地がある。

8 田木庭＝小字上原にタコバとよばれる田地（一町歩）がある。田木庭は1900坪あり、17の耕作地のなかで最大面積。

9 段の上＝前原のダンノウエ

12 つはん作り・13 つはん作り次郎殿田＝小字前原にジロウタという田地あり。従って12、13ともに前原と考えられる。

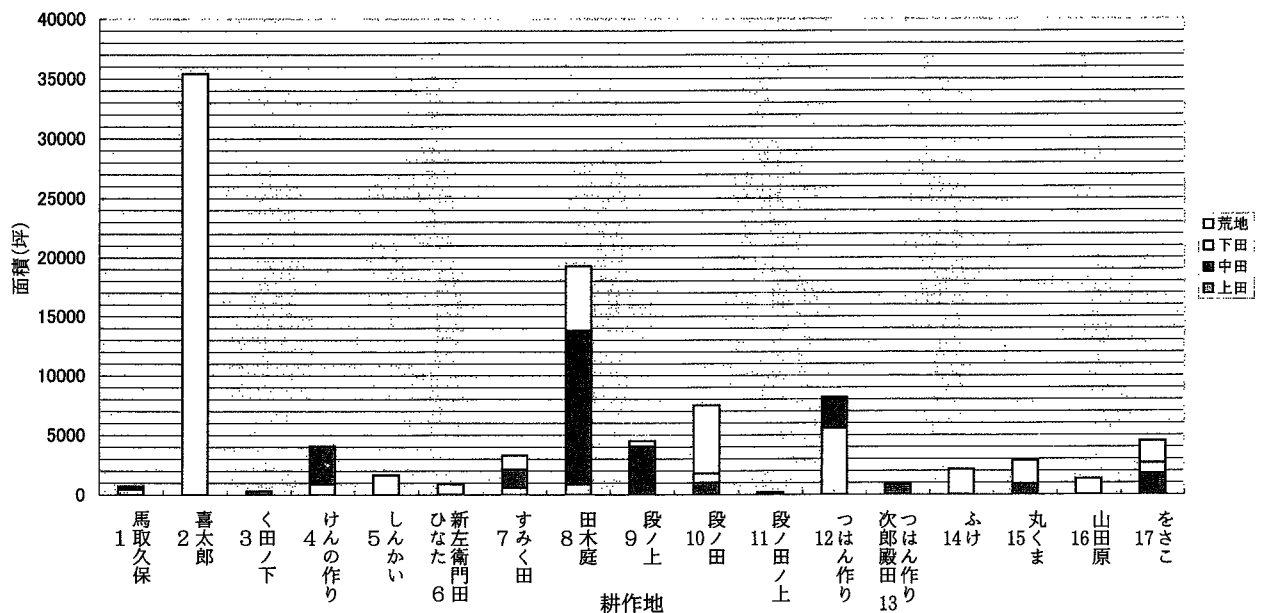
14 ふけ＝前原にフケ田とよばれる湿田がある。

15 丸くま＝小字丸隈

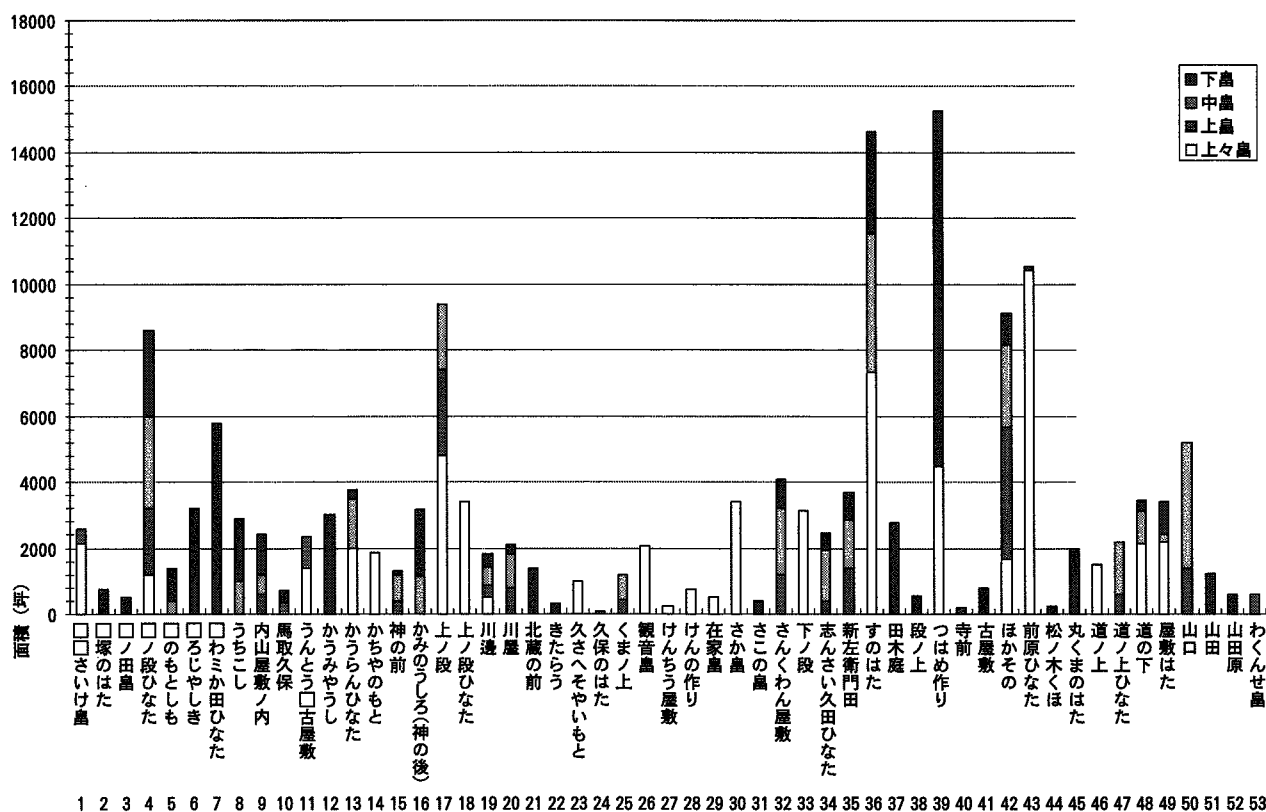
このうち小字前原とわかるものがしんかい（上田90坪、中田315坪）、段ノ上（中田402坪）、つはん作り（上田558坪、中田237坪、下田21坪）、つはん作り次郎殿田（中田84坪）、4ヶ所である。小字上原はすみく田（上田60坪、中田150坪、下田120坪）、田木庭（上田90坪、中田1287坪、下田120坪）、ふけ（下田210坪）の3ヶ所が確認される。小字下原に比定しうる耕地名が無いことから、当時はまだ下原は未発達な田地、もしくは畑地であったことが考えられる。これは下原より上流にある上原の田木庭やフケが現在まで湿田であったことから推測することができる。上原面積は上田648坪、中田1038坪、下田21坪、計1707坪。前原面積は上田150坪、中田1437坪、下田450坪、計1947坪となる。小字上原と前原の田地を比較すると、面積は上原のほうが大きい、上田面積は前原のほうが約4倍広い数値を示している。内山の主力田地は小字前原・上原であり、前原は内山全体の50%を占める優良田であった。

## (3) 畠地名の現地比定

検地帳には53の畠地名がある（グラフ2-2「畠の各耕作地面積」参照）。畠地名をみていくと、“屋敷”とつく地名が6ヶ所あり、（9内山屋敷ノ内、11うんとう院古屋敷、27けんちう屋敷、32さんくわん屋敷、41古屋敷、49屋敷はた）、このうち4つが現地比定できる。内山集落の世帯は小字在家（通称カミ）と小字下大段（シモ）に集中し、カミ・シモどちらとも畠にかこまれているが、



グラフ2-1 田の各耕作地面積



グラフ 2-2 畠の各耕作地面積

まず9内山屋敷とは在家にあって然るべき名であるし、11うんとう院古屋敷はカミにある雲洞庵（寺）のことである。41古屋敷はやはりカミにある宗重尚隠居地の通称地名である。32さんくわん屋敷（上畠120坪、中畠200坪、下畠90坪計410坪）はシモにあるサンカン（現在田、3畝）と地名が一致する。またこれら屋敷地名の畠地はすべて郷左衛門知行地となっている。カミにはこの他に1□□在家畠（上々畠216坪）29在家畠（上々50坪）、40寺前（中田20坪＝雲洞庵付近にテラバタ、テラダ地名あり）がある。また43前原とは田地でもあげた小字前原である。53の畠地のうちで上々畠面積が最も広い（1042坪）。46道ノ上、47道ノ上ひなた、48道ノ下は小字前原の道ノ上、道ノ下（両方共に現在田地）と地名が一致する。50山口もまた小字前原のヤマグチ（現在田地）と地名が一致する。現在小字前原はすべて田地であるが、寛文当時上々～中畠の良好な畠地が数多くあった。

#### （4）木庭地名の比定

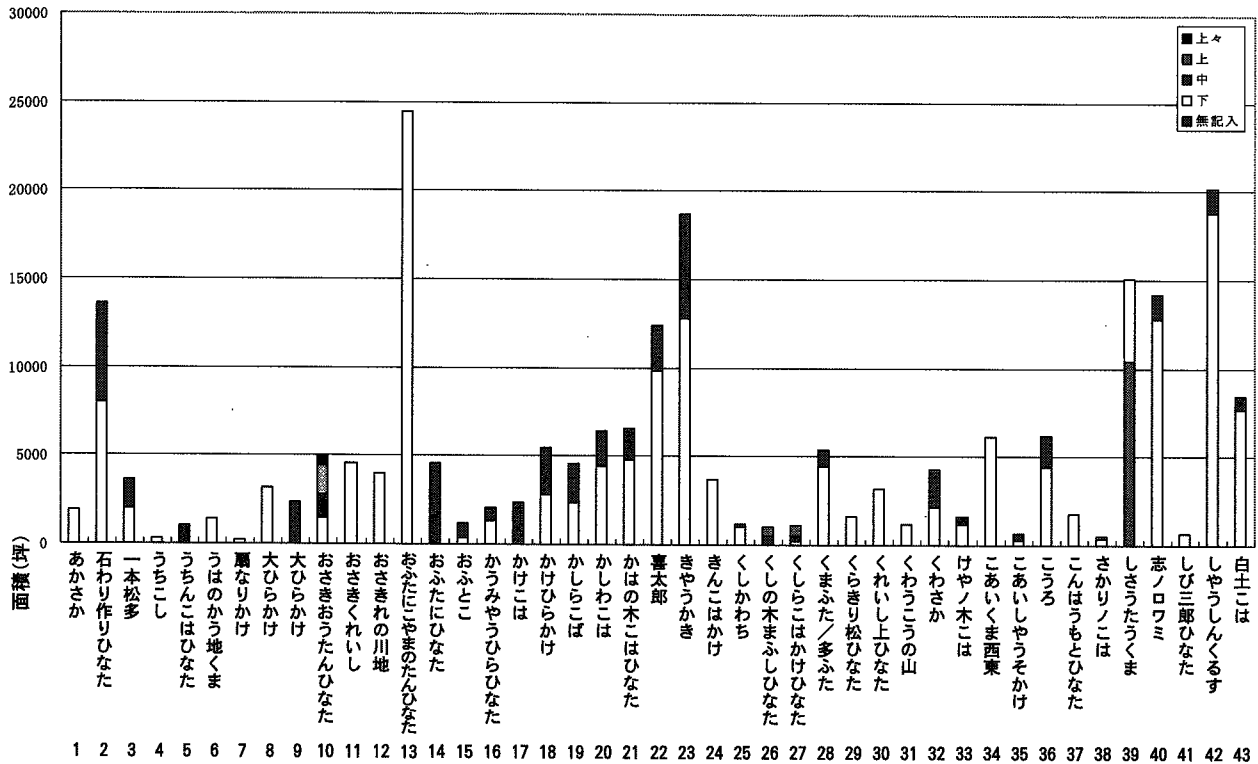
グラフ 2-3, 4「木庭耕作地の面積（1）（2）」を見ればわかるように、86の木庭地名が見られる。

内山集落の北境となる矢立山稜線から集落にかけてのなだらかな山腹には、次の木庭耕地の比定が可能である。

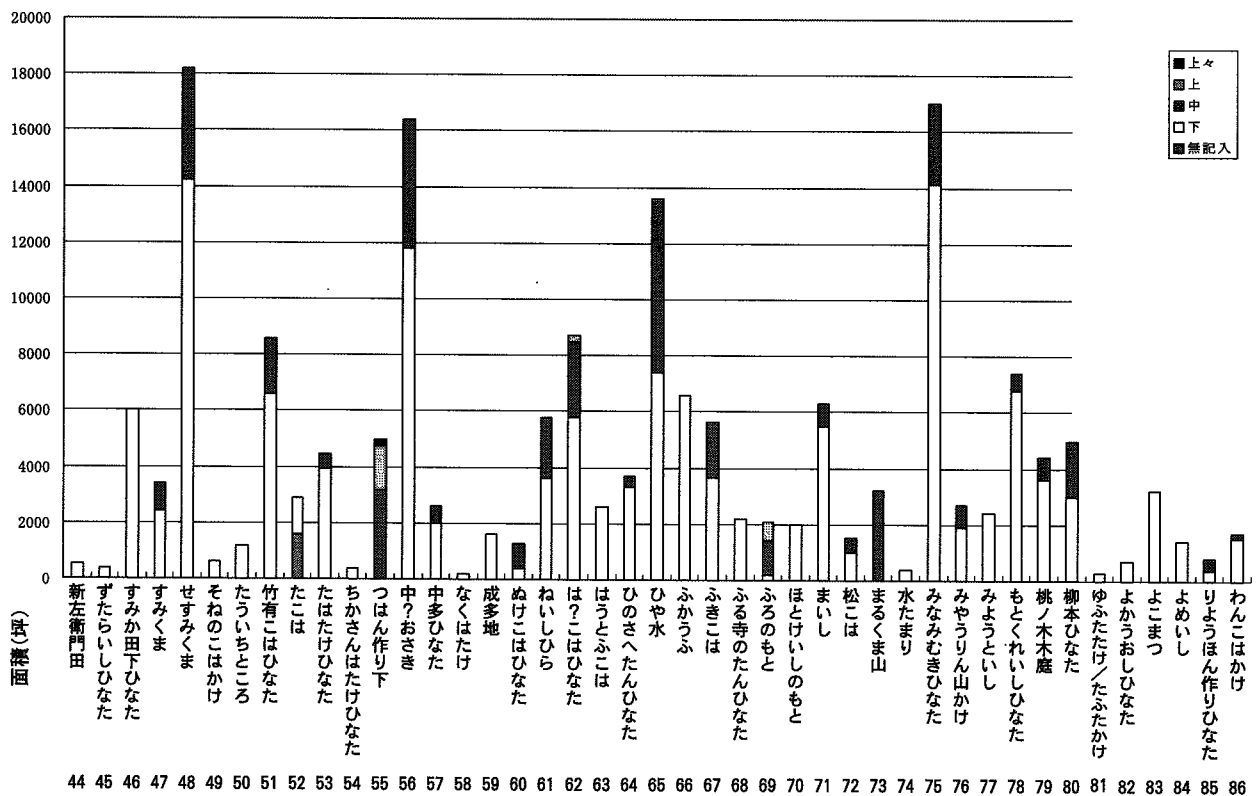
- ・ 1,あかさか（下190坪）＝小字丸隈の内山分校下にアカサカと呼ばれる畠あり。
- ・ 2,石わり作り（中木庭560坪、下木庭800坪）＝大鳥毛・小鳥毛山の稜線よりやや下にイシワリヅクリという木庭地名がある。
- ・ 3,扇なり（下木庭20坪）＝大鳥毛山頂上よりやや下にオウギヅクリという木庭地名がある。
- ・ 10,おさきおおたんひなた、11,おさきくれないし、12,おさきれの川地＝小字在家奥より内山川にそそぐ川は尾崎川とよばれ右岸にコウジという木庭があった。したがって10～12は尾崎川近辺の木庭と考えられる。
- ・ 13,おふたに、14,おふたにひなた＝現在の小字大谷に比定。
- ・ 22,きたらう＝現在の小字喜太郎比定。
- ・ 73,まるくま山＝現在の小字丸隈に比定。
- ・ 79,桃ノ木木庭＝現在の小字桃ノ木に比定。

また東堺となる舞石壇山の稜線から山腹にかけて、以下の木庭地名比定が可能である。

- ・ 8おおひらかけ＝検地帳記載の堺である“大平のそね”が舞石壇山の南隣にあることから、舞石壇山稜線に比定。



グラフ 2-3 木庭耕作地の面積 (1)



グラフ 2-4 木庭耕作地の面積 (2)

- 24, きんこはかけ=小字前原より約100メートル上の山腹にキンコバ（木庭地名）あり。
- 60, ぬけこはひなた=キンコバの隣にヌケンクボ（木庭地名）あり。
- 61, ねいしひら=ヌケンクボよりやや上にネイシヤマ（木庭地名）あり。

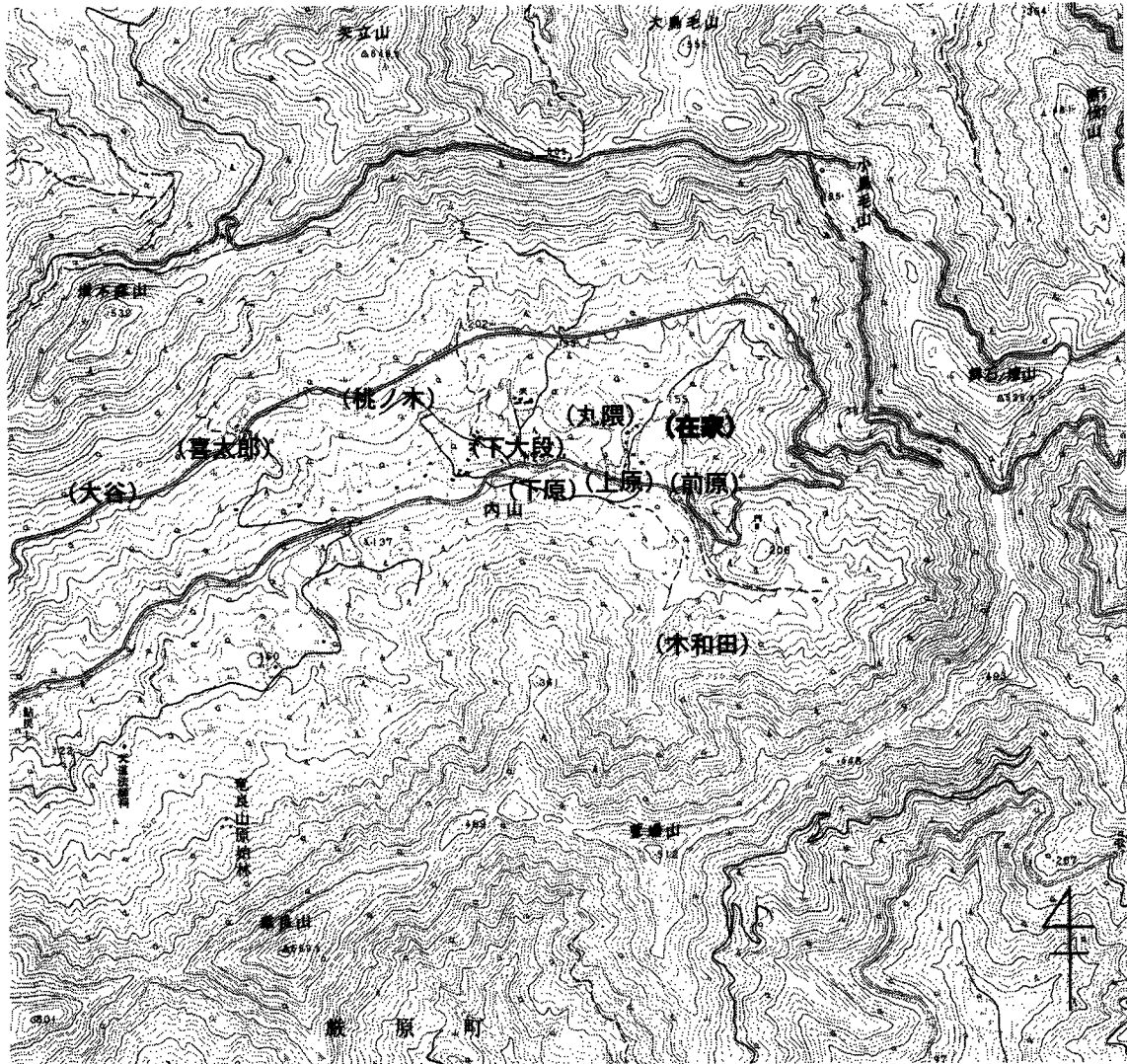


図2-8 現在の内山  
(国土地理院1:25000「豆敷」「蔵原」「小茂田」より作成) ※地図中の( )は現在の小字

- 71, まいし = 舞石壇山に比定。  
南堺となる萱場山稜線から山腹には以下の耕地名の比定が可能である。
- 76, みやうりん山かけ = 大平そねより萱場山への稜線のややしたにミョウレン (木庭地名) あり。
- 18, かけひらかけ = ミョウレンの付近にカゲヒラと呼ばれる木庭地名あり。
- 38, さかりノこは = カゲヒラ付近にサガリノコバと呼ばれる木庭地名あり。
- 34, こあいくま西東35, こあいしやうそかけ = 検地帳記載の南堺に「こあいの隈曾根」あり。  
このような稜線部や山腹だけでなく、平地にも木庭は

ある。たとえば39, しそうたくま (下木庭4700坪、無記入10400坪) とは小字下原の地藏堂付近の隈 (山)、つまり下原の一部と現在通称ムカイヤマと呼ばれる国有林天道山との境界の山にあたると考えられる。また田地にあげた小字上原の田木庭にも同様に木庭 (下木庭1300坪) があった。これは現在の老人の「タコバには田んぼ (8反弱) と山裾まで木庭があった」という話と一致している。つまり山すそまで木庭があったということは、田木庭 (田地) と山すその中間にある小字下原は当然木庭があったと考えられる。当時下原は木庭と畠の多い耕地で、寛文以降に水田化されたと考えられる。また田木庭とともに田地面積の広い小字前原のつはん作りにも同様に木

庭があった。木庭はどこの耕作地も等級は低く、中木庭・下木庭がほとんどである。上々木庭・上木庭は平地に近い10～12,尾崎（小字在家）や55,つはん作り下（小字前原）にある程度で、山腹や稜線部の木庭にはあまり見られない。

### まとめ

漁業権や海岸の地先権をもたない内山村は、山林を有効活用することによって村の産業を維持しなければならなかった。より広範囲の山林領有を求めた在地領主内山い阿弥陀仏は豆敷在庁の神領天道山を争った。この相論から当時すでにシイカシは重要食糧であり山手がかけられていたこと、山林資源の争奪は特異な天道信仰を形作る要因のひとつとなっていたことがわかる。また寛文検地帳記載の地名と現地で聞いた通称地名を照合し、いくつかを現地比定することができた。これによって中世文書には見られない田畠の耕地状況が明らかにすることができた。現在の田地は小字上原・下原が主力生産地となっ

ているが、寛文年間にはまだ下原に田地の形成は見られず、上原よりひとつ谷奥となる小字前原と上原が主力生産地となっている。当時の前原には田畠両方の耕地があり、ともに上々～中の等級が集積している。内山は谷の東である在家（屋敷地と畠）と前原（田畠）を中心として出発し、徐々に西の低地である下原へと開発が進んだと考えられる。また木庭にかんしては、中腹から平地周辺の木庭のほうが等級がよい。山の稜線は下木庭がほとんどだが、各耕地2000～5000坪程度の面積は見込まれる。平地・山腹よりも労働量は大きくなるものの、相論するに十分価値あったと考えられる。

### 注

- （1）『日本国語大辞典』。
- （2）任東権「玄界灘に残る韓国文化」『玄界灘の島々』110～116頁参照のこと。
- （3）永留久恵『厳原町誌』第二編地誌 第五章神社・寺院168頁。

# 対馬豆酩の村落景観と祝祭空間

黒 田 智

## はじめに

「はァ、おもしろいこともかなしいこともえっとありましたわい。しかし能も何にもない人間じゃけに、おもしろいことも漁のおもしろみぐらいのもの、かなしみというても、家内に不幸のあったとき位で、まァばァさんと五十年も一緒にくらせたのは何よりしあわせでございました。」

だいぶはなしましたのう。一ぶくしましょうかい。」

（宮本常一「梶田富五郎翁」『忘れられた日本人』

岩波文庫 1984年）

戦後まもなく対馬を訪れた九学会連合対馬共同調査委員会が調査の対象地とした村々の一つに、対馬島最南端の町豆酩があった<sup>(1)</sup>。この調査に参加した宮本常一は、対馬の漁業史を丹念に調べ歩くとともに、豆酩の村落構造を解明した幾つかの著述を残している<sup>(2)</sup>。その後も長崎県教育委員会による調査が続けられ、また城田吉六・永留久恵といった郷土の研究者たちによる博搜が、日本の西の最果ての島嶼である対馬豆酩の民俗・信仰の解明を着実に前進させつつある<sup>(3)</sup>。

この対馬豆酩を主要なフィールドに定めて、中近世における村落景観と祝祭空間の歴史的関係を考察してみたい。中近世の豆酩に生き続けた信仰や儀礼・宗教秩序の実態を動態的にとらえてみよう。そして、それが中近世の豆酩の人々の生産諸活動の場としての耕地（水田・畠・木庭）や集落といった景観の歴史的変容、さらには豆酩をとりまく政治的・社会的状況の歴史的変化とどのような関係にあったのかを考えてみることにしよう。

## 1 18世紀の赤米神事

### (1) 赤米の村

#### 豆酩の年中行事

対馬の南端に位置する豆酩は、人口約1400人、600余戸を有する対馬第2の集落である。北方には矢立山・龍

良山といった島内最高級の険峻な山並みが連なり、東西に神崎・豆酩崎を擁し、南西部を玄界灘の荒磯に囲まれ、東に内院海谷を控えて、かつては容易に他を寄せ付けない天然の孤村であった。九学会連合調査で豆酩研究を主催した石田英一郎は、「対馬の中でも西南の端に、相当他の部落から隔絶されて孤立した存在として、長い歴史を持っている非常に特殊な部落」であるとしている<sup>(4)</sup>。

その豆酩では、現在も数多くの民俗行事が残り伝えられている（海老澤衷「調査の目的と概要」参照）。たとえば、2月のサンゾーロー祭は雷神社でその年の吉凶を占う亀卜神事であり、8月のカンカン祭は行宮神社で行なわれる神功皇后の三韓征伐を再現した祭事で、一年間に催される各種の民俗行事はバラエティーに富んでいる。そのほか各神社の祭礼や盆踊りや伊勢講・大師講などがあったという。そのなかでも、とりわけ豆酩を特徴づけているのは、天道信仰と呼ばれる独自の信仰を育んできた点にある。

#### 頭受け神事——「祭田の稲芒必ず赤し」

対馬豆酩は、頭受け神事を伝える「赤米の村」として名高い。

毎年春になると、頭屋の屋敷本座の天井に吊してある赤米の神俵から種粃を降ろして苗代を準備する「種下ろし」がはじまる。苗代の成長を待って、6月10日頃に寺田の「田植え」が行なわれる。夏を越えて赤くたわわに実った赤米は、10月初旬に収穫の秋を迎える。刈り取られた赤米は新しい藁で編まれた俵に納められて本座の天井に吊して祀られる。この「お吊りまし」を終えると、その年のうちに初穂米を献じ、あるいは赤米飯にして濁り酒とともに食し、あるいは餅つきが行なわれる。こうしてその年の頭屋は無事その役割を終えて、明けて正月10日の頭受け神事を迎えるのである。

頭受け神事とは、前年当役を勤めた家＝<sup>はれとう</sup>払頭の座敷の天井に吊された赤米の俵を次の当役＝<sup>うけとう</sup>受頭へと引き継ぐ儀式である。毎年旧暦正月10日の深夜、受頭の使者が払

頭のもとへやってくる。歌口が出歌を唄うなか、<sup>もりまし</sup>守座の背中に担がれたに赤米の神俵が受頭の家へ移座する。受頭の家では、払頭・守座・お亭坊を交えて夜を徹して酒宴が催される（本石正久「豆穀の赤米神事」）。

こうした豆穀の赤米神事は、文献史料上では文化6年（1809）成立の『津島紀事』を初見としている。

〔史料1〕平山東山『津島紀事』文化6年（1809）成立  
 多久頭魂神社（中略）当社祭所供 米祭田之、田丁毎歳一戸輪当会首家、先期注連門戸清潔堂宇承種子於先会首家、俟時而佃納穀供、且以酒食饗廟祝其敬崇、如茲土俗称之天童祭、其謬来尚矣、且祭田稻芒必赤、愚氓以為奇異、祭田唯殖赤稻、此繙徒使凡俗愈信天童法師如此<sup>(5)</sup>、

〔史料1〕によれば、毎年輪番で耕作された多久頭魂神社の祭田は、「<sup>とうぼう</sup>稻芒必ず赤くして愚民以て奇異となす」とされ、赤米の神秘性が語られている。当首の家で催される饗宴を土俗に「天道祭」と称したという。

〔史料2〕中川延良『楽郊紀聞』安政6年（1859）成立  
 天童の田とて、村の者の内、年々四軒宛廻りに作る村中悉くにはあらず。家数極り有と也。此田の米は赤し。是は不思議なる事也。近所の田の中にも、時々赤き米は交れ共、外の田の白き米は、此田に交らず。いか成故にや。村の者は、天童の霊なる由申也。同年九月十五日、同人話<sup>(6)</sup>。

またやや遅れるものの、〔史料2〕の『楽郊紀聞』では、「4軒ずつ交替で耕作している『天童の田』の米が赤いのは不思議である。隣の田圃は白いのに、この田はけって白に染まることがない。どうしてだろうか。村の衆は天童法師の霊が宿っているせいだといっている」と記している。

供えられていたのは「白米」だった!?

前節でみたように、豆穀の赤米神事が文献史料にはじめて登場するのは、文化6年（1809）成立の『津島紀事』である。これ以前の豆穀関係史料のなかには、「赤米」の文字をみることもできない。

また赤米を作る神田は「寺田」と呼ばれており、4つの宮座組織によって耕作されていた。この宮座の組織も中世に遡る史料は今のところ発見されていない。かろうじて17世紀末の「寺田」の姿を垣間見せるのが、〔史料3〕の貞享2年（1686）成立の『體豆郡寺社記』や、ほ

ぼ同文の内容をもつ『対州神社誌』である。

〔史料3〕『體豆郡寺社記』貞享2年（1686）成立（宗家文庫）〔傍点は黒田による〕  
<sup>(仏供田)</sup>  
 観音ぶく多之事

一、田五斗三升蒔、但四当と申テ四ツニ割て、村中氏子壹々年ニ四人宛シテ作ル、十月十八日ニ御ぶくを上ケ種ニ入、其残ハ餅ニつき上ケ候而、正月朔日・五日の朝、上供僧観音堂に籠り、天童大菩薩の法ヲ以、国下の御祈念仕候、此餅を右之氏子・郡中共ニ是をいたゝく也、

十月十八日ニ御ぶく用白米壹斗貳升、極月十八日より廿日迄、日ノ酒米はかりと申、にごり酒一日ニ貳斗宛上ケ申候、

右者住持圓立坊方より仕候<sup>(7)</sup>、

〔史料3〕より、4つの頭によって耕作されていたという観音仏供田の存在が知られる。5斗3升蒔の水田では、10月18日に収穫された仏供米を供え、残りは餅につくという。注目すべきことに、そこで収穫され供えられていたのは1斗2升の「白米」と記されていたのである。

しかも、仏供用の「白米」は観音仏供田にかぎらず、後掲の〔史料6〕のように天童菩薩免田などでもみられる。17世紀の天道信仰の仏供用途には、一貫して「白米」が奉納されていたようである<sup>(8)</sup>。

但し、ここでいわれる「白米」とは、赤米に対する白米の意ではなく、玄米をついて白くした精米のことと考えられる。17世紀当時の仏供米が赤米であった可能性は否定されない。

とはいえ、重要なのは〔史料1〕・〔史料2〕のような赤米の神秘性に対する記述が、〔史料3〕では全くみられない点である。

「白米」から赤米へ。おそらく『體豆郡寺社記』から『津島紀事』までの間の、18世紀のある時期に仏供用途に対する心性の変化が起きていたと考えられる。その前と後とでは、赤米崇拜の心性に明らかな温度差が認められるからである。それ以前から赤米を祀っていたとしても、神秘的な赤米を供えることをことさらに強調するような事態——赤米崇拜の機運が、18世紀に高まりをみせていたのである。

## (2) 排除と崇拜



## 排除された赤米

赤米をめぐる、植物学・農業技術・民俗学・考古学・歴史学といった様々な分野で多角的な研究が重ねられてきた。これまでの赤米をめぐる主要な研究は、以下の通りである<sup>(9)</sup>。

a 柳田国男「大唐田又は唐干田と云ふ地名」(『定本柳田国男全集』筑摩書房 1970年、初出1914年)

b 宝月圭吾「本邦占城米考」(『日本農業経済史研究』下日本評論社 1949年)

c 盛永俊太郎・柳田国男・安藤広太郎・嵐嘉一ほか「赤米」(盛永編『稲の日本史』筑摩書房 1955年)

d 嵐嘉一『日本赤米考』雄山閣 1974年

e 応地利明・坪井洋文・渡部忠世・佐々木高明「学際討論 赤米の文化史」(『季刊人類学』14-4 1983年)

f 黒田日出男「開発・農業技術と中世農民」(『日本中世開発史の研究』校倉書房 1984年、初出「中世農業技術の様相」1983年)

g 深谷克己「赤米排除」(『史観』109 1983年)

h 坪井洋文「稲作文化の多元性」(『風土と文化』日本民俗文化大系1 小学館 1986年)

i 坪井洋文「赤米の民俗」(『民俗学研究所紀要』11 1987年)

j 渡部忠世「赤米の意味と民俗」(『アジア稲作文化の展開』稲のアジア史2 小学館 1987年)

k 服部英雄「赤米地名とおぼし田の分布ならびに命名の背景」(『地名の歴史学』角川選書 2000年)

こうした成果に導かれながら、日本における赤米の歴史を簡単にまとめておこう。

赤米とは「玄米の種皮の部分に赤色系色素を含んだ米」である(e)。日本にもたらされた赤米には短粒型の古代米であるジャポニカ米と、遅れて中世に入ってきた長粒型のインディカ米、いわゆる「大唐米」の2種類があった(d・e)。日本の赤米は、2度の排除の歴史をもっている。

縄文晩期から弥生初期までに、短粒の日本型の赤米が日本に渡来したといわれる(c・d・e)。日本における赤米の初見は天平6年(734)の正倉院文書「尾張国正税帳」であるが、その後赤米の歴史は600年ほど途絶えてしまう。この間に、白米が赤米をアジアの規模で駆逐していったと考えられている(e)。

11世紀後半から14世紀までに、再び長粒の印度型の赤米が中国からもたらされた(b)。この「大唐米」と称する赤米は、中世において新田開発の尖兵としての役割を果たし、西日本を中心に広範に普及していった(b・f)。ところが18世紀になると、美味な白米の市場性の高まりのなかで次第に赤米が排除されてゆき、近代までに赤米は滅亡の一途をたどっていったのである(g)。

## なぜ日本で赤米が神に供えられたのか

赤米排除の歴史はアジア共通の傾向である。けれども、赤米を信仰や儀礼の対象とする精神構造は、アジアのなかでも唯一日本に特殊なものとされている。

なぜ日本で赤米が神に供えられたのか。それは、日本における赤米研究の主要な命題であり続けている。

1955年に刊行された討論集『稲の文化史』(c)のなかで、柳田国男は赤米と小豆の民俗的・信仰的な親和性に着目している。ハレの食事としての小豆を含んだ赤飯の原像が、赤米への尊崇にあったのではないかとしたのだ。

この柳田が残した通説に対して、重要な提言をしたのが坪井洋文であった。坪井は、1983年の「学際討論 赤米の文化史」(e)のなかで、①赤米を祀る民俗神事の起源が文献史料では18世紀末を遡らないこと、②現存する赤米神事が赤米と白米の緊張関係を表す儀礼としてとらえられること、③赤米が焼畑の畠作物の一種であったことなどの指摘を行なって、赤米研究の新地平をもたらした。

特に③は、現在も赤米を神に供える対馬豆殷や種子島茎崎・岡山総社の事例がいずれも焼畑文化を色濃く残す土地であることに注目した指摘である。これは日本の稲作単一文化を批判した『イモと日本人』や『稲を選んだ日本人』の発展でもあった<sup>(10)</sup>。日本には、「餅＝白色→水田稲作農耕」と「餅にあらざる赤色＝火→焼畑農耕」という象徴連鎖に示される2つの世界が並行的に存在していたという。稲作文化と畑作(焼畑)文化という2つの異質の文化は、日本の長い歴史のなかで対立・抗争し、最終的に非稲作(畑作)文化が稲作文化のなかに同化していったと考えられている。

この坪井の提言を受けて、野本寛一は、シコクビエと小豆が焼畑文化圏の広い範囲で長い間栽培されてきた赤色食物であることに注目し、『焼畑農民の「火色」・「赤色」尊崇心意と赤色食物たる「シコクビエ」・「小豆」の多用→稲作転換後における潜在的赤色志向による「赤米」

の特殊化→赤米の代替食物であり、その原質でもあった小豆への執着→「赤飯」の盛行」という仮説を想定している<sup>(11)</sup>。赤米が神に供えられたのは、焼畑作物として栽培されていた時代の赤米への尊崇の名残ではあるまいかというのである。

坪井も再びk論文で野本の見解を評価して、水田中心史観を批判し、日本における赤米をめぐる儀礼を焼畑農耕文化としてとらえなおすべきであるとしている。

#### 縄文文化と焼畑作史

ほぼ同じ頃、佐々木高明は、稲作以前の縄文文化を採集と畑作からなる「照葉樹林焼畑農耕文化」としてとらえ直し、焼畑から水田へという日本の農耕文化の変容過程を跡づけた<sup>(12)</sup>。焼畑文化は、稲作文化に先行して西日本を中心に広く普及していた。初期の稲作は、赤米のような野生種が粗野な耕地に雑穀栽培と同様に少量生産されていたと推測されている。

また植物遺伝学の佐藤洋一郎は、縄文遺跡から次々に発見されたイネの痕跡から、現在的水稻である温帯ジャポニカとは別種の熱帯ジャポニカが、焼畑などの水田とは異なる多様な方法で耕作されていたと主張している<sup>(13)</sup>。さらにこの熱帯ジャポニカは、水稻と集約的水田稲作が政治的に押し進められていった近世まで確実に生き続けていたことを明らかにしている。

さらに中世日本の焼畑については、古島敏雄・黒田日出男・木村茂光らによる蓄積がある<sup>(14)</sup>。網野善彦もまた、中世社会が水稻と農業民だけでなく、多様な生業と非農業民によって構成されていたことを、様々な視点から明らかにしている。

加えて伊藤寿和は、古代・中世における焼畑や山畑・野畠といった多様な畑作・畠作のあり方をあきらかにしつつある<sup>(15)</sup>。また古代畑作を概括した畑井弘や、近世畑作史を論じる橘礼吉・溝口常俊・三浦保寿・米家泰作の仕事がある<sup>(16)</sup>。これらは、日本の焼畑文化が古代以来江戸時代まで長く定着し、残存していたことを示すものであった。

縄文期の焼畑耕作とそこで栽培された稲の記憶は、近代に入るまで完全に消滅することはなかったのである。近世以前の日本は、一面の水田が広がる瑞穂の国ではなかった。

#### 排除と崇拝の狭間で

赤米の総合的研究で大きな成果を残した嵐嘉一は、豆穀の赤米をジャポニカ米であるとしている。古代米であるジャポニカ米を用いているから、豆穀の赤米神事の起源が古代にまで遡るとする見解も少なくない<sup>(17)</sup>。しかし、第(1)節で述べたように、赤米神事の史料上の初見は、〔史料1〕が編纂された19世紀初頭のことであった。

対馬豆穀の赤米神事が史料上に登場し、赤米をめぐる心性の変化——赤米崇拝が高まりをみせる18世紀は、先行研究が指摘する稲作の歴史の転換点と奇妙な符号をみせている。

まず深谷克己が指摘する18世紀の赤米排除の過程と重なり合っている<sup>(18)</sup>。18世紀に都市を中心とした米消費の需要が増大してくるにつれ、美味で市場性の高い日本型白米が上質米として要求されるようになる。農民側の生産意欲の高まりや領主側の農業技術の追求によって、年貢米や市場米から赤米が意図的に排除されることになった。

この時期はまた、佐藤洋一郎が説く熱帯ジャポニカの消滅期ととらえることもできる<sup>(19)</sup>。江戸末期から昭和初期にかけて、熱帯ジャポニカは日本の水田から次第に姿を消していったと考えられている。縄文時代に渡来した焼畑の熱帯ジャポニカが水田の温帯ジャポニカに最終的に置き換えられたのは、江戸幕府・諸藩の強力な政治的施策によって列島全域に大規模で集約的な水田耕作が実現をみた、今からわずかに200年程前の事態にすぎなかった。

赤米排除と赤米崇拝。この18世紀に起こった矛盾する2つの事態について、とりあえず以下のように理解しておくほかあるまい。

18世紀日本で次第に排除されていった赤米は、宗教儀礼のなかで神として崇拝されるようになった。赤米は消滅の危機ゆえに逆説的にその価値を高めていったのだ、と。

### (3) 社寺とクゾウ

#### 天道縁起のなかのクゾウ

18世紀における対馬豆穀の天道信仰の変化を、豆穀の社寺の歴史から照射してみよう。

豆穀を特徴付けるのは社寺の多さである。

寺院は、現存する金剛院・永泉寺のほかに、明治期まで自湛院・耕月庵・潮海庵などがあった。

神社は、㊶多久頭魂神社、㊷下宮神社（別に外宮社）、

㊤天神社、㊦行宮神社（別に権現神社、あるいは神住居神社）、㊧五王神社（別に牛王神社）、㊨師殿神社（別に軍大明神社）、㊩雷神社（別に嶽大明神）、㊪伽藍社、㊫高御魂神社（あるいは大明神社）、㊬国本神社、㊭祇園社、㊮恵比寿神社、㊯松崎神社、㊰三宝神社、㊱志々岐神、㊲石神寄神など、全部で15、6にものぼる。これらの神社は、9人のクゾウとよばれる半俗の僧侶たちによって守られてきた。

クゾウは「宮僧」・「供僧」と表記される。「ジュウジ（住持）」・「エンチ（円智）」・「エンシュウ（円秀）」・「オカヤマ（岡山）」・「ニイドン（二位殿）」・「サンメ（三位）」・「ショウゼン（正膳）」・「カクゼン（覚膳）」・「コウサク（孝作）」の屋号をもつ特定の家で世襲されてきた。彼らは豆酸村内のいずれかの神社を管掌し、かつては村人の吉凶から村の年中行事までの全ての祭祀を取りしきっていた。但し、宮本常一・城田吉六らによってそれぞれのクゾウが管理していた神社に異動があるようだ<sup>(20)</sup>。

天道縁起の一種である『天道大菩薩咄伝覚』は、本石一幸（サンメ）所蔵の文書で、元禄6年（1693）頃の成立で、天保年間の書写と思われる（徳永健太郎「豆酸関係史料について」）。これによれば、クゾウの起源は以下のように記されている。

〔史料4〕『天道大菩薩咄伝覚』元禄6年（1693）頃成立（本石一幸文書）

一、天道禁中御悩ニ付、御祈禱ニ御登り被成、御悩平癒被遊御帰、茂時公藤原之公家□□朝臣兵部卿・中納言家之公家本石二位・本石三位供僧ニ而、天道ニ御付被成、則肥前之鯨之郡千石天道領ニ御付被成、豆酸村へ居所仕、其時分爲森と申、豆酸村を守護し給ふ、右之公家天道以後住持と申伝へ候、二位・三位ハ供僧と成候与申伝候、豆酸住持ハ今一社之主

ニ而八十八ヶ所、二位・三位ハ六十六ヶ所ツゝ持候、住持方ハ社家人と申寺とふ、権現之とふ、やくまのとふと申、豆酸内院村之生れ者年姉月妹をあらそひ、先例之ことく望ニ而相勤候、就夫其時分住持知行より祭事を勤申候<sup>(21)</sup>、

大宝3年（703）、天道法師＝宝野上人は文武天皇の病氣平癒祈願のため上洛した。クゾウは、平癒後に天道法師に随って京都から対馬へ下向した公家達の子孫とされている。「菅原中納言某」の子孫は、「本石二位」・「本石三位」と称して供僧として肥前早良郡を管掌した。また「為森」と称する公家の子孫が、「住持」となって豆酸村を守護したという。

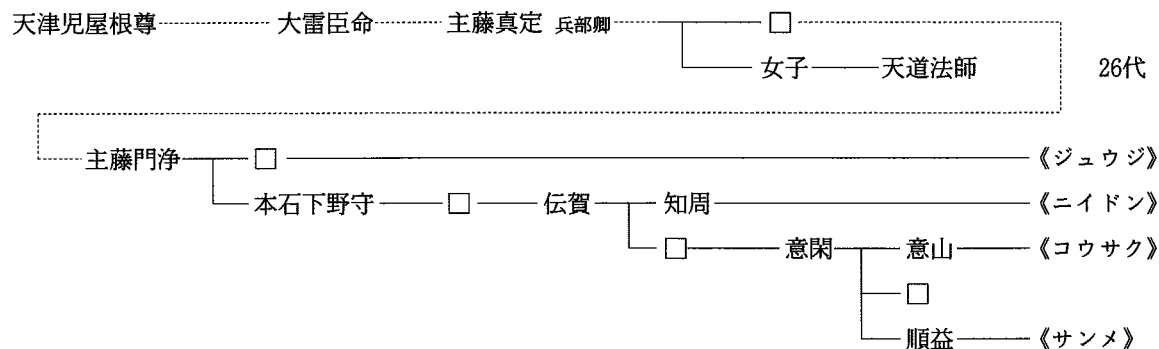
#### 系図のなかのクゾウ

現在もクゾウの家には、宝永2年（1705）の社領坪付帳とともに、明治期頃の作成と思しき系図がセットで伝えられている。今回調査することができたのは、①主藤寿（ジュウジ）、②本石一幸（サンメ）、③本石直己（コウサク）、④本石久知（ニイドン）の4種の系図である<sup>(22)</sup>。これらの系図には、天道縁起とは別種のクゾウの出自が描かれている。これをまとめたのが次図である。

〔系図1〕によれば、4つのクゾウ家は同族である。天児屋根命の後裔といわれる大雷臣命を祖先として、代々「対馬長者」と号した。その後、兵部卿真定がはじめて主藤姓を名乗ったという。「ジュウジ」はこの真定の直系ということになる。残る3家は、主藤真定から26代下った主藤門浄の次男である本石下野守で分岐して、その後4代のうちにそれぞれの直接の祖先へ接続している。

また①には、主藤真定から9代目に天道法師の母公と称する女子が記されている。ここでは、天道法師に付き従って下向した京都の公家ではなく、法師誕生以前から対馬に土着していた天道法師の母系の一族であるとされ

系図1



ているのだ。

実際のクゾウたちは、いち早く応永24年（1417）11月12日「宗貞澄書下」に「住持」として登場するのが初見である<sup>(23)</sup>。また対馬北端の佐護・天道女体宮に残る女神像の永享12年（1440）台座裏銘に「三位坊」とあるのが、豆酩のクゾウの1人である「サンメ」と関係するかもしれない<sup>(24)</sup>。とはいえ、16世紀に入って「三位」・「下宮宮司」・「豆酩郡供僧」といった名称で宗氏判物にみられるまで、ほぼ中世を通じてその姿を確認することはできないのである<sup>(25)</sup>。

#### 「天道御本堂」・「観音堂」・「多久頭魂神社」

クゾウが管掌する神社もまた、高御魂神社が延喜式にみえるのを唯一の例外として、中世の史料に登場することはない。

但し、「本堂」・「堂」なる堂社に注目したい。



写真 2-38 多久頭魂神社・観音堂遠景

現在、多久頭魂神社となっている観音堂の梵鐘は、寛弘5年（1005）の「豆酩御寺」の前壇越である権掾阿比留宿弥良家によって奉懸されて以来、仁平3年（1153）・康永3年（1344）の改鑄を経て今に伝えられている。また下津八幡宮文書所収の文永4年（1267）「寺社僧徒等免行事」には、「豆酩御寺」の名が確認できる<sup>(26)</sup>。

15世紀初頭頃と思しき5月25日「宗貞茂書下写」は、「豆酩天道御本堂」の勸進を命じた文書であった<sup>(27)</sup>。後掲の正平9年（1354）閏10月 日「豆酩神官しんはう申状案」にも「御たうの御前」があり、慶長10（1605）年2月16日「天道祭の役者の事」にも「たう」がみえる<sup>(28)</sup>。

応永24年（1417）11月12日「宗貞澄書下写」では、この「堂」は「観音堂」の名で呼ばれていたことがわかる<sup>(29)</sup>。また主藤寿文書では、この「観音堂」を管理する人物として「豆酩住持」なる宛所で、宗氏島主・豆酩郡

主らによる判物が度々発給されている。

この「豆酩住持」なる宛所の文書は、慶長14年（1609）8月28日「宗義智書下」を終見として、宝永6年（1709）1月1日「宗義方書下」以降は「観音住持」なる呼称に変化する。

また近世に入ると、対馬藩が島内の社寺の所領や縁起をまとめた寺社記や神社帳が度々作成されるようになる。寺社記・神社帳に掲載された神社を記載順にまとめたのが〔表 2-12〕である<sup>(30)</sup>。また対馬藩による最初の寺社記である貞享2年（1685）2月19日成立の『八郡寺社記』を掲げよう。

〔史料 5〕『八郡寺社記』（貞享2年（1685）2月19日・

宗家文庫文書）

#### 酩豆郡

真言宗	開山郎覚快雲	金剛山	寺号
長安寺			
一、寺領壹間五寸九分		金剛院	
禪宗	郡惣様	玉峯山	
一、寺領参尺六寸四分六厘八毛二八		永泉寺	
禪宗			
一、寺領貳尺七寸貳分三厘八毛六八		潮海庵	
禪宗			
一、寺領貳尺六寸八分九厘四毛		耕月庵	
禪宗		他此字も	
一、寺領壹尺貳寸三分五厘三毛二		自堪院	
一、寺領壹尺五分九厘四毛四六		宝泉庵	
(中略)			
		豆酩村士卒山	
一、堂領三尺六寸七分六厘一毛九二		観音堂	
(中略)			
酩豆郡社堂			
一、観音堂 士卒山		酩豆村	
社領参尺六寸八分六厘九毛二六		住持	
一、師大明神			
社領貳尺三寸九分三厘二毛六八		来順坊	
一、牛王大明神			
社領貳尺壹寸一分一厘一毛六		知慶坊	
一、権現			
社領壹尺八寸九分八厘九毛四八		宮司	
一、大明神			

表 2-12 神社帳類にみる豆殿の神社

八郡寺社記 御郡奉行 F 10 貞享 2 年(1685) 2 月19日	醴豆郡寺社記 御郡奉行 F 9 貞享 2 年(1685)11月 日	八郡寺社領帳 御郡奉行 F 寺社12 宝永 2 年(1705)10月 日	八郷社領坪付渡帳 寺社方22 戊	八郷寺社記 御郡奉行 F 11 不明
観音堂 士卒山 師大明神 牛王大明神 権現 大明神 伽藍 天神 外宮	天道大菩薩延記 行宮大権現延記 嶽野大明神 天神宮 高雄御むすぶ之神 軍神 下宮 伽藍 護法 瀬村鉾大明神 祇園神社 護法と申神 松崎神 三宝荒神 石神寄神之社 薬師堂	観音堂領 権現社領 師大明神領 牛王大明神領 大明神領 伽藍社領 天神領 天神領 外宮領	観音堂領 権現社領 師大明神領 牛王大明神領 大明神領 伽藍領 天神領 外宮社領	観音堂 軍大明神 牛王大明神 権現 大明神 伽藍 天神 外宮

対馬国大小神社帳 寺社方 C 2、3 宝暦10年(1760)12月 日	対州社領間高帳 寺社方 D 7(1) 天明 6 年(1786)閏10月 日	対馬国神社帳 表書札方 G ①14 文化 4 年(1807)11月12日	対馬州神社大帳 寺社方 C 5 不明
高御魂神社 末社 軍殿社 行宮権現神社 嶽大明神 外宮社 天神社 牛王神社 伽藍社	行宮社領 軍大明神領 牛王社領 高御魂社領 伽藍社領 天神社領 甚左衛門知行 外宮領 観音堂領	高御魂神社 多久頭魂神社 行宮神社 末社 下宮神社 雷神社 天神神社 国本神社 師殿社	高御魂神社 師殿社 行宮社 同末社下宮神社 雷神社 天神神社 多久頭魂神社 五王社 伽藍社

社領老尺八寸六分五厘七毛四四 智休坊

一、伽藍

社領老尺六寸老分貳厘二毛九六 周存坊

一、天神

社領老尺四寸二分・七毛九二 慶傳坊

国領六寸七分三厘八毛六四 社人 甚左衛門

一、外宮 御牧物尾馬此宮ニ□□

社領老尺三寸七分六厘一毛二六 円知坊<sup>(81)</sup>

このころまでには対馬藩による社寺領支配のシステムが確立していたことがわかる。〔史料 5〕において、「観音堂」は、「寺領」でも「社領」でもなく、「堂領」として特別に計上されていたことがわかる。こうした記載方式は、宝永 2 年（1705）10 月 日『八郡寺社領帳』にも踏襲されている。

ところが、『八郡寺社記』の後代の写本と考えられる年未詳『八郷寺社記』では、「堂領」の項目は削除され、「社領」に編入されてしまっている。さらに〔表 2-12〕より、文化 4 年（1807）11 月12 日『対馬国神社帳』以降

になると、「観音堂」は「多久頭魂神社」に名を変えて登場するようになる。

その後の多久頭魂神社については、城田吉六の著書に詳しい。「明治維新後、新政府の神仏分離令により、天道信仰の古神道復古が強くうちだされ、観音を祭ることと神を祭ることが分離された。観音堂豆殿寺は多久頭魂神社遙拝所となり、巨鐘奉懸の鐘つき堂の横に小さな観音堂を建立した。この観音堂は、昭和32年の火災で安置されていた観音像と共に焼け、再建されて現在に至っている」という<sup>(82)</sup>。

以上のように、「豆殿住持」は18世紀までには「観音住持」に変化した。また「豆殿天道御本堂」＝「観音堂」は、19世紀初頭までには「堂領」から「社領」へ編入されて、「多久頭魂神社」へと改変した。とりわけ「天道御本堂」たる「観音堂」が「多久頭魂神社」に改称された19世紀初頭は、天道祭にはじめて「赤米」が記載された『津島紀事』の成立とほぼ時期を同じくしている。〔史料 3〕の「観音仏供田」から〔史料 1〕の「祭田」

あるいは〔史料2〕の「天童の田」への変化とも対応している。こうした変化は、クゾウや天道信仰の儀礼のあり方に何らかの影響を及ぼしてはいないだろうか。

#### (4) 寺門・田井原の水田開発

##### 水利・灌漑の現況

水田に目を転じてみよう。

〔巻頭・口絵2〕は、2003年夏の聞き取り調査で得られた現在の水掛かりの情報をもとに、井堰毎の灌漑範囲を色分けして示したものである（堀祥岳「対馬豆殷の景観復原」参照）。豆殷の水田は、集落東方の神田川とその支流の権現川に広がっている様子がみとれる。

豆殷の灌漑現況をみると、神田川上・中流域に比較的範囲の大きな用水灌漑による水田が広がっていることがわかる。なかでも最大のものが「田井原」<sup>たいばる</sup> 一帯の水田である。田井原には、中央部を「テーハイイデ（田井原井手）」と呼ばれる全長0.8kmにも及ぶ豊富な水量を湛えた用水路が流れている。この「イデ（用水）」の右岸にあるのが、赤米を作っている「寺田」なのである。次に灌漑範囲が大きい水田は、「馬乗石」・「志多田」・「中ウズ」といった神田川上流域の用水である。

これに対して、権現川流域には比較的狭小な灌漑範囲の水田が存在している。聞き取り調査によって、権現川流域では幾つもの短い用水と天水による灌漑が行なわれていることが明らかになってきた。

豆殷の水田はどのように開発されていったのだろうか。中世から近代までの水田の開発過程を跡付けてみることにしよう。

##### 中世豆殷の水田

まず中世史料に登場する水田地名をピックアップした



写真 2-39 テーンハイ（田井原）井堰

のが〔表2-13〕である。この〔表2-13〕をもとにして、中世の水田地名をベースマップに落としたのが〔図2-9〕である。

中世史料にあらわれた水田地名についてみると、「寺門」・「権現下」・「かま坂」といった権現川下流域に集中することがわかる。特に「寺門」は、天正14年（1586）に「寺門ふか田」とあって、湿田が広がっていたことを推測できる<sup>(33)</sup>。同じく「片田」にも、かつて強湿田が並んでいたことを聞き取り調査により確認している。

これに対して、神田川流域では、「ほりい」・「吉田」といった湾曲する河道の内側にあって、もともと氾濫原であったと思われるエリアが早い時期から登場している。

ところが、この2つを除けば、それより以北の水田地名は中世史料に登場しない。「志多田」は、天正14年（1586）3月4日「宗昭景書下」の「したの田」を初見とする<sup>(34)</sup>。また「中ウズ」は、天正20年（1592）「ます女譲状」からである<sup>(35)</sup>。さらに「馬乗石」は、寛文検地帳に初めて登場する。「寺田」を含む「田井原」の地名に至っては、管見の限り明治期になるまで見ることができない。

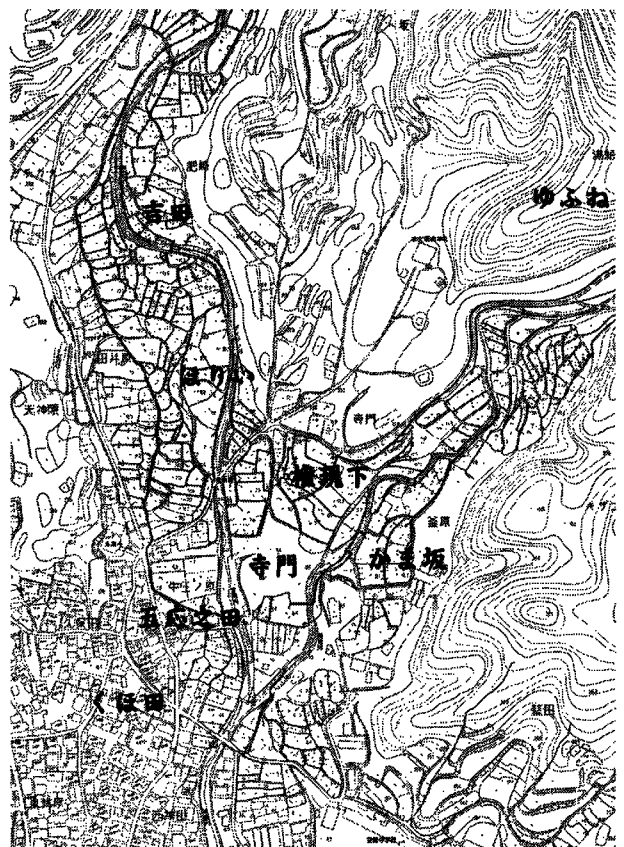


図 2-9 中世の水田地名（堀祥岳作成）

表 2-13 中世史料にあらわれた豆敷の水田地名

地名	和暦	西暦	文書名	収録文書
たうさとの田	康安 2 年 5 月 20 日	1362	某坪付宛行状	阿比留修文書
にしのおもての田	康安 2 年 5 月 20 日	1362	某坪付宛行状	阿比留修文書
かた	貞治 6 年 7 月 5 日	1367	つねふさ譲状案	小森藤枝文書
権現下	明德元年11月13日	1390	たねうち譲状写	内山文書
さふつ田	明德元年11月13日	1390	たねうち譲状写	内山文書
寺門	明德元年11月13日	1390	たねうち譲状写	内山文書
にしおもてのた	文安 5 年 7 月 18 日	1448	妙久譲状	阿比留修文書
ほりいのた	文安 5 年 7 月 18 日	1448	妙久譲状	阿比留修文書
かくしの田	文明元年10月18日	1469	宗盛貞書下写	金剛院文書
こんけんの下の田	文明元年10月18日	1469	宗盛貞書下写	金剛院文書
ゆふねの田	文明元年10月18日	1469	宗盛貞書下写	金剛院文書
かまさかの田	永正15年 6 月 30 日	1518	主藤家親譲状	主藤仁文書
寺門の田	永正15年 6 月 30 日	1518	主藤家親譲状	主藤仁文書
三佛田	年未詳（永正15年カ）	1518	豆敷住持田畠坪付	主藤寿文書
五応之田	年未詳（永正15年カ）	1518	豆敷住持田畠坪付	主藤寿文書
油田	年未詳（永正15年カ）	1518	豆敷住持田畠坪付	主藤寿文書
ゑの木田	年未詳（永正15年カ）	1518	豆敷住持田畠坪付	主藤寿文書
吉田河のは□	大永 2 年 4 月 15 日	1522	宗盛長書下写	主藤仁文書
片田の田	天文11年 7 月 26 日	1542	宗盛廉書下写	主藤仁文書
洲のみの田	天文11年 7 月 26 日	1542	宗盛廉書下写	主藤仁文書
吉田の田畠	天文11年 7 月 26 日	1542	宗盛廉書下写	主藤仁文書
寺門の田くほ	天文12年 2 月 18 日	1543	周藤盛親証状	主藤仁文書
よせまち田	天文12年 2 月 18 日	1543	周藤盛親証状	主藤仁文書
かま坂の田	永禄 8 年	1565	宗盛円書下	主藤仁文書
寺門之田	永禄 8 年	1565	宗盛円書下	主藤仁文書
よし田	永禄 8 年	1565	宗盛円書下	主藤仁文書
片田の田	永禄 9 年10月27日	1566	宗盛円書下写	主藤仁文書
くほ田	永禄 9 年10月27日	1566	宗盛円書下写	主藤仁文書
洲の上の田	永禄 9 年10月27日	1566	宗盛円書下写	主藤仁文書
へつたうの田	永禄 9 年10月27日	1566	宗盛円書下写	主藤仁文書
吉田の田畠	永禄 9 年10月27日	1566	宗盛円書下写	主藤仁文書
ゑの木田	天正 6 年 8 月 23 日	1578	宗信国書下	主藤寿文書
こんけんの下の田	天正 8 年10月17日	1580	宗昭景書下写	金剛院文書
ゆふねの田	天正 8 年10月17日	1580	宗昭景書下写	金剛院文書
彼岸田	天正 8 年 3 月 28 日	1580	宗尚広書下	主藤寿文書
寺門の田くほ	天正 8 年 5 月 28 日	1580	主藤調長譲状	主藤仁文書
よせまち田	天正 8 年 5 月 28 日	1580	主藤調長譲状	主藤仁文書
四せまち田	天正14年 3 月 4 日	1586	宗昭景書下	主藤仁文書
くほ田	天正14年 3 月 4 日	1586	宗昭景書下	主藤仁文書
したの田	天正14年 3 月 4 日	1586	宗昭景書下	主藤仁文書
寺門の田	天正14年 3 月 4 日	1586	宗昭景書下	主藤仁文書
寺門のふか田	天正14年 3 月 4 日	1586	宗昭景書下	主藤仁文書
ふき山の田	天正14年 3 月 4 日	1586	宗昭景書下	主藤仁文書
したゝの田	天正20年	1592	ます女譲状	主藤寿文書
中うつの田	天正20年	1592	ます女譲状	主藤寿文書
かんた	年未詳	9999	(坪付)	阿比留修文書
瀬之田	年未詳	9999	(坪付)	阿比留修文書
ほり井	年未詳	9999	(坪付)	阿比留修文書
ゑの木田	年未詳	9999	(坪付)	阿比留修文書



どうやら神田川水系の比較的大規模な井堰灌漑の成立は、近世以降のことであったと考えられる。

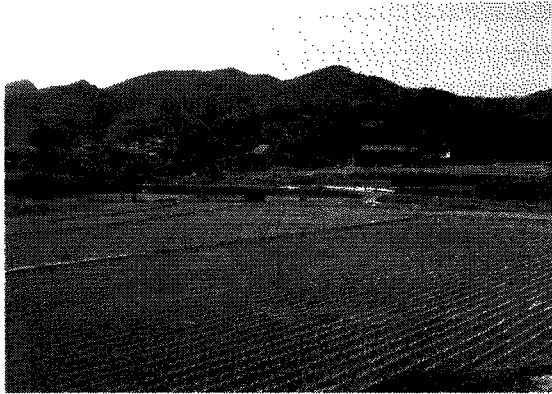


写真2-40 寺門の風景

#### 寛文検地帳を読む

近世に入ると、対馬藩は新田開発を奨励し、広く谷間の開発や河口の潟・河岸の開拓が進展してゆく。

寛文2年（1662）、対馬藩は大浦権太夫を登用して島内全域の検地を行なった<sup>(36)</sup>。全島にわたって畠・田・木庭を上々・上・中・下の4段階の地味に分けて、それぞれの蒔高で換算した検地帳を作成している。

寛文検地帳に記された豆敷の村高は100石余で、対馬最大であった<sup>(37)</sup>。〔表2-14〕は、寛文2年「豆敷村検地帳」に記載された水田の地味と収納量などを地名ごとにまとめたものである。地目・地味を上畠廻しで換算したものの総計を算出している<sup>(38)</sup>。

総収納量をみると、「馬乗石」・「志多田」・「中ウズ」に多いことがわかる。大きな灌漑面積をもつ上質の水田が、神田川流域に開発されていたことがわかる。但し、寛文検地帳に「田井原」の地名は存在しない。

他方、権現川下流域地名である「三くぢん」・「四せまちた」・「かまさか」・「かまはる」・「川はた」・「権現ノ下」・「寺かと」・「橋のもと」・「ひんかんちん」は、総収納量は決して多くはない。

けれども、一筆当たりの水田の面積を比較すると、9反余の「川はた」をはじめとして「権現ノ下」・「三くぢん」・「寺かと」といった地名の水田が大きいことがわかる。またこれらの地名について全水田に占める上々田・上田の割合をみると、「四せまちた」100%、「かまさか」100%、「川はた」が89.42%、「権現ノ下」89.53%となり、多くは高い比率を示している<sup>(39)</sup>。

このことは、権現川水系が17世紀末の段階でなお開発

先進地帯としての姿を残していることを再確認させるのである。

#### 地籍図に記載された水田

さらに時代を下げて、明治地籍図の情報をもとに水田の地味の様子を示したものが〔図2-10〕である（堀祥岳「対馬豆敷の景観復原」参照）。

明治20年（1887）頃の神田川流域は、「馬乗石」・「吉田」・「ホリイ」付近に上田が多い。これに対して「田井原」は、やや地味の劣る中・下田が多くを占めて、遅れて開発された様子を残している。

他方、権現川流域の多くは下田になっていて、わずかに「釜原」や「午王原」などに上田が点在するだけである。

全体としてみれば、このころまでには神田川水系が権現川水系よりも良質の水田灌漑を実現していたといえそうである。江戸後期から明治初頭頃までの間に、神田川と権現川流域の水田の生産効率は逆転していたのである。

#### 豆敷の水田開発

中世から近代までの豆敷の水田景観の変容を考察してきた。これにより、豆敷の水田開発は以下のように結論づけることができる。

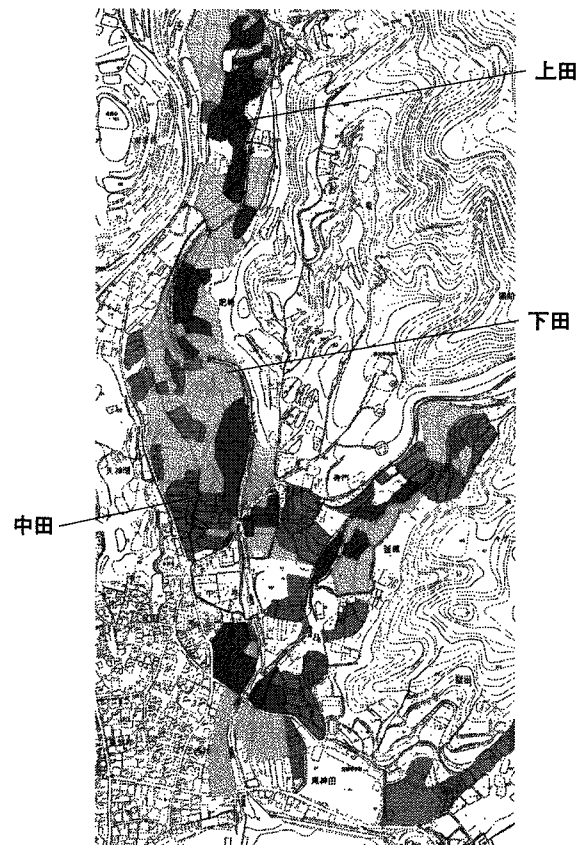


図2-10 地籍図にみる水田の地味（堀祥岳・黒田智作成）

表 2-14 寛文検地における田地の実態

地名	上々田(上畠廻)	上田(上畠廻)	中田(上畠廻)	下田(上畠廻)	筆数	総収納量(上畠廻)	総面積(反)	一筆当たりの面積	上々田・上田比率
□□木	0	0.2	0.3	0.05	5	0.55	3.91	0.78	19.15%
□たまた	0.32	0	0	0	1	0.32	0.53	0.53	100.00%
□つた	0	0	0.46	0.08	5	0.54	4.81	0.963	0.00%
三くちん	0	0	0.7	0	1	0.7	4.66	<b>4.66</b>	0.00%
四せまちた(よせまちた)	1.7	0.46	0	0	8	2.16	4.58	0.57	<b>100.00%</b>
いつか	0	0	1.28	0.09	15	1.37	10.4	0.69	0.00%
いなたり	0	0	0.3	0.88	9	1.18	20.08	2.23	0.00%
亥ぬた	0	0	0	0.18	3	0.18	3.73	1.24	0.00%
いのしげ	1.6	0.09	0	0	3	1.69	3.01	1.00	100.00%
馬乗(り)石	14.06	1.97	0.48	0	44	16.51	34.03	0.77	90.60%
かたゝ	2.94	0.09	2.96	1.29	44	7.29	51.46	1.16	10.20%
かねみつた	3.62	0	0	0	10	3.62	6.03	0.60	100.00%
かまさか	3.84	0	0	0	12	3.84	6.4	0.53	<b>100.00%</b>
かまはる	14.04	3.10	0.49	0	57	17.63	38.31	0.67	<b>91.47%</b>
川はた	10.14	0	0.3	0	2	10.44	18.9	<b>9.45</b>	<b>89.42%</b>
かんた	2.34	0.48	0	0	8	2.82	5.7	0.71	100.00%
かんだかわら	4.52	1.18	0.67	0	16	6.37	16.45	1.02	72.85%
久保田(くぼた)	7.18	0.29	0	0	18	7.47	13.06	0.72	100.00%
権現ノ下	0	5.32	0.35	0	4	5.67	22.28	<b>5.57</b>	<b>89.53%</b>
寺院ノ上	0	0.4	0.2	0	4	0.6	2.83	0.70	52.94%
寺かと	0	4	1.5	0	7	5.5	25	<b>3.57</b>	60.00%
したゝ(の原)	10.14	1.34	1.95	1.24	41	14.67	59.73	1.45	36.75%
たち花	7.78	0.65	0.03	0	29	8.46	15.61	0.53	98.72%
たふりちん	0	0.66	0.6	0	2	1.26	6.5	3.25	38.46%
たるき	0	0	1.02	4.00	56	5.02	88.58	1.58	0.00%
つひし	0.4	0	0	0	1	0.4	0.66	0.66	100.00%
つひしはな	2.3	0.86	0	0	11	3.16	7.08	0.64	100.00%
つもの原	4.36	0.81	0	0	12	5.17	10.31	0.85	100.00%
とひのす	0	0	0	0.17	1	0.17	3.5	3.5	0.00%
ないた	0	1.56	0.34	0	7	1.9	8.11	1.15	72.07%
中うす	16.5	1.29	0.17	0.04	79	18.00	34.41	0.43	94.00%
長田	1.64	0.46	0.25	0	5	2.35	6.15	1.23	72.90%
はこた	0	0	0.69	0	3	0.69	4.6	1.53	0.00%
橋のもと(口東)	2.88	2.73	0.4	0	6	6.01	17.71	2.95	84.95%
はるのかけ	0	0	0	0.45	3	0.45	9.33	3.11	0.00%
ひ(ん)かんちん	0	0	0.45	0.57	5	1.02	14.66	2.93	0.00%
ひさき	1.4	1.04	0.88	0	8	3.32	12.1	1.51	51.52%
ふき山	0	1.37	3.25	1.20	41	5.82	51.43	1.25	10.01%
ふちの上	1.62	0.28	0	0	8	1.9	3.75	0.46	100.00%
ふなこし	0.2	0	0	0	1	0.2	0.33	0.33	100.00%
ほりい	7.08	2.82	0	0	19	9.90	22.4	1.17	100.00%
みあけた	0.62	0.85	0.21	0.03	13	1.71	6.33	0.48	66.84%
山中口	0	0	0	0.44	6	0.44	9.1	1.51	0.00%
ゆたて	0	0.53	0.91	0	9	1.44	8.06	0.89	24.79%
ゆふね	0	0	0	0.65	11	0.65	13.3	1.20	0.00%
吉田(よした)	9.24	0.92	0.92	0.04	21	11.12	25.8	1.22	73.06%
ゑの木(き)た	3	0.34	0	0	8	3.34	6.3	0.78	100.00%

中世以来、権現川水系において小規模井堰・天水・強湿田といったより原始的な灌漑が行なわれていた。近世以降になって、次第に神田川右岸の大規模井堰灌漑施設が築造され、水田開発が進んでいった。明治初期に至るまでには、神田川水系の水田が、権現川のそれよりも上質の灌漑を実現していた。

神田川下流域の開発は、寛文検地から明治地籍図作成までの間の18・19世紀に進行していたことになる。「寺田」を含む「田井原」の水田もまた、この時期に開発されたものであろう。「田井原」の水田開発は、またしても赤米神事の初見史料である『津島紀事』の成立とほぼ時期を同じくすることになる。

### 18世紀の赤米憧憬

以上のように、18世紀末頃の対馬豆酛では3つの変化が起こっていたことがわかる。

すなわち、①排除・消滅の危機にもかかわらず、赤米は天道信仰の供米として強調され、赤米の神秘性が物語られるようになること（第(1)節）、②「天道御本堂」たる「観音堂」が、「多久頭魂神社」に名を改めること（第(3)節）、③「寺田」を含む神田川下流域の「田井原」における水田開発が進んだこと（第(4)節）、の3点である。

どうやら18世紀の豆酛で、天道信仰をめぐる何らかの変化が起こっていたことは間違いないように思われる。そして、こうした18世紀の様々な変化こそが、宮座組織による赤米頭受け神事を中核とする天道信仰の祝祭の枠組みを作り上げていったのではないか。

では、それ以前の天道信仰とは、いったいどのような儀礼・宗教秩序によって成り立っていたのだろうか。

赤米神事は、全く新しく登場したものではあるまい。坪井洋文が主張するように、問題は、赤米が「政治的、経済的に負の価値を背負わされて排除されながらも、神話的、儀礼的には今日まで優位性ないし対等性を維持しながら伝えられてきた」ことの意味を問うことにある<sup>(40)</sup>。18世紀の赤米憧憬の歴史的文脈を、それ以前の豆酛の信仰・景観・政治・社会の諸状況との連続性のなかでとらえ直してみたい。それは、日本の農耕文化の起源と展開を探る重要な手がかりとなることは疑いない。

次章以降では、18世紀の断層を前提として、それ以前の豆酛の村落景観や観音住持の歴史的位置を解明しながら、天道信仰の儀礼・祝祭空間の源流をたどってみるこ

とにしよう。

## 2 中世の天道祭

### (5) 村落景観の変容

#### 3つの磐境が分かつ

改めて豆酛の村落景観を概観してみよう。

昭和52年（1977）10月に撮影された空中写真を見ると、収穫を間近に控えた盛秋の豆酛の風景のなかに、赤米の稲穂の色に染まった「寺田」の様子を見出すことができる。

豆酛は、龍良山系から湧き出す乱川と神田川が南下して豆酛湾に注ぐ平野に開かれている。西に豆酛崎に連なる山並みが迫り、東には龍良山系の山々が聳えている。平野全体は南に緩やかな傾斜地をなし、その中央2つの川の間には保床山から天神山を経て南へ延びる縦長の小高い起伏がある。

毎年2月のサンゾーロー祭でキゾウとよばれる役者が雷神社を出発し、ねずみ藻を奉納しながら3つの磐境を経て豆酛湾までを往復する（海老澤表「調査の目的と概要」）。「丸柿の森」・「天神山」・「宇佐畑」という3つの磐境は、平野のほぼ中央を斜め右下がり一線に並んでいる。現在、私たちが目にする豆酛の景観は、この3つの磐境を結んだラインを境界線として、土地利用が明確に区分されている。

すなわち、磐境の東側にある神田川・権現川に沿って水田が広がっている。他方、磐境の西を流れる乱川流域には、一面の集落が整然と並んでいるのを見て取ることができる。畑は、集落北方の保床山周辺をはじめ水田・集落の周囲に点在していたことが分かる。



写真2-41 サンゾーロー祭

## 計画的な集落

宮本常一は、乱川流域に展開する豆酥集落が実に計画的なものであったと記している。

豆酥集落は、乱川沿いに上流から上・中・浜の3つの大町で分かれ、さらに15もの小町といわれる小部落から構成されている（堀祥岳「対馬豆酥の景観復原」参照）。九学会連合調査によれば、3つの町は厳格に区分され、相互に婚姻関係がなく閉鎖的で、住民は独自の骨格と体型をしていたとまでされている<sup>(41)</sup>。豆酥では、性格の異なる3つの集落が独自に形成されてきたのである。

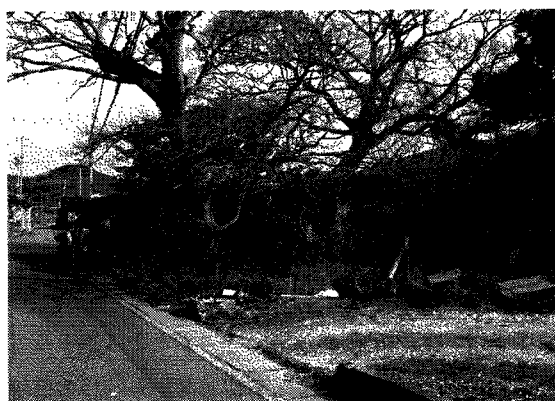


写真2-42 ガランゴウ

すなわち上町とは、クゾウなる半俗の僧侶たちが暮らす天道信仰にまつわる宗教的空間である。中町とは、古代の豆酥在庁・中世の豆酥郡主館跡地といわれる「ガランゴウ」や、近世庄屋の「やました」や「こやま」・「いわさ」・「たけおか」・「こもり」といった対馬藩給人の拠点が集中する政治的空間であった。浜町は、金剛院被官が多く居住する門前町でもあり、島外からやってきた寄留が多く移り住む交易と漁業の町でもあった<sup>(42)</sup>。

### 明治地籍図の衝撃——3つの町を隔てる畑と道

ところが、一見計画的にみえる村落景観は、120年ほど前の明治時代の土地利用図をみると一変する。〔巻頭・口絵3〕は、明治20年（1887）頃の地籍図の土地利用状況を示したものである（堀祥岳「対馬豆酥の景観復原」）。

驚いたことに、豆酥村域の多くは畑に覆い尽くされている。しかも現在も畑である保床山や「ヲテカタ」付近に加えて、集落の南西部や今では一面の宅地となっている東・西鶴原付近に広大な上質の畑地が広がっていたことがわかる。

古道の様子を見てみると、南北を貫く2つのルートの

存在が目につく。

1つは、乱川沿いの古道である。乱川を東岸に沿って南下する古道は、ちょうど上町の南境にあたる石橋を渡って川の西側に移り、最南端の恵比寿神社までほぼ直線で繋がっている。この乱川沿いの古道の両側の微低地には一面の鶴原の畑があった。集落は、道から数十メートルほど西側の山麓に張り付くように南北に細長く並んでいた。上流部の山麓では上町の集落が建ち並び、下流には耕月庵・潮海庵・金剛院と続く寺院群が点在していた。

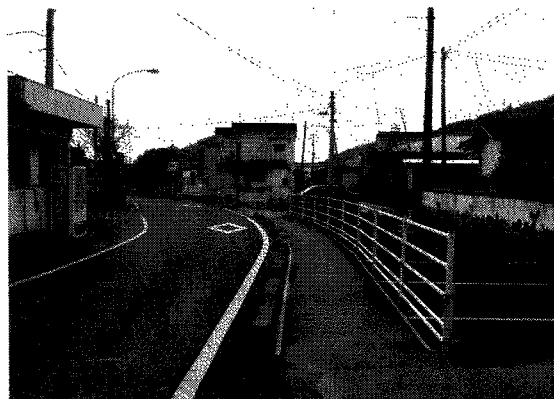


写真2-43 現在の乱川沿いの道（右方手前に石橋が見える）

もう1つは、保床山・天神山の東側を走る古道である。保床山の東山麓を迂回して南下した道は、「寺田」の前をかすめて田井原の中央を通り、永泉寺門前から中町集落を抜けて豆酥湾まで至る。中町の集落は、天神山から続く南東麓の傾斜地に形成され、永泉寺・自湛院や「ガランゴウ」や有力者の屋敷が集中していた。

2つの古道の真ん中に広がる鶴原の畑地は、天神山西の乱川沿いの微低地を埋め尽くすように広がっていて、2つの古道沿いに並ぶ集落を分断するように存在していた。明治期の豆酥は、性格の異なる集落が古道と畑によってより明瞭に区分されていたのである。集落は、いわば



写真2-44 尾崎（豆酥崎）より豆酥集落を望む

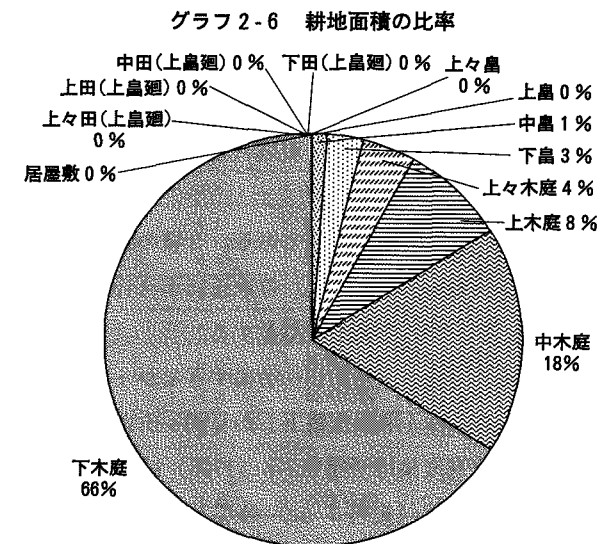
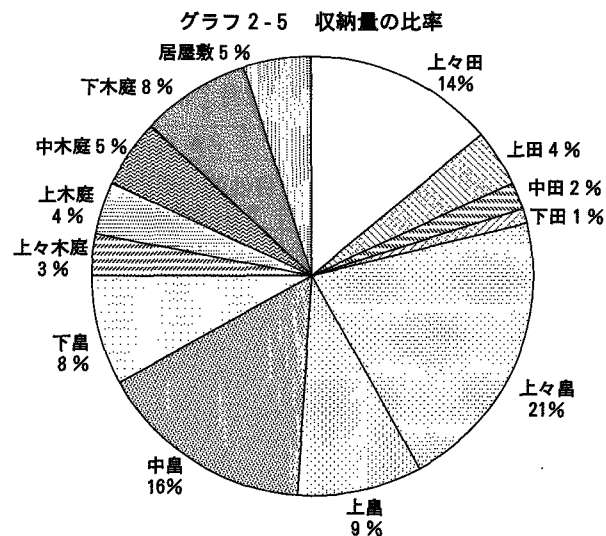
広大な畑のなかに浮かぶ3つの島であった。

早く15世紀後半成立の『海東諸国紀』には、「豆豆浦三処合わせて三百余戸」と記されていた。こうした3つの集落景観は中世まで遡るものと考えられる<sup>(43)</sup>。

#### 豆穀の耕地

〔グラフ2-5〕は、寛文2年（1662）に対馬藩によって行なわれた豆穀村の検地の状況を地目毎にその収納量の割合を示したものである。〔グラフ2-6〕は、同様に地目毎の面積の割合を示したものである。

〔グラフ2-5〕より、17世紀の豆穀では、年貢の4分の3は畠と木庭で、これから上がってくる雑穀類で、特に畠年貢は全体の約半分を占めていたことが分かる。また〔グラフ2-6〕から面積を比較してみると、96%の広大な木庭地が広がり、4%の畠地と、合わせても1



%に満たないきわめて微少な水田が存在していた。

豆穀の年貢収入の大半を占めていたのが、木庭や畠であったことに疑問の余地がない。明治地籍図の豆穀が一面の畑に覆われていたことも容易に首肯できよう。

「赤米の村」といわれてきた豆穀は、見紛うことなく「畑作の村」だったのである<sup>(44)</sup>。

#### (6) 観音住持の世界——広大な木庭

##### 観音住持の特権

中世以来の権現川下流域の先進的開発において重要な役割を果たしたと考えられるのが、観音住持である。

先述したように、観音住持はクゾウのうちで最も有力な人物の子孫である。代々豆穀観音堂の住持を勤め、豆穀の祭祀の頂点にあり続けていた。

寛文検地帳を見ると、観音住持の所領は、権現川下流域の「ひんがんちん」・「かまさか」・「三くぢん」・「川岸てん」といった、先に見た開発先進地帯に集中している。同時にこれは、以下に挙げる〔史料11〕より、天道信仰の神田であったことがわかる。

〔史料6〕『體豆郡寺社記』貞享2年（1686）成立（宗家文庫）

天童大菩薩面田ニ付毎年備物

わたへ  
一、畠壺斗九升蔭正月八日  
まい物三重  
御酒三升  
御ふく壺升 .....①

右者、御本尊三鉢之備物如此、

但作者より相調事、

かまさか  
一、田八升五合蔭 釈迦涅槃ニ白米三升御ぶくノ用、...②  
ひかんだ  
一、田五升五合蔭 阿比留八十郎地行之内より勤也、  
さんふつてん  
一、田七升蔭 二月川岸ニ白米三升ハ御ぶく之用 .....③  
.....④

右者、四月八日ニ釈迦誕生御ぶく白米三升、住持領之分より相勤候、

川岸てん  
一、田七升蔭 .....⑤

右者、八月川岸ニ御ぶく白米三升、作人より相勤事、

つむし  
一、田六升五合蔭 椿子六升七合、御とう明之用、  
.....⑥

一、同二升五合蔭 椿子式升五合、右同断、

右者、作人方より相勤事、

もちかいてん  
一、田式升蔭 正月十五日 餅粥 白米三升 .....⑦

但御松体之用、社人甚左衛門尉方より勤、

〔史料6〕のうち、②・③・④・⑤はいずれも権現川



写真2-45 旧豆酩小学校(かつてこのあたりに住持屋敷が広がっていた)

下流域地名であることが判明している。⑥の「つむし」は「つもしの原」で、現在の田井原付近の地名と考えられる<sup>(45)</sup>。天道菩薩免田は、こうした開発先進地帯の水田に設定されていたのである。

また住持領は、対馬藩給人や郡役人を除いた在地の有力者のなかで、際立って広大で上質の田畠を保持していた<sup>(46)</sup>。

さらに観音住持は、「ヲテカタ」西方の高台の好立地にある旧小学校跡地に大きな屋敷を構えていた。昭和42年(1967)に改築されるまで、住持屋敷は9間×5間の土地に50坪の屋敷が建ち、かつては門が対馬藩の番所になっていたという。また屋敷前には300坪の天道地があった。「ないの川」・「せの川」

しかし、観音住持の特権は、こうした田畠や屋敷だけにあったわけではない。

15世紀初頭以来、住持の権益は宗家当主や豆酩郡主によって保証されてきた。主藤寿文書・宗家文庫に残された住持宛の宗氏発給文書をピック・アップしたのが〔表2-15〕である<sup>(47)</sup>。

〔表2-15〕より、宗家書下の内容は大きく3つに分類される。

〔史料7-A〕永享10年(1438)5月20日「宗成職書下写」(主藤寿文書)

醴豆郡こはさかへ之事、東ハないかわかきり、北ハ  
せの河をかきりて、任先々法、閣所之状如件、

永享十年

五月七日

在御判

成職

醴豆住持圓智房

第1に、木庭境を確定し、領域内の木庭年貢の免除を定めた判物である。「木庭」とは山間部の焼畑のことで



写真2-46 住持屋敷の古写真(主藤寿氏所蔵)

ある<sup>(48)</sup>。〔史料7-A〕のように永享10年(1438)を初見とし、ここではこれをタイプ①としておく。木庭境は、東の「ない(内院)の川」と北の「せ(瀬)の川」という2つの川で確定されていた。これは豆酩村のみならず東は浅藻・内院まで、北西は豆酩瀬までを包括する広大な範囲に及んでいたことがわかる。

〔史料7-B〕長禄2年(1458)11月7日「宗成職書下」

(主藤寿文書)

右 天堂御山、就竹木以下自他所、可致狼藉輩者罪  
科処らるへき状如件、

長禄貳年

十一月七日

成職(花押)

醴豆住持圓智房

第2に、天道御山での他所者による伐木・乱暴狼藉の停止である。〔史料7-B〕の長禄2年(1458)を初見としていて、これを②とする。

〔史料7-C〕永正15年(1518)9月15日「宗義盛書下」

(主藤寿文書)

酩豆住持職之田畠等拾三ヶ所之事、任坪付末代無相  
違可有知行者也、仍而此之由可被存知之状如件、

永正十五  
寅

九月六日

義盛(花押)

酩豆 住持圓喜房

第3には、田畠所領の安堵である。3種の判物のなかでも最も遅れて、〔史料7-C〕の永正15年(1518)を初見としている。これをタイプ③とする。

住持所領の田畠は、当初13ヶ所にすぎなかったが、慶長14年(1609)の「宗義智書下」から30ヶ所に増加している。さらに寛文検地や宝永2年(1705)社領坪付作成を経て、住持領は〔史料7-ac〕のごとく3尺6寸7合6厘1毛92の蒔高に固定されていく。

表2-15 観音住持宛宗家発給文書の分類

文書名	内容・分類	差出	宛所	和暦	西暦	所蔵文書
願文	祈願	貞茂花押	所々代官中	(応永初年頃々) 5月25日	140099999	主藤寿文書(史料・長崎県図)
寄進状	寄進	貞澄花押	円智	応永24年11月12日	141711012	主藤寿文書(長崎県図)
書下	A	成職花押	円智坊	永享10年5月7日	143805007	主藤寿文書(史料)
書下	A	貞盛花押	円知坊	永享10年5月20日	143805020	主藤寿文書(史料・長崎県図)・宗家文庫(御旧判控)・長崎県史
寄進状	寄進	盛世花押	住持御房	永享12年4月10日	144004010	主藤寿文書(史料・長崎県図)
願文	祈願	盛頭花押	円貴	永享12年7月21日	144007021	主藤寿文書(史料・長崎県図)
書下	B	成職花押	円知坊	長禄2年11月7日	145811007	主藤寿文書(史料・長崎県図)・宗家文庫(対州八郡寺社判物帳)
書下	B	茂興花押	あんきほう	文明2年9月16日	147009016	主藤寿文書(史料)
書下	祭礼御穀の下行	貞国花押	酸豆住持	文明6年2月9日	147402009	主藤寿文書(史料)
書下	官司職と知行充行	国吉花押	住持房	文明7年2月18日	147502018	主藤寿文書(史料)
書下	A	茂興花押	酸豆住持房	文明8年12月25日	147612025	嶋尾成一文書(史料)
書下	知行充行	茂興花押	住持房	文明8年12月25日	147612025	主藤寿文書(史料)
書下	B	貞国花押	円喜坊	文明9年10月26日	147710026	主藤寿文書(史料・長崎県図)・宗家文庫(御旧判控)・長崎県史
書下	A	貞国花押	円喜坊	文明9年10月26日	147710026	主藤寿文書(史料・長崎県図)・宗家文庫(御旧判控・対州八郡寺社判物帳)・長崎県史
書下	遵行	宗出羽守貞秀判	酸豆住持御坊	文明13年8月10日	148108010	宗家文庫(御旧判控)・長崎県史
書下	C	義盛花押	円喜坊	永正15年9月6日	151809006	主藤寿文書(史料・長崎県図)・宗家文庫(御旧判控・対州八郡寺社判物帳)・長崎県史
断簡(後欠)	酸豆住持職田畠坪付			(永正15年々)	151899999	主藤寿文書(史料)
書下	C	盛長花押	円喜坊	永正18年6月30日	152106030	主藤寿文書(史料・長崎県図)・宗家文庫(御旧判控)
書下	C	盛満花押	円貴坊	大永7年8月10日	152708010	主藤寿文書(史料・長崎県図)
書下	B	義調花押	円喜坊	永禄4年閏3月22日	156103522	主藤寿文書(史料・長崎県図)・宗家文庫(御旧判控)・長崎県史
書下	遵行	盛円花押	円喜坊	永禄4年閏3月22日	156103522	主藤寿文書(史料・長崎県図)・宗家文庫(御旧判控)・長崎県史
書下	B	尚廣花押	円喜坊	永禄4年閏3月22日	156103522	主藤寿文書(史料)
書下写	御主殿上書き	義純御判	酸豆郡供僧中	天正4年12月11日	157612011	主藤寿文書(史料)・宗家文庫(御旧判控・対州八郡寺社判物帳)
書下	讓状安堵	親只花押	円喜坊	天正6年3月15日	157803015	主藤寿文書(史料)
書下	知行充行	信国花押	円喜坊	天正6年8月23日	157803015	主藤寿文書(史料)
寄進状	寄進	尚廣花押	円喜	天正8年3月28日	158003028	主藤寿文書(史料・長崎県図)
寄進状	寄進	ます女	円喜	天正18年11月18日	159011018	主藤寿文書(史料)
寄進状	寄進	ます女	ちう地	天正23年3月吉日	159503099	主藤寿文書(史料)
書下	法度	義智花押	津々郡中	慶長8年6月6日	160306006	主藤寿文書(史料・長崎県図)・長崎県史
書下写	c	義智花押	円吉	慶長14年8月28日	160908028	主藤寿文書(史料・長崎県図)・宗家文庫(御旧判控・対州八郡寺社判物帳)・長崎県史
書下写	a	義智花押	円吉	慶長14年8月28日	160908028	主藤寿文書(史料・長崎県図)・宗家文庫(御旧判控・対州八郡寺社判物帳)・長崎県史
書下写	養子認可	義智御判	菊若	慶長14年9月20日	160909020	宗家文庫(御旧判控)・長崎県史
書下写	a b	義智御判	酸豆円喜坊	慶長14年9月20日	160909020	主藤寿文書(長崎県図)・宗家文庫(御旧判控・対州八郡寺社判物帳)・長崎県史
書下	知行充行	義智花押	円吉坊	慶長14年9月24日	160909024	主藤寿文書(史料)
書下	住持役	貞光花押	ちうち	慶長20年7月23日	161507023	主藤寿文書(史料)・宗家文庫(御旧判控・対州八郡寺社判物帳)
寄進状	寄進	権藤清右衛門	ちう地坊	元和7年5月6日	162105006	主藤寿文書(史料)
書下	a c	義方花押	観音住持	宝永6年1月1日	170901001	主藤寿文書(史料)
書下	a c	方誠花押	豆酸観音住持	享保4年5月1日	171905001	主藤寿文書(長崎県図)
書下	a c	義如花押	豆酸観音住持	享保18年	173399999	主藤寿文書(長崎県図)
書下	a c	義蕃花押	豆酸観音住持	宝暦2年12月15日	175212015	主藤寿文書(長崎県図)
書下	a c	義暢花押	豆酸観音住持	宝暦12年9月11日	176209011	主藤寿文書(長崎県図)
書下	a c	義功花押	豆酸観音住持	天明3年4月18日	178304018	主藤寿文書(長崎県図)
書下	a c	義賀花押	豆酸観音住持	文化14年7月18日	181707018	主藤寿文書(長崎県図)
書下	a c	義章花押	豆酸観音住持	天保10年7月23日	183907023	主藤寿文書(長崎県図)
書下	a c	義和花押	豆酸観音住持	天保14年2月15日	184302015	主藤寿文書(長崎県図)
書下	a c	義達花押	豆酸観音住持	文久3年9月15日	186309015	主藤寿文書(長崎県図)
書下	遵行	景満花押	八郡中	8月2日	999908002	主藤寿文書(史料)
書下	法度	吉智花押	つゝの郡	9月25日	999909025	主藤寿文書(史料)
断簡(前後欠)				不明	999999999	主藤寿文書(史料)



〔史料 7-ac〕宝永 6 年（1709）正月 1 日「宗義方書下」  
（主藤寿文書）

豆酩郷豆酩村観音堂領地之事、慶長十四年先判有之、  
今以領掌之高三尺六寸七合六厘一毛九二并木庭さか  
へ之事、不可有相違之状如件、

宝永六<sup>乙丑</sup>年

正月元日

義方（花押）

観音住持

〔表 2-15〕をみると、これら 3 種の判物は、慶長 14 年（1609）の「宗義智書下」を画期として㉔と㉕を合わせたタイプに変化していた。その後、宝永 2 年（1705）社寺領坪付以降、歴代藩主就任時の安堵の書下発給が慣例化していくのである。こうした安堵の判物は、幕末の対馬藩宗家最後の当主義達に至るまで、歴代藩主の代替わりごとに発給され続けたのである。

〔表 2-15〕より、3 種類の書下のうち、中世以来の観音住持の特権とは、田畠所領を安堵したタイプ㉕ではなくて、タイプ㉔及び㉕であったことに疑問の余地がない。

タイプ㉔では、木庭境の東を内院川、西を瀬川としており、これは豆酩村の村域を越えて中世の豆酩郡・豆酩郷一帯を占める広大なものであった。このように広大な木庭地が、ほかならぬ観音住持に保証されていたという事実は、重大な意味をもっている。またタイプ㉕は、住持が「天道御山」という聖域の実質的な管理者であり続けたことを示している。

観音住持の特権は、「天道御山」を含む広大な木庭を保証されていたことにあったのである。

#### 頻発する木庭相論

広大な山野の住持による掌握は、南北朝以来頻発していた木庭相論に端を発していたと考えられる（本田佳奈「内山村における山林利用と木庭作について」参照）。

内山文書によれば、建武 5 年（1338）・正平 9 年（1354）の 2 度にわたって内山の木庭相論が繰り広げられていた<sup>(49)</sup>。内山の木庭地を天道信仰の神座と主張する豆酩郡司と、木庭地への押領を続ける内山伊阿弥陀仏との相論であった。そのほか中世を通じて内山・豆酩・久根・久和周辺の木庭をめぐる争いが散見する。

また寛永年間には豆酩村と瀬村で境界の木庭地をめぐる相論が勃発している<sup>(50)</sup>。正徳 5 年（1715）の豆酩村木庭相論は、4 冊にのぼる膨大な裁許記録と絵図を残し

た<sup>(51)</sup>。係争地となった垂木の木庭が公領であると主張する阿比留平介と百姓等との間で起こったもので、百姓側の敗訴に終わっている。

#### 木庭と山手銭

広大な木庭地は、権現川沿いに開発された僅かな水田以上に大きく実質的な用益の源であった可能性がある。

〔史料 8〕「享保 17 年（1732）分覚書」観音住持円喜坊  
（主藤寿文書）

一、久根之舎村より為山手銭壹貫文、但九拾六文義ニ而、是又一ヶ年間置ニ請取、……………①  
一、同村・茅谷村より為山手蕎麦十合升にて壹斗六升一ヶ年間置ニ請取候、……………②  
一、同村榎実拾イ場所之義、<sup>府内</sup>道自下タをひろう、③  
一、内山村山手之義、元之<sup>モトノ</sup>銚ノ立熊道造仕候、故免之、……………④  
一、内院村・瀬村・久根村・舎村ニ而際之印差ニ罷越候節、宮僧壹人社家人三人之古来より賄有格也、……………⑤

一、豆酩村社家人外ハ余間・表共ニ為山手家老間より榎実貳貫貳斗宛請取候事、

但古来ハ十合升ニ而之処、余間・表之□ニ而出入有之、甲午年より今升ニ成事、……………⑥  
一、金剛院被官半分之積リニ壹斗宛請取格也、…⑦  
一、油銭取としも、阿連村迄壹ヶ年間置ニ罷越之節ハ、古来より瀬村ニ而馬を取、村継ニ而罷越、夫より榎根村罷越シ肝煎方ニ致一宿、其節ハ村中之賄支度、朝者一宮藤馬殿方ニ而賄有之、尤藤馬殿方より蕎麦拾合升ニ而五升請取、村中自老間より十合升ニ而壹升宛請取格也、某乗馬老正藤馬殿方自出之、宮僧乗り馬一疋村中より出之格也、夫より小茂田村罷越鈴木格左衛門殿方ニ而賄有之、蕎麦拾合升ニ而六升請取、夫より阿連村罷越、村中家老桁より蕎麦拾合升壹升宛請取、肝煎方ニ致一宿、朝晩共ニ舎村肝煎賄也、翌朝濱之肝煎方ニ而立かわらけとし而中飯振舞有之、夫より小茂田罷帰、肝煎□□賄有之、其節去村中自蕎麦十合升ニ而家一問ニ付老升ツ、請取、夫より榎根村ニ罷越ス、梅岳庵致一宿、年始ニ規式賄有之、夕飯ハ桐谷伊右衛門殿ニ而賄有之、相伴梅岳庵也、翌朝ハ村中自賄有之、相伴ハ梅岳庵・伊右衛門殿兩人也、村中より老間ニ付蕎麦十合升ニ

而壺升ツ、請取、伊右衛門殿方自へ同六升出格也、  
夫より上槻村ニ罷越、勝山氏方ニ而賄有之、夫自村  
繼ニ而罷帰也<sup>(52)</sup>、……………⑧

〔史料8〕は、主藤寿所蔵文書のなかの享保17年  
(1732)「観音住持覚書」である。

その内容は、①久根田舎村へ山手銭を2年で1貫文徴収すること、②久根田舎村・茅谷村に対して山手蕎麦を2年で1斗6升徴収すること、③榎実採集場の規定、④内山村山手の制限、⑤クゾウが境の「印差」のために内院・瀬・久根浜・久根田舎へ下向し、各村で賄いを受けること、⑥クゾウ以外の豆酸村への山手榎実の課役、⑦金剛院被官の課徴軽減、⑧佐須郡への油銭徴収など多岐にわたっている。これらはいずれも観音住持の山手料徴収に関する事項と考えられる。

特に⑥では、クゾウ達は木庭境の「印差し」を行なっている。これは、タイプ④の宗氏より安堵された木庭境の確定に関わるものと思われる。観音住持が領域内外の山手料の徴収に関する何らかの権限を有していたことは疑いないことと思われる。

## (7) 天道祭と二十一社詣

### 慶長10年(1605)「天道祭の役者の事」

豆酸の主藤寿文書のなかに、「天道祭の役者の事」という史料がある(資料編「天道信仰関係史料」参照)<sup>(53)</sup>。

本史料は、慶長10(1605)年2月16日、「一代住持圓喜」が66歳の時に書き記した天道祭に関する記録である。横長の紙16丁を折紙にして、合計44の一つ書き形式で書き留められている。

この史料は、何故かこれまで豆酸や天道信仰の研究の中で全く注目されることがなかった。事実上の新発見史料といえよう。慶長10年という年紀の古さに加え、タイトルの通り赤米神事以前の天道祭の古様を詳細に伝える極めて重要な史料だと思われる。

19世紀初頭成立の〔史料1〕の『津島紀事』によれば、「天道祭」とは赤米の神儀を守る頭役の交替の神事であった。ところが、それを200年ほど遡る「天道祭の役者の事」によって、中世にはこれとはまったく異なる「天道祭」が行なわれていたことが明らかになるのである。

### 天道祭の原像

「天道祭の役者の事」によれば、中世以来17世紀まで

続けられてきたと思われる天道祭とは、住持やクゾウを中心とする豆酸村の氏子から選ばれた役者が、飯籠(めこ、飯を入れた籠)に入れた①御穀と②万灯籠と③幣束を携えて、「御山」や「しやうくう」といった天道信仰の聖地を巡礼する行事だったことがわかる。

しかも祭礼に使用する道具類は府中や対馬全島8郡がその準備の一端を担い、祭礼が滞りなく終わると厳原の対馬藩主へその無事を報告する義務があった。また祭礼の前後には様々な細かい服忌令が定められていた。

天道祭に従事する役者たちは、④御山と⑤正宮へ向かう2つのグループからなり、それぞれ①先達、②宮持ち、③奉幣使、④幣持ち、⑤先の火灯し、⑥後の火灯し、⑦松担で構成されている。また⑤正宮グループにだけ、⑧闕伽水、⑨叩き手、⑩吹かし手、⑪煎り手、⑫火焚きといった役者が加わっている。この年は、⑤正宮グループの先達を観音住持の円喜が勤めていたことがわかる。

祭礼の準備や次第は〔表2-16〕の通りである。

表2-16 天道祭の次第

正月22日	神の御穀を盛る
正月23日	久根(洗面具)・久根浜の神太郎・八郷・府中(食器・調理具)より諸道具
2月1日	油すめ
2月2日	升あほり
2月4日	法螺し初め
2月卯日	精進屋入り
2月12日	卒土の前の道作り
2月24日	参詣

この年の2月24日に行なわれた参詣の儀礼所作は、④諸道具準備(万灯籠・御穀盛り・幣束)→⑤精進屋入り→⑤精進屋出立→④堂を出立→⑤法螺貝吹き→⑤卒土内山(表八町角)の神棚作り→④御山参詣→④戻る→⑤藩主に報告の手順で行なわれていた。



写真2-47 こうの道(美女塚北方の塞神付近)

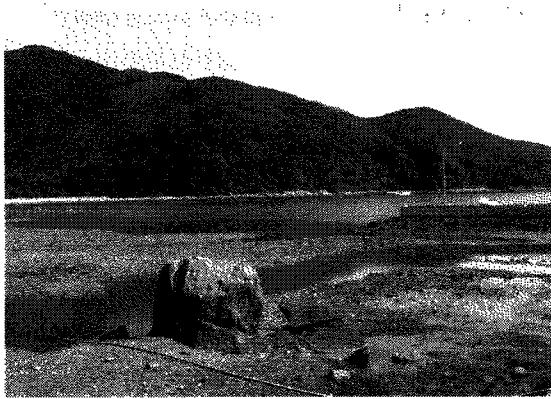


写真 2-48 浅藻の卒土濱

「天道祭の役者の事」に登場する地名を現地比定しながら、その巡礼のルートを示してみよう。

史料中で「なひの道」とあるのは豆酲から内院に至る古道、「こうの道」は「国府の道」と書いて裏八丁から内山へ出て久和越えをして厳原へ向かう古道だと思われる。巡礼の途次で法螺貝を吹くことが定められていた場所を〔表 2-17〕にまとめた。これらは聞き取り調査によると〔図 2-11〕のように現地比定できる。

表 2-17 法螺貝を吹く場

御 山	正 宮
1 御山の堂の庭	1 門（多久頭魂神社門カ）
2 堀の端	2 鳥居元（多久頭魂神社鳥居カ）
3 へ坂（現在の小字名）	3 枇杷畠（豆酲小学校付近）
4 けち畠わた（寛文検地帳）	4 なひた
5 くさつみ （『天道縁起』より内院飛坂付近）	5 片のわた（堅田付近の海）
6 一本松（貝吹き松カ・寛文検地帳）	6 高木のわた
7 二本松	7 中瀬のわた（長瀬崎）
8 カンカン石 （神功皇后腰掛石、現存）	8 境の隈（塞の神）
9 野田の隈（裏八町角付近）	9 おり立（浅藻のオリセカ）
10 力石	10 卒土濱（奥浅藻の海浜）
11 御前（裏八町角）	11 ふかのの口（奥浅藻付近）
12 潮湯川（浅藻川）	12 山たきの隈
13 境端（塞の神）	13 標（表八町角カ）
	14 堂の元（地藏堂カ）
	15 御前（奈伊良神社）

役者達が目指す5つの聖地をみてみよう。まず「御山」は裏八丁角と呼ばれる石塔であろう。また「しやうくう」は「正宮」と書いて内院の大隅正八幡宮、現在の奈伊良神社のことと思われる<sup>(54)</sup>。さらに「おかへ」は高御魂神社があった「宇賀伊（オゲーン）山」、「権現」は神住居神社、「外宮」は外宮神社と考えられる。

図 2-11 天道祭・二十一社詣関係地名



こうして史料中の地名を現地比定してみると、天道祭とは、どうやら豆敷内の神社や表八町角・裏八丁角・内院正八幡宮といった天道菩薩の霊地を巡礼する儀礼であったようだ。この巡礼の範囲は、東を内院川、北を瀬川によって囲まれた豆敷郡域に相当することがわかる。この巡礼の領域こそが、中世以来、観音住持に保証された木庭の権益、つまり「天道御山」に重なり合うのである。

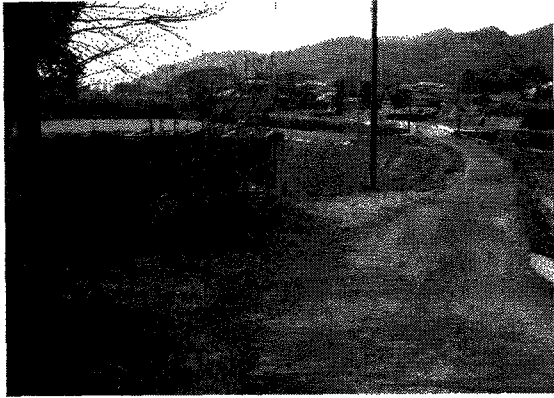


写真 2-49 貝吹き松

木庭境、すなわち「天道御山」の聖域を宗教的に確認する儀礼こそが天道祭だったのだ。

#### 「天道御山」の空間構造

天道信仰の濫觴を記す天道縁起は、貞享・元禄年間頃に対馬藩の命を受けた豆敷観音住持や儒学者梅山玄常によって整備され、五点の『天道菩薩縁起』諸本が現存している<sup>(55)</sup>。

これらのうち、「天道御山」を中心とする信仰空間を最も分かりやすく示しているのが〔史料9〕である。

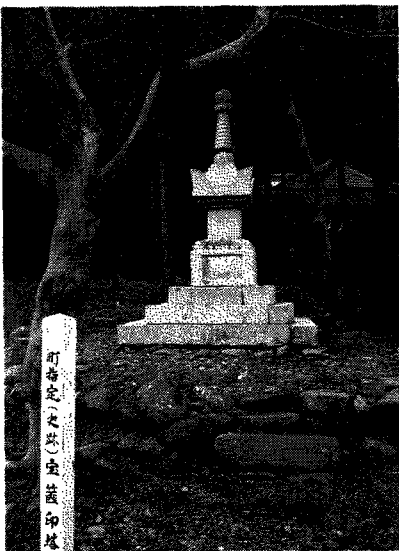


写真 2-50 内院正八幡宮



写真 2-51 現在のオゲーン山 (ソロバル)

〔史料9〕『體豆郡寺社記』貞享2年(1686)成立(宗家文庫)

#### 天道大菩薩御山之事

一、神崎自内院地藏堂迄三里之余、内院自體豆之間壹里之余、

右之内、㊶内院之しげハ、辰ノ方ニ向テ貳町程、横四拾間程、是ハ天道大菩薩誕生之所、㊷上山之しげ戌ノ方ニ向テ八町角、是ハ行を被成所、㊸卒土之内之しげハ午ノ方ニ向テ八町角、是ハ御入定所、右三所之しげハ人けつかいニ候、其外ハ人出入仕候、

右惣山立木ハ、樫椎楠其外雑木ニテ御座候、是者天道大菩薩由来自御立山也、就処ニ 義智様御代ニ長崎自御上様御渡り被成候時分、天道と言ハ如何様之仏かと有テ、天道領を地行ニテ仰附候、御立山卒土之内ハ、杉村伊織殿御拝領、其外之御立山ハ内山郷左衛門殿先祖拝領と承候処ニ、長崎之加ミ様御帰之後被召上候、如先例く天道菩薩山ニ御立有之旨ニ而、其上住持圓喜ニ御判仰付候処ニ、唯今内山郷左衛門殿地行之由ニテ、しほひ川迄内山之者ニ被申附、切荒れ候事、

一、御立山ニ附頂戴仕候、御判九ツ

一、卒土之濱天道領之内ニ、千手観音と申家代御座候、身軀無御座候、古ハ朝鮮御引陣ニ肥後人盗取申候与申伝候、

〔史料9〕は、宗家文庫所収『體豆郡寺社記』の「天道大菩薩延記」の一節である。

「天道大菩薩御山」の信仰空間は天道大菩薩ゆかりの3つの茂地から構成されていたことがわかる。「しげ」=茂地とは、対馬特有の天道信仰の聖地である<sup>(56)</sup>。すなわち、「内院のしげ」・「上山のしげ」・「卒土の内のしげ」からなる。

㊶「内院のしげ」は、内院正八幡宮・地藏堂とその南方の鳥居橋の橋詰にあった南北朝期の大きな宝篋印塔を中心とする聖域で、天道法師誕生の地とされる。㊷「上山のしげ」は、現在の内山集落から瀬川を挟んで南側に「裏八丁角」という平石を埋高く積んだ築造物があり、天道大菩薩修行の地であったとされている。

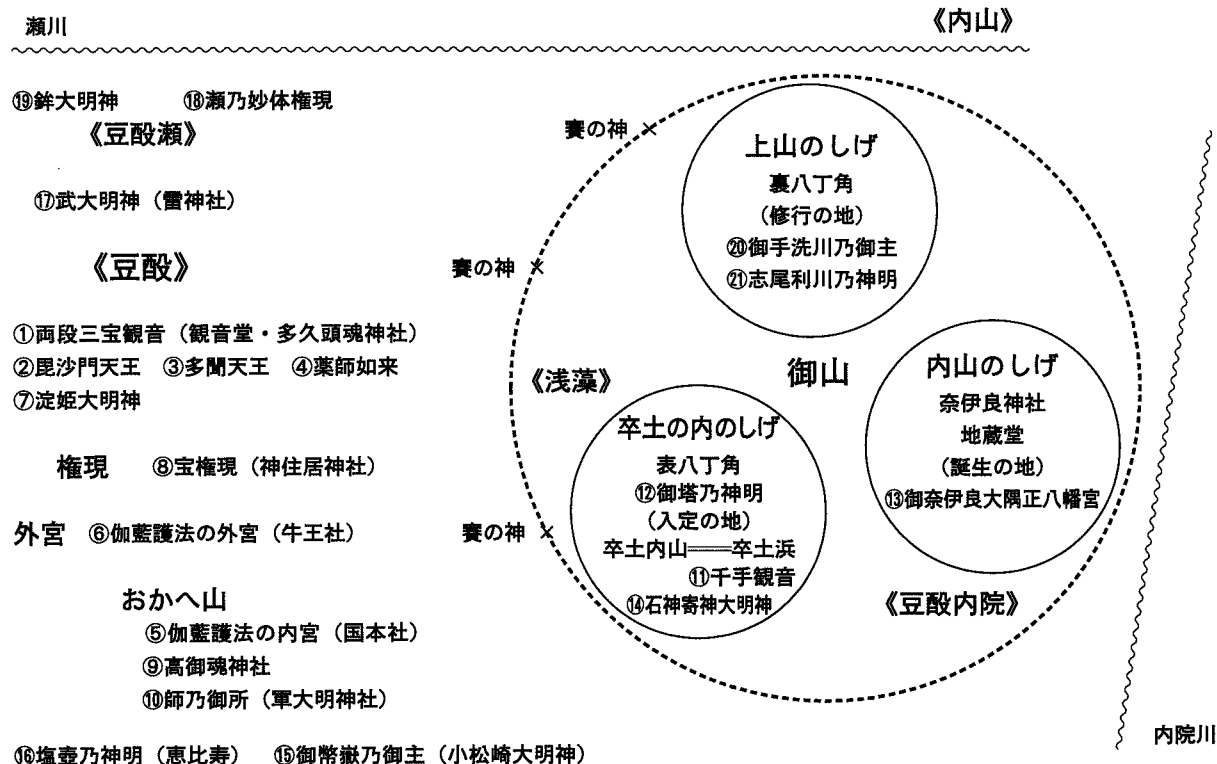


図2-12 「天道御山」の信仰空間

三つには⑥「卒土の内のしげ」で、奥浅藻集落を流れる浅藻川沿いに北へさかのぼると「表八丁角」と呼ばれる同様の石積が現存し、これは天道大菩薩入定の地という。

「天道御山」の西方には、クゾウが管理する豆酸村内の神社や豆酸瀬の神社が点在している。

こうした天道信仰の信仰空間を図式化したのが〔図2-12〕である。

さらに、この信仰空間の外には佐護の多久頭魂神社と対馬島内の数多くの天道茂地がネットワークを結んでいたのである。

〔史料10〕『醴豆郡寺社記』貞享2年（1686）成立（宗家文庫）

靈龜式丙辰歳、天道童子廿式歳也、其歳帝王御悩有テ御占ニ、対馬之国ニ老人之法師有候ヲ、召テ御祈ヲ為致給与奏門ス、然者、可被為仰附ト有テ、天道童子歳卅式才之時、対州内院村ニ勅使来ル、右之趣勅定也、天道童子□之給テ、内院ヨリ飛給、其印ニ飛坂ト云、御跡七ツ之草津ミと云、則老州小まき御飛候、夫ヨリ筑前之宝海嶽ニ御飛候、夫ヨリ京都へ上洛有テ、勅使ヲ待合参内有之也、御祈念之法力ニテ御煩平癒也、

再び「天道大菩薩延記」を引けば、靈龜2年（716）、天道法師は、元明天皇の病氣平癒祈禱のため、豆酸から内院飛坂・草ツミを経て老岐小牧に飛び、さらに筑前「宝海嶽」から京都へ上洛したとされている。老岐小牧には今も天道宮があり、「宝海嶽」は太宰府の後背にある宝満山で、天道信仰はこうした島外の聖地とも結び合っていたことが推測される<sup>〔57〕</sup>。

#### 二十一社詣——神送りの現在

こうした聖地巡礼の儀式は、二十一社詣として今も豆酸に伝えられている。現在では大船頭とよばれる漁業関係者の行事になっているようだ。二十一社詣で巡礼する21の社を示してみよう。

- ①両段三宝観音 ②毘沙門天王 ③多聞天王 ④薬師如来 ⑤伽藍護法の内宮（国本社） ⑥外宮（牛王社）  
⑦淀姫大明神 ⑧宝権現（神住居社） ⑨高御魂大明神 ⑩師乃御所（軍大明神） ⑪卒土乃浜 千手観音 ⑫御乃神明（表八丁角） ⑬御奈伊大隅正八幡宮 ⑭石神寄神大明神 ⑮御幣嶽乃御主（豆酸東海岸の恵比寿）  
⑯塩壺乃神明 ⑰左川 武大明神（雷神社） ⑱瀬乃妙体権現 ⑲鉾大明神（豆酸瀬の浜付近） ⑳御手洗川乃御主（裏八丁角） ㉑志尾利川乃神明（裏八丁角東方）



写真 2-52 裏八丁角

本石正久所蔵の二十一社祝詞によれば、豆酛多久頭魂神社を出発して豆酛内の神社を巡り、卒土浜から浅藻の表八丁角へ、さらに内院正八幡宮へ、再び石神寄神明神を経て豆酛に戻り、今度は北上して豆酛瀬から裏八丁角まで行くことになっている。

現在、豆酛で行なわれている二十一社詣は、多久頭魂神社へお参りする漁師最大の行事である（山本隆太郎「漁と天道信仰」参照）。正月20日以降の吉日に、クゾウを雇って船頭・船子が参加する。経費は船頭で負担するという。お供え物は、御神酒・塩・昆布・魚・蠟燭等である。2002年には正月22日に行なわれ、漁師10人・その他10人程が参加した。今では朝6時から多久頭魂神社で1ヶ所に神寄せされているという。

但し、参詣ルートには諸説がある。裏八丁角から龍良山を越えて表八丁角まで行くこともあったようである。あるいは車で裏八町まで行き、塞神→八丁角→多久須頭神社→浅藻川西→オオトウノ千手観音→豆酛東岸の金比羅・恵比寿・小松崎→西岸の恵比寿・塩壺神明→天神多久須頭神社・地藏の順に廻る。あるいは、豆酛→裏八丁角→表八丁角→石神→豆酛の順路であったともいわれる。またあるいは、天道様→八丁郭→天道法師→浅藻を廻ったともされる。また雷・保床山・天神・石神様・大明神などの巡礼もあったという。内院は早くから巡礼ルートから省略されたという<sup>(58)</sup>。

実は、こうした二十一社詣によく似た聖地巡礼＝神送りの儀礼が、対馬島内の各地に残っている。

たとえば、阿連の「オヒデリサマ」は、村人が大カナグラをはじめとする75本のカナグラ幣をもって八龍神社を出発し、鉦・太鼓・貝を奏でて歩き、元山で御幣を立てる祭礼である。佐須村檜根で行なわれる天道祭もまた、



写真 2-53 表八丁角

法清寺から20町余離れた天道山へカナグラ幣を立てにゆく神送りの儀式である<sup>(59)</sup>。千尋藻の嶽大明神祭にも類似の所作を見て取ることができる<sup>(60)</sup>。

聖地に幣束を立てて巡礼する儀礼のかたちは、③幣束を携えて巡礼する中世豆酛の天道祭に酷似している。中世豆酛の天道祭とは、こうした聖地巡礼＝神送りの源流をなす祝祭だったのである。

#### 中世の天道祭——穀霊信仰の源流

天道祭は、中世にも断片的にその姿を垣間見ることができる。

〔史料11〕 正平9年（1354）閏10月 日「豆酛神官しん

はう申状案」  
 (豆酛) (神官) (畏) つつのしんくわんしんはうかしこまで申上候、  
 (子細) (内) (道) (領) (押) 右件しさいハ、うち山□天たうの御りやうをあふり  
 (領) (銚) (餅) やうせられ候由のこと、はけしめおろし、ほこさか  
 (立) (祭) (勤仕) (処) (十千本) きおたて、御まつりきんしのところのしゆせんほん  
 (木) (焼) (弘) (荒野) のきをきりやきはらい、くわうやとなされ候ハ、  
 (障) (吹) (洪水) 御祭のさおいとなしと□、あるいハ大風ふきこうす  
 (出) (国) (煩) (上) いいて、くにのわつらいとなり候おこそ、かみに申  
 (存) (処) (重) (董暴) (出) さんとそんし候ところにかさねてらんほうをいださ  
 (次第) (昔) (内) (推極) (豆) れ候したいの事、むかしよりうち山のしいかしをつ  
 (拾) (拾) (当年) (限) ぎよりひろい□事、たうねんニかきら□候へとも御  
 (禁制) (内) (入) (内) (内) (拾) きんせいのうちはいらす候、たとへうち山おひろい  
 (境) (越) (過) (然) 候とも、さかいをこえすき候は□しんニはらかりし  
 (神座) (前) (御手洗川) かるへく候ところニ、上くらの御まへ・みたらいか  
 (矢立) (木) (元) (擲) (河岸) (止) わ・やたてのきのもとにせきをすへ、かしをととめ、  
 (女) (童) ひけをとられ候へハ、おんなわらんちりゝゝはら  
 (号泣) (声) (糾) ゝゝになり、おらひさけふこえなのめならす候、御  
 (堂) (鎌) (雲氣) (不祥) たうの御前をきはす、うんきふしやうニならせ候  
 (隠) (詮) (処) 事、そのかくれなく候、せんするところはけしめお

□□の<sup>(題)</sup>と<sup>(禁制)</sup>ろを<sup>(彼)</sup>御<sup>(瀬暴)</sup>きん<sup>(止)</sup>せい候て、かのらんほうをと<sup>(御手洗川)</sup>  
とめられ、御みたらいかわをきよめられ□□にて、<sup>(清)</sup>  
ことゆへなくかのてんたうの御まつりをきんし申へ<sup>(放)</sup>  
く候、それかなはす候ハゞさらへ申すましく候、<sup>(彼)</sup>  
このよしよきように御ひろうあるへく候、<sup>(天道)</sup>  
<sup>(祭)</sup>  
<sup>(勤仕)</sup>

恐惶謹言

正平九年

閏十月 日<sup>(61)</sup>

〔史料11〕は、豆酥神官「しんはう」が、内山の天道御領の押領を停止するよう訴え出た文書である（資料編、本田佳奈「内山村における山林利用と木庭作について」参照）。1万本にも及ぶ大量の伐木と山野を焼いて荒野にする行為（焼畑カ）が、洪水や大風といった天候不順をもたらし、国の煩いを引き起こしているという。また「神座の御前」・「御手洗川」・「矢失の木の元」に設けられた関や河岸止めによって女や子どもたちは泣き叫び、不吉な天運をますます助長していると訴える。こうした濫暴行為によって、「てんたうの御まつり」の「きんし」に障害を来たしていたことが明記されている。とはいえ、ここでは「天道祭」が行なわれていたことは知れても、いかなる祭礼であったのかは不明である。

次の史料をみてみよう。

〔史料12〕文明6年（1474）2月9日「宗貞国書下」（主藤寿文書）

てんたうの御さいれい御こくの事、たうねんたう国<sup>(天道)</sup>  
たこくニおゐてくわいせんまかりつかす候間、まつ<sup>(祭礼)</sup>  
ちうちとしてほんそういたし候、よて御さいれいす<sup>(他国)</sup>  
き候といふとも、まかりつき候する船二そうの事、<sup>(廻船)</sup>  
いせんのまゝ御こくを申つけられ候へし、此分さた<sup>(先)</sup>  
めてくうしそんちしうけとりわたすへし、恐々謹言、<sup>(住持)</sup>  
<sup>(奔走)</sup>  
<sup>(致)</sup>  
<sup>(仍)</sup>  
<sup>(祭礼)</sup>  
<sup>(廻)</sup>  
<sup>(罷)</sup>  
<sup>(殿)</sup>  
<sup>(以前)</sup>  
<sup>(殿)</sup>  
<sup>(定)</sup>  
<sup>(公事)</sup>  
<sup>(存知)</sup>  
<sup>(請)</sup>  
<sup>(取)</sup>  
<sup>(渡)</sup>

文明六年

二月九日

貞国（花押）

酥豆住持<sup>(62)</sup>

〔史料12〕によれば、当時天道の祭礼に用いられた御穀は、豆酥で収穫された自前の米ではなく、廻船によって島外（おそらく北部九州）からもたらされたものであったことがわかる。中世の豆酥は、対馬周回航路上の交易の拠点であり、対馬府中や九州・朝鮮との往き来も確認できる<sup>(63)</sup>。それにしても、島外からの輸入に頼ってまで

祭礼の御穀にこだわったのはどうしてだろうか。

〔史料13〕『體豆郡寺社記』貞享2年（1686）成立（宗家文庫）

一、国土煩ニハ天道祭りと云事有、本地楽卒山観音十一面是也、左右ニ毘沙門以ト薬師之相也、（中略）

御祭り之入目

一、白米七俵ハ御石ぶとかく拵、仏前ニ備物、

宮糈ニテ四斗貳升入

〔史料13〕より、17世紀頃に天道祭に用いられた御穀は7俵、4斗2升の「白米」であったことがわかる。

あくまで天道祭が、①御穀を携えて巡礼する穀霊信仰の儀礼であった点を忘れてはならない。天道信仰の核心が太陽霊（日神）と穀霊という2つの性格にあったことは、既に和歌森太郎・永留久恵によって明らかにされている<sup>(64)</sup>。永留は、6月の「ヤクマ祭」という麦の収穫祭と10月の稲・粟の新嘗祭とを対比して、天道信仰の祭祀が稲と麦の収穫祭からなり、天道信仰の穀霊神としての性格に着目している。

中世豆酥の天道祭は、豆酥郡全域を聖地とする広大な木庭の信仰に裏打ちされつつも、こうした穀霊信仰の儀礼でもあり続けていたのである。

焼畑文化憧憬

以上のように、①かつて豆酥は「畑作の村」であり（第5節）、②中世観音住持の特権が広大な木庭の用益にあったこと（第6節）、③天道祭とは木庭境＝「天道御山」の聖域を宗教的に確認する儀礼であったこと（第7節）、さらに④天道祭が聖地巡礼＝神送りのかたちをとった穀霊信仰の儀礼であること（第7節）、などを述べてきた。

これらの事実から浮かび上がってくるのは、豆酥の村落景観と天道信仰の祝祭空間がいずれも木庭（焼畑）を舞台としていたという事実である。そして、そこで育まれてきた天道信仰もまた、木庭（焼畑）文化の信仰であった。それは、19世紀以降にみられる水稻文化としての赤米神事ときわめて対照的である。

奇しくも水稻文化の儀礼とされてきた赤米神事の源流は、農耕文化の原風景たる木庭（焼畑）文化を象徴する天道祭にたどり着いた。

木庭の「御穀」から水田の赤米へ——。「天道祭」という祝祭は、木庭における穀霊の神送りから「寺田」に



おける赤米の頭受け神事へと転換していたのである。それは、まるで焼畑文化から水稲文化へという日本の農耕文化の歴史の縮図である。

第1章(2)で述べたように、民俗学・農学・考古学といった諸成果は、稲作の起源が焼畑にあり、赤米が畑作文化の象徴であったことを指し示している。こうした諸見解を考え合わせれば、対馬豆酛における天道信仰の祝祭の変容を以下のように仮説することができるだろう。

中世の豆酛では、広大な木庭（焼畑）を舞台とする穀霊崇拝の信仰が厳然とあり、それは古代以来の焼畑文化世界の根幹にあった赤色食物＝赤米への崇敬として伝えられていた。けれども、水稲文化は畑作（焼畑）文化を次第に凌駕しつつあった。18世紀における赤米崇拝の高まりは、排除されゆく赤米を眼前にした畑作（焼畑）文化への憧憬の産物なのではあるまいか。

## おわりに

かつて対馬豆酛は「畑作の村」であった。中世以来、観音住持は豆酛郡域に及ぶ木庭（焼畑）に特権を有していた。「天道祭」とは、「天道御山」という信仰空間を中心とする木庭の領域を再確認する儀礼であり、焼畑文化の穀霊信仰に基づく聖地巡礼＝神送りの儀礼であった。

18世紀末頃になると、排除・消滅の危機のなかで、赤米が天道信仰の仏供として強調され、赤米の神秘性が物語られるようになる。「観音堂」は「多久頭魂神社」へその名を改める。「寺田」を含む神田川下流域の「田井原」における水田開発が進んでゆく。こうした変化が、赤米崇拝を基調とする宮座組織による赤米頭受け神事を天道信仰の中核とする祝祭へ移行せしめていった。

木庭の信仰は後景に退き、祝祭は水稲の信仰へとそのかたちを変えていった。ただ古代以来の焼畑文化世界の根幹にあった赤米崇拝だけが伝えられていった。

それは、対馬豆酛における木庭（焼畑）文化から水稲文化への象徴儀礼の移行であった。

## 注

- (1) その成果は、日本文科学会編『人文』1 特集 対馬調査 1953年、九学会連合対馬共同調査委員会編『対馬の自然と文化』古今書院 1954年にまとめられている。
- (2) 宮本常一「梶田富五郎翁」・「対馬にて」（『忘れられた日本人』岩波文庫 1984年、1958年）、同「対馬豆酛の村落構造」（『中世社会の残存』宮本常一著作集11 未来社 1972年、初出1959年）、同『海の民』（宮本常一著作集4 未来社 1973年）、同『日本の離島 第1集』（宮本常一著作集20 未来社 1973年）参照。また最近、宮本の仕事を簡略に紹介したものとして、網野善彦『〈忘れられた日本人〉を読む』岩波書店 2003年がある。
- (3) 主なものに、宮本聲太郎「対馬豆酛の農業」（『民間伝承』24-3 1960年）、長崎県教育委員会社会教育課『民族資料緊急調査報告書』長崎孔版社 1965年）、長崎県教育委員会編『長崎県の海女』長崎県文化財調査報告書42 1979年、城田吉六『赤米伝承』葦書房 1987年、鈴木正崇「対馬における村落空間の社会史」（『玄海灘の島々』海と列島文化3 小学館 1990年）、永留久恵『海童と天童』大和書房 2001年、本田佳奈『『楽郊紀聞』が活写する対馬の風土』（『季刊 河川 Review』118 2002年がある。
- (4) 前掲注(1)『人文』の「対馬共同研究に関する座談会」。
- (5) 鈴木棠三編『対馬紀事』下（対馬叢書4 東京堂出版 1973年）。
- (6) 鈴木棠三校注『楽郊紀聞』東洋文庫307・308 平凡社 1977年。
- (7) 『醴豆寺社記』（宗家文庫・記録類 I-御郡奉行-F9）。『対州神社誌』（『神道大系』対馬・壱岐 神道大系刊行会 1987年）。
- (8) ここに「米」ではなく「白米」と記載したのは、「1斗2升」を玄米ではなく精米の総量として規定したためと考えられる。但し、玄米・精米、あるいは赤米と白米を区別する記述は『醴豆郡寺社記』にみられないから、依然としてこの「白米」が赤米に対する白米の意味で用いられている可能性も残る。
- (9) そのほか宮川修一「大唐米と低湿地開発」（『アジアの中の日本稲作文化』稲のアジア史3 小学館 1987年）、菊池勇夫「赤米と田碑」（『宮城学院女子大学研究論文集』77 1993年）、渡部忠世「宝満神社の赤米と踏耕」（『稲の大地』小学館 1993年）、大坂佳保里「日本に伝わる赤米について」（『川村短期大学研究紀要』16 1996年）、花田英雄「昔話『赤米の悲劇』の解読」（『國學院雑誌』100-6 1999年）、森弘子「種子島宝満神社の御田植え祭」（『山岳修験』32 2003年）参照。
- (10) 坪井洋文『イモと日本人』未来社 1979年、同『稲を選んだ日本人』未来社 1982年
- (11) 野本寛一『焼畑民俗文化論』雄山閣 1984年
- (12) 佐々木高明の主要な著作を挙げると、『稲作以前』NHKブックス 1971年、同『日本農耕文化の源流』日本放送出版協会 1983年、『縄文文化と日本人』講談社学術文庫 2001年 初出1986年、『畑作文化の誕生』日本放送出版協会 1988年、『農耕の技術と文化』集英社 1993年。
- (13) 佐藤洋一郎『森と田んぼの危機』（朝日選書 1999年）、

同『縄文農耕の世界』（PHP 研究所 2000年）、同『稲の日本史』（角川選書337 2002年）。

- (14) 古島敏雄「焼畑農業の歴史的な性格とその耕作形態」（『古島敏雄著作集』3 東京大学出版会 1974年）黒田日出男「中世の『畠』と『畑』」（『日本中世開発史の研究』校倉書房 1984年、初出1980年）、木村茂光『古代・中世畠作史の研究』校倉書房 1992年、同『ハタケと日本人』中公新書 1996年、山本隆志「荘園公領制下の村落と地域社会」（『荘園制の展開と地域社会』刀水書房 1994年）、飯沼賢司「中世における『山』の開発と環境」（『大分県地方史』154 1994年）新井孝重「中世の焼畑について」（『東大寺領黒田荘の研究』校倉書房 2001年）。
- (15) 伊藤寿和「古代・中世の『野畠』に関する歴史地理学的研究」（『日本女子大学大学院文学研究科紀要』1 1995年）、同「平安・鎌倉時代の『山畑（焼畑）』に関する歴史地理学的研究」（『日本女子大学紀要』文学部45 1996年）、同「紀伊国の『山畑（焼畑）』に関する歴史地理学的研究」（『史境』41 2000年）。
- (16) 畑井弘『律令・荘園体制と農民の研究』吉川弘文館 1981年、米家泰作『中・近山村の景観と構造』校倉書房 2003年など。
- (17) 前掲注（3）城田吉六著書。
- (18) 深谷克己 g 論文。
- (19) 前掲注（13）『稲の日本史』参照。
- (20) 次表を参照。

宮本常一説	城田吉六説（慶応4年『給人奉公帳』）
多久頭魂神社：観音住持主藤	多久頭魂神社：供僧観音住持（主藤寿・観音住持円久）
下宮：主藤清太郎	下宮神社：供僧円智坊（主藤政和・宮僧主藤清位）
天神社：本石忠・本石伝次郎	天神社：供僧覚膳坊（本石覚・宮僧本石覚膳）
権現神社：本石正久	神住居神社（雷神社・五王神社）：供僧正膳坊（本石正久・宮僧本石正膳）
午王神社：本石幸作・主藤徳次郎	加蓋社：供僧孝作（本石直己・宮僧本石周膳）
神住居神社：本石二位	高御魂神社：供僧二位殿（本石久知・宮僧本石二位）
軍大明神社：本石三次郎	高御魂神社・雷神社：供僧三位（本石一幸・宮僧本石三位）
雷神社：岩佐・本石	雷神社：供僧岡山（本石健一郎・宮僧本石知須） 国本神社：供僧円秀坊（主藤力・宮僧主藤円周）

- (21) 本石一幸文書。本書は元禄6年（1693）本を天保11年（1840）になって書写したものである。またほぼ同一内容のもう1冊の写本が伝存しており、これは天保2年（1831）の書写になる。内容からいづれも元禄6年本の写しと思われる。
- (22) ①は東京大学史料編纂所写真帳・長崎県立図書館写真帳による。②・③・④は2003年6月9日に熟覧・写真撮影を行ったもの。なお④は東京大学史料編纂所写真帳にもよる。
- (23) 主藤寿文書（長崎県立図書館写真帳）、年未詳「宗貞盛書下」にも「豆穀住持」の宛所があり、これが先行する可能性がある。
- (24) 永留久恵『海神と天神』白水社 1988年。
- (25) 「三位」の初見は大永3年（1523）8月6日「宗盛顕寄

進状」、「下宮」の初見は大永3年（1523）11月26日「宗盛長書下写」である。『長崎県史』史料編1 長崎県 1963年参照。

- (26) 厳原町編集委員会編『厳原町誌』厳原町版 1997年。
- (27) 主藤寿文書（東京大学史料編纂所写真帳、長崎県立長崎図書館写真帳）。
- (28) 第(7)節、資料編「天道信仰関係史料」参照。
- (29) 主藤寿文書（長崎県立長崎図書館写真帳）。
- (30) 前掲注（7）、（31）、年未詳『八郷寺社記』（宗家文庫-記録類Ⅱ-御郡奉行-F11）、宝永2年10月 日『八郡社領帳』（宗家文庫-記録類Ⅱ-御郡奉行-F 寺社-12）、宝暦10年12月 日『対馬国大小神社帳』（宗家文庫-記録類Ⅱ-寺社方-C2）、天明6年閏10月 日『対州社領間高帳』（宗家文庫-記録類Ⅱ-寺社方-D7(1)）、戊辰日『八郷社領坪付渡帳』（宗家文庫-記録類Ⅱ-寺社方-D22）、年未詳『対馬州神社大帳』（宗家文庫-記録類Ⅱ-寺社方-C5）、『対馬国神社帳』（宗家文庫-記録類Ⅱ-表書札方-G①4）。
- (31) 貞享2年2月19日『八郡寺社記』（宗家文庫-記録類Ⅱ-御郡奉行-F10）。
- (32) 前掲注（3）城田吉六著書。
- (33) 主藤仁文書（東京大学史料編纂所写真帳）。
- (34) 主藤仁文書（東京大学史料編纂所写真帳）。
- (35) 主藤仁文書（東京大学史料編纂所写真帳、長崎県立図書館写真帳）。
- (36) 寛文検地については、檜垣元吉「対馬藩寛文の改革について」（『史淵』62 1954年）、宮本又次「対馬藩村落の身分構成と土地制度」（『九州経済史研究』宮本又次著作集5 講談社 1978年）、前掲注（26）。そのほか中世では、黒田省三「中世対馬の知行形態と朝鮮貿易権」（『国士館大学人文学会紀要』3 1971年）、近世では高野信治「藩政と地域社会」（『歴史学研究』733 2000年）、泉澄一『対馬藩の研究』関西大学出版部 2002年などがある。
- (37) そのほか元禄郷村帳によれば、豆穀には田・畠・木庭物成270石余、家数167戸で、島内で最も大きい村とされている。
- (38) 前掲注（36）宮本又次論文にしたがって算出した。すなわち、上田x石の上畠蒔目=x石÷上田1間の蒔目÷上畠1間の蒔目で計算し、この上畠蒔目から収納量・面積を導き出した。
- (39) 寛文2年段階で上々田・上田比率の高い地名は、「かまさか」などの権現川下流域のほかに、「かんだ」・「久保田」・「つもしの原」・「畠の木た」があり、これらは神田川下流域に相当する。「つもしの原」・「畠の木た」は田井原の小地名と推測されるが、収納量などからこの時点では大規模な開発はなく、散在的に水田耕作が行われていたと考えられる。
- (40) 坪井 i 論文。
- (41) 「対馬島民の形質人類学的考察」（前掲注（1）『対馬の

- 自然と文化』。
- (42) 金剛院は、「ヨジュウ」を壇頭として7人の被官がおり、門前に付近に集中していることがわかる。また現在も浜採東部落でのみ伊勢講やお日待ちなどが続けられている。2003年7月7日大沢泉報告「豆穀における金剛院と金剛院文書」（早稲田大学海老澤ゼミ）。
- (43) 申叔舟著・田中健夫訳注『海東諸国紀』岩波文庫 1991年。
- (44) 中近世の村落景観の復原研究は、今後は水田のみならず広大に存した畠地・畑地において行われてゆかねばならないだろう。日本農耕文化の起源のみならず、中近世の耕地開発を考える上でも、畑作（焼畑）・畠作の重要性が痛感される。けれども、本稿では、文書調査や現地聞き取り調査の成果を咀嚼し、豆穀の畑地景観の歴史の変容を復原・考察することが十分にできなかった。地理学・考古学・農学などの隣接分野の諸成果に学びながら、広大で不安定な耕地における生産活動と景観の歴史的变化を動的にとらえてゆくために、帳簿・土地台帳といった文献資料の分析や現地調査に基づく新たな畠作史・畑作史の方法的開拓を今後の課題としたい。
- (45) 「つもし原」の現地比定は、今のところ不明である。但し、『対馬島誌』の小地名が地理的に配列されているとすれば、ほぼ田井原付近に相当することになる。
- (46) 上々・上田比率や木庭の収納量などにおいて他のクゾウの所領に大きく抜き出ていることがわかる。
- (47) 主藤寿文書（東京大学史料編纂所写真帳、長崎県立図書館写真帳）と嶋雄成一文書、宗家文庫などによる。
- (48) 佐々木高明「対馬の焼畑」（織田武雄先生退官記念事業会編『人文地理学論叢』柵原書店 1971年）。
- (49) 前掲注（28）、〔史料11〕。
- (50) 主藤寿文書（長崎県立図書館写真帳）。
- (51) 九州大学九州文化史研究所蔵謄写本。『豆穀村阿比留平介知行たる木山木庭一件府内田舎ニ而遂吟味候口上書之写し并ニ口書』（127）、『豆穀村阿比留平介知行たる木山木庭ニ公領入込居候段百姓中自申立候付而及公事御裁許之次第』（128）、『豆穀村地面之入組遂吟味候給人口上書之写し并ニ百姓中へ申聞セ候覚書』（129）、『豆穀村地面一件ニ付口上覚書』（130）、『対州豆穀村木庭境論地絵図』（244）（『九州文化史研究所蔵古文書目録』2）。
- (52) 主藤寿文書（長崎県立図書館写真帳）。
- (53) 主藤寿文書（東京大学史料編纂所写真帳、長崎県立図書館写真帳）。
- (54) 『対州神社誌』に「右宮自十八間午方ン当テ大石塔有、天道母公之塚と云俗説有、無拠不可考」とある。聞き取り調査によれば、現在八幡宮前にある宝篋印塔は、かつては神社から南へ1kmほど下った内院川にかかる鳥居橋付近にあったことを確認している。
- (55) 『天道法師縁起』諸本を挙げると、①『対州神社誌』（貞享3年 1686）、②『天道法師延記』（貞享2年 1684『體豆郡寺社記』所収）、③梅山玄常撰『天道法師縁起』（元禄2年 1689）、④『天道菩薩由来記』（主藤寿文書所収）、⑤本石三位主『天道大菩薩咄伝覚』元禄～天保年間（本石一宰文書所収）がある。2003年7月15日山本真紗美報告「対馬の天道菩薩縁起諸本の検討」（早稲田大学海老澤ゼミ）などによる。平泉澄『中世に於ける社寺と社会の関係』至文堂 1924年、三品彰英「対馬の天道伝説」（『三品彰英全集』4 初出1943年）、和歌森太郎「対馬の天道信仰」（『和歌森太郎全集』初出1951年）、鈴木棠三『対馬の神道』三一書房 1972年、直弓常忠「対馬の天道と海神」（『日本古代祭祀と鉄』学生社 1981年）参照。
- (56) 前掲注（24）永留久恵著書。
- (57) 佐伯弘次「一六世紀における後期倭寇の活動と対馬宗氏」（中村質編『鎖国と国際関係』吉川弘文館 1997年）。
- (58) 聞き取り話者は、権藤悦教さん、本石直己さんである。
- (59) 三品彰英「対馬佐須村見聞記」（『三品彰英全集』4 初出1943年）。
- (60) 豊玉町誌編纂委員会編『豊玉町誌』豊玉町役場 1992年。
- (61) 内山文書（『南北朝遺文』九州編 3742号文書）、資料編参照。
- (62) 主藤寿文書（東京大学史料編纂所写真帳）。
- (63) 宗家文庫所収の応永14年（1407）4月7日「宗貞茂書下写」や大永2年（1522）5月5日「宗盛長書下写」によれば、「筒はま舟公事」の規定がある。中世対馬をめぐる対外関係史については、中村栄孝・田中健夫氏や荒木和憲・伊藤浩司・岡本健一郎・佐伯弘次・関周一・橋本雄・米谷均ら膨大な研究成果がある。
- (64) 和歌森太郎「対馬の天道信仰」（『和歌森太郎全集』初出1951年）、同「天道信仰について」（前掲注（1）『人文』）、前掲注（3）、（24）永留久恵著書。

## 第3部 総論

### I 東アジア村落の伝統と今後

#### 東アジア村落の水稲文化を育んだ社会

海老澤 衷

##### 1 本研究に関わるバリ島の研究動向

「本研究の経緯とねらい」で述べたように、東アジア村落の研究フィールドとしてバリ島を取り上げることとなった。バリ島の研究史については、片倉悠輔氏によってその全体がまとめられ、報告がなされた(2の④参照)。植民地時代においてオランダの研究者とともに、1930年代にはアメリカの文化人類学者のフィールドとして既に高い位置を占めており、戦後クリフォード・ギアツの研究によって、一つの頂点に達したといえよう。ここでは現在に至るその後の研究を日本との関わりの中から見ておきたい。

まず最初にあげられることは、インドネシア人自身によってバリ島の灌漑システムであるスバックの研究が行われるようになったことである。スバックはインドネシア人にとって誇るべきものであることが自覚され、バリ島のタバナンにはスバック博物館が建てられている。1970年代まではオランダ人あるいはハーバードを中心とするアメリカの文化人類学者が研究していたものが、現在ではインドネシアの研究者達がリードする段階に至っていると考えられよう。バリ島には古代の王朝名に由来するウダヤナ大学という大学があり、水稲文化研究所は研究交流を進めているが、この大学でかつて教鞭を執っていたスタワン氏、ピタナ氏によって地域に即したスバック研究が進められた。2002年に行われた棚田学会とウダヤナ大学との共催シンポジウムでは、スタワン氏がコーディネーターを務めるとともに報告「バリ島のスバ

ック・システム—課題と挑戦—」を行い、ピタナ氏が報告「地域資源管理のための伝統智—バリのスバック・システムにおける用水管理の場合—」を行った。単にスバックシステムの利点をあげるだけでなく、バリ島が現在抱えている都市化・観光地化の波のなかで伝統を保つことが難しくなっているなど問題点も率直に語られていた。今後は後継者によってさらに研究が進むものと期待される。

日本人で、スバックシステムを最も体系的に研究されたのは、宇都宮大学農学部の水谷正一氏であろう。氏は「資源制約下の水利用システム—インドネシア「スバック」の経験—」<sup>(1)</sup>において、1979年に開始されたアジア開発銀行の融資による「バリ灌漑プロジェクト」を評価し、それまで農業水利の根幹を支えてきたスバックが、国家的な政策の対象となったことを明らかにしている。伝統的な村落を追究するわれわれからすれば、水谷氏の指摘を十分に受け止める必要があろう。同時に、水谷氏はクリフォード・ギアツによる19世紀のスバック復原を下敷きにしてタバナン県マルガ郡ツア村のスバック・ケドカンを詳しく調査し、灌漑面積約70ヘクタールのこのスバックの組織・規約・宗教行事、作付け体系の変化を明らかにした上で、タイの農村(運河の水を揚水機によって競争的に自由使用する)との比較を行い、灌漑パフォーマンスを次の4つの類型に分けている。

- (1) 協同性、公平性、個別性の併存するタイプ。
- (2) 協同性、公平性はあるが、個別性を欠くタイプ。
- (3) 国家灌漑の水利組合で、協同性はあるが、公平性は統制的に保たれているタイプ。

- (4) 協同性、公平性を欠くが、個別性が成立しているタイプ。

歴史的な研究を重視するわれわれから見ても、この類型分けはきわめて示唆的である。バリ島のスパックは(1)に該当する。日本に当てはめれば、圃場整備事業が完了した地域がこれにあたると水谷氏はいう。この点については、日本の20世紀後半における農業政策に対する過大評価があるのではないだろうか。スパックをここに位置づけるならば、日本においては中世から近世にかけて(1)を達成しつつあったと考えるべきではないのか。それにしても、(3)で指摘された現代の国家灌漑が公平性・共同性を目標にしつつも、その多くは失敗に帰しているという指摘は、本研究にとっても大きな意味があると言える。前近代においても、近現代においても水稲文化が持続的に花開くのは(1)をおいてほかにはないように思える。

水利システムに基盤を置き、芸術的な展開に視野を広げた研究として大橋力氏と河合徳枝氏の場合があげられる。大橋氏と河合氏は共同でバリ島音楽の実践を行い、日本との文化交流の架け橋となるとともに、村落共同体における水の統御とヒンドゥー信仰の関係を解明している<sup>(2)</sup>。河合徳枝氏には、本報告書にも執筆をいただいたが、水稲文化研究所のコンセプトの一つはここにある。また自治医科大学の余語琢磨氏<sup>(3)</sup>は、土器生産とその流通範囲についての研究を深化させている。現地に即したこれらの研究がわれわれの進む道を直接的に導いてくれているといえよう。

## 2 水稲文化研究所によるバリ島調査・研究の経過

本研究は、先ず対馬豆蔵において伝統的村落復原のスタンダードを確立し、それを東アジアに応用展開するものであるが、その第一歩としてバリ島を選んだ。その経緯については「本研究のねらいと経緯」で参照していただきたいが、契機となったのはiに示すバリ島ウダヤナ大学でのシンポジウムであった。ここでは、その後の進展について述べたい。

### ①2002年4月20日～4月24日

バリ島棚田学会－ウダヤナ大学共催シンポジウム「モンスーン・アジアにおける棚田」

海老澤「日本の棚田について」

### ②2003年3月8日～3月12日

中島峰広・深谷克己・堀口健治・岡内・紙屋敦之・新川登亀男・海老澤・河合徳枝・米谷・清水克行。バリ島ゼネラルサーベイ。研究報告会：大橋力「バリ島の水と祭りによる社会のシステム化」

### ③2003年4月14日

研究報告会：清水克行「バリ島の調査」

### ④2003年6月16日

研究報告会：片倉悠輔「バリ島の研究史」

### ⑤2003年8月15日～8月25日

海老澤・西村正雄・片倉悠輔。バリ島ウダヤナ大学学術交流交渉。カラングス県バサンアラス・タバナン県クロボカン調査。

### ⑥2003年10月25日

シンポジウム「東アジア村落における水稲文化の儀礼と景観」開催。海老澤「『劇場国家』の普遍性と限界」、河合「バリ島村落の劇的性格」、黒田「対馬豆蔵における空間構成と天道信仰」、和田「対馬における芸能と村落」、西村「劇場国家論とその後の文化人類学的研究」

### ⑦2003年12月13日～14日

21世紀 COE プログラムアジア地域文化エンハンシング研究センター主催シンポジウム「アジア地域文化の構築」開催。海老澤「集落・儀礼・水田の復原研究－対馬とバリ島－」

### ⑧2003年12月21日～26日

海老澤。バリ島ウダヤナ大学－水稲文化研究所調査協力覚書の作成。カラングス県バサンアラス・タバナン県クロボカン調査。

2003年8月の調査において、「MONOGRAFI SUB KAK BASANGALAS」の出現によりバサンアラスの調査が当面の課題となったが、現段階ではスパックの灌漑施設の確認調査が終了したにとどまっている。これにより比較用模式図の作成は可能となったが、儀礼・祝祭の調査は今後の課題となっている。2004年8月にこの地の祝祭の調査を予定している。

## 3 バリ島バサンアラスにおける水利形態

バリ島は面積5600平方キロメートル、日本で言えば愛媛県とほぼ同面積であり、対馬の約8倍の広さを有している。ジャワ島の東側に海峡を隔てて位置し、インドネ

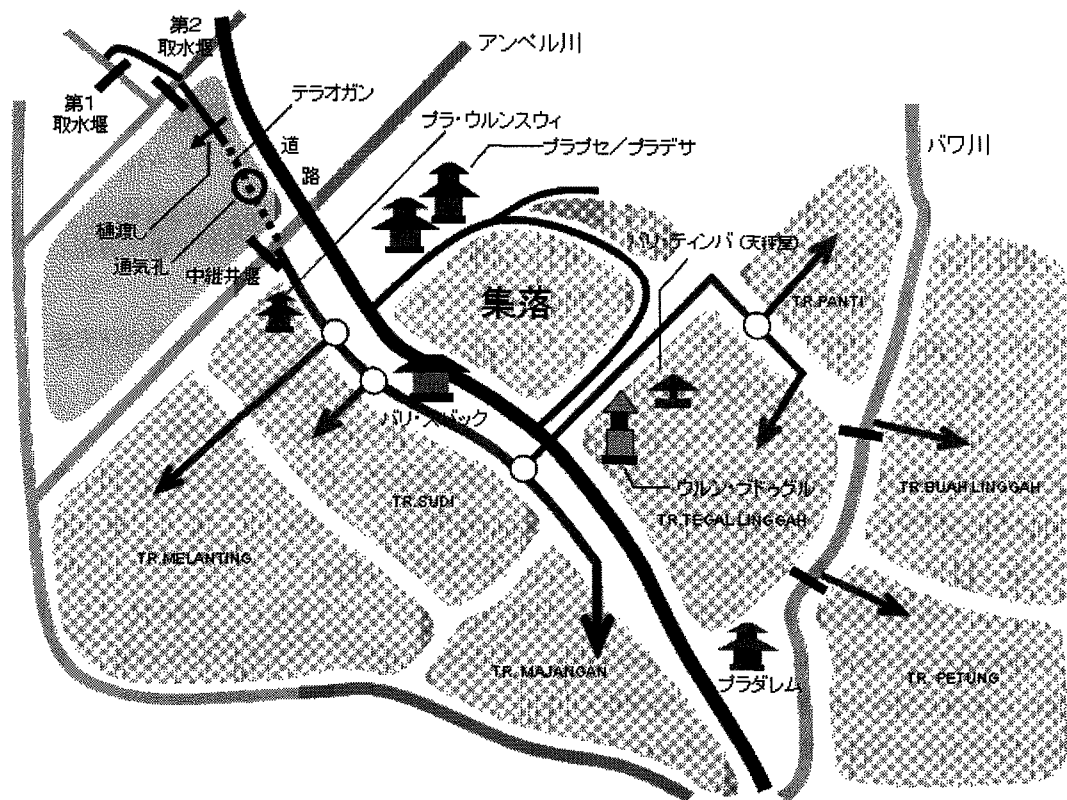


図3-1 スバック・バサンアラス

シアの一州をなして、8つの県に分かれており、中央のタバナンが穀倉地帯として知られている。ちなみに文化人類学者のクリフォード・ギアツの名著『ヌガラ』もこの地タバナンをフィールドとしたものである。州都はデンパサールにあり、現在ここに国際空港もある。芸術村として名高いウブドはギャニャール県にあり、領主のスカワティ家は今も健在である<sup>(4)</sup>。

フィールドとしたのは、東部のカランガスン県である。この県のバサンアラスという村に一つの視点を定めた。スバックの研究については、すでにオランダ統治時代からの伝統があるが、大体タバナンを中心として調査されてきた。しかし、最近では観光地化の波が押し寄せ、必ずしも適地であるとはいえなくなっている。それにひきかえ、東部のバサンアラスなどでは村落共同体の伝統がよく守られているといえよう。デサ・アダット、日本語に訳せば慣習村ということになるが、その村長のお世話になり、スバックの水路の踏査を行うことができた。このスバック・バサンアラスについては、現地でインドネシア政府が報告書を出していることを知り得た。1000分の1の簡単な実測図が付けられており、十分とはいえないが、日本における調査との比較検討が可能である。こ

の図面をもとに比較用の灌漑模式図を作成してみた。図3-1に示したように基本的には井堰灌漑であるが、バサンアラス村の集落や水田よりだいぶ上流域に第1井堰がある。まず、そこから取水して第2取水堰（写真3-1）で水量を確保し、スバック・バサンアラスの基幹水路ができあがる。この水路は、他のスバックの水田の真っ只中を通過するが、それらの水田の用水と入り交じることではない。他のスバックはバサンアラスの用水路によって完全に分断される状況にあり、樋渡しによって用水の確保が行われている（写真3-2）。次に注目されるのは、



写真3-1 第2取水堰



写真3-2 樋渡し

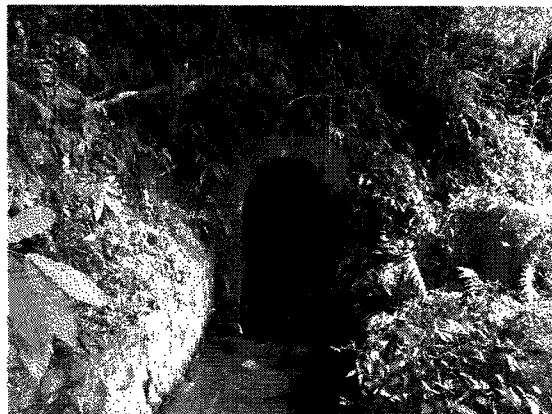


写真3-3 トンネル式の水路



写真3-4 通気口



写真3-5 中継井堰

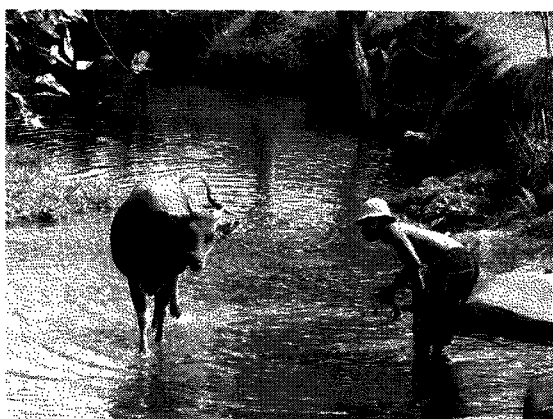


写真3-6 中継井堰付近での水浴



写真3-7 テンベックへの水路

第2取水堰と中継井堰との間にあるテラオガンと呼ばれる長距離のトンネル式の水路（写真3-3）である。他のスパックの水田の下を直線的に流れている。途中に通気口と呼ばれるものがあり、真上の水田の一角が陥没したようにすり鉢状になっているところがある（写真3-4）。ここを通過してアンペル川の中継井堰に出る（写真3-5）。

この井堰からの水路がスパック・バサンアラスの中で最も大きなもので、水浴ができるほどの水量があり（写真3-6）、そこからテンベックと呼ばれる7つの枝スパックに分かれるのである（写真3-7）。この最初の分岐点に近いところにスパック独自の信仰施設があり、これをプラウルンスウィと呼んでいる（写真3-8）。バリ島の中のプラウルンスウィとしては比較的小さい方である。





写真3-8 プラ・ウルンスイ

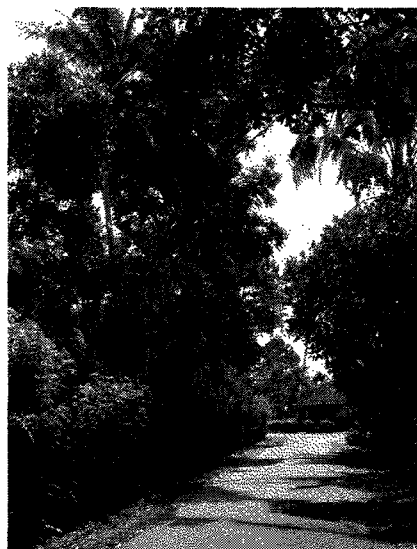


写真3-9 バリスバック



写真3-10 天秤屋



写真3-11 ウルン・ブドッグル



写真3-12 中継井堰手前のトンネル水路出口

このように各基幹水路一つ一つがスパックという独立した灌漑組織になっており、同時に信仰と儀礼の単位でもある。この他、スパック自体が集会所的な建物であるバリスパック（写真3-9）と「天秤屋」と呼ばれる柱が二本だけのあずまや風の休憩所的な建物（写真3-10）がある。水路の分岐点にはウルン・ブドッグルと呼ばれる石造物がある。日本の石塔にも形態的には類似するが、

基本的にはヒンドゥー神への祭壇である（写真3-11）。

ここで、形態的なスパック・バサンアラスの特徴をまとめておきたい。まず第一に水路が川の流れに直角に造られていることである。これは比較的高度な技術で、日本の場合、中世以前の古い灌漑水路では見いだすことは難しい。中継井堰（写真3-12）とトンネル式の水路を組み合わせることによって達成されたものである。このトンネル式水路は、バリ島では9世紀から存在されている（スパック博物館解説）。日本でこのようなトンネル式の水路が見られるようになるのは、灌漑水路に鉱山技術が応用されるようになった戦国時代以降のことである。日本のこれらの水路は通常マブと呼ばれるが、幕府や藩、あるいは富裕な商人資本などによって開かれるものであり、村落共同体レベルに広く普及することにはなかったといえよう。例外的に村庄屋が独自に開削する

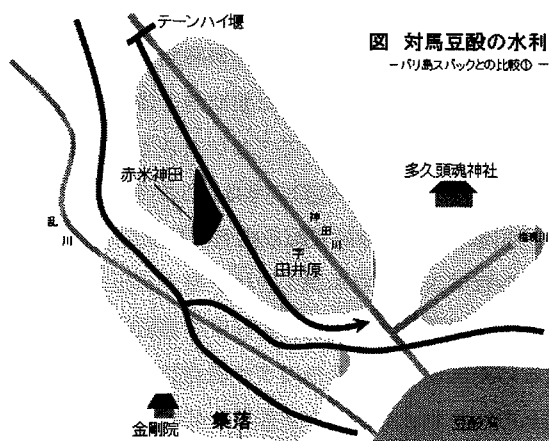


図3-2 対馬豆敷の水利

ものもあったが（大分県豊後高田市嶺崎）、それらはきわめて限られたものであり、規模も小さいものであった。

ここで対馬の場合（図3-2）と比較してみたい。対馬豆敷では、赤米神田を灌漑する約800メートルの長さを有するテンハイ井堰は、神田川とほとんど平行に流れている<sup>(5)</sup>。この方が水路としての築造は簡単で、豆敷の灌漑施設は特別な技術が必要とするものではない。平安時代より可能なものであるが、ここでは文献資料上江戸時代にならないと出てこないという状況にある。また、現在水利組合が存在しないが、かつては赤米神事を差配する頭屋が水利に関わる差配も行っていた。すなわち祝祭の執行と灌漑の掌握は共同体内でほぼ同一のこととして捉えられていたのである。ところで、豆敷の水利体系だけでは、日本の伝統的灌漑状況を示し得たということにはならない。

ここでもう一つの事例を見よう。大分県の国東半島に位置する田染という場所である。北部に富貴寺という寺がある。平泉の中尊寺とともに平安時代後期の中央の文化が地方に伝播した例として著名な寺院である。この地で同じような比較灌漑模式図を作成すると図3-3のようになる。国東半島中央の両子山を水源とする桂川という川が南から北に流れており、二つの大きな井堰によって盆地中央部が灌漑されている<sup>(6)</sup>。これは律令期にできた井堰である。豆敷の場合と大きく違う点は、溜池が多用されていることである。その多くは、近世に作られているが、先程のバリ島でも豆敷でも溜池は存在しない。日本では、瀬戸内海沿岸を中心に灌漑用溜め池は広く分布する。『日本書紀』の天皇の事績に池造りが登場し<sup>(7)</sup>、

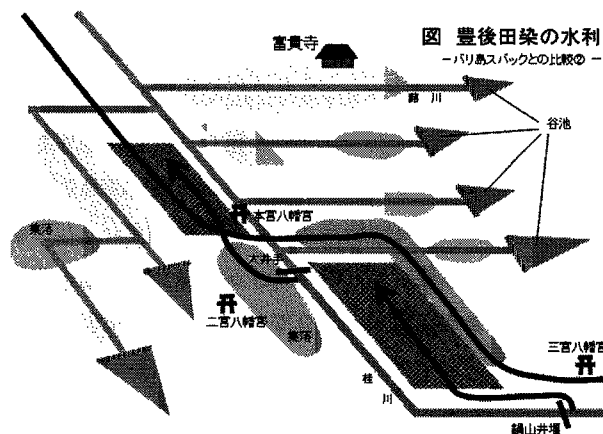


図3-3 豊後田染の水利

日本の水利社会で最も労働力が集中的に投下されたのはこの溜め池作りであったと考えられる。その意味で田染は、日本の水利社会の一断面を象徴しているといえよう。

村落に関わる信仰としては3つの八幡宮をあげることができる。鎌倉時代に既に100ヘクタールほどの水田が存在したが、近世においては16ヵ村に分かれており、水田面積も400ヘクタールほどとなり、豆敷の20倍の灌漑面積を持つに至っている。これらは3つの信仰領域に束ねられていたが、近世には統一的な祭礼である十月祭りが行われていた<sup>(8)</sup>。

バサンアラスでは、先程述べたように溜池灌漑は存在せず、トンネル式水路が多用されており、非常に強固な水利組織が形成されているという特徴がある。ここで、棚田に象徴されるバリ島の水利社会の特徴を簡単にまとめておきたい。19世紀においてバリ島では、国家所有や国家経営の水利施設は一切存在せず、スバックと呼ばれる自律的団体が一切の責任を負っていた。また、バリ島の棚田ではトンネル式水路が発達し、天水に頼る度合いが大きかった日本の棚田よりも灌漑技術において優れていたことがあげられる。さらにバリ島では、豊かな用水と肥えた土壌および台風の影響がないことから、三期作も可能である。

以上のように、バリ島の伝統的な村落は、その組織性と生産性において、音楽・演劇・絵画・彫刻などの分野で独特の芸術を生みだす基盤となりうる潜在能力を有していたのであり、これらを統合したバリ島の国家には、文化人類学者によって「劇場国家」の名が付されたのであった。

#### 4 劇場国家の社会構造

「劇場国家」とは、アメリカの文化人類学者、クリフォード・ギアツが著書『ヌガラ—19世紀バリの劇場国家』<sup>(9)</sup>で提示した国家モデルである。この著書は1980年に刊行されたもので、ここで規定された「劇場国家」とは「儀礼によってある秩序が形成され、そのことが非常に重要な意義を有する国家」とされている。もちろん、儀礼のない国など存在しないわけだが、その比重が非常に高いということが重要であろう。ヌガラはマックスウェーバーが考えたような官僚国家とも違い、中国のような国家とも、中世のヨーロッパとも、日本のような封建主従関係にもとづく国家とも違うものがあるというように否定していき、最後にバリ島の問題をあげて、「一群の主権者の上に不完全ながらも儀礼的な優先順位が記されたものであった」としているのである。

このヌガラという言葉は、インドネシア語で「宮殿」「都」「国家」「王国」といった意味で、サンスクリット語の「町」に起因するという。ヌガラと対立する言葉としてデサという言葉がある。これはインドネシア語で「村落部」「領域」「村」「場所」そして「従属」「統治領域」などの意味がある。デサは行政村を意味し、現在も大変広く使われており、バリ島のどこに行っても、道路の端に「デサ〇〇」と書かれている標識を見つけることができる。また、デサアダットと呼ばれる慣習村があり、宗教などに関わる一つの村落形態と見なせるものである。

ギアツは、現在のタバナン県にあった王国であるヌガラ・タバナンを例としてその構造を次のように明らかにしている。まず、カウラと呼ばれる一般農民が存在し、人口の9割を占めるもので、土地所有者であり、特定の君主に限定された奉仕を行う。その内容は儀礼と軍事に関するものである。したがって、日本で古代から近世まで行われた租税（年貢）を国家または領主に納めるという基本的な制度は存在しなかったと考えられる。カウラを束ねるものとしてプルブクル（政治的組長）が存在し、相当数のカウラを直接的に従えるものであった。プルブクルに従えるのがプンガワ（君主）で、相当数のプルブクルと、それを通じて数百から数千のカウラを掌握するものであった。このプンガワと同列の立場でブリグデ（王家）が存在する。また、プンガワは、パルカンと呼

ばれる集団を掌握していたが、これらは君主の屋敷内またはその近くに住み、食料は君主から宛行われ、土地を所有せず、君主の命令は絶対だが奴隷とはいえないものであった。ギアツは、かつてプルブクルであった者をインフォーマントとして、このようなブリグデ—プンガワ—プルブクル—カウラの縦支配の構造の実態を示している。それによれば、このプルブクルはタバナン王国の首都タバナンから半径25キロメートル程度の領域のほとんどあらゆる方向に存在する8つのデサの合計87軒のカウラを支配していたが、デサごとに2軒〜40軒の幅があり、一つのデサのカウラ全員を掌握するようなことはなかったのである。ここからヌガラの政治的核となるべきプルブクルの支配の特質をあげれば次の二点が指摘できるであろう。①散在支配であって、領域支配には至っていない。②人の支配は辛うじて出来ているが、土地の支配には及んでいない。プルブクルが一村を丸々支配するというような状況はなく、デサがヌガラの徴税を請け負うこともなかった。すなわち国家という枠組みからは村落が見えて来ないのがバリ島の特質であったと言えよう。一方で、下部構造であるデサは、バンジャル（部落）を基盤としていたが、ここには「部落規則」とよばれる詳細な成文法があり、農業組織としてスパックと呼ばれる水利組合が強固に展開し、数個のバンジャルが集合してデサ・アダット（慣習村）と呼ばれる、ヒンドゥーの三大寺院を有する信仰領域を形成していた。このような生活と生産と信仰の強固な共同体を現出していたのである。これをオランダの研究者コルンは、ドルプスレブブリーク（村落共和国）と規定した。それ故、ギアツは「国家は権力の執行よりは、権力の演劇化に専念することになった」と述べている。この言葉が劇場国家の構造を最も象徴的に示したものとなっている。

ギアツの「劇場国家論」は日本ではどのように受け止められたのだろうか。1980年にギアツの著書が刊行されるやいなや、ただちに多くの研究者が論評を行った。その中で山口昌男氏は優れた感覚で分析を行なっている。氏は論文<sup>(10)</sup>の章立てにみえるように「政治の初原形態と身体演技」「劇場としての国家—バリ島の場合」「政治宇宙の記号論的仕掛け」という枠組みでギアツの本をとらえている。山口氏は劇場国家論への批判として、「王権という政治組織の演劇論的環境を描いているが、ギアツ

には政治世界の宇宙論的全体を見通す理論的関心が欠けている。中村雄二郎氏が「魔女ランダ考」で、バリ島の文化的トポスの中に位置づけることに成功しているが、ギアツが必要としたのは、こうした負価を帯びた表象と求心的な王権の秩序を同時に組み込む理論的枠組を見出すことにあった<sup>(11)</sup> としている。また、「劇場国家」を日本に紹介した仕事として、80年12月頃の矢野暢氏の一連の業績が想起される<sup>(12)</sup>。「劇場国家」を日本の律令国家にストレートに投影して、そこから天皇制を論じ、中国を中心とする東アジア国家の中でいわば非文明社会のものであるというとならえ方をしている。

だが、本報告書の趣旨〈村落の社会性の追究〉からすれば、以上のような80年代の議論によっても、劇場国家の本質的な側面は捉えられていないといえよう。東アジアには水稻耕作を基盤とする2つの社会があり、その一方の国家モデルが劇場国家であった。

## 5 東アジアにおける二つの水利社会と劇場国家

ここで東アジアにおける2つの水利社会について述べておきたい。1つは国家の水利管理が優越する社会であり、ウィットフォークは、著書『オリエンタル・デスポティズム』<sup>(13)</sup> のなかで秦・漢帝国による大規模灌漑を想定している。「水力社会」と翻訳された東洋における専制国家の特質は、水稻耕作地域に限定されたものではない。しかし、前近代社会の中で、灌漑および治水が最も端的に示されるのはやはり東アジアに展開した水稻耕作地域であろう。だが、その実態を復原するのはきわめて困難をとらう。その中であって、カンボジアのクメール王朝は間違いなくこれに相当すると考えられる。アンコールワットと共に非常に大きな皿池が存在し、その皿池の灌漑は常に国王の管理のもとにあった<sup>(14)</sup>。クメール王朝が滅びたとき、アンコールワットは遺跡となったが、同時に巨大な皿池は荒廃し、この地の水利社会そのものも滅び去ったのである。日本においても、8世紀前半における百万町歩開墾計画から大仏建立に至る歴史に、カンボジア・クメール王朝と同様な水利社会を見出すことができる。それは8世紀に開墾されて、まもなく荒廃に向かった初期荘園（開発にあたって官衙の果たした役割が大きかった）の水田に象徴されるものである。

一方、これに対置されるのは、村落共同体の水利管理

が優越する社会である。クリフォード・ギアツが注目したバリ島の棚田に基づく水利社会がこれにあたる。ギアツは、『ヌガラー19世紀バリの劇場国家』において、バリ島では揺れ続ける上部構造とは対照的に下部構造が安定しており、これが劇場国家の特徴であるとしている。日本において村落共同体の水利管理が優越する社会は、中世後期から村落単独で、あるいは複数の村落間で一般化し、近世初頭の大規模開発期にも、基層では村落共同体の水利管理が展開していたことが確認される。

本研究で扱ってきた対馬豆敷を例にとれば、赤米神事を執行してきた共同体内の当番の家（頭屋）が、主要な井堰の水利差配権を有しており、バリ島のスバック内においてヒンドゥー信仰と灌漑を把握するスバック長の権限に共通するものがあったといえよう。ギアツはバリ島のスバックについて次のような評価を下している。

灌漑技術面においては、タバナンのスバックは完全に自己完結的であった。それが自ら直接統御できないような設備に依存することはなかった。国家所有や国家経営の水利施設は一切存在せず、スバックより上位の自律的団体の財産であったり責任であったりする水利施設も、一切存在しなかった。個々の土地所有者が水の供給を得るために存在した全施設一堰堤、水路、堤防、分水門、暗渠、高架水路、貯水池一を、時に他を排し時に提携して、建設し管理し補修したのは、その土地所有者自身も正式成員であり少なくとも法的には他成員と同等資格を持つような、独立社会団体であった。バリについてマルクス主義的見地からどのようなことが言われようとも、基本的生産手段の疎外は存在しなかった。そこに現れる制度を原始共産制と呼ぶのは先ず無理である。が、一方それは原始国家資本主義―「全面恐怖＝全面服従＝全面孤独」―でもなかった<sup>(15)</sup>。

これはそのままかつての対馬豆敷のテンハイ井堰管理の姿に当てはめることができる。日本とバリ島の水利社会を中国文明の届かない非文明社会のことと考えるのは誤りで、一方は近代テクノロジーの受容に成功し、他方は近代に入って芸術面で開花させたその潜在能力に注目すべきなのであり、これこそが共同体による水利管理が優先する社会の特質であったといえよう。

## 注

- (1) 『全集 世界の食料 世界の農村 10』(農山漁村文化協会、1996年)
- (2) 大橋・河合「バリ島の水系制御とまつり」(『民族芸術』17、2001年)
- (3) 余語琢磨「バリ島の土器づくり―諸生産地にみる技法の多様性を読み解く―」(第7回「東アジアの歴史と文化」懇話会「世界の土器づくり―土器製作技術の民族考古学、実験考古学―」2003年11月)
- (4) 永渕康之『バリ島』(講談社現代新書、2000年)、伊藤俊治『バリ島芸術を作った男―ヴァルター・シュピースの魔術的人生』の二書は、バリ島文化のバックグラウンドを知るのに重要な文献である。ただし、多くのヨーロッパ・アメリカの研究者が、バリ島固有のバックグラウンドを懸命に追究したのに対して、植民地文化としての側面を強調している点は問題が残る。
- (5) 堀祥岳「対馬豆敷の景観復原―水利および地名を中心として―」参照。
- (6) 海老澤「条里制水田と荘園村落」(条里制研究2、1986年)。
- (7) 例えば、応神天皇紀。その出生については多くの謎に包まれ、後半生には具体的な記述が見られるが、その中に池の築造が見られる。日本の古代国家においては、天皇による灌漑が大きな位置を占めている。7世紀半ばから8世紀初頭にかけて開始された班田収授の前提には国家による灌漑の比重が高かったことがあげられる。
- (8) 段上達雄「むらと信仰領域」(石井進編『中世のムラ―景観は語りかける』、1995年)。
- (9) 翻訳本は、みすず書房から1990年に刊行。小泉潤二訳。
- (10) 「政治の象徴人類学へ向けて」(『叢書 文化の現在12 仕掛けとしての政治』岩波書店、1981年)。
- (11) 前掲論文210頁。山口氏によっても紹介されている中村雄二郎氏の「魔女ランダ考」は、ギアツに触発されて書いたバリ島の哲学的コスモロジーを明らかにした論文である。『魔女ランダ考―演劇知とは何か―』(岩波書店、1983年)所収。
- (12) 『劇場国家日本』(TBS ブリタニカ、1982年)にまとめられている。
- (13) 原著、1962年。湯浅赳男訳、新評社、1991年。
- (14) 石澤良昭『甦るアンコール・ワット』(日本テレビ、1989年)。
- (15) 『ヌガラ』翻訳本81頁。

## クリフォード・ギアーツの人類学とその後の人類学的研究

西村 正雄

### 1 クリフォード・ギアーツという人

人類学の理論の歴史の中で、ギアーツはしばしば、最後のグランドシンセサイザーとして語られる。ギアーツは実際、その理論的叙述の中で、文化全般にわたる見解を出してきた。そして、それゆえに以後の人類学者の批判を一身に浴びる結果ともなった。

本論文では、ポストモダン人類学と呼ばれる、現代文化人類学の出発点ともなった、ギアーツの人類学の概要について述べる。特にその代表作である、劇場国家論形成までのプロセスを考えてみる。さらにそこから、ギアーツの人類学の問題点を明らかにし、それに対する批判がどうして生まれたのかについて言及してみたいと考えている。最後に、今回のシンポジウムで出された新たな問題提起を踏まえ、ギアーツの人類学との関連で、発表に対するコメントを加えることを目的としている。

まず、ギアーツの学問がどのようにして生まれたのかを知るために、その略歴と、ギアーツに影響を及ぼした人とのつながり、彼が活動してきた時代的背景を知ることが重要である。ギアーツの略歴は以下の通りである。

クリフォード・ギアーツは、1926年カリフォルニア州サンフランシスコに生まれた。初等、中等教育は、地元 학교に行っていた。1943年、海軍に入隊したが、戦闘突入一週間前に第二次世界大戦の終戦を迎えた(Inglis 2000)。

戦後、大学に復帰し、1950年アンティオク・カレッジで、哲学の修士号を得る。1952年から54年まで、インドネシア研究プロジェクトに加わり、ジャワ島調査に入る。1956年、その研究を基に、ハーバード大学社会関係学研究科で博士号を取得する。

翌年の1957年から、バリ島での調査が始まった。この研究が、後に解釈人類学という彼の独自の学問を作るきっかけとなった。翌年、1958年スタンフォード大学行動科学高等研究センター研究員になり、同時にカリフォルニア大学バークレー校の人類学準教授に就任した

(Erickson and Murphy 1998)。

1960年シカゴ大学に移り、同大学の人類学準教授に就任した。この年、博士論文を基にした『ジャワの宗教』(Geertz 1960)を出版する。その後、精力的な執筆活動に入る。1963年には、後に大きな影響力を与えた3つの出版物、『古い社会と新しい国家』、『農業のインボリューションーインドネシアにおける生態学的変化の過程』、『商人と王子』<sup>(1)</sup>を出版した(Inglis 2000; Geertz 1963; 小泉 1984)。

さらに1965年、『インドネシアのある町の社会史』を出版した。この年、モロッコでの調査を開始した。この調査は、1966年まで継続された。1966年に『バリにおける人、時間、ふるまいー文化的分析に関する論述』、1968年には、『イスラムを観るーモロッコとインドネシアにおける宗教の展開』(Geertz 1968)を出版した。

1969年には、1966まで行ったモロッコの調査を再開した。1970年、シカゴ大学から、プリンストン大学に移籍し、同大学の高等科学研究所の社会科学教授となった。この地位を得たことにより、ギアーツは、身分が安定したと同時に、研究により一層集中できるようになった。1971年ジャワ、バリ、セレベス(現在のスラウェシ)、スマトラの調査に入る(Erickson and Murphy 1998)。

1973年それまでの研究成果の集大成であり、またギアーツの理論的立場を最も明確に述べている『文化の解釈学』(Geertz 1973)を出版した。1975年には、『バリの親族体系』(Geertz and Geertz 1975)、1979年には、『モロッコ社会における意味と秩序』(Geertz, Geertz and Rosen 1979; 小泉1984、1994)を出版し、自らの理論的立場を実際のフィールドワークのデータを示しながら、より精緻なものへとしていった(小泉1984、1994)。

1980年に、本シンポジウムのテーマのひとつでもある、『ヌガラー19世紀バリの劇場国家』(Geertz 1980)を出版し、バリにおけるフィールド調査のまとめを行った。この著書で、ギアーツは、国家の概念について、従来の、

西洋的国家観といかに違うのかを示すことで、文化の相対性について、自己の主張を強化した。

1983年には、『文化の解釈学』の続編ともいえる、『ローカル・ノレッジ』（Geertz 1983）を刊行し、従来から唱えてきた他文化のロジックがいかに違うのか強調し、文化の相対性について述べた。この年、アメリカ人類学会特別講演賞、イギリス王立人類学協会ハックスレー記念メダルを受賞した。翌年の1984年には、アメリカ芸術科学アカデミー社会科学賞を受賞した（Inglis 2000）。

その後も精力的な研究活動を続け、1988年に『文化の読み方/書き方』<sup>(2)</sup>、1995年に『事実の後』（Geertz 1995）、2000年に『手もとにある光—哲学的問題に関する人類学的考察』を出版するなど、その影響力は今も大きい（Erickson and Murphy 1998）。

## 2 ギアーツの人類学とその時代的背景

### A. 形成期（1960年、70年代）

ギアーツの人類学を考える上で重要なのは、その時代的背景である。ギアーツが活躍し始めた1960年代、1970年代、アメリカの社会科学界の間で、マックス・ウェーバーの再評価が起こっていた。ウェーバーは、人間の行動における意味と行為の問題と追求した学者であった（Erickson and Murphy 1998; Inglis 2000）。この影響もあり、60年代、70年代のほとんどすべての人類学者は、「意味づけ」の重要性を考えていた（McGee and Warms 1996）。なぜなら、それまで多くの人類学者によって唱えられてきた「文化の概念」がいまだ総体的であり、漠然としていると人類学者自身が考えており、この意味で、ウェーバーの意味と行為の概念は、この漠然としたものにより明確な視点を与えるものと考えられたからである（Erickson and Murphy 1998）。

こうした雰囲気の中、人類学の研究を推進し始めていたギアーツにとって、当然、意味と行為の問題は中心的テーマの一つとなっていた。ただ、他の多くの人類学者と異なり、ギアーツは、その中で、文化の統合を考えたようである（Erickson and Murphy 1998; Inglis 2000; Ortner 1999）。ギアーツが、常に文化の統合を考えてきたことは、彼が学んできた人類学者をはじめとする、社会科学、哲学者の影響が大きいように思われる。

まず、大学院生時代、ギアーツが指導を受けたのは、

ボアーズ派のクライド・クラックホーンであった。クラックホーンは、ハーバード大学で教鞭をとり、心理人類学のリーダーとして、当時の人類学界をリードしていた。クラックホーンは、文化の統合の心理的側面を強調した人類学者であった。また、アルフレッド・クロバーとともに文化の概念をまとめようとした人でもあった（Erickson and Murphy 1998; Inglis 2000）。

さらに、ギアーツの人類学の特徴である、現象学的側面は、アルフレッド・シュルツ、象徴論的側面は、ギルバート・ライル、スザンヌ・ランガー、『農業のインヴォリューション』の中で顕著に示された社会システムに関する考え方は、タルコット・パーソンズ、ピトリム・ソローキン、また、生態人類学的知識は、ジュリアン・スチュワードの影響を受けているように思われる。加えて、多くの「ギアーツ研究者」が認めるように、その哲学的思索は、ヴィトゲンシュタインの哲学の影響が大きいと思われる（Bohannon and Glazer eds. 1988）。

こうしたギアーツは、文化を考える際にまず、文化とは、統合されたモラル、価値の大系であるとし、どのように生きた経験が集成的で、公けの象徴システムに統合されているのかを示そうとした。この方法が、後に述べる「厚い記述」という民族誌になり、文化のテキストを導き出すことこそ人類学者の仕事である、とするものとなってゆく。ギアーツによれば、人間とは、自身がつむいだ、クモの糸にひっかかった動物、となるのである（Bohannon and Glazer eds. 1988; Geertz 1973）。

### B. 解釈人類学の確立期

ギアーツが唱えた解釈人類学とは、まさに上で述べた理論を体系化したものであった。その特徴は、第一に文化研究の対象を、文化の中で伝達される意味の研究に絞ったことである。すなわち、文化人類学者のなすべきことは、「象徴が運ぶ意味を解釈すること」なのである。ギアーツにとって、文化は意味が網の目のように（ギアーツの言葉を借りれば「クモの糸のように」）組まれたシステムであり、この中で人類学者は、人々が自ら創り上げる意味の世界を、かれらの肩ごしに読み取る人なのである。よって、人類学者は、文化の分析に際して、個々の社会の歴史の中で象徴と結びつく意味を理解しようとしなければならないのであり、個別の文化の多様なあり方の中で、固有の事例としてそれぞれの文化を分析して



描写してゆかなければならないとした。これが、ギアーツの人類学において特有の文化個別主義とも呼ばれる考え方になるのである。この観点では、文化の固有の特性を強調することから、もはや一般的な比較など全く意味をなさないものとなる (Geertz 1973, 1983)。

では、ギアーツが描写したいと望んだ、それぞれの文化のもつ「意味」とはどのようなものであったのであろうか。それは第一に、個々人の心の内側にとじこめられたものではなく、公けに表象されたものであるという特徴がある。第二に、そうして公けに表象された意味は単独で存在するのではなく、公けに意味づけのネットワークを組み、体系化されたものであるという特徴があるものということになる (Bohannon and Glazer eds. 1988; Geertz 1973)。

こうした意味づけのネットワークが最も顕著に見られるものが儀礼であるとしている。よって、ギアーツは、その例として、バリの闘鶏の研究を通して、闘鶏を単にレジャーのためとして捉えず、闘鶏こそバリの文化の意味づけが凝縮されたものとして考えた。闘鶏を通して、彼はバリ文化の社会的秩序、統合を見たのである。

このギアーツの人類学が、『文化の解釈学』の中で体系化されてくる (Erickson and Murphy 1998)。この著作ほど、ギアーツの文化の考え方が明確になってくるものはないようである。この中で表現されているギアーツの文化観は次のように要約されるものと思われる。

- 1) 文化とは、意味と象徴の体系である。
- 2) 文化とは象徴に表現された意味の歴史的に伝達されてきたパターンである。

すなわち、ギアーツの述べる文化とは、人間が交信し、永続し、さらに生活に関する知識や態度を発展させるのに用いる象徴的形態の中に表されて、継承されてきた諸概念の体系ということになる。このような文化を研究する意義は、象徴分析から法則の追究をめざすのではなく、それらの象徴に記された意味を読み解くことである。なぜならそれぞれの象徴は、文化的意味の伝達者であるからである。これが、ギアーツが確立した、解釈的方法である。この解釈的方法では、文化をいわば「作品」とみなして理解する。その理解を明確にするものとしての民族誌であり、この意味で、民族誌自体が一つの作品とみなされるのである (Bohannon and Glazer eds. 1988)。

### 3 ギアーツ人類学のインパクトとその批判

#### A. ギアーツの人類学とその貢献

ギアーツ以前の時代の人類学では、構造主義一色に塗り固められ、すべてが「不可視の構造」の所産であるとの説明がなされていた。しかしこの中で、本当に人間個人がなすすべのない、生まれつき決定された構造の中で、あらゆる考え方、慣習、行動のパターンが決められることに疑問持つ人類学者は少なくなかった。そのひとつの流れが、進化主義の人類学、特にシステム論の人類学の傾向をもつグループであり、もう一つが、認識人類学を基にしたグループであった。この後者の代表者として、大きな影響力を持ったのがギアーツであり、ヴィクター・ターナーであった (Turner 1967, 1995; Erickson and Murphy 1998)。

ギアーツは、構造-機能主義を打ち破ることに最も成功した人類学者と考えられている。この点で、彼の論理の基礎は、ネオカント学派のディルタイの影響にあるといわれている。以前、ボアーズがそうであったが、彼がここで、自然科学と社会科学を区別することを改めて重要視したことに意義があった。それによると、自然科学は一般化できる法則を見つける学問分野であり、それゆえ、研究対象は、そうした法則を追求できる存在物となる。一方、社会科学は、個々人、グループにとってユニークな「心情的」な存在を扱うものとなる。フッサールもかつて、自然科学は文化的な生活の研究には向かない。なぜなら文化的な生活は意味を持っているからである、と述べたように<sup>(3)</sup>、ギアーツは個々の文化の中で伝達される意味の重要性を強調したのであった。ここでいう「意味」とは、生きた経験として、主観的に一番よく理解されるものと考えられている。このため、個々の主観を重要視した点で、個人から離れたところで作られた構造、それゆえに個人としての人間が手の触れることのできない構造にはめこまれたものから人間の行動を解き放つこと、すなわち、構造の呪縛から人間を解放した点で、大きな貢献があった (Erickson and Murphy 1998; Inglis 2000; Moore 1999)。

もし、文化研究のなかで、それぞれの文化のうちにある意味の体系が重要であるなら、そして、その意味の体系の理解なくして文化の理解が成し得ないとするなら、今我々の他の文化の理解の仕方は、いまだに表面的といわざるを得なくなる。したがって、ギアーツは意味を理

解する方法もまた、研究の対象とした。すなわち彼は「厚い記述」という、文化の真髄にまで迫るフィールドワークを提唱したのであった。ギアーツは、この厚い記述によってはじめて、文化の中に書き込まれているテキスト、すなわちその文化の構成員によってコード化され、伝達され、またコードが解読されてゆく意味の体系が理解できるようになるとしたのである (Geertz 1973, 1995)。

ギアーツのこの考え方が最も良く表されたものがバリの文化研究であった。特に『文化の解釈学』の中で述べられている「ディーププレイ」(Deep Play)は、フィールドワーカーとしてのギアーツと彼の妻が、いかにして表面的な理解から踏み込んで、バリの人々の意味の体系の中に入り、自身、バリ文化の深い理解に到達し得たのか、そのプロセスを述べている点でしばしば他の人類学者に多大の影響を与え、その後のフィールドワークの方法と、文化の分析、理解の方法のお手本として見られた (Geertz 1973)。

ギアーツの人類学のもう一つの大きな貢献は、文化相対主義を大きく前進させたことである。人類学の歴史の中で、文化相対主義はそう新しいことではない。アメリカ人類学の父といわれるフランツ・ボアーズは、それまでの一系的文化進化主義に反論する立場から、すでにそれぞれの文化のもつユニークな側面に注目するようにうながし、文化の相対性を唱えている (Boas 1966)。しかし、その後の人類学の流れの中で、相対主義を取りたてて述べる人類学者は出ていない。ただ、人類学者は一般におおのの文化の持つ価値、その複合性は、それ自体独立しており、優劣をつけることができないことは認識してきたようには思われる (Geertz 1973; Layton 1997)。

しかし、ギアーツは、この点で、なぜ文化を上下の序列で比較できないのか、またそうすることが意味のない行為であることの論理を作り上げた点で大きな貢献をしたといえる。ギアーツが示したのは、それぞれの文化がいかに複合的な象徴体系をもち、そのなかで暮らす人間が、そうした象徴を手段として意味の伝達を行い、理解してまとまった統合的文化を作っているのかということであり、それまで比較的多くの人類学者によって取られてきた、文化を比較するということが自体意味のない行為であるとしたのである。それに代わって、人類学者の仕事は、個々の文化内の意味の体系を解読することであるとしたのである。しかし、皮肉なことに、ギアーツが強

調して育ててきた文化研究における特殊主義、個別主義にギアーツ自身巻き込まれ、その後の厳しいギアーツ批判の発火点となった。

## B. ギアーツの人類学に対する批判

ギアーツの人類学が、統合されたものとしての文化の概念の再構築を目指したがゆえに、そして、大きなインパクトを他の人類学者はもとより、幅広く現代の思想に影響を及ぼしたがゆえに、後に続く人類学者の批判的となった。ギアーツほど賞賛され、また一方で批判されてきた人類学者もいないように思われる (例、Erickson and Murphy 1998; Ortner ed. 1999; Inglis 2000)。

人類学におけるギアーツ批判は、解釈人類学の外側にいるほとんど全ての人類学者のグループからなされてきた。それは、いわゆるポジティヴィスト、ポストモダニスト、マティリアリストと呼ばれる学問的傾向の人々からのものであった (Ortner ed. 1999)。

ポジティヴィストは、ギアーツの人類学は、解釈という方法を強調するあまり、「予測性」、「検証可能性」、「再検査性」、「法則性」といった、科学的知識に不可欠の要素を全く捨て去ったものであり、人類学の社会科学的側面を無視するものとして批判した (Sewell 1999:35)。

一方、ポストモダニストは、それとは全く対照的に、彼の「解釈」が、いまだに不完全であり、特に自分自身の解釈そのものを主題とする問題意識が欠けており、「解釈」が一体何を意味するのかについての問いかけが無いことに対して批判した (綾部1984, 1994; Bohannan and Glazer eds. 1988; Erickson and Murphy 1998; Barrett 1984)。

マティリアリストは、ギアーツの分析、解釈に、その人々の歴史、パワー、社会的葛藤などの側面からの分析が欠けていると批判した。すなわち、バリの闘鶏でも、その闘鶏があたかもいつも今みられる形でそこにあったかのごとく描かれ、そこに至るまでの歴史的変遷 (プロセス) についての分析がないとしたのである。マティリアリストにとって、バリの闘鶏がなぜそのような形で行なわれており、また、なぜ警察権力の手入れを受けなければならなかったのか、という考察を抜きにして、バリの人々の社会生活は語れないと考えたのである (Inglis 2000; Sewell 1999: 36)。

ギアーツに対する人類学の分野でのその後の批判に比して、人類学以外の分野では、賞賛するものがほとんど

であった。特に、歴史学の人々からの賞賛は注目に値する (Sewell 1999: 37)。スウェル (Sewell) が述べているように (Sewell 1999: 37)、通文化的研究を基礎とする歴史学者が、なぜこうまで共時的研究に基礎を置く人類学的研究の影響を受けるのか、興味深いものがある。

この点で、ゲイル・ルビン (Gayle Rubin) が述べているように (1975)、歴史と人類学に共通する、異文化との遭遇による興奮があげられる。人類学者は、異文化に遭遇しそれに対して魅了され、そこから分析が始まる。同じく、歴史学者は、自身とは異なった時代の文化にある事象を発見し、大きな関心を抱く。そこから分析が始まる。この共有できる心情があるがゆえに、歴史学者と人類学者はともにお互いが行なっている研究について、理解し合えるというのである (Sewell 1999)。

もう一つの点が、歴史学者、特に、社会歴史学者が歴史的事象を説明する理論と方法を歴史学の外に求めてきたことがあげられる。文化人類学が社会の研究の中でその方法論を洗練させてきたことは、社会歴史学にとって、自らの中に取り入れるよい例を示したきたと考えられたからである。ギアーツの行なってきた研究が、歴史学の中で好ましい研究として受け入れられてきた理由はここにあるように思われる。

しかし、この歴史学の中からも、最近、ギアーツの研究に対する批判も出てきている。例えば、スウェルは、文化的事象が単独で存在するのではなく、システムとして内的、外的要素とつながりを持って、常に変化していることを強調し、システムとして文化を見ることの重要性を提唱している (Sewell 1999)。

現在こうしたギアーツ批判を要約すると、次のようになる。まず第一に、ギアーツは、文化をあまりにも総体的なものとして扱い、あたかもそれが今あるがままの、総体として存続してきたかのように扱ったという批判である。実際には、文化は、歴史的な変遷を経て、多くの多様性を内包するにもかかわらず、そのプロセス、また今存在する多様性についての言及がなされていない。そして、その「一様な文化」中で、彼の言う「一様な意味付け」がなされてきたのかどうか、疑問であるという批判である (Fox and King eds. 2002; Greenblatt 1999)。

第二に、方法論として、「厚い描写」と彼が呼ぶ民族誌への疑問である (Rapport and Overing eds. 2000)。

この厚い描写の必要性は理解できるとしても、彼自身が厚い描写を行ってきたのかという疑問である。バリの闘鶏の論文で描かれているのは、西洋世界から非西洋世界の異文化を訪れた者が、一種の余裕を持った (植民地主義的余裕とまでは言わないが) 裕福な西洋人が、高みの見物をしている姿であり、それは決してその文化に深く入り込んで、深く理解している姿ではないというのである。ここで、現在人類学の重要な論点である、自己と他者の問題が出てくる。人類学者が実際は自己の殻から抜け出られないということに関する洞察が必要になってくるのである。この点で、ギアーツは、構造を壊しながら、実際には新たな構造をつくりあげてきたという批判が出てくるのである (McGee and Warms 1996)。

よって、それ以後の人類学者は、3つの点で方向性を探ってきた。一つは、他の分野との連携である。ギアーツが大いに影響を与えてきた歴史学との連携は特に顕著である。ギアーツの研究は共時的ではあるが、その解釈の仕方が、ある時代のある場所のできごとの考察に応用できるというものである。

さらに第二に、宗教、儀礼といった特定の場、時間における人間の価値観の表出をギアーツは描いてきた。ただギアーツはそれを普遍的なものとして、全ての文化の構成員の価値観と置き換えてしまった。それに対する批判はあるにしても、この価値観の表出の描写そのものは重要であると思われる。そこで、批判を受けてなすべきことは、そうした価値観の中に見られる多様性の分析であり、その時々、その場その場での価値観にあたえているパワー、影響力、の研究であり、なにが、どのように今見られる価値観に影響を与えているのかのきめの細かい研究である (Marcus 1999)。

第三に、厳しい批判はあるものの、今一度ギアーツの唱えてきた点、そして、その後の人類学者が決してなしていない点は考えておく必要がある。それは、人間の行動のまとまりを見るという点である。ギアーツ以後の人類学者は、ギアーツ批判をする一方、ギアーツが示そうとしてきた「統合的文化観」の新たな構築の努力をおこたってきたように思われるのである (Ortner 1999; Rosaldo 1999)。

#### 4 シンポジウムの発表のコメント

以上ギアーツの人類学を見てきて、最後に本シンポジ

ウムの発表者の考え方についてのコメントを述べてみたいと思う。

海老澤氏の提起した問題は、今まに行なわれている、歴史学者による人類学的研究の応用であり、歴史的事象をいかに説明するかという点で、応用が行なわれているようである。私が先に述べたように、この傾向は今後ますます広がってゆくように思われる。

海老澤氏は、ヌガラとデサという行政単位の再検討から出発している。すなわち、ヌガラは統治するもの、デサは統治されるものという単純な二分化に疑問をいいている。タバナンにおけるギアーツの調査を紹介しながら、自らの対馬の調査をふまえ、ギアーツの考え方が一つのモデルとなり得ることを述べている。氏によれば、日本の歴史の中で、村の統治の仕方に、ウィットフォールの唱えた専制君主的統治の時代と、ギアーツの唱えた、国家よりも、村落が主体となった自治の時代があり、村落あつての国家の時代があったことを示唆している。そして、日本は結局自治的村落を解体していったのに対して、バリはいまだに自治的村落を維持している点に注目している。こうした歴史的事実の解釈におけるギアーツの人類学の応用は、歴史学と人類学の共同研究を促してゆくものとして大いに注目される。

河合氏の発表は、バリの社会のデサの分析から入り、それが大きな地縁的組織である点を強調している。そして、その中に含まれるバンジャールをシステムに内包されるサブシステムと考え、システム論的アプローチで地域の統合を見ようとしている。システム論的分析の重要な要素である、情報、エネルギー、物質の流れを捉えながら、論じている。氏は情報の流れの中で重要な役割を演じているものとして、宗教的儀礼を強調している。この点で、従来ともすると宗教を単にその分野の中でのみ考えがちであったのを、システムの統合の役割をはたすものと捉えている点、斬新な考え方のように思われる。そしてなによりも、先に述べたように、氏の研究もまた、ギアーツが提唱し、その後の批判を経て、新しい傾向を出そうとする流れに沿っているように思われる。ギアーツ批判者があまりにもギアーツ人類学で構築された考え方を解体することのみに集中した結果、ギアーツが示してきた、文化の統合的側面の分析がおろそかにされた。文化は多様性を含みながらも、やはりまとまりを見せてい

る。そのまとまりはなぜ、どのようになされているのか、今考え直す必要があるようである。この点で、氏の社会の物質的側面をも含んだシステム論的考え方は、解体一辺倒のなかで、新しい見地を開いてゆくもののように思われる。

黒田氏の発表は、人類学的研究者が逆に歴史学者から学ばなくてはならないものを多く含んでいるように思われる。人類学者はともすれば社会や、文化を大きな枠組みで捉えてきた。しかし、それが今批判を浴びてきたのである。そうしたやり方の中でもれてきた多くの重要な、細かい事象があった。それを改めて掘り上げて分析してゆく必要があると批判されてきたのである。この点で、黒田氏のような研究態度こそ人類学者に望まれるように思われる。

和田氏の発表もこの点で共通するものがあるようである。きめの細かい調査に基づいた研究は、人類学者の研究が今なお大づかみであることを痛感させられるものである。氏のフィールドおよび文献資料に基づいた実証的な方法は、まさに人類学の研究と通ずるものがある。さらに、氏が丹念に集めた資料を比較して見せることによって見えてくる多様性は、ギアーツ以後の人類学が目指している、ひとくくりとして一様の価値観があるのではなく、その中に多くの多様性を含んでいることを、実際の資料を通して示している点できわめて重要な発表であると思われる。

## 5 まとめ

先に述べたように、ギアーツはいまの時代で最も影響の大きな人類学者であり、彼の提唱したものは、次の人類学を考える上で重要なステップとなった。とりわけ、ギアーツが与えた人類学以外の分野への影響は大きかった。それが、人類学と他の分野との融合を促し、新しい学問を生み出してきたように思われる。その意味で、このシンポジウムにおける発表は、いずれもこうした新しい傾向を具体的に示すものとして刺激的で、今後さらに発展させてゆくことができるものと考えられる。

## 参考文献

綾部 恒雄 編

1984 『文化人類学15の理論』。中公新書741。東京：中央公

- 論社。  
 1994 『文化人類学の名著50』。東京：平凡社。
- Barrett, S. R.  
 1984 *The Rebirth of Anthropological Theory*. Toronto: University of Toronto Press.
- Bohannan, P. and M. Glazer eds.  
 1988 *High Points*. 2<sup>nd</sup> Ed. New York: McGRAW-HILL, Inc.
- Boas, F.  
 1966 *Race, Language, and Culture*. New York: Free Press
- Erickson, P. A. and L. D. Murphy  
 1998 *A History of Anthropological Theory*. Peterborough, Ontario, Canada: Broadview Press.
- Fox, R. G. and B. J. King eds.  
 2002 *Anthropology Beyond Culture*. Oxford: Berg.
- Geertz, C.  
 1960 *The Religion of Java*. Chicago: The University of Chicago Press.  
 1963 *Agricultural Involution*. Berkeley: University of California Press.  
 1968 *Islam Observed*. Chicago: The University of Chicago Press.  
 1973 *The Interpretation of Cultures*. New York: Basic Books.  
 1980 *Negara: The Theater State in Nineteenth-Century Bali*. Princeton: University Press.  
 1983 *Local Knowledge*. 3<sup>rd</sup> Ed. New York: Basic Books.  
 1988 *Works and Lives: The Anthropologist as Author*. Cambridge: Polity Press.  
 1995 *After the Fact*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
- Geertz, C., H. Geertz and L. Rosen  
 1979 *Meaning and Order in Moroccan Society, with a Photographic Essay by Paul Hyman*. New York: Cambridge University Press.
- ギアーツ、クリフォード (森泉弘次訳)  
 1996 『文化の読み方書き方』。東京：岩波書店。
- Geertz, H. and C. Geertz  
 1975 *Kinship in Bali*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Greenblatt, S.  
 1999 "The Touch of the Real." In Ortner, S. B. ed. *The Fate of Culture*. Berkeley: University of California Press. Pp. 14-29.
- Inglis, F.  
 2000 *Clifford Geertz*. Cambridge: Polity Press.
- 小泉 潤二  
 1984 「解釈人類学」。綾部 恒雄 編、『文化人類学15の理論』、中央公論社、所収。Pp. 243-262。  
 1994 「クリフォード・ギアーツ『ヌガラ 19世紀バリの劇場国家』」。綾部 恒雄 編、『文化人類学の名著50』、平凡社、所収。Pp. 418-429。
- Layton, R.  
 1997 *An Introduction to Theory in Anthropology*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Marcus, G. F.  
 1999 "The Uses of Complicity in the Changing Mise-en-Scene." In Ortner, S. B. ed. *The Fate of Culture*. Berkeley: University of California Press. Pp. 86-109.
- McGee, R. J. and R. L. Warms  
 1996 *Anthropological Theory*. Mountain View, California: Mayfield Publishing Co.
- Moore, H. L.  
 1999 "Anthropological Theory at the Turn of the Century." In Moore, H. L. ed. *Anthropological Theory Today*. Cambridge: Polity Press. Pp. 1-23.
- Moore, H. L. ed.  
 1999 *Anthropological Theory Today*. Cambridge: Polity Press.
- Ortner, S. B.  
 1999 "Introduction." In Ortner, S. B. ed. *The Fate of Culture*. Berkeley: University of California Press. Pp. 1-13.
- Ortner, S. B. ed.  
 1999 *The Fate of Culture*. Berkeley: University of California Press.
- Rapport, N. and J. Overing eds.  
 2000 *Social and Cultural Anthropology: The Key Concepts*. London: Routledge.
- Rosaldo, R. I. Jr.  
 1999 "A Note on Geertz as a Cultural Essayist." In Ortner, S. B. ed. *The Fate of Culture*. Berkeley: University of California Press. Pp. 30-34.
- Rubin, G.  
 1975 "The Traffic in Women: Notes on the 'Political Economy' of Sex." In Reiter, R. ed. *Toward an Anthropology of Women*. New York: Monthly Review Press.
- Sewell, W. H. Jr.  
 1999 "Geertz, Cultural Systems, and History: From Synchrony to Transformation." In Ortner, S. B. ed. *The Fate of Culture*. Berkeley: University of California Press. Pp. 35-55.
- Turner, V.  
 1967 *The Forest of Symbols*. Ithaca: Cornell University Press.  
 1995 *The Ritual Process*. Hawthorne, N.Y.: Aldine.

## 注

- (1) 研究者によっては、この本のタイトルを『行商人と貴族』(例、小泉 1984)としているが、内容をより正確に示すものとして、『行商人と王子』としておいた。
- (2) 本書の原題は、*Works and Lives: The Anthropologist as Author* (Geertz 1988)である。しかし、日本語訳の本では、『文化の読み方書き方』(ギアーツ 1996)というタイトルになっている。
- (3) 人類学では、人類学を人文的分野と見なすか、社会科学的分野と見なすか、ポアーズの時代以来長い間延々と論争が繰り返されてきた。詳しくは、Erickson and Murphy 1998, Layton 1997等を参照。

# バリ島にみる水利組織と日本の土地改良・水利組織の同異・今後の調査課題

堀 口 健 治

## 1 見事な棚田・それを保全する水利組織・支える宗教形態と地縁的な集落との共存

火山島であるバリ島、その頂上にある湖で貯められた雨水が地下水となって地下にもぐっているものの、湖がある標高から比べると比較的近い地点で、すなわち山の高い所で、地表に豊富な水として表われる。だから島を遠くから見ると、全山、全島、その水を使つての棚田一色に見えることになる。実際そうなのであるが、近くに寄ってみると、地下水が地表に現れる地点よりも標高が高いところは、棚田ではなく段々畑になっていたり、樹園地になっていることがわかる。

だが段々畑や樹園地の大きさはそれほどなく、車で頂上の湖から麓に向けて降りてくると、あっという間に棚田の地域に入り、あとは棚田の連続する地域を通過するということになる。

これを管理する水利組合・スバックはその水系の水を利用するものの集まりとして、機能している。村の構成員の概念とは違って、純粹に水利用者としての組織であるように理解されるが、歴史的には村とどのような関係にあるかはさらに調査を詰めたいところである。

日本では封建体制のもと、自治的な集落が水の開発や管理を行い、その過程で他集落との水資源の争いや資金等の調達等で権力の庇護を必要とする仕組みが働いていたのに対して、バリ島のそれは水管理組織が独立の社会的組織として発達してきたようにもみられる。

さらにそれを強く感じさせられる点として宗教的な一体感がある。地下水が地表水となって表われるところは、バリ島では神が祀られるところであり、それ以下の水配分にあたる要衝地にある堰や樋門でも、分水地点ごとに神が祀られることになる。すべて重力灌漑なのであるが、自然への感謝と豊作を祈る農耕儀礼が一体となって、宗教儀式が連綿と続いている。水管理組織と宗教儀式との関連が、自治の強さとなって機能しているように見える

が、実際にそうなのかどうか、さらに深く知りたいところである。

一方で地縁集団的な村落は存在し、水利組合のような機能集団とは異なり、祭りと宗教儀礼と重なりながら、存在している。だがこれらの祀られた神は、水利関係の神や儀礼とは異なり、村の寺として、スバックの寺とは分かれて存在しているようである。

村落的な機能が維持され、一方で水管理的な機能集団である水利組合も役割を果たし、構成員のダブリを許容しながら、バリ島ではともに共立していることの、現代的な意義を今後は問いかけたいところである。

## 2 財政的庇護にある水利組合・集落農業と水利

もともと宗教的な儀式を弱めてきた日本の水利組織は、従来の自己開発的な土地改良の側面が、大正時代以来の国家的な補助金の関係で弱まって、国家等への他者依存の性格がますます強まり、国や県に取り込まれる過程を、戦前、戦後、辿ることになる。戦後の土地改良区制度に衣替える中で、事業実施機関としての性格が強まり、その事業資金の大半を国・県・市町村に依存することになる。もっとも管理の点では、構成員の共同出役、共同負担の原則は維持され、さらには集落の共同作業である道普請等、共同作業の一体的なものとして、水利体系のもとで関係する面積が農家ごとに異なるとしても、全戸、平等に出役する慣行が続いてきた。水利体系にみる地理的範囲と、村落の地理的範囲とが若干、異なるにせよ、出役等の点では一体性があったというべきであろう。

これが、まず集落の構成員の違いが、単なる量的な違いから、兼業を含めて、質的な違いに高度経済成長以降、転化し、共同出役、共同負担の原則が難しくなっている。非農家の世帯を含む集落に変貌しつつある中、行政的な機能を持つ村と、補助金を受けつつ水利体系が拡大してその地理的範囲が村を越えるような大きさに土地改良区が発展する中で、両者の違いが大きく現れるようになって

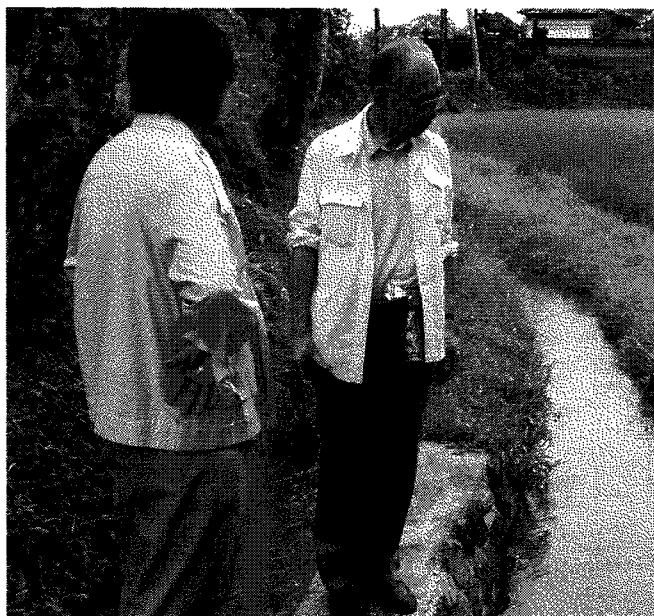
てきつつある。

また耕作者、経営者が組合員になる原則の戦後の土地改良区であったが、高度成長以降に、農地改革で生まれた自作農が、耕作者と農地所有者とに分裂する中で、どちらを主たる構成者にするのか、土地改良区は逡巡状態にある。バリ島でも農業収入に加えて、非農業の収入が木工加工等で増加する傾向にあるとすれば、農家間の収入や農業労働力の量的違いが、従来の一体的な機能集団への参加に階層的な違いをもたらすことになることも予想される。日本の場合、その違いを公的な補助金の割合を高める形で薄めてきたと思われるが、バリ島ではどうか。今後の比較研究が待たれるところである。

水路の補修や水管理の共同作業がどのような割当（個人か家としてか）で行われているのか、土地改良の金銭負担も含めて施設投資の負担の配分についても、バリ島

のスパックでは歴史的にどう行われ、現在はどうなっているか、調査が求められる。

日本では村の作業として、また村を構成する同質の農家を前提として、各家に出役や負担が求められてきたが、兼業収入の増大や兼業の意義の拡大を通じて、農家の量的な違いから質的な違いとしてあらわになり、今までの負担の暗黙的「強制」の仕組みが崩れつつある。そのため公益法人としての制度である土地改良区が負担の強制を行い、職員や臨時雇用を動員しての補修の役割を担うようになってきていて、「強制」力の弱化した水利組合では地域資源の保全が難しくなりつつある。公的セクターの拡大が進んでいるが、こうした日本の推移と比して、バリ島の強固な組織の内部ではどのような変容がありうるのか、さらなる検討を求めたい。



バリ島ブラ・グヌンカウイ・スパトウの近郊にて（2003年3月9日）



## Ⅱ 対馬・バリ調査の現場から

### i 対馬

#### 対馬豆酛の赤米神田

深谷克己

2003年9月10、11日 参加者；海老澤衷・紙屋敦之・新川亀登男・深谷克己

10日、午後3時前に福岡空港を飛び立ったが、台風14号の影響で滑走路視認不可能とのことでジェット機が対馬空港上を旋回待機する事態になった。が、さいわい10分ほどで着陸できた。調査員の吉田正高君、永田史子さんも同機だったが、2人は豆酛集落西手にある金剛院（高野山真言宗）の史料調査一調査員の何人かが先行一向かった。

我々は、海老澤さん運転のレンタカーで、豆酛集落北方の寺門にある多久頭魂神社に直行した。そこに神社宮司の本石正久氏が待っておられ、我々に使わせる傘も用意していただいていた。本石氏は70を超えてなお軽やかな身のこなしで、酒を愛して乱れず、対馬ことに豆酛の歴史を愛して説きやまぬ、篤学の郷土史家であり、歩行のように自在に車を操る熟達のドライバーでもある。さっそく、雨のせいですでに薄暗くなりはじめ、藪蚊が時折まとわりつく神社の境内を、本石氏の案内・説明で見学した。参道左手に鐘楼があり、康永（北朝）3年（1344）鑄造の梵鐘（約1メートル）が懸けられている。古代史の新川さんはじめ、阿比留氏に関する文言があるという鐘の銘文を確かめようとしたが、夕闇迫り継ぎ接ぎ状にしか読めなかった。

次いで社殿に案内され、豆酛のこと、神社のこと、赤米のことなど本石氏のレクチャをうかがった。本石氏のレクチャもふくめて多久頭魂神社を概観すると、この神社は社殿が観音堂の形式で高麗仏の観世音菩薩を祀っている。観音堂は、17世紀後半（寛文年中）に建てられた真言密教の寺院建築だという。しかし本来の祭神は多久頭神であるとする。多久頭魂神社は江戸時代には、社ではなく、日輪信仰の一形態である天道信仰の地域的祭祀

場としての「観音堂」があり、住民が「天道」と呼ぶ所だったらしい。天道信仰の神は、天道山（豆酛からは龍良山）に鎮まり、元来祭祀は麓の祭場で挙行されたが、それぞれの地域の天道祭祀の中心地は観音堂であった。古代には、下県郡に「多久頭神社」というのがあり、18世紀後半に豆酛の「天道」がそれだと判定された。これらのことを時系列的に大まかにまとめると、古代には社であったらしいが、中世の神仏習合状況の中で古い社名が混乱したか廃れたかしたのを、近世後半の国学の高揚を受けて神道系の発想が強まり、「天道」の観音堂をもって古代の「多久頭神社」とした。ただこの頃の信仰習俗を揺さぶることはなく、神仏習合的な天道信仰で維持されてきた施設が、明治維新の神仏分離・神社再編策によって多久頭魂神社の称を得たと考えられている。なお多久頭魂神社は、村社よりは一格上の郷社とされた。しかし、これまでの観音堂を移してその社殿としたのだから、神仏習合性は今に至るまで持続している。

本石氏の短いレクチャと我々のちょっとした質問で、すでに宵闇の状態になってきた。宿との夕食の約束もあるので、境内経蔵に保存されている高麗版大蔵經、朝鮮朝初期の大鉦（金鼓）の見学もやめ、豆酛のうちの宿所美女塚山荘へ向かうことにした。それでも途中で視認できるかぎりは見学したいということになり、赤米の田を車から見て、6世紀後半の保床山古墳では新川さんがわざわざ登って確かめた。夜は金剛院調査の若手メンバーと一緒に夕食、焼酎「やまねこ」を楽しみながら本石氏の滑らかな弁舌を中心に夜が更けた。

翌11日、金剛院へ出向く前に、豆酛崎を見ようということになり早めに出発、途中で昨夕車中から薄ぼんやりと眺めただけに終わった赤米田の際まで行ってみた。素晴らしい赤米田の光景だった。台風はむしろ接近中だった。

たが、かえって朝日は明るく、赤米の禾がそれに照り映えて紅色に見え、誰であれ見間違ふことのない赤米田の光景を現出していた。わずか数日だけの貴重な眺めだという。

### 田は二枚 豆穀の朝日に 紅の禾

今は儀式用の赤米も田2枚だけの作りに減ったが、全国的には土産用に広まっている。豆穀の赤米は、豆穀浦に注ぐ神田川流域の神田原にある神田で作られる。中世に、奉納用の神の米が作られる齋田が生まれた。赤米一禾が赤く粳穀は茶褐色、玄米の表皮に赤身一が神の米と

され、祭礼に用いられてきた。その祭礼とは、天道信仰の祭礼であって、赤米自体、「天道法師」が種粃をもたらしたと伝える。豆穀の赤米は、多久頭魂神社と切り離しがたいのである。耕作は家々の回り持ち、肥料は人糞尿を避け、水口に注連を張り、祓いを行って田の神を齋く。今の赤米田にも注連が張られている。ただ「頭」家を中心とする赤米神事は次第に勢いを喪いつつあるらしい。その祭祀次第については、ここでは略す。

この後、豆穀の金剛院文書や対馬歴史民俗資料館の寛文2年豆穀郷検地帳を見ることができたが、紙数の都合で省く。



対馬豆穀の赤米神田（2003年9月12日）

9月11～13日、対馬調査に参加した。私は13日の厳原町を中心とした調査について報告したい。当日は、台風一過の快晴に恵まれた。朝、テレビは、台風14号がお隣の韓国に大被害をもたらしたことを報道していた。対馬では大きな被害は出なかったが、宿泊したホテルの建物は一晩中揺れていた。海老澤衷先生の案内で、調査は始まった。参加者は、海老澤先生のほかに深谷克己・新川登亀男両先生と私の4名である。

最初に、厳原町の長崎県立対馬歴史民俗資料館を訪ねた。課長小山満信氏の案内で展示室を見学後、宗家文庫史料を閲覧した。対馬藩の寛文2（1662）年の検地帳「酸豆郡酸豆村御検地帳」を出していただき閲覧した。この検地帳は前々から見たいと思っていた史料である。検地帳には一筆ごとの字名・地目・収穫高・知行主・作人等々が記載されており、対馬藩が島内の生産力の把握に努めている様子がわかる。しかし、周知のとおり宗氏は「無高」大名であった。寛永11（1634）年、3代将軍徳川家光が宗義成に与えた領知朱印状は、対馬一島と田代領（肥前国基肄・養父両郡）1万1837石を記載しているが、対馬島には石高がつけられていない。同様の大名として、もう一人松前藩の松前氏がいる。石高制を権力編成原理の一つとする幕藩制国家にあって朝鮮と境を接する対馬島、蝦夷地と境を接する松前（和人地）が、石高に換算しうる生産力を有するにもかかわらず、なぜ「無高」として扱われたかは、今なお解けない謎である。対馬島の場合、その鍵は日本と朝鮮の狭間にあるということ自体の中にあるはずで、それゆえに対馬藩の石高制上の扱いに関心をひかれるのである。

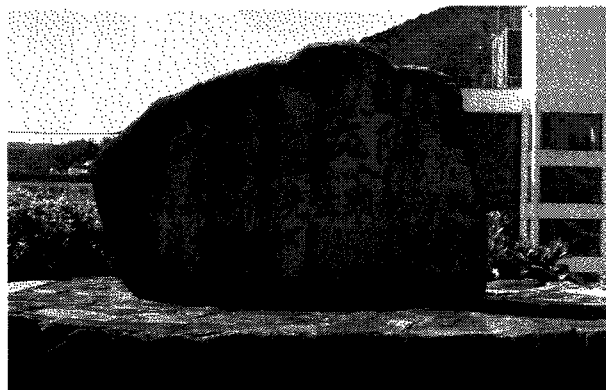
対馬藩を象徴するのは朝鮮外交である。江戸時代、対馬藩は幕府から朝鮮との通交業務を家役として課せられた。朝鮮通信使の招来はその一つであり、雨森芳洲が対朝鮮外交に力を尽くしたことはよく知られている。対馬歴史民俗資料館のある敷地内に「朝鮮国通信使之碑」と「誠信之交隣 雨森芳洲先生顕彰碑」が建っている。「誠

信之交隣」の碑は、1990年5月27日、厳原町で国際シンポジウム「朝鮮通信使」が開催されたが、同25日、盧泰愚韓国大統領が来日し、宮中晩餐会等の席で日朝交流に尽力した雨森芳洲のことに言及されたことに鑑み、建立の運びとなり、8月5日除幕式を迎えたという（『交隣』No.2、1992年）。

厳原町の郷土資料館を見学し、『厳原町誌』ほかの資料を購入した。対馬では厳原町ほかが合併して対馬市が誕生する計画があると聞いた。これが最後の『厳原町誌』になると聞き、記念に購入したしだいである。

宗家歴代の墓がある万松院を訪ねた。豊臣秀吉の朝鮮侵略に参加し、戦後、日朝講和交渉に対馬藩主として働いた宗義智の墓に詣でる予定でいたが、台風14号によって境内に散乱した木々の跡片付けのため、臨時に拝観停止となり、参拝できなかった。私が宗義智に関心を持っているのは、宗氏が島津領の太閤検地後、文禄4（1595）年4月に豊臣秀吉から薩摩国出水郡内で1万石の知行を与えられているからである。慶長4（1599）年1月、出水の地を転じて前記田代領に移されたので、出水領有は約4年間に過ぎなかった。宗氏に出水、次いで田代が知行として与えられている事実は、対朝鮮外交における宗氏、および対馬島の石高制上の処理の問題を考える際の手掛かりになると考えている。

峰町佐賀は、15世紀前半、対朝鮮外交の礎を築いた宗



「誠信之交隣」の碑

貞茂・貞盛・成職三代が島府を置いた地である。宗家の墓所がある円通寺に詣でた。

最後に、今回の調査でぜひ訪れたい場所があった。それは浅茅湾と玄界灘を結ぶ大船越瀬戸である。倭館を豆

毛浦から草梁に移転する一環として、寛文12（1672）年にこの地の開削行われ、長さ2町13間・広さ12～27間の運河が開通した。朝鮮通交にかかる対馬藩の熱気を想起しつつ今回の調査を終えた。



長崎県立対馬歴史民俗資料館にて（2003年9月13日）

松澤 徹

2003年5月10日（土）～12日（月）、対馬厳原町の現地調査に参加した。主な目的は、大山小田文書ほかの文書調査と、厳原町豆酲の屋号悉皆調査であった。調査の成果については、別に詳細なまとめがあるので、以下では初めて訪れた対馬の地の強い印象を、調査日誌風に雑記しておきたい。

5月10日、福岡空港ANKロビーに集合した参加者12名は、13時発の便で対馬空港に向けて出発した。飛行機は上昇からすぐに下降を始め、ほどなく旋回する機体の窓から、新緑と呼ぶにはあまりにも緑が濃く眩しい照葉樹林の山々と、浅茅湾の美しい海岸線が目飛び込んできた。上空から見ると対馬の山がちな地形がよくわかる。入り組んだ湾の奥にわずかに平坦な土地があるものの、陸地のほとんどが山地でありそれらの山々は直接海へと沈んでいる。

空港でレンタカーを借りて国道を南下し、厳原へと向かう。まず長崎県立対馬歴史民俗資料館を訪ねた。この資料館は享禄年間（1528～32）頃から寛文5年（1665）まで宗氏の居館であった「金石屋形」跡の一角に位置しているという。はじめに常設展示を見学したが、縄文・弥生の頃から近世にいたるまでの朝鮮半島との深い繋がりを示す貴重な遺物が多く展示しており、興味深かった。朝鮮通信使の一行を描いた絵巻の鮮やかな色彩や、雨森芳洲の肖像画の思慮深い表情が印象に残った。その後、2階の部屋をお借りして、館所蔵の大山小田文書などの文書を閲覧させていただいた。大山小田氏は、機上からみたあの浅茅湾を拠点として、高麗との貿易に深く関わった海の領主である。享徳3年（1454）の宗成職の書下は「当国・高麗の諸公事」についての免除状であり、「おふせん判」・「六地之一俵物」など、中世の対馬に独特の諸税に興味を惹かれた。その他にも多くの貴重な文書を閲覧し、撮影させていただき、17時の閉館とともに、資料館をあとにした。

その後、厳原の町からやや南へ下ったところにある、

お船江跡を見学した。寛文3年（1663）造成というこの船だまりは、対馬藩が御用船を繋留した施設で、私たちが着いたときは干潮時で、当時のままに残っている築堤が、水面から高くそびえ立っていた。夕景に映えるその堅牢な石積みは、往時の繁栄ぶりを偲ばせた。

宿泊した厳原の柳屋ホテルで、夕食時に飲んだ「やまねこ」という地の焼酎がとてもおいしかった。対馬では密造酒のことをやまねこと呼んでいたそうで、そこからこの名がついたそうである。ボトルを何本か空けたのち、ほろ酔いで厳原本川に沿って港まで夜の散歩をした。

5月11日朝、車で豆酲へと向かった。途中の道は、かなりの勾配とカーブ続きの山道できつかったが、内山峠ではヤマネコの子猫？の歓迎を受けるとともに、展望所からは、学術的価値がきわめて高いとされる龍良山照葉樹原始林を遠望した。9時半に多久頭魂神社に到着し、社殿の前で待ち合わせをしていた本石正久さんのお話をうかがった。本石さんはこの神社の宮司で厳原町文化財審議委員でもあり、豆酲の歴史と民俗に大変に詳しく、滞在中つねに教えを受け、お世話になった。その後、豆酲で信仰されている天道法師の墓といわれる表八丁角へご案内いただいた。この表八丁角はオソロシドコロとも呼ばれる禁忌の場所で、独特の雰囲気があった。龍良山麓の、車道から奥深く入ったところだったので、ご案内なしではたどり着けなかったであろう。それから金剛寺を訪ね、ご住職のお話をうかがうとともに、ご所蔵の文書を見学した。

昼食後には各グループに分かれて、あらかじめお願いしておいた豆酲のいくつかのお宅を訪ね、屋号を中心に信仰・民俗に関する聞き取り調査をおこなった。この日の夜、宿泊した美女塚山荘での夕食をおいしくいただいた後にも、団らんの時間にも関わらず何軒かのお宅にお邪魔して聞き取り調査をおこなった。どのお宅も暖かく迎えて下さり、さまざまな興味深いお話をうかがうことができた。

5月12日、帰途につく。まず、厳原へ戻って宗氏歴代藩主の墓所がある万松院を見学したのち、上島をめざしてひたすら北上し、豊玉町の和多都美神社に行った。それから室町期に宗家が居館をおいていたとされる峰町の円通寺に宗家の墓所を見学した。空港へと戻る途中、猪垣とよばれる尾根に沿った長大な石垣の遺跡に立ち寄り、

万関橋では車を降りて、はるか下方の人工の瀬戸を見下ろした。何隻もの船が日本海側から浅茅湾方面へ通り抜けていくのをしばらく呆然と見つめてから、空港へと向かい、対馬をあとにしたのであった。

以上のように、短期の日程に、あまりにも充実の内容を詰め込んだ感があったが、意義深い調査旅行であった。



大学院ゼミ調査における聞き取り風景（2003年5月11日）

永田 史子

筆者は考古学を専攻しているが、2003年には5、6、9月の3度にわたり対馬調査に参加する機会をいただいた。以下に各回ごとの調査記を記す。ただ、他の執筆者担当分に詳しい部分は割愛した。

6月調査は9日から12日まで参加した。この回は、現在の水利灌漑状況の把握と中世文書に記載されている地名の現地比定を行うべく、航空写真をもとに作成した豆靱地域の地形図を携えて、ひたすら踏査・聞き取りの4日間となった。

この調査の合間に、豆靱の遺跡・遺物を見学することができた。榎ぼの<sup>はとうしよく</sup>と把頭飾である。

「榎ぼの」とは、榎の実を水漬けにして防腐・貯蔵する貯蔵穴だとされている。川の傍に設けられる施設で、現在、寺門の権現川右岸には「榎ぼの遺跡」として十数基保存されている。現地は説明看板が立っているほかはほぼ自然な状態で残されており、機能時の地理的環境を把握しやすくなっていた。遺跡の所産時期は、『楽郊紀聞』など近世の文献に見る榎ぼのの記述を根拠に江戸時代と考えられている。

平成3年の発掘調査では、残されている榎ぼののうち1基が調査された。大きさは直径約300cm、深さ約250cmで、その構造が明らかになった。穴の底は浸出する川の水を取り込みやすいように川底よりも低く掘られ、壁は板石積みとなっている（図3-13）。

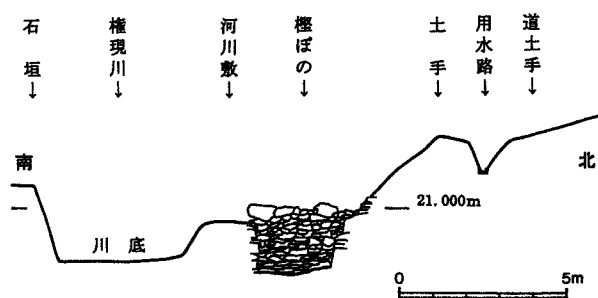


図3-13 榎ぼの構造断面図（立平1992を一部改変）

発掘調査と並行して行われた民俗調査によれば、豆靱で榎食が廃れた時期は大正頃のようにあり、使用された

時代の下限も20世紀前半に置けるものと思われる。

榎ぼのと同様の方法を用いたと考えられる堅果類貯蔵施設の遺構は、縄文時代・弥生時代まで遡れば、岡山県南方前池遺跡や佐賀県坂の下遺跡、熊本県曾畑貝塚など、西日本を中心として各地に出土例を認めることができる。しかし古墳時代以降は検出例がほとんどなく、古代・中世・近世に至る間の堅果類貯蔵の実態についてはいまだ明らかにはなっていない。その意味でも榎ぼのの存在と調査成果は重要な意味を持っていると言えよう。

豆靱には寺門以外の場所にも古い榎ぼのが点在しているそうである。研究課題はまだ多く、さらなる調査

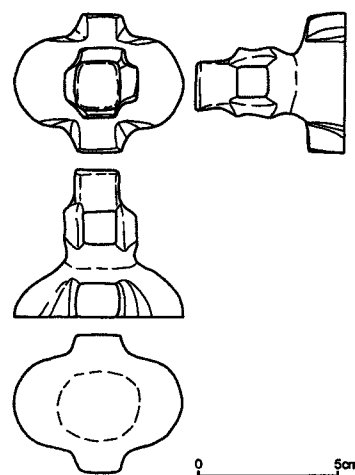


図3-14 把頭飾実測図（近藤2000を再トレース）

が期待される。

把頭飾は、調査最終日に永尾賢一氏のお宅で拝見した（図3-14）。永尾氏のご先祖が、豆靱の南東に位置する遠方壇（エンボウダン）を開墾中にたまたま掘り出したのだそうである。

把頭飾とは石剣や銅剣の柄に装着され

る加重器兼装飾品で、青銅・石・木・土などで作られる。中国東北地方に起源を持ち、日本列島へは朝鮮半島を通じてもたらされたと考えられている。大陸・半島との間に行われた交流の一端を示す遺物であると言えるだろう。

これまでに、弥生時代の遺物として北部九州を中心に約40点が確認されているが、そのうち対馬出土の製品が最も多く、今回見ることでできた豆靱出土の把頭飾はその中の一つである。方柱付十字形把頭飾に分類され、大きさは長径6cm、短径5cm、高さ5.5cmである。磁鉄鉱製であるため、持つと大きさの割に重く感じたが、残念



なことに重量を計測するのを忘れてしまった。

9月10日から12日まで参加した。6月にも同行した吉田氏が中心となり、金剛院で史料調査と箱の入れ替え作業を行った。到着後すぐに金剛院で先遣隊と合流して調査方針の確認を行い、2日目から本格的な作業を開始した。

筆者は主に大般若経の収納作業を行った。一巻ずつ巻数を記した和紙の付箋を挟んだうえ、薄様で包み、もともと収納されていた茶箱から新しく用意した中性紙の箱へ順番に納めた。皆最初はぎこちなく包んでいたが、数冊包むと次第に慣れてペースが上がり、できあがりの美しさも増してくる。しかしこの日は台風14号の接近により、15時には金剛院撤退を余儀なくされた。強風の中帰り着いたやまむら旅館の庭からは、高波にくもる豆敷浦と、今にも浚われてしまいそうな灯台が見えた。

夕方に予定していた作業が次の日に持ち越しとなったため、夜は懇親会の合間に、残りの大般若経に挟む付箋を作成し続けた。

3日目は台風も過ぎ去り晴天の中、金剛院でのラストスパートである。灯台は変わらず立っていた。屋前には大般若経を納め終わり、午後は並行して行われていた冊子史料の収納を行った。

この日は豆敷の国指定重要文化財、主藤家住宅を見学することができた。

金剛院を出て東へ向かい、案内の標識に従って小径を進むと、石垣の奥に主藤家の趣のある屋根が見える。敷地内には、古くはウマヤや作業場として使われた納屋も建っていた。ご当主がご在宅であったため、幸運にも屋内と、平面図や正面図を見せていただくことができた。

昭和44年に指定を受けたこの住宅は、構造技法から19世紀中頃の建築と考えられている。他の農家に比べて広い土間と本瓦葺きの屋根は家格の高さを示し、梁行3.5間、桁行6.5間という規模は当時の農家で最大であろうとの評価である。

普通、対馬の近世民家にはオモヤ内に作業場としての広い土間がなく、台所表隅にある2畳ほどの空間（ドウジ）が土間になるという独特の間取りを持っている。しかし主藤家では本来のドウジが土間でなく床のある部屋になり、代わりに妻側の梁行全体にわたって土間が作られている（図3-15）。

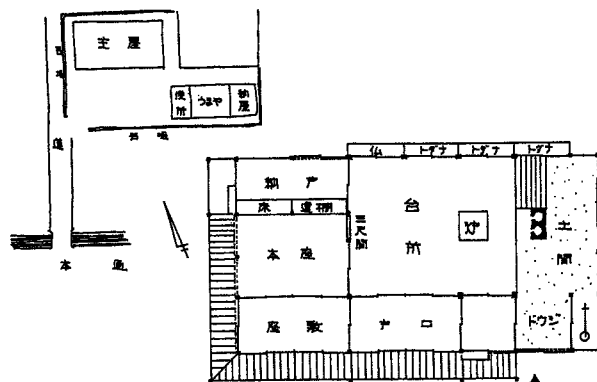


図3-15 主藤家住宅当初平面図  
(長崎県教育委員会1999を一部改変)

屋内に通されて土間と台所から小屋裏を見上げると、薄暗い中に反りを持つ太い梁が縦横に組まれている様子が観察できた。主藤氏が前日の台風のことに触れられ、台風の通り道である対馬で百年以上も変わらず残り続けるほど丈夫に作られているが、やはり気密性・保温性の点では最近の小作りな住宅の方が優れているとおっしゃっていたのが印象的であった。

午後は帰りの飛行機に間に合うように豆敷を出発しなければならなかったため、ご住職に作業完了の確認をいただくという最後の重要な仕事は後に残る調査員に託して吉田氏と筆者は豆敷を後にした。対馬空港で厳原方面での調査を終えた日本史専修の先生方と合流し、東京へ向けて発った。

中世史ゼミの皆とともに現地を歩き回り、聞き取りや、実際に水路をたどって水田の水がかりの調査を行ったこと、そして史料を整理する現場にいて実際の作業に携わったことは、自らの視野を広げさせてくれる最高の経験となった。

また、調査中は多くの住人の方々に親切にいただき、様々なことを教えてもらうことができた。末筆ながら感謝する次第である。

#### 引用文献

- 近藤喬一 2000 「5 特論 東アジアの銅剣文化と向津具の銅剣」『山口県史 資料編 考古1』
- 立平 進 1992 『一長崎県下県郡厳原町豆敷所在一 対馬・豆敷極ぼの遺跡』厳原町教委区委員会
- 長崎県教育委員会 1999 『日本の民家調査報告書集成15 九州地方の民家1』
- (初出：同 1972「第三章 対馬島の民家」『長崎県の民家（前編）』)

## 漁と天道信仰 ——二十一社詣の調査——

山本 隆太郎

厳冬の日本海に浮かぶ対馬。大陸からの強風は、博多に銀世界をもたらした雪雲をも吹き飛ばしたようだ。心配した積雪も無い。豆酺への道に、雪はただ凍れる風に舞うばかりであった。

1月22日、朝8時半。低い雲に閉ざされた豆酺から今日も出漁はない。しかし漁協前では二十一社詣の準備が行われている。大船頭（本石平洋さん）によって用意された御神酒や供物、ひらまさを捌いている。マイクロバスに乗せていただき集落へ。一周し参加者を募り、裏八丁郭の天道法師祠に向かう。参加者は男性7人。それに私と先輩の2人が同行する。寒さゆえ例年より参加者も少ないという。

バスは「鮎もどし公園」から林道に入り、天道法師祠のすぐ側まで行く。鳥居で身に塩を振り合掌。作法を外してはならないと緊張する。真剣に手を合わせている自分に気づく。祠内ではまず囲炉裏に焚火をおこし、コタツも用意する。とにかく寒いのだ。発電機で電灯が付くが薄暗い。次いで正面奥の天道様の扉を開け、ロウソクを灯し供物を並べる。

午前10時前。「そろそろ向こうも始まるな」。多久頭魂神社でも同時間に神事を行う。「こっちが本尊なのだ」と誇らしげに言う。「寒いけどな」とも。読経する本石直己さんが着替える。背に刺繍をほどこした柔道着のような服。その上に羽織・袴をつける。本石直己さんが天道様に向かって正面に座り、他はその後ろに。一同礼の後本石直己さんが数珠をまさぐりながら読経を始める。内容は決まっているわけではなく、その場で天道様と話しながら決めてゆくという。不浄な者がいるとうまくゆかないそうだ。私のような者がいて大丈夫だったのだろうか。幸い「一度ひっかかりかけたが、うまくいった」と後で話してくれた。

神事は30分ほどで終わる。そこまで畏まった雰囲気でもないが、やはり天道様を向き敬虔な面持ちだ。荘重な

読経の声、天道様の扉から吹き込む冷たい風、薪の発する煙、薄暗い灯り、祠内に静かな信仰の場を現出する。

深く礼をして神事を終える。例年は山越え（竜良山腹を越え、浅藻の表八町郭まで歩く）を行うが、今年は道が凍っているため山越えをせず、ゆっくり直会をする。挨拶があるでもなく、地酒が持ち出され、ひらまさが振舞われる。焚火で豪勢なひらまさの「かぶと」を焼く。刺身は銀ホイルの皿に山盛りだ。美味しく頂きながら皆さんの会話に耳を傾ける。

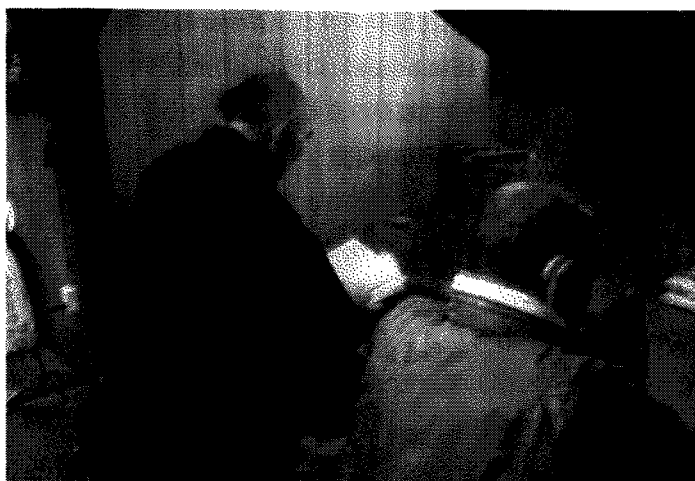
直会で特に天道祭りに関わる話をするわけでもない。漁や漁協内部の話、政治の話など日常の話題だ。しかし、時折天道様のことも話題に上る。年長の本石直己さんたちが天道祭りや天道様に関する話をする。皆もそれを聞くとはなしに聞いている。初参加という若者に、「天道祭りは、こんなものだ」などと言っている。そこには「継承」などという堅苦しさはなく、地域の歴史や信仰と無関係に育った私には目の覚めるような、いい風景に思える。そしてそんな私の感傷とは無縁に天道信仰は続いてゆくのだろう。そう、天道様は音曲を喜ぶという。何人かが自慢の喉を披露した。

この後、多久頭魂神社に行く。観音堂でも直会が行われていた。大船頭さんに御神酒を頂く。ここでも漁の話をついた。その中でさりげなく「板一枚下は地獄」という言葉もでる。危険と隣り合わせということと同時に、自らの仕事への誇りも含まれているようだ。そして、そのような人々にも担われて、天道信仰は続いているのだ。

翌日、空は晴れたが風は強く豆酺は今日も出漁しない。調査で極根方面に向かう。車で1時間。小茂田漁港を通りがかる。灯台が見え、久しぶりの青空に誘われ防波堤の方を歩いてみる。海はかなり遠くまで見渡せるが、うねりは高い。波消しブロックに波が大きな音を立てている。小茂田も今日は漁に出ていないようだ。荒れる海を写真に収め、引き返そうとしたとき、1艘の漁船が港内から外に出てきた。続いてもう1艘、沖に出てゆく。防

波堤の外に出ると小さな船は本当に波に飲み込まれそうになる。しかし漁船はゆっくりと、ゆっくりと冬の海に向かう。青い空と、顔を突き刺す風。船を翻弄する波浪。その中を進んでゆく漁師の姿に現代の天道信仰の一面を肌で感じた。

後記：この二十一社詣は黒田智氏が近世初期の天道祭（御穀迎えの祭）を明らかにしたことをきっかけに注目することになった。当時この祭りは稲作に関するものであった。しかし今回の調査で、現在は漁業の祭りという面が非常に大きいように思えた。近代以降の豆穀において、漁業の存在も無視し得ないことを示すのであろう。



二十一社詣（2004年1月22日、天道法師祠にて）



二十一社詣（2004年1月22日、裏八丁郭にて）

### 火山と湧水

バリは、日本の愛媛県に匹敵する面積5,600km<sup>2</sup>に、およそ300万人の人が住む火山島であり、厚い火山灰に覆われている。島を東西に横断するようにして幾つかの火山が並び、そのうちのバツール（Batur）山と最高峰のアグン（Agung 3,142m）山は活火山である。また、バツールとブラタン（Bratan）の2つのカルデラがあり、そのなかにバツールやブラタン、ブヤン（Buyan）、タンブリガン（Tamblingan）などのカルデラ湖がある。

これらのカルデラ湖は、年平均3,000mm以上の降水量をうけながら流出口がなく、湖岸や湖底から浸透して火山斜面や山麓部で豊かな湧水となって流れ出している。湧水地点は、標高800mあたりからみられるようになり、主要なものだけでも全島で500か所以上、およそ10km<sup>2</sup>に1つの割合で分布していることが樫根（1992）らによって確認されている。地域的には、バツールカルデラの標高300～800mの南斜面と北部中央部の標高100m以下の海岸地域に集中した分布がみられる。

### 水田の分布

湧水からは多くの河流が生まれ、厚い火山灰の斜面を刻み込んだ深い谷がつくられている。これらの河流が水源となり、斜面から平地にかけて一面に水田がひらかれている。すなわち、用水は上流部の谷から取水され、谷と谷の間の尾根の部分に隧道などで導かれ、尾根の部分や谷壁、谷底にひらかれた棚田に供給されており、面的なひろがりをもった水田地域が形成されている。このため、尾根の部分では比較的緩やかな斜面の区画の大きな棚田、谷壁の部分では急斜面の区画の小さな棚田がみられる。しかし、タバナン（Tabanan）とギャニャール（Gianyar）を結ぶ標高100mの等高線以下の地域は傾斜が緩く平地水田になっている。

水田は、Dobby（1950）が示した分布図と、タバナンにあるスバック（Subak）博物館に現在展示されている分布図とを比較してみると、デンパサール

（Denpasar）付近の都市化した地域をのぞきほぼ一致している。その他の地域で50年間の変化は少ないものと考えられる。その分布は、山系の分水界が北に偏っているために、バツールとブラタンカルデラの南斜面に広い集中地域が形成されている。その他、アグン山の南東斜面、南西部のヌガラ（Negara）や北中央部のシガラジャ（Singaraja）の標高100m以下の海岸地域に部分的な集中地域がみられる。

### 棚田景観の特徴

これら水田のうち、島の南斜面では標高100～600mの地域が棚田になっており、その景観はいくつかの特徴をそなえている。①急傾斜の斜面をのぞき、尾根の部分から谷にかけて連続して棚田がひらかれており、広々とした棚田景観が展開している。②区画は、尾根の部分では5～10a、段差も数十cmにすぎないのに対して、谷壁の部分では1aにも満たない小さな区画で、数mの段差のある棚田がみられ、その見事な景観が観光スポットになっている。③法面は土坡であるが、火山灰からなる土壌は粘土化しており、しっかりと棚田を支えている。たえず削り落とされているのか、土が露呈してほとんど雑草がみられない。④谷壁や畦畔にココヤシ、砂糖ヤシ、コーヒー、クローブなどの樹木作物が植えられ、熱帯にある棚田らしい景観要素になっている。⑤用水路沿いには、大橋（2003）らが記載しているように、水利秩序の組織であるスバックの神々を祀る寺院が配置されている。すなわち、スバックの入口にはウルン・ウンプラン寺、スバック内の分水地点にはウルン・スウィ寺、各水田の水口にはウルン・チャリック寺などがある。⑥棚田地域では竹葺きの小屋が点在して分布しており、農耕用の水牛が飼育されている。これらの特徴ある要素により独特の景観が作りだされている。

土地利用は、1年3作が可能であるが、病虫害をおそれて1年2作が支配的である。このため、1年のうち10か月はイネが圃場にあり、青々と生育している時期が長

い。また、作付けが1～2か月ずれるところもあるので、近接した地域で田植と稲刈が同時に行われる棚田景観をみることもできる。

近年、商業的農業が発展し、棚田から樹木作物としてのカカオ・クローブ・ココナツ・コーヒー・ランブータンなどの樹園地やキュウリ・トマト・トウガラシなどを栽培する畑地への転換が少しずつ進んでおり、棚田景観に変化がみられるようになっている。

#### 参考文献

- I. Kayane. 1992. Water cycle and water use in Bali island. Institute of Geoscience University of Tsukuba.
- E. H. G. Dobby. 1950. Southeast Asia. University of London Press LTD.
- 大橋力・河合徳枝. 2003. 「究極の社会制御システムー神々と祭りと棚田ー」. 棚田学会誌 日本の原風景・棚田4号.



バリ島ジャテルイの棚田（2002年4月22日）

### 熱帯ジャポニカ

2003年3月8日、初めてバリ島にやって来て、私がまず確かめたかったのは、栽培されている米の種類であった。州都デンパサールの北に位置するウブドのホテルを朝早く出て街の中心部を抜けると、周り一面に灌漑水路と水田が広がっていた。平地部にある水田には稲を植えていたが、穂をつけた稲は認められなかった。

その後バリ島各地を移動するうちに、田植えと草取りと収穫とが、隣り合せの水田で同時に進められている光景を何度か目撃することになった。田植えがおわった水田でアヒルを遡る隣では、穂首で30cmほどに刈り取って、短く束ねた稲穂の収穫作業をおこなっている。11月初めの雨季に種籾をまき、暖かい冬に成長させて雨季の終わる3月から4月に収穫する稲と、雨季の終わりの春先に種籾を播き、乾季の秋に収穫する稲とがある。春と秋は、稲の収穫と播種の交錯する季節にあたっていた。

1年中高温と日照時間に恵まれている赤道直下の熱帯では、1年に3回の稲作が可能である。しかし稲を連作すると土地が痩せるために、稲の3期作はおこなわず、豆やトウモロコシなどの野菜を作り、時には休閑を挟むという。

ちょうど稲刈りがおこなわれていた水田で観察すると、稲の草丈が50~60cmと低く、芒（のげ）は短く、籾は白黄色で細長い。期待したブルと呼ばれる熱帯ジャポニカ（ジャワニカ）ではなく、収量増産のために作付けが奨励されているインデイカのようなものである。刈り取り方法は、根刈りではなく穂首摘みか、茎の上部で刈り取る高刈りであった。

漢代の中国南部、ドンソン文化の東南アジア、弥生時代の日本列島では、水田の稲は穂首摘みで収穫されている。そのための収穫具として石包丁、貝包丁、鉄刃収穫具などが遺跡から出土している。また貯蔵のための高床倉庫や除秆、脱穀用の堅杵・堅臼なども、この地域に共通した貯蔵施設や加工用具である。道具ばかりでなく傾

斜地の棚田や谷水田の立地、灌漑溝や分水堰などの生産設備にも共通点が認められる。

最近の育種学の研究によると、アジアのイネは、インデイカ、温帯ジャポニカ、熱帯ジャポニカの三種に大きく分けられるという。熱帯ジャポニカは、インドネシア在来のブルと呼ばれる長い毛をもつ品種と、東南アジア大陸部やフィリピンに分布する無毛のグラボラスとに分かれる。

さらにイネのDNA分析によると、日本の古い栽培段階にあたる縄文時代の稲は、熱帯ジャポニカであるという分析結果が示されている。また弥生時代や古墳時代の遺跡から出土する炭化米の中にも、温帯ジャポニカに混ざって熱帯ジャポニカが残っているという。熱帯ジャポニカはブルあるいはジャワニカとも呼ばれるように、インドネシアの島嶼部に分布する稲であり、バリ島もその分布範囲に含まれている。

そのほかに種子島や対馬には、芒が長くワインレッドの花が咲く赤米が現在も栽培されている。種子島の茎永に伝わる宝満尾神社の赤米、対馬酸豆に残る赤米も熱帯ジャポニカだという。現代の南の民族例と北の民俗例とをつなげてよければ、バリ島と種子島や対馬の稲は、熱帯ジャポニカというひとつの糸で結ばれることになる。

さらに縄文から弥生、古墳時代の米に熱帯ジャポニカが含まれる事実と、民俗（族）例の熱帯ジャポニカをつなげてよければ、東南アジアの島嶼部からポリネシア、フィリピン、台湾、八重山から南西諸島を経由して、九州にまで達する稲の伝来ルートが想定できる。

稲作関連以外にも南海産の宝貝や夜光貝が、中国南部から中国内陸部にまで運ばれ、同じように南西諸島を通じて日本列島や朝鮮半島にまで南海産の貝がもたらされている。ミクロネシアから中国南部や南西諸島を通じた海の道が、古い時代から存在したのであろう。このルートは南から北に行くばかりではなく、北から南にも辿られたはずである。

考古学的な発掘調査では、南西諸島の遺跡からはいまだに赤米が発見されていない。しかし目的意識を明確にして発掘し、積極的に分層調査を行ない、土壌サンプリングや水洗選別のフローティング、花粉分析、プラントオパール分析、DNA分析などを取り入れれば、いつかは南西諸島で熱帯ジャポニカをとらえることができよう。海のシルクロードは、熱帯ジャポニカなどを含めた作物や栽培技術の探究によって、中世や古代からさらに遡る可能性がある。

#### 灌漑地下水路

バリ島に着いた翌日、棚田の灌漑水系システムの調査をおこなった。アグン山の西方バツール山の頂上近くにあるカルデラ湖を目指した。バツール湖は水源であり、そばに水の女神を祀るバリヒンズー教の壮大な寺院が建てられている。湖水はいったん地下にしみこんだあと、ミネラルや養分をたっぷり含んだ水となって、山腹で溶岩層の間に湧き出し、溪谷となって火山灰地を深く削りながらながれ下る。この泉源にも水の神を祀る寺院があり、用水を配分する分水堰の近くにも灌漑組織スバックの小寺院がある。水田の取水口には、農民の水を祀る小さな祠が作られている。用水に沿った数多い寺院や祠は、水が信仰と共に存在することを示している。

バリ島には、等高線に沿ったライステラス（棚田）が整然と営まれており、祖先が水稻農耕民であったわれわれの心を和ませる。トレッキングで見てまわった範囲でも、苗代や草取り、鳥追いの鳴子や案山子、屑藁を燃やす煙、家の周りの屋敷林や野菜畑、畑の周りの竹藪から森が山までつらなっている。昭和30年代以前ののどかな日本の農村風景を呼び覚ます。水田の周囲に椰子の木がなければ、バリ島にいる現実を忘れてしまいそうである。

これらの水田は、類まれな水田管理と灌漑技術によって支えられている。灌漑用水は、湧き水や上流の貯水池から幹線水路を導かれ、草堰などの分水施設によって細かく枝分かれしながら各水田に給排水される。水路が谷や道路、他のスバック水路と交錯すれば、木樋や水道橋、サイフォンなどによって越えていく。その灌漑技術には目をみはるが、さらに驚いたのは山をくりぬいたトンネル水路の技術である。

山や丘陵越しに水を送る場合、等高線にそって水路を掘り迂回しながら水を流すほかに、丘陵下に地下トンネ

ルを水平に掘りぬいて、水を供給する方法がある。地下トンネルが長い場合は、ところどころに竖井戸を掘って、土砂の抜き取りや明かり取りにするという。トンネル水路は、長いものでは数キロもあり、竖井戸は100mから200mおきに掘りぬかれている。トンネル水路を通すというアイデアや掘削技術は、バリ島で独自に発生したものであろうか。水利博物館の原始的ともいえる簡単な測量用具や農具を転用した掘削道具をみると、中国新疆トルファンの地下水路（カレーズ）の測量用具や掘削道具ときわめてよく似ている。

バリ島のトンネル水路は、自生でなければ島外からのアイデアや技術によって作られたものとなる。その候補はイラン、イラクでカナートと呼ばれ、新疆トルファンではカレーズとよばれている陸のシルクロード沿いの地下灌漑水路であろう。内陸アジアの乾燥地と熱帯湿潤地のバリ島とでは、気候帯や水源の違い、可耕地や土質の差異などが存在するが、トンネルを素掘りにするなど共通点も多い。いつからバリ島で灌漑地下水路が掘削されるようになったかが問題である。

碑文によると、水利施設の石職人やトンネル水路の職人についての記述が、896年には見られるという。また10世紀から11世紀の碑文には、灌漑組織スバックの古称が記されている。そうすると9世紀末から10世紀前半には、トンネル水路が掘られたと想定できる。

西アジアはアッバース朝、インドはバーラ朝、中国では唐代にあたる時期である。東西交渉が盛んな時代で、西アジアからインドを経由した海上ルートで中国にまで商品や技術が伝えられている。西アジア起源のトンネル掘削技術や測量方法が、海上ルートを経由してバリ島に伝来した可能性も十分にあり得ると言えよう。バリ島に存在するトンネル水路の現地悉皆調査をおこなって、その特徴や掘削方法、起源や展開をさぐれば、スバックの歴史や水稻社会の変遷をいっそう明らかにすることが可能となろう。

#### 弦楽器ルバーブ

バリ島は、祭りと儀式の島でもある。祭りには歌と踊りが付き物であり、舞踊、演劇に伴うガムランの演奏がある。3月10日にガムランの演奏と舞踊をウブドで見学した。宮廷舞踊のレゴン・クラトンや恋愛劇、王子・王女の舞踊、戦士の踊り、少女の舞いなどがあった。少女



の独特な化粧が印象的だったが、インドの生き神様・クマリと同じ化粧法だと気がついた。西からの影響は、化粧方法にまで表れている。

ガムラン演奏で使う楽器は、管楽器と打楽器が多く、竹や青銅で作られている。竹筒で作った笛を吹くスリン、竹筒を叩くグンタン、鉄琴のような鍵盤楽器、銅鼓のように大きな銅鑼、シンバル、太鼓のクンダンなどがある。唯一の弦楽器がルバープである。

ガムラン演奏の中にルバープを使う演目ガムラン・アルジャがあった。スリン、クンダン、グンタンなどに加わって、一人の奏者が弦楽器を使う。それが二本の金属弦を弓でひくルバープなのである。見ていると演奏前にルバープで音程をあわせ、他の楽器の調律をしていた。合奏中は伴奏したり、ときどき繊細な音色でメロデーをかなでる重要なパートを受け持っている。この弦楽器は、西アジアに起源があり、陸のシルクロードであるオアシスルートを通じて中国にまで運ばれている。疏勒楽や龜慈楽、胡旋舞などとともに唐の都・長安に運ばれ、やがて新羅に伝えられたあと海を越えて日本にまでもたらされた。舞踊や奏楽は雅楽となり、楽器や面は正倉院に残されている。いっぽうでは西アジアから海路を通り、イラン系商人によってインドを経由してバリ島にもたらされたのであろう。渡来した時期ははっきりしないが、海のシルクロードを通じて、バリにもたらされたことは確かである。

#### 海上がり陶磁器

リゾートホテルのロビーの床には、強化ガラスで作った展示ケースが埋め込まれていた。その中にはインドネシア各地から集められた陶磁器が、グループごとに配列されている。その多くに貝が付着した痕跡があり、これ

らが海中から引き上げられた海上がりの遺物であることを示している。古いものは、9世紀の唐代・越州窯の青磁碗や湖南省長沙窯の鉄斑文水注に始まり、宋代耀州窯の青磁碗、皿、14世紀の元代・竜泉窯の青磁盤、景德鎮や竜泉の白磁や染付けなどがある。東南アジアのスワンカロック窯の中国磁器を模倣した青磁や染付け、ベトナム染付けや色絵陶器などが展示されていた。詳しい出土地や発見状況は不明であるが、東南アジアの島嶼部で海中から引き上げられた遺物である。

古いものは8世紀の唐代越州窯から新しいものでは15世紀のスワンカロック製品まで出土している。いずれも海のシルクロードによって東から西へと運ばれようとした貿易陶磁器である。中国商人から東南アジアの人々の手をへて、さらに西のインドやアラビア、アフリカにまでもたらされる交易商品の一部である。トルコのトプカプサライ宮殿やイランのアルデビル寺院、カイロのフスタート遺跡などから類例が多数出土している。今回の調査行で、最も新しい時期に属する海のシルクロードの存在を示す品々である。

同じ頃にスンコロクやルソン壺などの焼き物、紫檀や白檀などの木製品、胡椒や肉桂などの香辛料が、海のシルクロードを東に辿って琉球から朝鮮、博多や堺、京へと運ばれていったのである。

バリ島を含む東南アジアの島々から、八重山や南西諸島を経由して、九州や本州にさまざまな産物や製品、文化や技術が、人々の往来に伴ってもたらされたのであろう。その歴史を、海上のシルクロードという視点から眺めてみた。そこには人類の誕生以来続けられてきた長い交流の歴史が、現代にまでつながって認められるのである。

## ii バリ

## バリの闘鶏

清水 克行

バリ島を訪ねるにさいして、私が心ひそかに愉しみにしていたことのひとつに〈闘鶏〉があった。バリの闘鶏については、C・ギアーツの『文化の解釈学』のなかで印象的な叙述がされていることでも有名だが、じっさい、バリ島の人々の闘鶏への熱中ぶりは半端なものではない。それは決して一部の愛好家や営利業者のものではなく、ほとんど島の全成人男子共通の娯楽となっているのだ。かれらはそれぞれ自宅に闘鶏用の鶏を飼っているが、食肉用・食卵用のふつうの鶏が野放して飼育されるのと違って、それらは1羽ずつに大事に専用の籠のなかで飼われている（いまでも島内の集落を歩けば、どこでも軒先で日光浴中の籠にはいった闘鶏用の鶏を見ることができる）。儲けがともなうために政府はそんな闘鶏を法的に禁止してはいるらしいが、祭礼のときのみ3回までの開催が許されているとも聞く。しかし、現実には各祭礼で闘鶏が3回だけで終わるなどということはない話で、また祭礼も無数の寺院や村落で日々開催されているため、ほとんど法律は守られていないのが実状のようだ。人々は、月1回ぐらい開催される自分の村の祭礼に自慢の鶏を持参するほか、自村以外の祭礼にも自由に参加して、日々闘鶏を行っている。さらには祭礼以外でも、練習のために個人々々で各自の鶏を闘わせることもある。

2003年3月11日昼、ウブドのペナタラン・サッシ寺院で、偶然にも私は念願の闘鶏を見ることができた。寺院裏手の約20メートル四方の広場では、闘鶏場を中央にして、それをとりまく200人を超える人だかりがあり、さらにその外側には古い小賭博や軽食をする小屋が立ち並んでいた。ここに来た人々は、闘鶏に飽きると各々の小屋にはいり、小屋に飽きるとまた闘鶏に参加するという流儀のようだ。女性や子供の姿はなく、外国人も私一人だけのようだった。闘鶏場の中央では、審判1名と、2羽の鶏をそれぞれけしかける若者2名、賭け金を募る係1名と、その助手として賭け金を徴収する若者数名、が見られた。試合の前には賭け金を募る係の男が観衆に

双方の鶏への賭け金を大声で募り、それに応じて観衆が自分の賭ける鶏と賭け金を思い思いに叫ぶ。あたりは突如としてけたたましい熱狂状態になるが、主催者側には誰がどちらに幾ら賭けたか、すべて把握できているという。試合は双方の賭け金が釣り合わないとはまらない。いよいよ賭け金が釣り合うと、試合開始だ。双方の鶏には左足に剣がつけられ、どちらかが死ぬまで闘わせられる。勝敗がつかない場合、2羽の鶏はひとつの狭い籠に入れられ、さらに勝負を強制される。文字通りのデスマッチというわけだ。私も賭けにこそ加わらなかったが、思わず人ごみに分け入って勝負の行方を注視する。しかし、いざ闘いがはじまると、混乱のなかで前列の男が立ち上がったたり、後列の男たちが前に乗り出してきたり、肝心の闘いの模様はほとんど見えない。けっきょく、わけのわからないまま1分たらずで勝負はつき、気づいたときには1羽の死骸が地面に横たわり、興奮さめやらぬ勝った鶏は羽根をばたつかせながら、その周囲を狂奔していた。賭けに負けた観衆は納得いかない様子ながらも、きちんと相応の賭け金を放り投げ、やがて周囲の小屋に消えてゆくのが、私には不思議だった。負けても賭け金を踏み倒してそのまま逃げてしまう観衆はいないのだそう。負けた鶏はすぐに料理にまわされ、勝った鶏も負傷していることが多いので通常は二度と試合には出さないという。賭けの勝者には賭け金の倍額が支払われる。しかし、なんでも、じっさいに勝者に支払われる金額は賭け金の2倍ではなく1.8倍なんだという。面白いことに、残る2割分は審判などへの日当を差し引いた後、会場となった寺院に寄進されることになっているのである。なにを隠そう、じつは闘鶏は単なる賭け事ではなく一面で宗教行事でもあるのだった。賭けに負けても踏み倒して逃げる者がいないのも、政府の禁止にもかかわらず根強い島民の人気を誇るのも、あるいはこのことと関係があるのかもしれない。賭博と信仰の未分離…、鶏には気の毒だが、なんともバリ島らしい話ではないか。

—	88	87	86	83	82	81	80
未詳	大正13	大正11	大正10	(近代?)	(近代)	(明治)	(近代)
	1924	1922	1921				
	11	1	10		2	8	8
	1	1	15		4	20	15
四「題箋」 (□□□□經卷二百三十)	頼母子講売渡証	(嬉野大火につき義捐金募集)	財産調査簿	(什物書上下書)	(金剛院畑登記申請につき)	記(住職試補訓導講義拝命書提出につき触)	(昇級願につき書状)
	永屋平吉	真言宗肥前法務支所	金剛院		堀司法代書人	長崎県真言宗中教院延命寺	藤村念塩
	堀田現隆殿	支所下寺院御中			堀田住職殿	対州朝元寺殿	堀田現隆殿
1枚	1通	1枚	1冊、 堅帳	1通	1通	1通	1通
					黒印	黒印	
題箋のみ。	野紙「長崎県地方裁判所所属司法代書人用」。	印刷物。			野紙「長崎県地方裁判所所属司法代書人用」。		
近56	近36	近38	近47	近42	近37	近48	近33

79	78	77	76	75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65
(江戸期)	(明治)	(明治)	明治33	明治32	明治25	明治33	明治20	明治18	明治16	明治16	明治13	明治12	明治8	明治7
			1900	1899	1892	1900	1887	1885	1883	1883	1880	1879	1875	1874
		8	11	11	6	1	2		10	2	1	10	1	1
		10	16	10	13	3			12	3		21		13
(金剛院住職得度書上)	御判書調	長崎県対馬国下県郡豆酸村金剛院	(教師試補任命証)	(補教師試補証)	約定履行事件ノ訴状	(住職継目証)	共有墓籍台帳	地所譲渡ニ付地券御書換願(下書)	(御廟前三箇条練行開白証)	未銀取立帳	(交衆令許証)	(黄色以下三色許可証)	記録	(大教院よりの書状)
		金剛院□坊堀田現明、同院檀戸惣代阿比留与次右衛門、ほか2名	真言宗高野派管長大僧正原心猛	真言宗長者大僧正原心猛	訴訟代理人倉成只之助	高野山準別格本山成福院住職権大僧都藤村密幢		譲渡人何兵衛、譲受人金剛院代理何兵衛	高野山金剛峰寺住職大教正獅岳快猛	金剛院	金剛峰寺教議所	総本山金剛峰寺	金剛院	大教院
			堀田現明	堀田現明		金剛院堀田現明		長崎県厳原支配長長崎県右書代官小野修一郎殿	堀田現明		成福院衆坊小嶋現明	小嶋現明		
1通	1冊、 縦帳	1冊、 縦帳	1通	1通	1冊、 縦帳	1通	1冊、 縦帳	1通	1通	1冊、 横帳	1通	1通	1冊、 縦帳	1冊、 縦帳
		黒印	黒印	黒印	黒印	黒印	黒印		黒印		黒印	黒印		
寛明、光円、現明の得度年月日の記録。	永享9年から文久3年まで判物26通の書上。	神社明細。			田耕作をめぐる訴訟。		末に墓地改葬願あり。						寺明細書あり。	
近49	近21	近20	南蔵近8	南蔵近6	近23	南蔵近10	近55	近43	南蔵近7	近46	南蔵近5	南蔵近9	近44	近45

64	63	62	61	60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50
明治6	明治3	明治3	(未詳)	(未詳)	(江戸期?)	(江戸期)	(江戸期)	(江戸期)	(江戸期)	(江戸期)	(江戸期)	(天正4)	(江戸期)	(江戸期)
1873	1870	1870												
11	10	7									11	3	11	10
9	23	17									6	15	5	
(還俗姓名改称届出につき筆墨紙料要求書)	(寺院明細)	(寺院明細)	心経祭文	(3人分年忌書上)	(宗貞国業績書上)	(三光寺兼帯につき書状)	(東月寺塔移転など4条書上)	御判物之覚	(金剛院由緒)	口上覚(被官利吉悪行につき訴書)	(願書、前欠)	(永泉寺開山などにつき)	(寺院大破につき普請願)	口上覚(寺院大破につき普請願書)
国分寺役寮	金剛院現住寛明	金剛院						金剛院	現住寛明		国分寺播州		金剛院寛明	金剛院寛明
金剛院、永泉寺											寺社御奉行所		国分寺	国分寺
1通	縦帳1冊	縦帳1冊	横帳1冊	1通	1通	1通	1通	1通	縦帳1冊	1通	1通	1通	1通	1通
黒印											黒印		黒印	
						境内図あり。			文久3年写し。	下書。	差出、宛名のみ。			
近31	近32	近50	近41	近35	近34	近40	近30	近26	近7	近4	近2	近1	近51	近52

49	48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36-2	36-1
(江戸期)	(江戸期)	(江戸期)	(江戸期)	慶応2	慶応2	元治元	文久3	文久3	嘉永6	天保14	天保10	天保4	天保4	天保4
				1 8 6 6	1 8 6 6	1 8 6 4	1 8 6 3	1 8 6 3	1 8 5 3	1 8 4 3	1 8 3 9	1 8 3 3	1 8 3 3	1 8 3 3
9	6	2	1	9	7	9	9	5	11	2	7	4	4	4
14		4	14	21		13	15			15	23	23	9	
(判物授与につき招請達)	口上覚(寺田耕作に下人を使う件につき)	(御灯籠の儀につき書状)	御端書之写(本堂屋根葺替料徴収につき)	御達之写	御達之控帳	御判順列覚帳	(宗義達判物)	御判物覚	御条目	(宗義和判物)	(宗義章判物)	法印御免許之事	授与伝法灌頂職位事	秘密伝法灌頂秘印
国分寺	金剛院寛明	土屋相模守	御郡支配	国分寺役寮	金剛院	金剛院寛明	義達	寛明金剛院	国分寺	義和	義章		伝灯大阿闍梨来応	伝灯大阿闍梨来応
金剛院	国分寺	宗対馬守様	寺社方兼帯与頭衆中	金剛院			金剛院住持へ		金剛院	金剛院住持へ	金剛院住持へ	法印密隆		授与密隆
1通	1通	1通	1通	1通	縦帳1冊	横帳1冊	1通	横帳1冊	縦帳1冊	1通	1通	1通	1通	1通
黒印		花押					花押		黒印	花押	花押	花押		花押
	下書。	裏面は花押の練習。												
近53	近27	近3	近39	近5	近6	近29	近17	近25	近28	近14	近10	1近A 外陣脇	4南蔵 12近	4南蔵 1近

36-0	35	34	34	33	32	31	30	29	28	27-2	27-1	27-0	26-4	26-3
	文政 10	文政 8		文政 7	文政 5	文政 4	文化 14	安永 7	宝暦 12	明和 4	明和 4		明和 4	明和 4
	1 8 2 7	1 8 2 5		1 8 2 4	1 8 2 2	1 8 2 1	1 8 1 7	1 7 7 8	1 7 6 2	1 7 6 7	1 7 6 7		1 7 6 7	1 7 6 7
	6	6		5	閏 1	3	7	7	9	3	3		3	3
		25			24	21	18	9	11	14	14		14	14
(包紙)	御国地方之法	権少僧都免許之事	(包紙)	金剛院記録	覚(宗旨取調)	権律師御免許之事	(宗義質判物)	(宗義功判物)	(宗義暢判物)	伝法許可密印	伝法灌頂阿闍梨職位事	(包紙)	(両部灌頂許可書)	許可印信
	寛明拜			密隆	山田半左衛門	右大臣大僧都亮恕	義質	義功	義暢	大阿闍梨権大僧都掌道	伝授大阿闍梨権大僧都掌道		伝授大阿闍梨権大僧都掌道	大阿闍梨権大僧都掌道
		権少僧都密隆			早川右膳ほか3名	権律師密隆	金剛院住持へ	金剛院住持へ	金剛院住持へ	金剛仏子栄隆				金剛仏子栄隆
	横帳 1冊	1通		縦帳 1冊	1通	1通	1通	1通	1通	1通	1通		1通	1通
		花押			黒印	花押	花押	花押	花押	花押	花押		花押	花押
ウハ書「伝法中」引「密隆」36は「大型資料」函に別置。目録は「絵画類」の下に付す。			ウハ書「法印密隆御房 右大臣大僧都亮恕奉」。							「大型資料」函に別置。	「大型資料」函に別置。	ウハ書「伝法灌頂 三」憲「栄隆」。「大型資料」函に別置。	25〜27は「大型資料」函に別置。	25〜27は「大型資料」函に別置。
南蔵近4	近24	1外陣脇 近C	1外陣脇 近B	近9	近22	2外陣脇 近A	近15	近16	近13	3南蔵近 2	3南蔵近 1	南蔵近3	2南蔵近 4	2南蔵近 3



# 金剛院所蔵近世・近代文書目録

※備考欄に特に注記のない史料は「古文書2」箱に収納。

No.	和暦	西暦	月	日	史料名	作成	宛先	形態	印章	備考	旧No.
26-2	明和4	1767	3	14	伝法許可密印	伝授大阿闍梨権大僧都 掌道		1通	花押	25、27は「大型資料」函に別置。	2蔵近2
26-1	明和4	1767	3	14	伝法灌頂阿闍梨職位事	伝授大阿闍梨権大僧都 掌道		1通	花押	「大型資料」函に別置。	2蔵近1
26-0					(包紙)					ウハ書「伝法灌頂血脈」三 憲一 栄隆。「大型資料」函に 別置。	南蔵近2
25-2	明和4	1767	3	14	許可印信	大阿闍梨権大僧都掌道	金剛仏子栄隆	1通	花押	「大型資料」函に別置。	1蔵近2
25-1	明和4	1767	3	14	(両部灌頂許可書)	伝授大阿闍梨権大僧都 掌道	大法師栄隆	1通	花押	「大型資料」函に別置。	1蔵近1
25-0					(包紙)					ウハ書「許可」三 憲一 栄 隆。「大型資料」函に別置。	南蔵近1
24	宝暦2	1752	11	15	(宗義審判物)	義蕃	金剛院住持へ	1通	花押		近19
23	享保18	1733	9	15	(宗義如判物)	義如	金剛院住持へ	1通	花押		近11
22	享保4	1719	5	1	(宗方誠判物)	方誠	金剛院住持へ	1通	花押		近12
21	宝永6	1709	1	1	(宗義方判物)	義方	金剛院住持へ	1通	花押		近18
20	宝永2	1705	10		金剛院領坪付帳	金剛院		1冊、 縦帳	黒印	大正9年の後筆あり。	近54
19	元禄10	1697	3		金剛院本尊并什物覚	金剛院現住栄山		1冊、 縦帳		末尾2丁は享保11年4月に寛海 によって付け足された。	近8

金剛院

国分寺

御附紙

見届願之趣、無余儀相聞候ニ付、久和村御立山内、不御用立節松式本被成下、大工人夫之儀者、酸豆村類焼之者共建家最中ニ相聞候間、右造作済之上、一口為寄近郷加替被仰付候間可被申渡、以上

天保元庚寅四月

右之通被仰付候間可被得其意候以上 国分寺

四月

金剛院

④ 寺院明細 (明治二八年) №77

〔内容〕 近代に作成された金剛院の明細書。明治以降の金剛院の様子が分かる。また巻末には本堂、大師堂 (および拝殿)、境内外の見取図がある。

(表紙)

〔長崎県対馬国下県郡酸豆村

金剛院

長崎県対馬国下県郡酸豆村字琴股

成福院末 真言宗

金剛院

一本尊

阿弥陀  
大日如来

一草創之年号及理由不詳ト雖、当初長安寺ト号タルモ、大同二辛卯年弘法大師對馬國ニ渡航シテ、當寺ヲ拡張シ、寺号ヲ金剛山金剛院ト改称シ、以テ

中古ノ開山タリ、寛元四丙午年正月惟宗右馬頭判

官重尚入国之際、當寺ニ着シタリト云、宝徳年中

當寺住職良寛宗氏ニ功アルヲ以、中興ノ開山トシ、

宗貞盛ヲ開基トシ、宗氏代々ノ祈願所トナリ、同

氏ヨリ若干ノ土地ヲ附シ連綿セリ

一金剛院 間口七間 奥行四間 建坪式拾八坪

建設之年月不詳ナルモ、貞享二乙酉年宗氏ヨリ改

建々設修繕等宗氏之負担ナリシモ、明治維新以來

之ヲ廢ス

一境内仏堂 一字 四間角 建坪拾六坪

安置弘法大師

脇主 不動明王 阿弥陀如来 愛染明王

貞永元壬辰年九月十八日 国主 義調改建

宝徳二戊辰年十一月廿八日 国主 宗判部少輔貞

延宝四丙辰年陽復之月 国主 宗義真再建

弘仁二辛卯年弘法大師對馬ニ渡航シ、當寺ニ於テ

自己ノ像ヲ木割シ、安置シタルモノナリ、延宝四

丙辰年彩色スト云、改建修繕等宗氏ノ負担ナリシ

モ、明治維新以來廢ス、陰曆三月二十一日ヲ縁日

トシ、村中ノ人民ハ業ヲ休ミ參詣ス、住職ハ未明

參籠シテ、終日勤行ヲナス、遠近ノ信徒競テ參詣

ス、毎月二十一日ニハ村内ノ信徒參詣スルコト夥

シ、亦開帳ト称シテ住職一代乃至大師年回ニ相当

スル年開扉シテ、拝觀ノ徒エハ清淨之法行ニ現像

ヲ拝スルコトヲ得セシム

一大師拜殿 一棟 式間五分角 建坪六坪式合五勺

明治二十四年二月信徒カ拾六名ヲ以新設建築ス

一境内反別々反々敵拾四坪 民有甲一種 地勢平坦

一永統基本財産

田畑宅地山林

此価格金六百元

此收入金六拾円

住職並総代人ニ於テ管理シ、諸納金其他建物等惟

持構内修繕ノ費途ニ宛リ

一大般若經 壹部

宗貞盛寄進

十六善神唐絵 壹幅 幅一尺三寸 長四尺三寸

宗貞国寄進

仏菩薩唐絵 壹幅 幅一尺一寸五分 長四尺三寸

宗貞盛寄進

犀之香炉 壹個

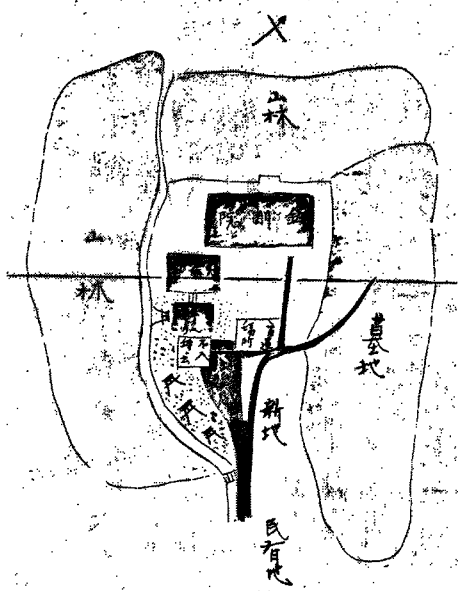
宗義智寄進

地質陶器 高サ四寸 長六寸三分

製作人不詳

(以下、抹消部分及び歴代判物写しなどあり、略)

境内外の見取図 (寺院明細)



付候御場所ニ候処、先之住持記録等無之、然処大破ニ付願出候処、先格無之候間難被仰付由ニ付、精々手を尽願度候、依之拙僧代々記録致置候事

覚

一大師堂及大破依頼来ル、早其御修補被仰付候事

寛政三辛亥十二月三日

覚

一大師堂本堂両屋根共ニ及風損ニ、取繕方御見分之

上御繕被下依頼

一葺茅六百束 一繩式千五百尋 一中拵八百本

一道木五拾本 一縁竹六拾本 一かすら十

一楠厚板八枚 一檜材木老丁 一五寸釘式拾本

一手鑄式枚 一人夫九拾人 一大工拾八人

見届候、当今御普請所多有之候砌、中々御手届難事ニ候得共、願之趣御打捨難被成候間、此節右之品々御手当被下置、尤府内大工差支ニ付、大工人夫共ニ郷方之差出し、賃銀飯米御渡被下候間、村役人立会諸事厳密ニ令仕配、御為ニ相成候様取計候様被仰付候事

文化元甲子三月五日

覚

一大師堂屋根替依頼 文政七末年ニ有之

一本堂屋根替同年ニ有之

口上覚

当時大師堂之儀追々及破損居候上、去ル戊子年乙丑

之風雨打続大破仕候間、任御旧例御修補被仰付候様奉願上候処、右之先形無御座候間相見へ、願面被為及御返却ニ相成候段、奉畏罷在候然処、当寺申伝へ之儀奉添御聞候茂恐多御座候得共、右大師堂尊像之儀者、則大師御入唐之砌御自作ニ而御預御残被遊、当所へ御安置候処、御当代様ニ至義盛様御重願之御旨ニ付、尊像彩色被仰付、右之御堂へ御安置被遊、則御判物前之通大師堂領御寄附、御武運長久之御祈禱申上候様被仰付候として、追々御堂御修補・屋根替等願面之通被仰付候段、其時分々代々記録仕御堂へ入置候処、大風雨之節雨漏ニ相成、自然くと汚損候旨相聞へ、当寺之不幸無限仕合ニ御座候、夫ニ付旧古之儀ハ詳ニ難申上候得共、昨今ニ至寛政三辛亥年御堂大破、依頼十二月三日来早春御修補可被仰付旨之御事ニ而、則御修補被成下、其後文化元甲子年御堂風破ニ付、三月五日屋根替御修補等被仰付、且近年ニ至屋根替被仰付、寺中ニ至難有奉存罷在候得共、戸かべ等大破之儀ニ御座候得共、風雨難凌当惑之仕合ニ御座候、乍併当今之御時勢柄是等之儀奉再願之段恐多奉存候間、当節者勸化奉加之助力を以修補仕度奉存候処、御国中之大造ニ茂相成り、其上昨己丑年不作ニ付而ハ田舎方之難儀目前ニ御座候ニ付、是以難奉願上成成ニ取繕置度様ニ相見候得共、前條之通り大破仕居候事故、風雨之節雨濡雨等ニ而尊像を穢し候段、終始ニ取り恐多、朝夕心を痛仕罷在候、因茲心願難默止不願恐奉再願候条、何卒被為 御憐愍願之通御修補被仰付被成下候ハ、宗派之面目不過之、愚僧ニ至重疊難有仕合可奉存候、是等之趣御序之刻可然被仰上願之通被仰付被下候様

御為成偏ニ奉願候、以上

天保元

寅ノ正月日

金剛院

国分寺

御附紙

紙面之趣見届候、大師堂追々及大破候処、修補難為自力御普請被下候様与之申出ニ候得共、御至陰中難手届候事故、近例之通屋根葺替人料与して米壹石三斗式升御渡被下候間、其余之人料者作略を以相償ル、此旨可被申渡候、以上

天保元庚寅三月廿九日

国分寺

金剛院

口上覚

当寺大師堂大破ニ付、御修補之儀奉願上候処、御国凌之御中ニ付、屋根葺替之例ニ准し、飯米且竹大被成下与之御儀、難有仕合奉存候、然処先般茂奉願上候通、大師堂之儀以前御修補被仰付候御事ニ御座候得者、自力を以修補仕候儀、寺中ニ取り難義千万ニ御座候得共、御懇達之御旨恐多奉存候間、当節者御達之通自分作略を以修理仕候儀奉畏候、併当寺之儀、立山所持不仕候間、板木一切無御座基以当惑仕罷在候、就夫御手入之義、再奉願上候段恐多奉存候得共、何卒以御憐愍近村御定山内御不用之節松式本御渡被成下、且大工人夫ニ者農間を以郷加替ニ相成候様ニ被仰付被成下候て、夫を土台ニ修補仕重疊難有仕合可奉存候、右之趣御序之刻可然被仰上、願之通被仰付被下候様御執成偏ニ奉願候、以上

天保元庚寅三月

一大黒 木像長サ七寸

一大日如来 木像長サ尺

右六体作者不相知

一大般若經 老部 貞茂様・貞盛様御寄進

一十六善神唐絵 一幅 貞国様御寄進

一十式天唐絵 拾二幅 正盛様御寄進

一六観音唐絵 六幅 貞茂様御寄進

一仏菩薩唐絵 二幅 貞盛様御寄進

一愛深明王掛物 二幅 鬼形部様御寄進

一蓮唐絵 一幅 義智様御寄進

一祇園精舎唐絵 一幅 殷豆住小嶋民部寄進

一天地唐絵 一幅

一寿老人掛物 一幅

右之式幅者寄進主不相知

右之掛物式拾七幅、天和式閏戌年御修覆被遊

一唐之鏡 老面 一鷗様御寄進

一犀香炉 老 義賢様御寄進

一鎧 老面

右者相国様御病氣ニ付、護摩御執行被遊候節、

從 義成様御寄進

一鏡鉢 老頭 殷豆住小嶋民部寄進

一鰐口 老掛

一仏具 老面

右者先住良寛求之

一花瓶 老

一護摩道具 老通

右者正五九月御煤掃之節御祈念被仰付候ニ付、

從御先祖様御寄進

一小御所 貞享元甲子歳番柳左衛門成時寄進

一金之椀 式膳

府内 領主 斎藤与七兵衛

一從御先祖様被下置候被官屋敷

八軒人数式拾式人 内男拾式人

同女拾人

一寺領老間〇四寸

一金剛院隱居所 宝泉坊 寺領老尺〇七分

元禄十丁丑歳

三月四日

金剛院

現住栄山

「テラナウ」  
定朝ノ作

大目

一本尊薬師座像 但シ内ニ舍利五粒入置ク 老体

一不動座像 但シ内ニ書附入置ク 老体

寛海願力趣意有建立之長サ式尺五寸

一阿弥陀座像 老体

行基菩薩ノ御作、丸木造り、古来宝泉坊ニ阿弥陀

ノ像有之由聞伝候へ共、栄山代ニ紛失仕候間、彼

ノ坊ノ本尊ニ可致旨ニて、豊崎郷ニ召請仕置ク

一涅槃像 一幅

一過去帳 但シ見台共ニ 一卷

一金磐 但シ台共ニ小嶋権七寄進

其意趣銘ニ有之

一御判物 一通

此内二通、大愆院様・方誠様之御判物二通ハ、寛

海洋戴仕候

右帳面之御判物十八通と相見候へ共、上之御扣帳

二十九通と御書載有之、老通不足仕居申候、宝泉

坊栄山代ニ照景様之御判物老通紛失と相聞ル、拙

僧詮議仕出シ、上之御帳面ニ相違無之様二十九通

ニ仕置候、正徳・享保之間、大愆院様・方誠様御

二代之御続目頂戴仕候故、都合三十一通ニ而候

「ツクヤ」  
一觀喜天ノ木像 老体

但シ箇ノ内ニ唐銭真珠金銀等少々、入置

一明神ノ御神体 但シ絵像二枚板ニ書有之

一御代之御建立之棟札 四枚

右宮ハ古帳ニ有之筈ニ候へ共、栄山失念被致候

哉相見不申候、右新帳ノ内ニ入置

享保十一年四月日 寛海(印)

「裏表紙」  
古帳 紙数六枚

新紙 紙数二枚 寛海(印)

## ③ 金剛山記録(文政七年) No.33

「内容」金剛院の旧本堂ほか附属施設の普請記録。

日本堂の屋根替えや普請の時期が、藩への申請も含めて記載されている。記録時期は、文政から大正まで長期にわたって継続しているが、ここでは大規模な改修が実施された天保元年までの部分を抄出した。

(表紙)

「文政七申申年

金剛山記録

五月日 密隆」

覚

一大師堂御修補、金剛院屋根替以前より願出次第被仰

# IV 金剛院所藏近世・近代文書

吉田正高

## ① 金剛院由緒書上（文久三年写） No.55

〔内容〕 金剛院由緒書の写し。弘法大師の来島から始まり、宗氏の帰依を受ける過程などが記載されている。本史料は金剛院三六代住職寛明によって筆写されたものである。

### 金剛院

古弘法大師来対州神社封建立寺院被殘密法之時金胎之教趣在、此金剛故為密法寺院崇善哉故自其体作安治之

寛元四丙午年正月、惟宗右馬頭判官貞重公在对州志之時、有御願而阿比留平大郎国時惡党被誅滅逐、鎮二郡以分八郷出令以制國中、自是代々宗君被此寺尊崇、其功臣斎藤・立石・俵・中原之輩從而貴之仰之云々、

応永八年惟宗讃岐守平貞茂公宗家庶子謀叛、其時有御願而茂秀・貞秀之嶋氏之誅逆党而、鎮八郡自管諸職内外保護、自是又被此寺尊崇、宗氏之家族以下皆從而貴之久、

対州府君平材盛公為息盛須公得酸豆金剛院之良寛京洛源府君大將軍赴自東寺、以有旧好為平公仰解德抱訴、其時良寛附詞趣官領諸職等皆打金鞍遂達其事焉大樹曰、都鄙相隔犯乱失功賢忠聖至末也、今歲始詳知之惟宗入道令鑑之忠功故、於其子孫平材盛之嫡

子改盛須則宗讃岐守源義盛任対馬之屋形早行徳政可救国云々、

良寛法印忠也、信也、解願安之然而帰宜哉、平將盛公之時、肥州任宗九郎盛晴以此達意而欲奪國中、其時酸豆村於永泉寺集調兵、金剛院之住僧聞之、走人達府君近士郡族不信、池之屋形大破為敵軍、彼遂落入夜忽而入山人、佐次郎將盛公居佐次之龍雲軒而使走酸豆金剛院、祈願而丹精抽之無私以故再冠国守而治久後逢逆叛而落豊崎居、則号此殿謂小浜公其時在願成就故、其子息四人在福国守之備立四代將盛公之四男

嫡子宗部少輔 此人早世故国守知人少

二男宗能登守調国 狂氣故去治世久則須如国臣

三男宗常陸助義純 乱臣以讒言滅亡其靈如神

四男対馬守義知 号国守則其人養子義調云々

右ハ竹岡卯八郎方ノ系図ニ有之候ヲ見出シ書留置候三十六代現住寛明文久三癸亥年写之

## ② 金剛院本尊并什物覚（元禄一〇年） No.19

〔内容〕 近世期に金剛院が所蔵していた宝物の書上。すでに「一大般若經巻部 貞茂様 貞盛様御寄進」などの記述が見られる。また、後半二丁は享保一二年に追加されたものである。

〔表紙〕  
元禄十子歳

金剛院本尊并什物覚

三月日

覚

一金剛山 金剛院 長安寺

一本尊 弘法大師 但木像座仏 長サ貳尺九寸

是は弘法大師御年四拾五歳ニシテ対州江御渡被成候時、酸豆村江御越、御形ニ御刻御勸請被遊候事

一延宝四丙辰歳御彩色被遊候事

堂南向四間角、延宝四丙辰年御再建之、則棟札有之

一開山 長照

生国は筑前宰府水曼陀羅寺、対州江渡海、金剛院住持ニ罷成、現住栄山迄三十代

一寺 桁間七間入四間南向

貞享貳乙丑歳御建立被遊候

一門 延宝四丙辰歳御建立被遊

一御先祖様御牌名左ニ記之  
(マ)  
損官 ト叟宗俊 大居士神儀  
本城心住

一從御先祖様被下置候御判枚 拾八通

一不動 木像長サ七寸

一毘沙門天王 同

一多門天王 同

一釈迦如来 金仏長サ五寸

上畠廻貳拾五石四斗五升六合  
合上畠九石壹斗八合八勺

上畠廻則

合中畑貳拾八石壹斗九升三合五勺  
上畠廻拾六石壹斗壹升五勺七才

合下畠四拾貳石壹斗七升四合六勺

上畠廻八石四斗三升四合九勺貳才□

上々上中下畠

四口合上畠廻五拾九石壹斗七升〇二勺九才

間ニノ貳拾九間貳尺三寸四分〇五毛八

合上々田六石八斗〇六合八勺

上畠廻拾三石〇六斗壹升三合六勺

合上田三石〇四升六合肆

上畠廻四石〇六升壹合三勺三才

合中田二石四斗六升〇二勺肆

上畠廻則

合下田二石〇七升八合五勺肆

上畠廻壹石壹斗八升七合七勺一才

上々上中下田

四口合上畠廻一拾壹石三斗貳升二合八勺四才

間ニノ拾間二尺六寸四分五厘六毛八

合茶半斤

上畠廻壹升二合五勺

間ニノ二分五厘

合上々木庭三拾二石三斗一升肆

上畠廻參石二斗三升一合

合上木庭四拾九石四斗〇五合肆

上畠廻四石一斗一升七合〇八才

合中木庭八拾二石六斗一升六合肆

上畠廻四石八斗五升九合七勺六才

合下木庭百九拾九石七斗四升一合肆

上畠廻七石九斗八升九合七勺二才

上々上中下木庭

四口合木庭上畠廻一拾石一斗九升七合五勺六才

間ニノ拾間〇參寸九分五厘壹毛二

畠  
都合<sub>田</sub> 上畠廻百石〇七斗〇三合一勺九才

木庭

内三斗三升一合八勺九才ハ 立山

都合五拾間二尺〇壹分一厘五毛八

内四拾二間〇四寸〇八厘八毛四八 御公領

同八間〇九寸三分八厘九毛五一 寺社領間

同六寸六分三厘七毛八 御立山分引前

已上

畠豆内院内山瀬村境目之事

一 畠豆之郷与与良之郷之境目ハ内院之川ヲかきり海濱濱分  
山者しんのさへをかぎり

一 畠豆之郷与内山村者久和越のわミを引おろし地藏堂ノ本  
川を下り

一 畠豆之郷与佐須之郷境目ハ瀬村者川ノ分海は濱分也

以上

壬寅 十月吉日

墨附紙貳百七枚 境書壹枚共

〔裏書紙〕

筆（花田定右衛門  
渡島加右衛門

読合 庄藏  
與右衛門  
善兵衛

一同四斗七升(卷斗中 三斗七升下 同所	郡地 庄兵衛 給人	一同武斗 中 同所のわミかけ	竹岡傳五郎知行	一同卷斗 中 ミやうしのさへ	郡地 与左衛門	同所	一同三斗 下	一同卷斗 下	同所	一同三斗五升 下 二斗五升下	梅野官左衛門知行	一同卷石四斗 五斗上 式斗中 式斗下	耕月庵領	杉村采女知行
一同四斗七升 下 かしやのさへかけひなた	岩佐甚吉知行	一同式斗 下 同所かけ	郡地 金右衛門	一同三斗五升 上 二斗五升上	吉賀吉左衛門知行	一同卷石四斗 五斗上 式斗中 式斗下	一同	一同卷斗 下	同所	一同卷石五升 下 六斗上々	梅野官左衛門知行	一同卷石五斗 五斗上 式斗中 式斗下	郡地 格兵衛	
一同四斗式升(三斗中 卷斗式升下 同所)	郡地 源左衛門	一同三升 下	御公領 黒木捨左衛門代り 知行	一同卷斗五升 上 ミやうしのさへ	吉賀吉左衛門知行	一同卷石四斗 五斗上 式斗中 式斗下	一同	一同卷斗 下	同所	一同卷石五升 下 六斗上々	梅野官左衛門知行	一同卷石五斗 五斗上 式斗中 式斗下	郡地 格兵衛	
一木庭七升 下	梅野官左衛門知行	魚かけはたぐろ	給人	一木庭三斗 上々	郡地 松千代	一同卷石四斗 五斗上 式斗中 式斗下	一同	一同卷斗 下	同所	一同卷石五升 下 六斗上々	梅野官左衛門知行	一同卷石五斗 五斗上 式斗中 式斗下	郡地 格兵衛	
同所かけひなた	同所	一同式升 上	竹岡傳五郎知行	同所	阿比留善吉知行	一同卷石四斗 五斗上 式斗中 式斗下	一同	一同卷斗 下	同所	一同卷石五升 下 六斗上々	梅野官左衛門知行	一同卷石五斗 五斗上 式斗中 式斗下	郡地 格兵衛	
一同卷石(五斗中 五斗下 同所かけひなた	社家 来順	たなはしのさへ	同	一同式斗五升 下	阿比留善吉知行	一同卷石四斗 五斗上 式斗中 式斗下	一同	一同卷斗 下	同所	一同卷石五升 下 六斗上々	梅野官左衛門知行	一同卷石五斗 五斗上 式斗中 式斗下	郡地 格兵衛	
一同五斗(式斗上 式斗中 卷斗下 同所)	百姓 十ろ右衛門	同所さへかけひなた	御公領	一同三斗 上々	郡地 三之助	一同卷石四斗 五斗上 式斗中 式斗下	一同	一同卷斗 下	同所	一同卷石五升 下 六斗上々	梅野官左衛門知行	一同卷石五斗 五斗上 式斗中 式斗下	郡地 格兵衛	
一同四升 下	給人	同所	内野弾之允代り知行	一同卷斗 下	同	一同卷石四斗 五斗上 式斗中 式斗下	一同	一同卷斗 下	同所	一同卷石五升 下 六斗上々	梅野官左衛門知行	一同卷石五斗 五斗上 式斗中 式斗下	郡地 格兵衛	
同所わきのさへ	竹岡傳五郎知行	たなはしのさへ	同	一同式升 下	阿比留善吉知行	一同卷石四斗 五斗上 式斗中 式斗下	一同	一同卷斗 下	同所	一同卷石五升 下 六斗上々	梅野官左衛門知行	一同卷石五斗 五斗上 式斗中 式斗下	郡地 格兵衛	
一同四斗(式斗上 式斗下 同所口)	郡地 五兵衛	一木庭卷石四斗 三斗下	郡地 作左衛門	一同四升 下	右同人知行	一同卷石四斗 五斗上 式斗中 式斗下	一同	一同卷斗 下	同所	一同卷石五升 下 六斗上々	梅野官左衛門知行	一同卷石五斗 五斗上 式斗中 式斗下	郡地 格兵衛	
一同卷斗五升(卷斗上 五升中 同所わきのさへ)	社家領 慶傳	同所のだん	同 次郎作	高いのひら	給人	一同卷石四斗 五斗上 式斗中 式斗下	一同	一同卷斗 下	同所	一同卷石五升 下 六斗上々	梅野官左衛門知行	一同卷石五斗 五斗上 式斗中 式斗下	郡地 格兵衛	
一同卷斗五升(卷斗下 五升中 かしやのさへかけひなた	右同人領	同所だん	主藤小十郎知行	一同九升 中	山下才兵衛知行	一同卷石四斗 五斗上 式斗中 式斗下	一同	一同卷斗 下	同所	一同卷石五升 下 六斗上々	梅野官左衛門知行	一同卷石五斗 五斗上 式斗中 式斗下	郡地 格兵衛	
一木庭式斗 卷斗中 卷斗下 同所)	金剛院領	一同式斗 中	同所だん	あじろば	郡地 忠右衛門	一同卷石四斗 五斗上 式斗中 式斗下	一同	一同卷斗 下	同所	一同卷石五升 下 六斗上々	梅野官左衛門知行	一同卷石五斗 五斗上 式斗中 式斗下	郡地 格兵衛	
一同五升 下	住持領	一同式斗 上	御公領	かめのこう	永泉寺領	一同卷石四斗 五斗上 式斗中 式斗下	一同	一同卷斗 下	同所	一同卷石五升 下 六斗上々	梅野官左衛門知行	一同卷石五斗 五斗上 式斗中 式斗下	郡地 格兵衛	
□わせのさへ	給人	一同卷斗五升 上	西泉庵上り地	水のしり	社家 知休領	一同卷石四斗 五斗上 式斗中 式斗下	一同	一同卷斗 下	同所	一同卷石五升 下 六斗上々	梅野官左衛門知行	一同卷石五斗 五斗上 式斗中 式斗下	郡地 格兵衛	
一同七升 上	古森喜兵衛知行	同所だん	郡地 松千代	一同三斗五升 上々	金剛院領	一同卷石四斗 五斗上 式斗中 式斗下	一同	一同卷斗 下	同所	一同卷石五升 下 六斗上々	梅野官左衛門知行	一同卷石五斗 五斗上 式斗中 式斗下	郡地 格兵衛	
一同卷升 下	郡地 太郎右衛門	同所	同所	一同六斗 上々	郡地 鬼太郎	一同卷石四斗 五斗上 式斗中 式斗下	一同	一同卷斗 下	同所	一同卷石五升 下 六斗上々	梅野官左衛門知行	一同卷石五斗 五斗上 式斗中 式斗下	郡地 格兵衛	
同所	同所	一同六升 中	同 源左衛門	一同五升 二升上 三升中	給人	一同卷石四斗 五斗上 式斗中 式斗下	一同	一同卷斗 下	同所	一同卷石五升 下 六斗上々	梅野官左衛門知行	一同卷石五斗 五斗上 式斗中 式斗下	郡地 格兵衛	
一同五斗(式斗上 式斗中 式斗下 同所)	社家領 知休	たなはし	給人	一同五升 二升上 三升中	岩佐甚吉知行	一同卷石四斗 五斗上 式斗中 式斗下	一同	一同卷斗 下	同所	一同卷石五升 下 六斗上々	梅野官左衛門知行	一同卷石五斗 五斗上 式斗中 式斗下	郡地 格兵衛	
御公領	内野弾之允代り知行	よこひら	同	一同式斗七升 七斗上 三斗七升下	右同人知行	一同卷石四斗 五斗上 式斗中 式								



一同式升下	同 次郎作	一同式斗下	郡地 忠右衛門	一同八升下	郡地 千奈
中たけ		一同三斗(式斗上)	御公領	中つな	
一木庭式升下	杉村采女知行	かりくら	郡地 又兵衛	一木庭五升下	龍田三右衛門知行
同所		一同式斗中	内野弾之允代り知行	うしがせ	給人
一同式升下	寶泉庵	同所	給人	一同式斗下	小嶋李兵衛知行
同所		一同式斗中	山下才兵衛知行	同所	
一同八升下	金剛院領	かりくら	大行司領	一同三斗下	社家領 甚右衛門
同所		一木庭式斗中	大田利左衛門	はなぐり	
一同六升下	郡地 太左衛門	大くば	御公領	一同八斗下	杉村采女知行
同所		一同三升中	内野弾之允代り地	うしがせ	
一同式斗下	自灌院領	同所	知行	一同五升下	郡地 太左衛門
火たきバ		一同七升 三升上	郡地 甚右衛門	同所	
一同式斗下	来順領	同所	給人	一同式斗 式斗上	郡地 惣兵衛
水たる		一同四斗五升(式斗三升中)	阿比留五郎兵衛知行	かつつは	郡地 甚右衛門
一同七斗 三斗五升中	百姓 丈太郎領	同所	金剛院領	かつつは	
水たる		一同式斗五升下	同所	一木庭式升下	御公領
一木庭式石下	郡地 又兵衛	同所	郡地 忠右衛門	同所	内野弾之丞代り知行
同所		一同式斗三升中	給人	一同式升五合下	百姓地 長兵衛
一同四斗五升中	社家 宮司領	船越かけひなた	小嶋李兵衛知行	同所	
同所		一同老石式斗下	御公領	一同式升下	吉賀吉左衛門知行
一同八升中	郡地 市兵衛	船越かけひなた	内野弾之允代り知行	同所	百姓地 孫助
同所		一木庭式斗五升下	郡地 甚右衛門	一同五斗下	
一同四斗五升中	同 甚左衛門	同所	金剛院領	一同三斗下	同所
同所		一同四斗中	給人	一同式斗八升中	同所
一同式斗五升 式斗三升中	同 勘左衛門	同所	古森喜兵衛知行	はなぐり	同所
同所		一同式斗中	同所	一同五斗 三斗中	同所
一同八升下	同 金左衛門	一同式斗五升中	給人	はなぐり	同所
同所		一同式斗五升下	古森喜兵衛知行	一木庭三斗七升下	同所
同所		一同式斗下	郡地 清右衛門	あじろば	同所
水たるかけひなた	御公領	ミウまぜ	郡地 又兵衛	一同四斗下	同所
一木庭四斗五升(式斗五升下)	金剛院領	一同式斗五升下	同	一同四斗(式斗中)	同所
同所		一同式斗五升中	同 与左衛門	かねいし	同所
一同五升下	吉賀吉左衛門知行	ミウまぜ	御公領	一同七升下	同所
同所		一同式斗五升中	内野弾之允代り知行	同所	
一同七斗(三斗中)	社家住持領	一同式斗五升中	同	同所	
同所		一同式斗五升中	同	同所	
一同五斗(三斗五升)	金剛院領	一同式斗五升中	同	同所	



資料編 227





230

一同式斗七升 上	郡地 甚左衛門	同所	一同七斗 下	御公領 内野彈之允代り地	同所	社領 大行司
わせなかふや		一同四斗五升 二斗中 式斗五升下	同所	同所	一同老斗式升 下	太田利左衛門
一木庭式斗七升 上	郡地 又兵衛	同所かけひなた	一同七斗 御公領	同所	したゞのひら	
同所		一同老石四斗 (老石上 四斗中	同所	同所	一同四升 下	郡地 三之助
一同三斗七升 三斗上 七升中	杉村采女知行 作人藤右衛門	同所	一同五石三斗 老石三斗中 四石下	同所	同所	給人
同所		一同老石六斗 三斗上々 五斗上 六斗中 式斗下	中くま	同所	一同老斗八升 下	小森喜兵衛
一同式斗七升 式斗五合上 式斗下	社家領 知休	同所	一木庭老石式斗 六斗中 六斗下	同所	同所	同
同所		同所	一同式石四斗 三斗中 式石老斗中	同所	一同老斗 下	竹岡傳五郎
同所	給人	同所	一同老石四斗 老石老斗上々 式石上 三斗下	給人	一同五升 下	郡地 市右衛門
一同六斗 三斗中 三斗下	主藤小十郎知行	同所	一同老石四斗 下	阿比留五郎兵衛知行	わした	郡地 市右衛門
同所かけひなた		二本松	一同六斗 下	同所	一木庭四斗 下	給人
一同三斗 老斗五升中 老斗五升下	郡地 与七郎	一同八斗 下	同所	同所	一同四斗 下	給人
同所かけひなた		中ノ道	一同五斗 下	同所	はるの口	同
一同老石 式斗中 八斗下	阿比留弥五右衛門知行	一木庭三石式斗 下	一同式石八斗 下	同所	一同式斗 五升中 老斗五升下	阿比留弥五右衛門知行
同所かけひなた		おおくき	同所	同所	一同五升 下	同
一同五斗五升 中	御公領 岩崎喜兵衛上り地	一同老石八斗 下	同所	同所	一同式斗五升 下	社家領 来順
わせなかふや	給人	すいけん川	同所	同所	一同六斗五升 下	給人
一木庭六斗 式斗中 四斗下	小森喜兵衛知行	一同老石 下	同所	同所	一同式斗五升 下	主藤惣左衛門知行
かふたのかけ	郡地 源左衛門	大くま	同所	同所	はるの口	郡地 与七郎
一同老斗八升 九升上 九升中		一同老斗五升 下	同所	同所	一木庭老斗五升 下	給人
同所かけ		同所	同所	同所	せいとうし	大行司領
一同式斗五升 式斗上 五升下	大行司領	一同式斗五升 下	同所	同所	一同老升 下	太田利左衛門
わたノ木庭かけ		同所	同所	同所	一同式斗 下	同所
一同式斗五升 中	同所 同人	一同老石 下	同所	同所	一同三斗 下	同所
同所かけ		大くま	同所	同所	一同式斗 下	同所
一同老石式斗 (五斗上 三斗五升中 三斗五升下)	郡地 与左衛門	一木庭八斗 下	同所	同所	一同式斗五升 下	同所
同所かけひなた		同所	同所	同所	一同式斗 下	同所
一同三石三斗 老石上 式石中 三斗下	大行司領	同所	同所	同所	一同三斗 下	同所
なけのさへ	太田利左衛門	同所	同所	同所	一同式斗 下	同所
一同八斗 中	郡地 甚右衛門	同所	同所	同所	一同式斗 下	同所
なけのさへ		同所	同所	同所	一同式斗 下	同所
酸豆五番中		同所	同所	同所	一同式斗 下	同所
一木庭九斗 三斗上 六斗中	百姓 長兵衛	同所	同所	同所	一同式斗 下	同所
同所かけひなた		同所	同所	同所	一同式斗 下	同所
一同老石式斗 老石上 式斗中	郡地 五兵衛	同所	同所	同所	一同式斗 下	同所



一同五斗 三斗中 式斗下	郡地 五兵衛	一同式升 下	郡地 八右衛門	一同式升 下	金剛院領	一同四升 下	郡地 与左衛門
長瀬上ひなた	給人	こもさきひなた		同所	同所	同所かまはる	
一同老石式斗 八斗中 四斗下	御立山ニ成ル主藤小十郎	一木庭老石 四斗中 六斗下	御公領 内野弾之允代り地	一同三升 下	郡地 格兵衛	一同四升 下	同 甚右衛門
同所		同所	郡地 金右衛門	一同式升 下	杜家領 三〇〇〇 (出領・九郎カ)	すいけん川	同 太郎右衛門
一同五斗 四斗上 四斗五升中	御立山成ル郡地 与七郎	一同三斗五升 下	同所	あしひらかけ	杉村采女知行	一同四斗 下	同所
一同式斗 下	御立山ニ成ル 自湛院領	一同四斗 中	同 久右衛門	一木庭老石 二斗中 八斗下	百姓 九郎右衛門	一同三斗 下	同所
同所	給人	同所	同 六左衛門	あしひら	同所	一同八斗 下	同所
一同式石 下	御立山ニ成ル 岩佐甚吉 知行	一同三斗五升 五升中 三斗下	同 松千代	いたのかた	御公領 岩崎喜兵衛上り地	すいけん川	郡地 六兵衛
かけも		一同式斗 中	同 黒木惣左衛門代り地 作人〇〇〇〇	一同老升五合 下	作人九之助	一木庭七斗 下	郡地 六兵衛
一木庭七升 下	御立山ニ成ル 郡地 久右衛門	一同三斗五升	御公領 黒木惣左衛門代り地 作人〇〇〇〇	なたひらかけ	永泉寺領	永泉寺わミ	同 六兵衛
同所		同所	同所	一同老斗式升 下	杉村采女知行	さまつら	同 太郎右衛門
一同七斗(三斗中 四斗下)	同断	一同式斗 下	同所	出口	同所	一同老石三斗 下	同 太郎右衛門
同所	御公領 岩崎喜兵衛上り地	一同式斗 下	同所	一同七斗 下	同所	すいかう川	郡地 六兵衛
一同式石(老石中 老石下)	郡地 五兵衛	かうかいノ内かけひなた	同所	一同四斗 たより高ニ不入御公領	内野弾之允代り地	一同老石五斗 下	同 太郎右衛門
長瀬のかた	同 庄兵衛	一木庭六斗 二斗中 四斗下	同所	一同三斗 下	百姓 九郎右衛門	すミかき	同 太郎右衛門
一同老斗 下	同 庄兵衛	一同四斗 二斗中 二斗下	同所	出口	同所	一同七斗五升	同 太郎右衛門
ひとつ道	杜家領 来順	一同式斗 下	給人 主藤傳之介	一木庭老斗 下	郡地 甚右衛門	同所	同 太郎右衛門
一同老石 下		同所ひなた	同所	同所	百姓 九郎左衛門	一同四斗 下	同 太郎右衛門
かうかい内ひなた	百姓 七郎右衛門	一同老斗六升 下	郡地 松右衛門	せいとうし	給人	一同老石 式斗中 八斗下	同 太郎右衛門
一同五斗 下	同所	一同老斗八升 下	杜家領 来順	おういの前	岩佐甚吉知行	すミかま	同 太郎右衛門
同所	郡地 八郎〇〇〇〇	同所	同所	一同六合 下	郡地 勘左衛門	一木庭式斗 下	同 太郎右衛門
つかの上	金剛院領	一同七升 下	同領 三九郎	いなたり	立田三右衛門知行	くすはりかわミかけひなた	同 太郎右衛門
一木庭五升 下		かうかい内	同所	一同式升 下	きさこ	一同老石三斗五升 五斗中 三斗五升下	同 太郎右衛門
上のひら	御公領 内野弾之允代り地	一同三斗五升 下	黒木惣左衛門代り地	きさこ	一同三升 下	わせなかおや	同 太郎右衛門
一同老升 下		かうかいの内	同所	一同三升 下	百姓 普兵衛	一同三斗七升 式斗中	同 太郎右衛門
同所	百姓 丈太郎	一木庭四斗 二斗中 二斗下	郡地 源左衛門	同所	同所	一同四斗 式斗上 式斗中	同 太郎右衛門
一同式升 下	右同断	一同老石式斗 四升中 八斗下	大行司領 太田利左衛門	一同老升 下	御公領 内野弾之允上り地	一同老石式斗 式斗上 式石中	同 太郎右衛門
同所		同所	同所	きさこ	給人	一同三斗 下	同 太郎右衛門
潮海ノ上	潮海庵領	一同老斗五升 下	郡地 半左衛門	一木庭老升 下	岩佐甚吉知行	同所	同 太郎右衛門
一同老升五合 中	給人	同所ひなた	主藤分右衛門	同所ふき山	同 同人知行	一同三斗 下	同 太郎右衛門
わき塚ノさへ		一同六斗 下	同所	をのやかわた	同所	同所	同 太郎右衛門
一同八升 下	阿比留弥五右衛門知行	同所	同所	をのやかわた	同所	同所	同 太郎右衛門
同所		同所	同所	をのやかわた	同所	同所	同 太郎右衛門

資料編 233

一同老斗 下	郡地 格兵衛	一同四斗五升	給入	一同四斗五升	一同老斗七升中	一同六升 下	御公領 作人「〔虫撰〕」
大石かいのひらかけひなた	梅野官左衛門知行	大ろの平	阿比留与次右衛門知行	一同四斗五升	自湛院領	かしから	社領 来順
一同式石三斗五升 上々	郡地 傳左衛門	一同六斗 式斗上	立田三右衛門知行	一同式石 八斗上	給入 古森喜「〔虫撰・兵衛知カ〕」行	一木庭六合 下	作人「〔虫撰〕」
一同三斗五升 上	郡地 傳左衛門	一同六斗 式斗上	竹岡傳五郎知行	一同式石 四斗下	給入 古森喜「〔虫撰・兵衛知カ〕」行	一同四斗 中	寶泉坊寺領
大いしかいのひらかけひなた	郡地 松千代	一同六斗 式斗上	郡地 市右衛門	一同六斗 式斗上	給入 古森喜「〔虫撰・兵衛知カ〕」行	一同式斗三升 老斗三升中	金剛院寺領
一木庭四斗 上々	杉村采女知行	小地のさか	給入 立籠惣右「〔虫撰〕」	一同六斗 式斗上	給入 古森喜「〔虫撰・兵衛知カ〕」行	一同四斗 中	作人近之助
大いしかい	一同老斗式升 上々	小地のさか	知入	一同六斗五升 式斗五升中	給入 古森喜「〔虫撰・兵衛知カ〕」行	平のひら	同領
一同老斗式升 上々	郡地 作兵衛	一同六斗五升 式斗五升中	給入 阿比留与次「〔虫撰・右衛門知行〕」	竹の畠	給入 阿比留与次「〔虫撰・右衛門知行〕」	一同老石 八斗中	給入
一同七升 上々	主藤小十郎知行	一木庭六斗五升 三斗中	阿比留与次「〔虫撰・右衛門知行〕」	小地のさか	一同所ひさへ	一同式斗 下	岩佐甚吉知行
かきの木さへ	一同四斗五升 上々	一同五斗 二斗五升上	同 阿比留五郎兵衛知行	一同五斗 二斗五升中	一同式斗五升 下	一同式斗 中	同所
一同四斗 中	同 三「〔虫撰〕」	一同八斗 四斗上	郡地 八郎右衛門	一同八斗 四斗中	一同老斗八升 下	金剛院寺領	平のひら
一木庭老斗 下	郡地 格「〔虫撰・兵衛知カ〕」	一同三升 上	同 作兵衛	一同三升 中	一同四升 下	郡地 分右衛門	一木庭式斗 下
一同式斗五升 上々	社家領作人七兵衛	一同式斗 中	永泉寺領	一同式斗 中	一同六升 下	同 惣兵衛	一同五斗 二斗五升中
一同老斗七升 上々	給入 角兵衛	一同老石六斗 七斗中	郡地 庄兵衛	一同老石六斗 七斗下	かしからかけこは	同 惣兵衛	一同三升 下
一同老斗六升 上々	主藤傳之介知行	一同老石六斗 七斗中	同 弥三左衛門	一同老石六斗 七斗下	一木庭式升 下	郡地 惣兵衛	一同四斗 下
ゑたノはたけのひら	同	一同老石六斗 七斗中	同 弥三左衛門	一同老石六斗 七斗下	一同式升式合 老斗一合中	右同人	一同式斗 一斗中
一同四升 たよりこは高二不入	阿比留与次右衛門知行	一同老石六斗 七斗中	御公領	一同老石六斗 七斗下	一同式升式合 老斗一合下	金剛院寺領	一同三升五合 下
一同三斗五升 上々	梅野官左衛門知行	一同四斗 上	給入 岩佐甚吉	一同四斗 上	一同六升五合 下	作人 弥兵衛	一同四升 下
小いしかいかけひなた	半井菊泉	一同所さへ	知入	一同所さへ	一同六升五合 下	杉村采女知行	ひらの平
一木庭老石 式斗上	知入	一同式斗 下	権現宮司領	一同式斗 下	一同老斗 下	作人 与之介	一木庭三升 中
かさはい	社家領 太田利左衛門	一同五升 下	大行司領	一同五升 下	一同老斗 下	同所	一同三升 下
一同四斗 中	郡地 千松	一同老斗 下	給入 岩佐甚吉知行	一同老斗 下	一同三升五合 下	永泉寺領	ことまた

[illegible]



四六

一同老升七合 八合上々 九合上	右同人知行 作人同人	一同八合 上	一同老升七合 上々	右同人知行	一同三升六合 上々	右同人
同所	同所	同所	一同五合 上々 二セまち	右同人知行	一同五合 上々	右同人
一同式升七合 九合上	中うす	一同老升 上	同所	給人	一同式升六合 上々	郡地 源左衛門
一同老升五合 七合上々 八合上	右同人知行 作人同人	一同八合 上	同所	山下乡郎左衛門知行	一同式升六合 上々	郡地 源左衛門
同所	同所	一同六合 三合上 三合中	同所	右同人知行	一同式合 上々	杜領 七兵衛
一同老升 上々	阿比留与次右衛門知行	一同五合 中	同所	右同人知行	一同老升七合 上々 二セまち	同所
同所	同所	一同四合 中 二セまち	同所	右同人知行	一同七合 上々	同所
一同老升五合 上々	右同人知行	一同四合 中 二セまち	同所	右同人知行	一同老升七合 上々 三セまち	同所
同所	同所	一同五合 中 二セまち	同所	右同人知行	一同七合 上々	同所
一同老升三合 上々	右同人知行	一同四合 下	同所	右同人知行	一同七合 上々	同所
中うす	給人	一同四合 下	同所	右同人知行	一同七合 上々	同所
一同式升七合 上々	阿比留与次右衛門知行	一同四合 下	同所	右同人知行	一同七合 上々	同所
同所	同所	一同四合 下	同所	右同人知行	一同七合 上々	同所
一同老合 上々	右同人知行	一同四合 下	同所	右同人知行	一同七合 上々	同所
同所	給人	一同四合 下	同所	右同人知行	一同七合 上々	同所
一同老升五合 上々	山下乡郎左衛門知行	一同四合 上	同所	右同人知行	一同七合 上々	同所
同所	同所	一同三合 上	同所	右同人知行	一同七合 上々	同所
一同九合 上々	住持領	一同三合 上	同所	右同人知行	一同七合 上々	同所
同所	同所	一同六合 上	同所	右同人知行	一同七合 上々	同所
一同式升五合 上々 二セまち	郡地 弥三左衛門	一同六合 上	同所	右同人知行	一同七合 上々	同所
同所	同所	一同四升五合 上々 三セまち	同所	右同人知行	一同七合 上々	同所
一同老升式合 上々 二セまち	住持領	一同四合 上々	同所	右同人知行	一同七合 上々	同所
同所	同所	一同四合 上々	同所	右同人知行	一同七合 上々	同所
一同三升式合 上々 二セまち	右同人領	一同老升八合 上々	同所	右同人知行	一同七合 上々	同所
中うす	給人	一同五合 上々	同所	右同人知行	一同七合 上々	同所
一同四升五合 上々	山下一郎左衛門知行	一同五合 上々	同所	右同人知行	一同七合 上々	同所
同所	同所	一同五合 上々	同所	右同人知行	一同七合 上々	同所
一同老升六合 上々	右同人知行	一同五合 上々	同所	右同人知行	一同七合 上々	同所
同所	同所	一同五合 上々	同所	右同人知行	一同七合 上々	同所
一同八合 上々 二セまち	右同人知行	一同五合 上々	同所	右同人知行	一同七合 上々	同所
同所	同所	一同五合 上々	同所	右同人知行	一同七合 上々	同所
一同八合 上	右同人知行	一同五合 上々	同所	右同人知行	一同七合 上々	同所
同所	同所	一同五合 上々	同所	右同人知行	一同七合 上々	同所
一同七合 上	右同人知行	一同五合 上々	同所	右同人知行	一同七合 上々	同所
同所	同所	一同五合 上々	同所	右同人知行	一同七合 上々	同所

一同巻升四合 下	右同人	同所	一同三升 上々	同所	一同巻升七合 上々	給人
一同巻升四合 下	右同人	同所	一同三升 上々	作人慶傳	一同巻升七合 上々	竹岡傳五郎知行
一同巻升三合 下	右同人	同所	一同三升 上々	同所	一同式升 上々	給人
一同巻升六合 下	郡地 傳左衛門	馬乗り石	右同人	作人弥五右衛門	一同式升 上々	竹岡傳五郎知行
一同式升五合 下	永泉寺領	同所	同所	作人慶傳	一同五合 上々	阿比留五郎兵衛知行
かまはる	作人清右衛門	同所	右同人	耕月庵領	一同五合 上々	右同人知行
一同式升 中	百姓 与一兵衛	同所	右同人	馬乗り石	同所	右同人知行
かまはる	給人	同所	右同人	一田巻升 上々	同所	郡地 李右衛門
一田三合 中	山下才兵衛知行	同所	作人弥五右衛門	耕月庵領	一同五合 上々	右同人
同所	百姓 丈太郎	同所	右同人	作人五郎兵衛	同所	郡地 勘左衛門
一同八升五合 上	百姓 丈太郎	一同巻升巻合 上々	作人同人	ふちの上	一同七合 上々	右同人
同所	右同人	同所	右同人	一同巻升巻合 上 三セまち	同所	中うす
一同巻升六合 上	同所	一同三升 上々	作人五郎兵衛	同所	一田三合 上々	郡地 甚左衛門
同所	郡地 太左衛門	同所	右同人	一同巻升 上	給人	右同人
一同巻升五合 中	御公領	同所	右同人	阿比留与次右衛門知行	同所	右同人
同所	内野彈之允代り地	一同巻升三合 上々	作人同人	同所	一同巻升五合 上々	右同人
一同巻升六合 上々	作人九左衛門	同所	右同人	一同巻升六合 上々	同所	右同人
同所	郡地 甚右衛門	一同巻升巻合 上々	作人慶傳	一同四合 上々	同所	杉村采女知行
一同巻升巻合 上々	右同人	馬乗り石	耕月庵領	右同人知行	一同巻升五合 上々	作人十左衛門
かまはる	御公領	一田三升 上々	作人五郎兵衛	同所	一同巻升 上々	右同人
一田式升四合 上	内野彈之允代り地	同所	右同人	郡地 李右衛門	同所	作人同人
同所	作人九左衛門	一同三合 上々	作人弥五右衛門	同断 市兵衛	一同八合 四合上	作人同人
一同巻升八合 上々	郡地 甚右衛門	同所	右同人	主藤傳之介知行	同所	右同人
同所	御公領	一同巻升七合 上々	作人忠左衛門	給人	一同巻升 式合五勺上	作人同人
一同式升 上	内野彈之允代り地	同所	右同人	阿比留与次右衛門知行	中うす	作人同人
作人九左衛門	作人九左衛門	同所	作人同人	同所	一田巻升五合 七合上	杉村采女知行
同所	白湛院領	一同三升巻合 上々	右同人	右同人知行	同所	作人十左衛門
一同四升五合 上々	作人才兵衛	一同三升巻合 上々	作人同人	一同巻升 上々	同所	







[illegible]

同所	作人同人	同所	同 半三郎	同所	同 与左衛門	同所	一同四升三合 上々	二セまち	右同領
同所	筆頭給人 国下長兵衛知行 作人長右衛門	一同四合 上	作人惣左衛門	一同八合 上	同	同所	一同四升三合 上々	二セまち	右同領
同所	一同三升 上々	同所	給人 竹岡傳五郎知行	一同七合 上	同 吉十郎	同所	一同四升四合 上々	上々	右同領
同所	一同老升四合 上々	一同三升 上々	住持領	一同六合 上	杉村采女知行 作人甚右衛門	同所	一同三升式合 上々	三セまち	給人 阿比留与次右衛門知行
同所	一同老升五合 上々	□セまちた	郡地 三之助	みあけた	杉村采女知行 作人甚右衛門	同所	一同老升式合 上々	上々	給人 阿比留与次右衛門知行
同所	右同人知行 作人同人	一同式升式合 上々	吉賀分右衛門知行 作人三九郎	一同六合 上	一同老升式合 上々	同所	一同老升式合 上々	上々	右同人知行
同所	一同老升 上々	□同老升 上	給人 主藤傳之介知行	同所	右同人知行 作人同人	同所	一同三升五合 上々	上々	右同人
同所	一同老升 上々	一同式升老合 上々	給人 主藤傳之介知行	一同式升 上々	右同人知行 作人同人	同所	一同式升老合 上々	上々	右同人
同所	右同人知行 作人長右衛門	四セまちた	主藤傳之介知行	一同式升 上々	右同人知行 作人同人	同所	一同式升老合 上々	上々	右同人
同所	一同老升 上々	一同老升九合 上々	郡地 甚左衛門	一同老升老合 上々	右同人知行 作人同人	同所	一同老升六合 上々	式セまち	右同人
同所	一同老升 上々	一同老升三合 上々	右同人	一同四合 上	寶林庵領上り地 作人三之助	同所	一同老升七合 上 二セまち	上々	給人 小森喜兵衛知行
同所	右同人知行 作人与左衛門	一同九合 上々	杉村采女知行 作人作左衛門	一同四合 上	同所	同所	一同三升 上々	上々	給人 阿比留与次右衛門知行
同所	一同五合 中	一同五合 中	郡地 格兵衛	一同四合 上	同領	同所	一同四升 上々	上々	右同人知行
同所	一同老升三合 上々	一同五升 上々	吉賀分右衛門知行 作人三九郎	一同四合 上	同領	同所	一同老升三合 上々	上々	右同人知行
同所	右同人知行 作人同人	一同五升 上々	住持領	一同四合 上	作人同人	同所	一同老升式合 上々	上々	多田源右衛門知行 作人弥五右衛門
同所	一同老升 上	一同老升 上	郡地 半三郎	一同六合 下	宝林庵領 作人三之助	同所	一同老升式合 上々	上々	右同人知行
同所	よせまちた	一同老升 上	給人 同 八郎右衛門	一同六合 上	住持領	同所	一同六合 上	上	右同人知行 作人同人
同所	一田老升式合 上	一同老升三合 上	同 八郎右衛門	一同老升 上々	住持領	同所	一同老升四合 上々	上々	右同人知行 作人同人
同所	作人善兵衛	みあけた	給人 阿比留五郎兵衛	一同老升八合 上々	右同領	同所	一同老升四合 上々	上々	右同人知行 作人同人
同所	百姓 松蔵	一同老升老合 中	郡地 次郎作	一同老升式合 上々	右同領	同所	一同老升式合 上々	上々	多田源右衛門知行
同所	一同式升五合 中	一同老升 中 三セまち	郡地 次郎作	一同老升式合 上々	右同領	同所	一同老升式合 上々	上々	多田源右衛門知行
同所	長田	一同老升 中 三セまち	郡地 次郎作	一同老升式合 上々	右同領	同所	一同老升式合 上々	上々	多田源右衛門知行
同所	一同五升式合 上々	一同老升 中 三セまち	郡地 次郎作	一同老升式合 上々	右同領	同所	一同老升式合 上々	上々	多田源右衛門知行
同所	郡地 虎松	一同老升 中 三セまち	郡地 次郎作	一同老升式合 上々	右同領	同所	一同老升式合 上々	上々	多田源右衛門知行

[illegible]

[illegible]

一居屋敷五合五勺 上々	郡地 傳兵衛	一居屋敷貳升貳合四勺 上々	住持領 松菊	一同三升貳合七勺 上々	耕月庵	一同貳升壹合 上々	内野彈之允代り地
一同七合壹勺 上々	同 五郎右衛門	一同老升四合七勺 上々	百姓地 孫介	一同老升三合壹勺 上々	同 人領市右衛門	一同貳升貳合五勺 上々	菊右衛門
一同老升八合 上々	同 作助	一同老升四合七勺 上々	百姓地孫介	一同老升四合七勺 上々	同 長兵衛	一同貳升壹合九勺 上々	同 分右衛門
ミカンノ木宅本有	給入	一同老升四合七勺 上々	千松	一同老升三合壹勺 上々	同 右同人	一同老升七合四勺 上々	同 同断
阿比留善吉	給入	一同老升四合七勺 上々	山下一郎左衛門知行	一同老升七合四勺 上々	百姓地 源兵衛	一同老升七合四勺 上々	同断 九左衛門
ミカンノ木六本有	阿比留善吉	一同老升八合 上々	市兵衛	一居屋敷九合 上々	弥五右衛門母	一同老升三合五勺 上々	内式合杉村采女領分
内卷本八阿比留弥五右衛門	阿比留善吉知行	一同貳升壹合八勺 上々	太田利左衛門	一同貳升貳合九勺 上々	百姓 松藏	一同老升三合五勺 上々	寶泉庵領
阿比留善吉知行	阿比留長右衛門	一同老升四合七勺 上々	ミカンノ木大中	一同貳升五合六勺 上々	郡地 弥三左衛門	一同老升三合五勺 上々	傳之介
ミカンノ木宅本有	阿比留長右衛門	一同貳升六合七勺 上々	社家三九郎	一同老升五合六勺 上々	内野彈之允代り地	一同老升三合五勺 上々	自短庵領
一同老升貳合 上々	郡地 作兵衛	一居屋敷老升三合五勺 上々	權現宮司領	一同老升六合四勺 上々	御公領 与兵衛	一居屋敷三升貳合貳勺 上々	三介
一同貳升五合壹勺 上々	數藤惣左衛門	同老升三合貳勺 上々	才吉	一同貳升六合六勺 上々	郡地鬼太郎	一同老升壹合五勺 上々	寶泉庵領
但阿比留弥五右衛門入	主藤傳之介	一同三升 上々	權現宮司領	一同貳升六合六勺 上々	給入	一同老升九合六勺 上々	弥五郎
ミカンノ木式本	主藤惣左衛門	一同五升貳合三勺 上々	傳右衛門	一同貳升六合六勺 上々	主藤小十郎	一同老升九合六勺 上々	岩佐基吉知行
一同老升三合五勺 上々	郡地 五郎右衛門	一同貳升貳合三勺 上々	阿比留五郎兵衛	一同老升六合四勺 上々	岩佐基吉知行	一同老升九合六勺 上々	佐右衛門
一同老升〇九勺 上々	同 善左衛門	一同貳升〇貳勺 上々	郡地 源之介	一同老升六合四勺 上々	与七郎	一同老升九合六勺 上々	九郎兵衛
一同老升七合四勺 上々	主藤忠左衛門	一同老升壹合五勺 上々	ミカンノ木式本有	一同老升六合四勺 上々	杉村采女知行	一同老升九合六勺 上々	右同人知行
ミカンノ木式本有	主藤分右衛門	一同貳升四合五勺 上々	多田源右衛門知行	一同老升六合四勺 上々	太左衛門	一同老升九合六勺 上々	金六
永泉寺領	阿比留善左衛門	一同貳升四合五勺 上々	十右衛門	一同老升六合四勺 上々	潮海庵領	一同老升九合六勺 上々	右同人知行
郡地 虎松	給入	一居屋敷貳升四合五勺 上々	小森喜兵衛	一同老升六合四勺 上々	蜜柑ノ木式本、椿森有	一同老升九合六勺 上々	三右衛門
山下一郎左衛門知行	太田市左衛門	一同老升八合 上々	右同人	一同老升六合四勺 上々	西泉軒領上り地	一同老升九合六勺 上々	右同人知行
郡地 格兵衛	同 久右衛門	一同老升九合八勺 上々	同 十郎右衛門	一同老升六合四勺 上々	四郎左衛門	一同老升九合六勺 上々	格兵衛
同 作左衛門	杉村采女知行	一同三升四合九勺 上々	ミカンノ木宅本	一同老升六合四勺 上々	杉村采女知行	一同老升九合六勺 上々	岩佐基吉知行
給入	主藤傳之介知行	一同八合壹勺 上々	社家 慶傳	一同老升六合四勺 上々	ミカンノ木宅本有	一同老升九合六勺 上々	清兵衛
久次郎	郡地 七兵衛	一同老升三合六勺 上々	同 祐善	一同老升六合四勺 上々	郡地 惣兵衛	一同老升九合六勺 上々	三藏
但社領入	同 知休	一居屋敷老升三合六勺 上々	社領也、但基右衛門二入	一同老升六合四勺 上々	梅野官左衛門知行	一同老升九合六勺 上々	市三郎
		一同貳升壹合八勺 上々	杉村采女知行	一同老升六合四勺 上々	伊兵衛	一同老升九合六勺 上々	庄兵衛
		一同貳升壹合八勺 上々	ミカンノ木二本	一同老升六合四勺 上々	竹岡傳五郎知行	一同老升九合六勺 上々	右同人
		一同貳升壹合八勺 上々	久年母ノ木一本	一同老升六合四勺 上々	但阿比留善左衛門二入申候	一同老升九合六勺 上々	三之介
		一同貳升壹合八勺 上々	社家 来順	一同老升六合四勺 上々	善十郎	一同老升九合六勺 上々	金介
		一同貳升壹合八勺 上々	御公領	一同老升六合四勺 上々	百姓地丈太郎	一同老升九合六勺 上々	郡地 松千代
		一同貳升壹合八勺 上々	右同地助八郎	一同老升六合四勺 上々	百姓地丈太郎	一同老升九合六勺 上々	藤左衛門
		一同貳升壹合八勺 上々	右同地三十郎	一同老升六合四勺 上々	七三郎	一同老升九合六勺 上々	郡地 松右衛門
		一同貳升壹合八勺 上々	右同地助八郎	一同老升六合四勺 上々	右同地三十郎	一同老升九合六勺 上々	主藤分右衛門知行
		一同貳升壹合八勺 上々	御公領	一同老升六合四勺 上々	右同地助八郎	一同老升九合六勺 上々	六之介

[illegible]





三四

11111

[illegible]



一同老斗四升五合 六升上 四升中 四升五合下	阿比留善吉知行 作人權之介	一畠老斗下	百姓地 長兵衛	一同三升八合 上々	同所	内野彈之允代り地 給入	同所	一同五升七合 上々	右同人知行
高江 一同老斗八合 上々	郡地 善左衛門	うしかせ	給入	一同八升五合 上々	同所	竹岡傳五郎知行	給入	一同五升七合 上々	作人助八
同所		一同老斗 中	小嶋奎兵衛知行	一同老斗式升五合 上々	同所	郡地 鬼太郎	給入	一畠五升七合 上々	杉村采女知行
一同四斗四升八合 老斗上 老斗四升八合中 五升下	給入 山下才兵衛知行	同所	杉村采女知行	一同三升七合 上々	同所	百姓地 丈太郎	給入	同所	同所
高江		一同九升 三升中 六升下	作人佐与介	一同老升六合 上々	同所	岩佐甚吉知行	同所	一同六升老合 三升老合下	右同人知行
一畠九升七合 下	郡地 八郎左衛門	あじろは	御公領 内野彈之允代り地	「一」石	同所	半井菊仙知行	同所	同所	右同人知行
同所		一同老斗老升 下	郡地 善左衛門	一同七升 下	同所	作人十右衛門	同所	一同六升 三升中 三升下	作人惣十郎
一同九升 五升上 四升中 上	住持領	同所	金剛院領 作人六郎介	一同七升 下	同所	永泉寺領 作人傳十郎	同所	うへふノ屋敷	給入
一同三升 老升上 式升中	竹岡傳五郎知行	うつらノ原	杉村采女知行 作人相介	一同八升 下	同所	社領 知休	同所	一同老斗三合 式升三合下	主藤分右衛門知行
同所道ノ下	郡地 八郎左衛門	一畠九合 上々	同所	あしろは	同所	山下才兵衛知行	同所	一同六升 上々	社領七兵衛
一同老斗三升 九升上 九升中	竹岡傳五郎知行	同所	小森喜兵衛知行	一同式斗五升 老斗下	同所	郡地 忠右衛門	同所	一同老升八合 中	給入
同所		一同老升八合 上々	同所	龜ノこう	同所	永泉寺領	同所	一畠老升七合 上々	太田利左衛門
一同九升四合 五升上 四升四合中	住持領	同所	郡地 忠右衛門	一同老斗 下	同所	金剛院領	同所	一同老升七合 上々	郡地 久右衛門
一同三升四合 上々	圓知領	一同三升五合 上々	杉村采女知行 作人善右衛門	一同式升八合 下	同所	給入	同所	一同式升式合 上々	同 忠右衛門
一畠式升七合 上々	郡地 松右衛門	一同老升九合 上々	給入	うつしり	同所	岩佐甚吉知行	同所	一同老升七合 上々	幾度伊右衛門知行
同所		一同老斗 上々	阿比留喜左衛門知行	一畠老斗九升 下	同所	給入	同所	一同老升七合 上々	作人久作
一同老斗老升九合 五升九合中	住持領	同所	杉村采女知行	一同斗斗老升 下	同所	阿比留喜左衛門知行	同所	一同三升老合 老升五合中	右同人知行
みたう川	郡地 千松	一同五斗 上々	寶泉坊領 作人九郎兵衛	一同四升 下	同所	西泉寺領上り地	同所	一同老升八合 中	右同人知行
同所	給入	一同七升四合 上々	給入	あの上	同所	右同領 同	同所	一同三升四合 老升七合上	郡地 勘左衛門
一同三升 上	郡地 吉郎右衛門	うつらの原	阿比留弥五右衛門知行	一同九升 五升中 四升下	同所	百姓地丈太郎	同所	うゑこの屋敷	給入
うつま場	同基右衛門	同所	金剛院領	一同五升七合 上々	同所	杉村采女知行 作人仁右衛門	同所		
一同三升 下	御公領	一同六升式合 上々	御公領						
一同式升 下	内野彈之允代り地								
うつまば									



一同式斗四升六合	中	太田利左衛門
同所		給人
一同式斗六升五合	下	竹岡傳五郎知行
火之市さへ		
一畠式斗八升五合	武斗上 八升五合下	吉賀吉左衛門知行
同所		作人松「」
一同三升	下	社領 来順
西表ノ原		
一同卷斗四升八合	下	郡地 八郎右衛門
同所		
一同卷斗七升	下	社領 七兵衛
へんかさへ		
一同卷斗卷升	下	郡地 虎松
西表ノ原		
一同卷斗六升	八升中 八升下	社領 知休
同所		
一同□开式合	下	郡地 善左衛門
西表ノ原		
一畠卷斗七升	下	宮司領
同所		給人
一同五升五合	下	阿比留善吉知行
八斗府ひらノわき		
一同五升	二升下	郡地 金右衛門
ふか口		
一同九升	四升中 五升下	杉村采女知行
同所		作人市左衛門
一同卷升	中	右同人知行
同所		作人平左衛門
一同卷斗	五升中 五升下	梅野官左衛門知行
同所		
一同九升五合	中	阿比留善吉知行
ふか口		
一畠三升	下	龍田三右衛門知行
西表ノ原かけ		
一同五升	下	吉賀吉左衛門知行
同所		
かうつち		給人
一同式升卷合	上	主藤傳之介知行
		作人忠左衛門
田はたノ原		御公領
一同式升八合	中	竹岡半三郎上り地
同所		作人□□□□
一同四斗	中	梅野官左衛門知行
同所		作人伊兵衛
一同式升	下	郡地 善左衛門
同所ノ道ノ上		給入
一同式升	下	御公領
田はたノ原		竹岡半三郎上り地
一畠三升	下	多田源右衛門知行
		作人十右衛門
くひい		郡地 金右衛門
一同七升	下	
石ハラノわミ		山下才兵衛知行
一同七升	下	社領 祐善
田はた		但甚左衛門ニ入
一同卷升三合	下	
はこさへ		郡地 李左衛門
一同七升	中	
田はた		社領 来順
一同四升	下	百姓地 与市兵衛
石わら		金剛院領
一同卷斗	下	給入
田ばた		阿比留善吉知行
一畠卷斗三升	八升中 五升下	
同所		百姓地 松蔵
一同六升	下	右同断
ちうのかけ		
一同九升	下	
同所ひなた		
一同三升	下	
同所ノわミ		一同五升 下
一同七升 下		同所ノわミ
にた口ノ浜		一同七升 下
一同七升 中		にた口ノ浜
一畠式升 中		石わら
一同卷斗五升 下		とびす
一同卷斗六升 下		同所
一同四升 下		同所
一同三升五合 下		同所
一同老升五合 下		同所
一同老升五合 下		同所
一同三升 下		同所
一同二升 下		同所
一同式升五合 下		同所
一同式升 下		同所
一同四升 下		同所
く■うしのわミ		同所
一畠式升 下		同所
一同老升 下		同所
内野強之允代り地		同所
一同六升 三升下		同所
一同式升五合 下		同所
一同卷斗 六升中 四升下		同所
一同式升 中		同所
一同五升 中		同所
く■うしわミ		同所
一畠三升 下		同所
一同式升六合 下		同所
なかたけ		同所
一同八升 下		同所
一同六升 下		同所
中たけ		同所
一同式升 下		同所
一同卷升 下		同所
中たけ		同所
一畠式斗卷升 下		同所
一同五升 下		同所
ついなかた		同所
一同六斗三升 三斗三升下		同所
火たきは		同所
一同九升 下		同所
一同四升 下		同所
一同卷斗五升 下		同所
社領 知休		給入
岩佐甚吉知行		給入
郡地 傳左衛門		
同地 甚右衛門		
竹岡傳五郎知行		
金剛院領		
郡地 松千代		
杉村采女知行		
梅野官左衛門知行		
阿比留弥五右衛門知行		
郡地 次郎作		
杉村采女知行		
自瀧院領		
杉村采女知行		
郡地 弥三左衛門		
杉村采女知行		
社家領 知休		
右同領		
主藤傳之介知行		



同所 □□ 一同卷斗七升 七升中 「(地さ)」うのうしろかけ 一同式升 下 住持領 同所かけ 五升中 一同卷斗 五升下 同所かけ 五升下 一同九升 下 同所かけ 一同四升 下 同所かけ 一同卷斗五升 六升五合中 やさかひなた 八升五合下 一畠八升八合 式升中 六升八合下 杉村采女知行 作人四郎左衛門 同所 一同式斗三升 卷斗中 地□うのうしろ 卷斗三升下 一同卷斗七升七合 九升中 八升五合下 同所 一同卷升五合 下 やさかひなた 一同卷升 下 同所 一同七升 下 同所 一同□斗九升 下 「(一)」ひなた □皇卷斗式升 下 同所 一同卷斗九升 九升中 □□ノ口かけ 卷斗下 一同式升 下 やさかひなた 一同七升 下 同所 一同卷升五合 下 郡地 傳左衛門	作人四郎左衛門 郡地 惣兵衛 主藤惣左衛門知行 右同人 主藤傳之助知行 永泉寺領 郡地 十左衛門 郡地 十左衛門 作人四郎左衛門 百姓 松蔵 郡地 喜右衛門 社領 基左衛門 給入 山下一郎左衛門知行 右同人 給入 主藤小十郎知行 給入 山下一郎左衛門知行 右同人 阿比留与次右衛門知行 百姓 孫介 郡地 傳左衛門	同所 一同三升 下 同所 一同卷斗三升 中 やさか 一畠三斗七升 式升中 ひさき 卷斗七升下 一同卷斗五升 七升中 「(一)」ノ口かけ 八升下 一同式升 下 おふへたうかけ 式升上 一同五升 三升下 ひさきひなた 一同卷升 中 同所 □□三升 卷升五合中 なし田ひなた 卷斗五合下 一同卷斗 七升中 なし田平 三升下 一畠卷升五合 下 同所 一同四升 下 やさか山ひなた 一同式斗九升 卷斗六升中 一同式斗三升 卷斗三升下 同所 一同三升 下 同所 一同式斗八升 卷斗四升中 ほりうのひら 卷斗四升下 一畠三升 下 御公領 内野彈之允代り地 作人与兵衛 やさか山ひなた 五升八合中 一同卷斗五升八合 卷斗下 同所 一同三升 下 同所 一同六合 下 同所	同 金石衛門 同 八右衛門 百姓 孫介 郡地 勘左衛門 給入 山下一郎左衛門知行 給入 主藤惣左衛門知行 百姓 松蔵 主藤小十郎知行 百姓 □「(一)」 權現宮司領 給入 主藤傳之介知行 郡地 五郎右衛門 給入 阿比留善吉知行 同所 一同三升 下 同所 一同式斗八升 卷斗四升中 ほりうのひら 卷斗四升下 一畠三升 下 御公領 内野彈之允代り地 作人与兵衛 やさか山ひなた 五升八合中 一同卷斗五升八合 卷斗下 同所 一同三升 下 同所 一同六合 下 同所	一同卷斗 五升中 五升下 中ふやノわミ 一畠八升 下 同所浜ノ口 一同五升 下 やはす 一同七升 中 同所 一同九升 五升中 四升下 ちやう木ひら 式升中 一同五升 三升下 源太くほ 一同三升 下 同所 一同三升 下 源太くほ 一同六升 下 一同四升 下 一同參升 下 同所 一同五升 下 同所 一同六升 下 たけノはたけ 一同卷斗 下 同所 一同五升五合 下 同所 一同□升五合 中 たけのはたけ 六升中 一畠卷斗六升 卷斗下 西表の浜口 一同四升四合 中	吉賀分右衛門知行 作人「(一)」 郡地 五兵衛 給入 主藤惣左衛門知行 御公領 内野彈之允代り地 作人善左衛門 同断 岩崎喜兵衛上り地 作人伊右衛門 杉村采女知行 作人市兵衛 郡地 作兵衛 社領 七兵衛 給入 小森喜兵衛知行 梅野官左衛門知行 作人伊兵衛 給入 主藤惣左衛門知行 阿比留善吉知行 郡地 六兵衛 同 作左衛門 赦免領 權現宮司領 給入 阿比留善吉知行 郡地 金右衛門	同所 一同四升五合 中 同所 一同三斗式升 卷斗上 つたう 式斗式升中 一同卷斗七升 卷斗二升上 五升中 西表ノ浜口かけ 一同式升 下 つたう 一同式斗八升 卷斗一升中 七升下 つたうのわミ 一畠式斗四升 式斗中 四升下 同所 一同三升 下 同所のわミ 一同卷斗三升五合 五升中 西表ノ平 八升五合下 一同六升 下 同所 一同式斗七升式合 式斗中 七升式合下 つたう 一同八升七合 中 同所 一同卷斗卷合 五升上 たきしり 五升卷合下 一畠式升 下 同所 一同卷升五合 下 西表ノはる 一同式斗五升五合 中 なかいつミ 一同卷斗式升六合 下 同所 一同四升 下 西表ノ平	百姓地 松蔵 郡地 太郎右衛門 給入 久和吉左衛門知行 作人羽左衛門 百姓地 松蔵 半井菊仙知行 作人次兵衛 杉村采女知行 作人十助 潮海庵領 百姓地 十郎右衛門 同 孫助 住持領 權現宮司領 郡地 松右衛門 耕月庵領 百姓地 弥左衛門 郡地 作左衛門 圓知領 百姓地 松蔵 大行司領 二七
---	--	--	--	---	--	---	---

資料編 257









—  
—  
—

[illegible]



# III 寛文検地帳

福重旨乃・涌井有希子

## 豆酸村検地帳

寛文二年（一六六二）に作成された豆酸村検地帳の全文翻刻をおこなった。寛文年間に豆酸藩によって検地が舉行された経緯については、徳永健太郎「豆酸関連史料について」一二二頁を参照されたい。ここでは、検地帳の記載内容について若干言及しておきたい。

豆酸村検地帳の一筆毎の記載項目は、①地名、②想定収穫高（投資時高）、③地味、④名請人、⑤作人、である。

①の地名は、現在の小字と共通するものが多いものの、小字内の通称地名を示す場合も多く、地名調査に有用な資料となった。全ての地名の現地比定は困難であるが、聞き取り調査によって七〇八割の地名についてはおよその現地比定が実現した（堀祥岳「対馬豆酸の景観復原」参照）。

②の想定収穫高は、年貢等の賦課対象となる土地の広狭をあらわす項目である。対馬の場合、面積の正確な把握が困難な木庭地が検地の対象として重視されたため、土地の生産力の実体を把握する方法として独特な方法が用いられた。寛文検地帳の場合「上畠廻し」といい、上畠二石時を換算基準として収穫量が算出された。

③の地味には、田・畠・木庭につき、それぞれ上々・上・中・下の等級として評価された。

④の名請人は、給人・郡地・百姓地のほか住持領・金剛院領をはじめとする豆酸近在の寺社・社家領までが把握されている。

⑤の作人は設定のある筆にのみ記載がある。

（表紙）

「寛文式主貢歳

配豆郡

配豆村御検地帳

第百六拾七号 三冊之内

十月吉日

寛文二年寅年

豆酸郷

豆酸村御検地帳

十月吉日

にれ石

一畠老斗式升下

同所

一同式斗壹升三合下

同所たん

一同三升五合下

にれ石

一同六升八合下

同所

一同九升五合下

同所

一同三升下

同所

一同五升五合下

にれ石

一畠八升下

同所

一同三升五合下

同所さへ

一同老斗下

同所

一同老合上々

作人

御公領 権之助

権現

宮司社家領

右同人

大行司領

太田利左衛門

給人

岩佐甚吉知行

同所

白湛院領

給人

古森喜兵衛知行

同所

吉賀文右衛門知行

百姓

丈太郎

住持

杉村采女知行

作人与一兵衛

同所

一同式合上々

右同人

作人七右衛門

半井菊仙知行

作人格兵へ

給人

山下乡郎左衛門知行

郡地

千松

同所

一同老升四合上々

同所

一同四升五合上々

同所

半井菊仙知行

作人格兵衛

権現宮司領

同所

一同老升五合上々

同所

一同式升七合上々

同所

一同式升式合上々

同所

一同式升式合上々

同所

一畠式升式合上々

同所

かん田

主藤小右衛門知行

給人

阿比留弥五右衛門知行

たちはな

一同七升五合上々

同所

一同四斗式升上々

かん田

一同八升五合

かん田

一畠五升上々

同所

同所さいけはたけ

一同四升式合上々

同所

一同七升五合上々

同所

一同五升六合上々

同所

一同四升上々

同所

一同九升上々

同所

かんたさいけはたけ

一畠式升四合上

同所

一同八升四合上

同所

一同七升上々

同所

一同三合上

くはたさいけ

一同式升上々

同所

一同式升上々

同所

一同式升上々

社領知休

郡地

源左衛門

給人

阿比留弥五右衛門知行

杉村采女知行

作人与之助

郡地

吉十郎

杉村采女知行

作人相之助

郡地

与左衛門

杉村采女知行

作人与之助

郡地

源左衛門

百姓

与市兵衛

吉賀分右衛門知行

作人太郎兵衛

百姓

与市兵衛

郡地

源左衛門

右同人

郡地

金右衛門

けちはたけわた くさつミ

一本まつ 二本松かんく(カンカン石)いし

のたのくま (野田の隈) ちからいし 御前

しほひかわ (瀬川) さかへはた (堤端)

已上十三処也、

一、しやうくうハ (正宮) つわ

もん (馬廐) とりひ本

ひわはたけ (枇杷畠) なひた

かたのわた (高木) たかきのわた

なかせのわた (長瀬) さかへのくま

おり立 (卒土) そののはま

又そののはま立時ふかのく口

やまたきくま (馬) しるし

たうの本 御前 已上

已上十五処

一、御山もしやうくうもとりもとのことくにて候、

一、かひのふきやうの事、三さうはんつゝ一処にて

三とつゝふくなり、

一、御上ニ祭のさうを申ハ亥日申上候よし、その間

ハここの道とうらす候、くたり候ハゝあとより

とふるへく候、

一、祭よりのちんさいわうの日よりここの道なひの

道とふらす候、よくくゝいむきへき事なり、

一、しやうしやの事、御山人数ハ北ノつはねしやう

しやをする也、

一、しやうくうの人数ハみなみのつはねの下精進屋

ヲするへき也、たゝの人トましはらんやうにする

也、たゝしめ□ハ一つになやもくるしからす候、

ざしき斗へつゝするへき也、

一、御山そともあゆミやう

一番ニ先の火とほし

二番先立

三番はこ持

四番ほうへし

五番へいもち

六まつかるい

七後の火とほし

上も 下も同前

一、精進屋に入事

卯ノ日人かすをさためてやかて皆々しやうしやニ

可入也、

一、御こくむかへにのほる事、午ノ日夜ノ内にふ

しやうの物いだし候てしやうしやより出候、し

ほひをかきてたうニ参、道具とりそのまゝ登なり、

一、ことしハこくやつゝにあるゆへ末ノ日ノ夜の内

ニこくやに行、たゝの人しゆハ夜あけにしほひか

きて、たうのことく参候、そのあとより御こくを

むかへ申候、そのふん心得へき也、

一、御祭之意趣めして付おき候、此外之事、ふつき

りやニことく有間つけ不申候、よくくゝその

さたかんによつたるへし、

一、御上ハよしとし殿

一、しゆこふせん殿 四十二

一、郡代 采女助殿 三十

如前々着置処也、

慶長拾巳二月十六日

西ノ日祭

一代之住持圓喜(花押)

生年六十六

惣而人数八十五人歟、

一、いりて 三吉

一、同 作助

一、火たき 七郎二郎

一、とうろの事、御山に一万、しやうくうに一万ツゝきるへき也、

めこの事、しやうくう二つ、御山に二つ、おかへに二つ、こんけん<sup>(一)</sup>に一つ、下くうに一つ、へい一本也、

おかへのはことりかへり申候、各々しやけ番いたくへき也、こんけんも下くうもとうせんたるへし、

まんとうろのきわて 阿比留左近助 藤蔵

一、御こくもりやうの事、二つつゝい合候て、めこ一つに十二つ、<sup>(一)</sup>も<sup>(二)</sup>也、二つにもるへきなり、しやうくうもおかへもとうせんたるへし、

一、御へいの事、御山に廿五本、しやうくうに廿五本、おかへに廿五本、こんけん<sup>(一)</sup>にめこ一つ、へい一本、下宮もとうせんなり、御はこもちやうの事、めこ二つハあとにつけかう、つゝミ候てさきにゆひつけへし、皆々とゝのへ候て御てんおさめ候て、申ノ日牛ノ時ニ大山のたうくを先にやくしやにわたすへき也、しやうくう道具ハそのつきにとりわたすへし、いつれのところもその心へあるへし、大山のまいる人数者、しおひかわにとゝまる夜をあかし西ノ日ノ辰の時ニ御こくをとゝのへすへまつるへき也、しやうくうも

ころもかけいしの本にとゝまりて、しほひかきにて辰ノ時をたて候て御山のこくとゝのへられへし、

し、

おかへもとうせんたるへし、

下向にハしほりの本まであとをさきニあゆむへき也、しやうくうもおかへもとうせんたるへし、

一、そと内山にて御たなをつくる事、たかさ三尺三寸と心へへし、ひろさも三尺三寸と心へへし、ひろさすこしせまくとくるしからす候、

一、たなの上ニ御こくのすゑやう事、めこをはさきに二つならへてすゆるへきなり、万とうろハまへのまんなかにすゑ候て、まつかうを上ニあつくひろけて火あたにもへぬやうにかうをきせて、そのいつしをひき上て火をつくるやうにあてかうへきなり、火をうつ事さきの火とほし打なり、

あとのひとほしハ、ひうち<sup>(一)</sup>のたうくをあふきの上ニとりそろへさしあけて□たするへきなり、たし火しこりて出すハあとの火ほしうつへき也、火ヲとほしてより一ときもあとを見ずにくるやうに下かうする也、下かうするにも火見ゆる間ハうしろあゆみに下向申へき也、

一、御へいの立やう事、御たなよりまへ三尺ものけてたつる也、まん中ヲ人ひとりとほるほどあけてをき右左ニ立ルナリ、あらくたつれば内見えてわるく候、たゝおもてはかりと心へ候てゆりなくに立ル也、

一、先はしめて先立御へいを三本とりてたてはしむる也、次にほうへいし三本立候てみなくこゝろくに見あわせて立ルへき也、御へいの内ニ火かしよハんやうニする也、

一、火を打事、御こく・まんとうろ・御へいこくとくしそへてのちへいより内入て御たなの上に火を打也、そのまゝさしとほし候て下向申者也、すこしもしつねんにてハいかゝするや、よくくたしなミかんようたるへし、

一、下向申てほかのしるしのたうのもとにとゝまり候て、心の内ニ御上も下たんをし、わたくしのきねんをもふしさいをいのりてかへるへき也、そのもとの先立さきにあゆむ也、

一、堂にて出立時之立やうの事、御山の先とほらハみなみのはしににしむきに立也、あとの火とほらハ北ニにしむきに立なり、

一、しやうくうの人数ハ先の火とほらハ北ニ立、あとの火とほらハみなみのはしに立也、

一、御山の先立しやうくうのせん立ハむきあふて立やうにする也、先御山せん立かいをふきてしやうくうの先立分て一れいをしてあゆむ時ハ、御山の火とほしハみなミにあゆみて、又にしをのほりニうしろとのこくとおるへ也、

一、しやうくうの人ハ先の火とほらハ北ニ立、後の火とほらハみなミのはし立、あゆむ時ハさきの火とほらハ北ニあゆミこおるのまへにてひかしをくたりに先のこくと出立者也、

一、御山のよこはさミハ御まへの道より下の大いしのきわに立ル也、

一、しやうくうのよこはさミハかわらのわたるところに立ル者也、

一、かひをふくところ

御山たうのハへさか

くしそへてのちへいより内入て御たなの上に火を打也、そのまゝさしとほし候て下向申者也、すこしもしつねんにてハいかゝするや、よくくたしなミかんようたるへし、

一、下向申てほかのしるしのたうのもとにとゝまり候て、心の内ニ御上も下たんをし、わたくしのきねんをもふしさいをいのりてかへるへき也、そのもとの先立さきにあゆむ也、

一、堂にて出立時之立やうの事、御山の先とほらハみなみのはしににしむきに立也、あとの火とほらハ北ニにしむきに立なり、

一、しやうくうの人数ハ先の火とほらハ北ニ立、あとの火とほらハみなミのはしに立也、

一、御山の先立しやうくうのせん立ハむきあふて立やうにする也、先御山せん立かいをふきてしやうくうの先立分て一れいをしてあゆむ時ハ、御山の火とほしハみなミにあゆみて、又にしをのほりニうしろとのこくとおるへ也、

一、しやうくうの人ハ先の火とほらハ北ニ立、後の火とほらハみなミのはし立、あゆむ時ハさきの火とほらハ北ニあゆミこおるのまへにてひかしをくたりに先のこくと出立者也、

一、御山のよこはさミハ御まへの道より下の大いしのきわに立ル也、

一、しやうくうのよこはさミハかわらのわたるところに立ル者也、

一、かひをふくところ

御山たうのハへさか

# 「天道祭の役者の事」(主藤寿文書)

(慶長一〇年(一六〇五)二月一六日)

慶長一〇年(一六〇五)二月一六日に、豆酸観音住持円喜によって書き記された豆酸天道祭の記録である。「天道祭」が現在の赤米神事とは異なる祝祭であったことがうかがえ、中世の天道信仰の様相を伝える重要な史料である。翻刻は黒田智が行ない、二〇〇三年七月二日の海老澤ゼミ報告「卒土濱の誕生」、同年一〇月二五日の水稲文化研究所シンポジウムで「対馬豆酸の空間構成と天道信仰」として紹介した。翻刻にあたって、西岡芳文・福留真紀両氏に「教示いただいた。凡例は「内山文書」に準ずる。

天道まつりのやくしやの事

慶長拾年乙正月廿二日ニこくやに御こくをおさむるなり、牛ノ時也、

一、神の御こくハもる事

一、智泉坊

一、六左衛門允

一、神吉郎

一、源五郎

一、弥平右衛門

一、帯刀助

一、九郎衛門

くねより

正月廿三日うけとるたゝくの

一、あかの水おけ二つ

てうつたらい二つ

ふるいかわ二つ

ひしやく二つ

已上

くねのはま神太郎より

一、八郡よりうけとる物之事

一、お宮はし合五十

一、あふら物四斗入一俵

一、布の代表五斗入一俵

一、加ミ十二

ふちうより

一、ごき七せん

一、おしき七せん

一、むしろ七てう

一、なへ二つ

一、かわら二つ

一、かま二つ

一、かなハ二つ

已上

二月一日之事

一、あふらすめ

一、同二日升あほり

一、同四日ほらしそめ

一、同卯日よりしやうしやに入なり、

一、十二日そとのまへの道つくり也、

一、同廿四日御こくむかへ

先立之事

一、ミヤし

神の御こく

一、源五郎

一、主藤右衛門允

一、こんとう半七郎

一、勢太郎

一、阿 進右衛門

うり立

一、九助

大山之役者之事

一、先立 智久はう

一、はこもち 智照はう

ほうし 阿比留

一、へいもち 帯刀助

一、へいもち 弥平えもん

一、先火とほし 吉右衛門

一、あとの火トホシ 七郎左衛門

一、松かるひ 五郎兵へ

しやうくうの事

一、先立 住持圓喜

一、はこ持 智銀はう

一、ほうへいし 左馬允

主藤

一、へい持 右衛門助

一、先火 右衛門允

一、後火 善右衛門

一、松かるい 九郎あもん

一、あかみつ 神吉郎

一、はたきて 八右衛門 半七

一、ふかいて 左京助

豆酸内院村之生れ者年姉月妹をあらそひ、先例之  
ことく望ニ而相勤申候、

就夫其時分住持知行を祭事を勤申候、

一、観音堂之三尊之仏檀ニ同用ニ住持先祖も宮僧ニ  
勧請申伝へ候、

一、右同断二位三位先祖も宮僧ニ勧請申伝へ候、

一、為森ハ武家ニ而豆酸村を守り申候、

一、其後森原と申しゆごしん御座候、其屋敷跡今に  
御座候、只今は他所ニなり居申候、其時分金剛院  
住持良学房とやら申候、肥前国江廻りし文を廻シ、  
御家を申請後、森原を打ほろぼし、森原おち人と  
なり、内院村へ落行、内院より府内道久和ぞね十  
文字と申所江山かくれ仕とふをくミ哥を詠し居た  
るとて、石をつミたる所御座候、終ニ捕われ切腹  
ならせと申伝へ候、御家様ハ豆酸を宜立ニ御国を  
御しき被遊、依之天道御祭り古しハ三年三度ツ、  
被遊たる由申候、

一、義智様小西撰津守殿御ゑんまん之時分、小西撰  
津守朝鮮陳ニ御渡被成之時分、天道領之義、御覧  
被成国中之つらへ知行御渡被成之由、被仰候所  
義智様も御尤ニ被思召上寄ニ知行為仰付候へ共、  
豆酸郡之者ハ頂戴不仕不作仕候、他方ハ作仕候処  
に時ならぬ雨風日損水損作もすたり、多国中之民  
難儀仕、其上御上も御心掛被遊候儀御座候由ニ而  
豆酸住持を被召登八郡之内有之天道領之儀御判物  
任先例御立被成候間、其通り天道江可心附之由被  
仰付候、則御判物住持頂戴仕候、

一、義智様御代に毎年豆酸へ御狩ニ御成被遊候処ニ、  
卒都之内はげぐまと申狩倉にていつくともなく矢

一筋参り候而、殿様御わらじの紐、御身にそわず  
いきり候処、何者が射たる矢かと御吟味被遊候処  
ニ、前年則其まほしニ而ふし儀ニ矢二筋うせる、  
其矢と被思召、御狩を御引被遊べく候由、天道江  
御心附之由ニ而、今に豆酸山御狩不被遊と申伝へ  
候、

一、義成様御一儀之時御立願ニ而、内院八幡御建立  
被遊候時、杉村伊織殿へ被仰付候時、其時分之棟  
札之櫓住持所持仕候、御先祖様より天道大師塔境  
書之御判物住持頂戴仕居申候、

〔異筆〕  
以上

天武天皇白鳳二年  
元禄二己巳年

天保十一庚子

十一月日 写之 主 本石三位

一、天武天皇白鳳二己酉年

元禄二己巳年ニ後一千十七年と成ル  
此書者、古損候後ハ年数ニ及可写替可申

藤原朝臣兵部卿

大中納言本石二位

權中納言本石三位

## ⑤「天道菩薩由來記」

主藤寿氏文書、書写年代は不明である。

天武天皇之御宇白鳳十三甲申年、対馬国酸豆郷内院

之里せんさいのさへにて天道童子誕生有之之由ニ候、  
其母向日出小用ヲなしたるに、日輪ノ影ヲ則懷妊  
ト成、天道童子ヲ産生ス日輪之精成故、十一面ノ觀  
音ノ化身なりと申伝候、天道在所ハ内院ノしけト申  
所にて候、天道童子入定地ハ酸豆ノ内卒土山と申所  
にて候事、

一、朱鳥六壬辰年、天道菩薩九歳ノ時上洛被成、号  
宝野上人申由ニ候事、

一、大宝三癸卯年、天皇御惱にて其年宝野上人三十  
二歳ノ時天皇御惱為御祈禱、対馬国酸豆内院之浦  
へ勅使立、天皇御惱之意趣ヲ宣下シ給、其時天道  
我依飛行、不及松由ニ而内院ノ飛坂と申所ハ宅州  
小まきニ御飛、夫ハ筑前宝満嶽ニ御飛、京都へ御  
着にて内裏ノ惣門ニ立給時、禁中俄大雨大風頻ニ  
仕、其時内裏ハ天道童子ヲ被請御祈念被成候、内  
院之飛坂とハ此時より名付申由ニ候事、

一、御祈念之次第

吉祥教化 一座

千手教化 一座

四ヶノ法意 一座

秘密 カナクラ

右之御祈念ニ而御惱御平安、于時宝野上人ニ被仰付  
候ハ、御惱御平癒為御祝儀、何ニ而も望次第可被仰  
付之由宣下有之、依之色々ノ貢ヲ納候、此品々御赦  
免被下之様ニと被申上候処ニ、願之通品々御赦免被  
成由ニ候事

右之時御許物

一、酸豆郷三里渚之寄物

一、嶋中之罪人天道式地へ参候ハ、可為御赦免事、

会之法座、一吉祥教化、二千手教化、三四箇法意、

四秘密迦那但羅也、已登法壇、恭禱天壽一七日、則

皇上病忽愈、聖躬安泰時、百官獻千秋壽福萬年齡、

甚嘆天道之法驗、皇上深感禱壽之妙庇、而詔天道

法師賜寶野上人号並菩薩号、大加褒賞、又詔曰、有

其所欲事、則隨心以許与焉、天道菩薩言、我州元僻

在 皇土之西極、而衝風振海、百事不便、每歲獻貢

民苦勞役、只冀許我州貢物並島中罪人入天道食邑地

來者、不論罪輕重悉蒙赦宥、是乃足矣、別願望豈有

他乎哉、皇上輒隨所言悉許本州貢物、其本道白銀、

八路撰女、並黒木市峯篋竹、中山楊枝、立龜黃鸝、

櫛里山雀、犬浦鰯魚、与良紺青、且酸豆三里間海浜

流來物色和布瀬等也、

古記云、天道菩薩社田有備前国佐和良郡、御出田八

百町云、然而何時中而断不和所稽也、天道菩薩入定

地在酸豆郡卒土山半腹之上、計画其地、則縱横八町

計余、而中積量平石以有九重宝塔、其境絶勝雲掩霞

遮鬼守神護、不生雜草、不掃無塵、実天上觀史地外

靈場也、汚穢之人若到其所、則不廻踵而損命喪身、

故里民畏避、不容足跡举也、蓋尊敬愈日於今如生而

己、可謂最上広済菩薩也、天道法師誕生自天武天皇

白鳳二年祭酉至元祿二歳己巳得一千十七年

謹承

本州今之大守侍従宗義真尊君鈞吉

記焉

元祿三歳舎上章敦胖二月穀旦

対馬州府下西阜梅山玄常識印

#### ④「天道大菩薩咄伝覚」

本石一幸氏文書、元祿二年（一六八九）の本を、  
天保十一年（一八四〇）に書写したもの。

〔表紙〕

本石三位主

天道大菩薩咄伝覚

元祿六年ヲ天保十一年庚子写

〔異筆〕

〔天武天皇白鳳二年

天道童子 宝屋上人并菩薩号

天上而今ハ広済菩薩 唱エル

豆酸郡天道大菩薩咄伝

一、豆酸郡之内、内院村古しハ有浦と申候処、王

そん女院流人とならせ御着被遊、仙山之さへに御

住被遊候ニ付、其所を内院と申候、則山を其時分

ハ仙山と申伝へ候、

一、女院仙山に住所被遊候へ者、恐れて近による人

もなく、都恋しく思召、日々に願、日にふかく祈

誓をかけ被遊候処に、御夢に朝日御たもとに入ら

せ給ふと見させ給イ、則御くわいたいととならせ、

月日重り、霜月十五日に御さんのひば則片腹より

御生レ被成、母御は則御せいきよ被遊、御子息は

則天道童子と申伝へ候、其後宝野上人と申伝へ候、

其時分禁中様御脳ニ付、御上洛被遊、則御惱御平

癒ニ付、其時分より天道大菩薩にならせ給ふ由申

伝へ候、右内院村天道領之内、天道母御と申、大

住正八幡と祭例ス、其前二天道御母公之墓印と申

一四

五りん石塔御座候、此石を唐石と申伝へ候、八幡

より東江人領之内ニ薬師堂御座候、此堂に八幡之

大般若納り居申候、右之通に御座候ゆへ、内院八

幡さへ其仙山之さへとも申候、又女院共申候、亦

朝日長者共申伝へ候、

一、古しハハ、御国を朝鮮之まき之嶋共申候処、豆

酸卒土之内尾崎キ・いけ崎・神崎之内いけずきず

りすみと申、岩瀧を伝ふ名馬たち申候を、禁中様

へもれ聞へ御覽可被遊之由、勅使被蒙、国中まき

を被成、右神崎ニ追込ミ本ト之ほそりをつぎ切り

木戸を明ケ召とらんと被成候処ニ、神崎馬おろし

と申けんそ成ル所より海ニ入、あなたこなたニ飛

渡り、国中を廻り召取被成候事、人業ニて叶ふま

しと御せん義ニ而、天道江戸姫外宮くうニ深ク氣

せいを御かけ被成、輒ク召とられ、御国まき持之

時さわ初メ之馬を外宮くうに御ひかせ可申之由、

其時分より対馬と被仰候と申伝へ候、依之唯今迄

御国まき狩被遊候、沢初メ之馬豆酸村外宮ニ引か

せ被成候由申伝へ候、

一、天道禁中御惱ニ付御祈禱ニ御登り被成、御惱平

癒被遊御帰り、茂時公藤原家之公家知■之朝臣・

兵部卿中納言家之公家本石二位本石三位供僧ニ而、

天道ニ御付ケ被成、則肥前之鱒之郡千石天道領ニ

御付ケ被成、豆酸村へ居所仕、其時分為森と申、

豆酸村を守護し給ふ、右之公家天道以後住持と申

伝へ候、二位三位ハ宮僧と成候与申伝候、豆酸住

持ハ今一社之主ニ而八十八ヶ所、為森八十八ヶ所、

二位三位ハ六十六ヶ所ツ、持候、住持方ハ社家人

と申寺之とふ、権現之とふ、やくまのとふと申、

## ②『対州神社誌』部分

『対州神社誌』は、貞享二年（一六八五）、宗義眞の発意により、八郡の郡方奉行から資料を提出させ、加納貞清が編集、沢田源八が浄書したものである。翌貞享三年に完成している。

翻刻にあたっては、神道大系編集会編・鈴木棠三校注『神道大系 神社編四六 彦岐・対馬国』（神道大系編集会、一九八四）所収の翻刻に依拠した。なお、鈴木棠三『対馬の神道』にもテキストが収録されている。

### 酸豆郡

#### 酸豆村

一、天道 神体并社無之、

一、対馬州酸豆郡内院村ニ、照日之某と云者有、一人之娘を生ず、天智天皇の御宇白鳳十三甲申歳二月十七日、此女日輪之光に感して有妊て、男子を生ず、某子長するに及て聡明俊慧にして、知覚出群、僧と成て後巫祝の術を得たり、朱鳥六壬辰年十一月十五日、天道童子九歳にして上洛し、文武天皇御宇大宝三癸卯年、対馬州に帰来る、靈龜二丙辰年、天童三十三歳也、此時ニ当て、元正天皇不有、博士をして占しむ、占曰、対馬州に法師有、彼れ能祈、召て祈しめて可也と云、於是其言を奏問す、天皇則然とし給ひ、詔して召しむ、勅使内院へ来臨、言を宣ふ、天童則内院某地へ彦州小まきへ飛、夫へ筑前国宝満嶽に至り、京都江

上洛す、内院之飛所を飛坂と云、又御跡七ツ草つみとも云也、天道、吉祥教化千手教化志賀法意秘密しやかなふらの御経を誦し、祈念して御悩平復す、於是、天皇大に感悦し給ひて、賞を望にまかせ給ふ、天道、某時対州之豆之内卒土山に入定すと云云、母后今之おとし所の地にて死と云、又久根之矢立山に葬之と云、某後天道佐護之湊山に出現有と云、今之天道山是也、又母公を中古より正八幡と云俗説有、無拠不可考、

右之外俗説多しといへとも難記、仍略之、不詳也、年貢を赦し給はん事を請て、又銀山を封し止んと願依之酸豆之郷三里、渚之寄物浮物、同浜之和布、瀬同市之峯之箇黒木弓木、立龜之簷、櫛村之山雀、与良之紺青、犬ヶ浦之鯛、対馬撰女、并州中之罪人天道地江遁入之輩、悉可冤罪科事、右之通許容、又宝野上人之号を給りて帰国す、某時行基菩薩を誘引シ、対州へ帰国す、行基観音之像六体を刻、今之八観音佐護、仁田、峯、曾、佐須、酸豆ニ有者、是也、其後天道は酸豆之内卒土山に入定すと云云、母后今之おとし所の地にて死と云、又久根之矢立山に葬之と云、其後天道佐護之湊山に出現有と云、今之天道山是也、又母公を中古より正八幡と云俗説有、無拠不可考、

右之外俗説多しといへとも難記、仍略之、不詳也、

## ③「天道法師縁記」

主藤寿氏文書。元禄二年（一六八九）、宗義眞の命を受けて梅山玄常が記す。翌年一月に完成。翻刻にあたっては、城田吉六の書写による翻刻に依拠した「城田吉六『赤米伝承』（葦書房、一九八七）二三四頁」。なお、校訂に際して五来重編『山岳宗教史研究叢書 一八 修験道史料集 Ⅱ 西日本編』所収の翻刻を参照した。

天道法師者、天武天皇白鳳二年癸酉、生於対馬州酸豆郡内院村僊山之沢上、其母一朝向日尿溺、受日輪光感有娠矣、至其誕辰、則五色瑞雲襲體而四面垂布、其現以有此天瑞故小字謂天道童子、且以日輪精故謂十一面観音化身、蓋天地之靈山河之秀不測非常人也、天道内院所居地謂茂林、曾聞其母乃内院女御乃賤婢也、女御昏日、自大隅国観請于正八幡祭為氏神、今内院之大隅正八幡是也、大宝三年癸卯、天皇不有、猶神吞氣、仍令一時占者為龜策、則日海西対馬国有天道法師者、教彼僊天寿、乃 皇上病立愈矣、於是滿朝宰臣胥議而奏諸於 皇上、迺下 詔命、速差 天使篤贈幣帛而迎召天道法師、天使遠涉險浪、其官船着内院浮津浦、而備開説于 天皇不有之源、委天道日、我得飛行三昧、又得意生身而遊戲遍界、不湏舟車更不駕船、乃自内院浮津浦之坂上里民今謂之飛坂飛到彦州小城山、自小城飛致筑州宝満嶽、自宝満飛至 帝都之金門以立矣、俄疾風驟雨、人皆為異而視之、則天道法師到也、朝臣扈躍、乃迎謂天道法師、延入紫宸内、百官雲集星布围绕敬礼、頃刻築壇為四

## Ⅱ 天道信仰関係史料

早大大学院日本中世史ゼミ

### 「天道菩薩縁起」諸本の紹介

対馬豆殿における儀礼・信仰のあり方を探る上で基本史料となる「天道菩薩縁起」の諸本を紹介する。②③は刊本を底本としたが、いずれも原本の写真を参照している。翻刻作成には、山本真紗美・黒田智・堀祥岳・宮崎肇があたり、二〇〇三年度早稲田大学大学院海老澤衷ゼミの山本報告（二〇〇三年七月一四日「対馬の天道菩薩縁起諸本の検討」）において検討を重ねた。

#### ①「天道大菩薩延記」

『酸豆郡寺社記』（宗家文庫）に収録。表紙に貞享二年（一六八五）の記述有り。この年次から②の編纂にあたって作成され提出されたものと思われる。

〔表紙〕  
「貞享二年」 巳 歳 廿式冊之内

酸豆郡寺社記

十一月 日

竹内伝五郎

一、天武天皇之御宇白鳳十三<sup>甲</sup> 申 歳二月十七日、対

馬酸豆郷之内、内院村ニ照日長者有、老人之姫ヲ

持、此姫日輪之影ヲ請テ懷妊と成給テ、老人之男

子ヲ誕生也、産屋ヨリ不習経多羅尼真言誦給テ道

知給、朱鳥六<sup>壬</sup> 辰 歳十一月十五日、天道童子九歳

之時上落也、文武天皇御宇大宝三<sup>癸</sup> 卯 歳、御帰国

也、靈龜式<sup>丙</sup> 辰 歳、天道童子三歳也、其歳帝王御

惱有テ、御占ニ曰、対馬之国ニ老人之法師有、彼

ヲ召テ御祈ヲ為致給ヘ与奏門ス、然者可被為仰付

ト有テ天道童子歳卅式才之時、対州内院村ニ勅使

来ル、右之趣勅定也、天道童子対シ給テ内院ヨリ

飛給、其印ニ飛坂ト云御跡七ツ之草ツミと云、則

老州小まきヘ御飛候、夫ヨリ筑前之宝満嶽ニ御飛

候、夫ヨリ京都ヘ上着有テ、勅使ヲ待合参内有之

也、御祈念之法力ニテ御煩平癒也、為其祝儀ト、

対州之御年貢ヲ免請給テ、又銀山ヲ封シ止ル事ヲ

奏門有テ仰請給、其時之忠証ニ宝野上人ニ登リ給

御帰国ニ尾張之国厚田と云所に居給テ行碁菩薩ヲ

連為参テ対州ニ帰、本地観音ヲ六体割請給、酸豆

之内、卒土山人定有テ、今天道菩薩と号也と云々、

母公ハ御産屋ニテ御逝去、今の恐所是也、矢立ニ

跡をたれ給、佐護之湊山と云所ニ天道大菩薩と現

シ給ハ是也、其御山酸豆ニあさま、佐護ニ湊山、

久根ニ矢立、是三所けつかい山也、母公之親長者

を親宮とハ不謂、中比ヨリ新正八幡と云、

朝日さす夕日かゝやく其本に金子千両朱

千無量又ハ金子千両数千無量とも申侍候、

是ヲ無見人亦聞無人ト云、

一、国土煩ニハ天道祭りと云事有、本地梵卒土観音

十一面是也、左右ニ毘沙門天ト薬師之相也、

御祈念之次第

吉祥教化 一座

千手教化 一座

志賀法意 一座

秘密者 カナフラ

右之御祈念ニテ御煩平安也、

一、白鳳八<sup>戊</sup> 辰 歳ヨリ於佐須郷銀堀始メ、大宝三<sup>癸</sup> 卯 歳銀山堀終也、凡其間ハ卅六歳也、

惣テ許給物之事

一、酸豆之郷三里渚ノ寄物浮物

一、同浜之和布類

一、同市之峯之簀

一、黒木

一、弓木

一、立亀之簀

一、節ノ山から

一、対馬撰女

一、与良こんしやう

一、犬か浦の鯛

一、嶋中之罪人天道式地ヘ参候者、可為御赦免事、  
已上



\*別冊史料集は、早稲田大学水稲文化研究所編『対馬内山文書史料集』として二〇〇四年三月三十一日に刊行。

83	82	81	80	79	78	77	76	75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63
内山家伝書三番	内山家伝書三番	内山家伝書四番	内山家伝書四番	内山家伝書四番	内山家伝書四番	内山家伝書四番	内山家御判物二番	内山家伝書四番	内山家御判物二番	内山家坪付一番	内山家御判物三番	内山家御判物二番	内山家御判物二番	内山家御判物三番	内山家伝書四番	内山家御判物二番	内山家伝書四番	内山家伝書四番	内山家伝書四番	内山家伝書四番
9	9	10	10	10	10	10	5	10	5	1	6	5	5	6	10	5	10	10	10	10
13	9	9	8	12	11	14	6	13	5	2	14	4	3	13	10	2	7	6	5	4
11	脱漏	8	7	11	10	13	6	12	5	2	14	4	3	13	9	2	脱漏	6	5	4
某覚書	某申状	国さね書下	国さね書下	宗盛門書状	宗盛門書状	服部宗柏請取状	宗義智加冠状	長田調直田地売券	宗昭景書下	内山康乗給分注文	宗盛廉書下	宗義調書下	宗義調書下	宗盛廉書下	もりたね書下	宗材盛書下	宗職永書下案	宗職永書下案	宗職永書下案	宗仙讓状
年月日未詳	年月日未詳	年未詳6・12	年未詳6・12	年未詳3・28	年未詳3・19	天正18・5・15	天正14・8・14	天正11・8・15	天正11・7・29	永禄8・7・12	永禄2・3・2	永禄2・3・2	永禄2・3・2	天文23・4・6	天文2・12・24	明応3・11・15	文明16・2・22	文明16・2・22	文明16・2・22	文安2・6・30
																長崎県史 史料編1 568頁				
29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14		13	12	11	10
81	80	79	78	77	76	75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61

62	61	60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	45	44	43	42	41
内山家御判物二番	内山家伝書四番	内山家伝書四番	内山家御判物三番	内山家伝書四番	内山家伝書三番	内山家伝書三番	内山家伝書三番	内山家御判物三番	内山家伝書三番	内山家伝書三番	内山家御判物三番	内山家御判物三	内山家坪付一番番	内山家伝書三番	内山家伝書三番	内山家伝書貳番	内山家伝書貳番	内山家伝書貳番	内山家伝書貳番	内山家御判物三番	内山家伝書三番
5	10	10	6	10	9	9	9	6	9	9	4	6	1	9	9	8	8	8	8	6	9
1	3	2	12	1	12	10	11	11	8	7	10	5	1	6	5	11	10	9	8	10	4
1	3	2	12	1	10	脱漏	9	11	8	7	10	5	1	6	5	11	10	9	8	10	4
宗貞盛書下	国茂請文	ミヤ一女売券	宗茂直書下	けん二郎譲状	いへすみ譲状	宗よさう置文案	宗よさう置文	宗宗経書下	ついたら母請文案	ついたら母請文案	貞利書下	永志書状	たねうち譲状	けんたう置文写	けんたう置文写	惟宗二郎譲状	いあみたふ譲状	いあみたふ譲状	いあみたふ譲状	宗宗香書下	めうしん譲状
永享12・3・24	永享8・2・30	永享7・2・9	永享6・8・4	永享2・2・27	応永33・7・10	応永29・11	応永29・9・23	応永15・5・21	応永13・8・5	応永13・8・4	応永11・3・29	年未詳9・14	明德1・11・13	至徳2・11・24	至徳2・11・24	正平25・9・28	正平25・9・12	正平25・9・12	正平25・9・12	正平24・12・24	貞治2・8・15
長崎県史 史料編1 717頁			長崎県史 史料編1 718頁								長崎県史 史料編1 717頁	南北朝遺文 6 6 4 7	南北朝遺文 6 1 5 4	南北朝遺文 5 9 4 3	南北朝遺文 5 9 4 2	南北朝遺文 4 8 3 9	南北朝遺文 4 8 3 8	南北朝遺文 4 8 3 7	南北朝遺文 4 8 3 6	南北朝遺文 4 1 6 8	南北朝遺文 4 5 0 3
	9	8		7	6	5	4	3	2	1											
60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	40	39

40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19
内山家御判物三番	内山家伝書式番	内山家御判物三番	内山家伝書式番	内山家御判物三番	内山家御判物三番	内山家伝書三番	内山家御判物三番	内山家御判物三番	内山家御判物三番	内山家御判物三番	内山家御判物三番	内山家御判物三番	内山家伝書式番	内山家御判物三番	内山家御判物三番	内山家御判物三番	内山家伝書式番	内山家伝書式番	内山家伝書式番	内山家伝書式番	内山家伝書式番
6	8	6	8	6	4	9	4	4	4	6	6	4	7	6	6	4	8	8	8	8	8
9	7	8	6	7	9	1	8	7	6	6	4	5	14	3	2	4	5	4	3	2	1
9	7	8	6	7	9	1	8	7	6	6	4	5	14	3	2	4	5	4	3	2	1
宗宗香書下	めうしん讓狀	けん二郎等連署狀	しんほう申狀案	宗宗香書狀	宗經茂判物	りやうふつ置文	宗妙意書狀	宗妙意書狀	宗妙意書下	永志書下	永志書下	宗妙意書下	久称こうたう請文	永志書下	永志書下	宗妙意書下案	豆酸郡司満房等連署請文	豆酸郡司満房等連署請文	某讓狀	つねあき・ははをや連署讓狀	せつねうたう讓狀
正平14・9・16	正平12・8・9	正平11・7・5	正平9・⑩	正平8・7・16	観応2・10・20	貞和5・11・11	貞和3・12・26	貞和3・12・26	康永4・1・4	康永2・11・25	暦応4・9・30	暦応4・9・30	暦応4・8・6	暦応4・7・7	暦応4・7・7	暦応3・9・5	建武5・10・10	建武5・10・10	建武3・2・3	建武3・2・3	建武2・9・26
南北朝遺文 4138	南北朝遺文 3984	南北朝遺文 3881	南北朝遺文 3742	南北朝遺文 3570	南北朝遺文 3224	南北朝遺文 2658	南北朝遺文 2424	南北朝遺文 2423	南北朝遺文 2078	南北朝遺文 1935	南北朝遺文 1712	南北朝遺文 1711	南北朝遺文 1692	南北朝遺文 1683	南北朝遺文 1682	南北朝遺文 1575		南北朝遺文 1263	南北朝遺文 399	南北朝遺文 398	南北朝遺文 302
38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22		21	20	19	18

# 内山文書〈中世文書〉編年目録

(九州大学九州文化史研究所蔵影写本による)

八

No.	分類	卷子番号	卷内順	九大目録番号	文書名	和暦	刊本	資料編翻刻文書番号	別冊史料集*における文書番号
18	内山家御判物三番	6	1	1	永志書状	建武2・9・1	南北朝遺文 294		17
17	内山家御判物老番	4	2	2	宗妙意書下案	建武2・9・1	南北朝遺文 6951		16
16	内山家伝書老番	7	7	7	もちつね木庭売券	元徳3・7・3	鎌倉遺文 31462		15
15	内山家伝書老番	7	13	13	めうもん・ねんふつ讓状	嘉暦4・1・25	鎌倉遺文 30500		14
14	内山家御判物老番	4	3	3	宗盛国カ書下	嘉暦3・12・2	鎌倉遺文 30469		13
13	内山家伝書老番	7	12	12	めうもん讓状	嘉暦3・5・8	鎌倉遺文 30247		12
12	内山家伝書老番	7	11	11	めうもん讓状	嘉暦3・2・6	鎌倉遺文 30173		11
11	内山家伝書老番	7	10	10	めうもん讓状	嘉暦3・1・16	鎌倉遺文 30124		10
10	内山家伝書老番	7	9	9	つねよし栗栖讓状	元亨4・4・10	鎌倉遺文 28718 / 32858		9
9	内山家伝書老番	7	8	8	さねのお栗林売券	元亨2・11・21	鎌倉遺文 28240 / 31898		8
8	内山家伝書三番	9	3	3	さいねん質券	正和5・⑩・2	鎌倉遺文 25977		7
7	内山家伝書三番	9	2	2	いへたた売券	正和5・7・7	鎌倉遺文 25886		6
6	内山家伝書老番	7	6	6	某讓状	嘉元年間カ	鎌倉遺文 22664 / 30174		5
5	内山家御判物老番	4	1	1	宗盛国利銭請文	嘉元4・6・16	鎌倉遺文 22663		4
4	内山家伝書老番	7	5	5	某質券	嘉元3・1・5	鎌倉遺文 22078		3
3	内山家伝書老番	7	4	4	藤原盛教申状	建治3・11	鎌倉遺文 12928		2
2	内山家伝書老番	7	3	3	なたるの尼浦山売券案	弘長3・6・10			
1	内山家伝書老番	7	2	2	なたるの尼浦山売券案	弘長3・6・10	鎌倉遺文 8962		1
								資料編翻刻文書番号	
								別冊史料集*における文書番号	

《參考史料》

陶山訥庵『宗氏家譜』

貞享三年（一六八六）成立

（鈴木棠三編『十九公実録 宗氏家譜』

對馬叢書第三集 村田書店 一九九七年）

將盛君

將盛者、能登守盛弘長子也、初稱彦八郎、後改形部少輔、初名盛賢、大永六年丙戌襲封、宗撰津國親為守護代如故、貞・材・盛・義・盛・盛長之四世府城在中村、盛賢襲封之初、移府城於池地、

大永七年丁亥、將盛以宗兵部盛廉（五二〇）國親子後為本州守護代初、宗治部顯茂（五二〇）娶肥前州人金屋肥後守資

実女為妻、有三子、長曰九郎盛治、曰次郎、季曰三郎、顯茂死于筑前州之後、盛治与二弟同託於母堂

居肥前州、當是時、盛賢有故收家臣津原主馬田祿主馬深怨之、欲使九郎盛治取對州、窺与親族及古茂

野右衛門等謀之、作書一封、使釈玄怡（五二〇）住持達之盛治、盛治披閱其書、大喜使其弟三郎紛作商売、到豆

酸、豆酸郡主宗彦三郎盛郷（五二〇）初名盛満便盛治伯父也、盛郷亦与津原小茂野等合謀通志於盛治、盛治漸次遣士卒

於對州、以属之三郎、  
享祿元年戊子十月七日、盛治与其第二郎同率兵越海

到豆酸村、翌日夕發豆酸村、寅時到州府、圍府城攻之、是時府城兵寡不堪禦賊、盛郷急出府城竊隱于閭

里之間、宗彦太郎・吉田弥五郎（五二〇）後改・山下神七等在門前力戰、斬賊甚衆、彦太郎終与宗二郎交鋒相刺而

死、神七亦戰死、弥五郎身中重傷伏門前傍、於是府城遂陷、盛治入城、州兵降盛治者多、賊兵感弥五郎

之戰功、不忍殺之、嘔糲以吐入弥五郎之口中、弥五郎吐糲於賊兵之面、瞋目罵曰、吾為君墜命平昔之素望也、胡為飲賊兵之津液以保吾命乎、賊兵感其志、載之戸而捨于城門外、任親族之抱去、弥五郎到城外擔戸護弥五郎而還家、

是時本州守護代（五二〇）時稱宗兵部盛廉在其采地佐須不與府城之戰、豆酸郡主盛郷便盛廉之女婿也、於是佐須兵

士宗大膳斎藤修理等遣使告盛廉曰、盛治昨夜拔府城、吾等將起兵、以討盛治、而公便豆酸郡主盛郷之舅而

盛郷与盛治合謀、則公之心未可知焉、公今為佐須郡代、吾等属公之管下、雖然無遺主君以從公之理、公

若通志於盛治、便須速赴府城以助之、吾等起兵而与盛治決戰、當守人臣之義、盛廉答之曰、諸君決志行

義不堪銘感、吾受君上之恩、遇執本州之政、不知盛治之奸謀、到府城既陷、今將与諸君合謀戮力決一戰、

以贖前愆、何從盛治以失士人之義乎、大膳修理等雖得盛廉之報、未全信之、是時盛治遣使告盛廉曰、公

与吾素有親、吾得對州、便當使公掌州中之政令、吾今既拔府城、然未知盛賢之所在、公速到府城以助吾

吾將与公共相謀而、探取盛賢、且征州中之未服者、盛廉便斬其使、以示之大膳修理等、於是佐須兵士信

盛廉之無貳心、是時近郡兵士來会者八百余人、盛廉將發兵攻府城、告管下士曰、盛治新拔府城、兵威未

衰、且領衆依險非智謀、不可急破之、使一心腹之人伴投降先種禍於城中、便可矣管下兵士皆然之、宗大

膳進曰、某願赴府城、為詐降之謀、盛廉乃遣大膳、大膳卒從卒六人、到府城、就盛治家臣告曰、某使佐

須兵士宗大膳者也、吾克平日厭州牧之暴虐、惡役所之輕侮、故聞九郎公之得府城、傾心悅服、役所盛廉

明日將卒兵攻府城、至盛廉攻府城之時、吾克之士或攻其後或絕其中、与城兵合力擊之、則一挙而可破、州兵雖欲告是謀於九郎公、恐其不信、是以使某到府城為質、且以告是謀、盛治聞之、大喜然恐或有詐謀使家臣監之、盛廉以攻府城之期、告之府城兵士不降盛治而謀恢復者、府城兵士即与盛廉合謀、然未知盛廉之誠偽、故為州兵攻南門佐須兵士北門之約、

同月十日、盛賢率州兵赴府城、盛廉領兵數百在第一陣、佐須兵士宗大膳（五二〇）左衛門・宗大膳（五二〇）後改・宗三山

惣次郎・斎藤修理・齋藤彦十郎・鈴木助次郎・桐谷彦九郎・高松織部・鶴瀬藤兵衛・井土彦次郎・大石

治部、便同志守忠義之士也、是時助盛廉率佐須兵百五十余人、奮擊攻北門、府城兵士皆降盛治者、亦多

背盛治、攻府城、盛治兵拒之甚苦城中震驚、於是宗大膳与從兵六人、同奮起放火燒屋発声、力戰城兵弥

乱、宗宮内盛員（五二〇）守護代宗兵部盛廉弟、今之杉村氏之始祖也、攻東門、先登諸軍各殺入、盛治終敗死、

其後盛賢考諸士之戰功、賞賜之、將使盛廉兼豆酸郡代、盛廉辭曰、某既為佐須郡代、則采地不為不多、

退賊持危便臣之職掌也、今兼豆酸郡代、便不敢拜命、盛賢告曰、盛治拔府城、本州危殆、汝尽忠決戰、渦

乱既治、則其功不可不賞勿敢強、辞盛廉請曰、家弟盛員攻府城先登、宜使弟盛員為豆酸郡代、盛賢許之、

其他功臣得賞有差、自是後、每歲正月二日於府城饗大膳修理等、号之佐須党、其禮至今存、

## 27 国さね書下

(端裏書)  
「おうたら分四万さかへ文 国さね

宗三郎との」

一、おうたらのわみの事ひんかしハおうたらのわみたり、くわうこんしのはしつめおかきり、うち山とのいやしきおかうのたうのミちおそねにとおして、きたハ大そねおかきり候也、かのふんのさいしよまされす候、いこに此ししようものむねにまか候へく候、

六月十二日 国さね(花押)

宗三郎とのへわたし候

## 28 某申状

右くわのかわそひかわちのうらうえなかのしはやをかいのやまこはいけところくわの三郎左衛門入道妙もんまこせうとくに、去嘉暦四年正月廿五日をもてゆつりあたふるところなり、しかるを、せうとくいくほとなくしてしきよせしむるあひた、せうとくは、妙心めうものちやく女、かのくわのかわそひかわちいけのところをしやてい宗兵衛入道ニあつけをき、御くうしをあつへ申、とくふんニをいてハ、妙心か方ニ。さたをいたす事、宗兵衛入道他界のちまでさういなきところニ妙心去々年たかひのち、くわのかわそひかわちハあつかり所のほかたるあひた、ことの、御かきくたしを申なして、くわのあみたたうニきしん申たるよし、宗大郎左衛門入道

の妻女申てういわれなし、人の所りやうをあつかるハすなハち代官也、たいくわんとして、

## 29 某覚書

佐須郡下原村之内、ふけノ段と申所ニ古寺有之、寺号不知、此寺ニ唯今之六所太明神ニ有之大般若経御座候処ニ、住持死去之後、右之寺大破申候ニ付、龍泉寺之住持昌春と申候出家、貞国様以御意、住持被仰候時、此昌春、右大般若ヲ経塚と申候、于今有之所ニかりやおたて、こめおき、其後大切ノ御経ニ而、小破ニ及申候間、しゆり可申とそ計候而、龍泉寺ヘ其分取参しゆほ仕、于今此経御座候、其時分、皆々合力之人々、経箱ニ書付有之、以此経、龍泉寺ヘ年くれより納置、三ヶ日ニ寺ニ而祈禱仕、其後正月十一日ニ六所ニ而、上之御祈禱仕、御先米等指上ケ候、

### 《参考史料》

#### 『宗氏世系私記』(島尾成一文書)

先盛長天故無繼嗣、宗族家臣相議、立豊崎郡主宗能登守盛弘長子盛賢後改爲州主、当此時移中村邸於池ノ地、曰今屋形亦州俗謂之池ノ屋形、  
(五二七)  
大永七年丁亥、以宗兵部盛廉佐須党之四番之一為守護代、先是宗族治部顯茂失筑前之采地、子盛治与其二弟託於母党、居肥前窺少貳家恢復、盛賢有故叔津原主馬田祿、主馬恨之贈書盛治欲使取対州、盛治大喜使其弟

三郎紛作商売、到豆酸、豆酸郡主盛郷者盛治伯父也、故与津原小茂野等合謀通志於盛治、  
(五二八)  
享祿元年戊子十月七日、盛治与其弟二郎越海到豆酸、翌八日寅時到州府、圍池邸攻之、番衛人少不堪防戰、盛賢從北門走隠閭里之間、番衛將宗彦太郎与盛治弟

二郎交刃、相刺而死、吉田弥五郎・山下神七等力戰斬賊甚衆、神七亦戰死、弥五郎身重傷伏門傍、其他番士護、公出屋形城陷、盛治入城、賊兵某感弥五郎義、不忍殺之嚙乾糲以吐入其口、弥五郎吐糲賊面、大怒曰吾為君致死、何飲賊兵津液以望吾生、賊弥感其志、載之於戸捨於門外、弥五郎僕擔之而帰、

此時守護代盛廉在佐須不與、豆酸郡主盛郷以其女婿、故党士宗大膳齋藤修理等疑之、盛治遣使招盛廉乃斬使、不党管下之諸士始信盛廉之無二心、率管下兵將攻盛治、浅海組兵士等来会者八百余人、盛廉与党長宗下總守護盛徳相議使宗大膳詐降盛治、盛治信之入城中、

同月十日、盛賢將州兵圍南門、盛廉率佐須党攻北門南北挾擊、宗大膳与其從兵六人起自城中放火、屋形煙焰漲天、城中大乱、宗宮内盛員盛廉之弟、今改東土方杉村氏之始祖、先登諸軍各殺入、盛治不能拒之、投火而死、屋形燒亡印鑰齋庫之及旧史、將軍家御教書皆以此時燒失、盛賢收兵賞諸士戰功、欲使盛廉豆酸郡代、盛廉辞曰、某已任守護代又兼佐須郡代、宜使弟盛員為豆酸郡代、盛賢許之、其他恩賞皆有差、自古以正月二日饗佐須党、其遺例今猶存、

以上

永祿八年七月二日

平田主計允  
盛恒(花押)

内山中務少輔殿

## 20 宗昭景書下

於内山・久和山ほり出し之事、四月より九月まで、  
任前々之旨、赦免之処也、仍十月より三月まで之事  
ハ、如先例法度之処也、此謂可被存知之儀、於向後  
不可有相違之状如件、

天正十一

七月廿九日 昭景(花押)

内山中務少輔殿

## 21 長田調直田地売券

一、くねのはるに五升をろしの田の御さ候を、よう  
く候て、六貫文に末代うりわたす事ちやうなり、  
於以後いらん之儀申候するかたあるましく候、かた  
きたために一筆如件、

天正十一年のひつし八月十五日 長田治部少輔  
調直(花押)

内山中務少輔殿参

## 22 宗義智加冠状

〔端書〕  
「晴康公より備前守へ被成下候御判一枚不相見、義智公  
より新右衛門智敷へ被成下候御判物一枚紛失与相見ル」

冠者并 実名

智式

天正十四年八月十四日 義智(花押)

内山彦三郎殿

## 23 服部宗柏請取状

久和屋敷畠式斗五升まきの事、木綿廿六端に、末代  
ニ買きり申候事定也、彼畠被売候子細者、八郡之かゝ  
り銀之ため也、彼畠之事につき候てハ、子々孫々ま  
てもいらん之事、被仰間敷候、使者内山玄蕃殿也、  
為後日一筆如件、

天正十八年

五月十五日

内山中務尉殿参

印

服部  
宗柏(花押)

## 24 宗盛門書状

きのふ申やうに、ほりのぬしにハしやうかいさせら  
れへきにあひさたまり候へ共、まつくこのはうよ  
りわひ事申あげ候間、しやうかいの事ハ、さしをか  
れへきよし、おほせいたされ候、しからハ三郎方の  
事ハ、御しゆつしをやめさせられへきのよし、上  
意候へく候、御心ゑのために申候、恐々謹言、

三月十九日 盛門(花押)

宗右衛門尉殿

## 25 宗盛門書状

りやう日申やうに、かのほりのぬしの事ハ、しやう  
かいをさせられへきよし、しかとおほせいたされ候  
へ共、このはうかいふんわひ事申あげ候によて、し  
やうかいの事をハ、さしをかれ候、しかるへく候、  
しかれハ、三郎方きやうたいともに御はなつかせら  
れ候よし、おほせいたされ候、御心ゑのために候へ  
く候、さりながら、これもかいふんこのはうより申  
あげ候て、御めにかへ申へく候、さのミひさしき事  
にてハ、あるましく候、こゝもとの事ハ、御心やす  
くおほしめしあるへく候、まつく御上意のおも  
むき御心ゑのために申候、恐々謹言、

三月廿八日 盛門(花押)

宗右衛門尉殿

## 26 国さね書下

〔端書〕  
「そりやうの田分 国さね」

一、そりやうの田分

一、取こいてかゝりこいてのミつくちよりも彦九郎  
とのミせまちたお大かうちニとおしてにしハかうち  
おかきり、ミなミハなかはたけおかきり、これハそ  
うりやうの田分状如件、もしいらん候ハ、此状さ  
きとして御さたあるへく候、

六月十二日 国さね(花押)

宗三郎とのへわたし候

御寄合中

13 宗職永書下案

うち山宗長門入道殿

うち山宗右衛門殿

くねの宗因幡守殿

くねの宗彈正忠殿

くねの宗左衛門尉殿

くねの宗与次郎殿

くわの宗太郎左衛門殿

此七人之方々之下人之売口買口の公事之事、我人老代之事者閣申候、各々御子孫又者我々か子孫におゐてハ其代々両方の儀によるべく候、仍為後日証状如件、

文明十六年<sup>甲辰</sup>二月廿二日 宗中務少輔職永(花押)

御寄合中

14 もりたね書下

くわのうちなかすいやしきの事、いこにをいてこた<sup>(ヤ)</sup>ハか人あるにをいてハ、かのいやしき、ふみともに、内山よりうけとり可申候、いこのために状くたんのことし、

天文二年十二月廿四日 もりたね(花押)

15 宗盛廉書下

内山の事、同久根徳太郎跡、任

上御判之旨、無相違可有知行之状如件、

天文廿三年

四月六日

盛廉(花押)

内山備前守殿

16 宗義調書下

対馬与良郡内山之在所一村之事、任前々之旨、無相違可致知行之状如件、

永禄二

三月二日

義調(花押)

内山備前守殿

17 宗義調書下

佐須郡之内久根徳太郎旧跡之事、為給分所充行也、

無相違可致知行之状如件、

永禄二

三月二日

義調(花押)

内山備前守殿

18 宗盛廉書下

対馬与良郡内山之在所一村之事、任 御上判之旨、

如前々、無相違可有知行之状如件、

永禄二

三月二日

盛廉(花押)

内山備前守殿

19 内山康乗給分注文

くねの給分

一所 いてくちの畠 ところひら 一斗五升蒔

たし永清寺御分のそく

一所 かり山の畠 三斗蒔

一所 しまそへ 一斗蒔

一所 にのとも 九升蒔

一所 かりけの口 一升蒔

一所 したきの田 五升おなし

一所 いし田 九升蒔

一所 はしの田 五升蒔

一所 なけの畠 一斗五升蒔

一所 つほてかさへ 二斗蒔

一所 こおうのしけのかけひなた 一斗四升蒔

一所 たかねのさへうね 三斗五升蒔 こは

六俵蒔 茶ゑん三斗取

一所 したのさへうね 二斗五升蒔 こは

四俵蒔

一所 くにいち畠 一斗蒔

一所 山みちの田 一斗おなし

一所 おやけのやしきの内 一斗五升蒔 ひら

六俵蒔 やしきの外 三斗蒔

一所 いわなりの川より畠 八升蒔

一所 かきの木畠 一斗五升蒔 此外寺

やしき二百きれ



## 8 ミヤ一女売券

よう／＼あるにやてうりわたし申すしや□<sup>（うか）</sup>もんのこ  
と

合ようとう一くわんもんか定也、

右けかちさうてんにうりわたし申す、おなこミつか  
らかこにて候、あさなとらつる、とし十七になり申  
候お、ゑいたいおかきりに、さうようさう殿ニうり  
わたし申候事しち也、もしおやこあるいハしう人と  
申す物候ましく候、さうようさう殿よりほかニ御し  
う人ハ御さあるましく候、もし又いかなるけんもん  
かうけしんしやふつしんの御りやうないににけ入候  
とも、このしやうおさきとして御さた候するに、一  
ここのき申すましく候、のちのためにうりけのしや  
うくたんのことし、

（永享）  
ゑいかう七年二月九日

かいぬしさうようさう殿

ミヤ一女

うりぬしちう

## 9 国茂請文

（端裏書）

「うちやまのそうせん御方へ さゑもんのたゆう国茂」

たうしまはつかいちうのうわつかさやくのうきみく  
うしのこと、ほんつうのかみの御たいよりはしまる  
みくうしのしたいせんれいのむねニまかせて、うち  
やまのいあミたふのせんそのむねにまかせてさしお  
き申候事しちなり、

## 10 宗仙讓状

一、ふねのやまで、うりくちかいくちほのくうし、  
一、たう人のあんとうとう、こふたふうとう、一、  
人のかき物、人のうりくちかいくちミな／＼ほんつ  
うのかみより御めん候にて、さしおき申候事しち  
なり、よりのちのためニうけとりのしやうくたん  
のことし、うちやまのそうせんニわたし申候、

（永享）  
ゑいかう八ねん二月卅日 国茂（花押）

□□□うせん御房<sup>（かたへ）</sup>

おなこはうにゆつりわたし状の事、

一、ひかしのさかへの事、まよしのわたをかきり、  
ミナミハせかわをかきり、にしハくまをかきり、そ  
ねハおうくまをかきり、きたハおうそねをかきり、  
このふんを一ふんものこさすおうちいあミたふのほ  
んせうもんのまゝニおなこはうにゆつりわたしなり、  
又此内おもて、於いこおも、せうふんのふちをすへ  
し、又つきにいやしきの事ハしんさんのところをき  
りあけ候間、いつれもおなし事と申なから、これハ  
したしき物ともすこのいきあるへからす、又いや  
しきのさかへハひかしハちやゑんくまをかきり、ミ  
なミハよこついちをかきり、にしハなかなハしをかき  
り、いぬいハこはたけをかきり、きたハくわのきの  
こはたけをかきり、ひかしにとおいてかきるなり、  
いかなるかた／＼申候とも此状をさしあけ申候て、  
くはうニ御めニかけ申候へく候、後日のためニ状如  
件、

文あん二年六月三十日 宗仙（花押）

## 11 宗職永書下案

内山宗長門入道殿  
内山宗右衛門殿

くねの宗因幡守殿

久根宗弾正忠殿

同 同左衛門殿

同 同与次郎殿

久わ宗太郎左衛門殿

文明十六年<sup>甲辰</sup>二月廿二日

## 12 宗職永書下案

うち山宗長門入道殿

うち山宗右衛門殿

くねの宗因幡守殿

くねの宗弾正忠殿

くねの宗左衛門尉殿

くねの宗与次郎殿

くわの宗太郎左衛門尉殿

此七人之方々之下人之売口買口の公事之事、我人壹  
代之事者聞申候、各々御子孫又ハ我々か子孫におゐ  
てハ其代々両方の儀ニよるへく候、仍為後日証状如  
件、

文明十六年<sup>甲辰</sup>二月廿二日 宗中務少輔職永判

## 2 ついたら母請文案

くわのおかいのまんたうかこのわらハついたら六な  
「〔元脱カ〕」るお、くわのけんの御たへけかちさうてんニまい  
らせ候事しかなり、もしまんたうのしたしきものら  
にても候へ、又ハわらかしたしきものらにて候とも、  
もしいらん申候とき、このしやうおさきとして、め  
され候ときハ、いこうのいき申ましく候、又けんも  
んかうけしんしやふつしんのりうないにまかりいて  
とも、このしやうおさきとしてさたしてめされ候と  
き、いこうのき申ましく候、のちのためしやうくた  
んの事し、

（〔元永〕） おうゑい十三ねん八月五日 ついたらかは、

おみな

## 3 宗宗経書下

き大郎かあとの事、せんれいニまかせて、ふたのお  
りてのせに御公事三百文さうし大小廿はいの事ハ、  
ミしんけたいなく御つとめあるへく候、そのほかの  
事ハ、とかくのきあるへからす候、仍状如件、

（〔元永〕） 應永五月廿一日 宗経（〔花押〕）

けんゐ

き太郎あと

## 4 宗よさう置文

そうよさう殿、ほきのゆひこ時、なに事も、しんか  
いよさう殿かはからいとおせ候ほとに、せさのはた  
けをやの七ニいれてをかれて候へ共、よさう殿うけ  
てもたれて候、いらんわつらあるましく候、又まゑ  
たいわなりのはたけの事ハかくれうお一貫四百四十  
文なし申候ほとに、いらんわつらいあるましく候、  
かたいため、しにふミおつくりをき申候、

（〔元永〕） 應永廿九年九月廿三日 宗よさう（〔略押〕）

## 5 宗よさう置文案

つよりのひやうへ三ふらうとのにたう人のためにか  
わり一貫文こつけ候、又その弥しやうにしかるへき  
七もつのあるよし申候ほとに、又かわり一貫文とり  
候、又そののちニやかて弥しやうにかわり三百文か  
し申候、又むき一ひう、又かき物の之れうそく、六  
百六十文これよりなしかわり申候、かれこれミかそ  
んになり候ほとに、ちとりと申をうなこおとりて候、  
このをうなこおうけうする物このふミのおもて一は  
いにてめされ候へく候、のちのせうこ状下（マコ）こし、  
（〔元永〕）

（〔元永〕） 應永廿九年十一月寅 そうよさう

ちよをかこ

ひやうへ三ふらう

## 6 いへすみ讓状

讓与 まめこせんの分  
一所 せのみちよりひんかしのこはたけ  
一所 へのそねのはたけ  
一所 かさはやのはたけ  
一所 いわたかのはたけ  
一所 をかのこそこのミちニとをてあさニせうまき  
右此はたけハちうたいさうてんのところなり永代ニ  
さうそくすへき旨如件、

（〔元永〕） 應永卅三年七月十日 いへすみ（〔花押〕）

## 7 けん二らう讓状

（〔端裏書〕）  
「やけくま」

右状ハ宗ようさうとの、ちやくしそうやしらうに、  
やけくまのほりのさゑミちよりうゑ、きたハミちお  
かきり、ひんかしハくまわけ、ミなミハわきおかき  
り、にしハそねおかきり、やうしのこニゑたいおか  
きりゆつりわたすところ定也、この状おしいらんわ  
つらい申す物の候ハ、この状おさきとして、けん  
もんかうけ神者（ママ）仏神の御りやうないにて候とも、こ  
のしやおさきとして、御さた候時、一こうのき申ま  
しく候、のちのためニ状下（マコ）ことし、けんしらうか宗  
やしらうニゆつりわたすところしち也、

（〔元永〕） 永享二年二月廿七日 けん二らう（〔花押〕）

# I 内山文書（未翻刻中世文書）

早大大学院日本中世史ゼミ

## 1 ついたら母請文案

（端裏書）  
さうとのへの御状文案

もし又三郎ひやうへいき□候ハ、てんしなら  
れ候て□うけ給候へく候、これより人□候  
へく候、□かたく□ひんさく人々□さく  
しつけるへく候、

【凡例】  
本報告書掲載の「内山文書〈中世文書〉編年目録」（以下、「目録」）にしたがい、内山文書中の中世文書を翻刻する。翻刻にあたっては、九州大学九州文化史研究所蔵影写本を用い、以下の凡例によった。なお、本報告書資料編には『南北朝遺文』等に未収録の文書のみを、別冊史料集には刊本所収文書も含めすべての中世文書を、それぞれ掲載する。掲載文書の文書番号については、「目録」の「資料編翻刻文書番号」および「別冊史料集における文書番号」にそれぞれ対応する。未翻刻文書に関しては、本報告書史料編と別冊資料集に重複収載した。

- 一 原則として常用漢字をもって記した。但し、原文に使用されている異体字・俗字を適宜用いている。変体仮名は現行の平仮名によって表記した。
- 一 文書の前欠は「」、後欠は「」をもって示す。
- 一 虫損などの欠失文字は□または□□で表示した。墨抹は■、見せ消ちは抹消文字の左側に々々をもって表示した。

なお、翻刻作成には、大澤泉・山本真紗美・加藤麻彩子・田村仁・徳永健太郎・堀祥岳・黒田智・宮崎肇（校訂）があたり、二〇〇三年度早稲田大学大学院海老澤衷ゼミで検討を重ねた。

くねの宗弥三郎しさく分の田地の事、わうこよりか  
ちし百文さた仕候を、かちいの三郎ひやうへさいち  
やう地をとらせ候にて、近年となり候て、あらた  
めこのかちしを二百文とりさたすへき由申候間、は  
しをそむきさたをいたすへからさるよし、いや三郎  
申候にて、此ほとハ一ゑんニあけ候て、三郎ひや  
うへさたのよし申候、弥三郎ほんくのかちしをいき  
申候者、其時ハこほりのまん所、又ハくわのおんか  
いのまんたうかこの□ら□ついた□とし六ニ  
なり候お、くハのけんの御□へけかんさうてんニま  
いらせ候事、ちいちやうなり、もしまんたうかした  
しき物にても候へ、又ハわらハかしたしき物にても  
候へ、いらんわつらい申候時、このしやうおさきと  
してめされ候時、いんこうのき申すましく候、又ハ  
けんもんかうけ神者<sup>（マメ）</sup>仏神の御れうなく候にて候とも、  
此しやうおさきとして、御さた候時、一こうきある  
ましく候、のちのためニせうこのしやう下事<sup>（マメ）</sup>し、  
応永十三ねん八月四日 ついたらは、

## 編集後記

今回の研究では、水稻文化の視点から対馬の島嶼としての性格を明らかにするとともに、東アジア全体を視野に入れるという目標を立て、インドネシア・バリ島の村落調査を行った。もともと日本中世史を専攻している者がここで行うのは無謀かとも思えたが、このテーマが採択され、また周囲のご理解をいただいたことは感謝に堪えない。特に千葉工業大学に勤務されていた大橋力氏、ウダヤナ大学農学部長のアルタ氏のご協力がなければこのプロジェクトは成立しえなかった。この場を借りて改めて感謝申し上げる次第である。バリ島の村落調査は入り口に到達したに過ぎず、さらに今後を期したい。(海老澤)

水田がない！というのが対馬の第一印象。対馬空港に着陸する寸前に垣間見えた浅芽湾付近の山がちな景観は、まさに未知の世界に飛び込む一抹の不安を予感させたことを憶えている。案の定、これまで現地調査を経験してきた和歌山などの農村と比べ、山と海に囲まれた対馬・豆酲は、風土・生業も人々の気質も異なるものであった。ただ、戸惑ってばかりはいられなかった。調査期間はほぼ1年、嵐のような（実際嵐にも遭遇したが）調査の日々であった。なんとか報告書まで辿り着けたのも、現地で窓口となって私たちを導いて下さった本石正久さんをはじめ、豆酲や浅藻の皆さんのご協力のおかげである。改めて感謝の気持ちを表したい。(堀)

最後に、対馬豆酲調査でお世話になった皆さんの氏名・生年を記す（順不同・敬称略）。

### 【調査協力者一覧】（ ）内は生年を示す。

**豆酲** 阿比留吉幸（昭和27年）、阿比留初音（昭和29年）、山下任由（昭和31年）、立花勝己（昭和33年）、上原隆治（昭和3年）、太田和雄（昭和20年）、太田康裕（昭和26年）、桐谷和美（昭和23年）、小島佐（昭和8年）、小島未左枝（昭和26年）、近藤竜清（昭和15年）、主藤勝彦（昭和16年）、主藤三喜子（昭和25年）、本石健一郎（昭和28年）、本石佐市（大正12年）、本石正久（昭和8年）、勝井フナ（大正元年）、阿比留杉子（昭和4年）、阿比留幸江（昭和30年）、小島喜介（昭和21年）、阿比留松夫（昭和8年）、阿比留章（昭和3年）、阿比留久枝（昭和6年）、永尾数馬（昭和19年）、主藤寿（大正13年）、本石一幸（昭和11年）、永尾賢一（昭和25年）、本石直己（昭和7年）、主藤長太郎（昭和7年）、主藤ミツ（昭和13年）、山下ユキエ（大正13年）、永尾実（昭和15年）、主藤公敏（昭和25年）、権藤悦教（昭和26年）、阿比留キヨ（大正10年）、主藤勝美（大正11年）、山下成久（昭和24年）、竹岡正江（大正8年）、竹岡小太郎（大正11年）、主藤仙太郎（大正7年）、小島行善（昭和15年）、権藤甚吉（大正13年）、木原泉治（昭和12年）、その他豆酲地区在住の皆さま

**浅藻** 中庭一義（昭和8年）、市丸武馬（大正12年）、松山秀男（昭和6年）

**内院** 佐々木ヤス（大正13年）

**豆酲瀬** 上原庄一（昭和10年）

2002（平成14）年度～2003（平成15）年度  
科学研究費補助金 基盤研究(B)(2) 研究成果報告書

## 東アジアにおける水田形成および水稲文化の研究 （日本を中心として）

---

発行日	2004年3月31日
研究代表者	海老澤 衷 早稲田大学文学部 〒162-8644 東京都新宿区戸山 1-24-1
印刷	株式会社 白峰社 〒170-0013 東京都豊島区東池袋 5-49-6

---

# 豆酸の灌漑・屋号・地名（1 葉）

2002（平成 14）年度～2003（平成 15）年度  
科学研究費補助金 基盤研究(B)(2) 成果図面

研究課題

「東アジアにおける水田形成および水稻文化の研究（日本を中心として）」

課題番号 14310164

2004 年（平成 16 年）3 月

研究代表者 海老澤 衷（早稲田大学文学部教授）



